(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団発掘調査報告第209集

西長岡南遺跡・菅塩西両台遺跡
成塚永昌寺遺跡・成塚石橋遺跡III

一級河川蛇川小規模河川改修工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書第3集

1996

財団法人　群馬県埋蔵文化財調査事業団

西長岡南遺跡・菅塩西両台遺跡
成塚永昌寺遺跡・成塚石橋遺跡III

一級河川蛇川小規模河川改修工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書第３集

1996

財団法人　群馬県埋蔵文化財調査事業団

序

群馬県企業局が行った太田市成塚の成塚住宅団地の造成に伴い、住宅団地の西南を流れる一級河川蛇川の河川改修工事も併せて行われることになり、工事対象区域に所在する埋蔵文化財の発掘調査が当事業団に委託され、昭和60年度以来断続的に発掘調査が行われています。既に、発掘調査報告書も『成塚石橋遺跡Ⅰ』『同遺跡Ⅱ』の２冊を刊行し、当該地域の歴史の解明に大いに役だっています。

この度、平成２年度に調査した成塚石橋遺跡、同４年度に調査した成塚永昌寺遺跡、同５年度に調査した菅塩西両台遺跡、同６年度に調査した西長岡南遺跡の計４遺跡の調査報告が纏りましたので、一級河川蛇川河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書の第３集を刊行することにしました。本書には、平成５年度に調査した菅塩西両台遺跡の平安時代の官衙遺構を想定させる大溝が報告されています。今後の解明が期待されます。

発掘調査から調査報告書刊行に至るまで群馬県土木部河川課、同太田土木事務所、群馬県教育委員会文化財保護課、太田市教育委員会、地元関係者等には、終始ご指導、ご協力を賜わりました。これら関係者の方々に、衷心より感謝の意を表し、併せて本報告書が太田市の歴史を明らかにするために、大いに活用されることを願い序とします。

平成８年３月

㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団

理事長　小寺弘之

発 掘 調 査 抄 録

フ リ ガ ナ	ニシナガオカミナミイセキ・スガシオニシリョウダイイセキ・ナリヅカエイショウジイセキ・ナリヅカイシバシイセキサン
書　　名	西長岡南遺跡・菅塩西両台遺跡・成塚永昌寺遺跡・成塚石橋遺跡III
副 書 名	一級河川蛇川小規模河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第３集
巻　　次	
シリーズ名	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団発掘報告
シリーズ番号	第209集
編 集 者 名	大江正行 他
編 集 機 関	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
編集機関所在地	〒377-0061 群馬県勢多郡北橘村大字下箱田784-2
発行年月日	1996年３月25日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査面積m²	調査原因
		市町村	遺跡番号				
西長岡南遺跡（ニシナガオカミナミイセキ）	太田市成塚・菅塩・西長岡（オオタシナリ ツカ スガシオ ニシナガオカ）	1081	00387	361632	1391644	5800	河川改修
菅塩西両台遺跡（スガシオニシリョウダイイセキ）				～	～		
				361633	1391645	6400	
成塚永昌寺遺跡（ナリヅカエイショウジイセキ）						4300	
成塚石橋遺跡（ナリヅカイシバシイセキ）						600	

例　　言

1．本書は、公共事業に伴う県委託事業であるとともに、文化財保護法とその施行令等に基づき作成した報告書である。
2．４遺跡の記録保存資料および整理浄書図等資料は、群馬県埋蔵文化財センターに保管されている。
3．発掘調査組織等の要目は次のとおりである。

西長岡南遺跡　調査期日　平成５年７月23日～同年10月29日　　調査地　本文発掘概要と例言と凡例の項を参照。
　調査主体者　(財)埋蔵文化財調査事業団
　発掘担当者　大江正行・松井龍彦・黒沢照広(当時、当団調査研究第３課職員)
　協力　群馬県土木部河川課、同太田土木事務所、群馬県教育委員会文化財保護課、太田市教育委員会

菅塩西両台遺跡　調査期日　平成５年７月23日～同年10月29日　　調査地　本文発掘概要と例言と凡例の項を参照。
　調査主体者　(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
　発掘担当者　大江正行・松井龍彦・黒沢照広(当時、当団調査研究第３課職員)
　協力　群馬県土木部河川課、同太田土木事務所、群馬県教育委員会文化財保護課、太田市教育委員会

成塚永昌寺遺跡　調査期日　平成４年４月９日～同年７月28日　　調査地　本文発掘概要と例言と凡例の項を参照。
　調査主体者　(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
　発掘担当者　石塚久則・菊地実・根岸仁(当時、当団調査研究第９課職員)
　協力　群馬県土木部河川課、同太田土木事務所、群馬県教育委員会文化財保護課、太田市教育委員会

成塚石橋遺跡Ⅲ　調査期日　平成２年４月４日～同年５月31日　　調査地　本文発掘概要と例言と凡例の項を参照。
　調査主体者　(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
　発掘担当者　下城正・高井佳弘・根岸仁(当時、当団調査研究第９課職員)
　協力　群馬県企業局、群馬県土木部河川課、同太田土木事務所、群馬県教育委員会文化財保護課、太田市教育委員会

4．整理体制と整理期間
整理主体者　群馬県教育委員会、(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
期　　間　平成６年４月１日～平成７年３月31日
整理従事者　上原博美・大友幸恵・金子恵子・狩野フミ子・鈴木未央・西村美保・横坂英美、六反田達子
遺物写真撮影　佐藤元彦、その補ない、大江正行
遺物保存のための科学処理と処置　関邦一(当時技師)・土橋まり子(当団嘱託員)・小材浩一・小沼恵子
遺物図化　スリー・スペース土器実測班　長沼久美子・千代谷和子・伊藤淳子・岩渕節子・荻原光枝・立川千栄子
整理担当　大江正行(調査研究第４課)
事務・交渉　近藤功・蜂巣実・佐藤勉・神保侑央・斉藤俊一・笠原秀樹・国定均・高橋定義・須田朋子・吉田有光・柳岡良宏・巾隆之・中東耕志(調査研究部)

5．本書の作成に当り、下記の方々のご協力をいただいた。
群馬県工業試験場、小暮仁一(元群馬県教育委員会文化財保護課係長、地域史研究者)、当団職員と県下在住の文化財担当職員の皆さん。

6．本書の凡例は次のとおりである。
（１）　遺構方位は、西長岡南遺跡・菅塩西両台遺跡が座標北であり、同一の調査座標を用い、公共座標第IX系。成塚永昌寺遺跡も同座標・同調査座標を用いている。成塚石橋遺跡は、座標北に対しN45°53′15″W傾く調査座標が組まれる。
（２）　遺物の縮少率は、各図中、写真中に掲げ、おおむね土器録１：３、埴輪録を１：４である。
（３）　遺構写真は各調査担当による。
（４）　遺構・遺物に係わる細かな凡例は、各篇の冒頭で示し、そのほかトーンなどは図傍に示した。

本　文　目　次

第１篇　序篇……1

第１章　調査に至る経緯と経過……1
第２章　調査の方法と基本層位……2
１．調査の方法……2
２．基本層位……2
第３章　周辺遺跡……3
１．周辺遺跡……3
２．蛇川河川改修に伴なう既調査と関連遺跡調査……10

第２篇　西長岡南遺跡……14

第１章　発掘概要と例言・凡例……14
第２章　発掘された遺構と遺物……21
１．古墳……21
古墳１……21
古墳２……37
古墳３……43
古墳４……45
古墳５……46
古墳６……59
古墳７……59
古墳８……61
古墳９……63
２．溝跡と道跡・畑跡……63
ＳＤ９……63
ＳＤ23……64
ＳＤ25……65
ＳＤ37-2と道跡２……65
ＳＤ47-2・ＳＤ48……69
道跡１……69
畑跡１～３ほか……69
３．穴跡……71
ＳＫ12・13・15-2……71
ＳＫ10・17・23・24-1……71
ＳＫ25……71

第３篇　菅塩西両台遺跡……73

第１章　発掘概要と例言・凡例……73
第２章　発掘された遺構と遺物……83
１．小穴と井戸跡……83
掘立柱穴群と小穴……83
ＳＥ１……83
２．溝跡と土塁跡……83
ＳＤ６……87
ＳＤ15……87
ＳＤ33……88
ＳＤ35（石組１）と土塁１……95
そのほかの溝跡……96
３．穴跡……96
ＳＫ53・62－２・70、円形の穴跡…96
ＳＫ４-1・２、ＳＫ10……96
４．道跡……96
道跡２・３・４……96

第４篇　成塚永昌寺遺跡……97

第１章　発掘概要と例言・凡例……97
第２章　発掘された遺構と遺物……107
１．古墳……107
１号墳……107
２号墳……108
３号墳……112
４号墳……114
２．井戸跡……114
１号井戸……114
２号井戸……114
３．溝跡……114
１号溝……114
４．穴跡……114
１号土坑……114
２・３・４号土坑……114
５号土坑……117
７・８・９・10・11・14土坑……117
12・13・15号土坑……117
５．風倒木痕……122
１・２・３・４・５・６号風倒木……122
６．旧河道関連の出土遺物……122

第５篇　成塚石橋遺跡Ⅲ……123

第１章　発掘概要と例言・凡例……123
第２章　発掘された遺構と遺物……123
１．溝跡……123
１・２号溝、２号南端溝……124
３・４号溝……128
２．穴跡……128
２・４号土坑……128
６・７・８・９・11号土坑……128
３．風倒木跡……128
３号風倒木……128

第６篇　遺物観察……130

第７篇　科学分析……148

１．西長岡南・菅塩西両台遺跡、出土遺物のＸ線回折……148
２．群馬県成塚永昌寺遺跡の野外地質調査……150

第８篇　まとめ……152

挿　図　目　次

第１図　完新鮮示標テフラ層の分布図……1
第２図　層序概念図……1
第３図　周辺遺跡分布図……4
第４図　寺井廃寺跡既出土瓦……7
第５図　既調査図……12
第６図　西長岡南Ｉ・Ｊ９・10区全図……15・16
第７図　西長岡南Ｈ７・８区全図……17
第８図　Ｈ７・８区の北東壁土層断面図……18
第９図　Ｉ・Ｊ９・10区古墳１遺構図……22
第10図　Ｉ・Ｊ９・10区古墳１土層断面図……23
第11図　Ｉ・Ｊ９・10区古墳１遺物図……24
第12図　Ｉ・Ｊ９・10区古墳１遺物図……25
第13図　Ｉ・Ｊ９・10区古墳１遺物図……26
第14図　Ｉ・Ｊ９・10区古墳１遺物図……27
第15図　Ｉ・Ｊ９・10区古墳１遺物図……28
第16図　Ｉ・Ｊ９・10区古墳１遺物図……29
第17図　Ｉ・Ｊ９・10区古墳１遺物図……30
第18図　Ｉ・Ｊ９・10区古墳１遺物図……31
第19図　Ｉ・Ｊ９・10区古墳１遺物図……32
第20図　Ｉ・Ｊ９・10区古墳１遺物図……33
第21図　Ｉ・Ｊ９・10区古墳１遺物図……34
第22図　Ｉ・Ｊ９・10区古墳１遺物図……35
第23図　Ｉ・Ｊ９・10区古墳１遺物図……36
第24図　Ｉ・Ｊ９・10区古墳１遺構図……37
第25図　Ｉ・Ｊ９・10区古墳２遺構図……38
第26図　Ｉ・Ｊ９・10区古墳２土層断面図……39
第27図　Ｉ・Ｊ９・10区古墳遺構図……40
第28図　Ｉ・Ｊ９・10区古墳２遺構図……28
第29図　Ｉ・Ｊ９・10区古墳２遺物図……42
第30図　Ｉ・Ｊ９・10区古墳２遺物図……43
第31図　Ｉ・Ｊ９・10区古墳４遺物図……43
第32図　Ｉ・Ｊ９・10区古墳３遺構図……44
第33図　Ｉ・Ｊ９・10区古墳３遺物図……45
第34図　Ｉ・Ｊ９・10区古墳４遺構図……46
第35図　Ｉ・Ｊ９・10区古墳５遺構図……47
第36図　Ｉ・Ｊ９・10区古墳５遺物図……48
第37図　Ｉ・Ｊ９・10区古墳５遺物図……49
第38図　Ｉ・Ｊ９・10区古墳５遺物図……50
第39図　Ｉ・Ｊ９・10区古墳５遺物図……51
第40図　Ｉ・Ｊ９・10区古墳５遺物図……52
第41図　Ｉ・Ｊ９・10区古墳５遺物図……53
第42図　Ｉ・Ｊ９・10区古墳５遺物図……54
第43図　Ｉ・Ｊ９・10区古墳５遺物図……55
第44図　Ｉ・Ｊ９・10区古墳５遺物図……56
第45図　Ｉ・Ｊ９・10区古墳５遺物図……57
第46図　Ｉ・Ｊ９・10区古墳６遺構図……58
第47図　Ｉ・Ｊ９・10区古墳６遺物図……59
第48図　Ｉ・Ｊ９・10区古墳７遺構図……60
第49図　Ｉ・Ｊ９・10区古墳７遺物図……61
第50図　Ｉ・Ｊ９・10区古墳８遺構図……61
第51図　Ｉ・Ｊ９・10区古墳９遺構図……62
第52図　Ｉ・Ｊ９・10区古墳９遺物図……63
第53図　Ｈ７・８区溝跡（ＳＤ９）遺構図……63
第54図　Ｉ・Ｊ９・10区溝跡、道跡遺構図……64
第55図　Ｉ・Ｊ９・10区溝跡遺構図……65
第56図　Ｉ・Ｊ９・10区溝跡遺物図（ＳＤ25）……66
第57図　Ｉ・Ｊ９・10区溝跡遺物図……67
第58図　Ｉ・Ｊ９・10区溝跡遺物図……68
第59図　Ｉ・Ｊ９・10区溝跡遺物図……69
第60図　Ｉ・Ｊ９・10区穴跡遺構図……70
第61図　Ｉ・Ｊ９・10区穴跡遺構図……71
第62図　Ｉ・Ｊ９・10区穴跡遺物図……72
第63図　西長岡南補足遺物図……72
第64図　菅塩西両台Ｆ５・６区、Ｄ４区全図……74
第65図　菅塩西両台Ｅ４・５区全図……75
第66図　Ｆ５区の調査区北東壁土層断面図……76
第67図　Ｅ４・５区の北東壁土層断面図……77
第68図　Ｄ４区の北東壁土層断面図……78
第69図　Ｄ４区道跡、小穴遺構図……84
第70図　Ｅ４・５区井戸跡１遺構図……85
第71図　Ｅ４・５区ＳＤ33遺構図……86
第72図　Ｅ４・５区ＳＤ33遺構図……87
第73図　Ｅ４・５区溝跡・穴跡遺構図……89
第74図　Ｆ５・６区溝跡・穴跡遺構図……90
第75図　Ｄ４区遺物図……91
第76図　Ｅ４・５区遺物図……91
第77図　Ｅ４・５区遺物図……92
第78図　Ｅ４・５区遺物図……93
第79図　Ｅ４・５区遺物図……94
第80図　Ｆ５・６区遺物図……80
第81図　成塚永昌寺Ａ１・２区全図……98
第82図　成塚永昌寺Ａ・Ｂ２区、Ｂ・Ｃ２・３区全図……99・100
第83図　Ａ１・２区の南西壁・北東壁土層断面図……101
第84図　Ａ・Ｂ２区の北東壁土層断面図……102
第85図　Ａ・Ｂ２区の南西壁土層断面図……103
第86図　Ｂ・Ｃ２・３区の北東壁土層断面図……104
第87図　Ｂ・Ｃ２・３区の南西壁土層断面図……105
第88図　Ｂ・Ｃ２・３区の南西壁土層断面図……106
第89図　Ａ１・２区１号墳遺構図……108
第90図　Ａ１・２区１号墳遺物図……108
第91図　Ｂ・Ｃ２・３区２号墳遺構図……110
第92図　Ｂ・Ｃ２・３区３号墳遺構図……111
第93図　Ｂ・Ｃ２・３区２・３号墳遺物図……112
第94図　Ｂ・Ｃ２・３区４号墳遺構図……113
第95図　Ａ１・２区井戸跡・穴跡・風倒木跡遺構図……115
第96図　Ｂ・Ｃ２・３区井戸跡・穴跡・風倒木跡遺構図……116
第97図　各区井戸跡・穴跡遺物図……117
第98図　各区溝跡遺物図……118
第99図　各区溝跡遺物図……119
第100図　各区溝跡遺物図……120
第101図　Ａ・Ｂ２区溝跡・風倒木跡遺構図……121
第102図　成塚永昌寺補足遺物図……122
第103図　成塚石橋遺跡Ⅲ全図……124
第104図　６区の北東壁・北西壁・南東壁土層断面図……125
第105図　６区溝跡遺構図……126
第106図　６区穴跡・風倒木跡遺物図……127
第107図　６区穴跡遺構図……128
第108図　６区遺物図……129
第109図　Ｅ４・５区ＳＤ33出土チップス厚さ集計図……145

写　真　図　版　目　次

西長岡南遺跡

写真図版１　上段　Ｉ・Ｊ９・10・11区全景
中段　Ｉ・Ｊ９・10・11区古墳１周辺の状況
下段　Ｉ・Ｊ９・10・11区古墳２周辺の状況
写真図版２　上段　古墳１調査状況

中段　同　調査状況
写真図版３　上段左　古墳１埴輪出土状況
上段右　同　埴輪出土状況
中段左　古墳１と畑跡１の重複
中段右　古墳１と周堀土層断面Ｂ・Ｂ′
下段　古墳１主体部材集石近・現代の集石
写真図版４　上段　古墳２調査状況
下段　同　調査状況
写真図版５　上段　古墳２北西側周堀近景
下段　同　中央部の状況
写真図版６　上段　古墳２主体部材集石状況上面
下段　同　主体部材集石状況
写真図版７　上段　古墳２主体部材集石除去後の穴跡状況
下段　同　主体部材集石状況
写真図版８　上段　古墳２主体部材集石状況
下段　同　主体部材集石除去後の穴跡状況
写真図版９　１段左　古墳２主体部材集石上面状況
１段右　同　主体部材集石状況
２段左　同　主体部材集石
２段右　同　主体部材集石
３段左　同　北西側周堀Ａ・Ａ′土層断面
３段右　同　北西側周堀Ｂ・Ｂ′土層断面
４段左　同　南東側周堀土層断面
４段右　同　主体部材集石穴跡とＳＤ44
写真図版10　上段　古墳３周堀状況
下段　同　周堀状況
写真図版11　上段　古墳４周堀状況
下段　古墳５周堀埴輪出土状況
写真図版12　上段　古墳５周堀埴輪出土状況
下段　同　周堀状況
写真図版13　上段　古墳５周堀埴輪出土状況
下段　同　周堀埴輪出土状況
写真図版14　上段左　古墳５埴輪出土状況近景
上段右　古墳５周堀土層断面
中段　古墳６主体部材集石上面状況
下段左　同　主体部材集石中位状況
下段右　同　下位状況
写真図版15　上段　古墳６主体部材下位状況
下段　同　主体部材集石除去後の穴跡堀方
写真図版16　上段左　古墳６主体部材集石中位状況
上段右　同　上位状況
中段左　同　中位状況
中段右　同　集石の穴跡堀方
下段　古墳７調査状況
写真図版17　上段左　古墳７周堀Ｂ・Ｂ′土層断面
上段右　同　周堀の形状
中段　古墳８調査状況
下段左　古墳９側から古墳８を見る
下段右　古墳８周堀Ａ・Ａ′土層断面
写真図版18　上段　Ｈ７・８区全景
下段　Ｈ７・８区の調査状況
写真図版19　上段左　古墳８周堀Ｂ・Ｂ′土層断面
上段右　古墳９調査状況
中段　古墳９調査区中央部とＡ・Ａ′土層断面
下段左　古墳９周堀Ｂ・Ｂ′土層断面
下段右　発掘風景

菅塩西両台遺跡

写真図版20　上段　Ｆ５・６区全景
中段左　同区　ＳＤ４・５近景
中段右　同区　ＤＳ６
下段左　同区　ＳＫ４
下段右　同区　ＳＫ10
写真図版21　上段　Ｄ４・５区(上)とＤ４区(手前)調査状況
下段　Ｄ４・５区(手前)とＤ４区(上)調査状況
写真図版22　上段　Ｅ４・５区ＳＤ33付近
中段　Ｅ４・５区ＳＤ33とその周辺
下段左　上空よりＥ４・５区、Ｆ５・６区以東を見る
下段右　ＳＤ33の東方延長
写真図版23　１段左　Ｄ４・５区中景
１段右　Ｄ４・５区ＳＤ33以北の状況
２段左　ＳＤ33北接の集石状況
２段右　ＳＤ33北接の集石状況
３段左　ＳＤ33北接の集石以北の状況
３段右　ＳＤ33北接の石組状況
４段左　ＳＤ33以北の状況を南東から望む
４段右　ＳＤ33北接の石組を南東から望む
写真図版24　１段左　ＳＤ33埋没中位の道跡
１段右　同　道跡の南からの近接
２段　同　道跡直上の土層断面
３段左　同　道跡はＳＤ33の埋没肩部に達する
３段右　同左　の土層断面との関係
４段左　ＳＤ33の中世面全景
４段右　同左を南面から見る
写真図版25　上段左　土塁１上面と石組１
上段右　石組１直上の集石状況
中段左　石組１直上の集石風景
中段左　石組１全景
下段左　石組１を南から望む
下段右　石組１を南西から望む
写真図版26　上段左　石組１西半の状況
上段右　石組１上方の集石状況
中段左　石組１中央の状況
中段右　石組１上方の集石状況
下段左　ＳＤ33の最下面の状況
下段右　土塁１基面の状況
写真図版27　上段左　ＳＤ33最下面の状況
上段右　ＳＤ33最上面と土塁１基面状況
中段左　ＳＤ33と遺跡の土層関係
中段右　ＳＤ33とＳＥ１の土層状況
下段　ＳＤ33最下面状況
写真図版28　上段左　ＳＤ33最下面状況
１段右上　ＳＤ33最下面の礫
２段右下　ＳＤ33最下面の礫
３段左　ＳＤ33土層断面
３段右　ＳＤ33土層断面と道跡
４段　ＳＤ33土層断面
写真図版29　上段左　Ｄ４区全景
上段右上　Ｄ４区とＥ４・５区(上)
上段右下　Ｄ４区全景
下段　Ｄ４区全景

永昌寺遺跡

写真図版30　上段左　東・中・西区全景
上段右　東・中・西区全景
下段左　東・中区全景
下段右　東・中区全景
写真図版31　上段左　西区調査状況
上段右上　西区北半状況
上段右下　西区北半状況近景
中段左　西区北西壁土層断面
中段右　中区中央土層断面
下段左　１号古墳(東区)の状況
下段右　１号古墳(東区)の状況
写真図版32　１段左　１号古墳(東区)近景
１段右　１号古墳(東区)近景

2段左　1号古墳(東区)埴輪出土状況
2段右　1号古墳(東区)埴輪出土状況
3段左　1号古墳(東区)周堀西半埴輪出土状況
3段右　同　周堀東側土層断面
4段左　同　周堀東側土層断面
4段右　同　周堀東側土層断面近景
写真図版33　上段左　3号古墳(西区)東側溝状遺構
上段右　同　土層断面
中段左　4号古墳(西区)状況
中段右　同　周堀
下段左上　同　周堀南面壁の状況
下段左下　1号溝土層断面
下段右　1号溝(中区)近景
写真図版34　1段左　1号土坑(東区)
1段右　同左　土層断面
2段左　2号土坑(東区)
2段右　同左　土層断面
3段左　3号土坑(東区)
3段右　同左　土層断面
4段左　4号土坑(東区)
4段右　同左　土層断面
写真図版35　1段左　5号土坑
1段右　同左　遺物出土状況
2段左　同上　土層断面
2段右　同　遺物出土状況
3段左　6号土坑(中区)
3段右　7号土坑
4段左　8号土坑(西区)
4段右　同　土層断面
写真図版36　1段左　9号土坑(西区)
1段右　10号土坑(西区)
2段左　11号土坑(西区)
2段右　12号土坑(西区)
3段左　13号土坑(西区)
3段右　12号土坑(西区)土層断面
4段左　13号土坑(西区)上面
4段右　14号土坑(西区)
写真図版37　1段左　14号土坑(西区)土層断面
1段右　15号土坑(西区)
2段左　1号井戸跡(東区)
2段右　同左　土層断面
3段左　2号井戸跡(西区)
3段右　同左　土層断面
4段左　同左　土層断面除去後
写真図版38　上段左　2号風倒木跡(中区)
上段右　同左　土層断面
中段左　3号風倒木跡(中区)
中段右　同左
下段左　4号風倒木跡(中区)
下段右上　5号風倒木跡(西区)
下段右下　同上　土層断面
写真図版39　1段左　2号古墳(西区)周堀南側
1段右　2号古墳(西区)周堀北側
2段　2号古墳(西区)全景
3段　3号古墳(西区)全景
4段　3号古墳(西区)集石状況

成塚石橋遺跡

写真図版40　上段　5区調査区全景
下段　同
写真図版41　上段左上　5区北半調査区全景
上段左下　1号溝
上段右　1号溝
下段左　2号溝
下段右上　2号溝
下段右下　同　土層断面
写真図版42　上段左　3号溝
上段右上　3号溝
上段右下　3号溝
下段左上　同　土層断面
下段左下　4号溝
下段右上　同　土層断面
下段右下　同左　土層断面
写真図版43　1段左　1号土坑
1段右　同左　土層断面
2段左　2号土坑
2段右　3号土坑
3段左　4号土坑
3段右　4号土坑土層断面
4段左　5号土坑
4段右　6号土坑
写真図版44　1段左　7・8・9・10土坑
1段右　6号土坑
2段左　7号土坑
2段右　7号土坑
3段左　8号土坑
3段右　8号土坑
4段左　10号土坑
4段右　11号土坑

西長岡南遺跡

写真図版45　古墳1遺物
写真図版46　古墳1遺物
写真図版47　古墳1遺物
写真図版48　古墳1遺物
写真図版49　古墳1遺物
写真図版50　古墳1遺物
写真図版51　古墳1遺物
写真図版52　古墳1遺物
写真図版53　古墳1遺物
写真図版54　古墳1遺物
写真図版55　古墳1遺物
写真図版56　古墳1遺物
写真図版57　古墳1遺物
写真図版58　古墳2遺物
写真図版59　古墳3・4・5遺物
写真図版60　古墳5遺物
写真図版61　古墳5遺物
写真図版62　古墳5遺物
写真図版63　古墳5遺物
写真図版64　古墳5遺物
写真図版65　古墳5遺物
写真図版66　古墳5遺物
写真図版67　古墳5・6・7・9遺物
写真図版68　溝跡遺物
写真図版69　溝跡遺物
写真図版70　溝跡・穴跡・補足遺物

菅塩西両台遺跡・成塚永昌寺遺跡・成塚石橋遺跡Ⅲ

写真図版71　菅塩西両台D4区、E4・5区遺物
写真図版72　菅塩西両台E4・5区、F5・6区遺物
写真図版73　菅塩西両台E4・5区、成塚永昌寺A1・2区、B・C3区遺物
写真図版74　成塚永昌寺井戸跡・穴跡・溝跡
写真図版75　成塚永昌寺溝跡遺物
写真図版76　成塚永昌寺溝跡・補足遺物、成塚石橋Ⅲ溝跡・土坑遺物

第１篇　序篇

第１章　調査に至る経緯と経過

太田市の北西部に位置する一級河川蛇川流域のうち上鳥山・中鳥山・寺井地区が農業振興地区に指定され、太田北部土地改良事業が始められたのは、昭和43年度からであた。事前協議は県・太田市教育委員会と主体者であった県土木部・農政部の関係各課との間で進められた。特に鳥山地区の蛇川改修工事は、遺跡の存在が濃密な地区に当るため、昭和47年度に試掘調査が、昭和48年４月～同年６月末日まで本調査が群馬県教育委員会により実施された。これが蛇川河川改修工事に伴なう最初の調査であり、幅30mの拡幅員、総長400mを対象に、集中区3600m²の拡張調査が実施され、昭和49年３月に『太田市八幡遺跡発掘調査報告』（群馬県教育委員会）が概報の体裁で刊行され、本整理は平成元年度に実施され『太田市八幡遺跡』（㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団）1990により、ようやく完結している。

続いて、蛇川河川改修工事での県文化財関連の事業は、群馬県企業局が成塚に住宅団地の造成、および治良門（じろえん）橋駅北側延長50mの区間の河川拡幅が県土木部河川課で計画された。それを受け、県教育委員会文化財保護課は、県企業局・県河川課に対し、太田市教育委員会と調査実施の協議を指示し、その結果、住宅団地ほか造成地内は県企業局と太田市教育委員会が、10600m²余りの蛇川改修区間については、県河川課・県太田土木事務所をまじえての協議による調整により、㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団に調査委託を行なうこととなった。それを受けた当団は、第１次の調査を昭和62年２月16日～同年６月30日の間に約4000m²の発掘調査を、昭和62年７月１日～昭和63年３月31日整理作業を行なった。成果は、『成塚石橋遺跡』（㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団）1988としてまとめられた。

事業の継続は、憂慮される調査中の増水、未決用地、それらと工事工程との係わりなどの問題から、以降において単年度完結調査の実施は困難との判断から結局、平成２年度にかけて４次に分けての調査実施となった。昭和63年度調査（第２次）は、第１次調査の以北・上流側の調査を昭和63年７月１日～同年10月30日の間に約3800m²の調査が行なわれた。この調査は、家屋の未移転、現道の迂回が困難な道路が調査地内に存在することなどの理由から、こま切れ調査を行なわざるを得ない状況の中で実施された。昭和64年度調査（第３次）は、平成元年10月１日～同年12月31日の間に、約1200m²の調査が行なわれた。昭和65年度調査（第４次）は、平成２年４月４日～同年５月31日の間に、約1600m²の調査が第３次の上流部と一般市道成塚－北金井線にはさまれた部分について行なわれた。整理作業は、昭和63年～平成２年度までの３年間の成果をまとめるとし、昭和63年７月１日～平成元年３月31日までの間に昭和63年度調査分を、平成２年４月４日～３年３月31日の間に平成２年度調査分の整理作業が行なわれ『成塚石橋遺跡Ⅱ』（㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団）1991として既刊されている。

４次にわたる調査は、当初、10600m²と見られていた範囲が調査拡張の必要域であったが、調査の進展に伴ない、以北に広がりうる状況を呈していた。平成３年度以降、蛇川河川改修工事に伴なう幅員拡幅計画に則して、県教育委員会文化財保護課が試掘を行ない、その結果を踏まえた形で発掘調査を実施することとなった。平成３年度（第５次）は、成塚石橋地区以北に接する成塚永昌寺地区の調査が平成４年４月９日～同年７月28日までの間に約2200m²が調査され、平成５年度（第６次）は、成塚永昌寺地区以北の菅塩西両台地区および西長岡地区のうち用地収得済の場所のうち3368m²が調査され、平成６年度（第７次）は、西長岡南地

区の前年度以北と、前年度に用地未決であった個所の解決した２個所について調査が計画されている。本報告は、平成４・５年度（第５・６次）調査についての整理事業である。

第２章　調査の方法と基本層位

１．調査の方法

成塚永昌寺遺跡の平成４年度調査区呼称法が変更され、以前の調査が座標呼称を行なっているのに対し、平成４年度から、大区の呼称は座標法を用い、100m四方を400等分した小区は、１～400までの小間割り呼称であり、平成５年度調査は、それを踏襲した。しかし現場においては、測量業者自身が呼称法を誤るし、記録実測図中の呼称も誤りが時おり認められ、やはり座標使用の呼称を行なうべきである。本書中の位置表現も実に煩しい文字量である。100m毎の大区は、東から西へＡ・Ｂ・Ｃで進行し、南から北へ算用数字が増加、南西隅が呼称点となる。この大区は公共座標第IX系に一致し、ＡラインはＹ＝－44.0、１ラインはＸ＝36.8である。小区は、100m格子の大区の中を５m毎に小間割にしたもので、大座標は南と東から呼称するのに対し、小区は、東から西に、北から南に番号が送られている。北東隅の小間が001、南西隅の小間が400である。水準は、標高値であり、Ｉ10区に存在した三角点からの引照である。

試掘調査は、県教育委員会文化財保護課による、遺構存在地を調査対象としたが、遺物のみしか出土しなかった試掘地には、再度トレンチか、河川改修幅部分の小規模調査とした場合が多く、調査地幅に差があるのは、このためである。幅広の場合は、現道を遮断しての調査を行なった。

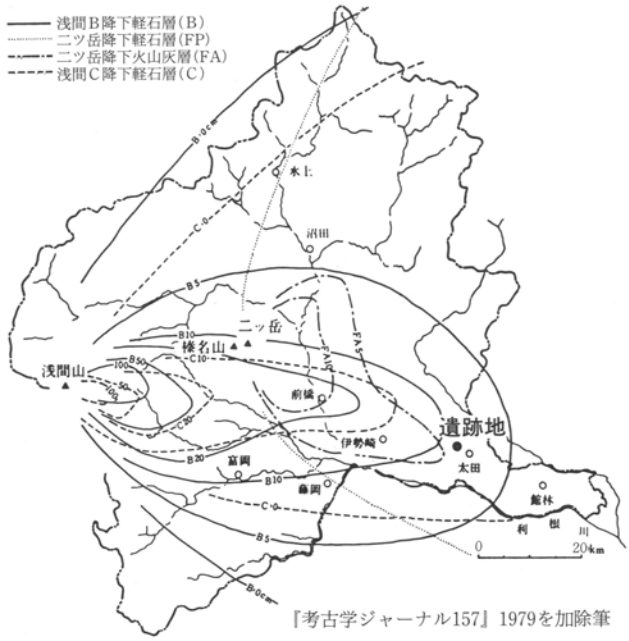
測図は、１：20・40を平面図として用い、それは主として遺構・遺物の粗密による。実測は平板による。土層断面、および遺構の成（な）り断面は１：20で作成してある。等高線は、現場記入の図化である。

記録写真は、６cm判白黒、35mm判カラー・リバーサルと白黒で撮影してある。

２．基本層位

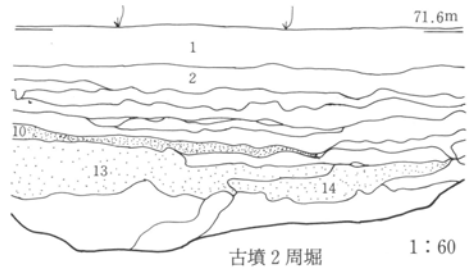
基本層位は、標識地点を定めて行なう方法と、複数の地点から得られた層順を概念化して行なう方法がある。前者は単調な場合に、後者は、複雑な場合に用いられるが、永塚永昌寺遺跡の場合、遺跡地は、昭和初年に新らたに開さくされた蛇川用水とその後２回の河川改修に亘る流路および複雑な土砂の堆積があり、それ以下の地山としての土壌も、水性堆積のローム層であり、部分的には旧渡良瀬川による扇状地地形中の礫層も存在している。またそうした２次堆積のローム層中に礫が混入している時もある。このように、標式地点や合成層順の成立も困難であるため、Ａ・Ｂ２区、Ｂ・Ｃ２・３区の調査区壁面は、省略せず、第83～88図のとおり掲載したので参照されたい。

菅塩西両台・西長岡南の両遺跡とも基本層位を設けず調査を行なった。両遺跡とも蛇川による土砂の堆積はなく、昭和初年の開さくの蛇川用水は、現永昌寺の北裏側を北から南西に向け通過していることが追証された。菅塩西両台遺跡では、水性堆積とも順堆積とも判断し難いローム層がＥ４・５区のローム層上面にあり、それはＤ４区の中程まで続き、以南のローム層上面は水性堆積とみられる粘性味を感じた。Ｆ５・６区では、同区調査区北西端より64mの水路位置までＥ４・５区で認めたローム層よりも水性味がさらに弱く感じられるローム層がローム層上面に存在していた。その水路以北は、調査事務所プレハブのゴミ穴として掘った穴の所見しかないが、耕作土・直下層以下はローム層質土の存在が薄く、礫を多量に含む層であった。西長岡南遺跡では、Ｈ７・８区では、ローム層上面は、菅塩西両台遺跡Ｄ４区南側で見られた水性味の強いローム層質の土壌が上面に見られ、下層にしたがいその性質が強かった。Ｈ７・８区調査区北端から10m強



『考古学ジャーナル157』1979を加除筆

第１図　完新鮮示標テフラ層の分布図



１．暗褐色土。上面は現道面。
２．暗褐色土。締まる。
10．黒褐色土。砂質。浅間山Ｂ軽石粒含む。軟性。
13．黒褐色土。軟性。榛名山ＥＰ粒若干含む。ローム層粒若干含む。
14．黒褐色土。軟性。榛名山ＥＰ粒若干含む。ローム層粒若干含む。

上図は古墳２周堀土層断面で、第32図に同じ。点描は軽石粒を含むことを示めす。

第２図　層序概念図

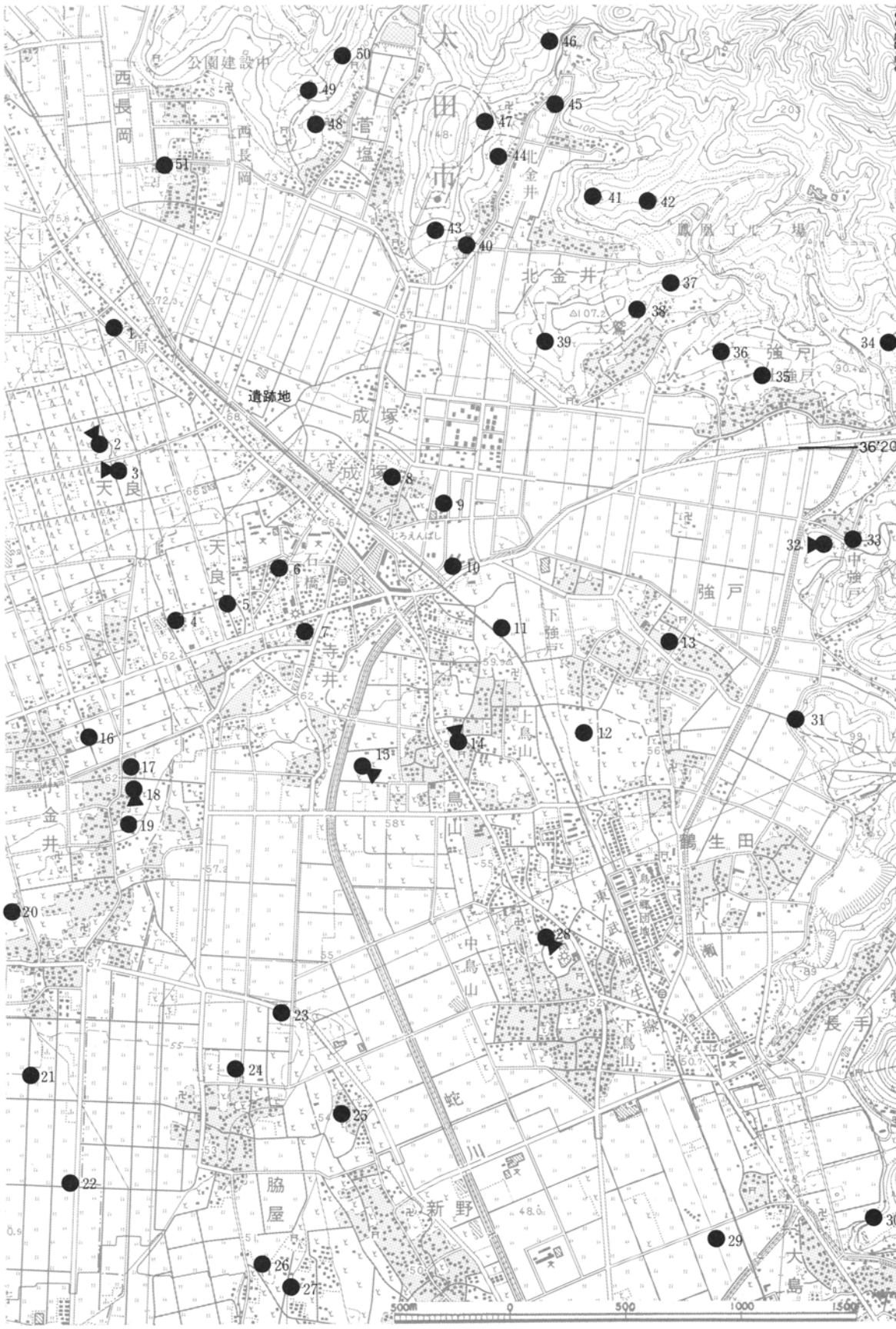
の位置の現舗装道路の南端を境にして、ほんのわずかではあるが、南東下りの傾斜に変換部が認められる。それ以北にあるＨ７・８区では、順堆積層に見えるローム層がローム層上面に存在し、以北のＩ・Ｊ９・10区にも続いている。ローム層漸移層は、旧表土の黒色土とローム層との間で生じた層として捉れば、西長岡南遺跡のＨ７・８、Ｉ・Ｊ９・10区に見られた外は、菅塩西両台遺跡のＥ４・５区に薄く認められた。旧表土としての黒色土層は、浅間山Ｃ軽石（As－Ｃ、４世紀前半頃）を含むらしい層は古墳周堀の最底部で考えられなくもないが、含む明確な層は存在していない。榛名山二ッ岳軽石（Fr－FP、６世紀中頃）を含む黒色土は西長岡南遺跡の古墳周堀内、菅塩西両台遺跡Ｅ４・５区の土塁基部に認める外は、存在していない。浅間山Ｂ軽石（As－Ｂ、12世紀前半頃）を含み、その降下に近い中世前半頃を感じさせる黒色土の存在は、菅塩西両台Ｄ４区北半は面として、Ｅ４・５区南半も面として、Ｆ５・６区は部分に、西長岡南Ｉ・Ｊ９・10区の古墳周堀際などに認められた。このように基盤層から黒色土に至るまで両遺跡の調査地区間の最長距離約820mは、多様であった。このため基準を標準的に示めすことができないので、基盤から表土までの間が自然の制約をあまり受けなかったと思われる西長岡南遺跡古墳２の周堀の堆積土をもって第２図に示した。

第３章　周辺遺跡

１．周辺遺跡

今回の主要成果は、永昌寺遺跡、西長岡南遺跡では、古墳群の存在、菅塩西両台遺跡では平安時代後期の推定官衙、中世の鍛冶関連が明らかとなった。本章では、古墳時代以降を触れたい。

古墳時代以降の遺跡の性格を知るためには、まず農耕の生産基盤を考える必要がある。古墳時代水田跡は現在までのところ、市内未見の状態にある。奈良、平安時代水田跡は、教示[(1)]いただいた限りでは２遺跡に浅間山Ｂ軽石（As－Ｂ、12世紀初頭）順堆積層下に水田跡を示唆する面を認めたという例があり、地上には、古代の条里[(2)]区画の遺制をとどめる現水田の区画が、太田市南部や北東部に存在しているため、発見は時間の問題のようで、至近では南西約7.5kmの新田郡尾島町歌舞伎遺跡でAs－Ｂ下水田の発見がある。現在および



第3図　周辺遺跡分布図　　国土地理院「上野境」「桐生」1：25,000

近年までの灌漑状況に目を向けると、主要水路は東方と藪塚台地上を江戸時代寛文年間に開さくされた岡登用水が流水している。岡登用水[3]は、岡登景能により寛文4年着手されたものの完流未成となり、明治5年に再堀削通流したものが現岡登用水である。現流路は、本遺跡の位置する藪塚台地と、東接の八王子丘陵、太田金山丘陵との間の低地帯を南流し、さらに金山丘陵西側の谷底平野中を八瀬川が南流し、この2つの水系が丘陵地帯に西接する水田地帯の主要水系となり、蛇川は岡登用水から引水した用水路である。太田市八幡遺跡西側の水田地帯は、八王子丘陵の東方から八王子丘陵と金山丘陵の間をへて、成塚、寺井の低台地を横切る水系によっている。近年の『太田市1：2500平面図10・11』(昭和58年8月調整)を見ると、その水系は八王子丘陵の南西端で八瀬川に分流しているか東武桐生線の東方約80mで分流するまでの間は「新田堀用水路」という名称が印字され、以南の分流は「蛇川」と「長堀用水路」とある。新田堀用水路については、新田庄はじめ東国の中世史を研究されておられる峰岸純夫の「上野国新田庄の成立と展開」『中世の東国』(東京大学出版会) 1989によれば「開削時期不明で戦国期には史料に出現する」とし、氏の作成された水系図は新田堀用水の末端を現新田郡金井所在の水田地帯に置き、「戦国期以降の開穿」と補注を施し、開さく時期の明言をさけておられる。こうした用水路の必要性の状況は、八王子丘陵、金山丘陵中の奥行のある支谷中に溜池を見ることができ、両丘陵は第三紀層であり、県中央部の赤城山・榛名山を擁する地帯での扇状地末端にある湧水池とその恩恵を受ける流域を除くと多大な面積に伏流水および地表面上に貧水地帯が生じており、ち密な地質から生じる保水性と谷奥などから湧水する豊かな水量が得られる両丘陵に面する地帯との間に灌漑上の質差がある。したがって必要最限の水量は常に確保されうる場所でありながら複数の用水が必要であった点は、西方に広がる藪塚台地末端の扇状地形中の支谷での開田や、周辺地域での大がかりな開田に伴なう必要性があったからと考えたい。その時期は、成塚、西長岡周辺に限って見れば、平安時代末期以降を考えておきたい。

八王子丘陵と、金山丘陵に接する低地帯は旧渡良瀬川によって生じたとされており、大間々扇状地形中、最も長大な谷底平野となり、新田郡笠懸町阿左美沼のあたりまで達している。その低地帯を水田適地として開発したためか、規模の大きな古墳が5世紀代頃から、この低地帯に面してが築造されはじめ、古墳時代後期の階段には、大間々扇状地形中最も文化的な躍進を遂げ、その後の段階にも大きく影響をあたえている。次にそうした地域首長墓級を見ると5世紀代の前方後円墳[4]に太田市鳥山地内に鶴山古墳、鳥崇神社古墳、亀山古墳がある。第7図のように本遺跡と近接してある。鶴山古墳[5]は、墳丘全長約60m、周堀幅13～15mで、後円部径約30mを測ることができ従来の総長約100mをいく分下回る。主体部は昭和23年に群馬大学によって、墳頂部から竪穴式石室が発見され、頸鎧付短甲はじめ短甲3、冑2、石製模造品、皮製盾などの出土があり、5世紀代の遺物の組み合せを持つことで知られる。鳥崇神社古墳は、現在は後円部を残すのみで、前方部はまったく削平されてしまっている。昭和48年の墳丘の実測調査の際、くびれ部の左右に中島の存在が推定されるようになった。規模は墳丘推定全長約70m、後円部径約40mを測り、埴輪、葺石の存在が知られ、中島の祭祀的機能から5世紀代の築造が、主体部には竪穴式系石室が推定されている。中島について既に富岡牛松が「金山を囲む前方後円墳(上)」『上毛及上毛人第226号』1936に示しておられ、昭和11年時に指摘された点は重要である。亀山古墳は前方部が削平化されている。墳丘実測による規模は欠損部が多いものの墳丘全長58m前後が推定され、後円部は30.5mほどが測知されている。葺石と古様の埴輪の存在が知られる。6世紀から7世紀初頭頃までを見ると、新田町天良所在の二ッ山古墳1号墳、2号墳、北接の藪塚本町に西山古墳が存在する。二ッ山古墳1号墳は慶応大学が昭和23[6]年に墳丘の発掘を行ない、靭・さしば・鞆などの器材、鳥・獣などの動物埴輪、人物、家形埴輪などと葺石の存在が知られる。規模は、墳丘全長74mに約18

（第６・７図）

番号	名　　称	種　　別	時　代
1		墳墓	古墳
2	二ツ山１号古墳	墳墓	古墳
3	二ツ山２号古墳	墳墓	古墳
4	天良七堂遺跡	寺院跡・城館跡	奈良・平安
5	寺院跡又は城館跡	寺院跡・城館跡	奈・平～中世
6	寺井廃寺跡	寺院跡	奈良・平安
7	寺井古墳群	墳墓	古墳
8		墳墓	古墳
9	成塚古墳群	墳墓	古墳
10		集落	縄文～古墳
11	寺裏遺跡	集落	古墳
12	藤五郎塚	墳墓	古墳
13		墳墓	古墳
14	亀山古墳	墳墓	古墳
15	鶴山古墳	墳墓	古墳
16	笠松遺跡	集落	縄文～奈・平
17	松尾神社古墳	墳墓	古墳
18	生品村第９号古墳	墳墓	古墳
19	土根遺跡	集落	古墳
20	上新井遺跡	集落	古墳
21	中溝遺跡	集落	古墳
22	深町遺跡	集落	古墳
23	堂原遺跡	集落	弥生～古墳
24	オクマン山古墳	墳墓	古墳
25	釣堂廃寺	寺院跡	奈良
26		集落	古墳
27	観音免（脇屋義助館跡）	墳墓・城館跡	中世
28	鳥崇神社古墳	墳墓	古墳
29	三枚橋南	集落	縄文～古墳
30		集落	縄文
31		製鉄址	平安・鎌倉
32	寺山古墳	墳墓	古墳
33		生産址・他	古墳
34	萩原館跡	城館跡	中世
35	上強戸古墳群	墳墓	古墳
36	大鷲　向山古墳群	墳墓	古墳
37	大鷲　向山古墳群	墳墓	古墳
38	大鷲　向山古墳群	墳墓	古墳
39	成塚　向山古墳群	墳墓	古墳
40		生産址・他	古墳
41	御嶽山古墳	墳墓	古墳
42	北金井　東浦古墳群	墳墓	古墳
43	菅塩山崎古墳群	墳墓	古墳
44		墳墓	古墳
45		墳墓	古墳
46		墳墓	古墳
47		墳墓	古墳
48	菅塩西山古墳群	墳墓	古墳
49	西長岡　東山古墳群	墳墓	古墳
50	菅塩祝入古墳群	墳墓	古墳
51	西長岡　宿古墳群	墳墓	古墳

注：奈は奈良時代　平は平安時代を示す。

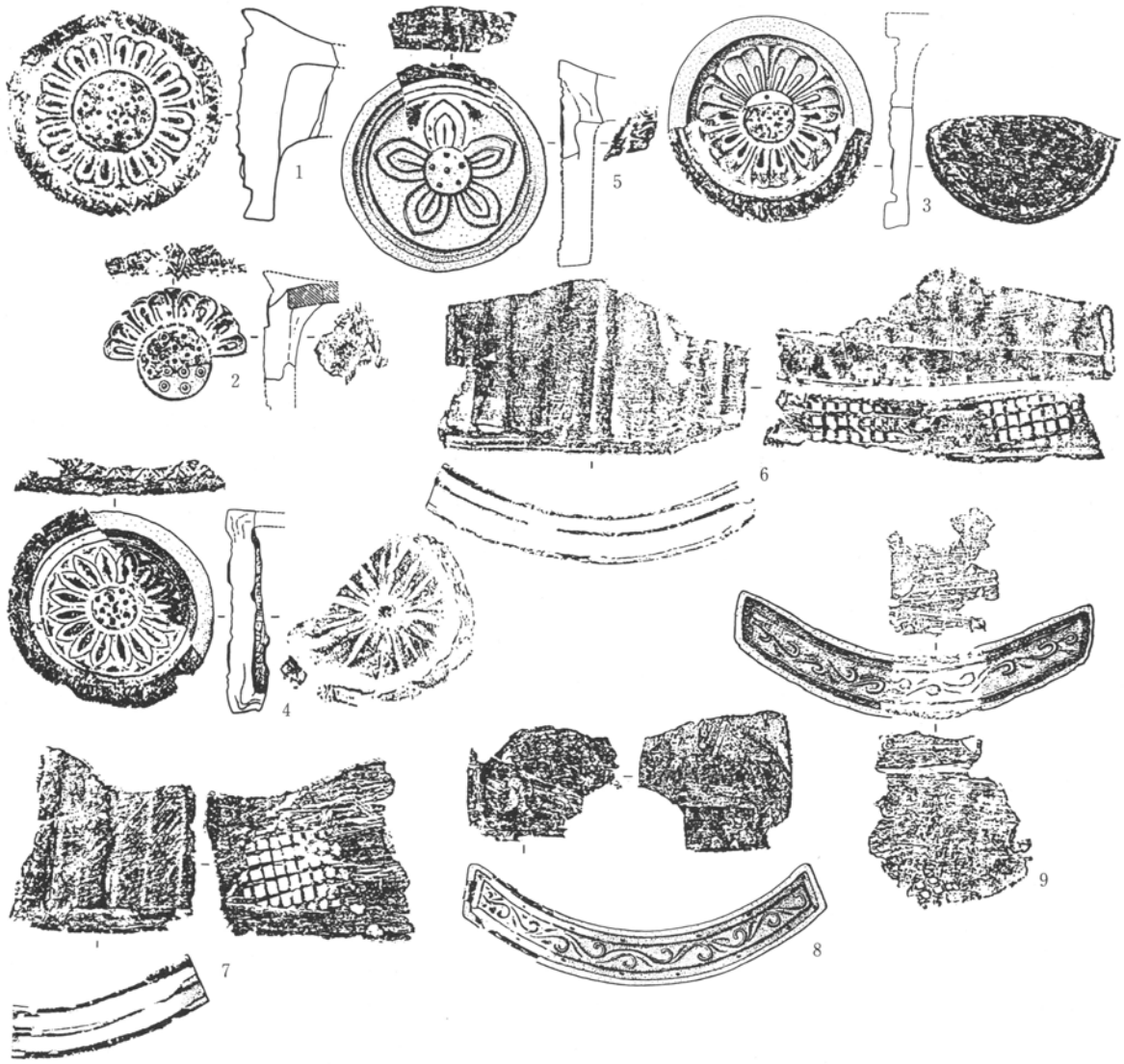
m幅の周堀が巡る。後円部中段には南に向けやや規模の大きい横穴式袖無形石室が開口する。二ツ山古墳２号墳は１号墳は１号墳に近接し、規模は墳丘全長45m、後円部径32m、さらに約10m幅の周堀が巡る。『上毛古墳総覧』によれば明治21年に石室は開口され長21尺であったという。両墳とも６世紀終末から７世紀初頭頃と推定されているが、埴輪類は形象類も多く、埴輪造形表現が盛んであった６世紀終末以前を窺わせる。西山古墳は、丘陵利用の30m級前方後円墳で、後円部に長さ4.1mの横穴式両袖型石室が開口し、石室形態から最終期の前方後円墳と捉えられている。北山古墳も薮塚本町にあり、墳丘は丘陵利用の径約20mの円墳で、長さ6.3mの両袖型石室が開口している。石材は薮塚石と称される凝灰岩の切石積で、被葬者は小地域を管掌した首長級もしくは後代の郡司層級を生み出す背景と有縁であったのであろう。

これらの古墳についての総括を古墳研究の梅沢重昭は『群馬県史資料編３』「解説」1981の中で「蛇川上流の金山西方地区には、群馬県地方で最も古い様相を

計	笠懸村	薮塚本町	綿打村	生品村	強戸村	鳥之郷村	宝泉村	本崎町	世良田村	尾島町	沢野村	九号村	太田町	市町村名	新田郡
八三二	一一	一二一	二七	一一	一八四	六六	五九	八	五五	二	一二〇	七七	九〇	古墳数	
五四	一	四	二	三	三	八	二	一	六	一	一三	八	三	前方後円	
一	|	一	|	|	|	|	|	|	|	|	|	|	方形	
|	|	|	|	|	|	|	|	|	|	|	|	|	上円下方	
七三八	一一	九二	二三	七	一八〇	五七	五六	二	四九	|	一〇七	六九	八五	円形	
三八	|	二五	二	一	一	一	|	五	|	一	|	|	二	形式不明及其ノ他	

上表は昭和13年に実施された古墳一斉調査の報告である「上毛古墳綜覧」『群馬縣史蹟名勝天然記念物調査報告第五輯』（群馬県）1935中の集約数値である。県下の総数8,423基を数え、調査期間内で未完地域の想定を加えると総数10,000基を上まわるとされている。当遺跡は旧強戸（ごうど）村にあり、西に旧鳥之郷（とりごう）村が、さらにその北延長に生品（いくしな）村が位置している。その三村を合ると計251基となり、多数の展開があったことがわかり、さらに新田郡内でも、この周辺に古墳の集中があった点が窺える。薮塚本町に実数が多いのは６世紀代を主とする集中である。

生産基盤との関連からは、それらは、八王子丘陵と金山丘陵の西側の低地に面した低台地上に主として分布があり、明治に岡登用水が通される遙か前代に耕地利用があったことを推測させる。



第４図　寺井廃寺跡既出土瓦　　１：６（木暮仁一氏資料）

寺井廃寺遺跡

寺井廃寺は当遺跡の北西約500mの低台地上にある。現在、宅地化が進み、寺域ほか諸遺構の痕跡を辿ることはできないが、遺構・遺物は地元で、同廃寺の保存に力を注がれた木暮仁一氏により「寺井廃寺について」『上州文化№50』1992で具体的に知らされ、瓦積基壇化粧を思わせる瓦積、化粧石材を思わせる凝灰岩の切石か強戸小学校の南接地に、既出瓦の集中個所も同地であることなどを指摘され、中枢諸堂位置の推定をしておられ、貴重な私見である。この寺井廃寺は、上植木、金井、山王廃寺と並び諸堂を配した県内で数少ない大寺院としても知られる。その周知は尾崎喜左雄「群馬県新田郡寺井廃寺址」『日本考古学年報２』1948があり、それ以降に、須田茂「寺井廃寺」『群馬県史資料編２』（群馬県）1987が新しい。その建立創意について、須田茂は「遺跡の性格」『入谷遺跡III』（群馬県新田町教育委員会）1987の中で「新田郡司クラスの豪族の氏寺に比定される。」とし氏寺としての建立を、それに対して木津博明は「歴史的環境」『上野国分僧寺・尼寺中間地域８分冊中の第３分冊』（㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団ほか）1988の中で「壬申の乱以後台頭した大野氏を通して〝官寺〟としての性格を具備し建立されたことが類推される。」と特定している。大野氏とは大野朝臣東人に係わる氏族をさしており「官寺としての性格を具備」という点は須田が古代新田郡の主体官衙にあてた近接の天良七堂遺跡（てんらしちどう）（「昭和30年の発掘調査によって、六間三間の総柱式の礎石建物一棟が検出された。本遺跡は南東棟であって、多量の炭化米を伴なうことから官衙の正倉とみられている。」須田（前掲による）の位置関係や推定東山道が近接すること、さらに周辺に上野国分寺式瓦の既出遺跡が５遺跡以上も存在しており、８世紀代の周辺一帯は官の影響が極めて濃厚に存在する地域であったとすることができ、木津のいう官寺としての性格の具備はそうした地域の内的視点から見て妥当性がある。それらの位置関係は第３図を参照されたい。

既出瓦は強戸小学校保管資料（前掲『日本考古学年報』所載瓦）と木暮仁一氏が収集された平箱20におよぶ資料とが主体を占める。鐙瓦には中房の大きさの異なる二笵種以上の創建段階面違鋸歯文鐙瓦（第４図１、２－７世紀後半）、複弁七葉蓮花文鐙瓦（第４図３－７世紀後半）、細弁菊花文鐙瓦（第４図４－８世紀前半）、上野国分寺式の単弁五葉鐙瓦（第５図５－８世紀中頃）などがあり、宇瓦には有段顎三重弧文宇瓦（第４図６－７世紀後半）、曲線顎三重弧文宇瓦（７世紀後半）、二種の上野国分式扁行唐草文宇瓦（第４図７・８－８世紀中頃）などがある。当遺跡でも、第93図のとおり男瓦があり製作について回転力（自走能力）のある撫条痕が見られ、それは面違鋸歯文鐙瓦の男瓦部と共通する手法のため７世紀後半の所産で寺井廃寺からの搬入物と考えられる。この薮塚台地の集落に起居した人々はおそらくそびえ立つ堂塔の偉容に日々接していたにちがいない。

伝える前方後円墳の八幡山古墳、また少し位置が離れるが、東毛第二の規模を誇る5世紀前半期の前方後円墳宝泉茶臼山古墳がある。鳥山地区には鶴山古墳、亀山古墳、鳥崇神社古墳などの5世紀後半から6世紀前半にかけての前方後円墳が存在し、この地区の一部、上強戸には初期の様相をうかがわせる前方後円墳の寺山古墳、新田郡新田町天良に後期の前方墳の二ツ山古墳があって、東毛地域における有力地区であったことをうかがわせる。新田郡域でその最も北に位置する前方後円墳は新田郡薮塚本町西山古墳である。これは東毛地域における最終期の前方後円墳の1つであり、小地域圏を形成する古墳群の中核的性格をもって位置している。また、この地区の群集墳の発達は、大島から長手、鶴生田にかけての金山西麓の丘陵地や、大鷲、北金井から新田郡薮塚本町湯ノ入にかけての八王寺山塊の西南側から西側に連なる丘陵地帯、今の東武鉄道赤城線の通る成塚、街道橋付近の大間々扇状地縁辺の高燥地帯に分布している。また、大間々扇状地末端に発達した沖積平野を背景に、その周辺の低台地上には由良、脇屋、藤阿久、細谷、下田島などの北に群集墳の分布が見られる。さらに新田郡新田町上田中にも、鈴鏡、馬具頬を出土した兵庫塚（綜覧新田郡綿打村十五号）を中核に、群集墳の分布が認められる。」と古墳研究の蘊蓄を注いだ解説となっている。

7世紀後半頃から奈良時代の周辺遺跡の状況は、前代の小地域における内的発展を受け継ぎつつ律令制の時代に向け内的発展をとげる状況がみられる。その頃についてこの周辺地域の調査を多く手がけた須田茂『入谷遺跡III』（群馬県新田町教育委員会）1987によると「**新田郡の領域と郷**　新田郡は、その領域としては北東を金山・八王子・鹿田山の低丘陵とを結んだ線、西を早川および岡上用水路、南を利根川で区画された南北17km、東西12kmほどの三角形状を呈す。郷は、新田・滓野・石西・祝人・淡甘・駅家の六郷である。その推定地は新田郷、駅家郷が郡中央部東寄り、滓野郷が郡南域、石西郷が郡南東域、祝人郷が郡北東域、淡甘郷が郡西域である。

寺院跡と官衙跡　新田郡における古墳寺院としては、まず、太田市天良・寺井に所在する寺井廃寺があげられよう。本寺院跡は伽藍配置は不明であるが、軒瓦として5ないし6種があり七世紀後半から10世紀に及ぶことが知られる。創建期瓦は川原寺式の複弁八弁文軒丸瓦である。群馬県東部域の最古期に位置づけられ、新田郡司クラスの豪族の氏寺に比定される。寺井廃寺以外の寺跡は6ヵ所ほどがあげられる。そのうち新田郡新田町花香塚に所在する**梨木遺跡**は群馬県域でも類例の少ない特徴的な瓦を出土する。平瓦は凸面に斜格子叩きが重ね打ちされ凹面はナデ整形され、丸瓦は凸面凹面ともナデ整形され、八世紀前半から中頃にかけた年代でとらえている。梨子木遺跡外の5遺跡は**台ノ原遺跡**（新田郡新田町薮塚本町杉塚）・**釣堂遺跡**（太田市脇屋・新野）・**源六堰遺跡**（新田郡新田町下田中）・**中江田本郷遺跡**（新田郡新田町中江田）である。この5寺院は軒瓦として上野国分寺式の単弁重五弁文軒丸瓦と右偏行唐草文軒平瓦をもち、瓦塔も保有するらしいことが知られつつある。このうち台ノ原遺跡は発掘調査によって集落内に営まれた瓦葺き掘立柱式の単一堂宇様の遺跡であって、その堂宇内に瓦塔が安置されていたことが知見された。年代は八世紀後半頃である。梨木以下の6寺跡は寺というよりもむしろ草堂・仏堂というべきものであって郷長クラスの有力者層の氏寺的性格を有するものと見なされる。以上の寺跡を郷との関係でとらえると、寺井廃寺、上野井遺跡が新田郷、駅家郷、中江田本郷遺跡が滓野郷、釣堂遺跡が石西側、台ノ原遺跡が祝人郷、源六堰遺跡、梨子木遺跡が淡甘郷となろう。これをまとめると、新田郡においては七世紀後半代に郡司クラスの豪族層によって寺が造られ、八世紀代に郷長クラスの有力者層によって小規模な寺（仏堂）が造営されたと推測される。

つぎに、官衙的遺跡をみたい。その事例は、入谷遺跡と天良七堂遺跡の二遺跡がある。ここでは後者にふれたい。**天良七堂遺跡**は太田市天良に所在する。昭和30年代の発掘調査によって、六間三間の総柱式の礎石建物一棟が検出された。本遺跡は南北棟であって、多量の炭化米を伴うことから官衙の正倉とみられている。

なお、本遺構の礎石は八王子山系の凝灰岩の割石を石材とするが、白色凝灰岩の上面に柱座加工のある礎石が南方100mほどの地点から出土し他の礎石建物の存在も確実視されている。

東山道と新田駅　上野国は東山道に属し五駅がおかれたが、新田郡内には新田駅が設置されていた。東山道の径路は延喜式のそれは都から陸奥国へ達し新田駅はその通過地であった。しかし、宝亀二年（771年）以前は新田駅で武蔵国へ向う支路が分岐していた。すなわち、新田駅は分岐路にあたる駅であるため自ずとその所在地は限定されるものとみられる。

以上、新田郡の歴史地理環境をみてきた。この中からは入谷遺跡と天良七堂遺跡は新田郡衛あるいは新田駅家のいずれかにあたるであろうと思われる。そして郡衙と郡司の氏寺は近隣に並存することが多々あるとされていること、及び東山道との関連などから、現状では天良七堂遺跡を郡衙にあて、入谷遺跡を駅家にあてておくのが穏当と思われるのである。」と古代瓦に長じた須田の説明であった。この時点から以降、新田郡内で大形掘方を設けた掘立柱建物跡が発見される遺跡が増加している。特に新田町村田境ヶ谷戸(さかいがやど)遺跡[6]からは建物跡のほか唐三彩陶枕、円面硯が、太田市天良七堂遺跡[7]では礎石建物群・掘立柱建物跡や炭化米出土の大溝が発見され、新田町市下新田(しもしんでん)遺跡[8]、同市宿通(いちしゅくどおり)遺跡[9]、同村田境ヶ谷戸(さかいがやど)遺跡[10]から古東山道に推定されされた道跡ほか道路遺構が発見されている。こうした状況の中で、須田のいう入谷遺跡は東山道に至近のため駅としての推定があるが、藤原宮跡以前の段階の瓦や倉庫様の総柱基壇礎石建物、瓦塔の存在から寺跡と考えられ、7世紀後半から8世紀代にかけての新田郡の動向には県内でも注目すべき点がある。

生産址の調査は、太田市長手・太田高太郎(たかたろう)Ⅰ遺跡[11]で須恵器窯跡が支群単位で、太田字長手口山去(やまさり)須恵器窯址[12]においても同期の一支群単位の確認がなされ、太田金山窯跡群中の窯跡が金山丘陵北東～東域ばかりでなく、南西部の一角でも知られるようになった。埴輪窯跡は八王子丘陵の南側麓部にある駒形神社埴輪窯址[13]の集積場の調査が行なわれ、円筒埴輪、形象埴輪基部150以上の出土があった。鉄製遺構は、9～10世紀代の炉跡が金山丘陵裾～麓部で多くの発見がある。その多さの現象は、現新田郡北部に上野国分二寺に対しての主体供給瓦屋であり、展開期を8世紀とする笠懸窯跡群[14]が存在している。この後古代における熱処理技術が鉄製へと移行したのかは不明ながら、9・10世紀に金山丘陵において製鉄が活発に行なわれ、県内において極所集中する数ヵ所のうちの一つであり、新田郡の性格の一側面をも示めしていると考えたい。

奈良時代における情景を示めす例に「萬葉集」東歌上野国歌二十五首中の三四〇八・三四三六がある。

三四〇八　新田山ねにはつかな吾によそりはしる兒らしあやにかなしも

三四三八　しらとほふ小新田山のもる山のうち枯れせななとこはにもがも

とある。土屋文明『萬葉集上野国歌私注』1944によれば新田山は新田郡地方の山とされ、その説明を「新田は、神の贄たる田、新田山はその山であるから神の山と云ぶべきであろう。金山の連山は何處を見ても、例へば草山に松の疎らな一峯にしても神の山と感ぜられるのである。」とあり、神の山とされた点は、新田郡内の古代の郷名の一つに祝人郷の存在があり、関連の可能性として重要であろう。この後、中世には、新田氏、岩松氏などの展開があり、『新田町誌[15]』・『群馬県史[16]』・『太田市史[17]』など参照されたい。

（1）宮田毅氏(太田市教育委員会)に伺った。
（2）岡田隆夫「新田郡の条里」『群馬県史通史編2　原始古代2』1991
（3）「岡登用水」『角川日本地名大辞典　10群馬県』1988によった。
（4）『群馬県史資料編3　原始古代3』1981
（5）尾崎喜左雄「群馬県太田市鶴山古墳」『日本考古学年報1昭和23年度』1951
（6）清水潤三「群馬県新田郡二ツ山古墳」『日本考古学年報1昭和23年度』1951
（7）天笠淳一「七堂遺跡」『太田市埋蔵文化財発掘調査年報3』(太田市教育委員会)1993
（8）『下新田遺跡』(下新田遺跡発掘調査団・新田町教育委員会)1992

(9)・(10)『境ケ谷戸・原宿・上野井II遺跡』(新田町教育委員会)1994
(11)「高太郎I遺跡」『年報13』(㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団)1994
(12)「長手谷遺跡群」『市内遺跡X』(太田市教育委員会)1994
(13)「駒形神神埴輪窯址」『年報7』(㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団)1988
(14) 綿貫邦男・木津博明「新田郡笠懸町山際採集遺跡」『研究紀要8』(㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団)1991
(15)『新田町誌第1巻　通史編』(新田町)1990
(16)『群馬県史通史編3　中世』(群馬県)1986、『群馬県史通史編1　原始古代1・2』1990
(17)『太田市史料編　中世』(太田市)1986

2．蛇川河川改修に伴なう既調査と関連遺跡調査

本項では、既発掘調査成果として蛇川河川改修に伴う発掘調査として『太田市八幡遺跡』・『成塚石橋遺跡』・『成塚石橋遺跡II』を、周辺既調査として『成塚住宅団地遺跡I～III』・「成塚稲神社古墳」について紹介しておきたい。

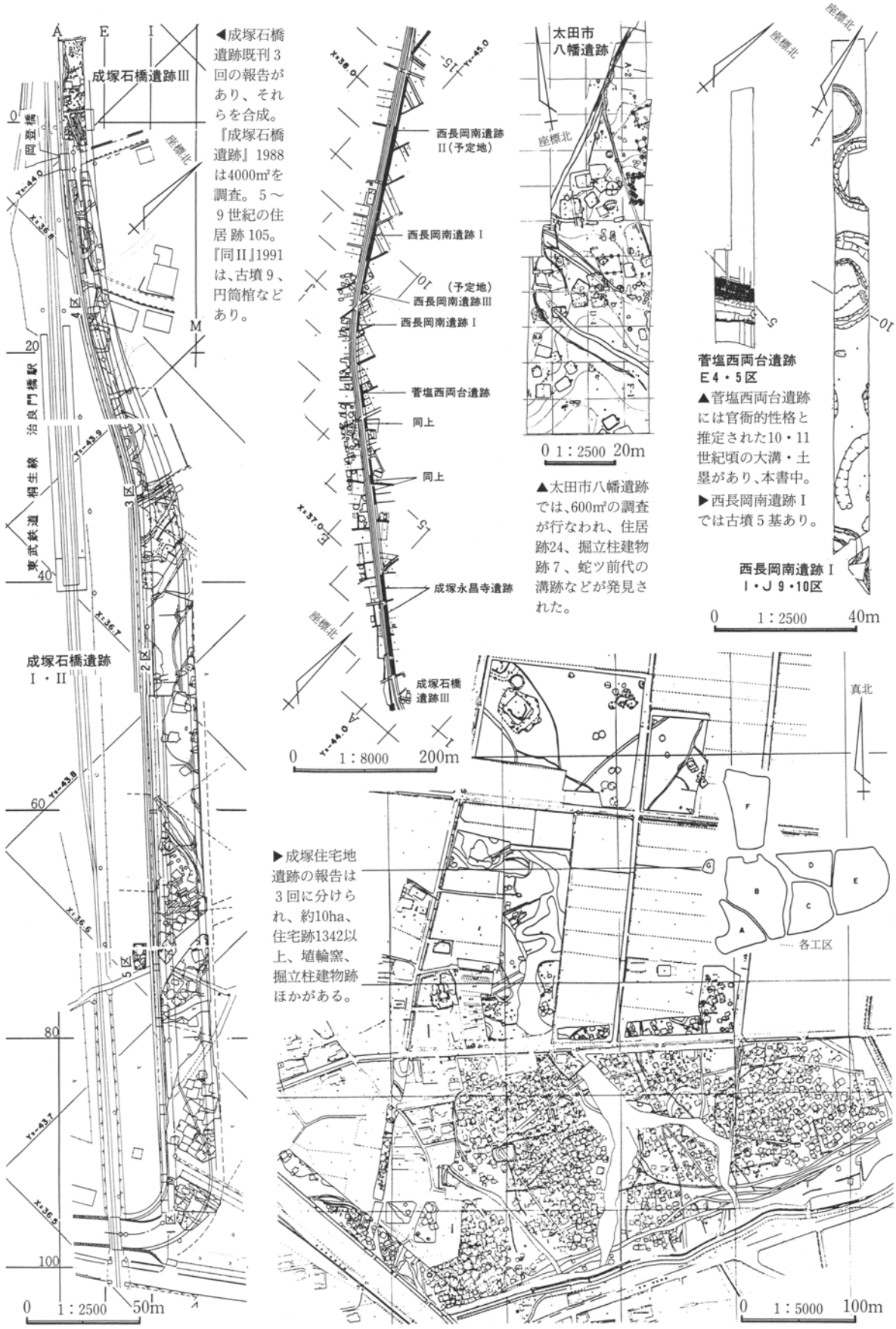
『太田市八幡遺跡』(㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団・群馬県教育委員会) 1990は、本文146頁、挿入図104葉、写真図版38頁である。調査地は太田市大字鳥山(とりやま)字八幡にあり、蛇川河川改修工事により、昭和48年に3600㎡の対象範囲のうち600㎡の拡張が行なわれ、7世紀～9世紀の住居跡が総計24以上、掘立柱建物跡7、井戸跡3、長方形の穴跡12以上、蛇川前代の溝跡など溝6以上などがあった。特に、蛇川前代と推定された水路跡SD01は、上幅1.4m、深さ30～35cmを測り、自然河川を改修しての蛇川用水を遡ぼる前代の溝跡が推定された点は注目される。また、奈良時代頃の住居跡とその頃前後と推測される掘立柱建物群とは、集落の枢要部を思わせ、武井廃寺至近の場所の調査例として重要である。

『成塚石橋遺跡』(㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団・群馬県教育委員会) 1988は、本文242頁、挿入図198葉、写真図版56頁である。調査地は太田市大字成塚字石橋にあり、蛇川河川改修工事により、昭和61年3月から昭和62年2月～同年6月に4000㎡が調査された。5世紀中頃から9世紀後半の住居跡105、穴跡72うち長方形約30、溝跡22、井戸跡5などの遺構が発見された。集落は断間なく継続したらしく、北東側の成塚住宅団地遺跡に続き、特に住宅団地内で発見されているカマド未設の5世紀の環濠集落と同期の住居も分布し、カマド付設、直後の時期の住居が流路沿いに発見されている。整理担当であった小島敦子は、大間々扇状地の湧水を利用した農耕を生産基盤として推定している。調査された溝のうち1号溝は、最大部で20.8m、深さ0.9～0.4mを測り、埋土中に12世紀初頭頃に降下した浅間山B軽石(As－B)の順層が存在したという。埋土からの所見は侵食と埋積をくり返した自然流路とされた。17号溝も幅広の自然流路跡で、埋没土による過程の観察から1号溝の下流延長上の溝跡と推定された。As－B以前の自然流路跡の発見であるが、深さの規模は平安時代頃であるらしいことが土層断面図から推される。以前の流路については、20m余の幅の中で、もしくはそれ以上であったようにも見える。いずれにせよ奈良・平安時代頃のこの流路跡は浅い点に特徴があり、太田金山・八王子丘陵の第三紀層の豊富な湧出水量が加っているとは思えないこと、金山石と称される角材が写真中には見えないことから扇状地形で形成された薮塚台地側の貧水を思わせる流路跡である。

『成塚石橋遺跡II』(㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団・群馬県教育委員会) 1991は、本文252頁、挿入図167葉、写真図版66頁である。調査は昭和63年7月～10月の間の3800㎡、平成元年10月～12月の間の1200㎡、平成2年4月～5月の間の1600㎡が行なわれ、整理・報告は、成塚住宅団地の住宅促進区域内の蛇川河川改修工事個所について実施された。遺構量は、古墳9、そのうち円形は2・4・5・6号古墳が、やや楕円形は3・9号古墳が、帆立貝は1号古墳が、方形は8号古墳が、不明は7号古墳があり、さらに楕円形の掘方を持つ1号円筒棺遺構がある。その位置は、前出自然流路の右岸沿いに連なるように発見された。住居跡は10

棟跡の発見があり、右岸沿いの南端に接近、重複の6棟の存在がある。古墳はいずれも道路等で削平され、主体部は失なわれ、さらに昭和13年に実施された一斉調査による『上毛古墳綜覧』所収の古墳ではないという。1号古墳は6世紀前半頃の土師を含み、周堀から埴輪形象人物・朝顔形円筒・円筒などが発掘され、樹立が推定されている。2号古墳は、6世紀前半頃に見える須恵器・土師器を含み、周堀から埴輪人物・大刀・馬などと朝顔形・円筒などが発掘され樹立が推定されている。3号古墳は、土器の掲示はなく、埴輪片少量の出土があるものの4号古墳の埴輪と接合できた個体もあるため、旧時において埴輪の樹立はなかったようである。4号古墳は、6世紀初頭前後に見える土師器を含み、周堀から埴輪形象人物・円筒が発掘されたものの小片約100点ほどであることから部分的な樹立と推定されている。5号古墳は、土器の掲示はなく、周堀より、埴輪形象・朝顔形・円筒が発掘され、特に朝顔形は9基中最も大きい。出土が部分多出のため部分樹立かという。6号古墳は、土器の掲示はなく、埴輪形象人物・盾・大刀・朝顔形・円筒があり、樹立が推定されている。7号古墳は、土器の掲示はなく、埴輪形象人物ほかが少量あることから樹立について明言はない。8号古墳は、土師器小形甕の底部らしき個体片があり、埴輪円筒がわずか発掘されているものの明言はない。9号古墳は、須恵器甕の体部片2片の掲示があり、体部での6＋α条の回転カキ目加飾、内・外の平行叩、同心円当目の状態を捉えれば6世紀代の地方窯製と見ることができる。埴輪円筒ほか3点の埴輪の掲示であるものの調査での不手際、直前まで民家が存在したことなどの理由により本来は埴輪の樹立があったと推定されている。埴輪円筒棺は、円筒2本の口縁を合せ口とし、別個体の破片を、透しを除く小口部などの塞ぎの材料に用いていたという。溝跡は、前出の自然流路を旧河道と表現し、時期別に3区分の調査がされている。第1河道とされた段階は、As－Bで埋没最上面が覆われた以下を指すようで、8～10世紀前半頃までと見える土器類が掲示されている。第2河道は、それ以下の個所を指すようで、5世紀末頃～7世紀中頃までと見える土器類の掲示がある。第3河道は、それ以降の第1：2河道と若干、流路が異なるが重複個所も多く、5世紀～6世紀の遺物・縄文時代前～後期に見える遺物の掲示がある。こうして整理された状況から、前出の自然流路全体のおよその時期が示された点が重要である。このほか溝跡は16条が、穴跡は縄文時代から近世までの40穴が、井戸跡は4基が発見され、古代から新しいという井戸まであり、深さから上水用と考えられる。巻末には、パリノ・サーヴェイによる「成塚石橋遺跡鉱物分析報告」にAs－BP（浅間山－板鼻褐色軽石、約1.6～2.1万年墳出）の存在の有無からみた基盤層上面成立時期に関しては、As－BPは発見されず、それ以上のテフラに由来する構成物が河川起源の土壌中に存在することが明らかとなった。「旧河道」については整理当であった中山茂樹・調査担当であった小島敦子が稿を寄せ、旧地形の復元に寄与（第5図）している。周辺の「古墳について」は中山が労作の分布図（第5図）を寄せる。出土した「馬形埴輪の成形について」は関邦一が、「群馬県における馬形埴輪の様相」と題して南雲芳昭が埴輪馬形の出土位置を県内例と比較しつつ「（前略）馬形埴輪自体が何んらかの意味を持つと考えざるを得ない。その一つは「権威の象徴」であったろう。」と結論づけ蘊蓄の一端を示めす。

『成塚住宅団地遺跡―成塚住宅団地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』（太田市教育委員会）1990・1991は、一冊の報告書が3分冊され、各々Ⅰ～Ⅱ-1・2の枝番名称が付されている。Ⅰは10haのうち太田市教育委員会が実施した3.3(2.4)ha余りの報告で本文255頁、挿入図241葉、写真30頁である。Ⅱは残りの6.7(7.6)haの成塚住宅団地遺跡発掘調査団の報告で群馬県企業局が委託した㈱シン航空写真が整理報告を行なっている。Ⅱ-1は住居跡図およびその主要諸元内容を記載し、697頁中に1360葉余の挿入図があり、住居跡を除く別種遺構は18頁分である。Ⅱ-2は遺構の写真図版編で423頁であり、これのみ1991年の刊行で、さらに後続の報告が予定されている。調査場所は、太田市大字成塚字又木・岩穴・明神東・明神前・諏訪・下



◀成塚石橋遺跡既刊3回の報告があり、それらを合成。『成塚石橋遺跡』1988は4000m²を調査。5～9世紀の住居跡105。『同II』1991は、古墳9、円筒棺などあり。

▲太田市八幡遺跡では、600m²の調査が行なわれ、住居跡24、掘立柱建物跡7、蛇ツ前代の溝跡などが発見された。

▲菅塩西両台遺跡には官衙的性格と推定された10・11世紀頃の大溝・土塁があり、本書中。

▶西長岡南遺跡 I では古墳5基あり。

▶成塚住宅地遺跡の報告は3回に分けられ、約10ha、住宅跡1342以上、埴輪窯、掘立柱建物跡ほかがある。

第5図　既調査団

新田で、原因者は群馬県企業局で成塚住宅団地の造成に伴なう調査である。造成面積の24haの10haが文化財調査対象地となった。調査期間は、昭和61年４月14日～同年８月26日まで予備調査を実施し、引続き昭和62年３月31日までが太田市教育委員会調査分、残る7.6haについては群馬県教育委員会の指導により、群馬県企業局、太田市教育委員会が主体となって成塚住宅団地遺跡発掘調査団を発足させての調査分である。調査団分は群馬県企業業局から委託を受け、㈱シン航空写真が社員派遣から発掘調査報告までの業務を行なう。『成塚住宅団地遺跡Ⅱ－１』（群馬県企業局・太田市教育委員会）1990は、㈱シン航空写真による、本文編で697頁、挿入図約1360葉であり、大多数が住居跡で約40頁がそのほかである。『成塚住宅団地遺跡Ⅱ－２』（群馬県企業局・太田市教育委員会）1991は、写真図班編で423頁がある。次年以降、遺物編が予定されている。遺構総量は、竪穴住居跡1342（縄文６・弥生６含む）、掘立柱建物跡５、居館址１、方形周溝墓１、井戸跡82、溝跡140、円形周溝状遺構３、塚跡３、土壙797、古墳なし、埴輪窯なし、その他の遺構なしであった。『成塚住宅団地遺構Ⅰ』にある太田市教育委員会調査分は、さらに住居跡74（縄文10を含む）、掘立柱建物跡２、周溝墓３、溝跡９、土壙未数量化、古墳１、埴輪３が加わる。古墳としては、市教育委員会調査遺構中に周溝墓があり、Ａ区第１号方形周溝墓は古墳時代初頭という。規模は方台部長18.2～19.8mを測り、埋葬部は発見できなかったようである。Ｅ区第１号方形周溝墓は、４世紀頃の土師器甕片の出土が見え、方台部長11.5mを測る。Ａ区第１号円形周溝墓は、５世紀代に見える土師器甑形の古出形状の個体の出土があり、径９～10.1mを測り、前出とともに埋葬部は発見できなかったようである。古墳はＡ区第１号墳のみの存在であった。同区１号円形周溝墓を切る。形状の明示はないが円形に見える弧成りで、推定径34mに周堀幅４mが測られている。小形土師器坏形・粗製同坏形・埴輪円筒の出土があり、坏類は５世紀末から６世紀初頭頃に見える。調査会分では、Ｂ区からＢＸ-1（円形周溝）とし、径4.33～4.14m、周溝内より坏の出土ありという。同区ＢＸ-2は、隅丸長方形気味に見え15.2～18.8mを測る。同区ＢＸ－４は隅丸方形気味に見え、径12.6m前後を測る。Ｄ区ではＤＸ-２は方形周溝に見え、１辺15.9mを測り、周溝南側埋没土より壷片出土とある。周区ＤＸ-２は、歪んだ円形を呈し、長辺35.9mを測るという。以上、調査会分は、Ｂ区ＢＸ-１のみ円形周溝と遺構区分が示されていたが遺構種名の表現がないため、筆者が書中より抽出したもので、前出遺構数値とは不一致である。埴輪窯跡は、市教育委員会のＢ区より、３基が発見されている。第１号埴輪窯跡は全長11.9m、最大幅3.2mを測る。第２・３号埴輪窯跡は、残存不良に見える。出土埴輪は、形象片を少しまじえ円筒を主とするようである。埴輪円筒の形状は、基部から突帯初段目まで長さのある個体、内面斜方向の刷毛目の個体・口縁端部外面での浅い凹みの存在など６世紀前半頃の埴輪に見える個体がある。用水との関連では、北北西から南南東に向け岡登用水が、南端を東北東から西南西に向け「改修される前の「新田堀」」も用地内に存在している。

「成塚稲荷神社古墳」『市内遺跡Ⅱ』（太田市教育委員会）1985は、成塚字岩沢788・789番地に存在し、昭和59年８月22日～同月28日まで調査が行なわれた。個人の宅地造成の際、トレンチ内で古墳周掘が発見され、それは、上毛古墳総覧強戸村146号成塚稲荷神社古墳の周溝であることが確認されたが墳丘規模を算出しうる調査面積ではなかった。出土遺物は６世紀前半頃に見える埴輪の口作である個体も含み、埴輪馬形を含むようである。なお同報告に岡部修一・猪越和彦による成塚古墳群古墳分布図の掲示があり、周辺古墳についての理解をより明るくしている。

第２篇　西長岡南遺跡

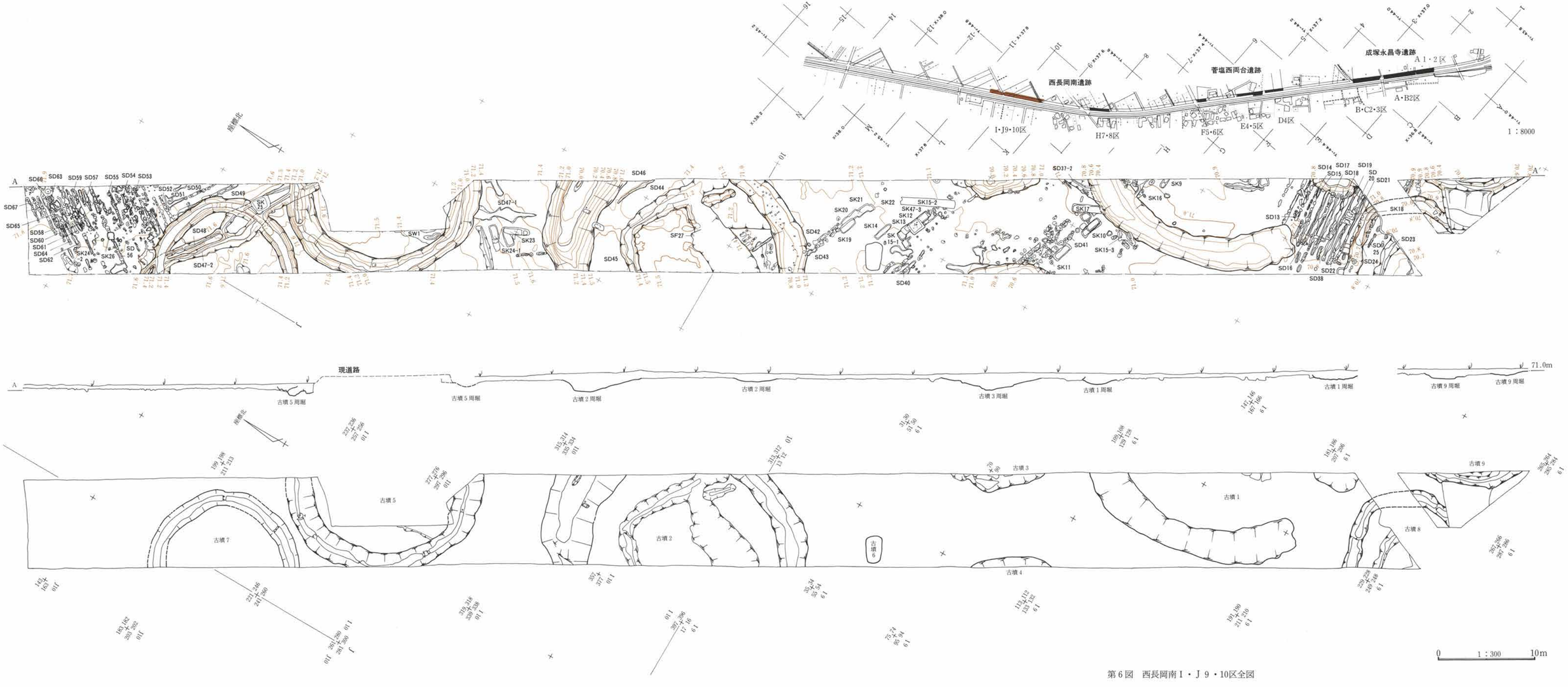
第１章　発掘概要と例言・凡例

発掘調査場所は、Ｈ７・８区とＩ・Ｊ９・10区の２個所に分かれる。Ｈ７・８区は大字西長岡字南487-1・２をＩ・Ｊ９・10区は大字西長岡字南476・411・412・414・410・409地内の調査を行なった。調査期日は、平成５年７月23日～同年10月29日までの間、一部菅塩西両台遺跡の調査と併行して行なった。調査担当は、大江正行（当団主幹兼専門員）・松井龍彦（主任調査研究員）・黒沢照弘（調査研究員）である。主幹課は当団調査研究部第４課・課長巾隆之である。調査面積は、Ｈ７・８区が340㎡、Ｉ・Ｊ９・10区が1430㎡である。

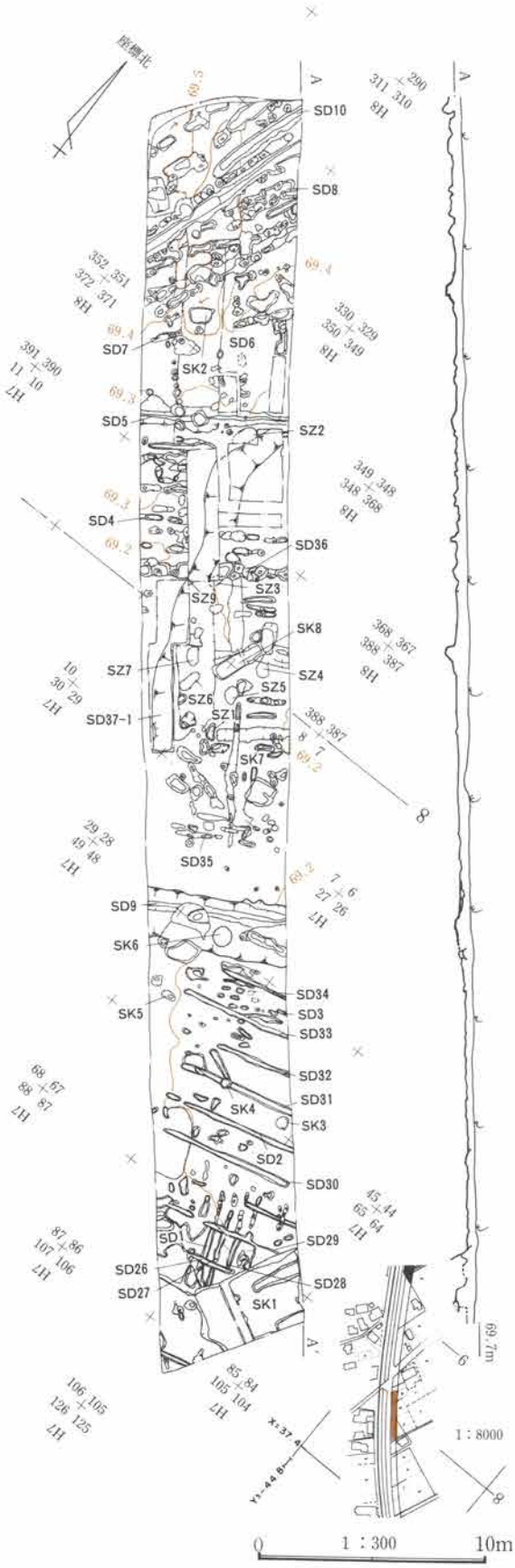
調査対象地は現道および拡幅部を含めた、約10m強の幅であったが現道を遮断しての場合は、古墳調査を主としたＩ・Ｊ９・10区のみについて行なった。現道は、改修された調査前の蛇川沿いに東接して設けられた幅５m弱の道である。両区の間の約130mは河川改修に伴う未決用地がある。

両調査地の調査は、Ｉ・Ｊ９・10区については、古墳等の存在が予知されたため全幅の拡張とし、Ｈ７・８区については、平成４年10月９日に行なわれた試掘時に遺構の確認はされなかったものの本調査時には注意するようにとの伝達点を聞いていたため、拡幅用地のみの調査を行なった。調査は上面を重機で排土したが、Ｉ・Ｊ９・10区については、現舗装道路を截断除去しての作業が加っている。両調査は、耕作土下および耕作影響土層下で面出(めんだ)しを行ない遺構の新・旧関係および土地利用変遷の把握、以下の層での遺構の予知などを行ない１：40・１：100で平面記録を行なった。それ以下のおよそローム層上面から上面土層との間で生じた漸移層の間での２面目の調査を行なった。そうした調査上の基本意識ではあったが、一面のみ調査となった場所もある。基盤層は、基本的にはローム層であったが、市道薮塚－太田１号線を境にして以南がわずかに下った場所に相当するＨ７・８区の基面は、水性の二次堆積にも見えるローム層であった。おそらくは市道が地形・ローム層堆積の変換部となっているのであろう。

調査区名称は、成塚永昌寺調査以来の大座標と小調査区名称を受継ぐ、座標の目筋は公共座標第IX系内に位置する。遺構図中には、必ず方位を示した。水準は標高値である。標高基準杭と座標杭の設置は、測量業者委託し、遺構図化の中ばも業者による。報告図版下の作成は、現場記録保存図をコピー縮少したが合成の際は、縮少率に合せた基本方眼を検定尺を用いて作成し、縮少誤差を均等配合しながら貼合せ作成のため個別遺構図は、正確により近い。しかし、全図としての扱いとなる１；300より縮少率の大きな図は整理の都合でコピー縮少されたそのままの図を用い、補正を行なわなかった図も含まれている。特に工事図１；500から起した第６図右上の調査位置図１；8000などは、経年変化と作成時のコピー合成が不正確であったため、太田市都市計画図１；2500を用い補正を計って作成した図ではあるが、版下挿入を１；4000としたためコピー誤差が生じているが、そのまま扱った。版下の作成、遺構図トレースは整理班による。線表現は遺構図の場合、実線は実態を、破線は、かくれ線・推定線を、細線は近・現代に近い遺構表現に、２点鎖線は調査区範囲境・トレンチ際に、１点鎖線は等高線に用いた。記号は、45°傾斜を意識し、それ以上急な場合に落ちマーク（俗称）を、それ以上ゆるやかな場合にダラダラマーク（俗称）をケバ表現として現場時点から用い、断面中の草マークは、畑地上面の場合を示すべく記入した。等高線は、おおむね20cm間隔に主曲線を用い、１m・0.5m単位の計曲線は用いず、上面・下面を示めす意味から補助曲線（間曲線）は部分使用であり、それ以下の特殊補助曲線は用いていない。全図の関係は、おおむね新・古の重さなりの表現を多用したが、総てに亘ってではない。



第6図　西長岡南Ⅰ・Ｊ９・10区全図

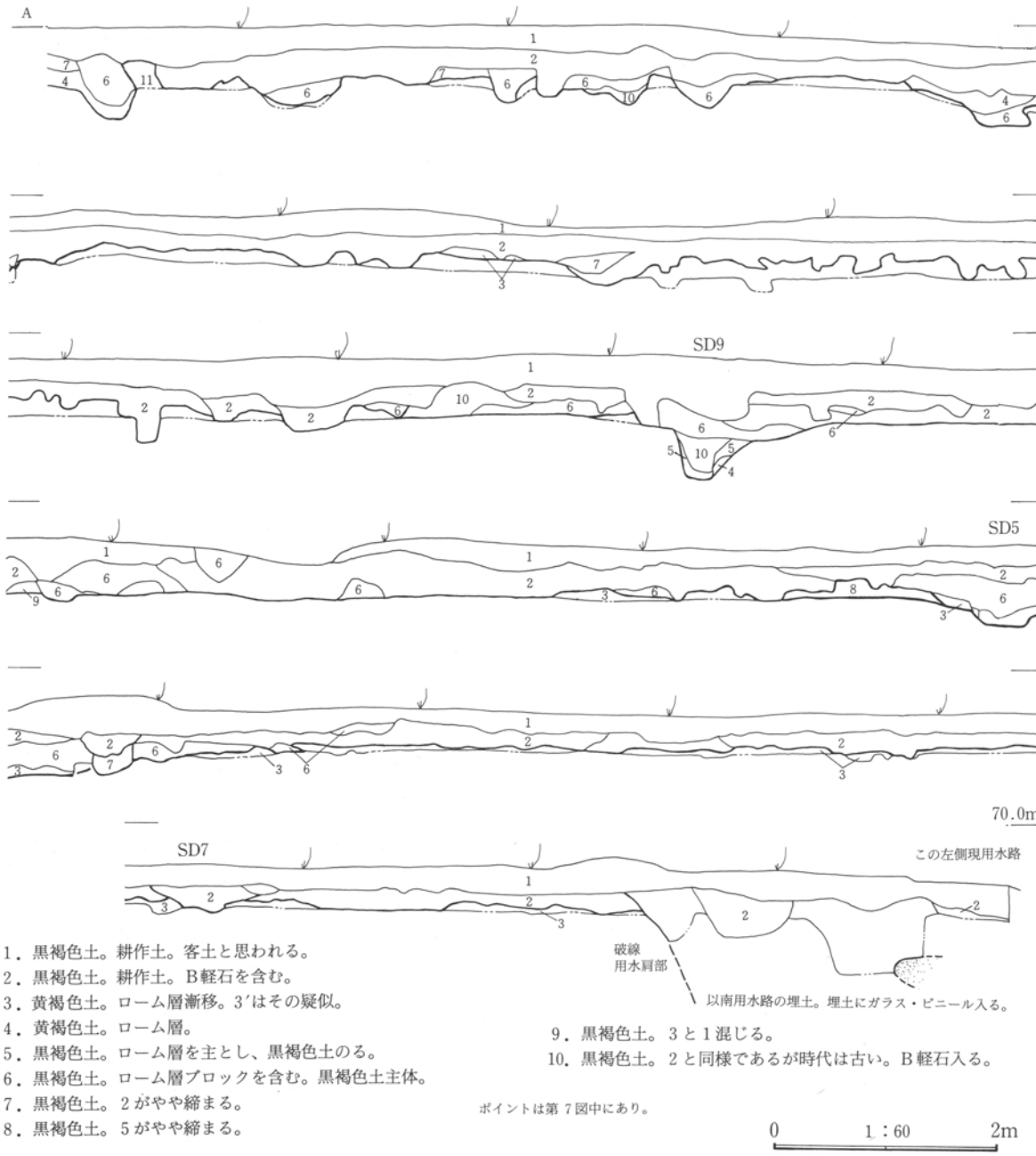


第７図　西長岡南Ｈ７・８区全図

遺物については、遺物観察の項で具体的内容に触れるが、遺構との係わりでは、現場での遺物取り上げ番号、整理時の整理番号、本書中の遺物図版中の番号とは不一致である。本書図中の番号は遺物図版で用いた番号であり、各遺構の単位で通番となっている。現場の遺物番号は、遺物図中の遺物脇に現場出土地注記中に表現してあり、さらに整理時の整理番号も（整○○○）のように添記入してある。しかし読者が本書を利用しようとする際に、遺物の現場時点の取り上げ番号と遺物図番号との照合は必要であり、その便に供すべく、第９・35図などに調査時の取り上げ番号を加えてある。その際Ｇ○○のＧはGroopの意味である。堀１～４とかは大きく取り上げた場合の現場名称で堀は周堀の略称である。遺物の接合関係は、第９・35図を用い、遺物実測図脇に記入してある接合関係表現、例えば第11図19には「古墳１Ｇ４に２片＋同Ｇ５に２片＝４片」と添記してある。それを第９図で見る時は、Ｇ４とＧ５の場所を探していただきたい。なお第９図中の高・低差は、現場時点で捉えた遺物の最高・最低位々置を示してある。

遺構平面図は、古墳平面について１：60と１：150で作成したが、挿入図版下は印刷仕上りに対して２倍版のため、細部表現が必要な場合には拡大された別図を設けて挿入してある。凡例や例言が必要な場合には、各図中になるべく記入するよう努めた。トーンの意味などは、図脇の添記を参照されたい。遺構図中の縮尺は、正尺を作成しているので表記と異なる寸不足や過多は、印刷縮小が不正確な場合である。

土層断面図は、各拡張区の長辺土層断面が見られるように努めたが、意図は、遺構の掘り込み面高が明らかとなるよう、遺構の削平された過程や土地利用状況の一端も明らかとなるよう、読者にも理解できるよう作成したつもりである。長尺の時の図の線の不一致は、現場図面作図の際に生じたもので、なるべく現場表現を生かし、原図表現を延ばしたり短めたりは行なっていない。なぜならば、それが現場精度であり、調査担当が行ない得た一つの成果の形でもあるからである。水準値は標高で、基準ポイント位置は、原図から変更



第8図　H7・8の北東壁土層断面図

せて作成した場合が多い。なおI・J 9・10区の東壁断面については、一坦は長尺として作成したが、各古墳の連続性とも共通するため、古墳についての遺構図に分断して使用した。さらにI・J 9・10区東壁断面を必要とする際は、南東より古墳9＋古墳1＋古墳3＋古墳2の土層断面を接合すると、古墳5以北を除くI・J 9・10区東壁の土層断面をほぼ作成することができる。遺構図中の成(な)り断面図は、整理班での作成は少なく、現場での作成が多い。整理時の作成は本文中で触れておきたい。

遺構名称は、現場での担当者間で決め、整理時も、それを受け継いだ。呼称・略称は以下のとおりである。古墳は古墳、溝跡はSD、穴跡はSK、墓跡はSZ、道路はSWとも道跡とも呼称した。

遺構総数は、次表にまとめたが、小さな溝跡や穴跡に名称を付した理由は、主に遺物が出土したためであり、各遺構を同質同等に扱うという考古学の調査法の理念に基づくものではない。

古 墳　　（第 6 図）

名　称	位　置	形　状・規　模・備　考
古墳　1	Ｉ９区	墳形は、帆立貝形を推定。西半弱を調査。周堀は、南に未全周部を残す。発見面での推定直径約21.5m、周堀幅4.1m、深さ0.6m、全長径推定約29.0m。埴輪円筒列は囲繞していたと推定される。埋葬施設は竪穴系と推測され、その用材を埋め込んだらしき穴跡が東壁にかかる。６世紀前半の築造。周堀中位にＦｒ－ＦＰ多い。
古墳　2	Ｉ９･10区	墳形は、円形とも思えるが、南西半は蛇川であること。周堀に高低差がある点などから、帆立貝形も考慮の必要性あり。発見面での推定直径約19.5m、周堀幅６～2.4m、深さ1.25～0.5m、全長径推定約27.9m。埋葬施設は、竪穴系と見られる残存石材が中心南寄りにあるものの旧態を欠く。埴輪は円筒・朝顔形があり、量少なく部分囲繞か。竪穴系の石室とすれば６世前半の築造か。周堀中位にＦｒ－ＦＰ多い。
古墳　3	Ｉ９区	周堀西端を調査。調査部長7.8m、深さ1.1m。埴輪の使用不明。微量出土。凝灰岩小片出土。
古墳　4	Ｉ９区	周堀東端を調査。調査部長8.4m、深さ0.5m。埴輪の使用なし、出土遺物なし。
古墳　5	Ｉ10区	墳形は、円形か。帆立貝形も余地あり。東半未調査地。発見面での直径18.0m、周堀幅2.85～1.65m、深さ0.85～0.5m、全長20.5m。埋葬施設石材かは不明であり、さらに古墳７の石材の可能性もある大石がＳＫ25から出土。埴輪は、周堀全体から発見されたが、出土量少なく、埴輪円筒や朝顔形を粗な状態で囲綿が墳丘上方での囲綿が考えられ、復元程度は粗な状態での接合多し。６世紀前半の築造。周堀中位にＨｒ－ＦＰ多い。
古墳　6	Ｉ９区	墳丘は不明（なし。）竪穴系石室残骸か。堀り形は旧時らしい。疑灰岩石材含む。６世紀前半の築造か。
古墳　7	Ｉ・Ｊ10区	墳形は円形か。直径11.8m、周堀幅1.9～1.65m、深1.2m。周堀中位にＦｒ－ＦＰ多い。
古墳　8	Ｉ９区	墳形は未堀地あり、推定円形。直径推定11.0m、周堀幅1.4m、深0.35m。全長推定直径12.4m。
古墳　9	Ｉ９区	推定円形。推定全長直径15.3m、周堀幅1.5m、深さ0.45m。周堀中位にＦｒ－ＦＤ多い。

遺構（ＳＤ）　　（第６・７図）

名　称	位　置	規　模（m）			備　考
		長 さ（長辺）	幅	深さ	
ＳＤ１	Ｈ７区	4.4	0.24	0.05	近代以降。近代軟質陶器破片。第57図。
ＳＤ２	Ｈ７区	6.06	0.24	0.07	近世以降。陶器・近代軟質陶器・近代瓦・石綿波板、第57図。
ＳＤ３	Ｈ７区	0.48＋α	0.14	0.03	近世以降。中世土師質土器・近世軟質陶器、第57図。
ＳＤ４	Ｈ８区	0.94＋α（2.02＋α）	0.22	0.12	近代以降。陶器・磁器・近代軟質陶器・石綿波板、第57図。畑さく跡。
ＳＤ５	Ｈ８区	6.40	0.58	0.17	近世以降か。軟質陶器、第57図。
ＳＤ６	Ｈ８区	0.34	0.22	極浅	近代以降。陶器、第57図。
ＳＤ７	Ｈ８区	1.44＋α（6.40＋α）	0.32	0.11	近世以降。陶器・磁器・近世軟質陶器、第57図。
ＳＤ８	Ｈ７区	0.38＋α（7.45）	0.86	0.26	近代以降。陶器・近世軟質陶器・近代十能瓦・石綿波板、第57図。畑さく跡。
ＳＤ９	Ｈ７区	6.02	2.46	0.41	第53図。近世以降。磁器・近世軟質陶器、第57図。
ＳＤ10	Ｈ８区	4.78＋α	0.52	0.40	陶器。第57図。畑さく跡。
ＳＤ11	Ｉ９区	12.64	0.56	浅い	第54図、近世以降。道跡２を切る。近世陶器、第57図。
ＳＤ12	Ｉ９区	5.74＋α	0.32	0.23	近世以降。第57図。畑跡１さく跡。
ＳＤ13	Ｉ９区	4.00＋α	0.28	0.14	近世以降。第57図。畑跡１さく跡。
ＳＤ14	Ｉ９区	5.90＋α	0.22	0.27	近世以降。第57図。畑跡１さく跡。
ＳＤ15	Ｉ９区	6.38	0.24	0.21	近世以降。磁器・近世軟質陶器、第57図。畑跡１さく跡。
ＳＤ16	Ｉ９区	6.10	0.26	0.26	近世以降。第57図。畑跡１さく跡。
ＳＤ17	Ｉ９区	6.56	0.30	0.28	近世以降。近世軟質陶器、第57図。畑跡１さく跡。
ＳＤ18	Ｉ９区	7.18＋α	0.24	0.29	近世以降。陶器、第57図、畑跡１さく跡。
ＳＤ19	Ｉ９区	8.34	0.24	0.27	近世以降。第57図。畑跡１さく跡。
ＳＤ20	Ｉ９区	2.92	0.42	0.30	近世以降。近世軟質陶器、第57図。畑跡１さく跡。
ＳＤ21	Ｉ９区	7.50	0.22	0.38	近代以降。近代軟質陶器、第57図。畑跡１さく跡。
ＳＤ22	Ｉ９区	4.60	0.32	0.41	近代以降。近代軟質陶器、第57図。畑跡１さく跡。
ＳＤ23	Ｉ９区	4.08	1.06	0.19	第54図、近世。第57図。
ＳＤ24	Ｉ９区	7.30	1.96	0.33	中世以降。土師質土器皿、第57図。
ＳＤ25	Ｉ９区	1.48	0.14	0.16	中世軟質陶器・中世瓦・鉄鍋片、第56図。
ＳＤ26	Ｈ７区	2.26	0.28	0.10	近世以降。畑さく跡。
ＳＤ27	Ｈ７区	3.60＋α	0.24	0.10	近世以降。畑さく跡。
ＳＤ28	Ｈ７区	1.34（2.62）	0.22	0.16	近世以降。畑さく跡。
ＳＤ29	Ｈ７区	3.60（5.78＋α）	0.28	0.11	近世以降。畑さく跡。
ＳＤ30	Ｈ７区	6.06	0.26	0.14	近世以降。畑さく跡。
ＳＤ31	Ｈ７区	4.82＋α	0.26	0.07	近世以降。磁器、第57図。畑さく跡。
ＳＤ32	Ｈ７区	3.52＋α	0.24	0.04	近世以降。畑さく跡。
ＳＤ33	Ｈ７区	5.00＋α	0.22	0.06	近世以降か。羽口、第57図。畑さく跡。
ＳＤ34	Ｈ７区	3.08＋α	0.22	0.05	近世以降。畑さく跡。
ＳＤ35	Ｈ７区	1.62（3.58）	0.24	0.10	近世以降か。
ＳＤ36	Ｈ８区	6.43	0.52	0.20	近世以降か。畑さく跡。
ＳＤ37－１	Ｈ７区	15.45＋α	0.90	0.39	二次堆積ローム層中の自然の流路跡。黒色土埋没。
ＳＤ37－２	Ｉ９区	3.76＋α	0.88	0.17	第54図、中世以降・陶器。

遺構（ＳＤ）　（第６・７図）

名　称	位　置	規　模（m）			備　考
		長　さ（長辺）	幅	深さ	
ＳＤ38	Ｉ９区	8.74＋α	0.36	0.30	近世以降。
ＳＤ39	Ｉ９区	4.48	0.48	0.22	近世以降。軟質陶器・陶器、第58図。
ＳＤ40	Ｉ９区	2.08	0.32	0.19	近世以降。軟質陶器・陶器・第58図。
ＳＤ41	Ｉ９区	3.12	0.40	0.21	近世以降。軟質陶器。
ＳＤ42	Ｉ９区	1.68	0.36	0.35	近世以降。不定形気味の平面形状。土師質土器皿・近世軟質陶器、第58図。
ＳＤ43	Ｉ９区	2.30		0.15	近世以降。不定形の平面形状。
ＳＤ44	Ｉ10区	8.62＋α	1.62	0.27	近世以降。第58図。
ＳＤ45	Ｉ10区	4.60＋α	1.08	0.18	近代以降。近世瓦、第58図。
ＳＤ46	Ｉ10区	3.95	0.15	0.16	近世以降。
ＳＤ47－１	Ｉ10区	9.02＋α	0.94	0.10	近世以降。
ＳＤ47－２	Ｉ10区	20.18＋α	0.82	0.28	第54図。中世以降。軟質陶器・土師質土器皿、第54図。
ＳＤ47－３	Ｉ９区	4.60	0.24	0.20	近世以降。
ＳＤ48	Ｉ10区	19.22	0.70	0.02	第54図。中世以降。第58図。
ＳＤ49	Ｉ10区	3.9	0.32	0.22	近世以降。第58図。畑跡３さく跡。
ＳＤ50	Ｉ10区	2.86（5.38＋α）	0.28	0.11	近世以降。第58図。畑跡３さく跡。
ＳＤ51	Ｉ10区	2.20＋α	0.28	0.10	近世以降。土師質土器皿、第58図、畑跡３さく跡。
ＳＤ52	Ｉ10区	2.54（4.26＋α）	0.25	0.18	近世以降。陶器、第58図。
ＳＤ53	Ｉ10区	3.08（4.24）	0.18	0.09	近世以降。第58図。
ＳＤ54	Ｉ10区	3.14（4.40）	0.20	0.17	近世以降。土師器か土師質土器皿か、第58図。畑跡２さく跡。
ＳＤ55	Ｉ10区	3.80（4.26）	0.32	0.23	近世以降。磁器・土師器、第58図。
ＳＤ56	Ｊ10区	4.22（5.26）	0.34	0.21	近世以降。軟質陶器、第58図。畑跡２さく跡。
ＳＤ57	Ｉ・Ｊ10区	2.40	0.30	0.14	近世以降。畑跡２さく跡。
ＳＤ58	Ｊ10区	4.74	0.40	0.17	近世以降。中世土師質土器皿・陶器、第59図。畑跡２さく跡。
ＳＤ59	Ｊ10区	2.16（4.20）	0.32	0.19	近代以降。近代軟質陶器、第58図。畑跡２さく跡。
ＳＤ60	Ｊ10区	4.72	0.34	0.12	近世以降。第59図。畑跡２さく跡。
ＳＤ61	Ｊ10区	1.06（4.26）	0.20	0.09	近代以降。軟質陶器・近代瓦・半磁器、第59図。畑跡２さく跡。
ＳＤ62	Ｊ10区	3.84（2.74）	0.32	0.19	近代以降。陶器・近代瓦、第59図。畑跡２さく跡。
ＳＤ63	Ｊ10区	2.50＋α	0.22	0.20	近代以降。近代軟質陶器。畑跡２さく跡。
ＳＤ64	Ｊ10区	3.40（5.80）	0.25	0.18	近世以降。第59図。畑跡２さく跡。
ＳＤ65	Ｊ10区	5.10	0.38	0.30	近世以降。第59図。ＳＤ66に続く。畑跡２さく跡。
ＳＤ66	Ｊ10区	0.50（＋0.51）	0.20	0.06	近世以降。磁器、第59図。ＳＤ65に続く。畑跡２さく跡。
ＳＤ67	Ｊ10区	0.29	0.25	0.13	近世以降。半磁器。土師質土器皿、第59図。畑跡２さく跡。

穴跡（ＳＫ）　（第６・７図）

名　称	位　置	規　模（m）			備　考
		長　さ（長辺）	幅	深さ	
ＳＫ１	Ｈ７区	5.30	3.04	0.39	近代以降。陶器・軟質陶器・近代瓦、第62図。
ＳＫ２	Ｈ８区	1.02	0.72	0.54	
ＳＫ３	Ｈ７区	0.56	0.52	0.12	近世以降。
ＳＫ４	Ｈ７区	0.46	0.46	0.08	近代以降。
ＳＫ５	Ｈ７区	0.62	0.34	0.17	縄文以前か。
ＳＫ６	Ｈ７区	0.92	0.84	0.24	中世以降か。
ＳＫ７	Ｈ７区	0.42	0.14	0.16	中世以降か。
ＳＫ８	Ｈ7・8区	2.42	0.76	0.27	近世以降。近世軟質陶器、第62図。
ＳＫ９	Ｉ９区	0.84	0.50	0.24	近世以降。第62図。
ＳＫ10	Ｉ９区	0.23	0.76	0.41	第60図。近世以降。近世軟質陶器・銅角釘、第62図。
ＳＫ11	Ｉ９区	0.46	0.40	0.10	近世以降。土師質土器皿、第62図。
ＳＫ12	Ｉ９区	1.44	0.98	2.15	第60図。近世以降。陶器。近世軟質陶器、第62図。
ＳＫ13	Ｉ９区	3.20	0.44	0.55	第60図。近世以降。土師質土器皿、第62図。
ＳＫ14	Ｉ９区	2.10	0.60	0.10	近世以降。磁器、第62図。
ＳＫ15－１	Ｉ９区	0.41	0.22	0.50	第60図。近世以降。
ＳＫ15－２	Ｉ９区	5.62	0.78	0.17	近世以降。
ＳＫ15－３	Ｉ９区	1.00	0.82	0.18	近世以降。
ＳＫ16	Ｉ９区	0.32	0.22	0.14	近世以降。第62図。
ＳＫ17	Ｉ９区	5.50	0.80	0.17	第60図。近世以降。
ＳＫ18	Ｉ９区	1.08	0.42	0.36	近世以降。
ＳＫ19	Ｉ９区	1.84	0.76	0.64	近世以降。
ＳＫ20	Ｉ９区	2.78＋α	0.68	0.27	近世以降。
ＳＫ21	Ｉ９区	1.40＋α	0.68	0.31	近世以降。

名　称	位　置	規　　模（m）			備　　考
		長さ（長辺）	幅	深さ	
ＳＫ22	Ｉ９区	0.68＋α	0.52	0.30	近世以降。
ＳＫ23	Ｉ10区	0.28	0.81	0.57	第61図。近世以降。
ＳＫ24－１	Ｉ10区	2.74	0.80	0.60	第61図。近世以降。
ＳＫ24－２	Ｊ10区	2.50	0.78	0.30	近世以降。
ＳＫ25	Ｉ10区	1.84	1.46	0.98	第61図。近世以降。
ＳＫ26	Ｊ10区	0.78	0.74		近世以降。軟質陶器か、第62図。
ＳＫ27	Ｉ９区	1.25	1.16	0.48	近世以降。

墓跡（ＳＺ）　（第６・７図）

名　称	位　置	規　　模（m）			備　　考
		長さ（長辺）	幅	深さ	
ＳＺ１	Ｈ７区	0.74	0.34	約0.3	現代。獣歯骨。伝中形家畜埋葬という。
ＳＺ２	Ｈ８区	0.61＋α	0.50	約0.3	現代。獣歯骨。伝中形家畜埋葬という。
ＳＺ３	Ｈ７区	0.38＋α		約0.3	現代。獣歯骨。伝中形家畜埋葬という。
ＳＺ４	Ｈ８区	0.62	0.52	約0.3	現代。獣歯骨。伝中形家畜埋葬という。
ＳＺ５	Ｈ７区	0.72	0.54	約0.3	現代。獣歯骨。伝中形家畜埋葬という。
ＳＺ６	Ｈ７区	1.02	0.42	約0.3	現代。獣歯骨。伝中形家畜埋葬という。
ＳＺ７	Ｈ７区	0.86	0.50	約0.3	現代。獣歯骨。伝中形家畜埋葬という。
ＳＺ９	Ｈ７区	0.35＋α		約0.3	現代。小規模墓壙。小形家畜か。

道跡（ＳＷ）　（第６・７図）

名　称	位　置	規　　模（m）			備　　考
		長さ（長辺）	幅	深さ	
ＳＷ１	Ｉ10区	4.20＋α	1.4＋	0.48	第35図。近世以降。深さは発見面より溝下面までを測る。幅は＋α。
ＳＷ２	Ｉ９区	19.20	2.76	0.27	第54図。近世以降。古墳１周堀跡地利用の道跡。

※畑跡は溝扱いであったので、本文中で一項を設けて扱う。

以上、一表中の注意点は、各時期は、浅間山Ｂ軽石（As－Ｂ・12世紀初頭）をまじえる土質を中世以降と考え、さらにその類中、新しい時期特有の粗および明るい色調の質感を捉え近世以降と表現してある。感覚的ではあっても、現場記録に基づく記入である。出土遺物の種は、整理作業時点の記入である。数値は、発見面からの記入で、中世以降は、およそ１面目で捉え調査面、古代以前は２面目が調査面である。第６図上段の図中、古墳を除く遺構の面が１面目、古墳を中心にした面が２面目である。第７図は、ＳＤ37－１の調査が２面目で、そのほかは１面目の発見である。

第２章　発掘された遺構と遺物

前出の一表中の遺構中、古墳は全数を、溝・穴跡は年代の遡ぼる例を中心に、墓跡は現代のため省略し、道路は全数の内容を次に扱いたい。遺物は、出土状態と出土の遺物種についてなどを本章で扱い、遺物観察は別章で扱いたい。なお遺構図仕様・凡例は、14頁で触れたので略したい。

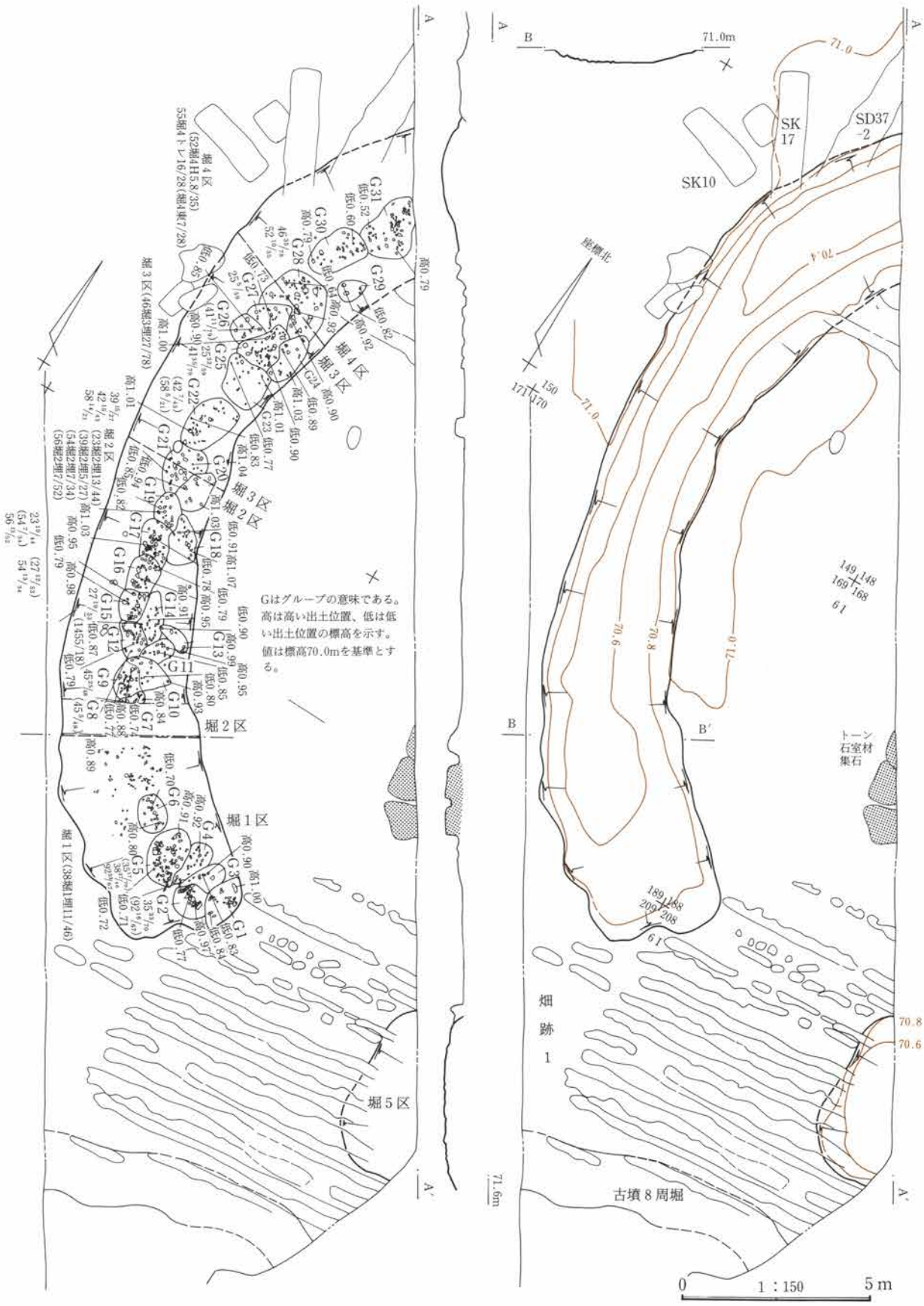
１．古墳

古墳１　（第９～24図）

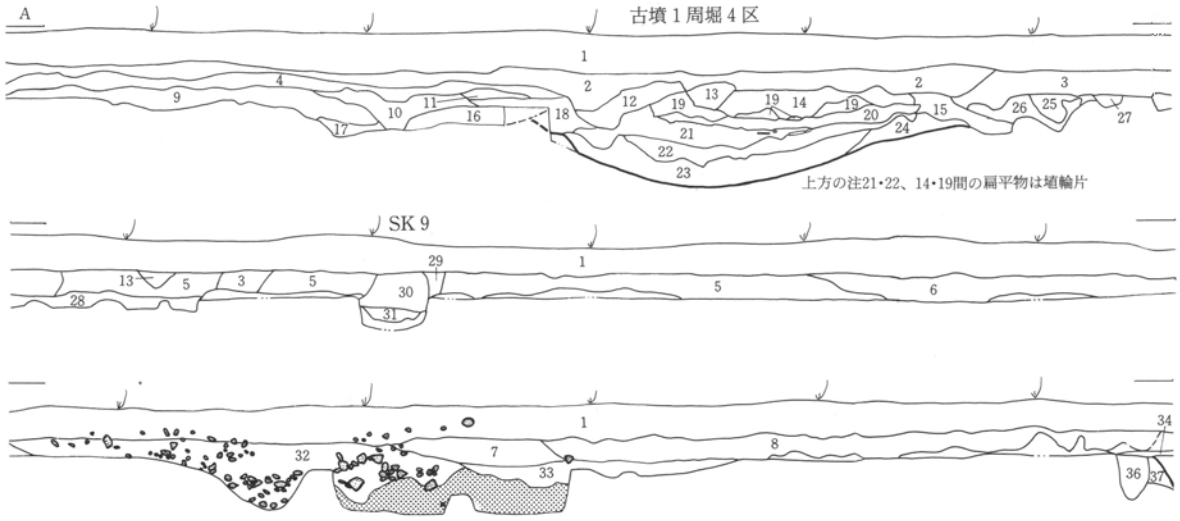
位置　Ｉ９区129・130・147～150・168～170・187～190・207に位置する。調査面上の標高は、約71.0mである。

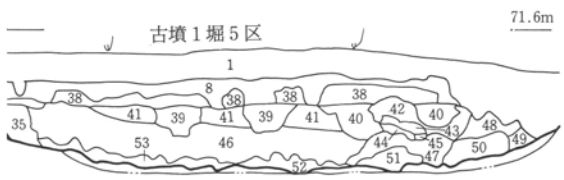
重複　第54図のように道跡２・ＳＤ11など近世以降の遺構、ＳＫ10・17などの穴跡、中世を思わせるＳＤ37－２、南側には、近世以降の畑跡、さく跡が重なり、古墳１がいずれよりも古い。調査区167・187・188には、近代以降の穴跡がある。前半は、近代以降であったらしく、墳丘相当個所に若い時代の遺構重複は少ない。

形状　墳丘は既に平夷されており、周堀から墳形を窺えば、周堀は南側を堀り残し、全周はしていない。堀り残しの個所の形状は、以北の円形部に対し八字状を呈し、あたかも帆立貝形の平面形をとる。したがってその形態は、円形の墳丘に造出しを加えた帆立貝形と推定される。

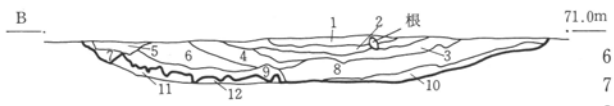


第9図　I・J 9・10区古墳1遺構図





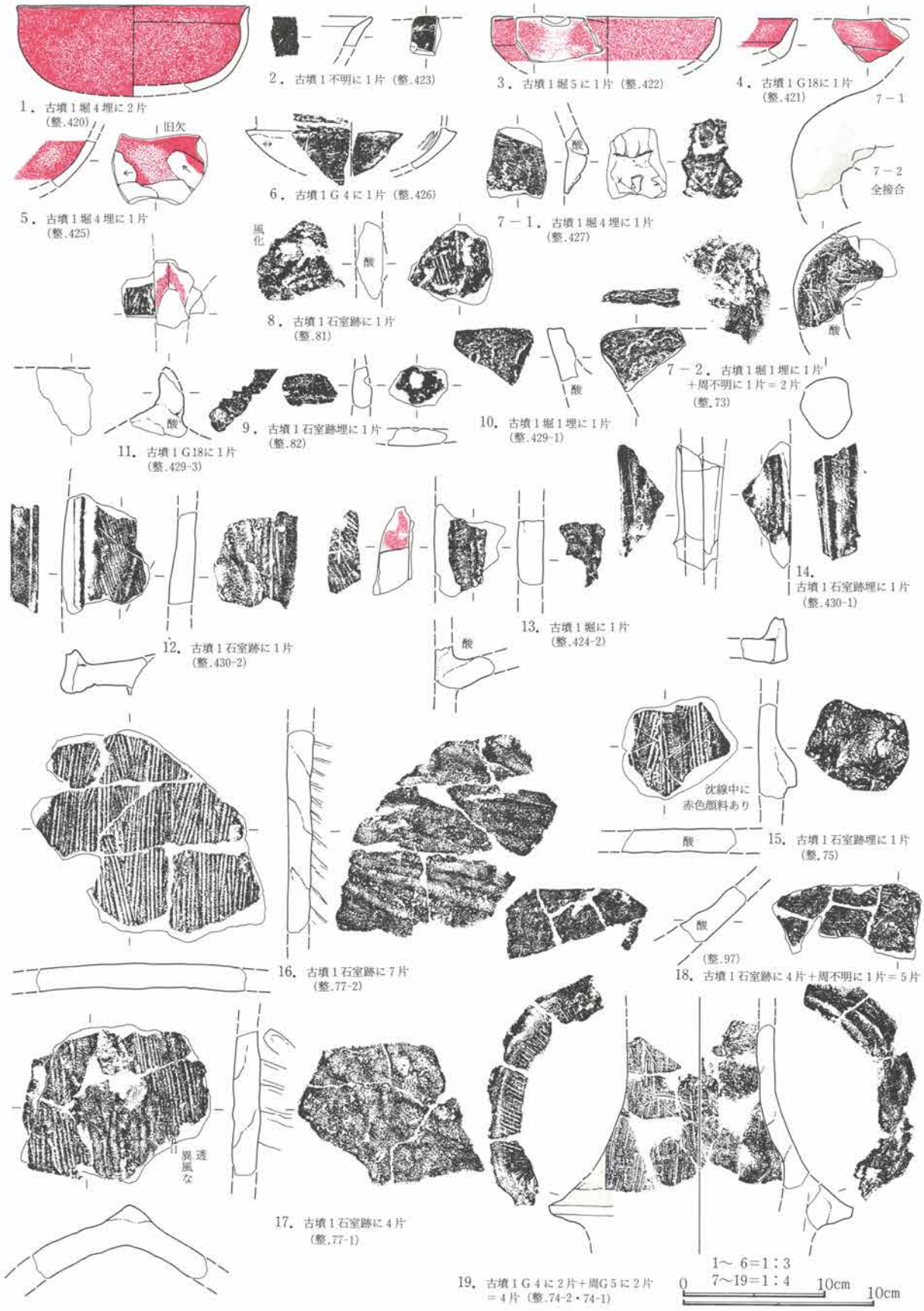
1．暗褐色土。現耕作土。
2．暗褐色土。締まる。ローム粒少含。褐色土を主とし、ローム層混る。
3．暗褐色土。やや締まる。ロームブロック少含。
4．暗褐色土。砂質。近世以降。締まる。
5．暗褐色土。やや締まる。ローム層混じる。近世以降。ＢＰ含。
6．暗黄色土。軟性。ローム層を主とする。やや黒っぽい。
7．暗褐色土。やや締まる。ロームブロック多含。近世以降。
8．７層に似るが、ローム粒一部僅含。
9．暗褐色土。締まる。褐色土を主とし、ローム層混る。
10．暗黄色土。ローム層を主とし、黒色土混る。軟性。築土。
11．暗褐色土。締まる。ローム粒と黒色土粒を若干含。砂質。
12．暗褐色土。締まる。ロームブロック混る。近世以降。
13．暗褐色土。締まる。カーボン粒僅含。
14．黒色土。軟性。暗褐色土粒少含。
15．暗褐色土。軟性。黒色土粒とローム粒少含。もろい。
16．暗黄色土。締まる。中世以降。築土。
17．暗褐色土。砂質。ＢＰ含。軟性。
18．暗黄色土。褐色土にローム層混る。軟性。中世以降。
19．黒色土。軟性。
20．黒褐色土。軟性。汚れたＢＰ含。
21．黒褐色土。ＦＰ粒多含。22層よりやや黒っぽい。
22．黒褐色土。軟性。ＦＰ粒多含。
23．黒褐色土。ローム粒若干。軟性。ＦＰ粒含。
24．暗橙色土。軟性。ローム層を主とし、黒色土混る。
25．暗黄色土。軟性。褐色土を主とし、ローム層混る。
26．暗黄色土。ローム漸移と黒色土混り。もろい。ロームブロック多含。
27．暗黄色土。軟性。ローム漸移と黒色土混り。もろい。
28．暗黄色土。軟性。ローム層を主とする。
29．暗褐色土。軟性。褐色土を主とし、ローム層、ローム粒含。
30．暗褐色土。軟性。褐色土を主とし、ローム層混る。近世以降。ローム粒下部に集まる。
31．暗黄色土。軟性。ローム層を主とする。
32．暗褐色土。軟質。礫を多量含む。ロームブロック混入。
33．暗褐色土。軟質。褐色土を主とし、ローム層混る。
34．黒褐色土。やや締まる。ＢＰ粒僅含。ロームブロック若干。
35．暗褐色土。軟性。ローム粒僅含。粗い。
36．35層に似る。畑跡の部分で、ロームブロックが下部に若干。
37．暗黄色土。軟性。ローム層とローム質。
38．暗褐色土。軟性。８層よりやや黒色ローム粒若干多含。
39．黒褐色土。締まる。砂質。ローム粒僅含。
40．暗褐色土。軟性。やや砂質。近世以降。やや締まる。
41．黒色土。軟性。ＢＰ粒多い。
42．黒色土。軟性。砂質。
43．暗紫色土。砂。ＢＰ降下後のアッシュと考える。アズキ色。
44．灰白色土。砂。ＢＰ層。もろい。
45．暗褐色土。ＦＰと暗褐色土混りでＢＰやや多い。
46．黒色土。軟性。
47．黒褐色土。軟性。ロームブロック僅含。
48．暗褐色土。軟性。褐色土を主とし、ローム層混る。
49．黒褐色土。砂質。ロームブロック混入。軟性。
50．暗橙色土。ローム層を主とし、黒色土混る。ＦＰを一部僅含。
51．暗褐色土。軟性。ローム層を主とし、黒色土混る。
52．黒褐色土。軟性。ＦＰとローム粒含。ローム漸移と黒色土混。
53．暗黄色土。軟性。ローム層を主とする。ＦＰ含む。



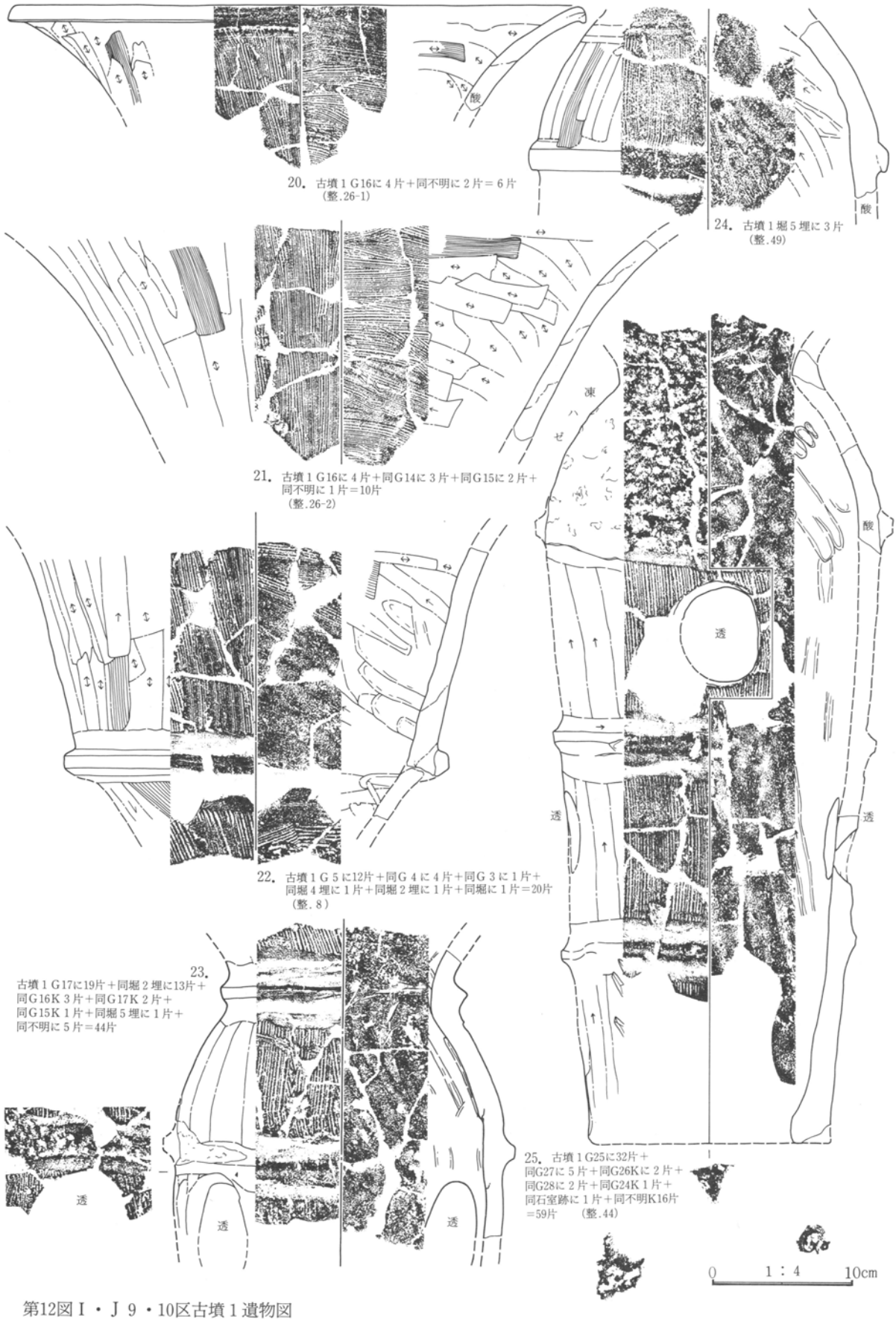
0　1：60　2 m

1．黒色土。Ｂ軽石を含む。砂質でよく締まる。
2．黒色土。汚れたＢＰを含む。１層同様軽いがやや明るい土色。
3．黒褐色土。やや締まる。ＢＰ若干。
4．黒褐色土。軟質土。ＦＰ若干。粒性ややあり。
5．黒褐色土。３層に似る。よく締まる。ＦＰ一部僅含。ＢＰ少含。
6．黒褐色土。軟性。ＦＰ粒多含。
7．暗褐色土。軽石少含。締まる。
8．暗褐色土。軽石少含。ＦＰ一部僅含。軟性。
9．黒褐色土。ＦＰ含。軟性。
10．暗黄色土。ローム層を主とする。
11．暗黄色土。軽石含む。ローム層を主とする。軟性。ロームブロック少含。
12．暗黄色土。ローム層を主とするが、11層より土色は黒い。軟性。

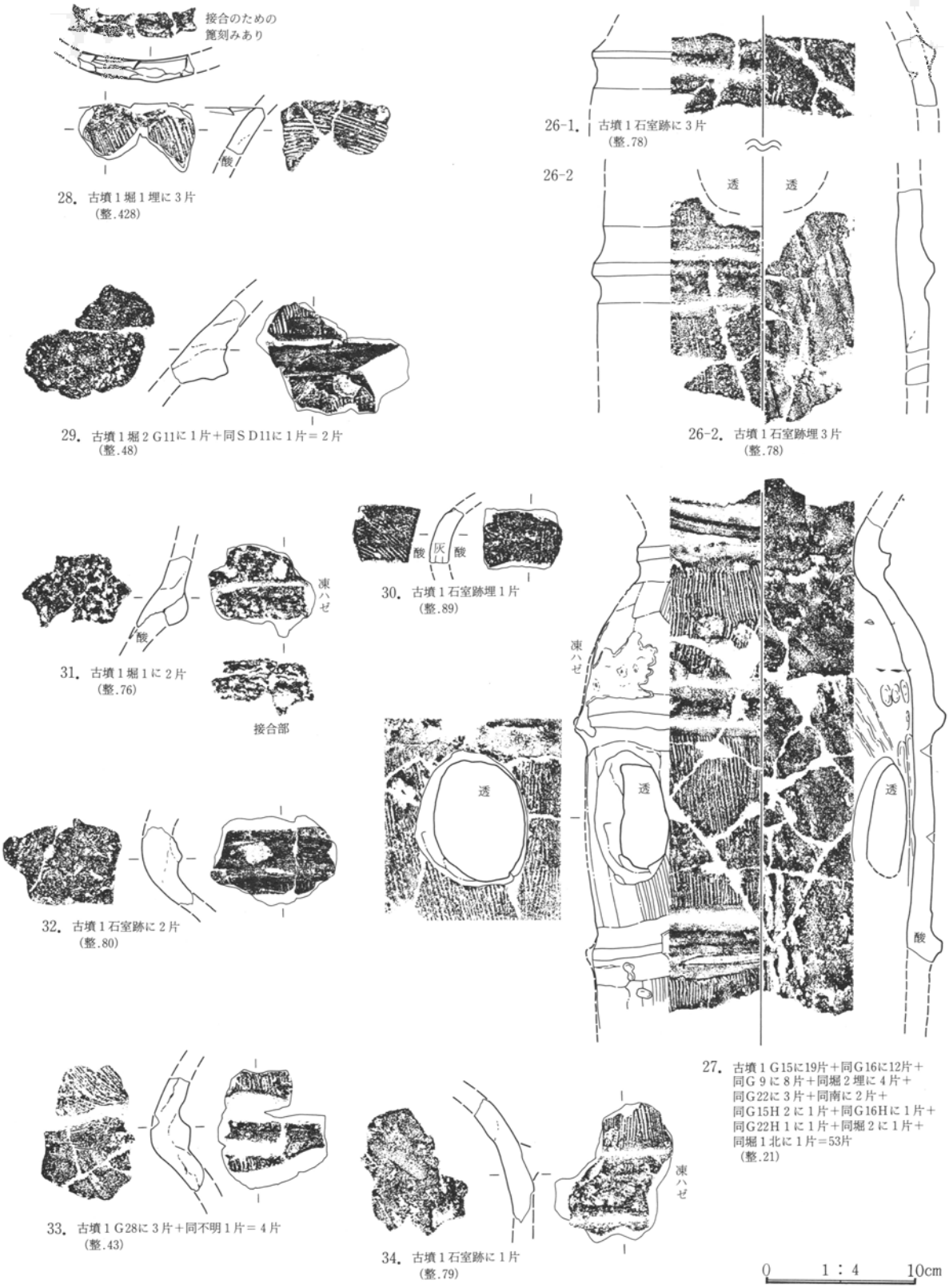
第10図Ｉ・Ｊ９・10区古墳１土層断面図



第11図Ⅰ・J 9・10区古墳1遺物図

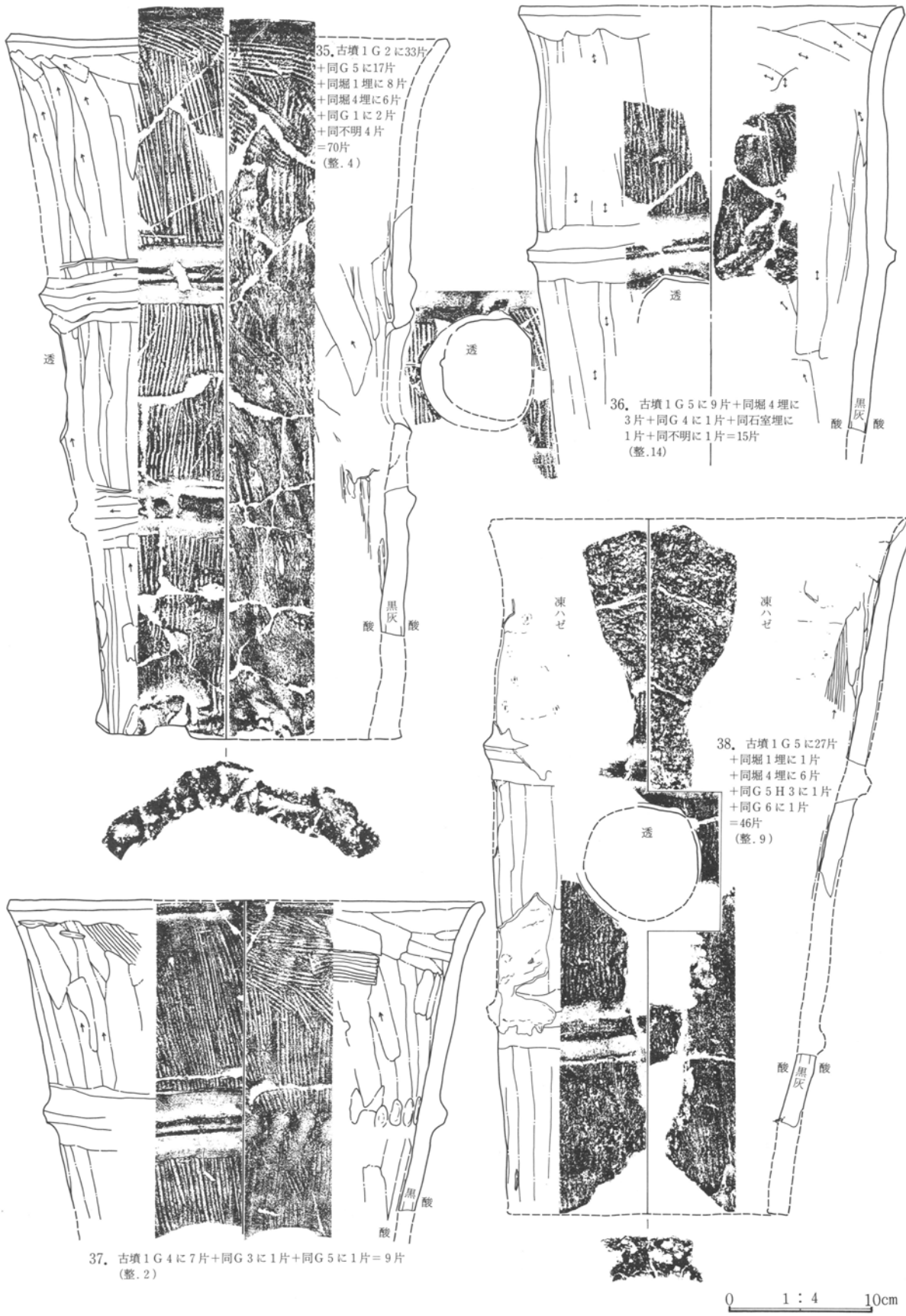


第12図Ⅰ・J 9・10区古墳1遺物図

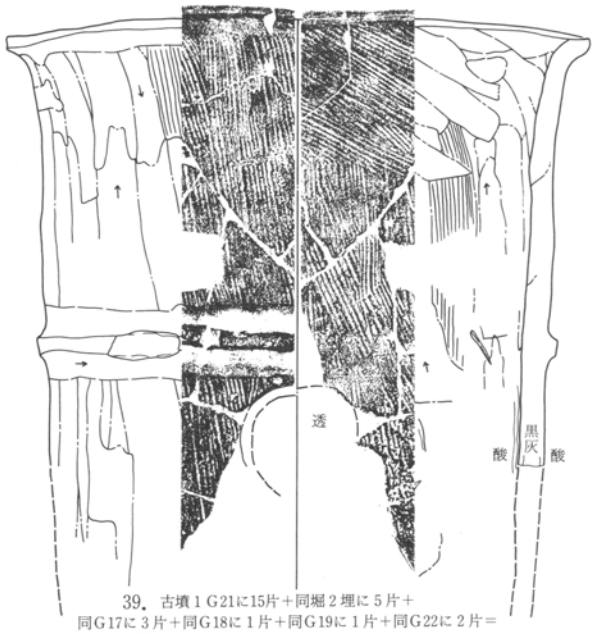


朝顔型の埴輪は、古墳1の埴輪全体からすると、胎土はやや重く、夾雑鉱物をいく分まじえ、生地の粘土の状態がやや硬目であったことを思わせる特徴がある。しかし、それは、強烈な特徴ではなく、円筒埴輪として明らかな個体中にも、その特徴をもつ個体が少量、存在する。したがって円筒埴輪とした破片個体中にも多くの朝顔型の破片が入っていると考えられる。

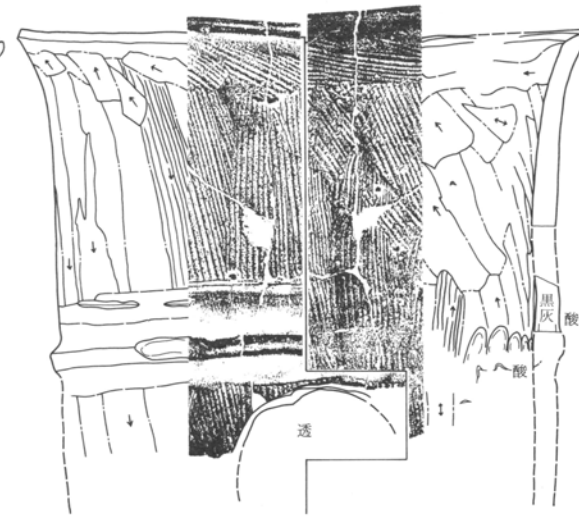
第13図Ⅰ・J 9・10区古墳1遺物図



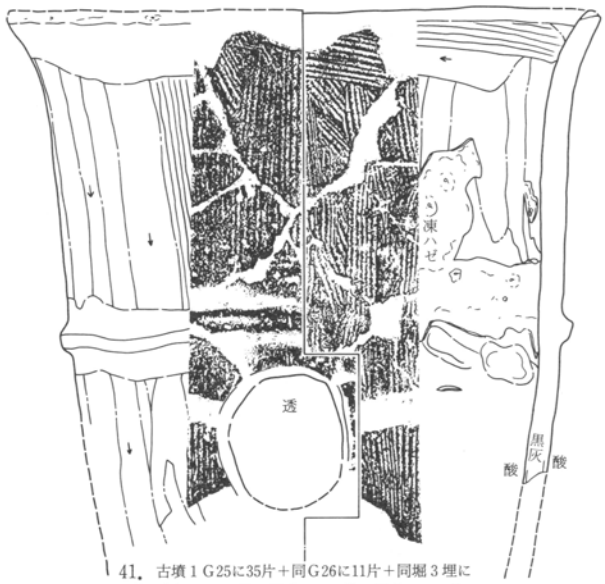
第14図　Ｉ・Ｊ９・10区古墳１遺物図



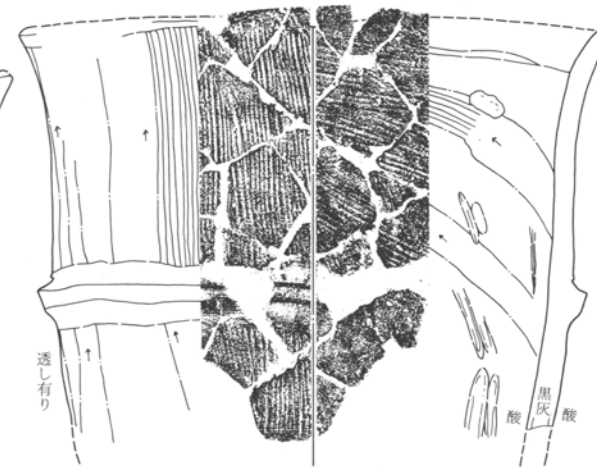
39. 古墳１Ｇ21に15片＋同堀２埋に５片＋
同Ｇ17に３片＋同Ｇ18に１片＋同Ｇ19に１片＋同Ｇ22に２片＝
27片　（整.32）



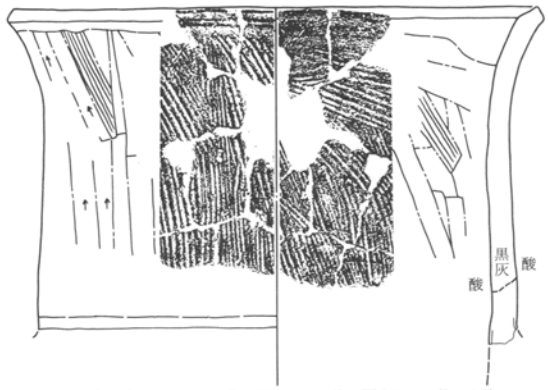
40. 古墳１Ｇ１に24片＋同堀１埋に４片＋同不明１＝29片
（整.１）



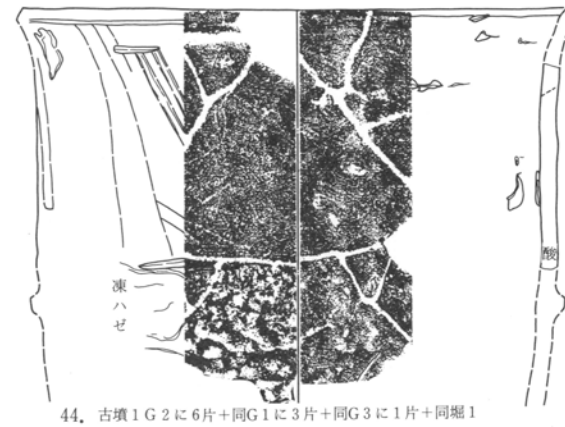
41. 古墳１Ｇ25に35片＋同Ｇ26に11片＋同堀３埋に
10片＋同Ｇ１に７片＋同Ｇ31に１片＋同Ｇ23に１片＋
同Ｇ27に１片＋同堀３耕に１片＋同不明に１片＝68片（整.40）



42. 古墳１Ｇ21に15片＋同Ｇ22に７片＋同堀３埋に７片
＋同Ｇ20に１片＋同不明に13片＝43片
（整.31）



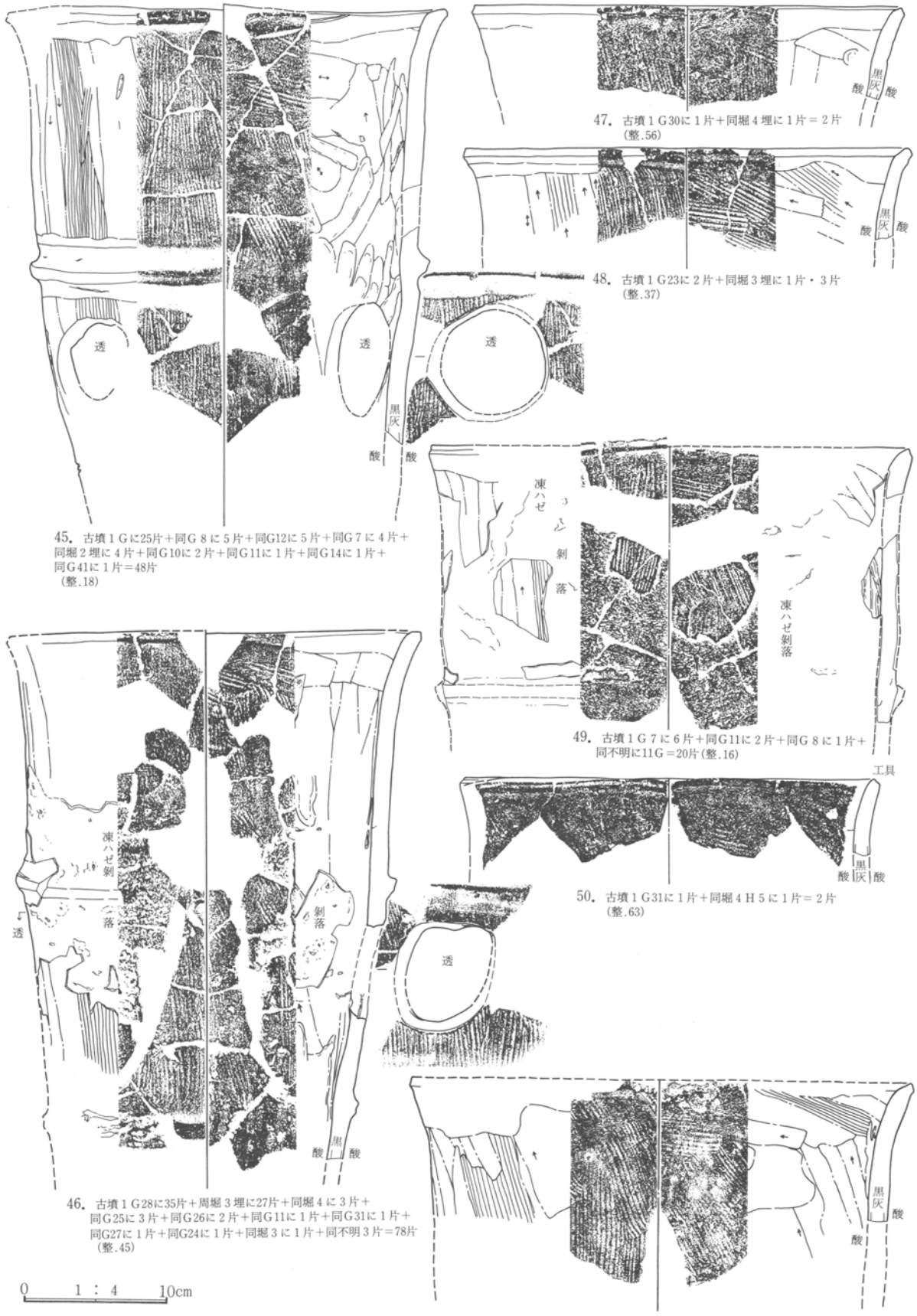
43. 古墳１Ｇ25に６片＋同Ｇ26に２片＋同Ｇ23に１片＝９片
（整.50）



44. 古墳１Ｇ２に６片＋同Ｇ１に３片＋同Ｇ３に１片＋同堀１
に１片
＋同堀４に１片＋同Ｇ５に１片＝13片
（整.５）

0　1：4　10cm

第15図　Ｉ・Ｊ９・10区古墳１遺物図



45. 古墳１Ｇに25片＋同Ｇ８に５片＋同G12に５片＋同Ｇ７に４片＋同堀２埋に４片＋同Ｇ10に２片＋同Ｇ11に１片＋同Ｇ14に１片＋同Ｇ41に１片＝48片（整.18）

46. 古墳１Ｇ28に35片＋周堀３埋に27片＋同堀４に３片＋同Ｇ25に３片＋同Ｇ26に２片＋同Ｇ11に１片＋同Ｇ31に１片＋同G27に１片＋同G24に１片＋同堀３に１片＋同不明３片＝78片（整.45）

47. 古墳１Ｇ30に１片＋同堀４埋に１片＝２片（整.56）

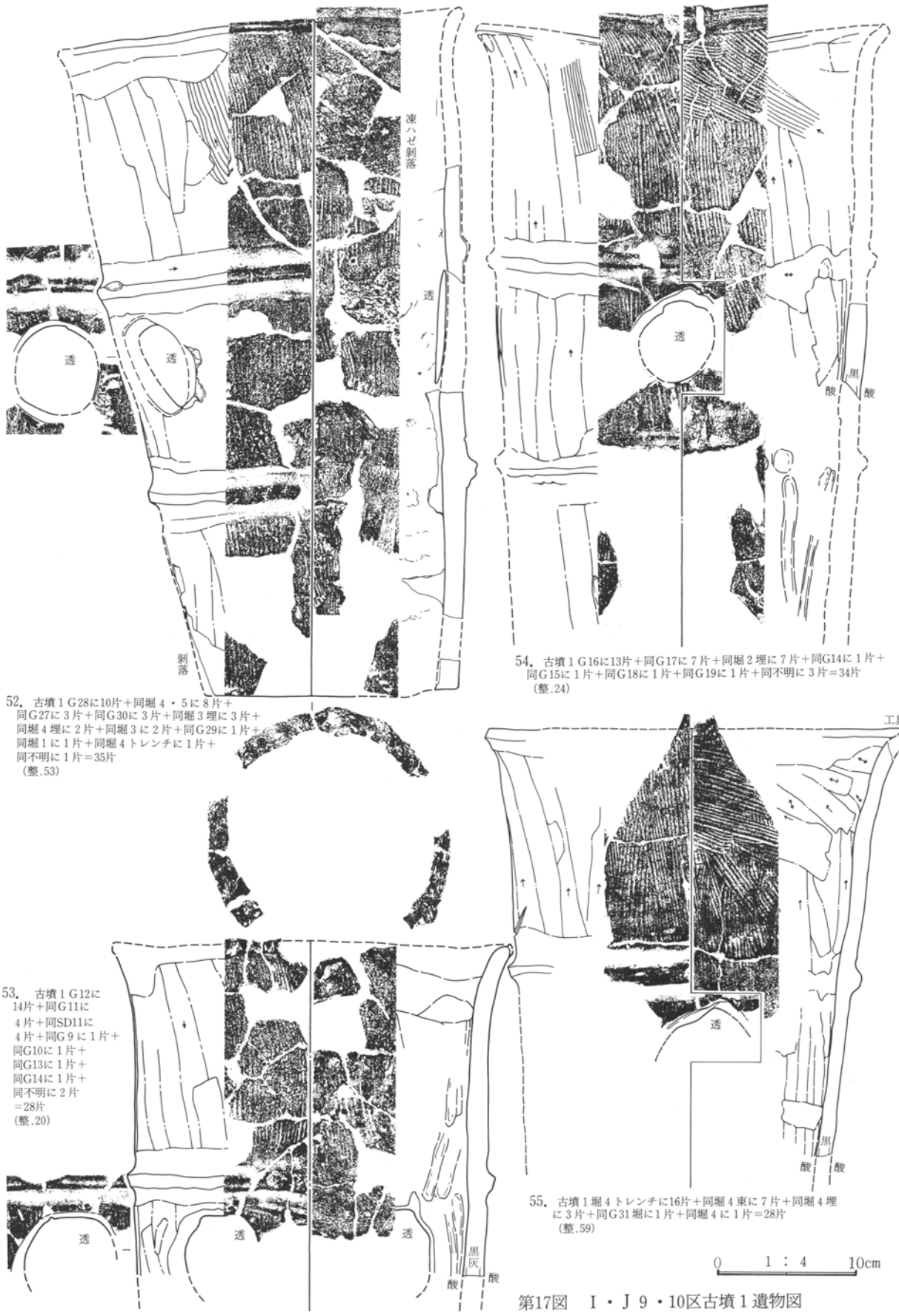
48. 古墳１Ｇ23に２片＋同堀３埋に１片・３片（整.37）

49. 古墳１Ｇ７に６片＋同Ｇ11に２片＋同Ｇ８に１片＋同不明に11Ｇ＝20片（整.16）

50. 古墳１Ｇ31に１片＋同堀４Ｈ５に１片＝２片（整.63）

51. 古墳１Ｇ16に３片＋同Ｇ17に１片＋同堀４トレンチに１片＝５片（整.25）

第16図　Ｉ・Ｊ９・10区古墳１遺物図



52. 古墳1G28に10片＋同堀4・5に8片＋同G27に3片＋同G30に3片＋同堀3埋に3片＋同堀4埋に2片＋同堀3に2片＋同G29に1片＋同堀1に1片＋同堀4トレンチに1片＋同不明に1片＝35片（整.53）

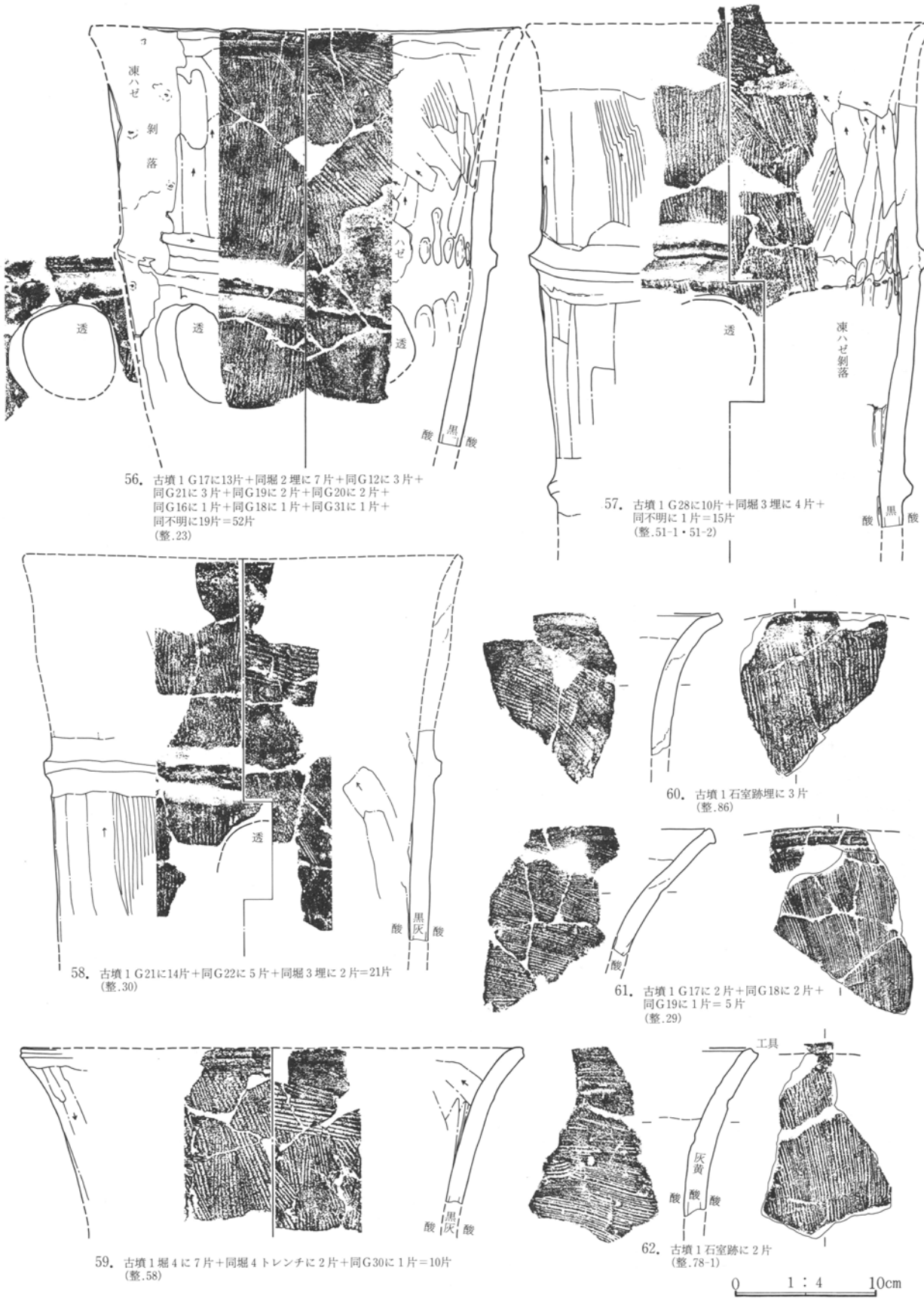
54. 古墳1G16に13片＋同G17に7片＋同堀2埋に7片＋同G14に1片＋同G15に1片＋同G18に1片＋同G19に1片＋同不明に3片＝34片（整.24）

53. 古墳1G12に14片＋同G11に4片＋同SD11に4片＋同G9に1片＋同G10に1片＋同G13に1片＋同G14に1片＋同不明に2片＝28片（整.20）

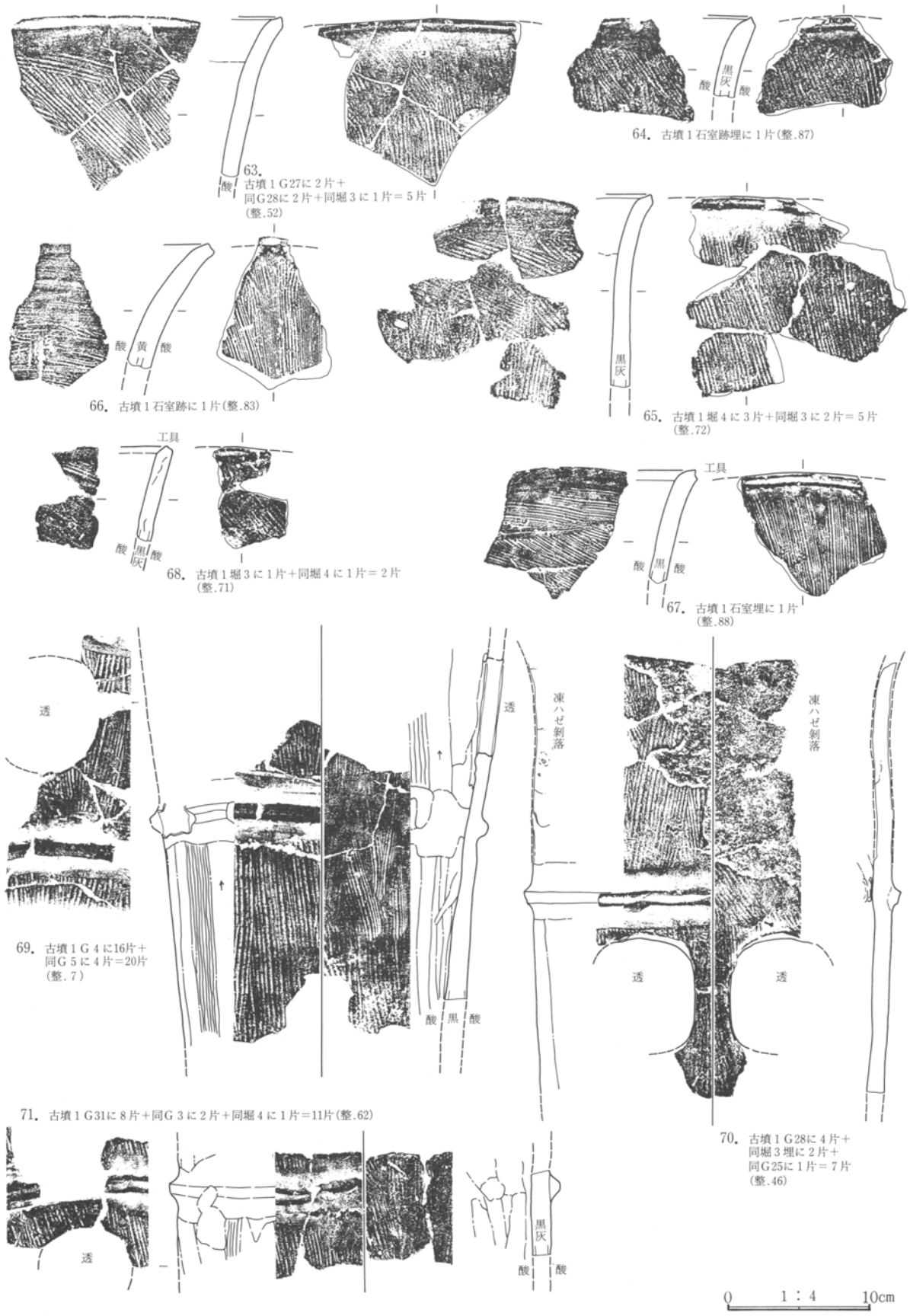
55. 古墳1堀4トレンチに16片＋同堀4東に7片＋同堀4埋に3片＋同G31堀に1片＋同堀4に1片＝28片（整.59）

0　1：4　10cm

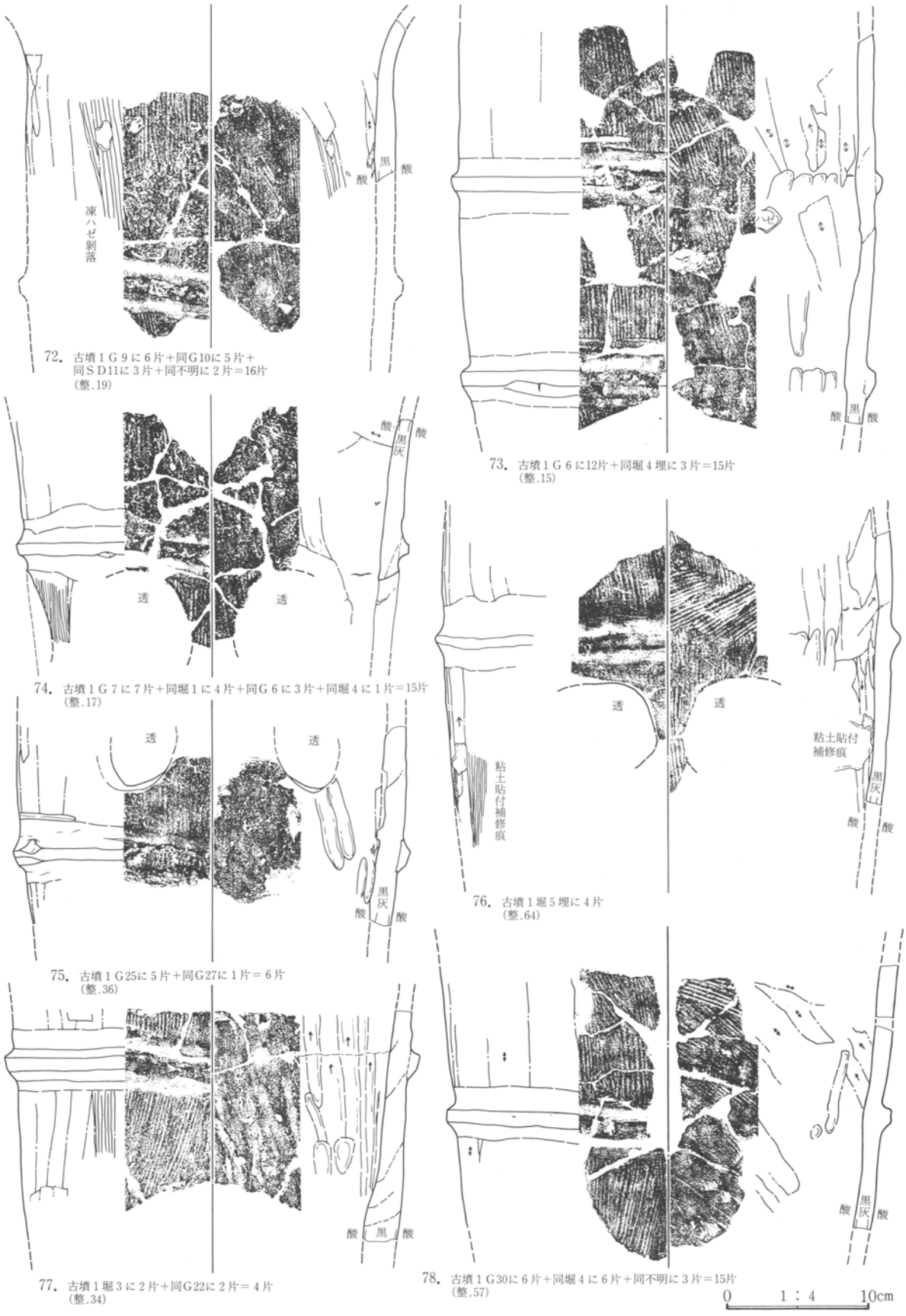
第17図　I・J9・10区古墳1遺物図



第18図　Ｉ・Ｊ９・10区古墳１遺物図



第19図　I・J 9・10区古墳1遺物図



72. 古墳１Ｇ９に６片＋同Ｇ10に５片＋同ＳＤ11に３片＋同不明に２片＝16片（整.19）

73. 古墳１Ｇ６に12片＋同堀４埋に３片＝15片（整.15）

74. 古墳１Ｇ７に７片＋同堀１に４片＋同Ｇ６に３片＋同堀４に１片＝15片（整.17）

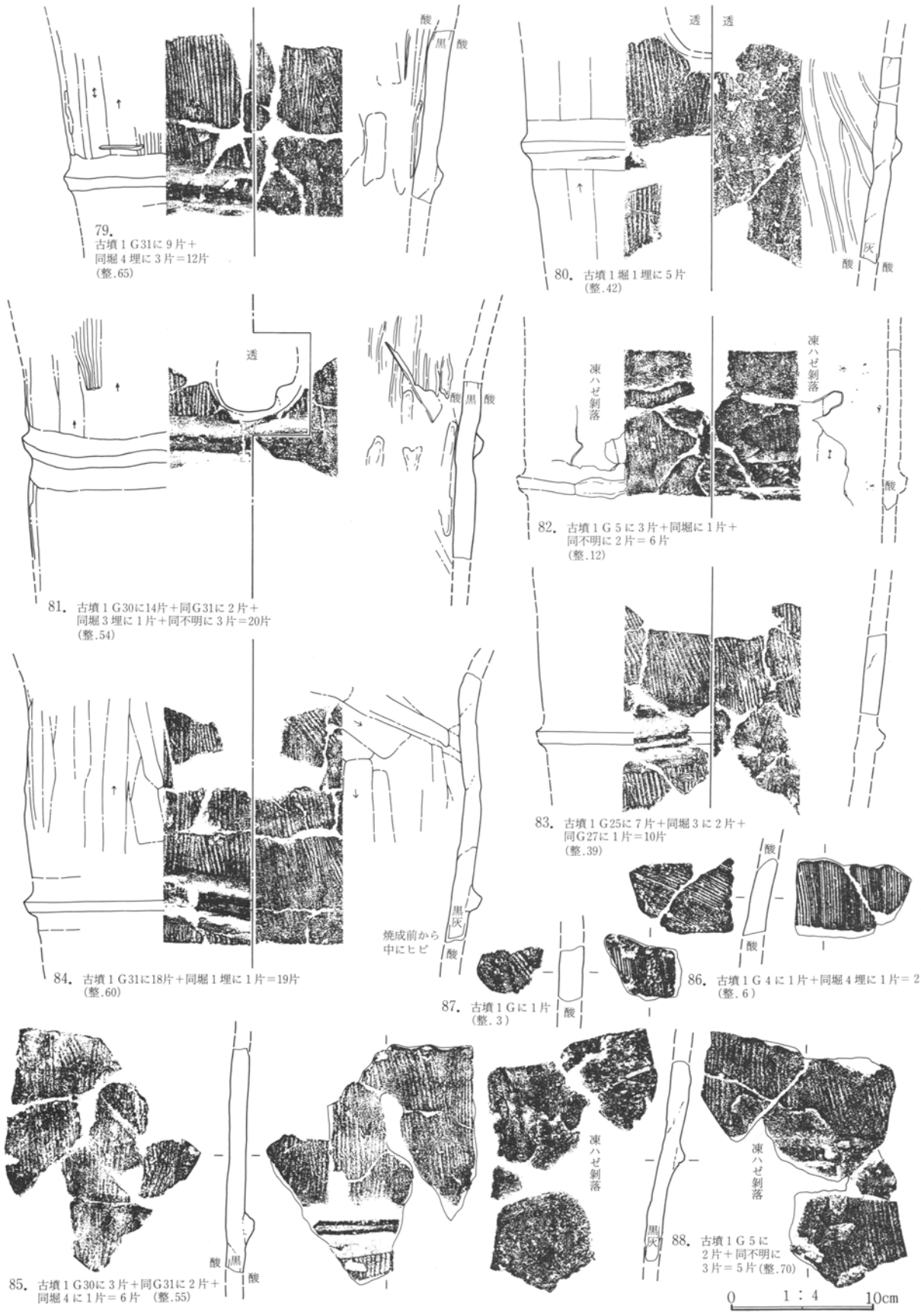
75. 古墳１Ｇ25に５片＋同Ｇ27に１片＝６片（整.36）

76. 古墳１堀５埋に４片（整.64）

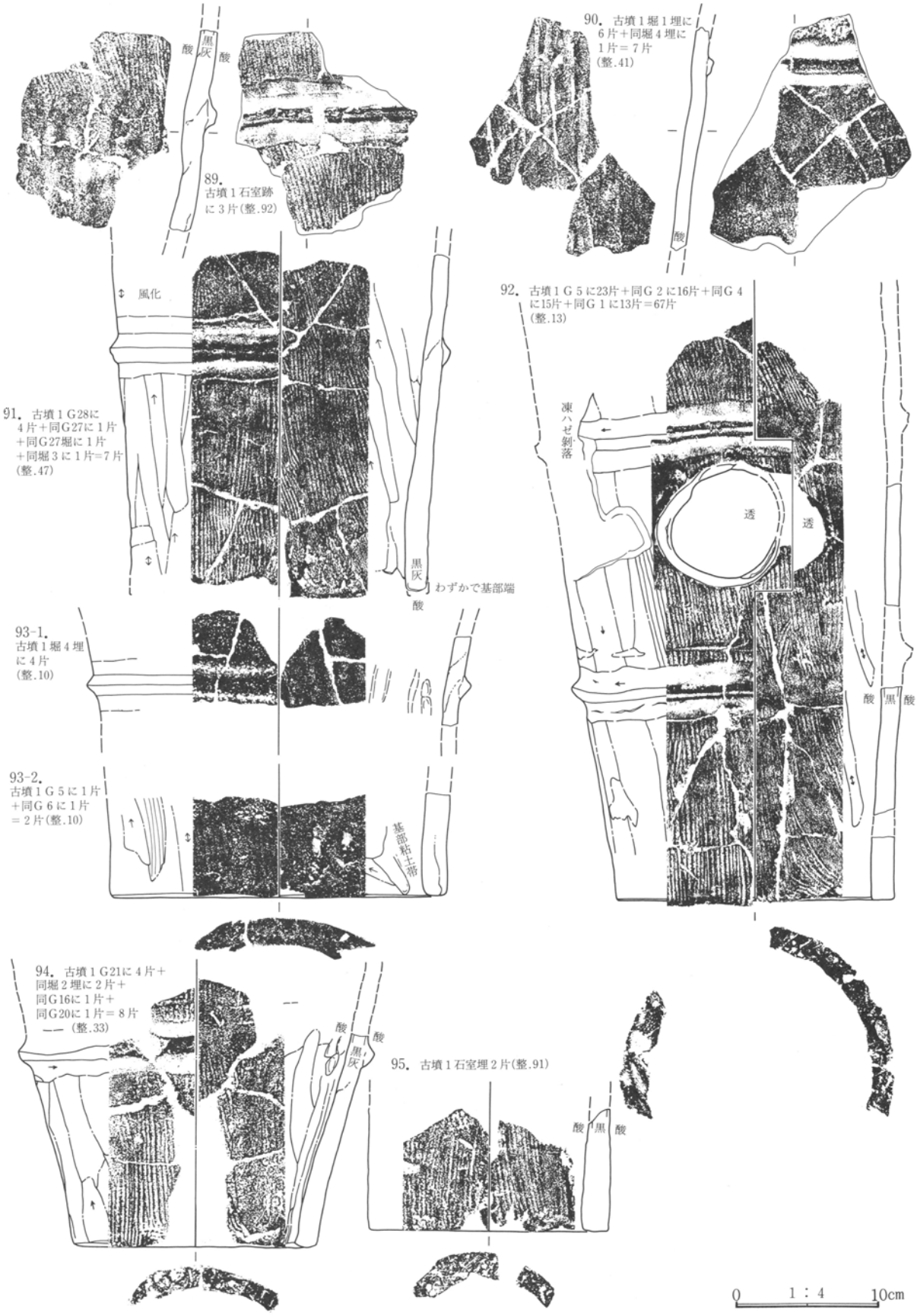
77. 古墳１堀３に２片＋同Ｇ22に２片＝４片（整.34）

78. 古墳１Ｇ30に６片＋同堀４に６片＋同不明に３片＝15片（整.57）

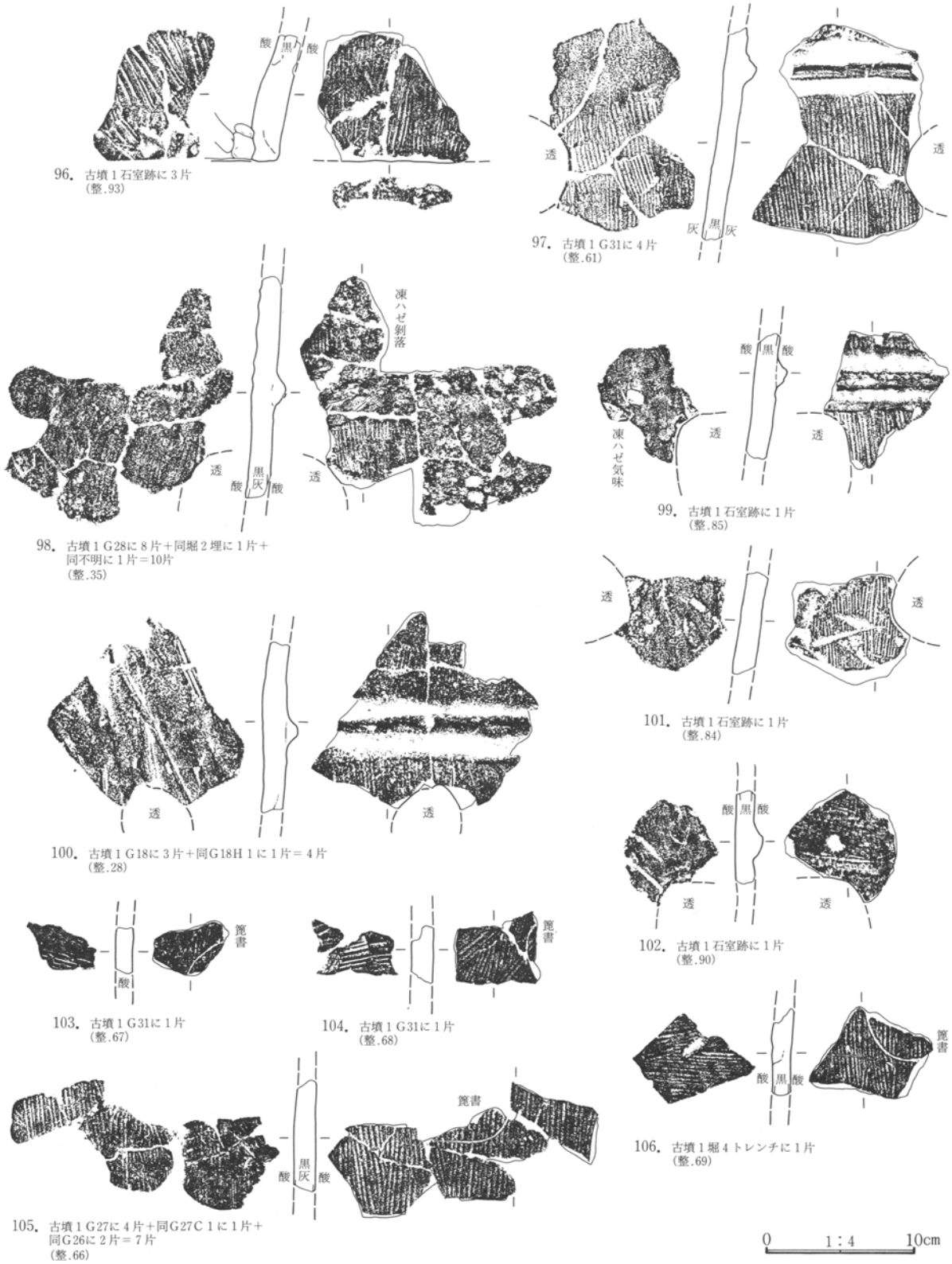
第20図　Ｉ・Ｊ９・10区古墳１遺物図



第21図　I・J 9・10区古墳1遺物図

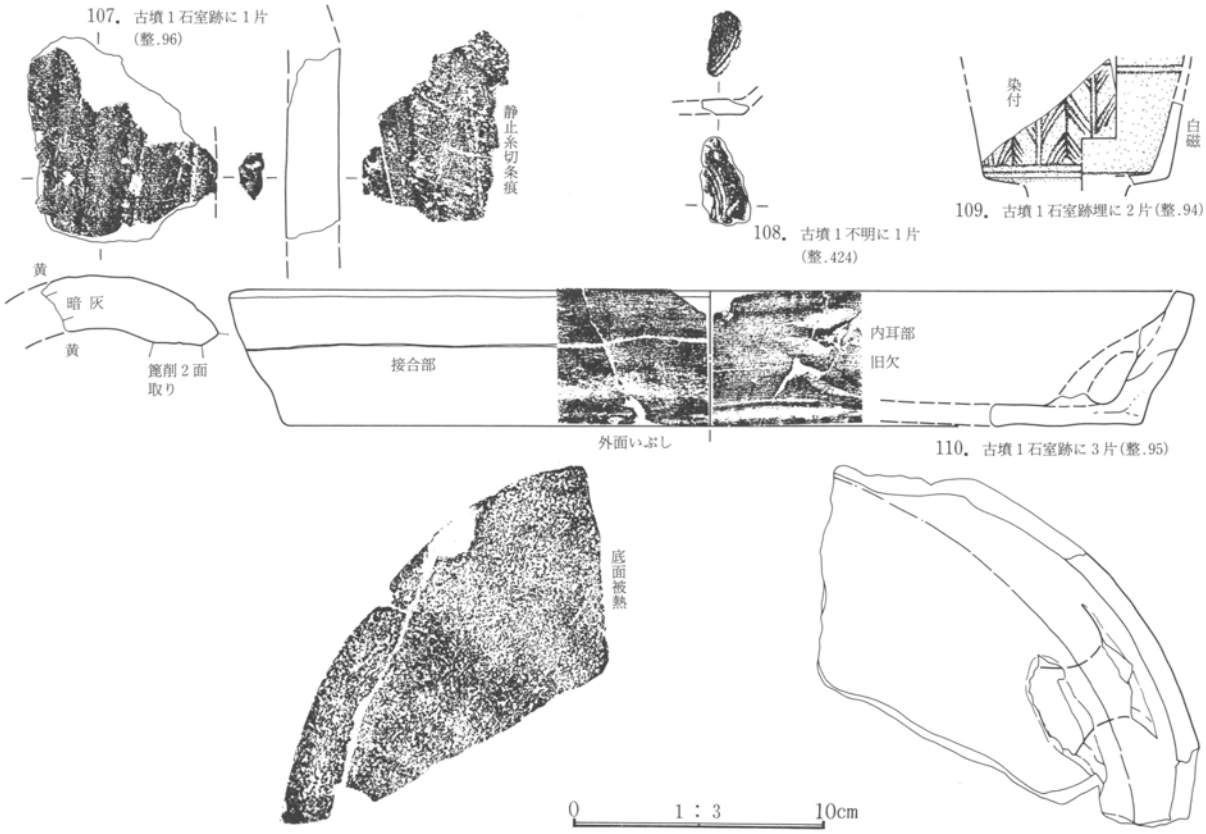


第22図　I・J 9・10区古墳1遺物図



本図は、破片中に見られる篦記号を4点扱った。篦記号を認める際の基準は、使用された工具の先端が尖り、断面V字状を呈するか否かによったが、このほかの破片中に、しばしば、製作時に使用した工具切傷がそれらしく見える個体もあったが、それは除外した。しかし、篦記号か工具傷か判別困難な小片も存在しているため、篦記号破片実数は、掲載図個体数よりも多いであろう。古墳1で使用された埴輪中の篦記号の形状は、完全形状の遺存はなく、各々部分的で、弧を描く表現がみられる。

第23図　I・J9・10区古墳1遺物図



第24図　Ｉ・Ｊ９・10区古墳１遺物図

規模　東半部は未調査のため、墳丘直径は、発見面より21.5m。帆立貝部長は約7.5m、最大幅7.5m、最少部幅5.1mを測る。周堀は最大幅で約4.1m、深さ0.6m。よって周堀＋墳丘直径＋造出し長＝33.1mを算出することができる。帆立貝形としての主軸方位は、座標北に対しおよそN12°Eを測る。

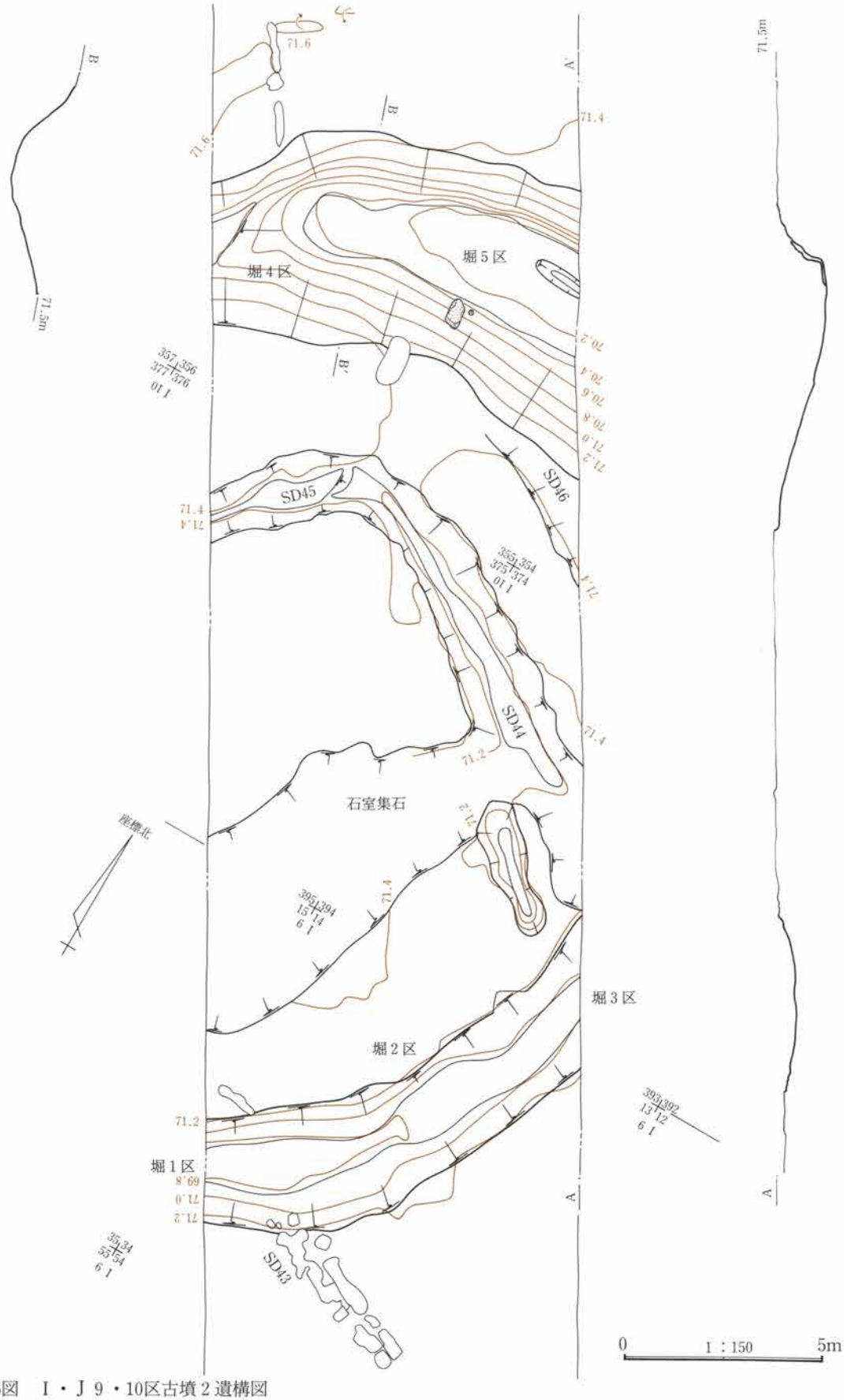
周堀　南側を掘り残す特徴があり、ほぼ近似の深さで、しかも底面に大きな落差変化を持たずに、横断面形は扁平な丸底味に設けられていた。その横断面を第10図Ｂで見ると墳丘側にやや媛く、外側にやや急な角度で掘られた様子が確認され、その傾向は造出し部を除いて同様であった。造出し部は東・西周堀端ともに急な角度であった。埋没土の状況は、黒味の強い上半の黒褐色土と下半の茶味をおびる色調に区分され、第10図注記番号１は、汚れてはいたが多量に浅間山Ｂ軽石（As－Ｂ）を含んでいた。埋土下半には榛名山二ッ岳ＦＰ（Hr－FP、６世紀中頃）を多く含む注記番号22が存在している。葺石は存在していない。

埋葬施設　調査区の東壁にかかり、近代以降と推測させる穴跡から人頭大以下の円礫、角礫を主とした用材の発見があった。埋葬施設に、その場所が接近していたとすれば、竪穴系の石室が想起される。

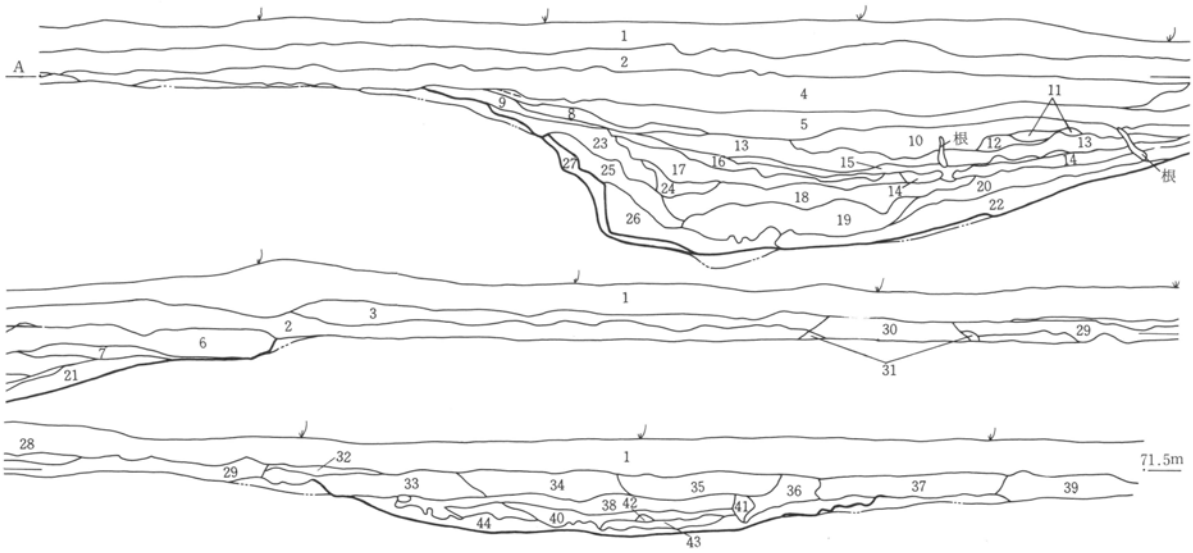
遺物　種としては、図示した110点のうち、１～６に赤彩色された個体を中心に土師器坏片が、７～19に埴輪形象があり、うち７は人物、19は大刀を思わせる。20～34まで埴輪朝顔形、35～106まで主として埴輪円筒、一部に朝顔形を含む可能性があり、107に中世男瓦、108中世土師質土器皿か、109に18世紀頃の磁器そば猪口染付か。近代焙烙を110に示した。埴輪は周堀中から大多数が出土し、密な出土状況から、朝顔形を含む円筒の墳丘囲繞が推定された。

古墳２　（第25～31図）

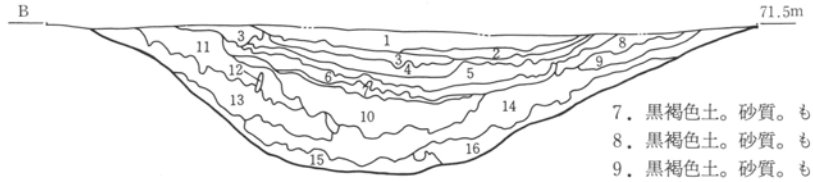
位置　Ｉ９・Ｉ10区のＩ９区14・15、Ｉ10区354・355・394～396に位置し、標高はおよそ71.4mである。



第25図　Ⅰ・Ｊ９・10区古墳２遺構図



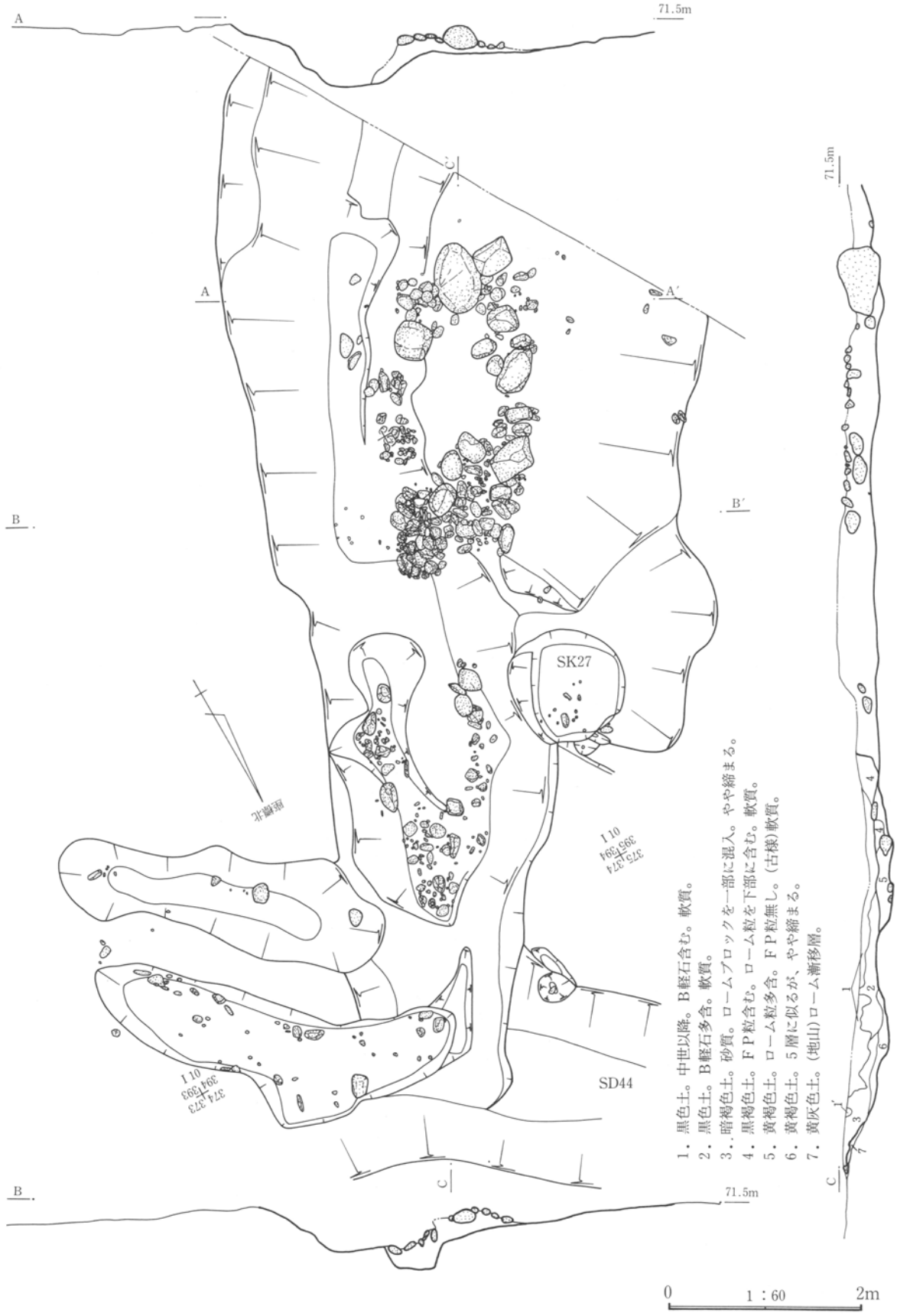
1．暗褐色土。耕作土。
2．暗褐色土。軟性。ロームブロック少含。近世以降。ＢＰ含。
3．暗褐色土。ローム粒僅含。ＢＰ含。近世以降。やや軟らか。
4．暗褐色土。砂質。締まる。ローム粒僅含。近世以降。
5．暗褐色土。やや砂質で、やや締まる。ＢＰ含む。
6．暗褐色土。砂質。締まる。ローム粒僅含。
7．暗褐色土。砂質。６層に似るがやや軟らかい。
8．暗褐色土。砂質。もろい。
9．暗褐色土。軟性。
10．暗褐色土。砂質。やや締まる。
11．黒褐色土。砂質。もろい。
12．黒褐色土。土色は11層より明るい。軟性。
13．黒色土。軟性。ＢＰ若干。砂質。
14．黒褐色土。13層よりやや明るい。砂質。ローム粒僅含。
15．黒色土。軟性。砂質。
16．黒褐色土。砂質。もろい。ＢＰ含む。
17．黒褐色土。砂質。16層に似るが、土色はやや明るい。
18．黒色土。軟性。
19．黒色土。軟性。18層より土色は暗い。ＦＰ含む。
20．黒褐色土。軟性。ローム粒僅含。
21．暗褐色土。軟性。ローム漸移と黒色土混り。
22．黒褐色土。軟性。径１cm程の小石を僅含。
23．暗褐色土。軟性。土質は９層に似るが、ロームブロックを一部含む。
24．黒色土。軟性。18層よりやや土質は柔らかい。
25．黒褐色土。軟性。ＦＰ粒多含。
26．黒褐色土。軟性。ＦＰ粒なし。黒色土中にロームブロックを混在。
27．黒褐色土。軟性。ローム粒とロームブロック多含。やや黄味を増す。
28．暗褐色土。締まる。暗褐色土を主としロームブロック層混。
29．暗褐色土。締まる。暗褐色土を主としローム層混る。カーボン粒僅含。近世以降。
30．29層に似るが、カーボン粒はやや多い。
31．暗黄色土。やや締まる。ローム層を主とする。黒色土粒若干。
32．暗褐色土。軟性。
33．黒褐色土。軟性。暗褐色土粒多含。
34．暗褐色土。締まる。黒色土粒及びＢＰを含む。中世以降。
35．暗褐色土。36層と同じ。カーボン僅含。
36．暗褐色土。やや締まる。ローム粒僅含。黒色土粒僅含。
37．暗褐色土。締まる。39層に似るが、ロームブロックは少ない。
38．黒色土。軟性。ＦＰ粒僅含。
39．黒褐色土。軟性。ローム粒若干。
40．黒色土。軟性。ＦＰ粒多含。ローム粒若干。
41．暗褐色土。軟性。ローム粒若干。
42．黒褐色土。軟性。黒色土中にローム層ブロック入る。
43．黒褐色土。軟性。ＦＰ粒含むローム粒下部に凝集若干。
44．暗褐色土。軟性。ローム漸移と黒色土混。



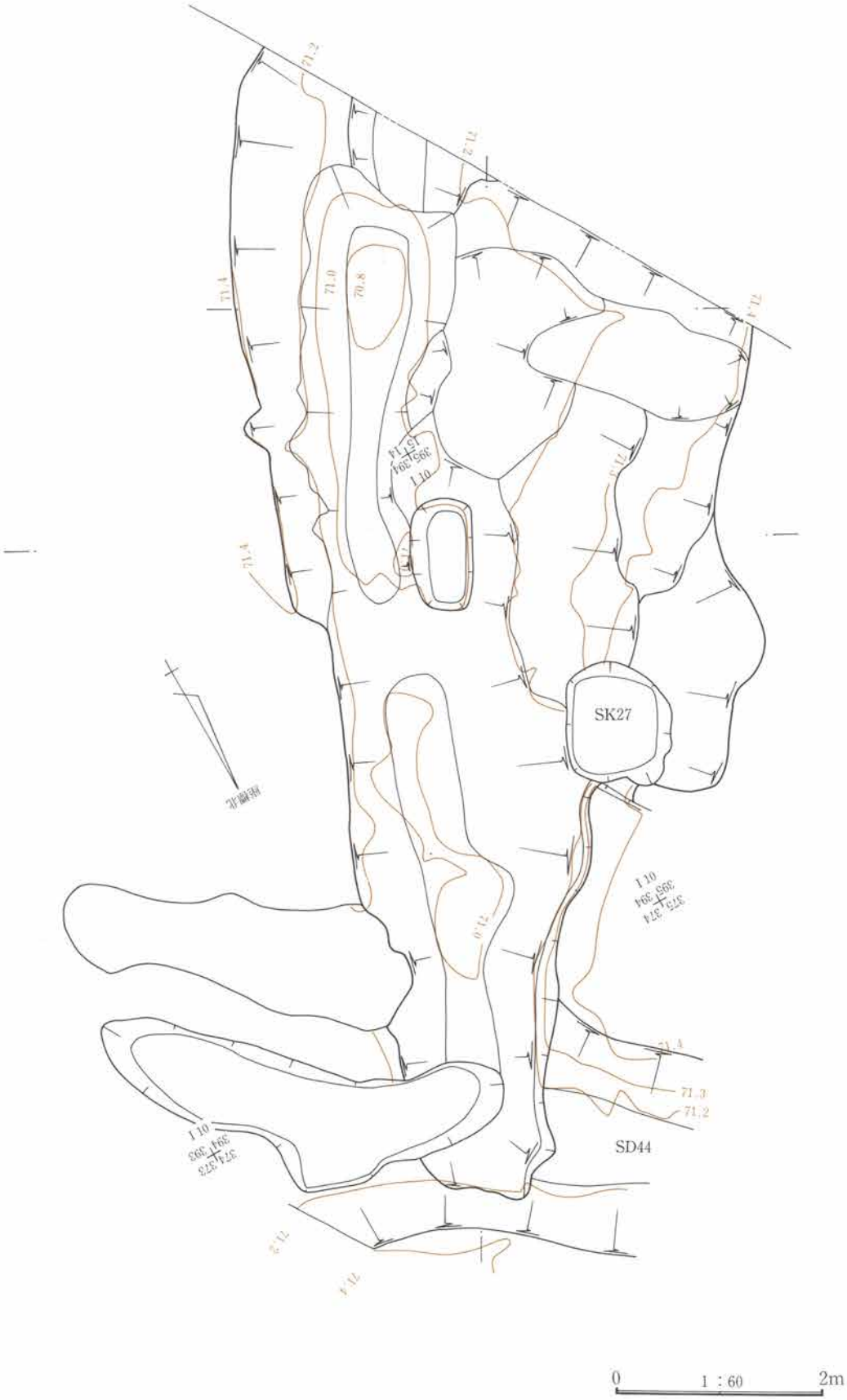
1．暗褐色土。やや砂質。やや締まる。古墳２の東壁(上図)の５層に対応。
2．黒褐色土。砂質。やや締まる。
3．黒褐色土。砂質。もろい。
4．黒褐色土。砂質。もろい。５層より土色はやや明るい。
5．黒褐色土。砂質。ローム粒一部僅含。もろい。
6．黒褐色土。砂質。もろい。４層に似る。
7．黒褐色土。砂質。もろい。ＢＰで含む。
8．黒褐色土。砂質。もろい。ロームブロックを一部含む。
9．黒褐色土。砂質。もろい。８層よりやや黄味を増す。
10．黒色土。軟性。ＦＰ少含。
11．黒褐色土。軟性。ＦＰ少含。
12．黒色土。軟性。ＦＰ少含。10層より軟かい。
13．暗褐色土。軟性。ＦＰ少含。ローム粒僅含。
14．黒褐色土。軟性。ロームブロック混入。ＦＰ多含。
15．暗黄色土。軟性。ＦＰなし(古様)
16．暗褐色土。軟性。ローム層を主とし、黒色土混る。

0　1：60　2m

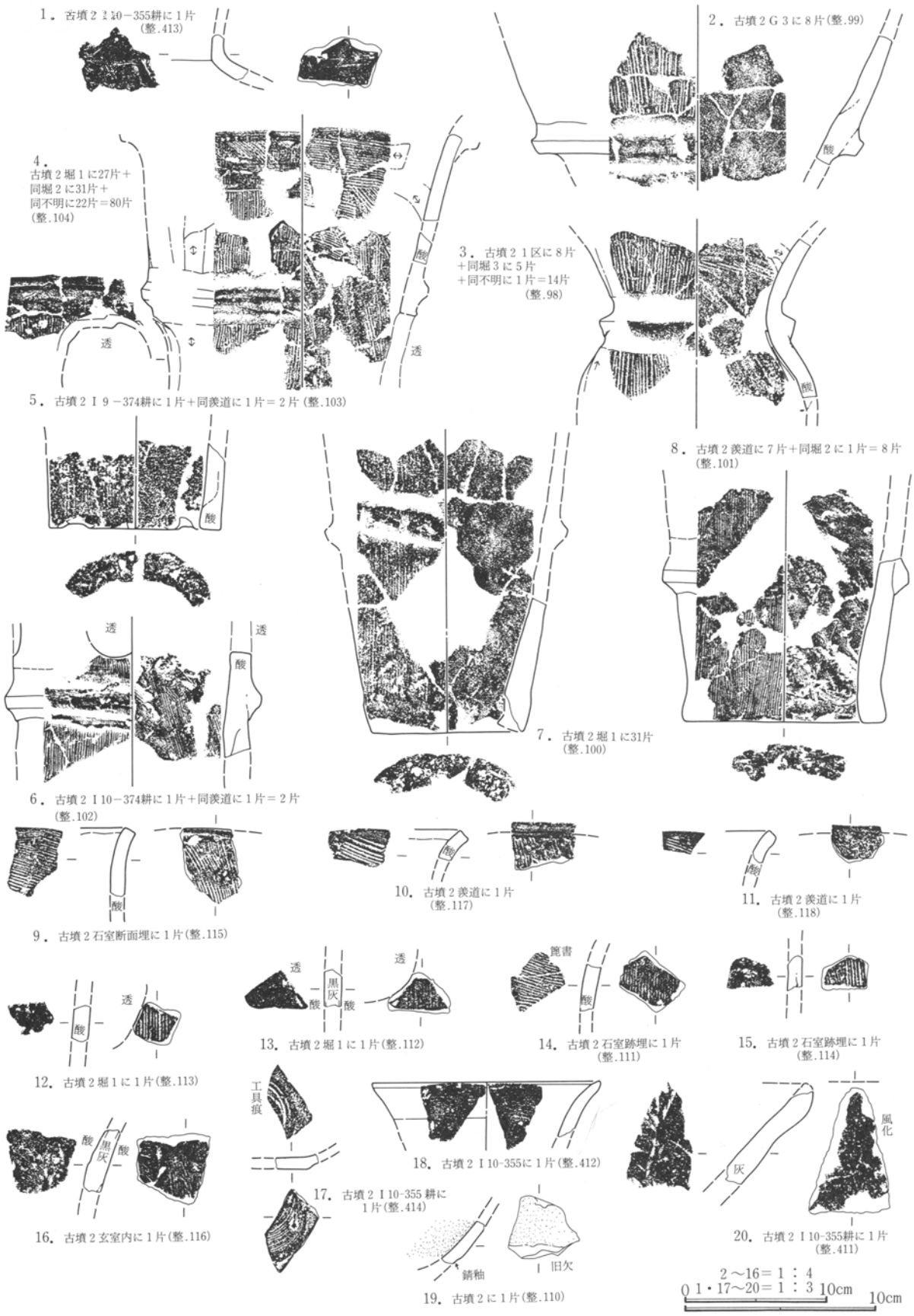
第26図　Ｉ・Ｊ９・10区土層断面図



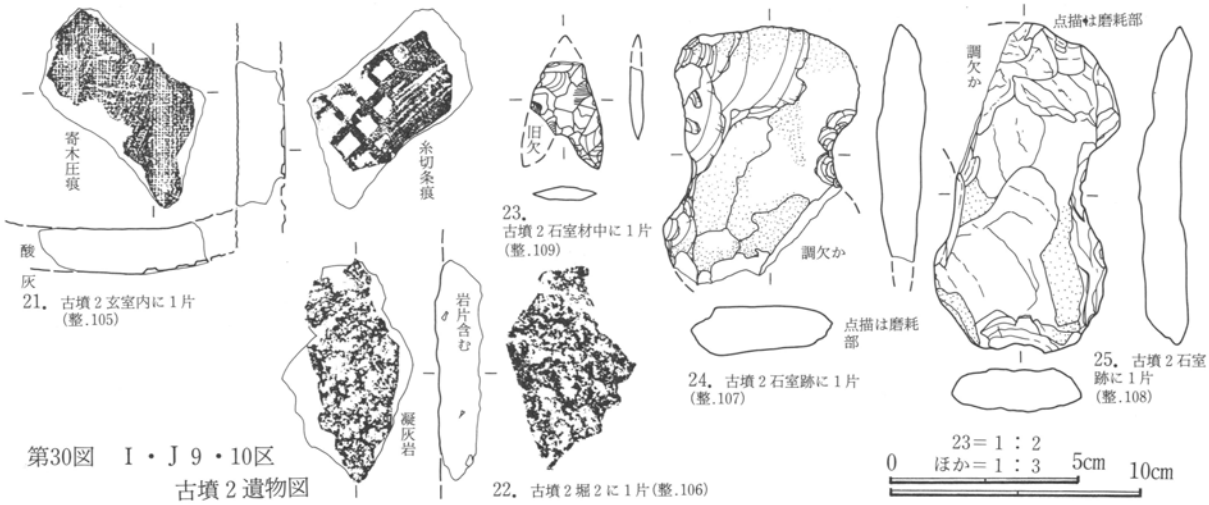
第27図　Ｉ・Ｊ９・10区古墳２遺構図



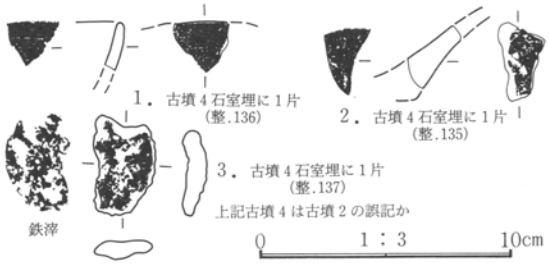
第28図　Ⅰ・Ｊ９・10区古墳２遺構図



第29図　Ｉ・Ｊ９・10区古墳２遺物図



第30図　Ⅰ・Ｊ９・10区
古墳２遺物図



第31図　Ⅰ・Ｊ９・10区古墳４遺物図

重複　南側でＳＤ43、東側でＳＤ46、北側でＳＤ45などと重さなるが古墳２が古い。

形状　調査範囲が限定され、西半は蛇川となる。周堀は円墳様に巡るらしき方向をとる。しかし南側周堀と北側周堀とは深さに差があり、北周堀内だけでも、西と東側で差があり、帆立貝形も考えておく必要もある。

規模　径19.5m、周堀幅2.4～６m、周堀の深さ0.5m、全長は推定の直径で約28m前後を算出することができる。墳丘盛土は一切残存していない。

周堀　前述のように底面における高低差があるものの、その方向性から南・北の周堀は接続すると推定される。周堀埋没土の状態は、第26図の下段のように、墳丘側・墳外に対し同等に近いＵ字状を呈し、部分的に同図上段を見るように、墳外側が急になる個所もあった。埋没土は、上半で黒色土味が強く、下半側で暗褐色味の強い色調となり、注記番号28に多量にFr－FPをまじえる、最上層の注記番号５以上にAs－Ｂを含む。

埋葬施設　第27・28図は、石室残骸状況である。石材中、原位置にある状態は、ほとんどなく、大石の位置が石室の小口・側壁を思わせる状況であったことからすれば石室位置は、そう離れた場所ではなかったと想起される。石材の大きさは長径約70mが最大であったこと、石材の旧位置（石室）が墳丘の中心位置にあり、石材抜き取りに際して南側に約３ｍも移動させたとは考え難いことから、墳丘中心部より南東側に寄る形で竪穴系の石室を考えたい。抜き取り穴が石室の形を反映しているとすればN20°E前後の中軸位置とも思われる。

遺物　第29～31図のとおり、土師器壺形の１、２～16に埴輪朝顔形・円筒、17・18に土師質土器皿、19に天目釉碗、20に14世紀頃の軟質陶器鉢片がある。埴輪、円筒、朝顔形は、数量が少ないこと、埋土上位の出土が多かったこと、基部の残存率が高いこと、体部上半の破片個体が少ないことなどから、墳丘における粗な囲繞は考え難く、使用されていなかった可能性が高いと考えられる。第31図は、現場注記誤記で、古墳２石室用材調査で出土の可能性が高い。

古墳３　　（第32図）

位置　Ⅰ９区70・71・90・91にある。調査面上の標高は、およそ71.0mである。

重複　小穴、浅い溝など後世の遺構が重さなる。東半は未調査他である。

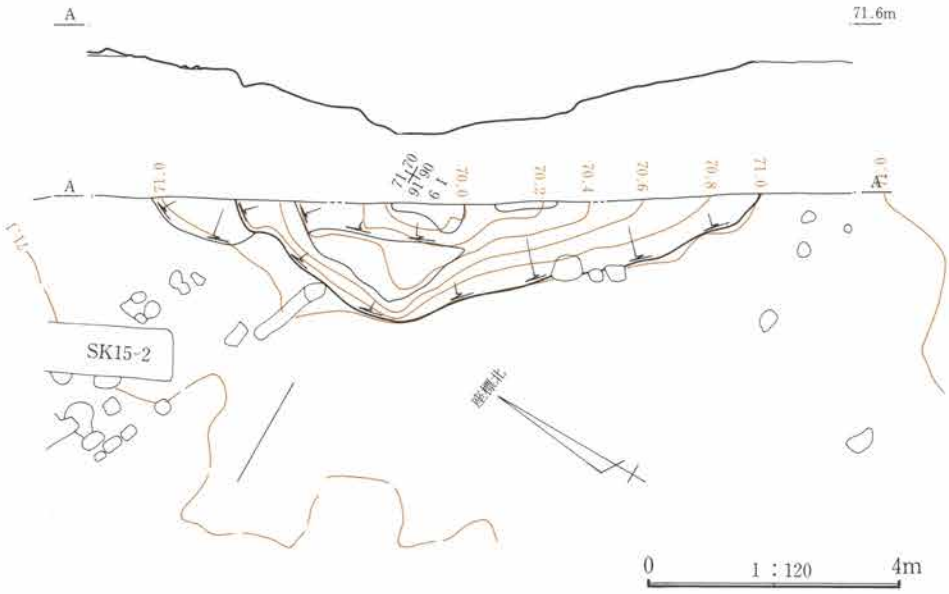
形状　周堀の西端を調査したが、大半は未調査地のため不明である。調査した周堀外縁は円弧をなす。

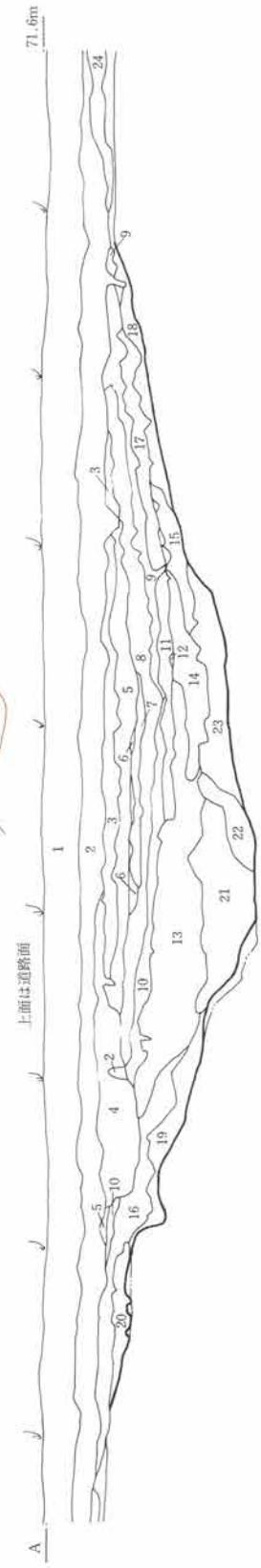
規模　周堀外縁の弧は15～16mを算出。周堀の最深部までの深さは1.2mである。

周堀　横断面は底の不揃いなU字状を呈する。埋土の中位より上方は黒色土味が強く、大方は暗褐色気味が強い。土層注記13・14にHr－FP粒入る。

埋葬施設　発見されていない。

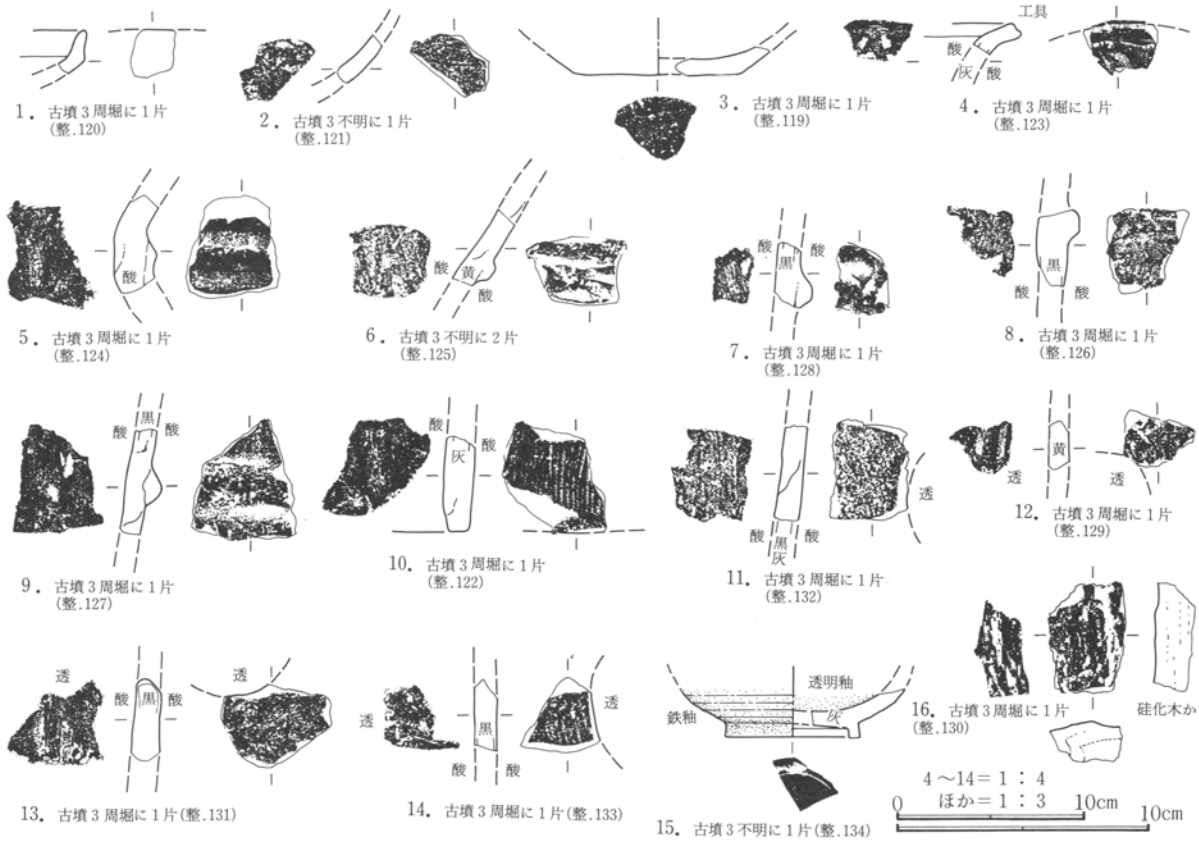
遺物　第33図に示めしたように少ない。1は土師器坏、2・3は土師質土器皿とその疑似。4～14は埴輪円筒・朝顔形、15は陶器碗片、16は硅化木様である。小域の発掘でありながら埴輪片、複数個体の出土は、埴輪使用を思わせる。





1．暗褐色土。耕作土。
2．暗褐色土。締まる。ローム粒少含、褐色土を主とし、ローム層混る。
3．暗褐色土。砂質。10層より土色は暗い。締まる。
4．暗褐色土。砂質、ローム粒僅含。黒色土粒僅含。近世以降。
5．黒褐色土。軟性。幾分砂質っぽい。ローム僅含。
6．黒褐色土。軟性。土質は5層に似るが、やや黒っぽい。
7．黒色土。砂質。もろい。
8．黒色土。やや砂質。7層より土色は黒褐色に近い。
9．暗褐色土。ローム粒僅含。軟性。
10．黒褐色土。砂質。ＢＰ含む。軟性。もろい。
11．黒褐色土。軟性。やや粘性あり。10層より土色は明るい。
12．黒褐色土。軟性。やや粘性あり。微粒ローム粒僅含。
13．黒褐色土。軟性。ＦＰ若干。ローム粒若干。
14．黒褐色土。軟性。ＦＰ若干。ローム粒若干。
15．暗褐色土。軟性。土色は黒褐色にやや近い。
16．黒褐色土。軟性。ＦＰ含む(軽石粒は13層より少ない)。
17．暗橙色土。軟性。ローム層を主とする。
18．暗褐色土。締まる。褐色土を主とし、ローム層混る。
19．暗黄色。軟性。ローム漸移と黒色土混り。
20．黒褐色土。軟性。中世以降。ＢＰを含む。土色は暗褐色に近い。
21．暗褐色土。軟性。ローム漸移と黒色土混り。ロームブロックが混じる。ＦＰ無(古様)。
22．黒褐色土。軟性。ローム粒僅含。
23．暗黄色土。軟性。ローム漸移と黒色土混り。19層に似るが、ロームを主体とする。
24．暗褐色土。砂質。近世以降。締まる。

第32図　Ｉ・Ｊ９・10区古墳３遺構図



第33図　Ｉ・Ｊ９・10区古墳３遺物図

古墳４　　(第34図)

位置　Ｉ９区92・112・132にある。調査面上の標高は約71.1mである。

重複　第34図に示めしたＳＤ39ほか細線表現の遺構は後世の所産で、ＳＤ39は同図下方の土層断面注記番号４の上面に達し、近世以降の遺構と思われる。

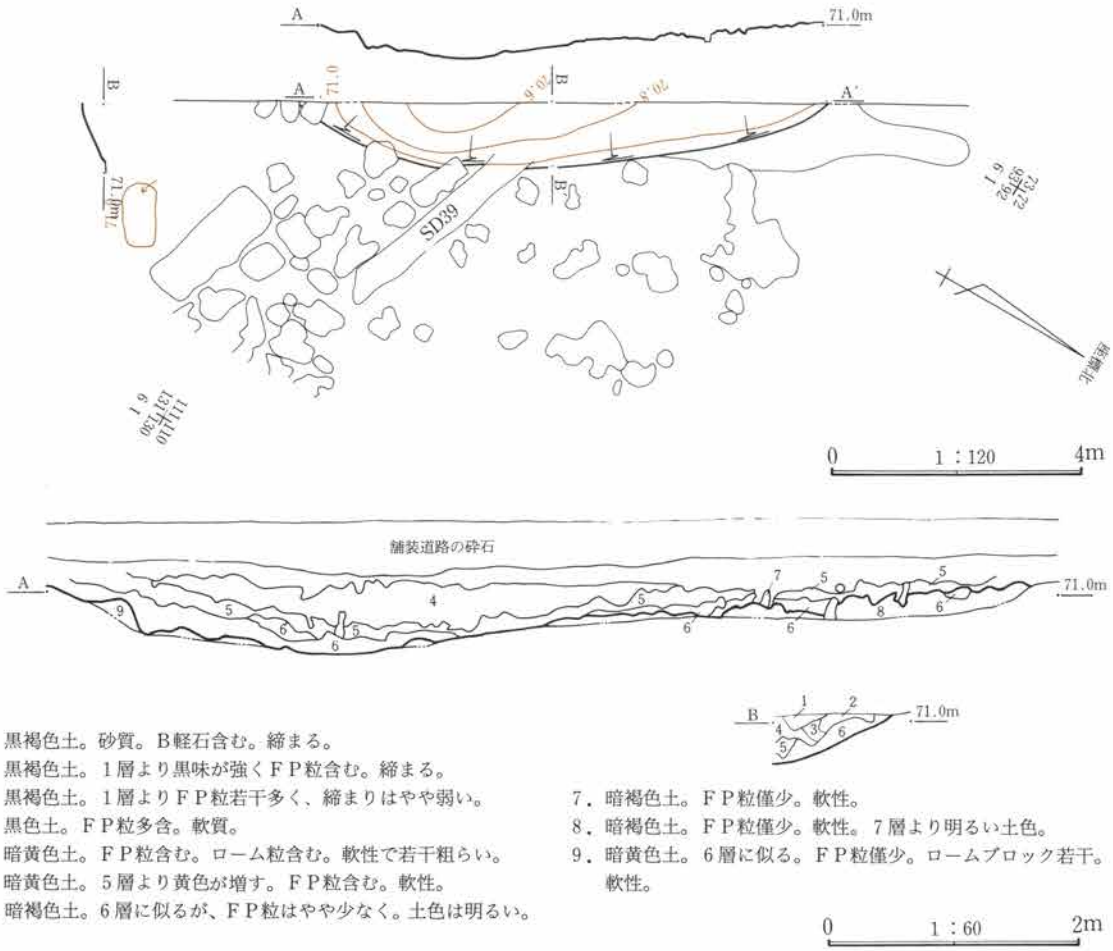
形状　同堀末端を調査したが、西方は蛇川と東武鉄道用地で墳丘形態は不明である。周堀の形状は、整った円弧を呈する。そのことからすれば、円形や帆立貝に、少なからず可能性がある。

規模　周堀外線の円弧からは、直径約19mを算出し、前出古墳３より少し大き目である。周堀幅は、0.95m＋αである。

周堀　第34図土層注記１中にある「締まる」は、舗装道路前代の道路で上層まで圧縮されている可能性がある。周堀全体が掘り上っていないためか、黒色土気味の土層量が多く、他古墳の周堀下層に多く見られる暗褐色土の層厚は薄い。土層注記４にＦｒ－ＦＰ粒は多く入り、その降下前代の築造である。横断面は、調査量が少なく、形状表現までは困難である。

埋葬施設　未調査地内に位置すると考えられるが、蛇川により失なわれた可能性がある。

遺物　取り上げた個体はない。ある程度、周堀の埋没土を掘り上げ、遺物未出の状況は、埴輪使用の有無については無に近いと云える。たとえば古墳２の周堀では、少数がまとまって、複数個所から出土しているにも係わらず、周堀埋没土下層での出土は微弱であったので、樹立に関し、否定的であった。使用古墳であるならば、ある程度の出土があって良いはずである。したがって埴輪使用の可能性は薄いと推定しておきたい。



1．黒褐色土。砂質。B軽石含む。締まる。
2．黒褐色土。1層より黒味が強くＦＰ粒含む。締まる。
3．黒褐色土。1層よりＦＰ粒若干多く、締まりはやや弱い。
4．黒色土。ＦＰ粒多含。軟質。
5．暗黄色土。ＦＰ粒含む。ローム粒含む。軟性で若干粗らい。
6．暗黄色土。5層より黄色が増す。ＦＰ粒含む。軟性。
6′．暗褐色土。6層に似るが、ＦＰ粒はやや少なく。土色は明るい。
7．暗褐色土。ＦＰ粒僅少。軟性。
8．暗褐色土。ＦＰ粒僅少。軟性。7層より明るい土色。
9．暗黄色土。6層に似る。ＦＰ粒僅少。ロームブロック若干。軟性。

第34図　Ｉ・Ｊ９・10区古墳４遺構図

古墳５　　（第35～45図）

位置　Ｉ10区238・239・258・259・248・249・274・275・276・297・298・296にある。調査上面の標高は約71.5m。

重複　北側をＳＤ47－２が、南寄りに道跡１があり、いずれも新しい。両後出遺構とも時期決定の根拠を欠くが、当遺跡の埋土としては、近世でも遡る質感であった。そのため墳丘の平夷は江戸時代らしい。

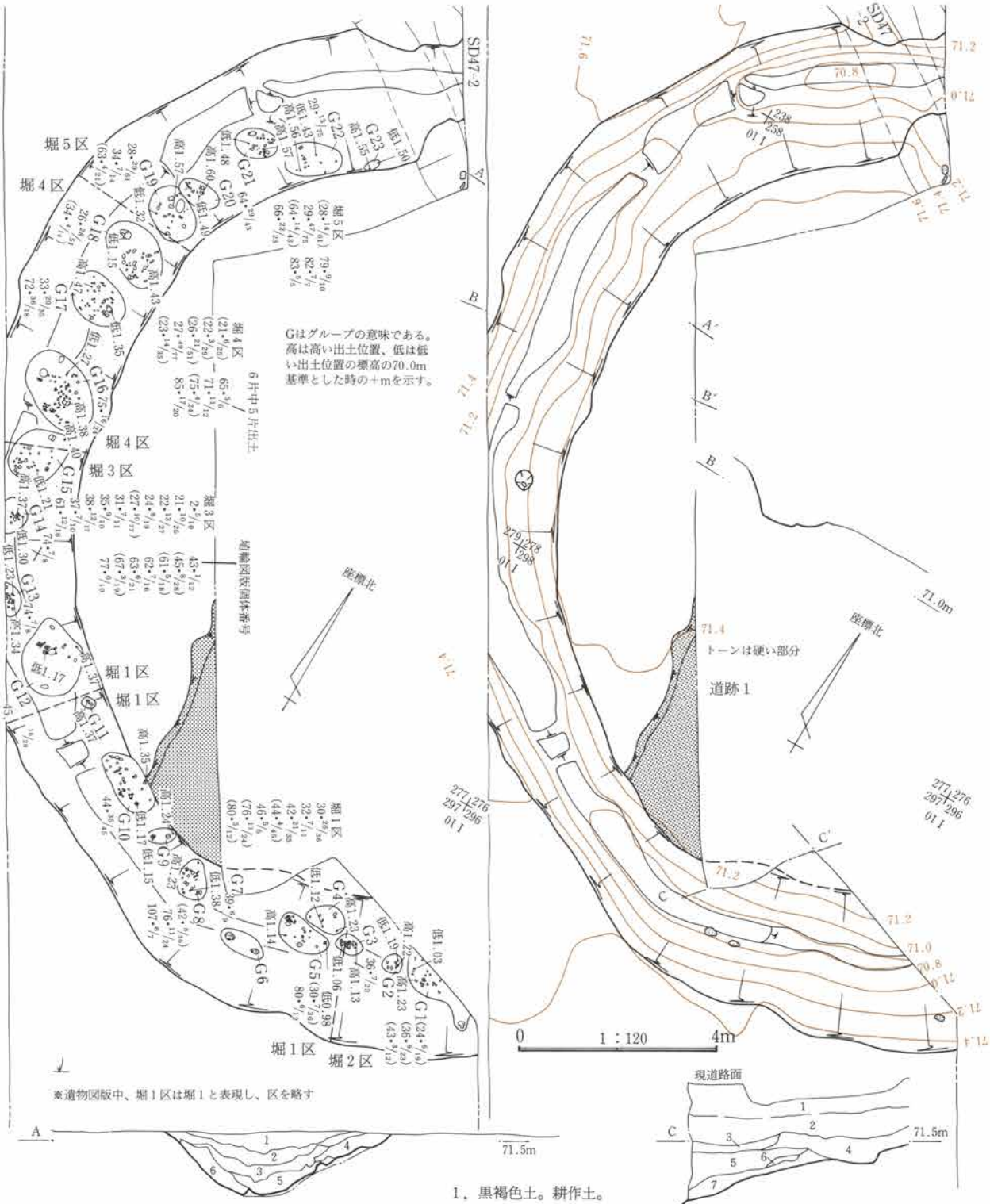
形状　東半は未調査地であり、帆立貝形の要素はあるものの、調査地内の周堀は円弧をなす。

規模　調査地内の周堀の円弧から、直径18.0mと算出され、周堀幅1.65～2.85m、深さ0.5～0.8mを測る。

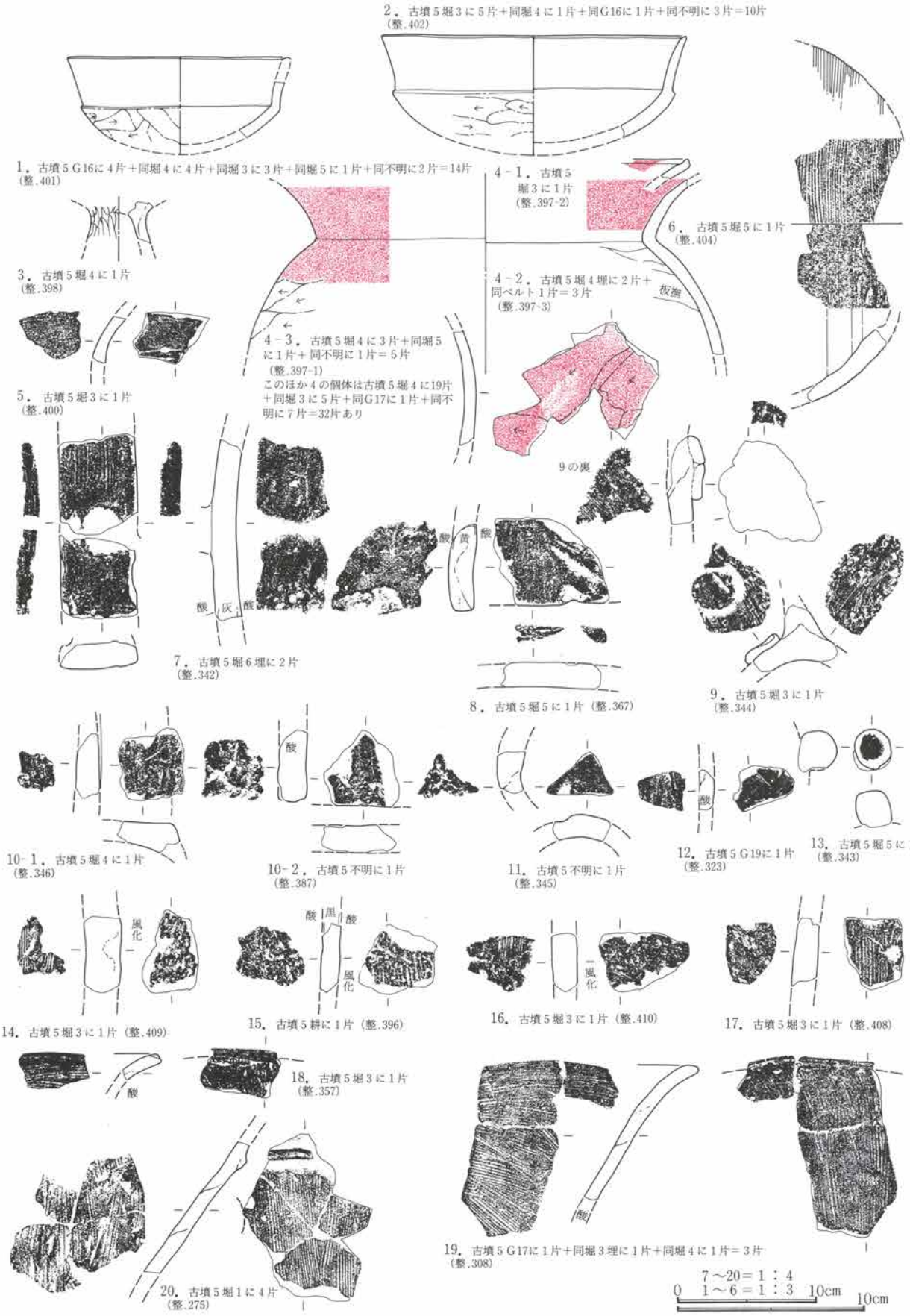
周堀　第35図に示したようにＡ・Ｂ断面の形状は、墳丘側に傾斜が浅く、墳外側が急斜となる。断面の土層の堆積は、ほぼ底成りであるが同図土層注記６の上面は周堀の堀り直しにも見え、地山であるローム層との区分が困難であった。埋土には中位下部Ｈｒ－ＦＰを多く含む土層断面注記３が存在していた。

埋葬施設　墳丘側では、石材はほとんど見られず、北西側に２m離れたＳＫ25内に大形石材が発見されたが、本墳の石質材かは、古墳７にも接するため不明である。

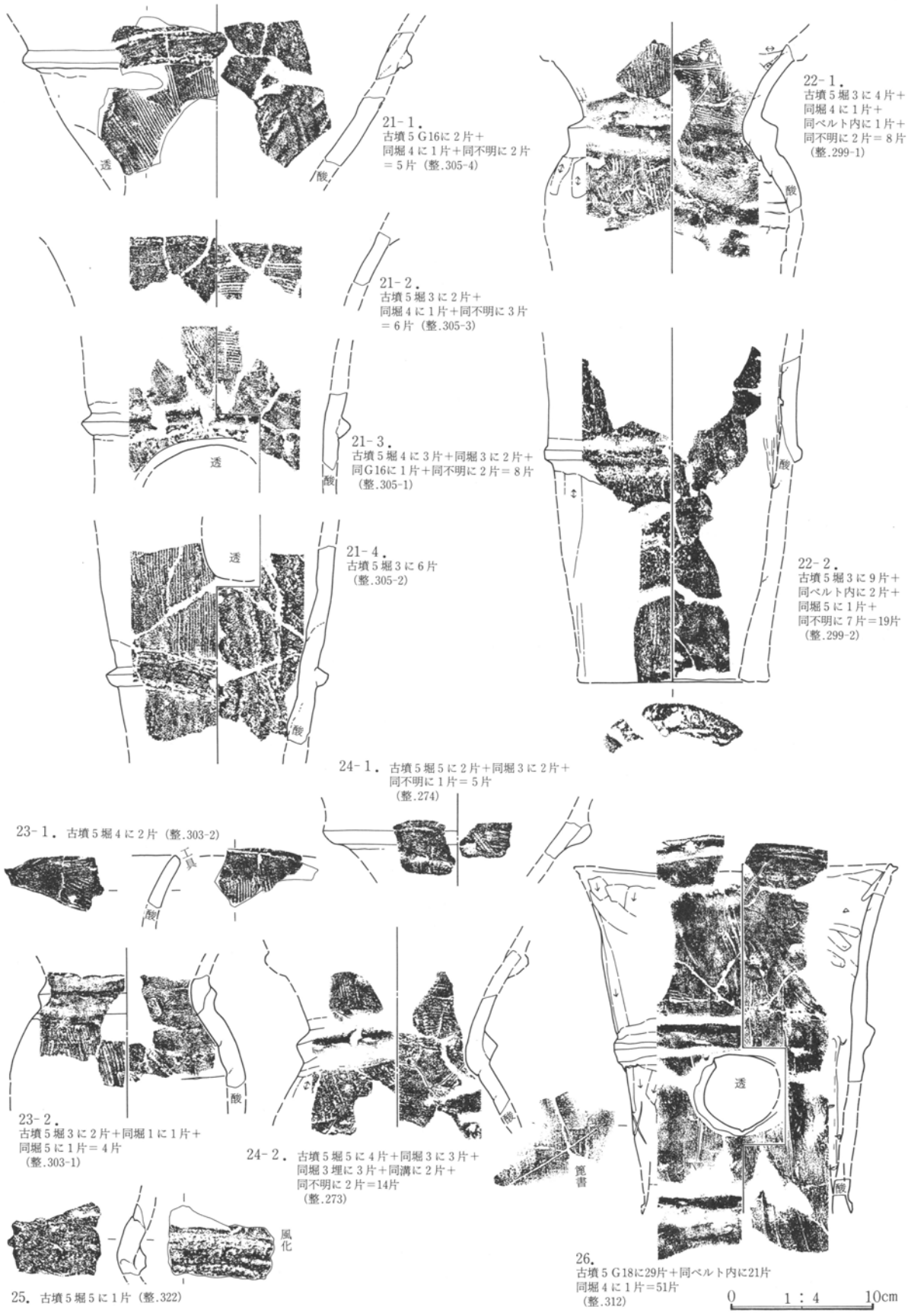
遺物　第36～47図に示した。１～５に土師器坏・高坏・甕、６に須恵器捉瓶、７～17に埴輪形象があり、７は大刀、18～129に埴輪円筒および朝顔形、131～137はそのほかである。埴輪類の出土量は多く埴輪円筒と主体とする形で部分的に朝顔を含む囲繞が想定される。



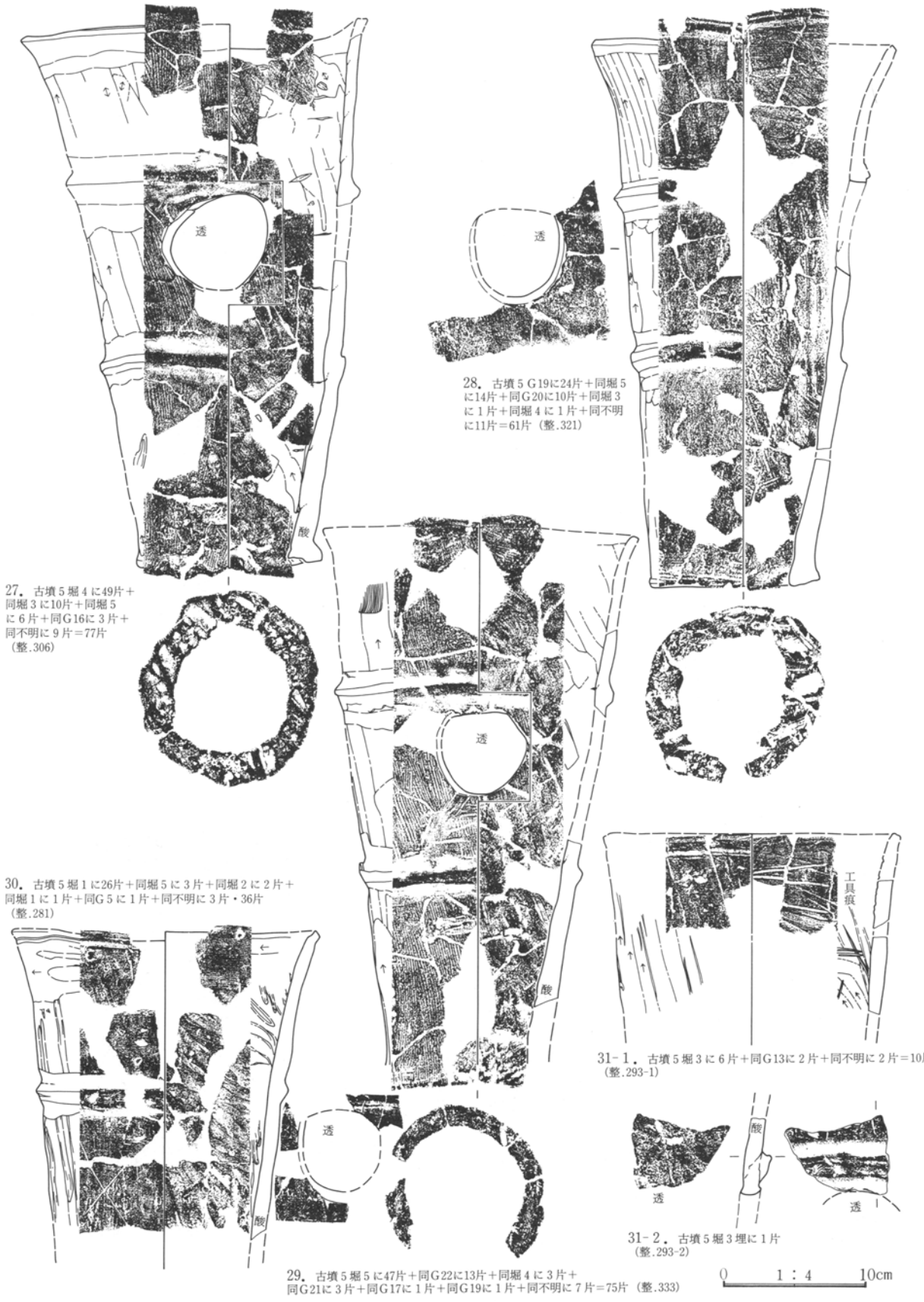
第35図　I・J 9・10区古墳5遺構図



第36図　Ⅰ・J 9・10区古墳5遺物図



第37図　Ⅰ・Ｊ９・10区古墳５遺物図



27. 古墳５堀４に49片＋同堀３に10片＋同堀５に６片＋同G16に３片＋同不明に９片＝77片（整.306）

28. 古墳５G19に24片＋同堀５に14片＋同G20に10片＋同堀３に１片＋同堀４に１片＋同不明に11片＝61片（整.321）

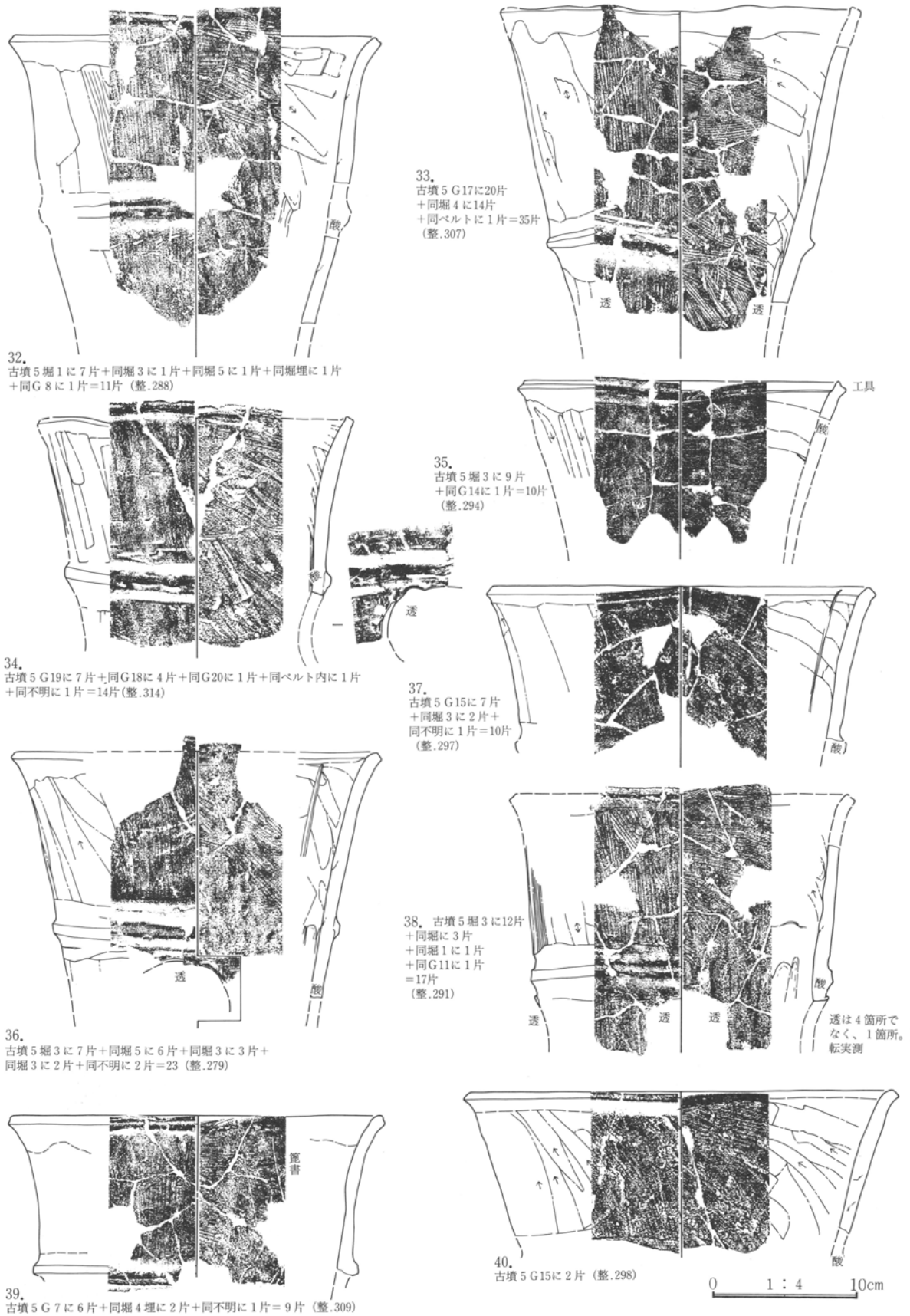
29. 古墳５堀５に47片＋同G22に13片＋同堀４に３片＋同G21に３片＋同G17に１片＋同G19に１片＋同不明に７片＝75片（整.333）

30. 古墳５堀１に26片＋同堀５に３片＋同堀２に２片＋同堀１に１片＋同G５に１片＋同不明に３片・36片（整.281）

31-１. 古墳５堀３に６片＋同G13に２片＋同不明に２片＝10片（整.293-1）

31-２. 古墳５堀３埋に１片（整.293-2）

第38図　Ｉ・Ｊ９・10区古墳５遺物図



32.
古墳5堀1に7片＋同堀3に1片＋同堀5に1片＋同堀埋に1片
＋同G8に1片＝11片（整.288）

33.
古墳5G17に20片
＋同堀4に14片
＋同ベルトに1片＝35片
（整.307）

34.
古墳5G19に7片＋同G18に4片＋同G20に1片＋同ベルト内に1片
＋同不明に1片＝14片（整.314）

35.
古墳5堀3に9片
＋同G14に1片＝10片
（整.294）

36.
古墳5堀3に7片＋同堀5に6片＋同堀3に3片＋
同堀3に2片＋同不明に2片＝23（整.279）

37.
古墳5G15に7片
＋同堀3に2片＋
同不明に1片＝10片
（整.297）

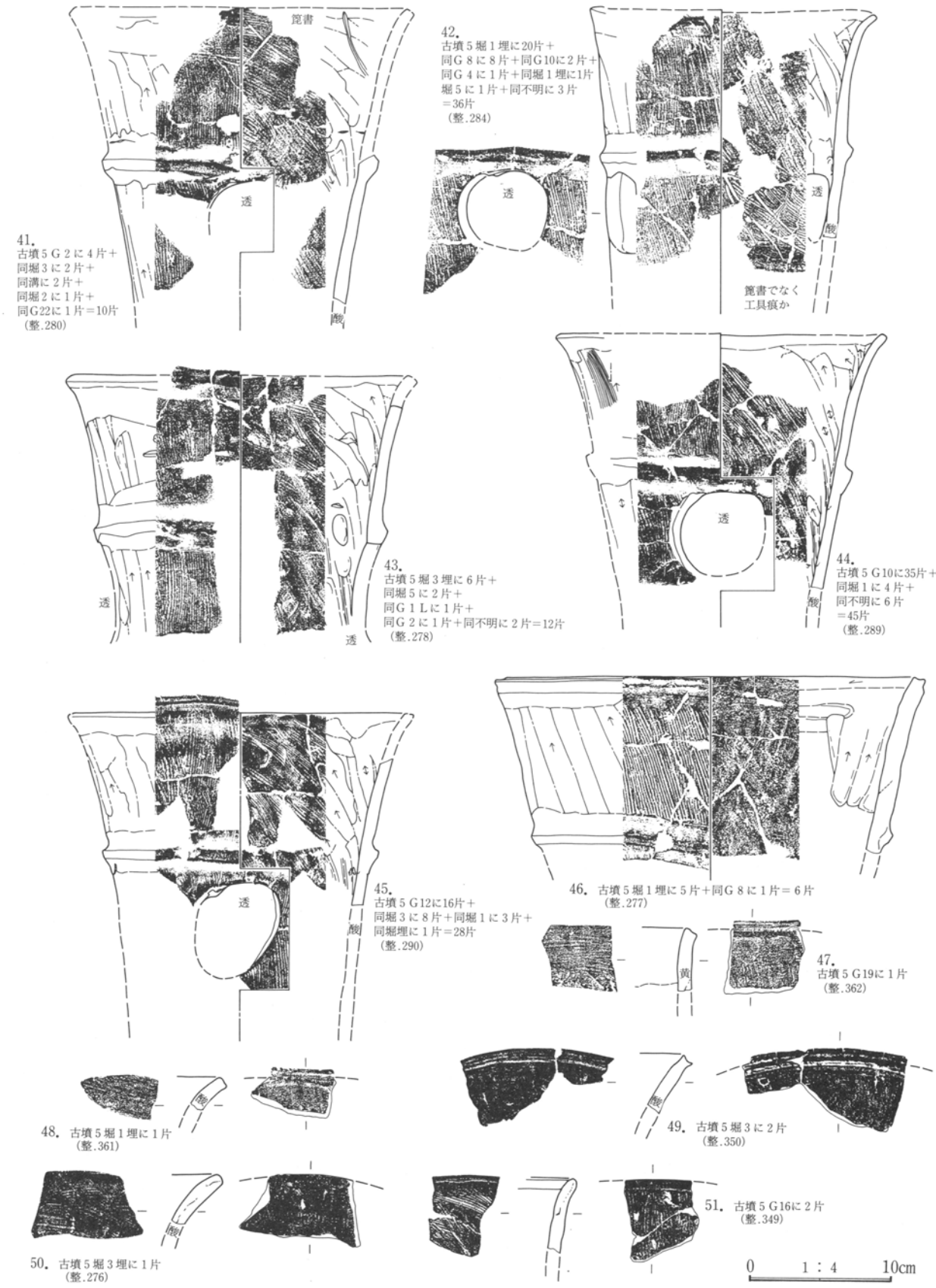
38. 古墳5堀3に12片
＋同堀に3片
＋同堀1に1片
＋同G11に1片
＝17片
（整.291）

透は4箇所でなく、1箇所。回転実測

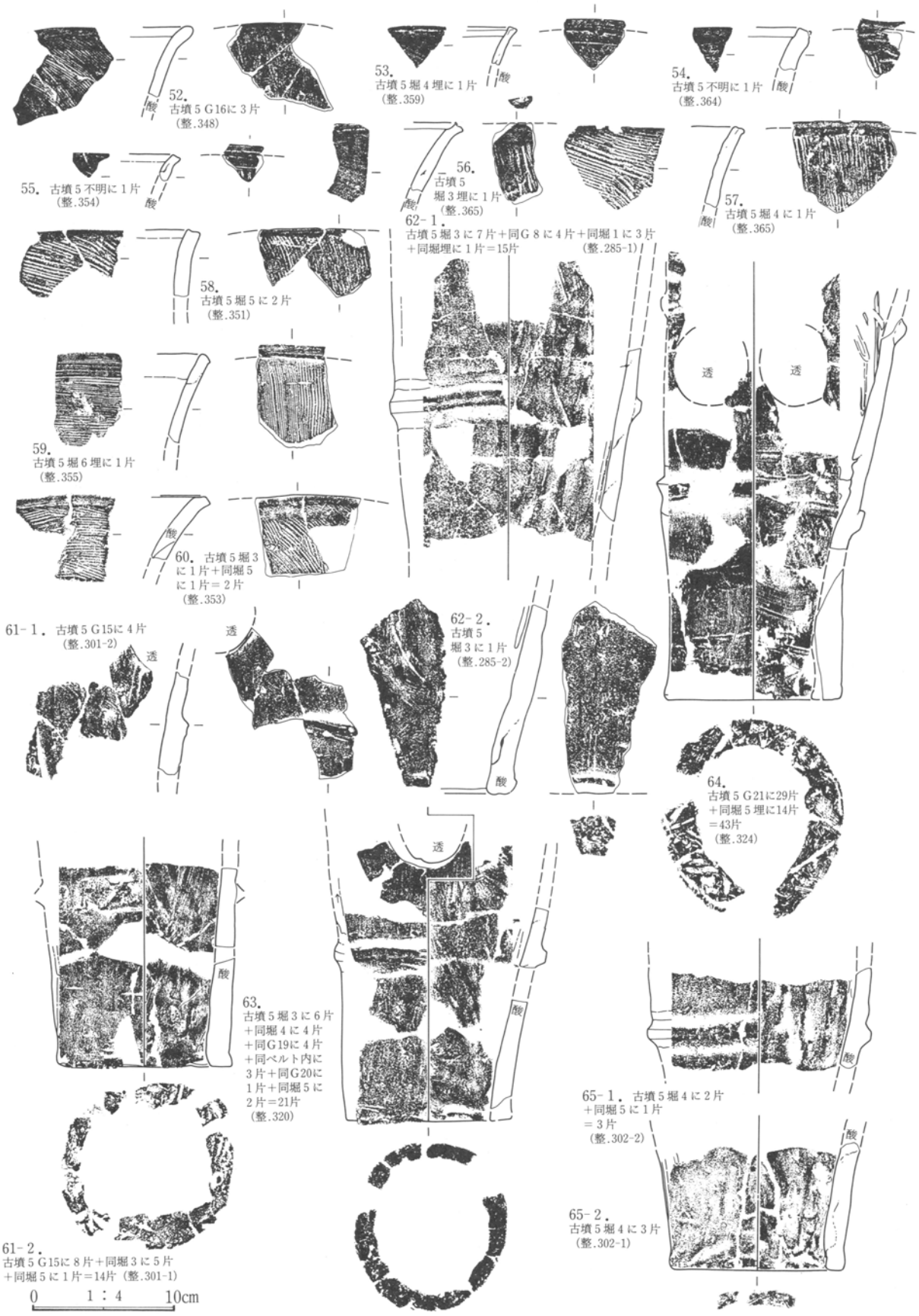
39.
古墳5G7に6片＋同堀4埋に2片＋同不明に1片＝9片（整.309）

40.
古墳5G15に2片（整.298）

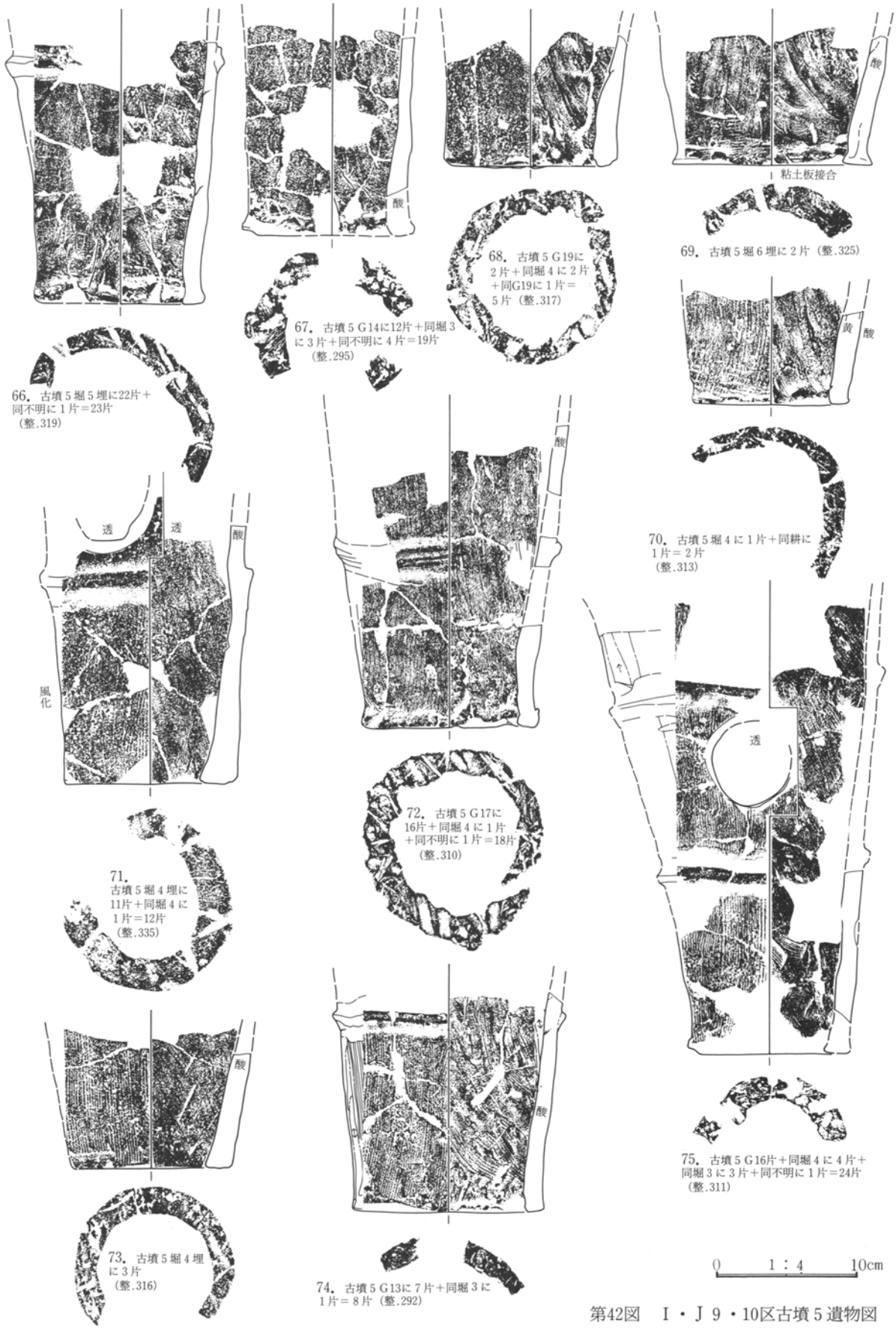
第39図　I・J9・10区古墳5遺物図



第40図　Ⅰ・J 9・10区古墳5遺物図



第41図　Ⅰ・J 9・10区古墳5遺物図



66. 古墳5堀5埋に22片＋同不明に1片＝23片（整.319）

67. 古墳5G14に12片＋同堀3に3片＋同不明に4片＝19片（整.295）

68. 古墳5G19に2片＋同堀4に2片＋同G19に1片＝5片（整.317）

69. 古墳5堀6埋に2片（整.325）

70. 古墳5堀4に1片＋同耕に1片＝2片（整.313）

71. 古墳5堀4埋に11片＋同堀4に1片＝12片（整.335）

72. 古墳5G17に16片＋同堀4に1片＋同不明に1片＝18片（整.310）

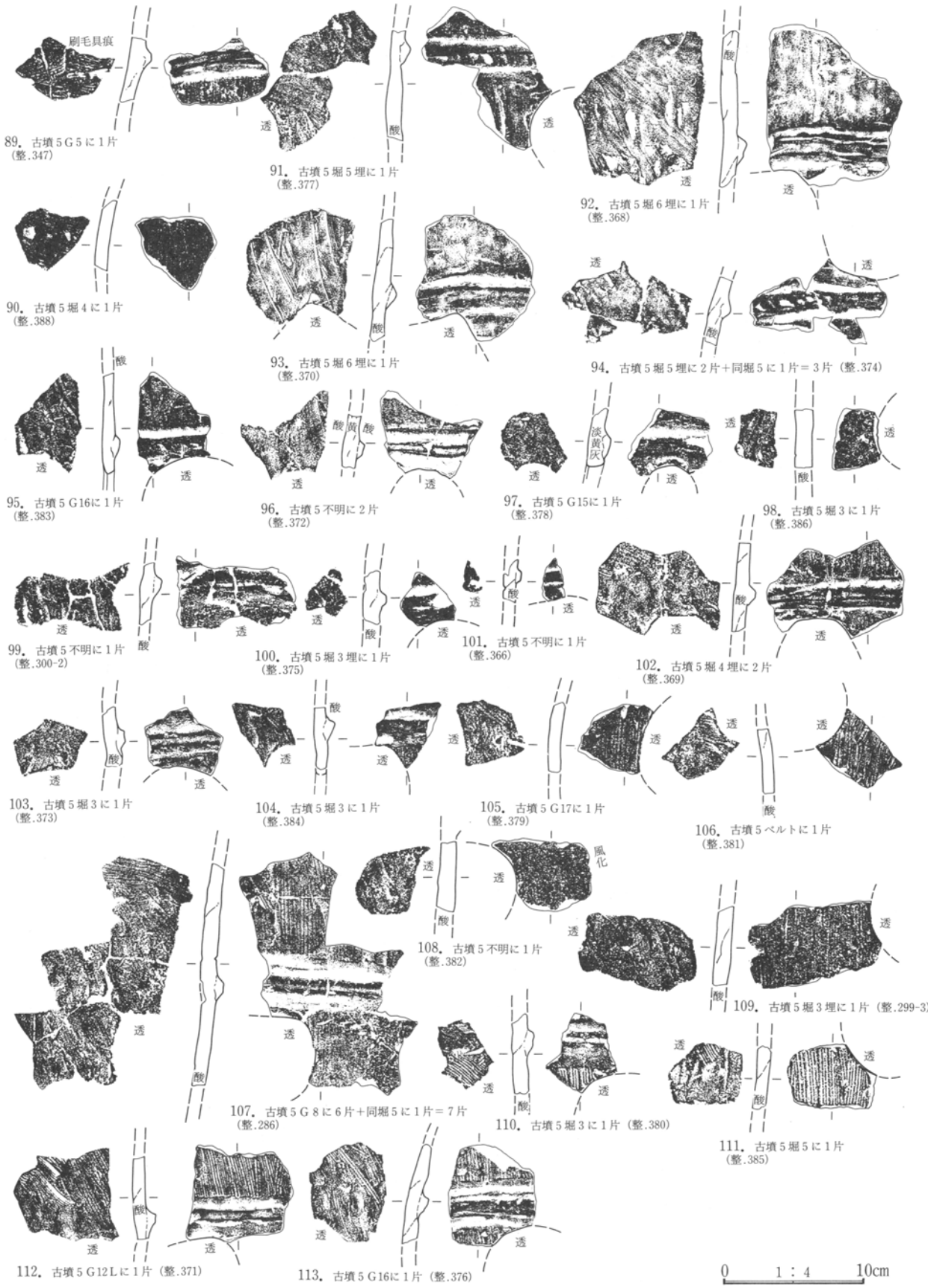
73. 古墳5堀4埋に3片（整.316）

74. 古墳5G13に7片＋同堀3に1片＝8片（整.292）

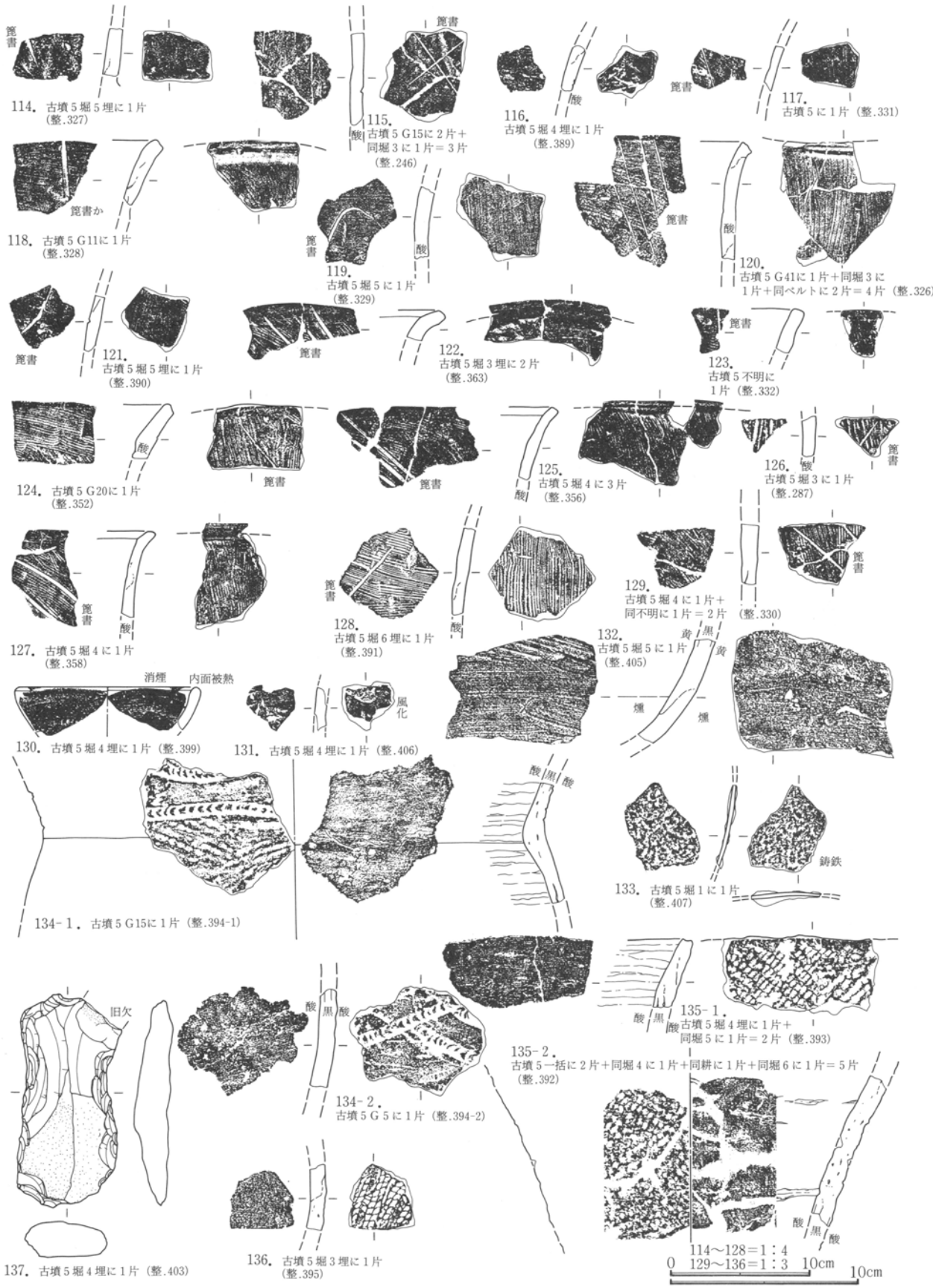
75. 古墳5G16片＋同堀4に4片＋同堀3に3片＋同不明に1片＝24片（整.311）

第42図　I・J 9・10区古墳5遺物図

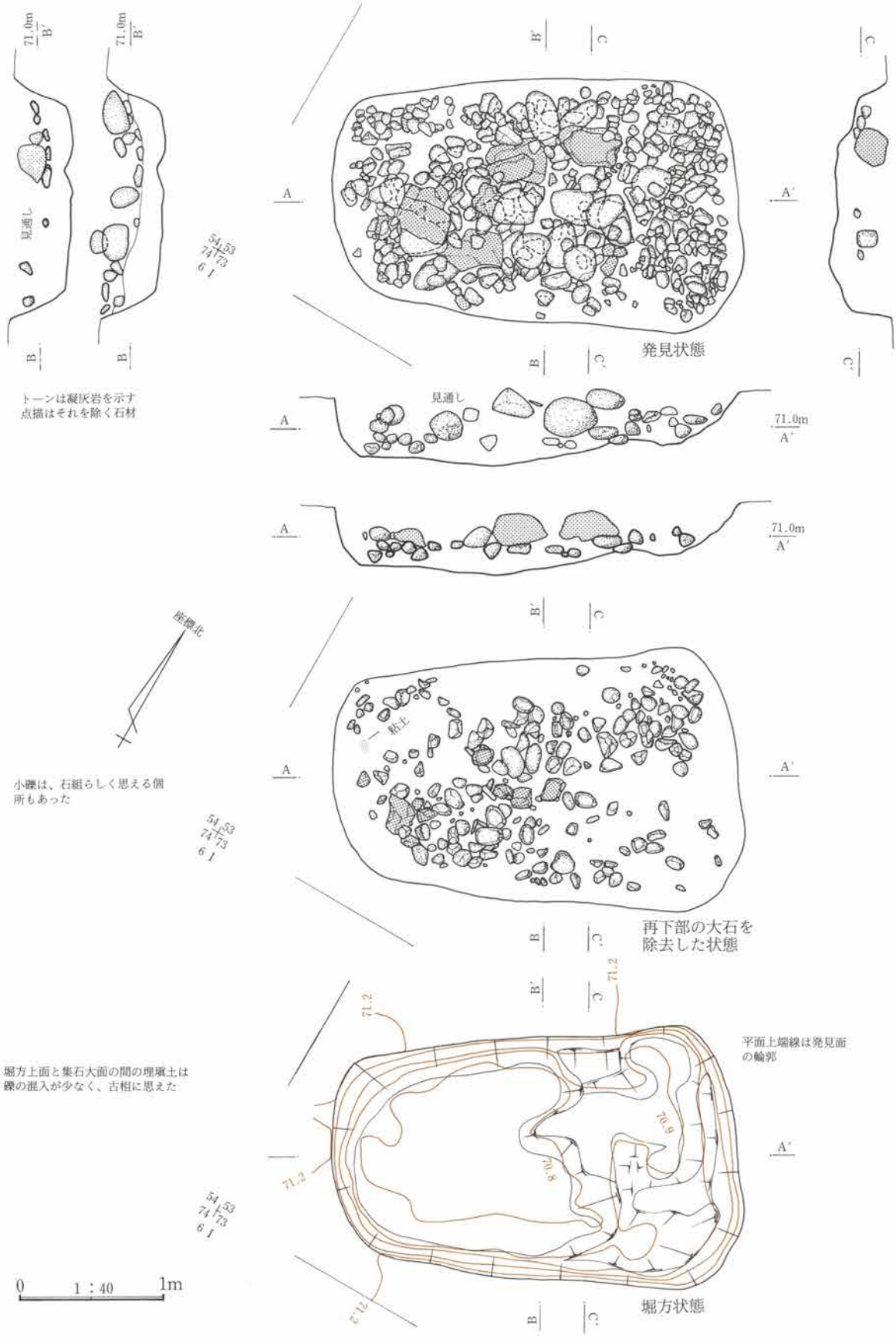
第43図　Ｉ・Ｊ９・10区古墳５遺物図



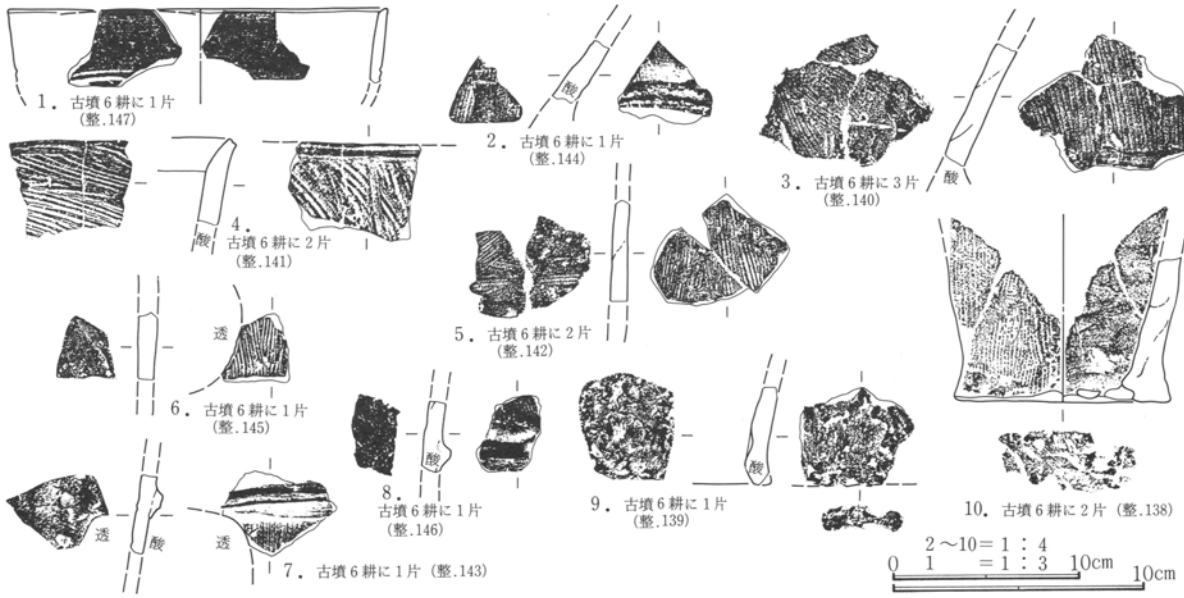
第44図　I・J 9・10区古墳5遺物図



第45図　Ⅰ・J 9・10区古墳5遺物図



第46図　I・J 9・10区古墳遺構図



第47図　Ⅰ・Ｊ９・10区古墳６遺物図

古墳６　　（第46図）

位置　Ⅰ９区53に位置する。標高は、調査面付近でおよそ71.2mである。

重複　上面は、現舗装道路下にあり、平夷され、旧時に破壊されている。平面上は、重複はない。

形状　墳丘を欠く。墳丘を欠くことは、周囲の古墳に旧表土の残存がまったくなくないことから相当上方に旧表土が存在していたと推されること。隣接古墳において埋葬施設の発見がないことは、埋葬施設がある程度、高い位置にあったとも考えられる。そのため石室位置が他古墳より低いと云うことは、周堀を欠くことと併せ、古墳６の墳丘は、石室掘り方の土を築材として用いた程度の低位と推定される。

規模　石室は既堀のため旧態部分は、掘り方上を埋めた築土の一部と掘り方が旧態と考えられるほか撹乱状態にあった。石室掘り方は、長さ2.78m、最大幅1.81m、深さ0.45mで、N60°Eを向く。

埋葬施設　石材の状態は、第46図のように30m前後の石材が20石弱、石組状態を欠いて発見され掘り方規模・石材の大きさから竪穴系石室と推定された。図中のトーンは凝灰岩を示すが不定形に割られた形で削りは不明であった。周辺石切場には見られない夾雑物質岩片を多く含む質であった。下方にしたがい小礫が多くなり、その中にも同材小片は含まれて同図中段のようであった。掘り方埋土に石材は含まれず、締まりがあり、築土の感を呈するため旧態部と考えられた。

遺物　第47図に示した。１は土師器坏、２～10が埴輪円筒、朝顔形である。石室内で円筒棺の想定は、埴輪片に個体差や８・９に風化を認めるため考え難い。さらに遺構との同時性も撹乱などにより薄い。

古墳７　　（第48・49図）

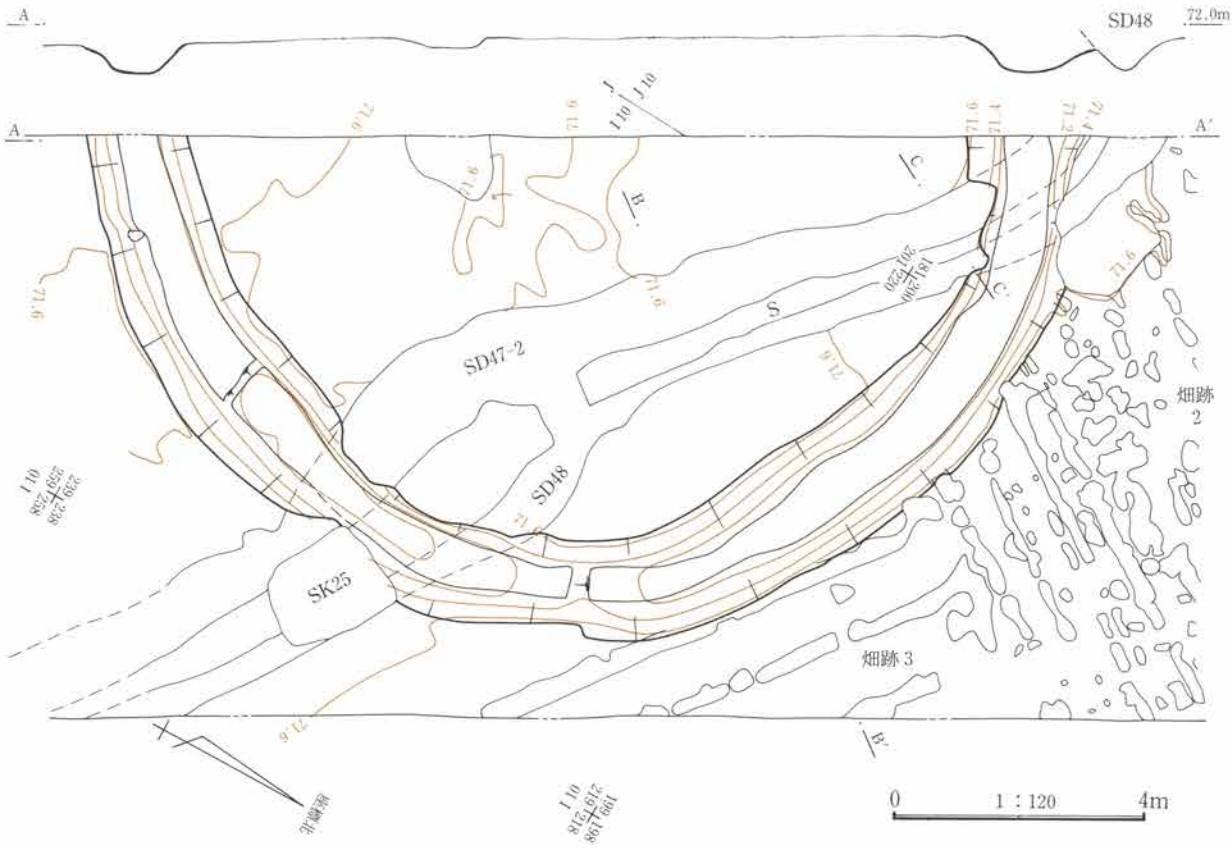
位置　Ｊ10区201・221、Ⅰ10区199・219・220・239・240・259・260にあり、標高は調査面上で約71.6mである。

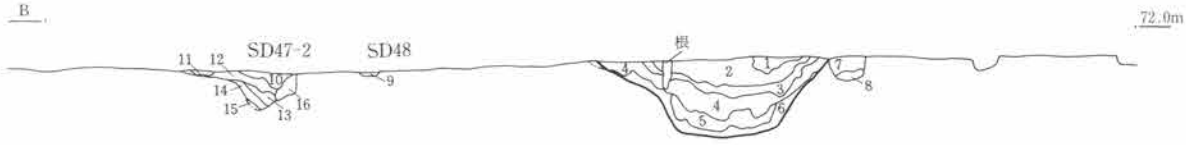
重複　ＳＤ47-2・48、畑跡３など、いずれも近世以降の遺構が重さなる。

形状　周溝は弧成りを呈し、円形を思わせるが、西半の未調査地の存在は帆立貝形の余地がある。

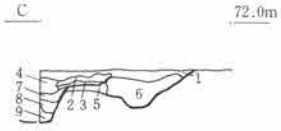
規模　直径11.8m、周堀幅1.65～1.9m、深さ1.2m。全長径13.45～13.7mを算出する。

周堀　部分的に高低差あり。第48図のごとく、わずか墳丘側が急斜となる。埋土上層にＦｒ－ＦＰ多い。





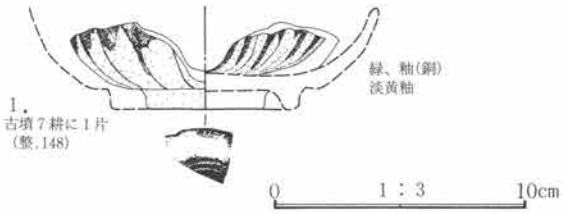
1．黒色土。ＦＰ粒多い。締まる。
2．黒色土。１層より土色は黒くＦＰ粒は多含。やや締まる。
3．黒褐色土。ＦＰ粒は少ない。軟性。ロームブロック僅含。
4．暗褐色土。ＦＰ粒若干含む。軟性。ローム粒含む。
5．暗褐色土。ＦＰ粒なし。（古様）
6．黄灰色土。ローム層を主とし、黒色土混る。
7．暗褐色土。砂質。ロームブロック若干。Ｂ軽石混入か？
8．黄灰色土。ローム層を主とし、黒色土混る。
9．暗褐色土。砂質。Ｂ軽石を含むと思われる。
10．暗黄色土。ローム層を主とし、黒色土混る。やや締まる。
11．暗褐色土。締まる。ローム粒僅少。
12．砂層。川砂の様。粒子はやや細かい。
13．暗黄色土。10層に似るが、やや軟らかい。
14．暗褐色土。砂質土であり。粒子は粗い。
15．暗黄色土。地山。ローム層とローム漸移的色調と区分困難。
16．暗褐色土。ローム粒若干。軟性。



1．暗褐色土。砂質。締まる。
2．暗褐色土。砂質。締まる。ロームブロック混入。
3．灰白色砂。Ｂ軽石と思われる。もろい。
4．暗褐色土。砂質。締まる。１層よりは軟かく、ロームブロックも小さい。
5．暗褐色土。砂質。締まる。ロームブロック多含。
6．暗褐色土。軟性。ローム小ブロック多含。
7．暗褐色土。砂質。４層に似るが、ロームブロックは無くローム粒少含。もろい。
8．暗褐色土。砂質。もろい。７層より砂の粒子は細かく、ローム粒無し。
9．暗褐色土。砂質。もろい。８層に似るが、ローム小ブロックを混入。

0　1：60　2m

第48図Ｉ・Ｊ９・10区古墳７遺構図



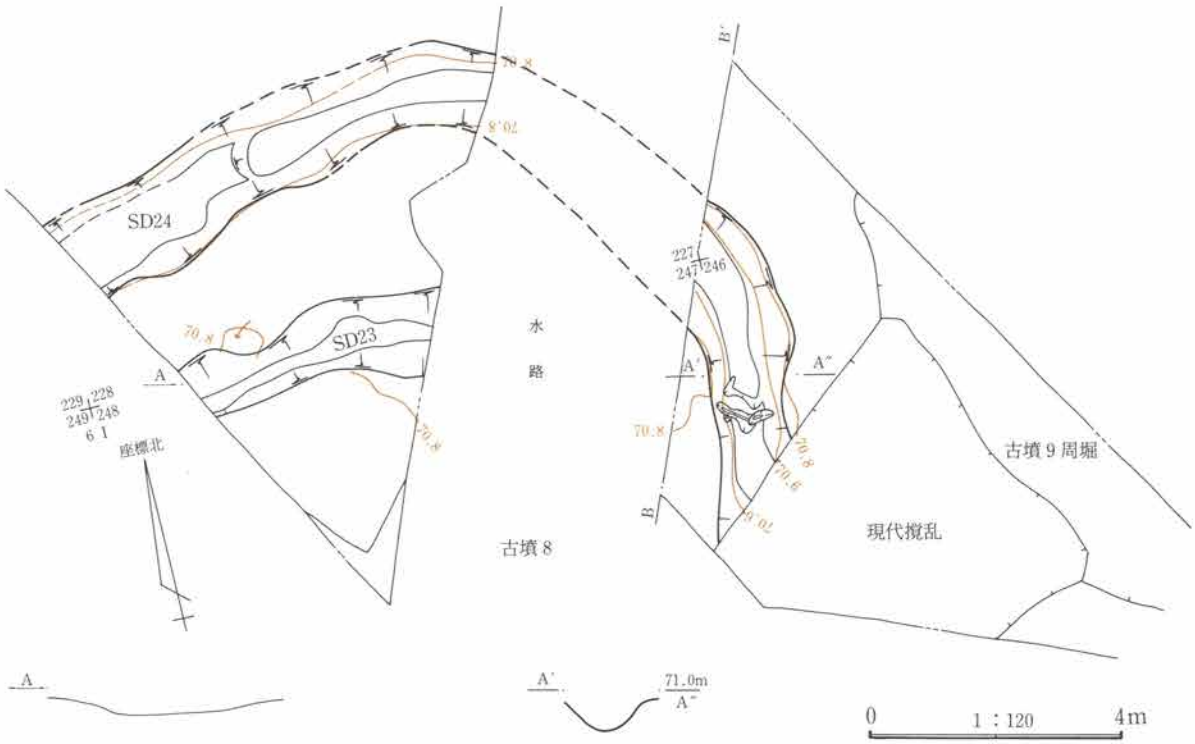
第49図　Ⅰ・Ｊ９・10区古墳７遺物図

埋葬施設　平夷消失。ＳＫ25中の大石は石室材か。

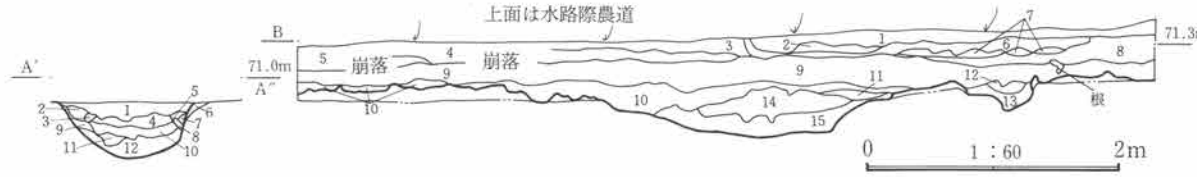
遺物　ＳＤ47-2・48至近から17世紀陶器皿出土。

古墳８　（第50図）

位置　Ⅰ９区226～228・246～248にあり、標高は調査面上で約70.8mである。

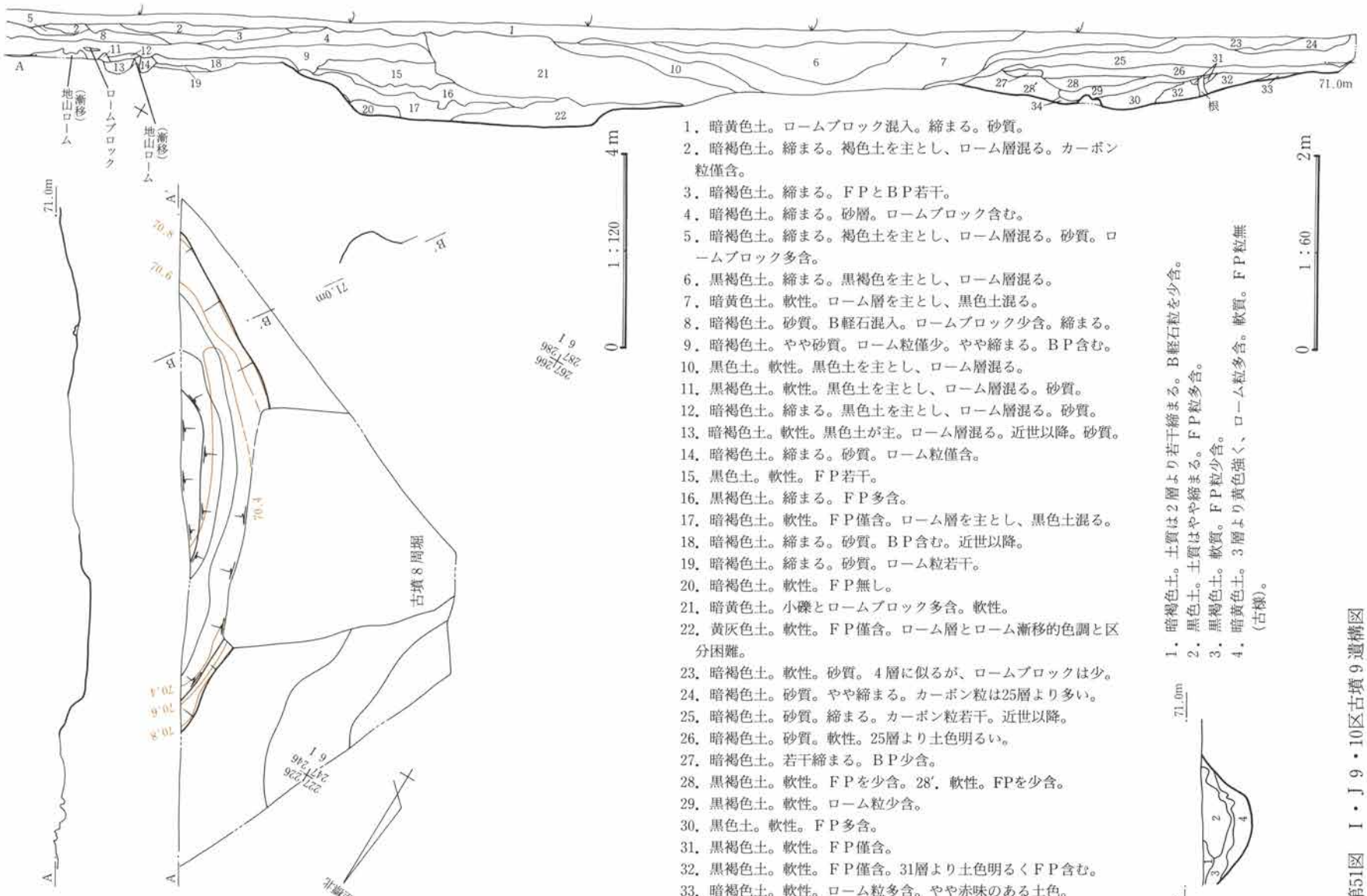


1．黒色土。ＦＰ粒少含。ローム粒僅含。
2．黒褐色土。軟質。ＦＰ粒無し。（古様）ローム粒多含。
3．黒色土。軟質。ＦＰ粒少含。植物によるカクラン。
4．黒褐色土。軟質。２層に似るが、黄色が強い。
5．黒褐色土。軟質。４層に似るが、黄色が強い。
6．黄褐色土。軟質。力（地山）
7．黒褐色土。軟質。５層と土質は似るが、やや締まりがある。
8．黄灰色土。ロームブロック、軟質。
9．黄褐色土。ロームブロック少含。軟質。
10．黄褐色土。軟質。４層に似るが、ロームの少ブロックを少含。
11．黄褐色土。軟質。土色は９層と同じだが、黄灰色ロームブロックも一部含む。
12．黄褐色土。軟質。ローム粒多含であり。黄色が強い。黄灰色ロームブロックを底部に多含。



1．暗黄色土。ロームブロック混入。締まる。砂質土。
2．暗黄色土。１層同様。ロームブロック多含。
3．暗褐色土。１層に似る。ロームブロックは僅少。
4．暗黄色土。１層に似る。ロームブロック多含。
5．暗褐色土。土色は９層に似るが、カーボン粒若干。締まる。
6．暗黄色土。ロームブロック多含。（４層より多い）
7．暗褐色土。締まる。９層に似る。カーボン粒少含。
8．暗褐色土。砂質土。Ｂ軽石混入。ロームブロック少含。締まる。
9．暗褐色土。やや砂質。ローム粒僅少。やや締まる。ＢＰ含む。
10．暗褐色土。９層よりやや赤い土色。Ｂ軽石含む。やや砂質。締まる。
11．暗褐色土。10層に似るが、やや締まる。
12．暗褐色土。黒色土を主とし、ローム層混る。
13．暗褐色土。（近世以降）黒色土を主にローム粒の混じり。軟性。
14．黒色土。ＦＰ粒を含む。堀の埋土。やや締まる。
15．暗褐色土。ＦＰ粒なし（古様）。ローム漸移と褐色土混り。

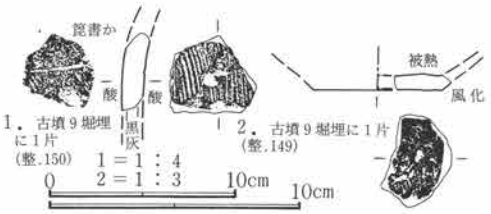
第50図　Ⅰ・Ｊ９・10区古墳８遺構図



1．暗黄色土。ロームブロック混入。締まる。砂質。
2．暗褐色土。締まる。褐色土を主とし、ローム層混る。カーボン粒僅含。
3．暗褐色土。締まる。ＦＰとＢＰ若干。
4．暗褐色土。締まる。砂層。ロームブロック含む。
5．暗褐色土。締まる。褐色土を主とし、ローム層混る。砂質。ロームブロック多含。
6．黒褐色土。締まる。黒褐色を主とし、ローム層混る。
7．暗黄色土。軟性。ローム層を主とし、黒色土混る。
8．暗褐色土。砂質。Ｂ軽石混入。ロームブロック少含。締まる。
9．暗褐色土。やや砂質。ローム粒僅少。やや締まる。ＢＰ含む。
10．黒色土。軟性。黒色土を主とし、ローム層混る。
11．黒褐色土。軟性。黒色土を主とし、ローム層混る。砂質。
12．暗褐色土。締まる。黒色土を主とし、ローム層混る。砂質。
13．暗褐色土。軟性。黒色土が主。ローム層混る。近世以降。砂質。
14．暗褐色土。締まる。砂質。ローム粒僅含。
15．黒色土。軟性。ＦＰ若干。
16．黒褐色土。締まる。ＦＰ多含。
17．暗褐色土。軟性。ＦＰ僅含。ローム層を主とし、黒色土混る。
18．暗褐色土。締まる。砂質。ＢＰ含む。近世以降。
19．暗褐色土。締まる。砂質。ローム粒若干。
20．暗褐色土。軟性。ＦＰ無し。
21．暗黄色土。小礫とロームブロック多含。軟性。
22．黄灰色土。軟性。ＦＰ僅含。ローム層とローム漸移的色調と区分困難。
23．暗褐色土。軟性。砂質。４層に似るが、ロームブロックは少。
24．暗褐色土。砂質。やや締まる。カーボン粒は25層より多い。
25．暗褐色土。砂質。締まる。カーボン粒若干。近世以降。
26．暗褐色土。砂質。軟性。25層より土色明るい。
27．暗褐色土。若干締まる。ＢＰ少含。
28．黒褐色土。軟性。ＦＰを少含。28′．軟性。FPを少含。
29．黒褐色土。軟性。ローム粒少含。
30．黒色土。軟性。ＦＰ多含。
31．黒褐色土。軟性。ＦＰ僅含。
32．黒褐色土。軟性。ＦＰ僅含。31層より土色明るくＦＰ含む。
33．暗褐色土。軟性。ローム粒多含。やや赤味のある土色。
34．暗黄色土。軟性。ローム層とローム漸移的色調と区分困難。

1．暗褐色土。土質は２層より若干締まる。Ｂ軽石粒を少含。
2．黒色土。土質はやや締まる。ＦＰ粒多含。
3．黒褐色土。軟質。ＦＰ粒少含。
4．暗黄色土。３層より黄色強く、ローム粒多含。軟質。ＦＰ粒無（古墳）。

第51図　Ｉ・Ｊ９・10区古墳９遺構図



第52図　Ｉ・Ｊ９・10区古墳９遺物図

重複　周堀が浅いためか、現道舗装材が平夷面直上まで覆い、ＳＤ23などの後世遺構が重さなる。

形状　周堀は少し歪み気味の円弧を成す。小規模古墳のため円形と推定される。

規模　墳丘側の推定直径は約11m、周堀幅1.4m、深さ0.35m。全長は、推定12.4mと算出される。

周堀　底面に凹凸があり、平面の円弧も歪み、整然とした感を欠く。埋土下面までＦｒ－ＦＰ入る。

埋葬施設　発見されなかったが、平夷消失の可能性が高い。

遺物　なし。埴輪の囲綿はないと推定される。

古墳９　　(第51・52図)

位置　Ｉ９区226･245･246･264～266にあり、調査面上は約70.8mである。

重複　西側周堀を現代穴跡が切る。

形状　周堀の西側を調査したのみであるが、周堀平面の円弧の成りと小規模古墳のため円形を推定。

規模　周堀外縁の推定直径約15.3m、周堀幅1.5m、深さ0.45mである。

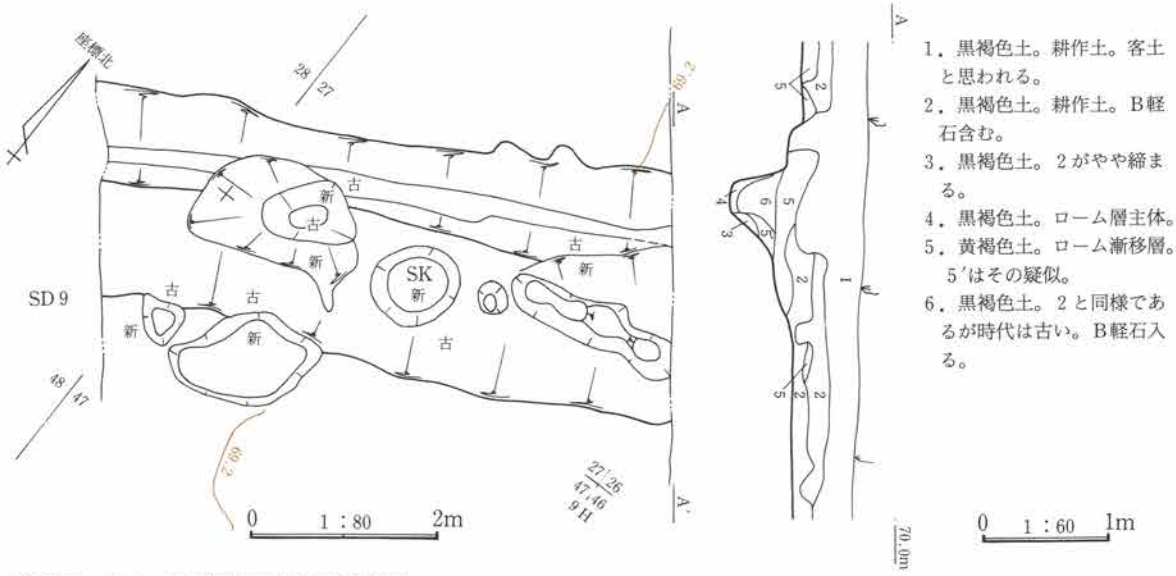
周堀　横断面形は第51図のように、墳丘側が急なＵ字状で、底面は揃う。埋土中位にＦｒ－ＦＰ入る。

遺物　第52図のように中世土師質土器皿を少量含む。埴輪の囲繞はないと推定される。

２．溝跡と道跡・畑跡

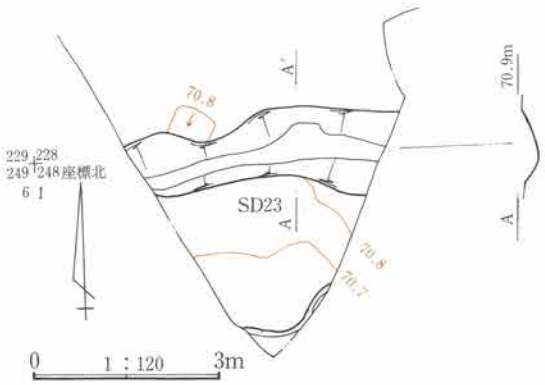
ＳＤ９　　(第53図)

Ｈ７区にあり、N63°Eを指向する東西溝である。幅2.48m、深さ0.84mの溝を長さ6.2mにわたり調査した。規模やや大き目であること、わずかではあるが地山層である２次堆積ローム層が約0.2m南側で低くなることから、土地利用上の地境いとなっていたことを思わせる。埋土の質感は、粗質であり近世以降でも古様を思わせた。さらに埋没土上面において後世の小穴が重さなる。出土遺物は第57図のように18世紀頃の染付磁器皿があり、別に近世軟質器片がある。なお流水の形跡はない。

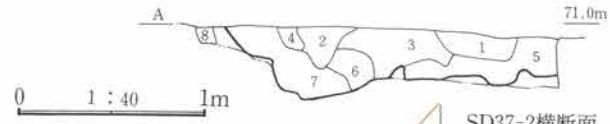


1．黒褐色土。耕作土。客土と思われる。
2．黒褐色土。耕作土。B軽石含む。
3．黒褐色土。２がやや締まる。
4．黒褐色土。ローム層主体。
5．黄褐色土。ローム漸移層。5′はその疑似。
6．黒褐色土。２と同様であるが時代は古い。B軽石入る。

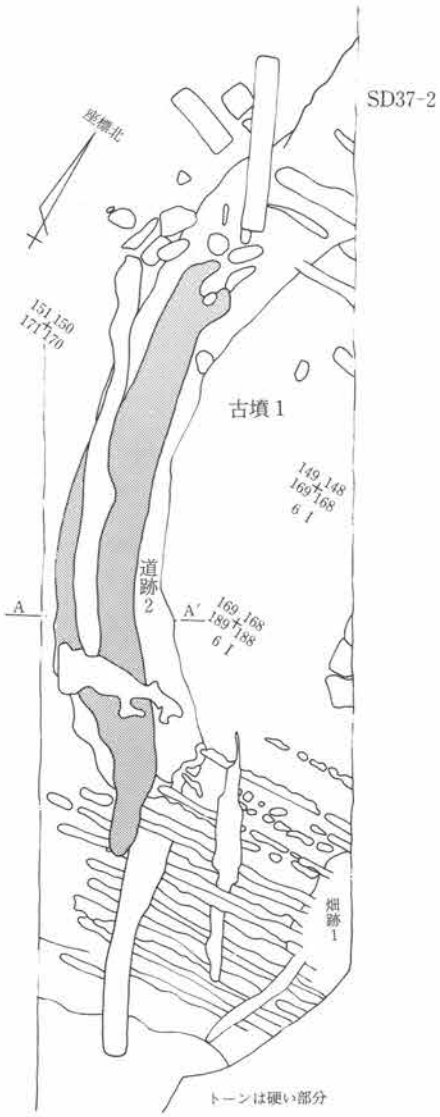
第53図　Ｈ７・８区溝跡(ＳＤ９)遺構図



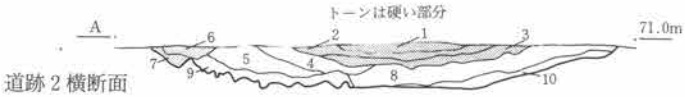
1．暗黄色土。ローム多含。軟性。
2．暗褐色土。砂質。軟性。ローム粒若干。
3．暗褐色土。砂質。軟性。ロームブロック多含。
4．暗褐色土。砂質。軟性。ローム粒多含。
5．暗黄色土。黒色土を主とし、ローム層混る。軟性。中世以降。B軽石含む。
6．暗褐色土。軟性。ロームブロック多含。黒色土粒少含。
7．暗褐色土。軟性。中世以降。
8．暗褐色土。砂質。軟性。ロームブロック多含。



SD37-2横断面



SD37-2と道跡2の関係



道跡2横断面

1．黒色土。B軽石含む。砂質でよく締まる。
2．黒色土。汚れたB軽石含む。1層同様硬いがやや明るい土色。
3．黒褐色土。やや締まる。FP若干。
4．黒褐色土。軟性土。FP若干。粘性ややある。
5．黒褐色土。軟性。FP粒多く含む。
6．黒褐色土。3層に似る。よく締まる。FP一部。B軽石少含む。
7．暗褐色土。B軽石少含む。締まる。
8．暗褐色土。B軽石少含。FP一部僅含。軟性。
9．黒褐色土。FP含む。軟性。
10．暗黄色土。ローム層を主とする。

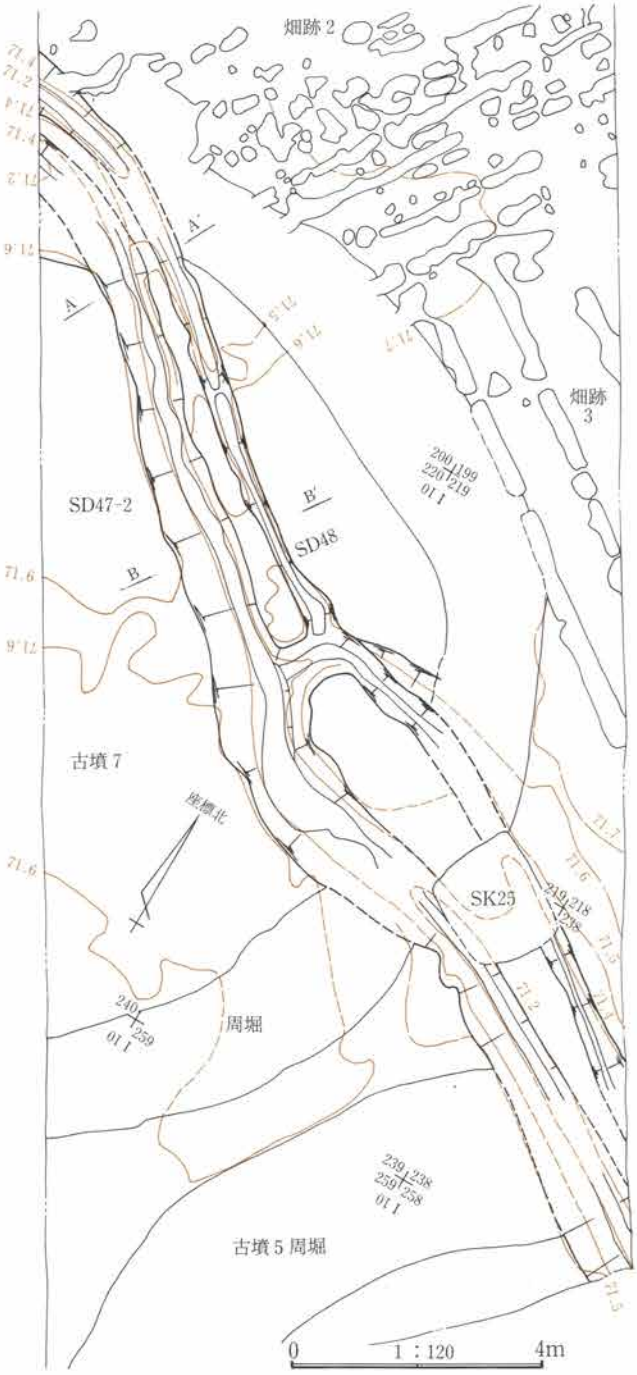
0 1：60 2m

0 1：240 6m

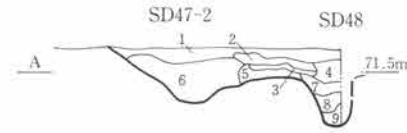
第54図　I・J 9・10区溝跡、道跡遺構図

SD23　（第54図）

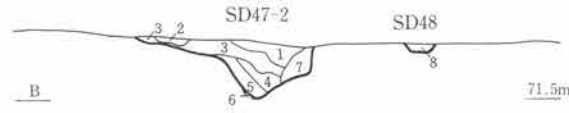
位置はI 9区にある。古墳8周堀の内側を内周するような方向性で設けられていた。規模は長さ4.3m、幅1.3m、深さ0.24mを測る。埋没土の質感は近世以降でも古様を思わせた。特記される点は古墳8の平夷時期がいつであるのかが示唆されることである。出土遺物は、第57図のように埴輪類のみであったが埋土の質感



第55図　Ｉ・Ｊ９・10区溝跡遺構図



1．暗褐色土。砂質。締まる。
2．暗褐色土。砂質。締まる。ロームブロック混入。
3．灰白色砂。B軽石と思われる？もろい。
4．暗褐色土。砂質。締まる。1層よりは軟かく、ロームブロックも小さい。
5．暗褐色土。砂質。締まる。ロームブロック多含。
6．暗褐色土。軟性。ローム小ブロック多含。
7．暗褐色土。砂質。4層に似るが、ロームブロックは無くローム粒少含。もろい。
8．暗褐色土。砂質。もろい。7層より砂の粒子は細かく、ローム粒無し。
9．暗褐色土。砂質。もろい。8層に似るが、ローム小ブロックを混入。



1．暗黄色土。ローム層を主とし、黒色土混る。やや締まる。
2．暗褐色土。締まる。ローム粒僅少。
3．砂層。川砂の様。粒子はやや細かい。
4．暗黄色土。やや軟らかい。
5．暗褐色土。砂質土であり、粒子は粗い。
6．暗黄色土。地山。ローム層とローム漸移的色調と区分困難。
7．暗褐色土。ローム粒若干。軟性。
8．暗褐色土。砂質。B軽石を含むと思われる。

0　1：40　1m

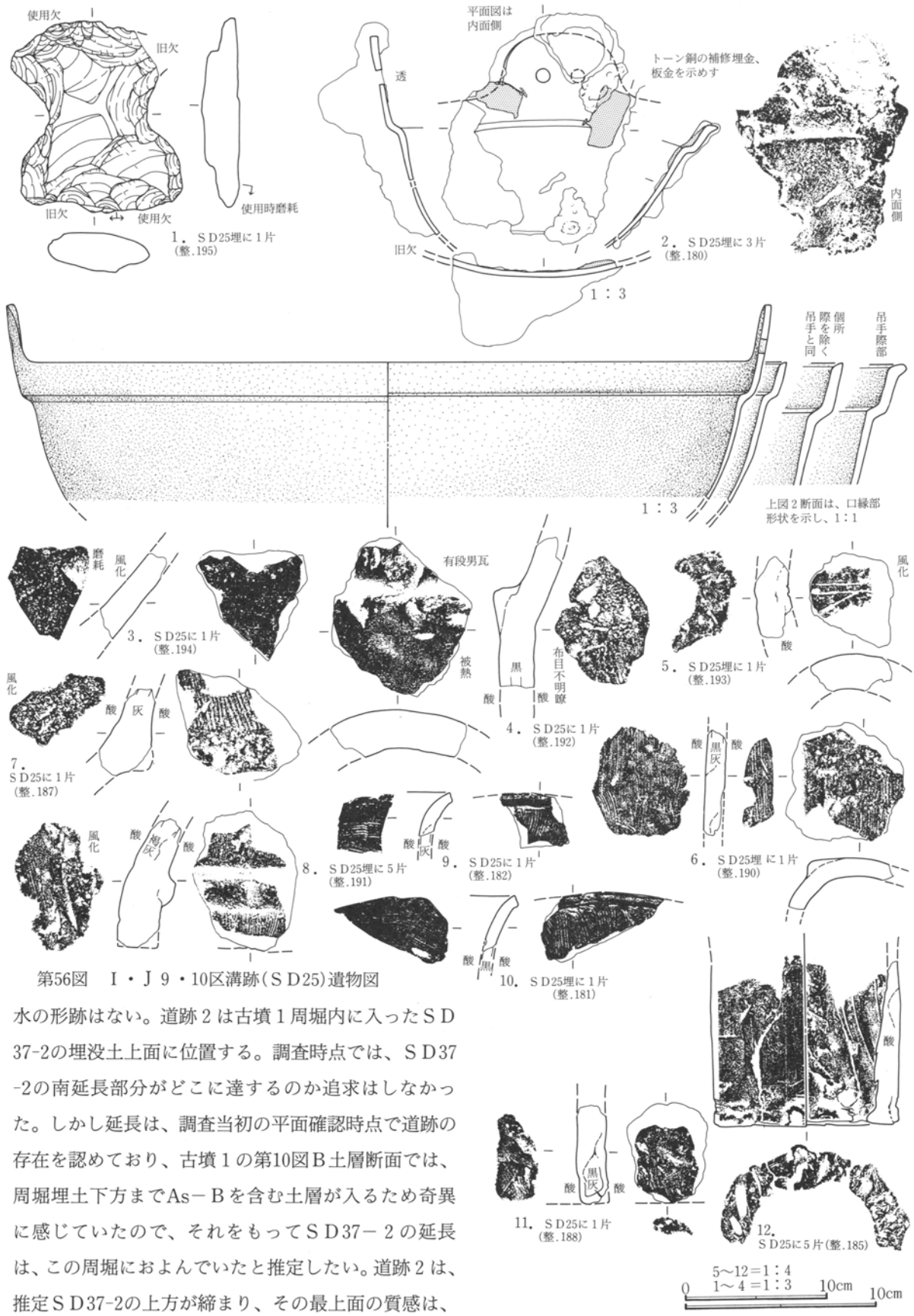
が近世でも古様であり、磁器未出土であることを思えば、地方での普及段階である18世紀後半を遡ぼる可能性もある。なお流水の痕跡は薄い。

ＳＤ25　（第６図）

ＳＤ25は、Ｉ９区にあり、畑跡１のさく跡群の一条であった。そのため個別遺構図は作成していない。畑跡１の各さく溝の中から得られた遺物類は第57図15・16～19・22・24などを見るように18世紀頃の遺物の出土であり、ＳＤ25も、その頃の遺構と推定される。遺物中に第56図２の鉄鍋片が稀少種としてあったため遺物図は中世以降の全遺物と古墳１に関係したと考えられる埴輪を掲げた。

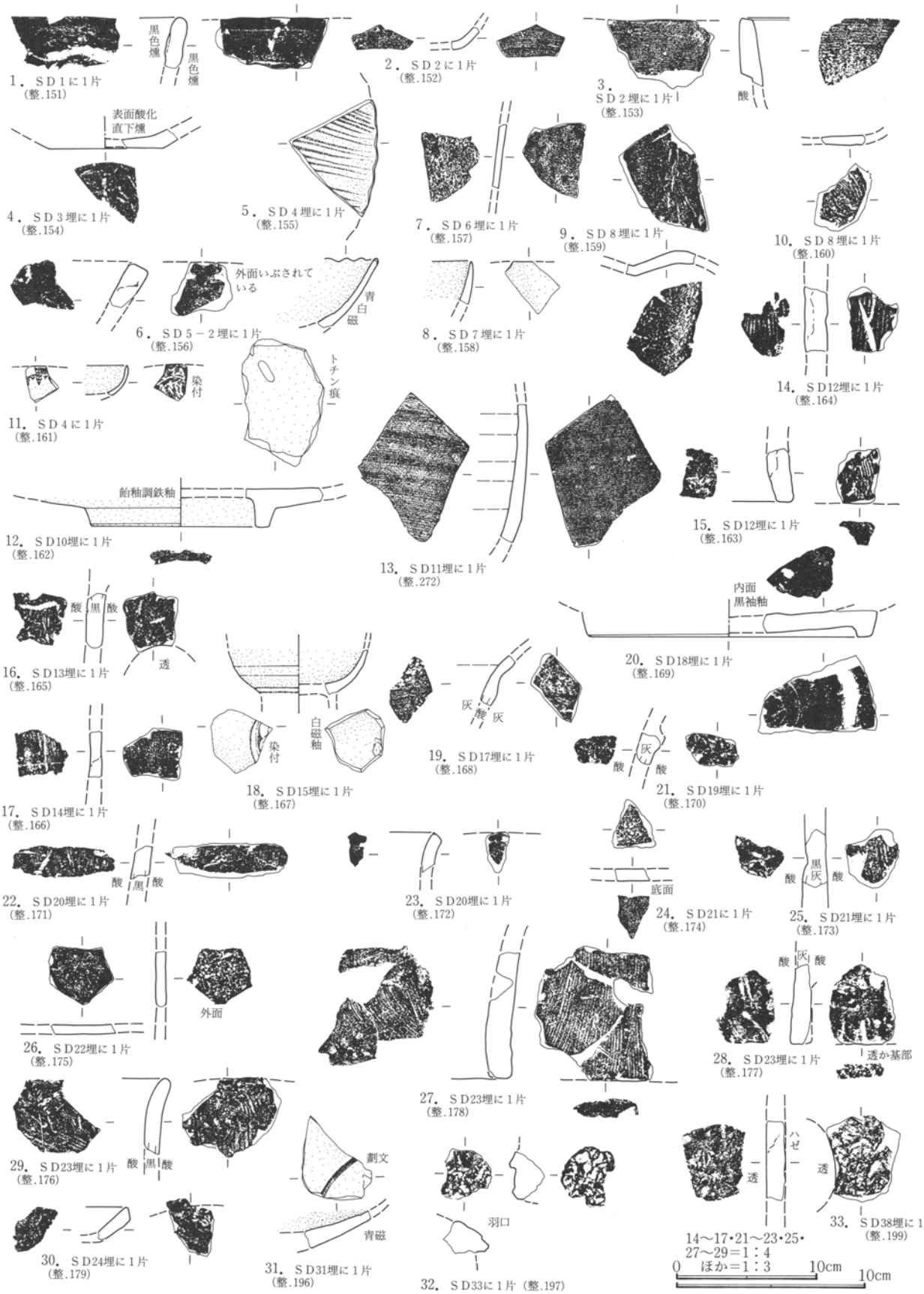
ＳＤ37－２と道跡２　（第54図）

位置は、Ｉ９区にある。両遺構が関連づくと判明したのは、整理時点である。ＳＤ37-2はＮ３°Ｗ、幅１ｍ以上、深さ0.4mの規模にある。埋土は第54図に示したように上方においては、粗質であったが、下方は中世に見えるくらいの質感にあった。出土遺物に陶器片があるため、15・16世紀頃の遺構かもしれない。なお流

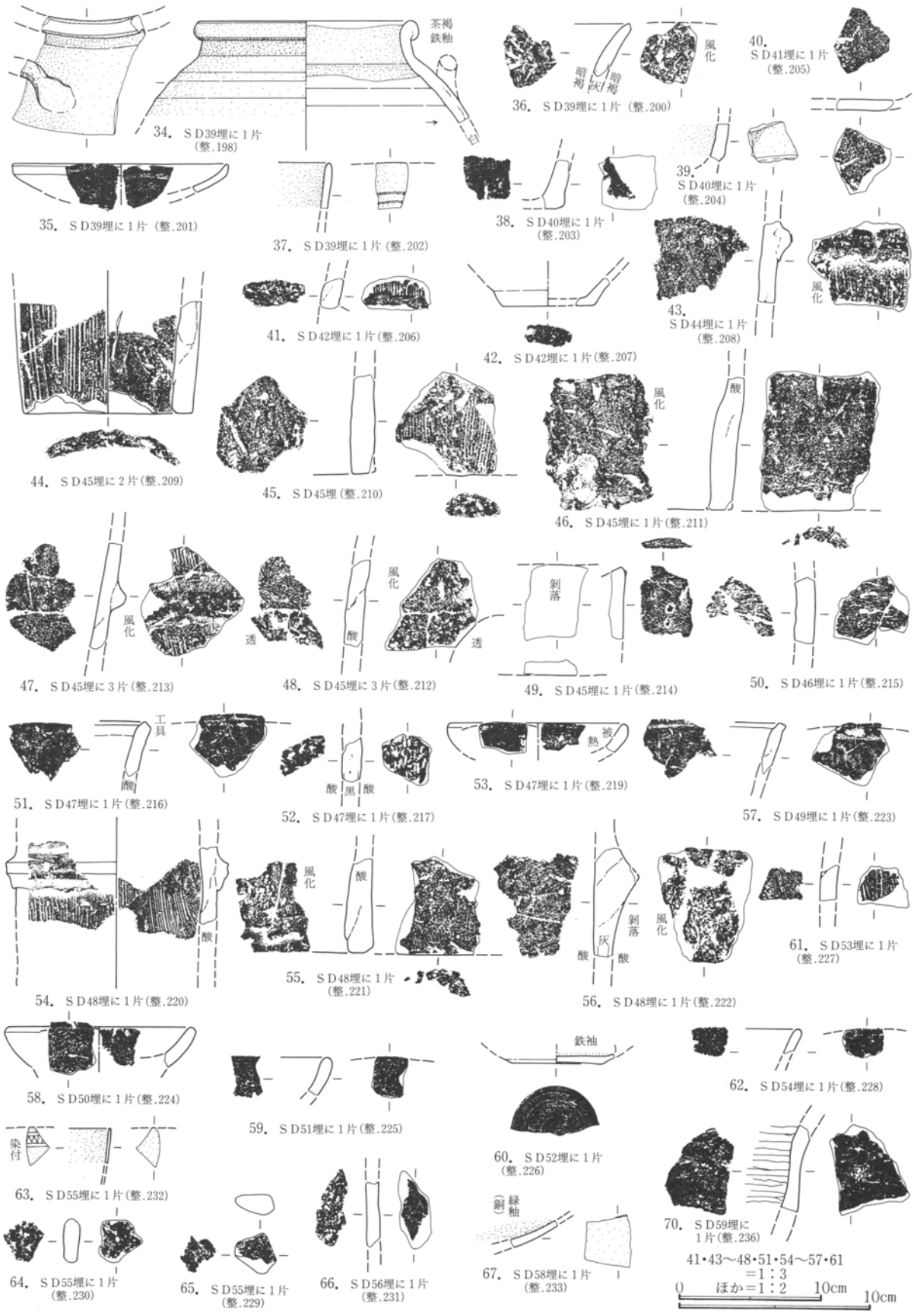


第56図　Ｉ・Ｊ９・10区溝跡(ＳＤ25)遺物図

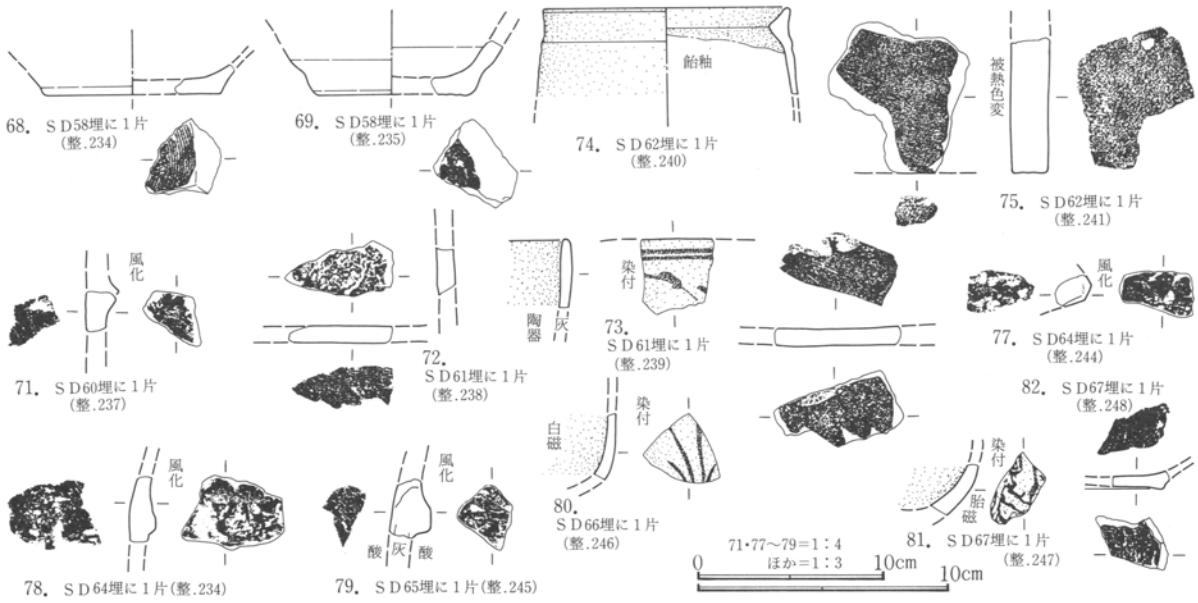
水の形跡はない。道跡２は古墳１周堀内に入ったＳＤ37-2の埋没土上面に位置する。調査時点では、ＳＤ37-2の南延長部分がどこに達するのか追求はしなかった。しかし延長は、調査当初の平面確認時点で道跡の存在を認めており、古墳１の第10図Ｂ土層断面では、周堀埋土下方までAs－Ｂを含む土層が入るため奇異に感じていたので、それをもってＳＤ37－２の延長は、この周堀におよんでいたと推定したい。道跡２は、推定ＳＤ37-2の上方が締まり、その最上面の質感は、そう古様でなく、近世後半以降の気がする。



第57図　Ｉ・Ｊ９・10区溝跡遺物図



第58図　Ｉ・Ｊ９・10区溝跡遺物図



第59図　Ｉ・Ｊ９・10図溝跡遺物図

ＳＤ47－２・ＳＤ48　　（第55図）

位置はＩ10区にあり、古墳５・７の墳丘東寄りを通過する。両溝は調査区西壁上層断面に新・古の関係が窺え、ＳＤ48が新しい。規模は、総長約21.5mを調査し、ＳＤ47-2は幅1.2m、深さ0.95mで底の平らな浅いＵ字状を呈する。ＳＤ48は、幅0.7m、深さ1.3mでＵ字状を呈する。両溝とも、北西から南東下りに少し曲りながら設けられている。両溝とも接近し、共通の機能と近接時期の存在と考えられ、埋土の質感は中世以降に見え、出土遺物は、第58図53に17世紀頃に見える土師質土器皿片がある。それは近接して出土した17世紀頃の第49図菊皿とも時期的に接する可能性が持たれる。流水の形跡は両溝とも薄い。

道跡１　　（第35図）

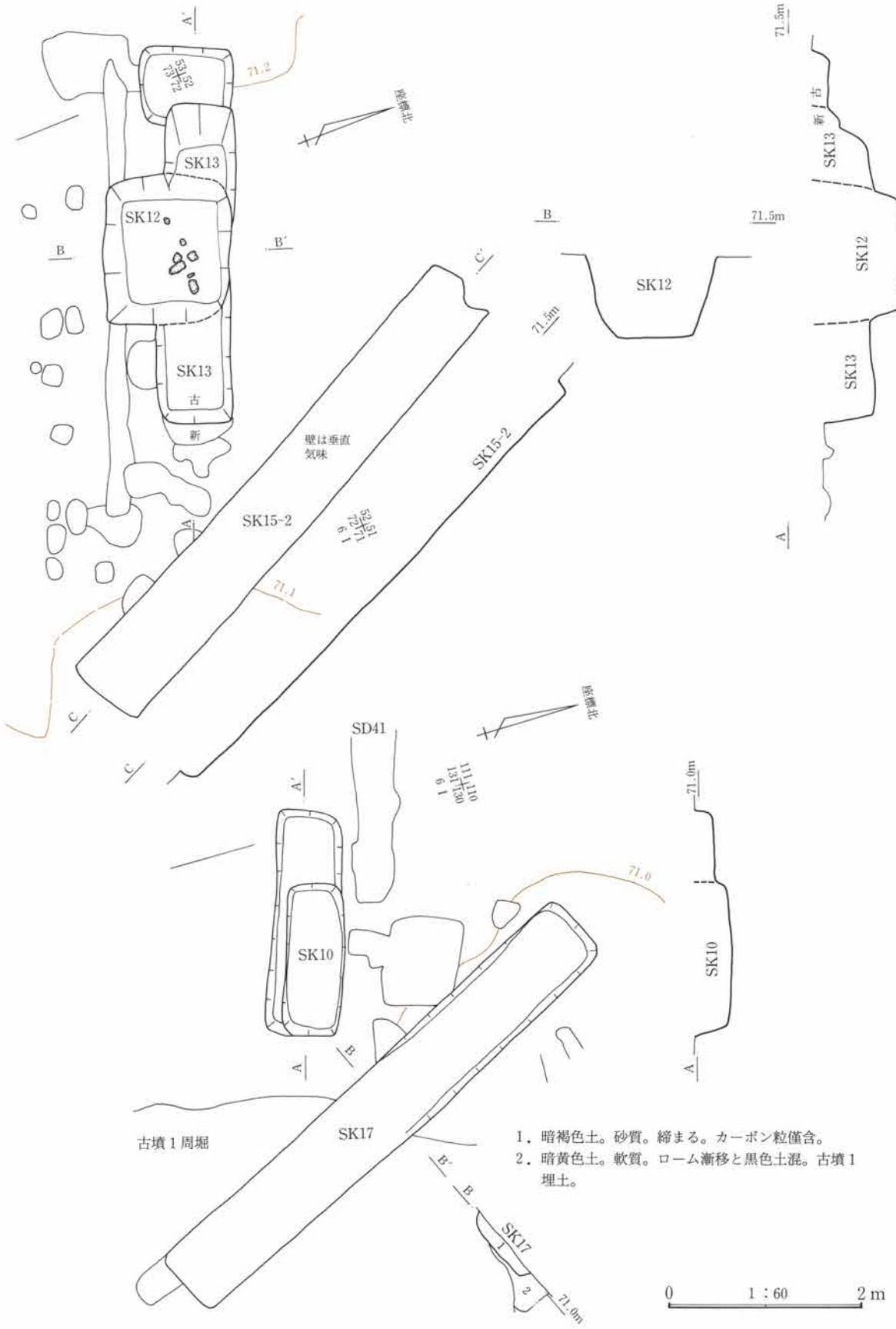
Ｉ10区の古墳５の墳丘側を南から横切るような形で存在する。同墳、南側の周堀埋土上面におよんでいたが、さらに南側が、どこに向うかは不明であった。同図土層断面Ｃの注記番号３の浅い皿状の個所に硬化部分を認め、推定道幅約3.2mを算出する。土の質感は近世を感じた。

畑跡１～３ほか　　（第６・７・９・48図）

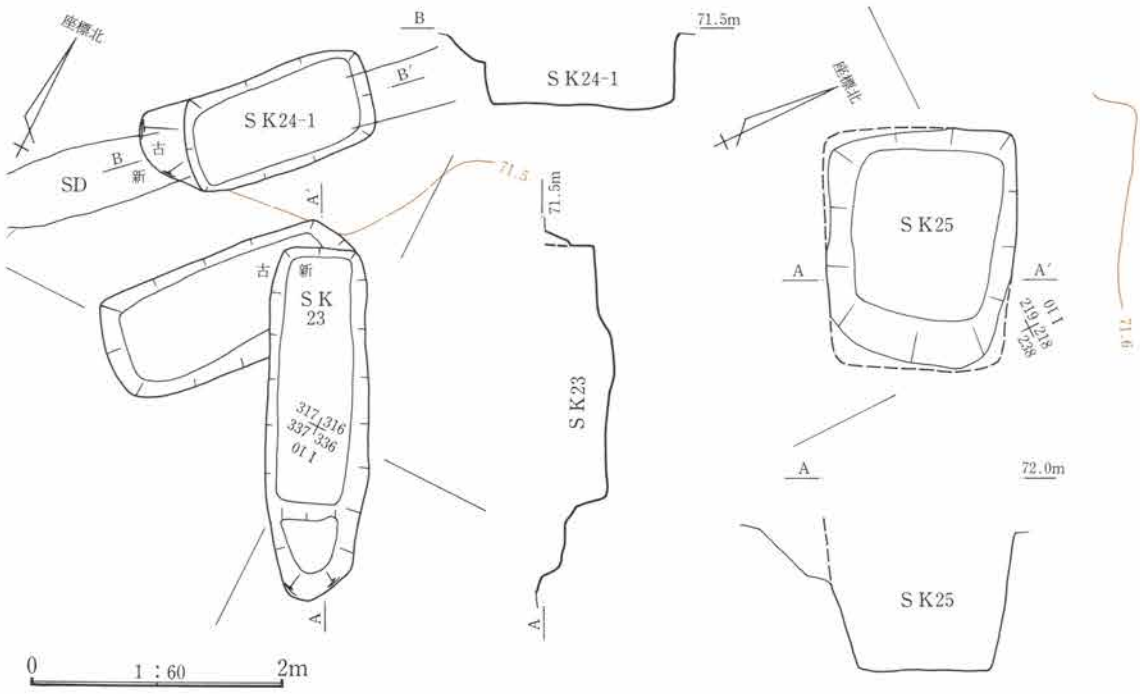
畑跡１は、Ｉ９区にありＳＤ12～22などＮ96°Ｅの方向性の複数期の畑サクと考えられる一群をとらえた。それらは、横断面形おおむねＵ字状を呈し、古墳１の墳丘裾部付近まで達し、ＳＤ12の存在が裾端を示唆される。出土遺物は、18世紀頃の陶・磁器片が存在する。

畑跡２はＩ・Ｊ10区にあり、ＳＤ54～67などＮ35°Ｅの方向性の複数期の畑サク跡と考えられる一群をとらえた。それは古墳７の墳丘側には達していない。おおむね横断面Ｕ字状を呈し、出土遺物は18世紀頃の陶・磁器片から近代軟質陶器片までがあり、下限はおよそ昭和20年頃まで達していると推定された。

畑跡３は、Ｉ10区にありＳＤ49～51などＮ55°Ｗの方向性の一群を据え、畑跡１と直交して接する。遺物量は少ないが、近世以降の埋土の質感である。このほかＨ７・８区のＳＤ26・28～34の一群は、18世紀頃の磁器片がＳＤ31より出土し、近世と考えられるが、他の２群は、近・現代遺物を含む後出時期の所産である。



第60図　Ⅰ・Ｊ９・10区穴跡遺構図



第61図　Ⅰ・Ｊ９・10穴跡遺構図

３．穴跡

穴跡は、Ⅰ・Ｊ９・10区とＨ７・８区とで27個所にＳＫとして通番を付した。おおむね出土遺物のある場合に番号を付したほか、報告作成時に必要になると予測される場合にも付した。そのため無番が存在するが、人為に起因する遺構のほか、自然の植物等に影響すると考えられる小穴もあり、その場合は旧時の表土近しが意味される。第60・61図中、平面図の細線は、重複遺構を示し、新・古の関係を作図してある。出土遺構については20～21頁を参照されたい。

ＳＫ12・13・15－２　　（第60図）

Ⅰ９区にあり、各々の基底面は、ローム層で、近世以降の埋土の質感があり、遺物はＳＫ15-2を除き近世近代遺物がある。ＳＫ13・15-2は地域に多い長方形土坑で底面はやや締まり、ヤマト芋など芋の作付け穴[(1)]、備蓄穴とも推定されるが。ＳＫ12は、調査面より0.9mの深さがあり、異形態であり、近接のSK13と同位置、共通の方向性を考えれば芋穴とは別の共通の機能か。

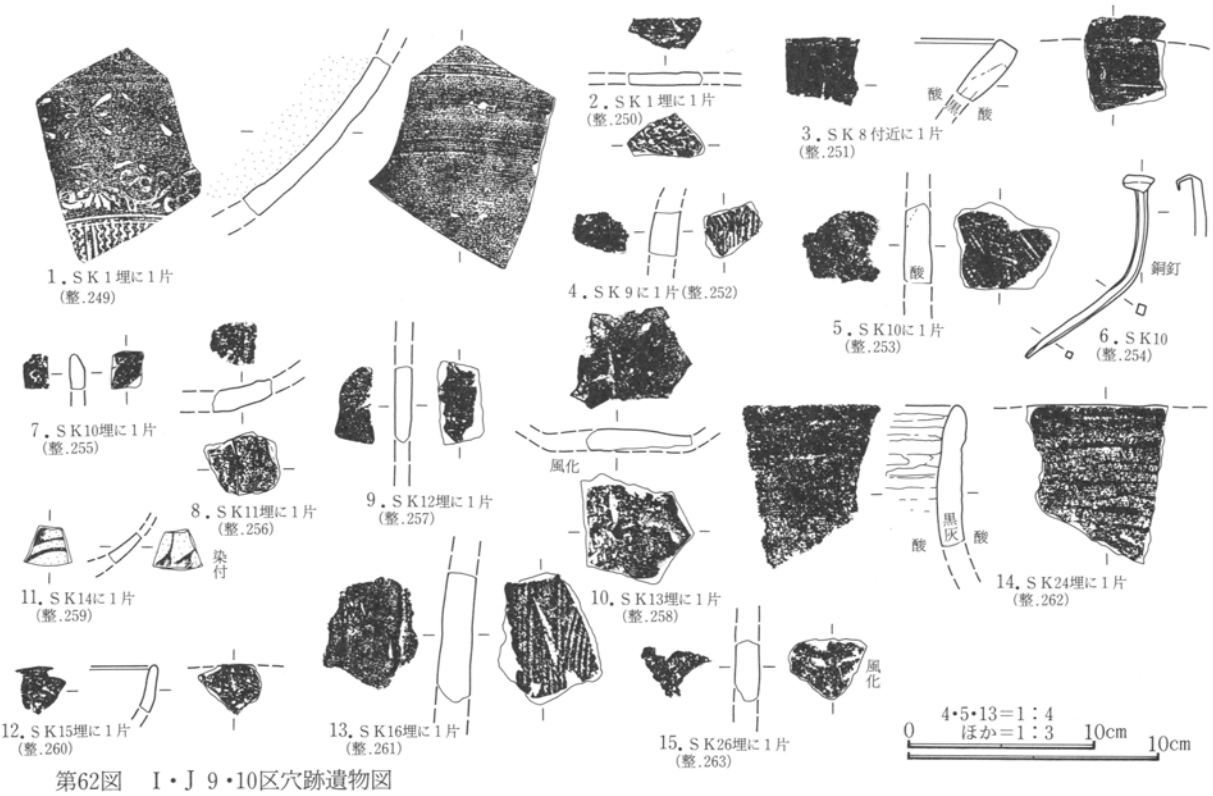
ＳＫ10・17、ＳＫ23・ＳＫ24－１　　（第60・61図）

Ⅰ・Ｊ９・10調査区にある。ＳＫ17は前出のＳＫ15-2と共通の長大な長方形土壙でＳＫ10・23・24-1は小規模な長方形土壙である。各々埋土の質感は近世以降で、ＳＫ10を除き遺物の出土はない。

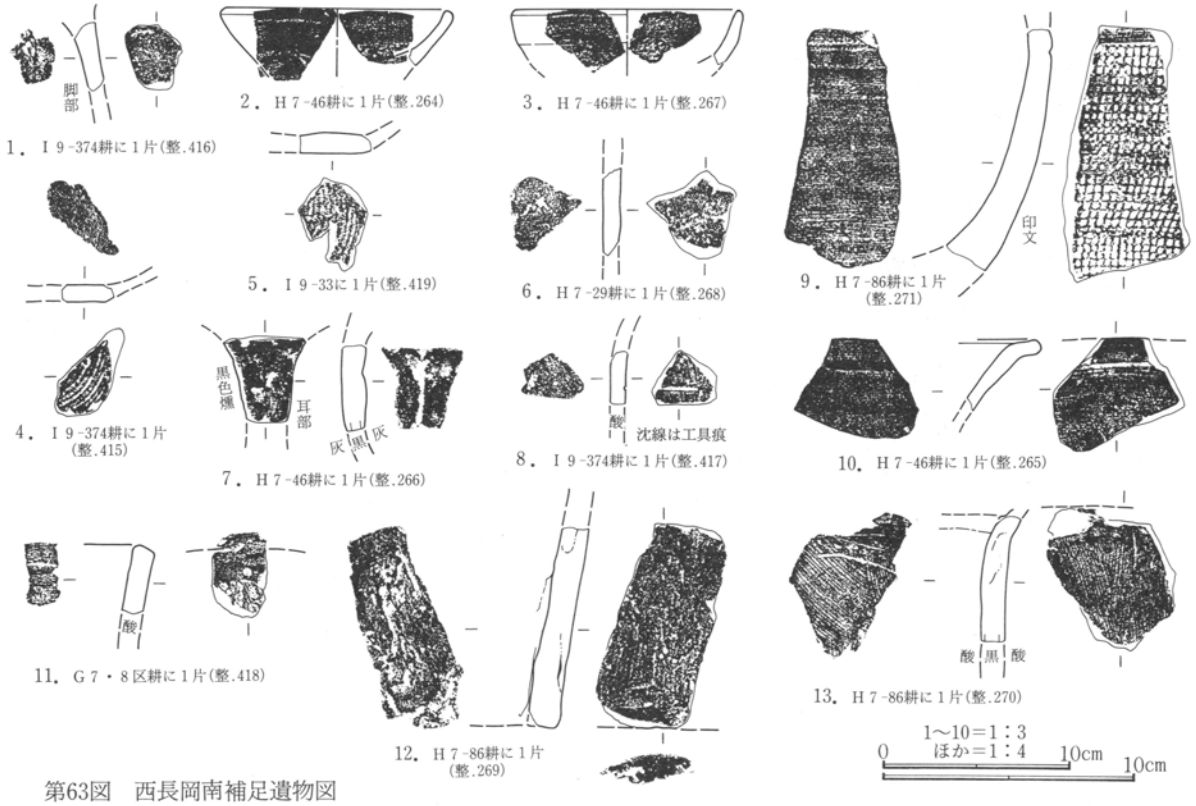
ＳＫ25　　（第61図）

Ⅰ10区にあり、ＳＫ12と類似の形態でしかも近世様の埋土の質感も共通するが、埋土中に古墳５か古墳７の埋葬施設に用いられた可能性もある大石が入っていた点が異なる。出土遺物はない。

(1)　大江正行「まとめ」『小角田前Ⅰ・Ⅱ遺跡』（㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団）1995苧穴の底面を締める方法は現代でも同じ。



第62図　I・J 9・10区穴跡遺物図



第63図　西長岡南補足遺物図

第３篇　菅塩西両台遺跡

第１章　発掘概要と例言・凡例

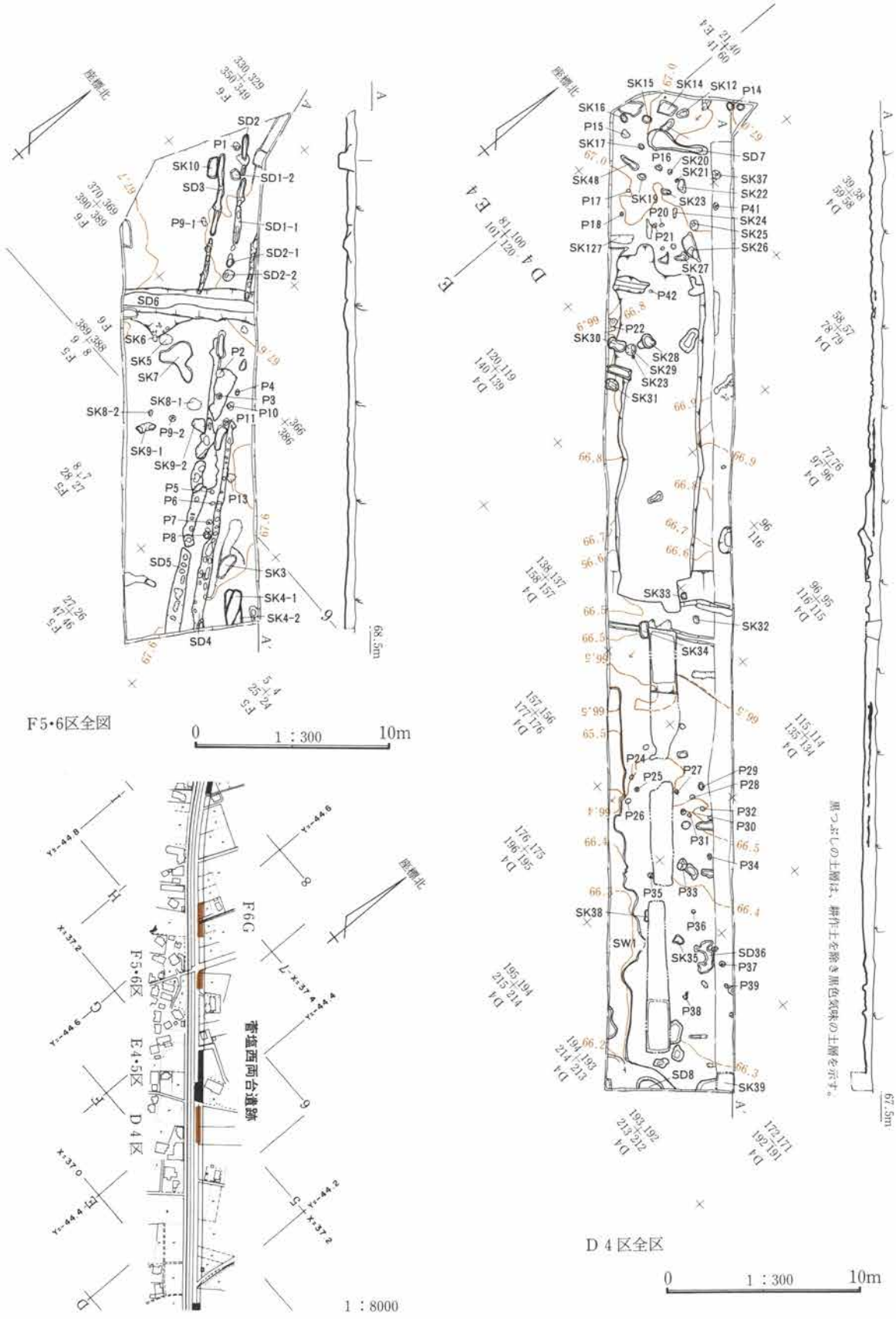
発掘調査場所は、Ｄ４区とＥ４・５区とＦ５・６区の発掘調査とＦ６区において立ち合い調査を実施した。Ｄ４区は大字成塚字街道北921、Ｅ４・５区は大字菅塩字東両台15、Ｆ５・６は東両台41、Ｆ６区は大字菅塩字西両台（南より数える）120-1・120-2・119・114番地において調査を行なった。調査期日は、平成５年７月23日～同年10月29日までの間の前半を菅塩西両台遺跡、後半を西長岡南遺跡の調査とした中で実施され、菅塩西両台遺跡の調査終了間際は、西長岡南遺跡の調査と併行する場面もあった。調査担当は、大江正行（当団主幹兼専門員）・松井龍彦（主任調査研究員）。黒沢照弘（調査研究員）である。主幹課は、当団調査研究部第４課・課長巾隆之である。調査面積は、Ｄ４区が332㎡、Ｅ４・５区が555㎡、Ｆ５・６区が196㎡で計1083㎡の発掘調査を行ない、Ｆ６区で420㎡の立ち合い調査を行なった。

調査対象地は現道および拡幅部分を含めた約10m強の幅であったが、現道を遮断しての場合は、遺構の究明が必要な場合に行うこととした。実際に全幅の拡張を行なったのはＥ４・５区調査区のうちＥ４区にかかる大溝遺構（ＳＤ33）についてであった。

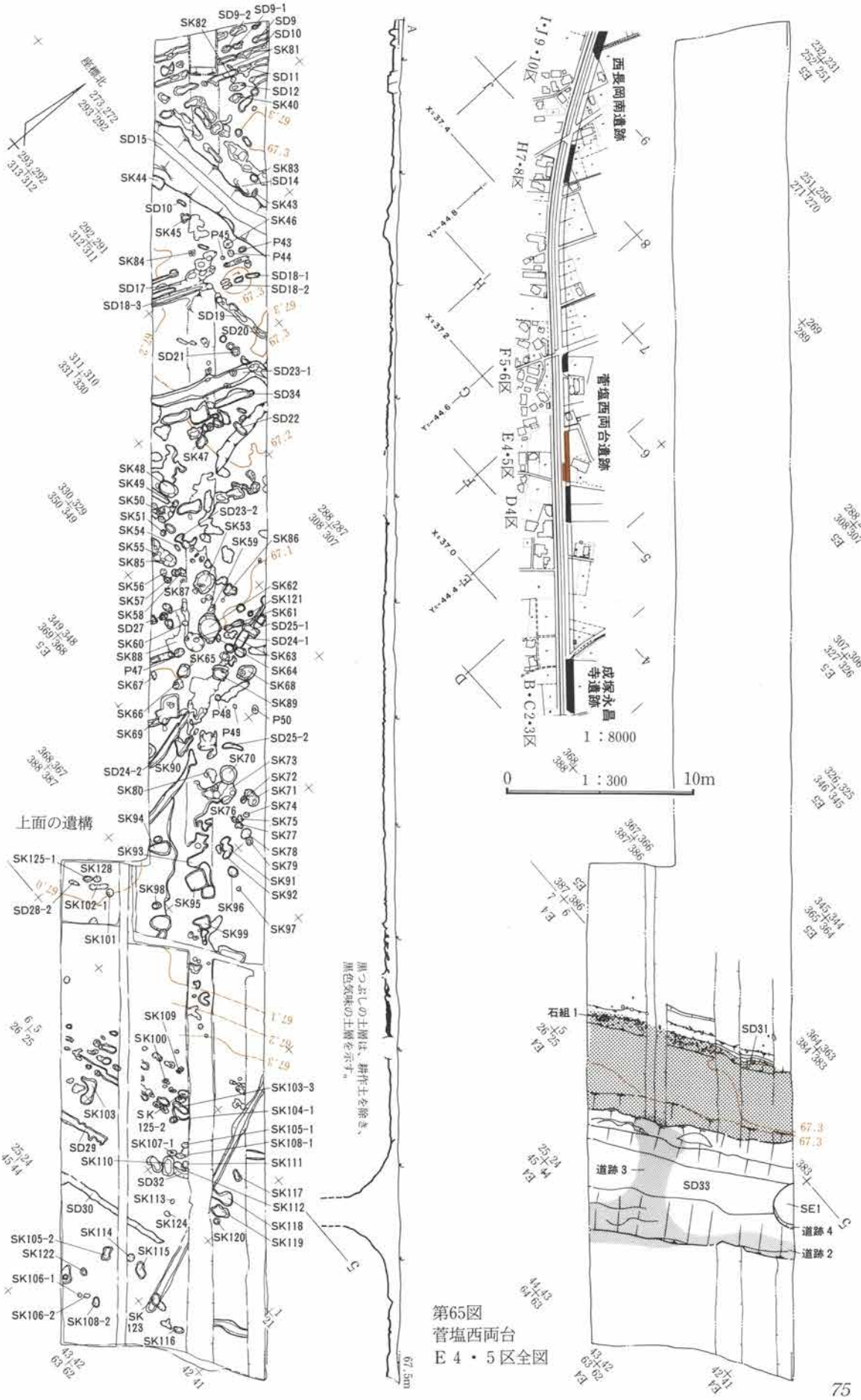
調査を必要とするか否かの判断は、平成４年12月の時点で成塚永昌寺遺跡の調査時に試堀調査もＤ４区、Ｅ４・５区について行なわれ、第64図中のＤ４区全図のうち下半にある３本の小トレンチ、第65図左半の全図中、調査区方向に沿い、全体を貫いているトレンチがそれである。その結果、Ｄ４区では、遺構の発見はなかったが土器少量の出土があり、Ｅ４・５区においては、大溝遺構が発見され、その埋土中位以下に浅間山Ｂ軽石（As－Ｂ・12世紀初頭頃）混りの土層を時期鍵層として、多量の鉄滓を伴ない存在することから、本調査に際しては拡張が必要であり、Ｆ５・６区においては試堀が必要であるとされた。

調査の作業経過は、当初南よりＤ４区から始められ、続いてＥ４・５区さらにＦ５・６区へと進められた。Ｄ４区は、表土層は、畑地として用いられた場所であり、約40～50cmの厚さである耕作土とその直下層を重機で削土し、以下を人力で排土した。重機による排土は１回のみで、人力による平面出しは２回前後行なった。基盤上面は、水性の二次堆積ローム層で、南半の最上面はシルト質に近い。層位上、注意されたのは、菅塩西両台遺跡・西長岡南遺跡中、ローム層上に旧表土に近い黒色土の存在があり、位置はＤ・Ｅ４・５区南半とＤ４区であり、第66図の中、トーンをもって示した。その時期は、ローム層との間にローム漸移層がほとんどないことから、As－Ｂの前代であったが、そう遡ぼる時代の生成ではないと思えた。同区発見の遺構は、溝跡（ＳＤ）２、穴跡（ＳＫ）29、小穴跡（Ｐ）28、道跡（ＳＷ）１を数えるが、調査区中程にあるＳＫ33・34の中間に20cm前後の地形変換部が存在し、それは現在の畑地境に一致し、おそらくは、長年の畑地耕作により生じたのであろう。

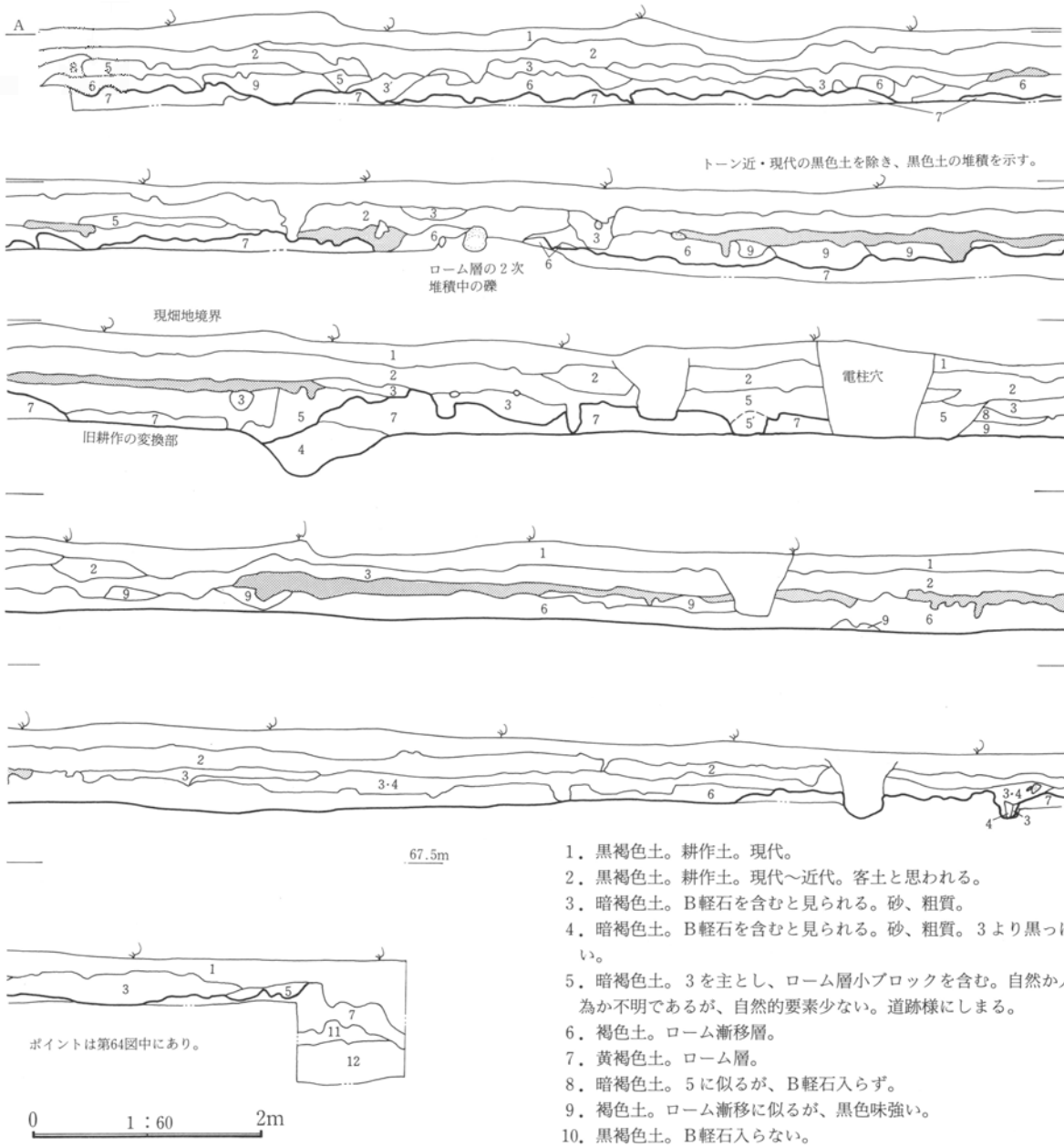
Ｅ４・５区は、南側のＤ区との間で、菅塩字東両台と成塚字街道北との間で小字界となっている現道がある。表土は、調査地の南半が庭地、北半が畑地であった関係から、北半は、耕作土と直下層が南半より厚く堆積していた。まずは重機で表土層を除去した。除去した直下は、ローム層上面でもあったが、その面で１回、ローム層が明瞭になった面でもう１回・都合２回の遺構の平面出しを行なった。２回目の平面出しの際、旧表土に相当する黒色土が第67図のトーンのように存在していた。基盤上面はローム層であるが水性堆積かもしれないが数10cm下方には漂白化した粘性のローム層、さらに礫層へと続いていた。第67図中、黒色土は、トーン２種で示したが、北側のそれは質が密であり、南側は質が粗であった。発見された遺構数は、溝跡



第64図　菅塩西両台Ｆ５・６区、Ｄ４区全図



第65図
菅塩西両台
E４・５区全図

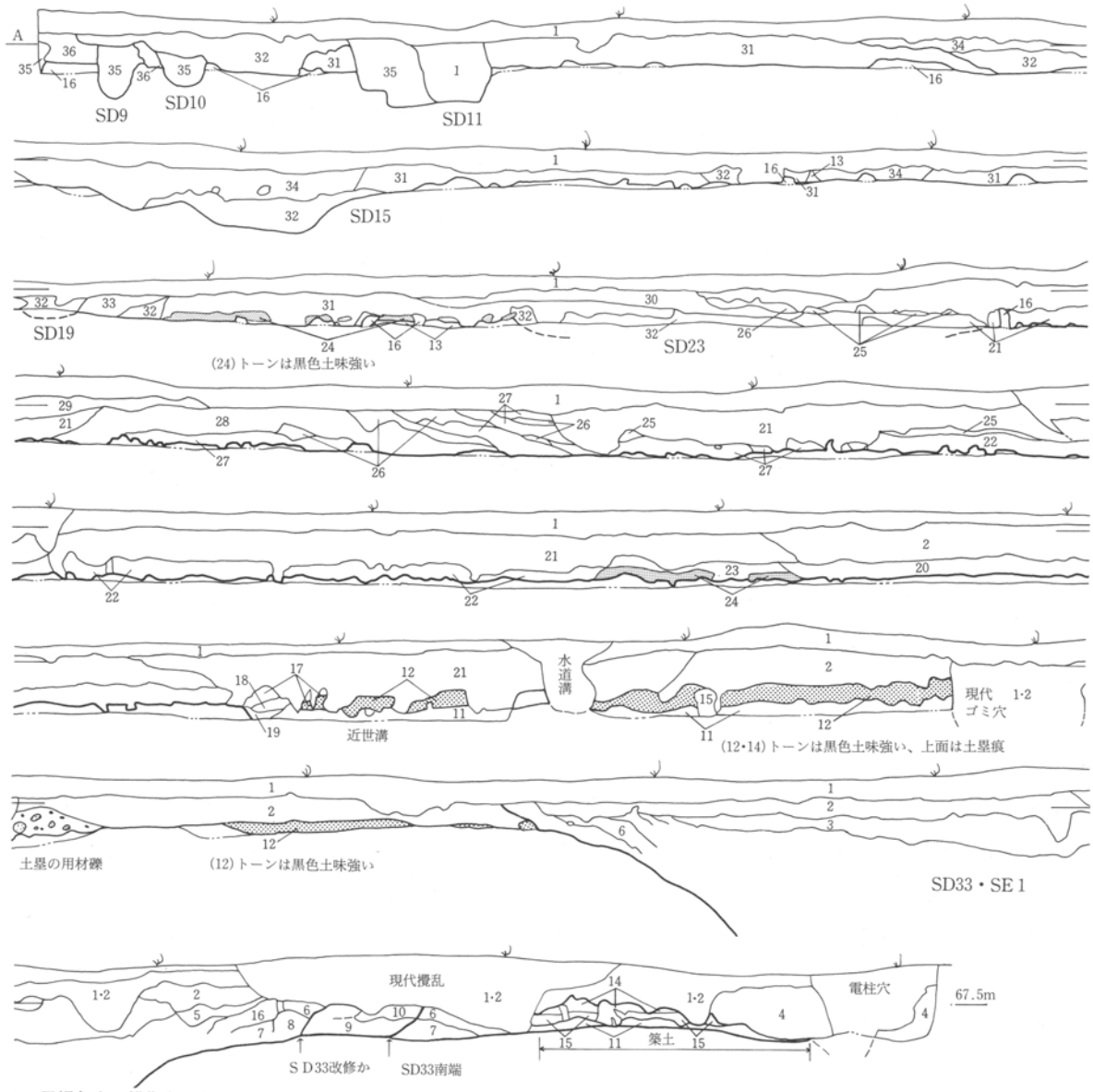


1．黒褐色土。耕作土。現代。
2．黒褐色土。耕作土。現代～近代。客土と思われる。
3．暗褐色土。B軽石を含むと見られる。砂、粗質。
4．暗褐色土。B軽石を含むと見られる。砂、粗質。3より黒っぽい。
5．暗褐色土。3を主とし、ローム層小ブロックを含む。自然か人為か不明であるが、自然的要素少ない。道跡様にしまる。
6．褐色土。ローム漸移層。
7．黄褐色土。ローム層。
8．暗褐色土。5に似るが、B軽石入らず。
9．褐色土。ローム漸移に似るが、黒色味強い。
10．黒褐色土。B軽石入らない。

第66図　D４区の調査区北東壁土層断面図

(ＳＤ)41、穴跡（ＳＫ)95、小穴跡（Ｐ）８、道跡３、井戸跡（ＳＥ）１に番号をあたえた。この調査区での大きな遺構はＳＤ33とその北側に取り付く土塁の存在であり、時期は10世紀後半から11世紀前半頃の機能である。巨視的に見れば東に隣接の住宅や地境・現道走行に近似した方向性にあり、４～５m離れるものの、字東両台と字街道北とを分ける境もこの大溝に起因することも想像に難くなかった。

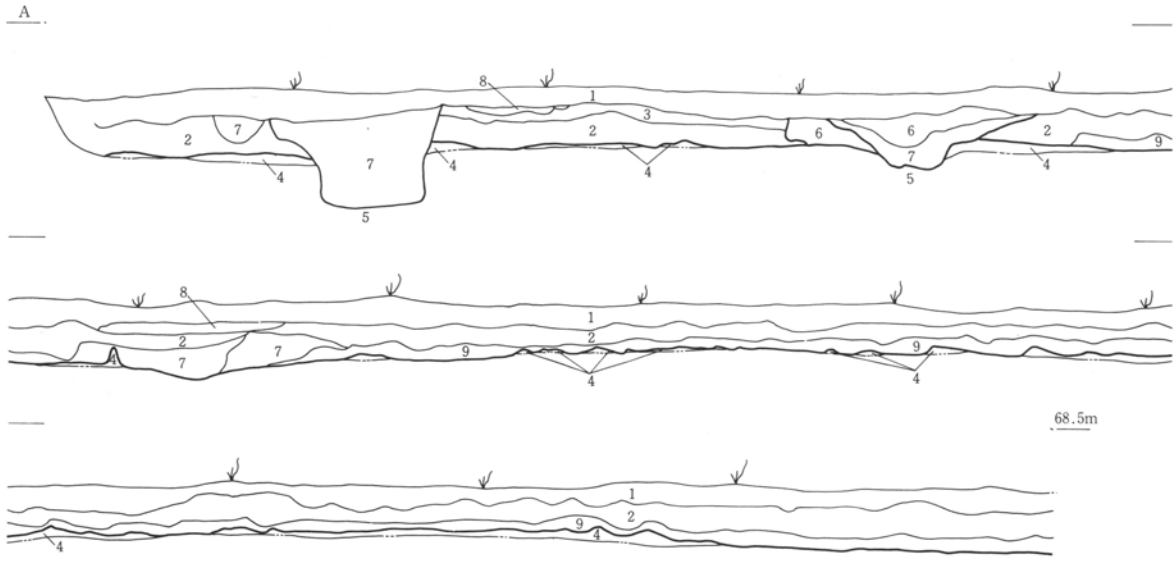
Ｆ５・６区とＥ４・５区との間80mは、住宅等を含み、用地未解決の場所であった。Ｆ５・６区は、前出ＳＤ33の内郭側が以北にあると取り付く土塁側の判断から、トレンチ調査でなく、用地取得幅で行なうこととした。調査地は、北側が畑地で、南側が桑園であった。表土は、耕作土と直下層を重機で削土した。直下はローム層上面であった。ローム層上面は、順堆積に思える褐色味の強いローム層であった。遺構数量は、溝跡（ＳＤ）８、穴跡（ＳＫ)12、小穴跡（Ｐ)14に遺構番号をあたえた。当初、意識していたＳＤ33・土塁に対



1．黒褐色土。耕作土。客土か。トーンは近代以降堀り込み。
2．暗褐色土。B軽石含む。江戸時代頃の耕作土か。
3．暗褐色土。B軽石含む。
4．暗褐色土。B軽石含む。溝埋土か。
5．暗褐色土。B軽石含む。2に近い。
6．黒褐色土。B軽石不明。2に近いが黒色味あり。鉄滓含む。
7．暗褐色土。B軽石不明。6と異なり黒味弱い。
8．暗褐色土。B軽石不明。6と異なり黒味弱い。
9．暗褐色土。B軽石不明。6と異なり黒味弱い。
10．暗褐色土。B軽石不明。6と異なり黒味弱い。
11．明褐色土。ローム層漸移層。
12．黒褐色土。旧黒色土か。
13．明褐色土。礫を主とする。ベースはローム層漸移。
14．明褐色土。ローム層を主とする築土層。やわらかい。
15．黒褐色土。旧黒土(12)を主とする築土層。やわらかい。
16．明褐色土。ローム層。
17．暗褐色土。B軽石を含む。砂質。
18．暗褐色土。B軽石を含む。砂質。
19．暗褐色土。B軽石を含む。砂質。
20．暗褐色土。B軽石を含む。砂質。2より黒い。
21．暗褐色土。B軽石を含む。砂質。
22．暗褐色土。B軽石を含む。砂質。
23．暗褐色土。B軽石を含む。砂質。
24．暗褐色土。B軽石を含む。砂質。やや黒味あり。
25．暗褐色土。B軽石を含む。砂質。やや黒味あり。固く締る。
26．明褐色土。B軽石を含む。砂質。ローム層ブロック含む。固く締る。
27．暗褐色土。B軽石を含む。砂質。
28．暗褐色土。B軽石を含む。砂質。
29．暗褐色土。B軽石を含む。砂質。
30．暗褐色土。B軽石を含む。砂質。
31．暗褐色土。B軽石を含む。砂質。
32．暗褐色土。B軽石を含む。砂質。ローム層ブロック入る。軟らか。
33．暗褐色土。B軽石を含む。砂質。
34．暗褐色土。B軽石を含む。砂質。
35．明褐色土。B軽石を含む。軟らか。
36．暗褐色土。B軽石を含む。

0　1：60　2m

第67図　E4・5区の北東壁土層断面図



1．黒褐色土。砂質。現代。
2．暗褐色土。砂質。近世以降。
3．暗褐色土。砂質。近世以降。
4．暗黄灰色土。わずかに粘性。ローム層漸移。
5．黄灰色土。ローム層。
6．黄灰色土。ローム層を主とし、黒褐色土を混じえる。
7．暗褐色土。暗褐色土を主とし、ローム層ブロックを混じえる。
8．暗褐色土。暗褐色土を主とし、ローム層ブロックを混じえる。7より固くしまる。
9．黒褐色土。砂質。中世頃の表土的な有機質土。

ポイントは第64図中にあり。

0　1：60　2m

第68図　F５・６区の調査区北東壁土層断面図

する内郭部の左証は得られなかった。

ＳＤ33・土塁から得られた内郭部の推定は、北縁部に大溝の存在が必ずあるはずであり、Ｆ５・６区以北にも内郭部の連続と、さらに以北に北限の大溝の存在を考えた。その解決策としてＦ６区内の幅員を重機でローム層上面を出し、その結果を踏まえて考えることにした。場所は大字菅塩字西両台（南より数える）120-1・120-2・119・114番地である。内郭が仮りに二町四方（約216m）であれば発見される公算が高いはずである。しかし、結果は発見できなかった。それについて明確な答えはないが、調査事務所のプレハブを設けたＧ６区の一角は、耕作土下に礫を含む水性堆積の土壌が堆積し、地形上も少し低いと考えられたため、郭内の北限は、Ｇ６区まで達していないと想像された。そのように考えると119・114番地のあたりがやはり北限としてふさわしい場所ということにもなり、今後への課題となった。Ｆ６区内では確認面を、はっきりとしたローム層上面としたため、発見された遺構は少なく、As－Ｂを含む中世以降の溝跡が一条発見されている。

なお、調査方法や、作図上の凡例・例言に関する内容は14・15頁で示した西長岡南遺跡と共通するので参照されたい。発見された遺構概要は次表のとおりである。

穴跡（ＳＫ）　（第64・65図）

名　称	位　置	規　模（m）			備　考
		長さ（長辺）	幅	深さ	
ＳＫ３	Ｆ６	1.44	0.60	0.60	中世以降か。縄文土器・中世土師質土器皿、第80図。
ＳＫ４－１	Ｆ６	2.00	0.64	0.48	第74図、中世以降。ＳＫ４として陶器・中世土師質土器皿、第80図。
ＳＫ４－２	Ｆ６	1.96	0.88	0.49	上記に同じ。
ＳＫ５	Ｆ６	0.66	0.60	0.14	現代撹乱。
ＳＫ６	Ｆ６	0.36	0.24	0.40	現代撹乱。
ＳＫ７	Ｆ６	2.00	1.20	0.16	古代以前～縄文。縄文土器。不定形。
ＳＫ８－１	Ｆ６	0.64	0.58	0.05	古代以前～縄文。縄文土器。
ＳＫ８－２	Ｆ６	1.02	0.32	0.40	近代以降か。
ＳＫ９－１	Ｆ６	0.42	0.22	0.50	近代以降。

穴跡（ＳＫ）　　（第64・65図）

名　称	位　置	規　模（m）			備　考
		長さ（長辺）	幅	深さ	
ＳＫ９－２	Ｆ６区	0.80	0.64	0.50	中世以降か。
ＳＫ10	Ｆ６区	1.12	0.52	0.39	第74図、近代以降か。
ＳＫ11	Ｆ６区	1.28	0.42	0.20	近代以降か。
ＳＫ12	Ｄ４区	0.68	0.40	0.16	縄文時代か。
ＳＫ13	Ｄ４区	0.80	0.40	0.16	縄文時代か。
ＳＫ14	Ｄ４区	0.86	0.64	0.16	縄文時代か。
ＳＫ15	Ｄ４区	0.46	0.42	0.60	中世以降。
ＳＫ16	Ｅ４区	0.42	0.34	0.70	中世以降。
ＳＫ17	Ｄ４区	0.30	0.30		中世以降。
ＳＫ18	Ｄ４区	1.04	0.22		中世以降。
ＳＫ19	Ｄ４区	0.42	0.28		縄文時代か。
ＳＫ20	Ｄ４区	0.22	0.22		中世以降。
ＳＫ21	Ｄ４区	0.26	0.24		縄文時代以降。
ＳＫ22	Ｄ４区	0.80	0.34	0.15	縄文時代か。
ＳＫ23	Ｄ４区	0.50	0.26		中世。
ＳＫ24	Ｄ４区	0.50	0.16		中世。
ＳＫ25	Ｄ４区	0.48	0.38		中世。
ＳＫ26	Ｄ４区	1.29	0.64		現代攪乱か。鉄製遺物、第76図。
ＳＫ27	Ｄ４区	0.64	0.26		現代攪乱か。
ＳＫ28	Ｄ４区	0.70	0.62		縄文時代以降か。
ＳＫ29	Ｄ４区	0.54	0.48		縄文時代以降。
ＳＫ30	Ｄ４区	0.88	0.52		中世。
ＳＫ31	Ｄ４区	0.90	0.52		近世以降。
ＳＫ32	Ｄ４区	0.41	0.16	0.10	中世以降か。
ＳＫ33	Ｄ４区	0.36	0.28	0.80	現代攪乱か。
ＳＫ34	Ｄ４区	0.86	0.44	0.11	近代以降。
ＳＫ35	Ｄ４区	0.56	0.48		近世以降。
ＳＫ36	Ｄ４区	1.54	0.40	0.09	近世。不定形。
ＳＫ37	Ｄ４区	0.48	0.42	0.21	中世以降。
ＳＫ38	Ｄ４区	0.56	0.16	0.11	近世。
ＳＫ39	Ｄ４区	2.20＋α	0.50	0.17	幅0.5は＋αである。
ＳＫ40	Ｅ５区	0.56	0.40	0.12	近世以降か。
ＳＫ41	Ｅ５区	0.38	0.32	0.06	縄文時代か。
ＳＫ42	Ｅ５区	0.60	0.24	0.16	近世以降か。
ＳＫ43	Ｅ５区	0.46	0.24	0.11	近世以降か。
ＳＫ44	Ｅ５区	0.66	0.58		
ＳＫ45	Ｅ５区	1.10	0.28	0.09	近世以降か。不定形。
ＳＫ46	Ｅ５区	0.46	0.46		縄文時代か。
ＳＫ47	Ｅ５区	0.84	0.42	0.08	近世以降。
ＳＫ48	Ｅ５区	1.02	0.74	0.20	第73図、中世以降か。
ＳＫ49	Ｅ５区	0.34	0.30	0.08	中世以降か。
ＳＫ50	Ｅ５区	1.28	1.10	0.17	近世以降。不定形。
ＳＫ51	Ｅ５区	0.32	0.28	0.09	近世以降か。
ＳＫ53	Ｅ５区	1.20	0.92	0.16	第73図、中世以降。円形。
ＳＫ54	Ｅ５区	0.40	0.20	0.18	近世以降か。
ＳＫ55	Ｅ５区	0.48		0.05	近世以降か。不定形。
ＳＫ56	Ｅ５区	0.38	0.34	0.09	近代以降。
ＳＫ57	Ｅ５区	0.42	0.30	0.24	近世以降。
ＳＫ58	Ｅ５区	0.38	0.24	0.21	近世以降。
ＳＫ59	Ｅ５区	0.44	0.36	0.16	近世以降か。
ＳＫ60	Ｅ５区	0.34	0.26	0.16	近世以降か。
ＳＫ61	Ｅ５区	1.18	0.82	0.34	近代、円形。
ＳＫ62－１	Ｅ５区	1.12	0.82		
ＳＫ62－２	Ｅ５区	0.90	0.90	0.36	第73図、中世か、不定形。
ＳＫ63	Ｅ５区	0.52		0.13	近代以降か。円形。
ＳＫ64	Ｅ５区	0.40	0.22	0.06	近世以降。
ＳＫ65	Ｅ５区	0.74	0.60	0.13	中世以降か。
ＳＫ66	Ｅ５区	0.50	0.48	0.29	中世。
ＳＫ67	Ｅ５区	0.46	0.24	0.05	中世以降か。

穴跡（ＳＫ）　　（第64・65図）

名　称	位　置	規　模（m）			備　考
		長さ（長辺）	幅	深さ	
ＳＤ68	Ｅ５区	0.86	0.64	0.31	第73図、縄文時代。近円形。
ＳＫ69	Ｅ５区	1.24	1.24	0.05	近世以降か。不定形。
ＳＫ70	Ｅ５区	0.90	0.80	0.97	第73図、中世か。円形。
ＳＫ71	Ｅ５区	0.92	0.40	0.15	中世以降。
ＳＫ72	Ｅ５区	0.40	0.26	0.19	中世以降か。
ＳＫ73	Ｅ５区	1.84	1.16	0.15	縄文時代か、不定形。
ＳＫ74	Ｅ５区	0.24	0.22	0.05	近世以降か。
ＳＫ75	Ｅ５区	0.34	0.20	0.03	
ＳＫ76	Ｅ５区	0.28	0.22	0.04	近世以降、不定形。
ＳＫ77	Ｅ５区	0.42	0.28	0.03	
ＳＫ78	Ｅ５区	0.56	0.42	0.03	
ＳＫ79	Ｅ５区	0.34	0.28	0.09	近世以降か。
ＳＫ80	Ｅ５区	0.78	0.36	0.10	縄文時代か。
ＳＫ81	Ｅ５区	0.38＋α	0.16	0.05	近世以降か。
ＳＫ82	Ｅ５区	0.26	0.24	0.12	近世以降か。
ＳＫ83	Ｅ５区	0.34	0.32	0.17	近世以降か。
ＳＫ84	Ｅ５区	0.28	0.24	0.05	近世以降か。不定形。
ＳＫ85	Ｅ５区	1.26	0.66	0.04	近世以降か。
ＳＫ86	Ｅ５区	0.24	0.20	0.20	近世以降。
ＳＫ87	Ｅ５区	0.28	0.18	0.11	近世以降か。
ＳＫ88	Ｅ５区	2.60＋α	1.04	0.12	近世以降。溝状。幅1.04は＋αである。
ＳＫ89	Ｅ５区	0.72	0.60	0.09	近世以降か。
ＳＫ90	Ｅ５区	0.34	0.16	0.04	中世以降。
ＳＫ91	Ｅ５区	0.86	0.56	0.13	
ＳＫ92	Ｅ５区	0.50	0.30	0.05	
ＳＫ93	Ｅ５区	5.48		0.10	不定形。
ＳＫ94	Ｅ５区	1.06＋α	0.66		近世以降か。
ＳＫ95	Ｅ５区	0.98	0.96	0.08	中世以降。
ＳＫ96	Ｅ５区	0.44	0.38	0.05	近世以降か。
ＳＫ97	Ｅ５区	0.26	0.24	0.04	
ＳＫ98	Ｅ５区	0.44	0.40	0.07	縄文時代以降か。
ＳＫ99	Ｅ５区	0.90	0.60	0.06	近世以降か。不定形。
ＳＫ100	Ｅ４区	0.44	0.24	0.25	
ＳＫ101	Ｅ５区	0.38	0.36	0.31	近世以降か。
ＳＫ102-１	Ｅ５区	0.28	0.20	0.13	近世以降か。
ＳＫ102-２	Ｅ５区	0.34	0.28	0.15	近世以降か。
ＳＫ103-１	Ｅ４区	1.38	0.64	0.13	近世以降か。不定形。
ＳＫ103-２	Ｅ４区	—	—	—	ＳＫ103－１に同じ。
ＳＫ103-３	Ｅ４区	0.98	0.24		
ＳＫ104-１	Ｅ４区	0.42	0.34	0.31	中世以降か。
ＳＫ105-１	Ｅ４区	0.34＋α	0.26	0.14	近世以降か。
ＳＫ105-２	Ｅ４区	0.68	0.34	0.05	縄文時代～古代以前。
ＳＫ106-１	Ｅ４区	0.22	0.20	0.08	縄文時代～古代以前。
ＳＫ106-２	Ｅ４区	0.38＋α	0.24	0.06	
ＳＫ107-１	Ｅ４区	0.44	0.34	0.10	中世以降か。不定形。
ＳＫ107-２	Ｅ４区	0.56	0.34	0.70	縄文時代以降～古代以前。
ＳＫ108-１	Ｅ４区	0.52	0.26	0.31	
ＳＫ108-２	Ｅ４区	0.30	0.24	0.10	
ＳＫ109	Ｅ４区	0.38	0.18	0.16	近世以降か。幅0.18は＋αである。
ＳＫ110	Ｅ４区	1.04	0.56	0.17	中世以降か。
ＳＫ111	Ｅ４区	0.28＋α	0.26	0.07	近世以降か。
ＳＫ112	Ｅ４区	0.82＋α	0.30	0.04	近世以降か。
ＳＫ113	Ｅ４区	0.28	0.24	0.08	
ＳＫ114	Ｅ４区	0.44＋α	0.40	0.03	縄文時代以降～古代以前。
ＳＫ115	Ｅ４区	0.90	0.42	0.08	古代か。
ＳＫ116	Ｅ４区	0.46	0.36	0.10	縄文時代以降～古代以前。
ＳＫ117	Ｅ４区	0.64	0.32	0.25	近世以降。
ＳＫ118	Ｅ４区	1.20＋α	0.52	0.30	近世以降。不定形。
ＳＫ120	Ｅ４区	0.30	0.30	0.18	近世以降。

ＳＫ121	Ｅ５区	0.26	0.26	0.17	近世以降か。
ＳＫ122	Ｅ４区	0.38	0.36	0.06	縄文時代以降～古代以前。
ＳＫ123	Ｅ４区	0.66	0.42	0.15	古代以降。
ＳＫ124	Ｅ４区	0.36	0.26		近世以降。
ＳＫ125-１	Ｅ５区	0.44	0.32	0.14	近世以降か。
ＳＫ125-２	Ｅ４区	0.40＋α	0.18		
ＳＫ127	Ｄ４区	1.10	0.34		近世以降。
ＳＫ128	Ｅ５区	0.40	0.30	0.15	近世以降か。

溝跡（ＳＤ）　（第64・65図）

名　称	位　置	規　模（m）			備　考
		長さ（長辺）	幅	深さ	
ＳＤ１－１	Ｆ６区	1.98	0.28		ＳＤ２に続く。
ＳＤ１－２	Ｆ６区	1.38（7.82）	0.22		7.82mは、ＳＤ１－１・同２－１・同２－２含む。（　）は総長を示す。
ＳＤ２－１	Ｆ６区	0.74	0.34		
ＳＤ２－２	Ｆ６区	0.60	0.56		近代以降か。
ＳＤ３	Ｆ６区	4.26（7.40）	0.24	0.16	（　）は総長を示し、4.26は名称記入部分を示めす。
ＳＤ４	Ｆ６区	15.94	0.56	0.36	近代以降か。
ＳＤ５	Ｆ６区	15.90	0.64	0.50	近代以降か。
ＳＤ６	Ｆ６区	6.78	1.64	0.12	第74図、中世以降か。
ＳＤ７	Ｄ４区	3.14	0.74	0.68	縄文時代以降～古代以前。
ＳＤ８	Ｄ４区	1.36	0.60		幅は0.60＋αである。
ＳＤ９	Ｅ５区	0.82（6.40）	0.30	0.26	（　）は総長を示めす。
ＳＤ９－１	Ｅ５区	0.56	0.30	0.21	近世以降か。
ＳＤ９－２	Ｅ５区	0.44	0.34	0.25	近世以降か。
ＳＤ10	Ｅ５区	1.82（6.20）	0.28	0.25	近世以降か。（　）は総長を示めす。
ＳＤ11－１	Ｅ５区	1.30（6.90）	0.36	0.41	近世以降か。（　）は総長を示めす。
ＳＤ11－２	Ｅ５区	0.66	0.34	0.20	近世以降か。
ＳＤ11－３	Ｅ５区	0.84＋α	0.34	0.24	近世以降か。
ＳＤ11－４	Ｅ５区	0.80＋α	0.36	0.33	近世以降か。
ＳＤ12	Ｅ５区	4.66	0.42	0.20	近世以降か。
ＳＤ12－３	Ｅ５区	0.74	0.42	0.26	近世以降か。
ＳＤ13－１	Ｅ５区	0.60	0.46	0.24	近世以降か。
ＳＤ14－１	Ｅ５区	1.02	0.24	0.16	近世以降か。
ＳＤ14－２	Ｅ５区	0.26	0.24	0.19	近世以降か。
ＳＤ14－３	Ｅ５区	3.36	0.44	0.36	近世以降か。ＳＤ14－４を含む。
ＳＤ15	Ｅ５区	7.88	2.02	0.33	近世以降か。ＳＤ15－１・同15－２を含む。
ＳＤ16	Ｅ５区	0.86	0.16	0.12	近世以降。
ＳＤ17	Ｅ５区	5.34	0.42	0.13	近世以降。ＳＤ17-1・同17-2・同17-3を含。
ＳＤ18－１	Ｅ５区	0.72（5.82）	0.24	0.19	近世以降か。（　）は総長を示す。
ＳＤ18－２	Ｅ５区	0.52	0.30	0.25	近世以降。
ＳＤ18－３	Ｅ５区	2.52	0.30	0.21	近世以降か。
ＳＤ19	Ｅ５区	2.62	0.42	0.21	近世以降か。
ＳＤ20	Ｅ５区	2.96	1.80	0.15	近世以降か。
ＳＤ21	Ｅ５区	0.82	0.32	0.18	近世以降か。
ＳＤ22	Ｅ５区	0.82	0.24	0.14	近世以降か。
ＳＤ23－１	Ｅ５区	1.46	0.68	0.32	
ＳＤ23－２	Ｅ５区	0.20	0.34	0.15	近世以降か。
ＳＤ24－１	Ｅ５区	4.08＋α	0.40	0.06	
ＳＤ24－２	Ｅ５区	3.04＋α	0.40	0.04	近世以降か。幅0.40は＋αである。
ＳＤ25－１	Ｅ５区	0.90	0.36	0.12	第73図、近世以降か。
ＳＤ25－２	Ｅ５区	1.14	0.22	0.10	中世以降か。
ＳＤ26	Ｅ５区	5.90	0.64	0.27	近世以降か。
ＳＤ27	Ｅ５区	1.32	0.30	0.18	中世以降か。
ＳＤ28－１	Ｅ５区	0.99	0.21		近世以降か。
ＳＤ28－２	Ｅ５区	0.82	0.22	0.12	近世以降か。
ＳＤ29－１	Ｅ４区	2.74	0.42	0.15	近世以降か。ＳＤ29－２含む。
ＳＤ30	Ｅ４区	6.50	0.58		
ＳＤ30－１	Ｅ４区	6.40	0.28	0.10	中世以降か。
ＳＤ31	Ｅ４区	2.12	0.22	0.14	中・近世か。
ＳＤ32	Ｅ４区	0.84＋α	0.22	0.08	
ＳＤ33	Ｅ４区	11.65	6.72	2.40	第71・72図、10世紀末～11世紀前半頃、ＳＥ01が切る。遺物多し、第76～79図。

ＳＤ34	Ｅ５区	3.66	0.48	0.23	近世以降か。

小穴跡（Ｐ）　（第64・65図）

名　称	位　置	規　模（m）			備　考
		長さ（長辺）	径	深さ	
Ｐ１	Ｆ６区	0.40	0.32		近代以降。
Ｐ２	Ｆ６区	0.44	0.44		近代以降か。
Ｐ３	Ｆ６区	0.36	0.28	0.01	
Ｐ４	Ｆ６区	0.32	0.22	0.12	近世以降か。
Ｐ５	Ｆ６区	0.40	0.30	0.08	近世以降か。
Ｐ６	Ｆ６区	0.28	0.22	0.04	近世以降か。
Ｐ７	Ｆ６区	0.36	0.30	0.26	近世以降か。
Ｐ８	Ｆ６区	0.38	0.38	0.25	現代か。
Ｐ９－１	Ｆ６区	0.54	0.22		近世以降か。
Ｐ９－２	Ｆ６区	0.34	0.32	0.11	近代以降か。
Ｐ10	Ｆ６区	0.42	0.36	0.11	近代以降か。ＳＤ４の一部を占める。
Ｐ11	Ｅ６区	0.38	0.28	0.11	
Ｐ12	Ｅ６区	0.30	0.16	0.05	
Ｐ13	Ｅ６区	0.48	0.38	0.12	近世以降か。
Ｐ14	Ｄ４区	0.42	0.36		縄文時代以降～古代以前か。
Ｐ15	Ｄ４区	0.40	0.38		中世以降か。
Ｐ16	Ｄ４区	0.40	0.30		縄文時代以降～古代以前か。
Ｐ17	Ｄ４区	0.20	0.18		
Ｐ18	Ｄ４区	0.26	0.20		縄文時代以降～古代以前か。
Ｐ19	Ｄ４区	0.20	0.16		中世。
Ｐ20	Ｄ４区	0.30	0.26		中世。
Ｐ21	Ｄ４区	0.18	0.18		中世。
Ｐ22	Ｄ４区	0.64	0.38		中世。
Ｐ23	Ｄ４区	0.14	0.14		現代か。
Ｐ24	Ｄ４区	0.32	0.24	0.13	中世。
Ｐ25	Ｄ４区	0.30	0.24	0.22	第69図、中世。
Ｐ26	Ｄ４区	0.28	0.24	0.16	第69図、中世。
Ｐ27	Ｄ４区	0.24	0.18	0.17	中世。
Ｐ28	Ｄ４区	0.26	0.20	0.22	近世以降。
Ｐ29	Ｄ４区	0.40	0.26	0.23	
Ｐ30	Ｄ４区	0.26	0.22	0.31	中世。
Ｐ31	Ｄ４区	0.22	0.20	0.39	第69図、中世。
Ｐ32	Ｄ４区	0.30	0.22	0.22	第69図、中世。
Ｐ33	Ｄ４区	0.18	0.16	0.19	第69図、中世。
Ｐ34	Ｄ４区	0.18	0.22	0.38	第69図、中世。
Ｐ35	Ｄ４区	0.32＋α	0.26	0.37	第69図、中世。
Ｐ36	Ｄ４区	0.20	0.16	0.18	中世。
Ｐ37	Ｄ４区	0.34	0.26	0.23	第69図、中世。
Ｐ38	Ｄ４区	0.40	0.14	0.10	中世。
Ｐ39	Ｄ４区	0.24	0.20	0.25	中世。
Ｐ41	Ｄ４区	0.38	0.26		縄文時代以降～古代以前。
Ｐ42	Ｄ４区	0.22	0.18		現代か。
Ｐ43	Ｅ５区	0.40	0.24	0.12	近世以降か。
Ｐ44	Ｅ５区	0.36	0.28	0.18	
Ｐ45	Ｅ５区	0.19			
Ｐ46	Ｅ５区	0.40	0.34	0.14	近世以降か。
Ｐ47	Ｅ５区	0.46	0.42	0.34	中世以降か。
Ｐ48	Ｅ５区	0.30	0.28	0.30	中世。
Ｐ49	Ｅ５区	0.28	0.18	0.17	中世。
Ｐ50	Ｅ５区	0.38	0.26	0.05	近世以降か。

井戸跡（ＳＥ）　（第65図）

名　称	位　置	規　模（m）			備　考
		長さ（長辺）	幅	深さ	
ＳＥ１	Ｅ４区	5.60～4.7	4.74	3.55	第70図、15・16世紀頃。深さは＋α。湧水のため掘り下げ放棄。

道跡　（第65・66図）

名　称	位　置	規　模（m）			備　考
		長さ（長辺）	幅	深さ	
道跡1	D4区	21.12	1.00		第69図、近代以降。
道跡2	E4区	11.0	1.80		第71図、近世。
道跡3	E4区	4.30	0.80		第71図、近世。
道跡4	E4区	1.80	0.50		第71図、近世。

土塁跡　（第65図）

土塁1	E4区	11.1＋α	4.2		10世紀末～11世紀前半頃、第71図。

第2章　発掘された遺構と遺物

前出の一覧表は、発掘時点で遺構名称を付された全数を扱った。このほか溝・穴跡については無番の遺構も相当数存在するが、埋土の質感および遺構等から中世以前と推測された場合は番号が付されている。時期の判定は、埋土質感による現場所見に基づく、なお遺構図仕様は17頁で触れたので略したい。

1．小穴と井戸跡

掘立柱穴群と小穴　（第69図）

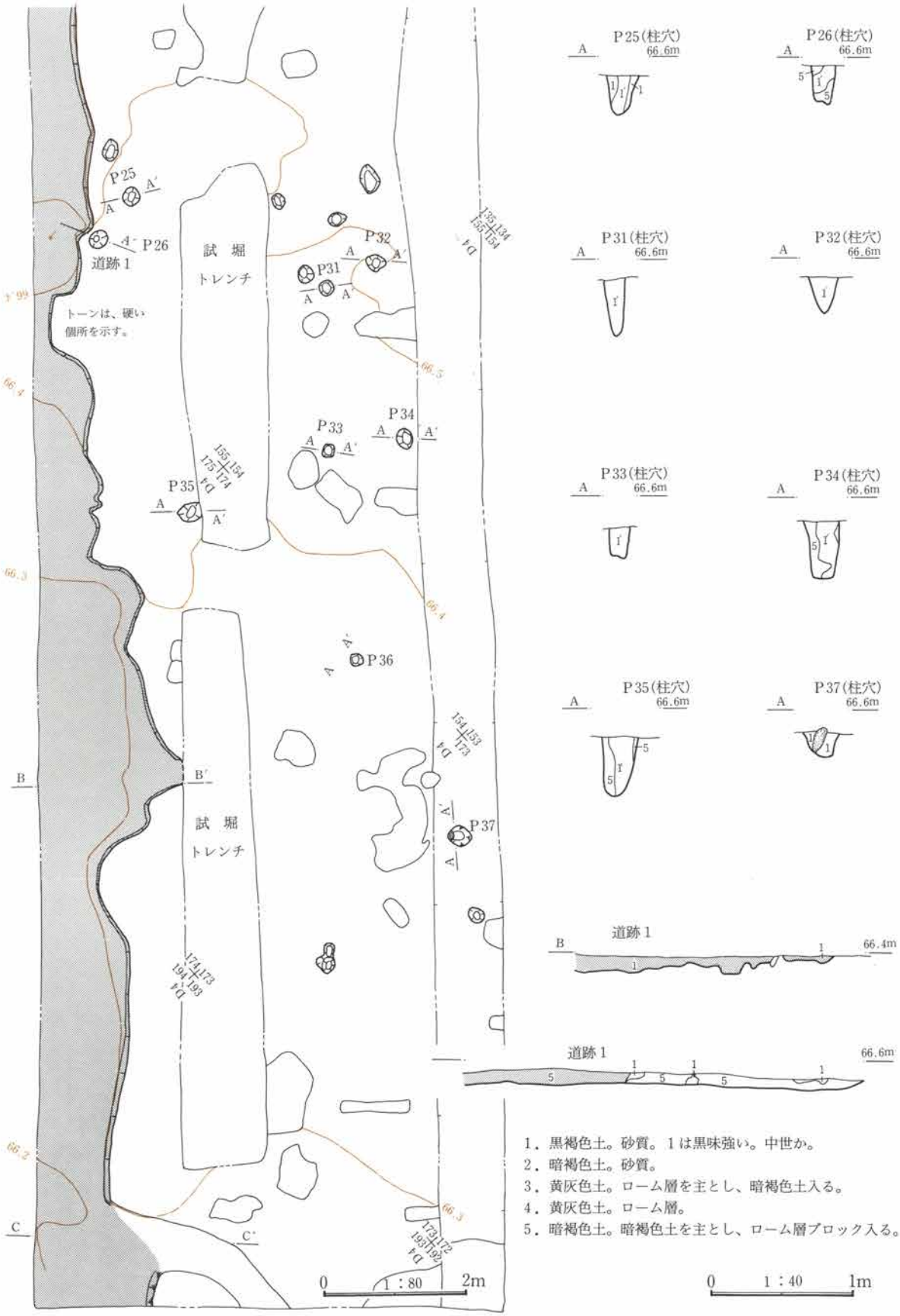
第69図にD4区調査区の南端で発見された柱穴群を示した。現場において建物跡としてまとめることを試みたが、まとめらなかった。調査区が狭いことも一因としてあり、生活の一端として考えたい。柵跡であれば以北における旧黒色土位置からの表土を考えれば発見面より25～35cm前後上方からの掘り込みを考えることができ、深さのあるP34・同35で地表から70～80cmの深さが算出でき、柵跡してはやや浅いきらいがあるものの小規模なら可能な深さである。82頁に示した中世と添記のある小穴跡は、いずれもD4区で群をなす類である。これらの中には柱受けの石材を入れた例も、複数あること、柱穴の底面が底尖りになるクセを持つこと、埋土の質感は中世であることなどから14世紀頃の柱穴跡と想定されるが、然るべき遺物は1点もない。このほか菅塩西両台遺跡において建物跡関連での柱穴跡は薄く、近世以降の耕作との関連を想起させる小穴が目立った。

SE1　（第70図）

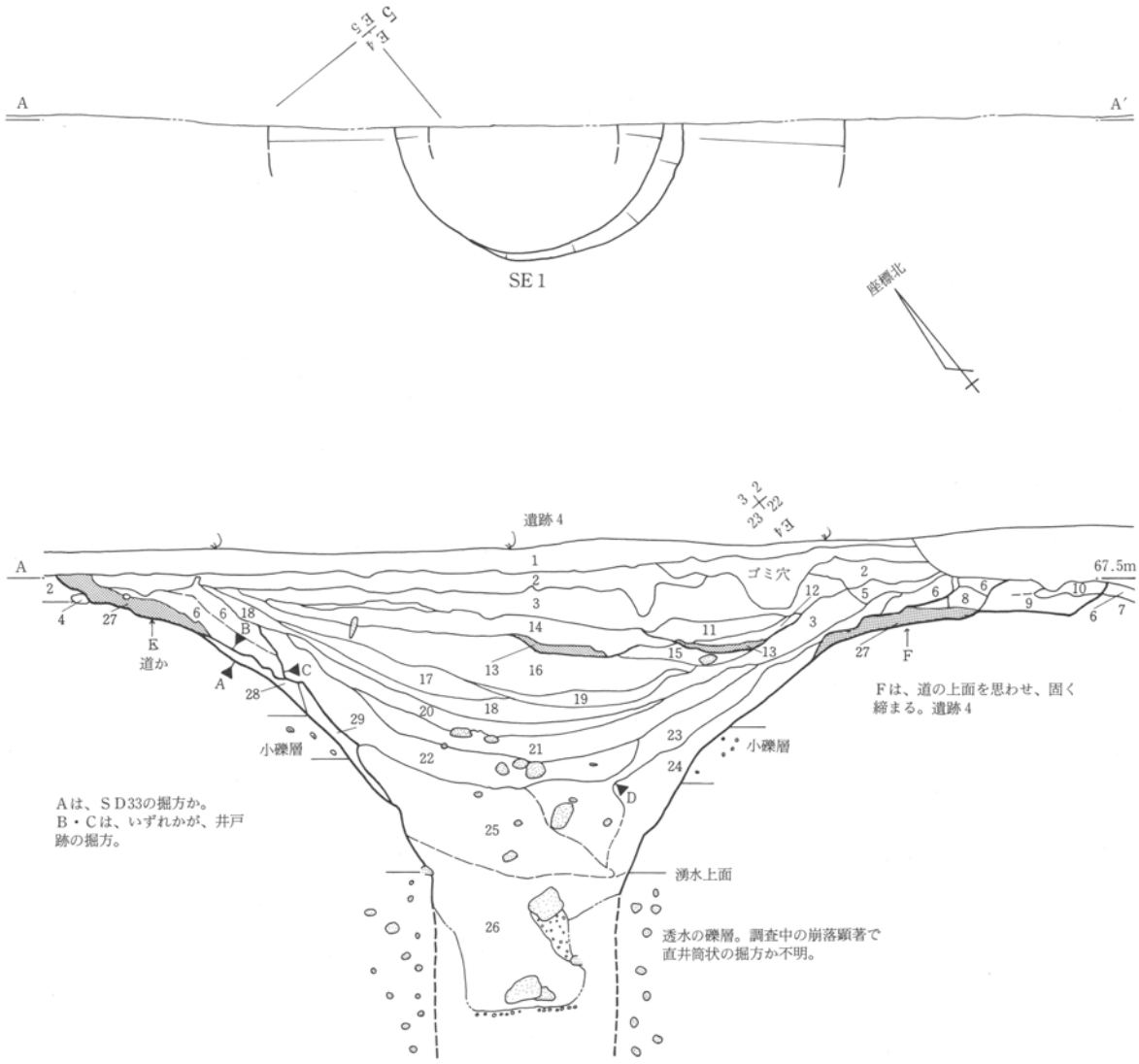
井戸跡は、E4・5調査区の南端に位置するSD33内で発見されたSE1のみであった。第70図に示したとおり、SD33の掘り方形状と類似していたことと、E4・5区東壁より3mの位置にSD33用横断土層断面壁を設けたためにSE1の存在を見失っていた。要するに観察上の誤まりである。そのことに気付いた段階は、SD33の埋没土下位に達した時点であった。最終的には、ポンプ排水を行なったが井側部の湧水層は礫層中のため、水量が多いことと壁面崩落のため調査放棄した。そのため底面の深さについては不明である。出土遺物はないが、第70図の土層断面図中、掘り方を示めす太い実線は、鉄滓を含む土層注記番号6の層を切って構築されていること、埋土の上面に近世の道跡4が乗ることなどからして、15・16世紀頃の井戸跡と推測される。

2．溝跡と土塁跡

溝跡については、遺構の発見面を高目（たかめ）にして第1面目の面出（めんだ）し作業を行なったため、近代頃の畑さく跡を多く認める結果となった。ここでは地境いとして用いられたらしいような中規模以上の溝跡を3例示した。



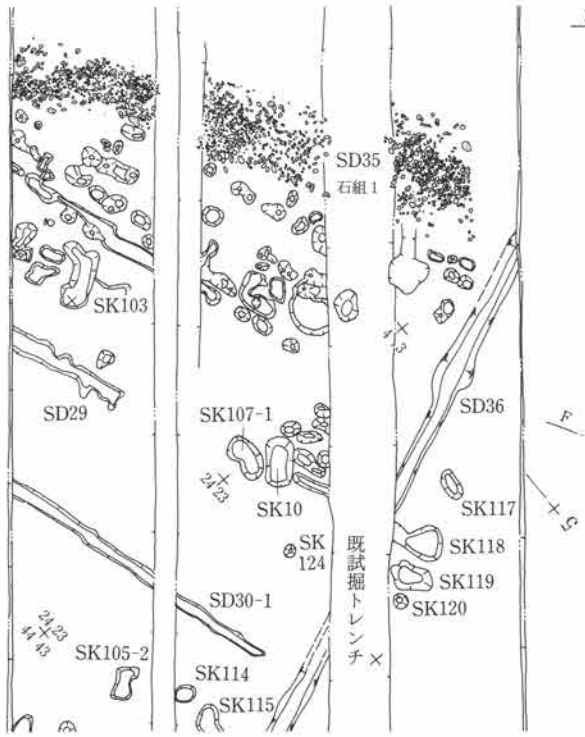
第69図　D 4 区道跡、小穴跡遺構図



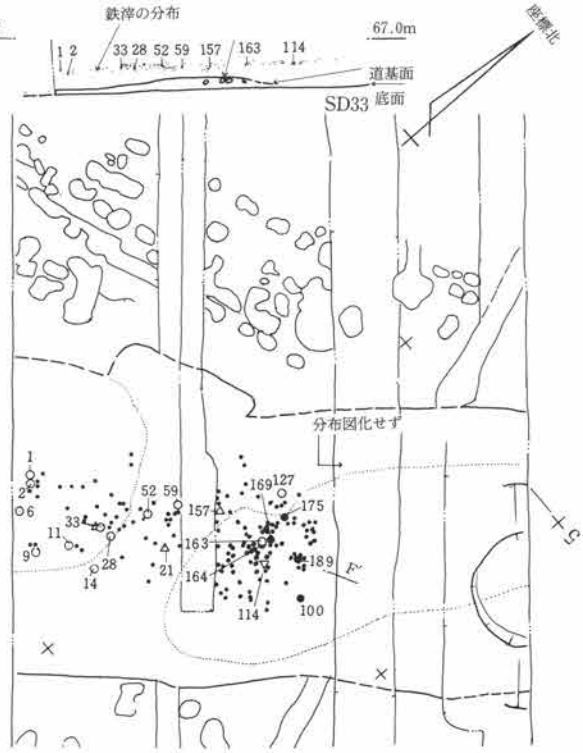
1．黒褐色土。耕作土。客土か。1－2は近代以降堀り込み。
2．暗褐色土。B軽石含む。江戸時代頃の耕作土か。
3．暗褐色土。B軽石含む。
4．暗褐色土。B軽石含む。溝埋土か。
5．暗褐色土。B軽石含む。2に近い。
6．黒褐色土。軽石不明。2に近いが黒色味あり。鉄滓含む。
7．暗褐色土。軽石不明。6と異なり黒味弱い。
8．暗褐色土。軽石不明。6と異なり黒味弱い。
9．暗褐色土。軽石不明。6と異なり黒味弱い。
10．暗褐色土。軽石不明。6と異なり黒味弱い。
11．黒褐色土。砂質。軟らか。B軽石含む。
12．黒褐色土。砂質。軟らか。B軽石含む。
13．黒褐色土。砂質。道の硬化面。この中にB軽石縞状に堆積。
14．黒褐色土。砂質。軟らか。B軽石含む。
15．黒褐色土。砂質。軟らか。石含ます。B軽石含む。
16．黒褐色土。砂質。軟らか。石含ます。B軽石含む。
17．黒褐色土。砂質。軟らか。
18．黒褐色土。砂質。軟らか。
19．黒褐色土。砂質。軟らか。
（17～19：水性堆積か。ラミナ状部多い。B軽石含む。石含まず。）
20．黒褐色土。砂質。軟らか。B軽石含む。
21．黒褐色土。砂質。軟らか。B軽石含む。
22．黒色土。砂質。粘性あり。B軽石含む。小礫。石多く含む。
23．黒色土。砂質。粘性あり。B軽石含む。小礫。石多く含む。
24．黒色土。砂質。粘性あり。B軽石含む。小礫。石多く含む。
25．黒色土。砂質。粘性あり。B軽石含む。小礫。石多く含む。
26．黒色土。砂質。粘性あり。B軽石含む。小礫。石多く含む。
27．黒褐色土。締まる。B軽石含む。小礫入る。江戸以降。
28．黒褐色土。締まる。B軽石含む。小礫入る。ローム漸移的。
29．黒褐色土。締まる。B軽石含む。小礫入る。ローム漸移的。

0　1：60　2m

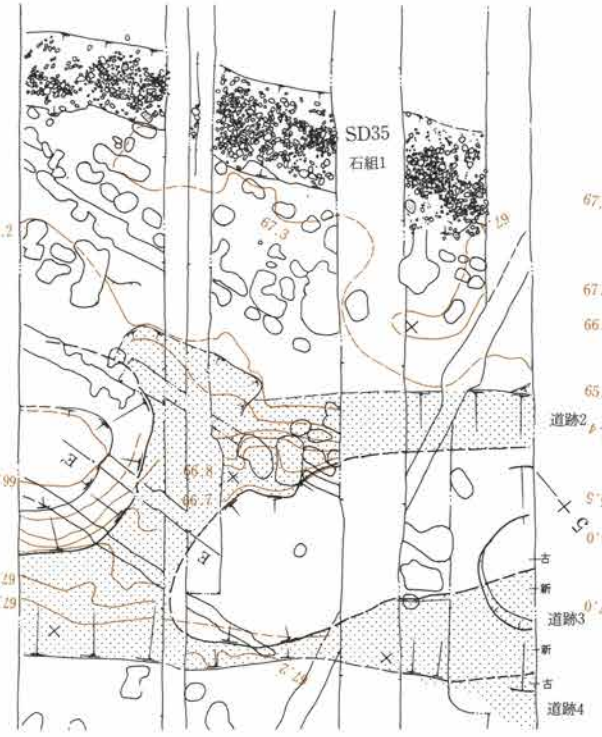
第70図　E４・５区１号井戸跡遺構図



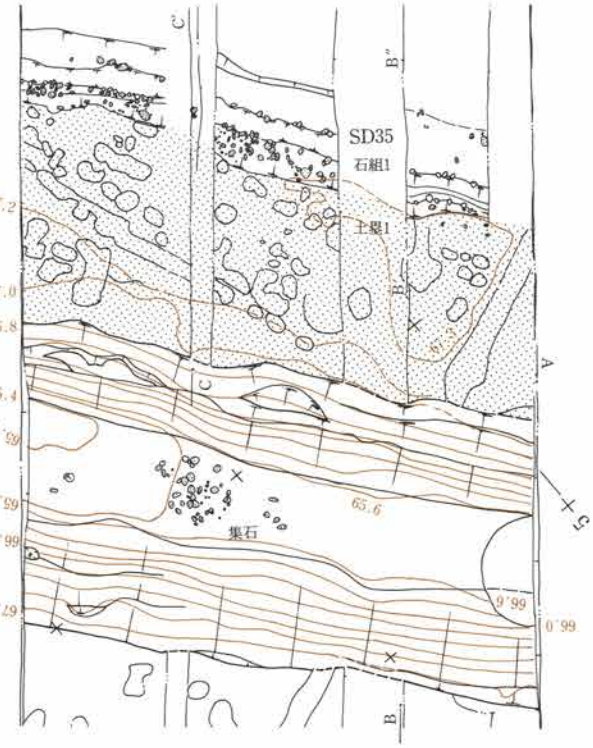
▲近世以降の遺構状況　ＳＤ33調査前の上面状況図である。この時点では、道跡２・３・４は確認されなかった。ＳＤ29・30-1などは畑さく跡と考えられ、他の小穴も耕作跡か。石組１上面は乱れていた。



▲ＳＤ33埋土中の鉄滓の分布状況　埋土中から多量の鉄滓・鉄製遺物・羽口片などの出土があり、上横断面図中の出土位置はF－F′間120cm幅をまとめた。西寄りに鉄製遺物、東寄りに鉄滓が多い。



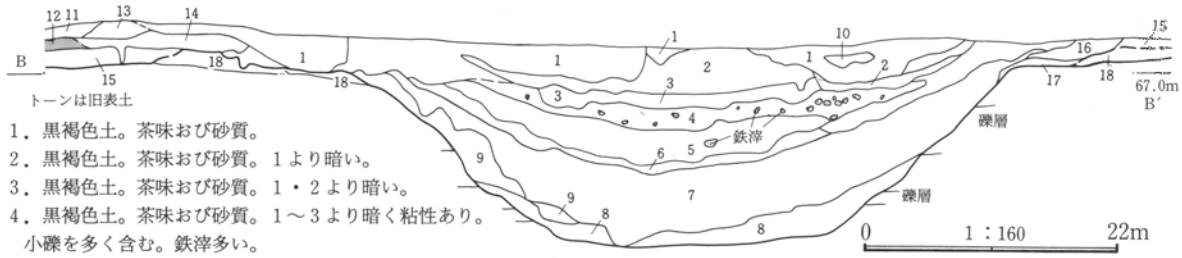
▲道跡平面図　重複が明らかなのは道跡３が新しく４が古い。EE′断面には、鉄滓を含む層の上・下に２面以上の硬化面があり、土橋状況は前代の集石上面にあり、13世紀頃から16･17世紀間の道跡か。



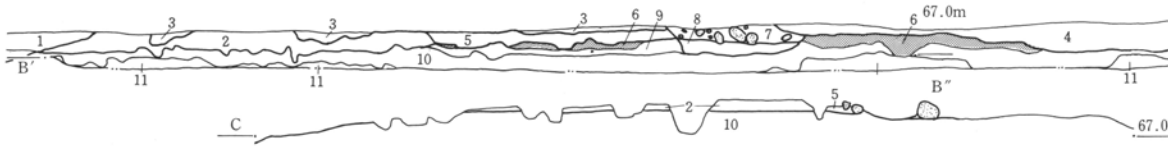
▲ＳＤ33･土墨1･ＳＤ35(石組１)の関係　ＳＤ33の集石は底面より約10cm離れる。石組１は雨落状を呈し、土墨１との関係から、内側は北側と考えられる。ＳＤ33はAs-Bの存在から、11世紀頃。

第71図　Ｅ４・５区SD33付近構図

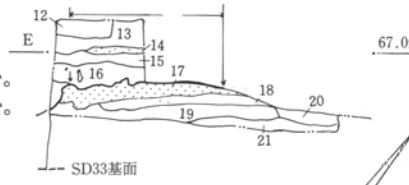
0　1：160　4m

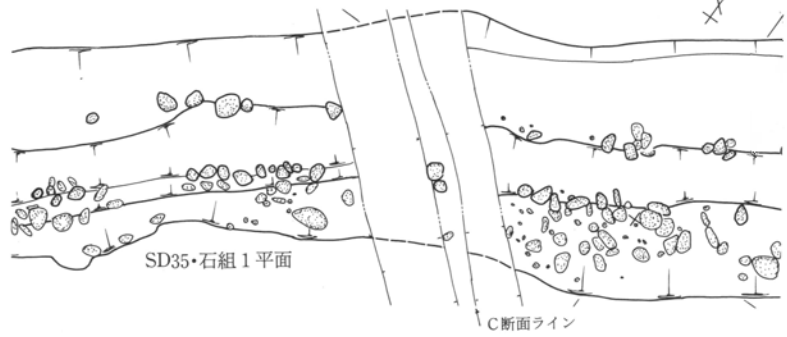


1．黒褐色土。茶味おび砂質。
2．黒褐色土。茶味おび砂質。1より暗い。
3．黒褐色土。茶味おび砂質。1・2より暗い。
4．黒褐色土。茶味おび砂質。1～3より暗く粘性あり。小礫を多く含む。鉄滓多い。
5．黒色土。砂質。鉄滓あり。
6．黒灰色土。砂質。BPを多く含む。二次堆積。(As-B)。
7、黒褐色土。粘性あり。小礫を多く含む。
8．黄褐色土。ローム層を主体とする二次堆積。流水の砂層なし。
9．黄褐色土。ローム層を主体とする二次堆積。8より黒い。
10．黒褐色土。天明軽石か。砂質。(As-A)。
11．黄褐色土。ローム層客土。締る。
12．黒色土。旧表土。FP粒入る。(Hr-FP)。
13．暗褐色土。ローム層漸移のような客土。12より軟。暗い。
14．暗褐色土。ローム層漸移のような客土。12より軟。
15．ローム層漸移。
16．黒褐色土。砂質。江戸時代。この中礫含む。やや締りあり。
17．暗褐色土。砂質。江戸時代。
18．ローム層。基盤層。



1．黒褐色砂質土。SD33埋土。焼土粒含む。
2．暗黄褐色土。締りあり、築土。
3．暗褐色土。表土。耕作関連土層。
4．暗褐色土。締る。As-B含む。中・近世。
5．暗黄褐色土。ローム塊を主体。築土。
6．黒褐色土。締る。旧黒色土。Hr-FP含む。が。攪乱気味。
7．褐色土。SD35・石組1埋土。礫多い。
8．暗褐色土。粘性。締まる。構築客土。
9．暗褐色土。ローム層との漸移層。
10．黄褐色土。ローム層。やや軟質。
11．黄褐色土。ローム層。締る。
12．灰色土。水道管埋設の砂質土。
13．黒褐色土。焼土粒、As-B含む。粗質。
14．暗黄褐色土。締り、硬化。道跡上面層。
15．黒褐色土。As-B含む。
16．黒褐色土。As-B含む、鉄滓多い。
17．暗黄褐色土。締り、硬化。道跡。
18．暗黄褐色土。硬化。道跡か。
19．暗褐色土。焼土・炭化物・As-B含む。
20．暗褐色土。焼土・炭化物・As-B含む。
21．黒褐色土。粗質。As-B多く混る。





第72図　E4・5区SD33付近遺構図

SD6　　(第74図)

F6調査区の中ほどにある。同区を拡張する際、SD33に囲繞された区画が1.5町であった場合、同溝以北約162m付近に存在するであろうとの推測を行なった場所を含む調査区であった。排土の結果、2度以上の掘り直しの形跡が認められ、近世陶・磁器片を含む、近世頃と思える粗質な埋土の質感を持った溝跡SD6が想定至近から発見された。方向性はN47°Eをとり SD33と近似ではあるが、時期が異なる。流水跡はない。

SD15　　(第73図)

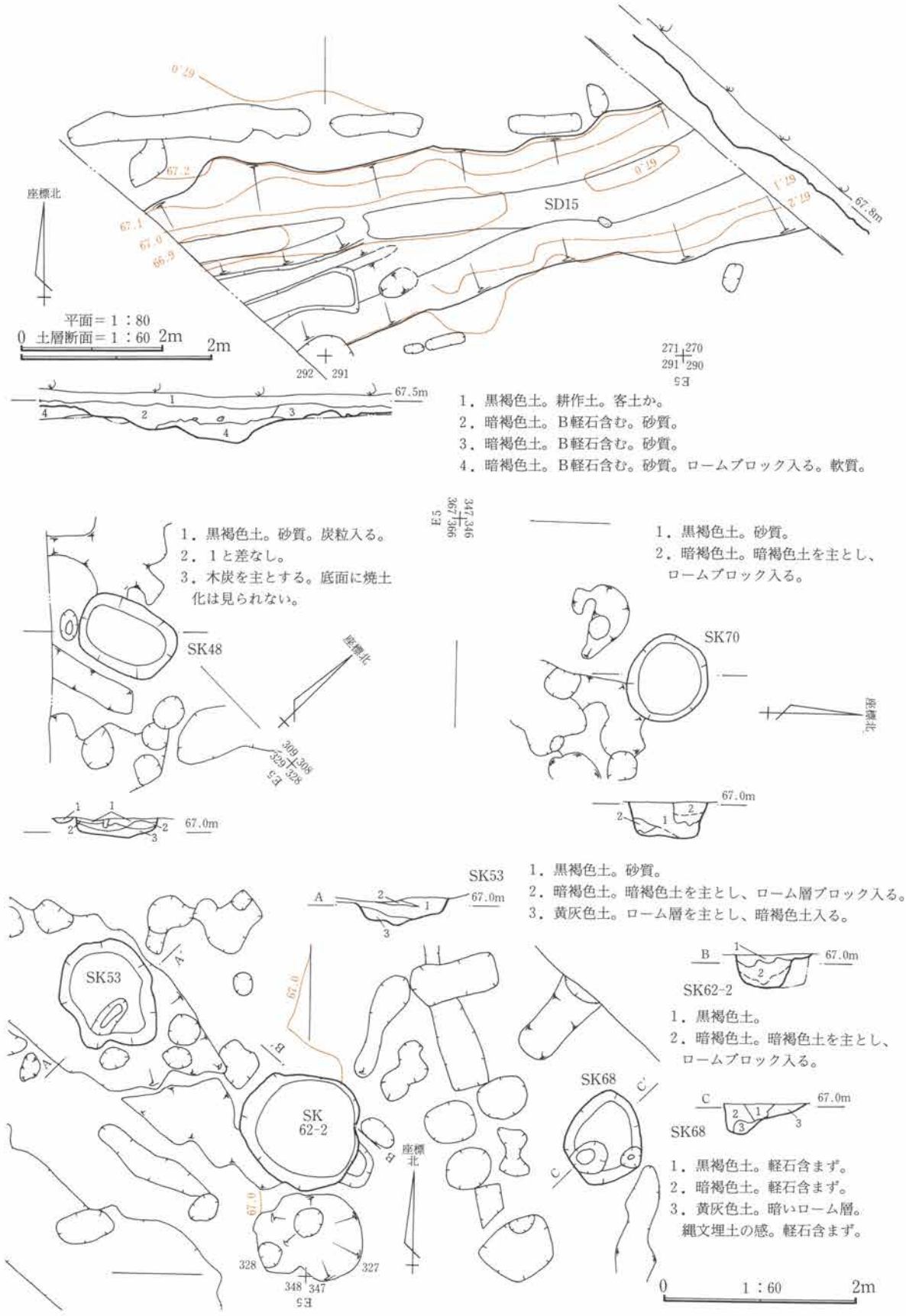
E4・5区の最北部にあり、周辺に近世以降の畑さく跡が広がる。SD14、SK83を含む小溝など近似のN89°Eの方向性を取る。埋土の質感は近世以降であり、磁器片の出土がある。埋土に流水を思わせる砂質土を認めたが、水路等の用水の機能を考えるほどではなかった。また周辺の小溝が、似た方向性や、SD15の存在と係わるようにも見られるため、土地区画としての機能は充分に考えられる。

ＳＤ33　　（第71・72図）

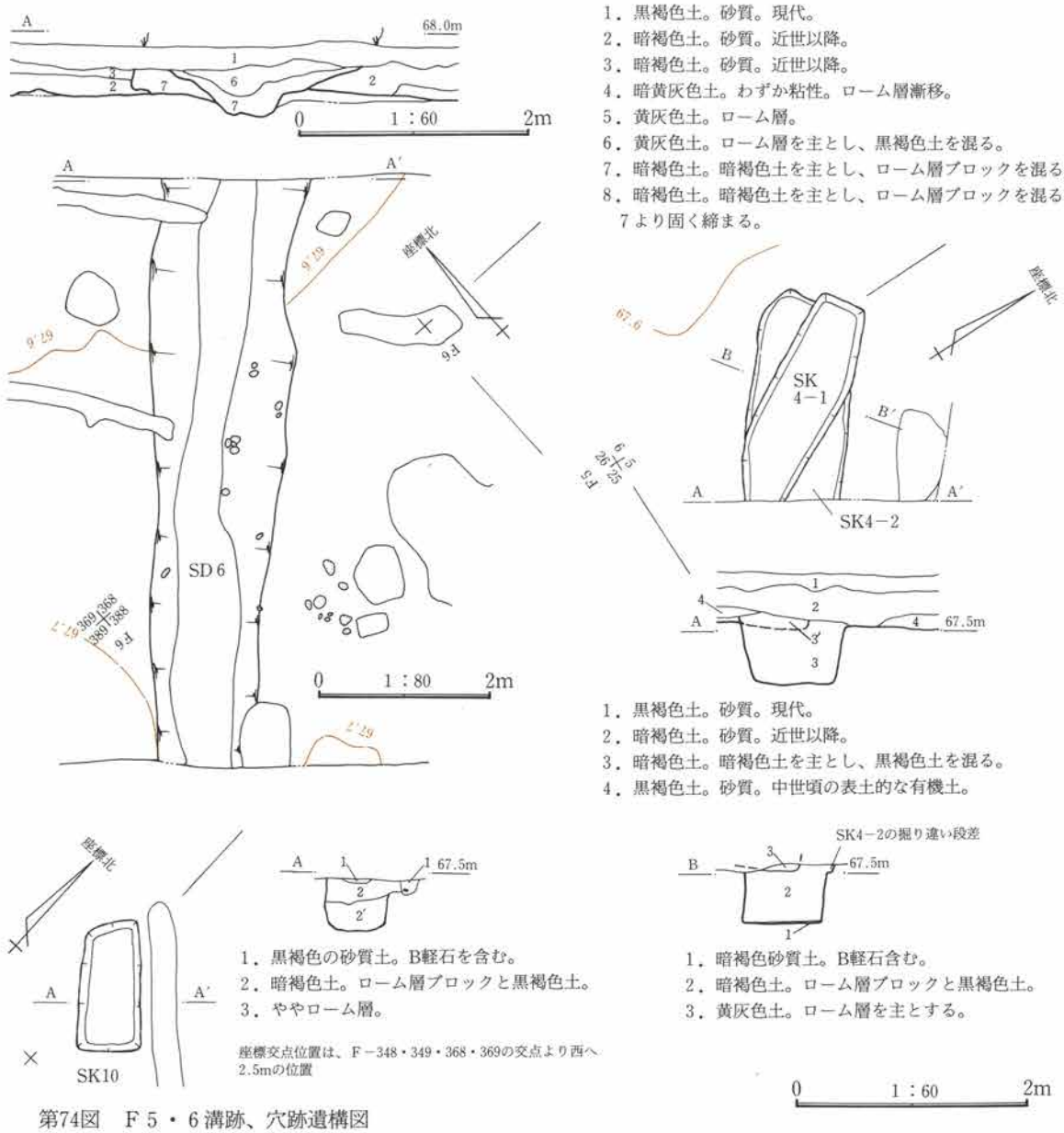
Ｅ４・５調査区の南側に位置する。平成４年度の試掘により、埋土下位に浅間山Ｂ軽石（As－Ｂ・12世紀初頭頃をまじえ、同層直上には多量な鉄滓が含まれている遺構として存在が明らかとなっていたが、北側に土塁が伴ないさらにその北側にＳＤ35の石組が存在することが知れたのは本調査の段階であった。

ＳＤ33の埋没状況は、第72図土層断面Ｂに示したように、深さ約1.8mの底面に至るまで大きく９層が存在していた。最下面にある注記番号８は流水の痕跡薄く、周囲の壁面崩落を思わせるローム層質であった。60cm上方にAs－Ｂを含む黒色の粗質土があり、注記番号７の上面まで浅間山Ｂ軽石降下前代の堆積であることが示された。土層注記５は多くはないが鉄滓を含み、同４が多い層である。同３・２の埋没後に道跡４が存在する。こうした堆積の中で、ＳＤ33の機能は、注記番号８・９までが考えられ、その過程で集石を行なうなどの作業所作が１回推測された。その理由と内容は、土塁北接のＳＤ35石組らしき遺構に伴なう掌大から20cm弱ほどの円礫は土層注記７の最下部分から同８の上位部分に多く見られる。石材の落下は、機能時には管理維持作業が行なわれていたものと考えた場合に、ＳＤ33底面の礫と間層を挟む礫群の存在は機能停止から当初機能の終息が意味される。同７・８の層境付近の円礫は第71図（写真図版28）のようにＥ４－３・４・23・24交点付近に多く集中し、第72図土層注記８の左寄りに幅40cm、深さ15cmの浅い凹みがあり、それはＥ４－３・４・23・24交点付近で止まり、同交点付近は土橋疑似の状態にあった。それは江戸時代に至り、その上方に道跡３が存在している。この土橋疑似の当初の状態は、人為所作であるが、ＳＤ33機能時か機能停止直後の築成か判断はできなかった。江戸時代には、この土橋疑似の遺構上に数層を挟み道跡３（第65図）が生じる。ＳＤ33の掘り直しについては、土層注記７の中には認められず、同８の薄い層中での判別は困難であった。同９は土塁崩落土らしく、滑落を示唆する黒色土味のある間層が数層入るのを排土中に見ている。溝跡の平面形態は、上端は、南北ともにほぼ平行に走るが、溝底の西下りの状態と相矢って西側が広く、東側が狭まい傾向がある。北側の立ち上りの中途には、わずかな差で傾斜に変換がある。規模は北縁に犬走状平坦面は不明瞭であったため、北縁を土塁上端からとして測った場合、幅6.3～7.3m、深さ1.54～1.47mである。

遺物は、土層断面注記７・８・９層から示唆的な遺物の出土は認められなかった。同５・６を中心とする鉄製品生産関連の遺物の出土が多大であった。第76～79図にそれを示した。現場作業と排土土壌の篩分けの結果、109頁一覧にまとめた資料を抽出した。同一覧は、ＳＤ33埋土とその周辺から抽出したものでＳＤ33のみではないので注意されたい。しかし他遺構埋土からの量は微弱である。その種は、炉壁、羽口、椀形鉄滓（108点のうち92点がＳＤ33）と不定形滓合わせて49.4kg、湯玉状硅酸もしくは小鉄塊169（前者多く後者少量）14.7ｇ、チップスのうち黒紫色378点1.26ｇ、同暗褐色718点3.36ｇ、花崗岩片138点約10ｇ、木炭521点1.14ｇ、鉄製遺物とその疑似約20点などであり、最少の篩単位は○○○で、それ以下はピンセット抽出しなかった。以下に特徴を要約したい。①鉄製遺物は不明を除くと、鏃が目立ち、茎の曲りが少ないため未成品もあるかもしれない。②原料としては第79図61の茎に曲り、65も曲り、69～77の小鉄片・鉄塊・鍋片が原料と考えられる。③椀形鉄滓の２重に重なる例は鎔着が部分的に認められ、管見におよんだ限りの県内資料中、実例は数例である。特に第79図43には引出した際に生じたらしい捻れた個所と工具痕らしき凹みあり。④製作台は花崗岩であったらしく第79図57に硅化物が付着する。⑤羽口は、古代に多い円筒形。截頭円錐形とも異なり、縦断面形隅丸状態を呈する。⑥羽口は、古代の場合、割れ口は送風孔付近まで還元色を呈し、焼締っている場合が多いが、図示した多くの個体は焼締りも浅く、割れ口内部の還元部分は浅く、酸化部分は多い特徴があり、さらに送風孔の直径は、再測を重ねてみたが、最小直径1.7cm～最大直径4.0cmまで差があり、



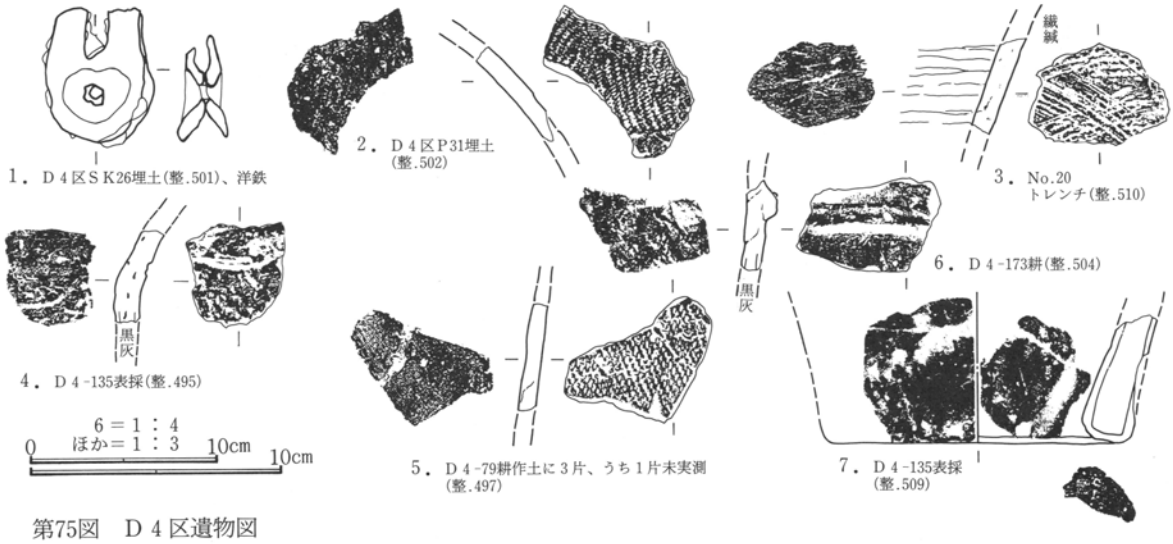
第73図　E４・５区溝跡・穴跡遺構図



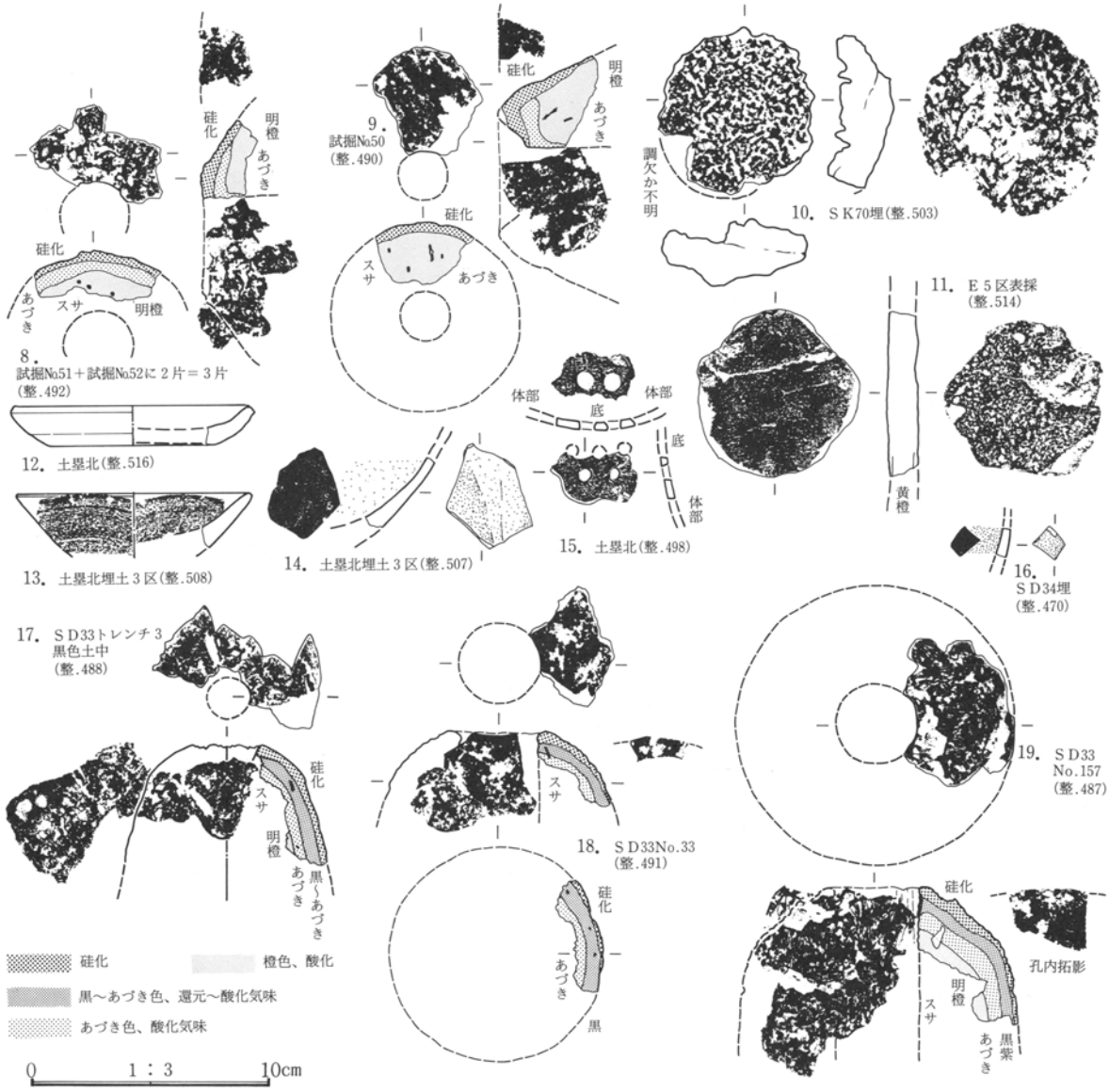
第74図　F５・６溝跡、穴跡遺構図

機能的に使い分けが考えうるのと、羽口と加熱炉との距離は古代よりも離れていたと推定される。

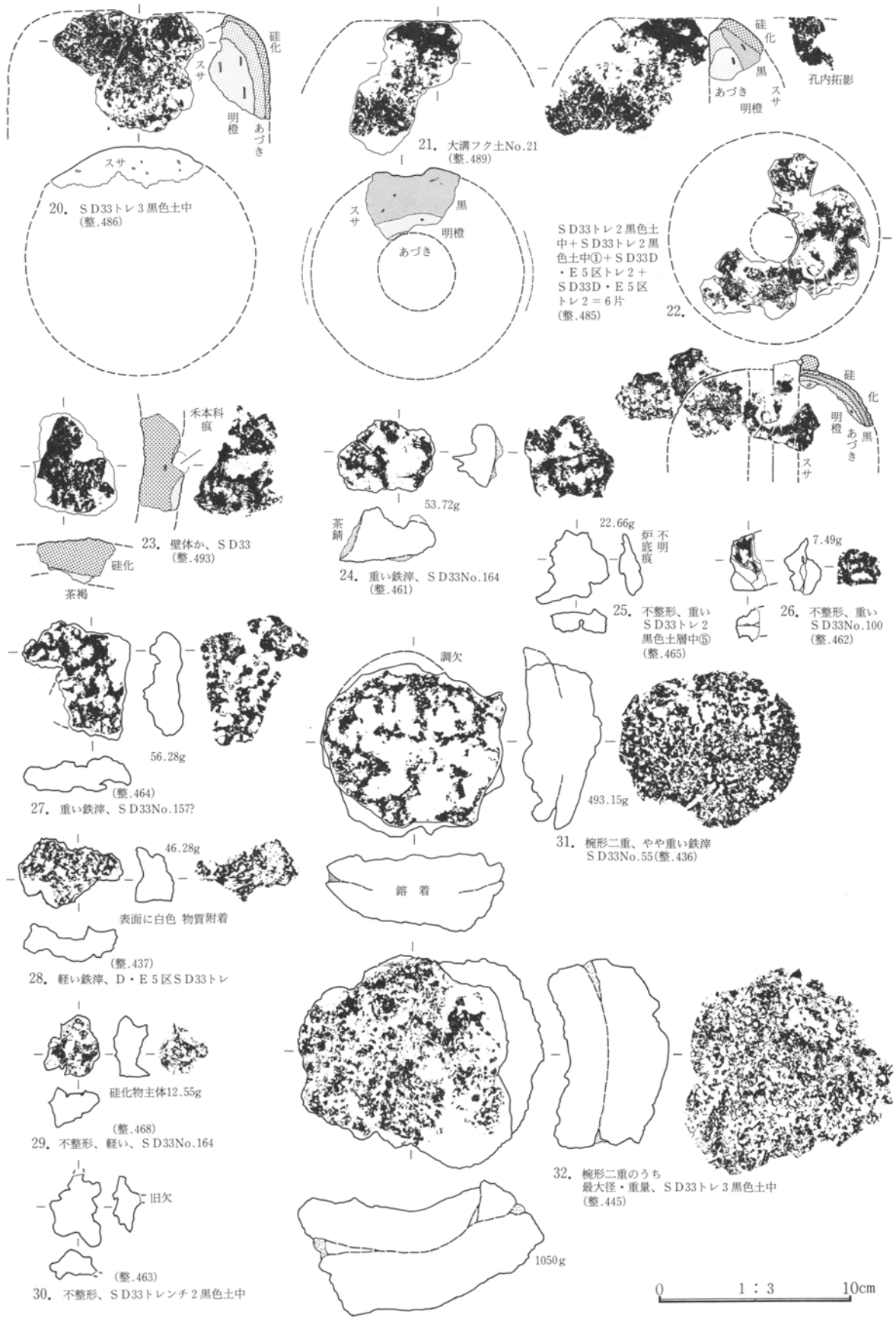
以上、大溝の時期と機能は、As－Bをまじえる埋没土から底面まで約60cmの堆積期間が介在する。さらに遺構の造営に直結しそうな遺物の出土もなく、周辺からも出土していない。群馬県内では、通有の場合、古代の土器生産が行われた11世紀前半までなら、出土がある。そのため、この大溝の造営は平安時代の土器生産の主体が終息してから以降の時期と考えられ、しかもAs－Bの降下まで、60cm埋没しうるだけの年限以前と推測され、およそ10世紀末から11世紀前半頃の造営ではないだろうか。その頃に幅５m以上、深さ1.5m以上を越える大溝の存在は少ないこと、有力階層や武士の台頭に伴なう館の堀切の出現には、さらに数100年ものひらきがあること、未だ上野地域には国司・郡司が命脈を保っている段階であることなどからすると新しい時期の新田郡衙もしくは関連の官衙に伴なう大溝遺構であることを想定したい。鉄製品生産関連の遺物の時期は、As－Bをまじえる層と鉄滓をまじえる層との間に30cmの間層があるため、中世前半頃と推測され、我国の製鉄史の中では応永以前（14世紀末頃）から古代末期以降の間の最も不明瞭な時期の資料として存在



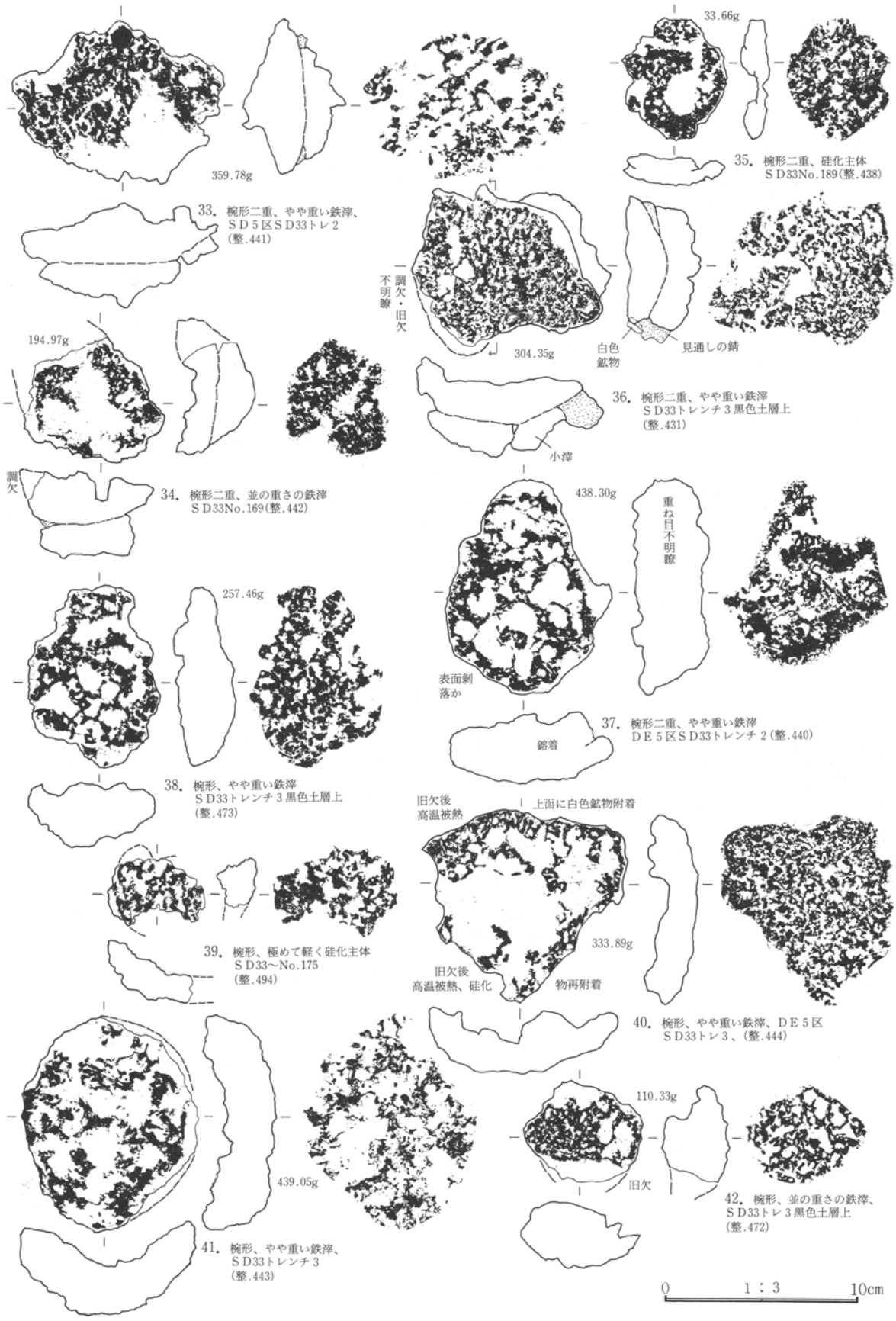
第75図　Ｄ４区遺物図



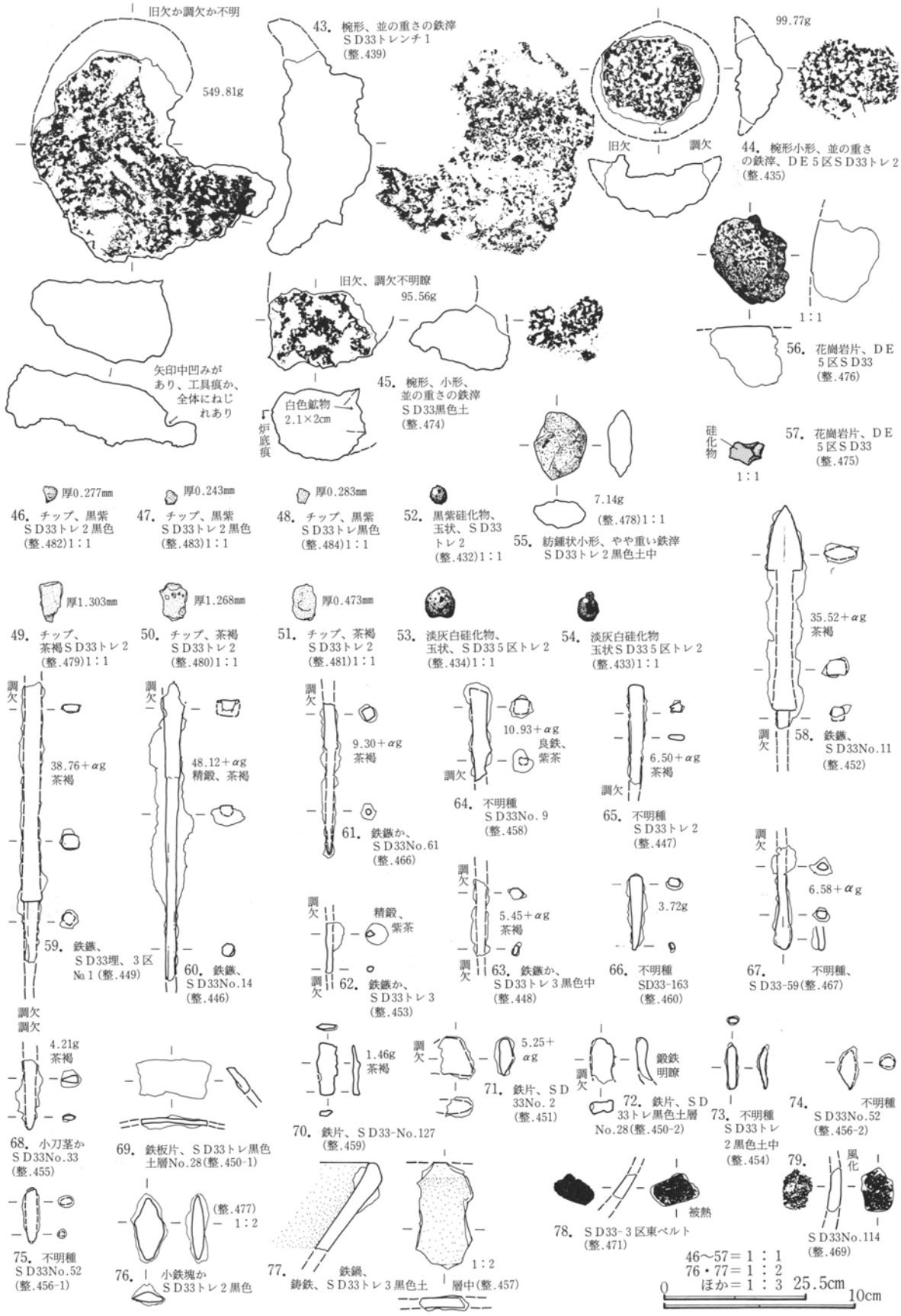
第76図　Ｅ４・５区遺物図



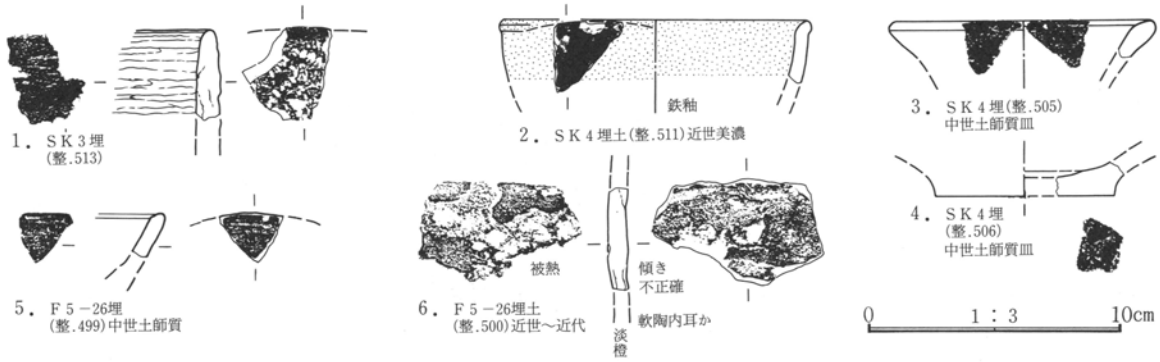
第77図　Ｅ４・５区遺物図



第78図　Ｅ４・５区遺物図



第79図　E4・5区遺物図



第80図　Ｆ５・６区遺物図

意義は大である。

ＳＤ35（石組１）と土塁１　　（第71・72図）

ＳＤ35は、ＳＤ33・土塁１の北縁に設けられた小規模な溝である。溝として掘り方を設けたかは、浅く不明のため石組１とも別称した。北・南側の両壁面に円礫石組が設けられたことにより、溝であることが判明した。石組石材は、約20～10cm大の円礫を用い、およそ搬入材というよりも、ＳＤ33を掘り上げた際、２層の礫層中から得られた可能性のある円礫の大きさであった。石組状態は、上面が削平されているため１段分しか確認されず、組み方は小口を壁面に揃えたもの、横側面を用いたものなど一率の組み方ではなく、さらに上方に続く場合、高い組み上げ状態の想起はできなかった。南側の土塁に接する側は、南側石組前面より50cmの位置まで小さ目の円礫の裏込め的な控えのように石材を込めていた。土塁立上（たちあがり）と接する個所では、整然とした石列を成してはいなかった。この石組の埋没状況は写真図版26に見るように乱れた状態の上面で発見され、石組内部に暗渠石材が入っていたかは判然としなかったが１cm未満の小礫が集中していたのは、その石組１に挟まれた上方付近（写真図版26右上）であった。石組１の規模は、内法（うちのり）42cm、石材の北端から控え石材の末端までの幅約110cm、北側石組面より控え石材の末端まで約90cm、方向はＮ57°Ｅを測る。出土遺物は第76図16に磁器片があり、至近から同図12～14があり、中世以降と考えられるほか時期を示唆する遺物は薄い。なおＳＤ35の機能は、流水痕は明瞭ではないが、砂質土が少し入り、雨落（あまおち）機能の遺構と考えたい。

土塁１はＳＤ35（石組１）とＳＤ33との間に築造されている。基盤は主として旧表土の黒色土を除去してからの築土である。第71・72図のように薄く黒色土が残存していたのは東半のみで、西半の基部面は、ローム層上面と表現するより、少し暗褐色味の強い、強いていえば周辺のローム層漸移に近い色であり、数cm下方はローム層であった。その直上にローム層を主体とし、黒色土や暗黒褐色土のブロックを含まないローム層質客土で全体が覆われていた。その直上は、近世以降の撹乱により不明確であった。ローム層質の客土は12～9cm前後の厚さがあり、締まった状況は版築を思わせた。規模は5.1～4.0cmを測り、高さは12＋αcmである。

土塁１とＳＤ35（石組１）を設けるための整地作業は、ＳＤ33の北側上端（土塁１南縁）から北側に約８mの幅で掘り下げたらしく、２・３トレンチ間で確認された。北端はＳＤ35（石組１）の北側面（つら）より約65cmの位置である。

土塁１をなぜ土塁としたかの設問は、ＳＤ33が大規模であることと、土塁１の北側に雨落様の石組溝ＳＤ35が存在すること、版築に近い土塁１の築土観などから築垣（ついがい）ではないかとの、想像が別に湧くであろう。しかし、土塁走行、土塁幅、ＳＤ35の走行は、たった11mの調査範囲の中だけであって、曲りが少しあり、直線的ではないこと、寄せ柱穴痕がないこと（写真図版27上段右上）から築垣の推定は行なわなかった。

そのほかの溝跡　　（第71・72図）

遺物上げの際、各々の遺構出土遺物と混入を防ぐため、多くの溝遺構番号が生じた。概要は、一覧表によられたいが、表中で機能について触れていないので、説明を加えたい。さく跡の時期は近世以降である。

Ｆ５・６調査区では、ＳＤ１～３、ＳＤ４・５は、耕作に係わる溝らしく、ＳＤ１～３は、近似の間かくで並び畑さく跡が推測され、ＳＤ４・５は、２条の単位しか見当らないが、２回以上にわたる堀り直しや、底面に残る鋤先痕などの掘り方から共通の目的の基に掘られた溝と考えられ、畑さく跡と考えたい。Ｄ４調査区の耕作跡は、明瞭でない。Ｅ４・５調査区では、北からＳＤ９～12が畑さく跡としての単位が、ＳＤ14とＳＫ83を含む小溝の単位が、ＳＤ17・18の単位が、ＳＤ19～21の単位が、ＳＤ24・25と南接小溝の単位が、109・100・125など土塁１上面に掘られた単位が、ＳＤ29・30の単位について畑さく跡としての機能を考えたい。

３．穴跡

発掘調査の面出し（めんだ）作業は、平安時代末期頃の遺構の発見があったことを受け、浅目に行なった。穴跡数が調査面積の割りに多いのは、そのことに起因する。主体時期は、古代・中世は微弱で、近世以降が多い。

ＳＫ53・61-2・70、円形の穴跡　　（第73図）

ＳＫ53・62-2・68・70など、中世頃を思わせる穴跡中に、円形の穴跡が存在している。特徴は、埋没土の大半が黒味をおびたAs－Ｂを含む土壌が入り、最下部にローム層ブロックや漸移層的な暗褐色土層の土壌のやや締った層があり苧穴底面を思わせる。出土遺物に時期を示唆する資料はない。

ＳＫ４-1・２．ＳＫ10　　（第74図）

西長図南遺跡で見られた長方形の穴跡は少ないながらＳＫ４-１・２、同10の３基が発見された。埋没土の質感は、中世と思える一群より粗質であったが、底面近くに、一般的に見られる、やや締った層は、不明であった。時期を示唆する出土遺物はない。

４．道跡

道路は、現蛇川改修の前代に、近似の方向性で、舗装に先行する道があったらしく、Ｄ４調査区南西端に硬化の面が、Ｅ４・５調査区ではＥ５区の西端際で、締った土壌が舗装砕石下に存在していた。このほか遺構として発見されたのは、Ｅ４・５調査区において道跡２・３・４がある。

道跡２・３・４　　（第65図）

周溝跡については、一部を83・88頁で触れた。道跡３は、ＳＤ33のAs－Ｂを交える中世的質感の黒褐色土直上と、ＳＤ33の最終か廃棄直後に、土橋状の遺構の段階に存在しており、古代末から中世にかけて存在し、さらに近世まで続いたと土層上推定され、さらに道跡２・４とも初期は中世に達していたか不明であるものの２条の道跡と接するか、関係していた。残念ながら時期を示唆する出土遺物はない。

第４篇　成塚永昌寺遺跡

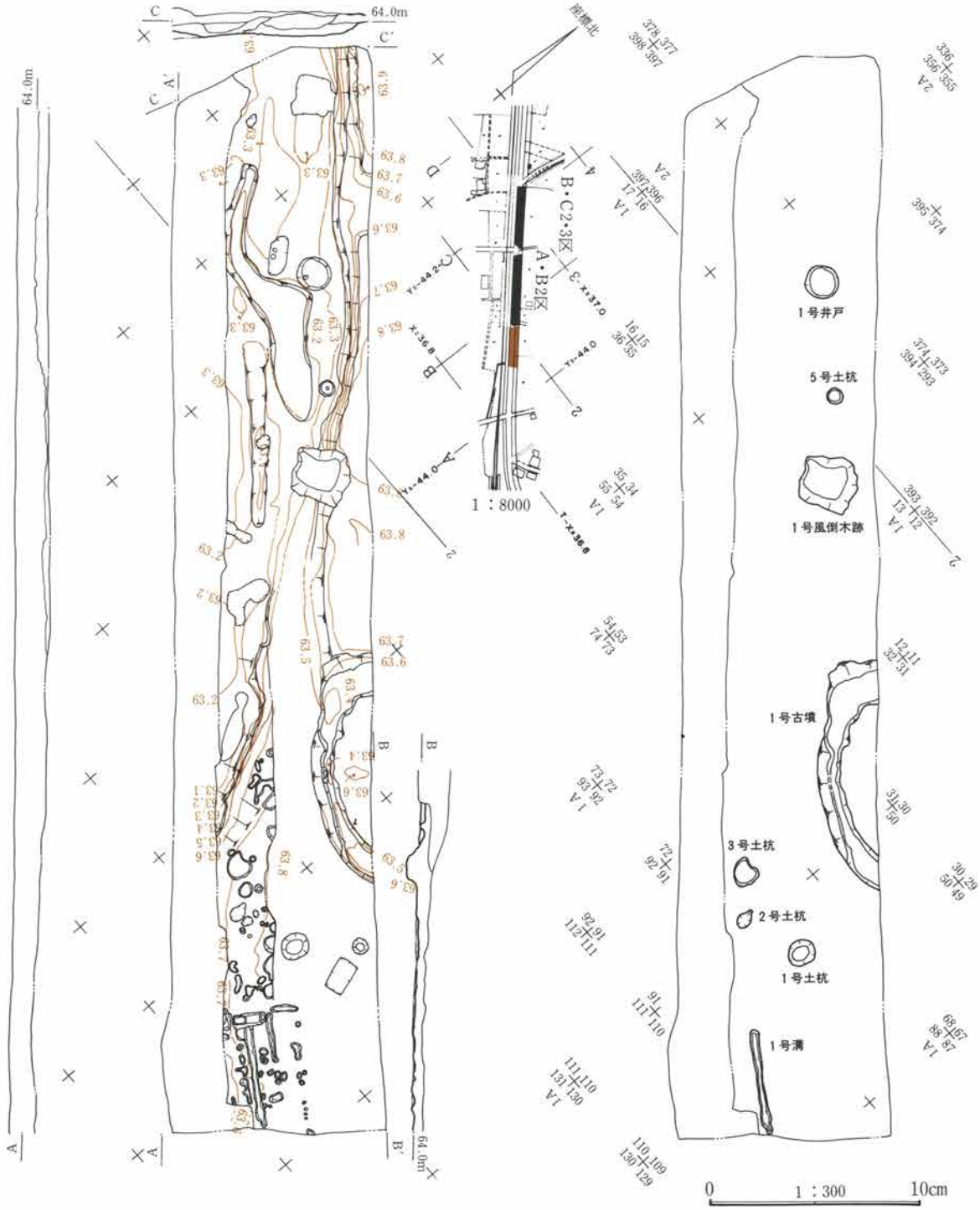
第１章　発掘概要と例言・凡例

発掘調査は、南端よりＡ１・２区、Ａ・Ｂ２区、Ｂ・Ｃ２・３区の３調査区が実施された。調査時には、前出順より東区、中区、西区と呼称された。場所は、Ａ１・２調査区の南端より太田市大字成塚字上新田1076-2、1076-6、Ａ・Ｂ２調査区は、大字成塚字上新田1076-3・1076-4・1076-5・1088-1、Ｂ・Ｃ２・３区は大字成塚字上新田1088-2・1089-1・1089-2・1103-7・1104-3にある。遺跡名は、大字・小字を用いたものではなく、既名称が採用されている。

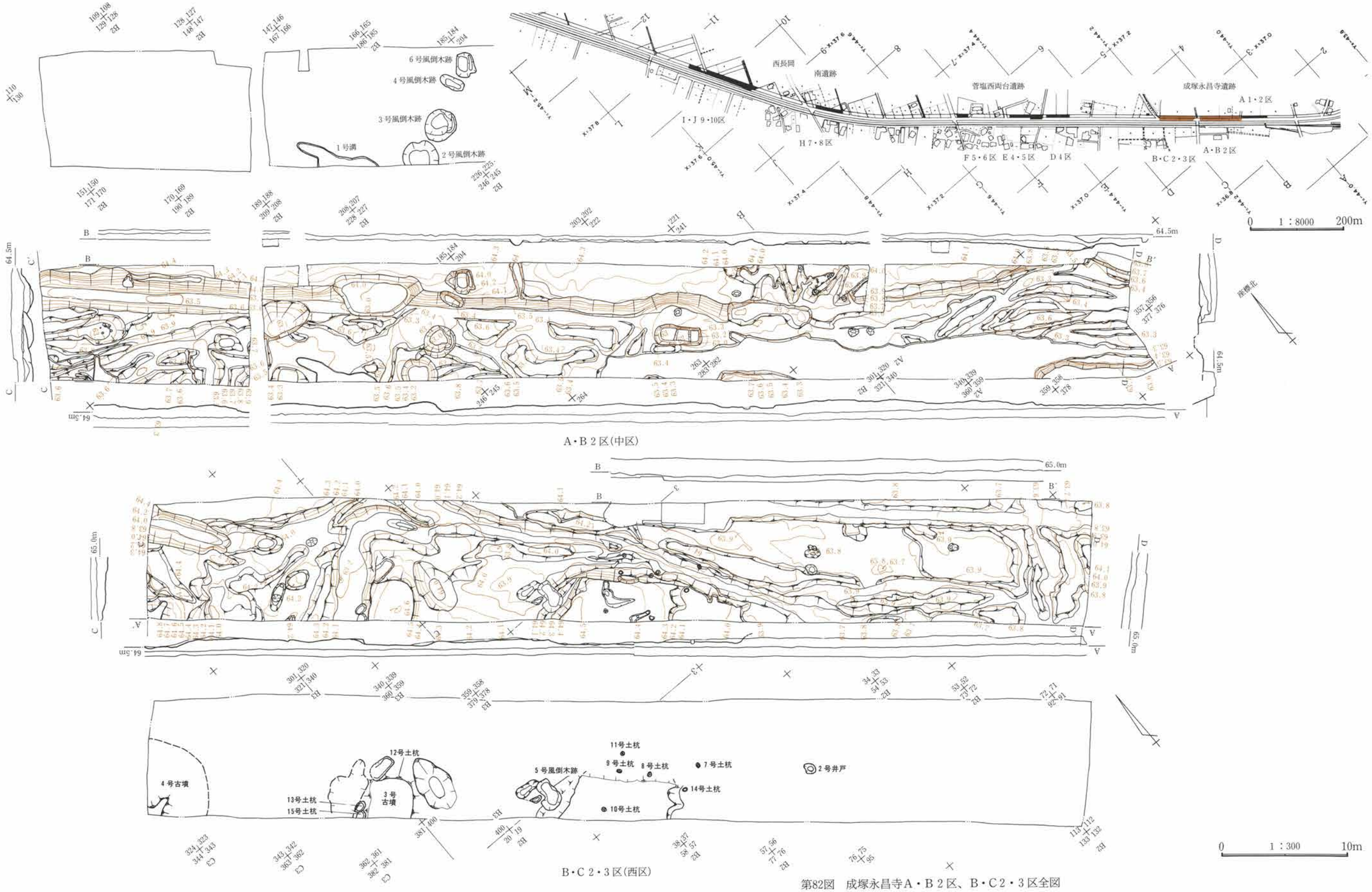
永昌寺は太田市大字成塚字上新田1089-1・2を含む951にあり、恵雲山と号し、曹洞宗である。創建は慶長年間（1610年頃）、参岫祖玄大和尚と伝えられ、本尊は聖観音菩薩である。第10世花山禅芳和尚のおり1797年頃、堂宇焼失のため現在地に移される。故地からは時おり骨が掘り出されたりもするという。現在はＢ・Ｃ２・３区の東接地が墓地となっているが、江戸時代前期以前の墓塔石は少ない。境内には彰義隊の結成にも参画し、明治維新後、実業人となった須永伝蔵、農民の父と畏敬を集めたという須永好の記念碑がある。

発掘調査期日は、平成４年４月９日から同年７月28日までの間に実施され、３調査区合せて2200㎡が調査され、さらに菅塩西両台遺跡中のＤ４、Ｅ４・５調査区内で試掘が行なわれ、Ｅ４・５区内でＳＤ33が発見されている。調査担当者は、石塚久則（専門員）、菊池実（主任調査研究員）、根岸仁（調査研究員）であり、主務取扱いは調査研究部第３課長巾隆之であった。当時の調査概要として『年報12』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団）1993中の「成塚永昌寺（えいしょうじ）遺跡」は、次のように報じる。「（前略）古墳・古墳状隆起が合せて４基確認された。他に井戸２基・土坑15基が確認された。時代は近世以降で、ほとんどが昭和初期のものと考えられる。また、蛇川の旧河道が調査区の中央部を縦断するように検出された。」調査の結果として「以降は、蛇川及びその北側の小河川の乱流地帯の微高地および、河川路にあたり、以降の遺存状況はあまり良くない。特に、昭和初期から３回に亘り河川改修がおこなわれ、また、遺跡のすぐ南を通る東武線の線路敷設に伴う造成によりかなりな土が、周辺の古墳を中心に採集されている。遺構は、前回の調査の続きにあたる東部から説明する。遺構の上段は古墳時代で、古墳と古墳状隆起が合わせて４基確認された。東より１号～４号墳と名付けた。１号墳は全体の南半分のみ発掘区に入り、墳丘はすべて削平され周堀が残存するのみである。内径は７ｍ以上で、外径11ｍ以上と考えられる。周堀は現状で幅1.1～1.3ｍであるが、北西部では幅2.0ｍと幅広くなってきている。円筒埴輪の小片が周堀内に落ち込んだ状況で出土した。２～４号墳は１号墳から200ｍ北に連続してほぼ等間隔で並んで検出された。２～４号墳は共に埴輪は出土せず、高さ50㎝ほどの微隆起状を呈して残っており、いずれも後の河川乱流に伴う撹乱により旧状の復元は困難である。１号墳は、埴輪よりみて６世紀後半に比定されるが、２～４号墳は古墳に伴うと考えられる遺物の出土がほとんど認められず、古墳としてよいかどうかの認定も含めて今後検討すべきである。住居に関しては古墳時代のものも含め、今回の調査では、全く確認できなかった。井戸が２基、土坑が15基検出された。一部近世のものがあるが、ほとんど昭和初期のものと考えられる。また、遺跡の全区域の中央部では、蛇川の旧流路が検出でき、昭和初期にまで遡ることが確認できた。また、調査として併行して成塚古墳群の分布調査を行なった。その結果、『上毛古墳綜覧』に記載漏れの古墳を数基確認した。復元全長約40ｍの成塚稲荷塚古墳を核にした後期における群集墳として重要であり、前年度までの調査資料と合わせて成塚古墳群の復元を行い、当該時期の集落

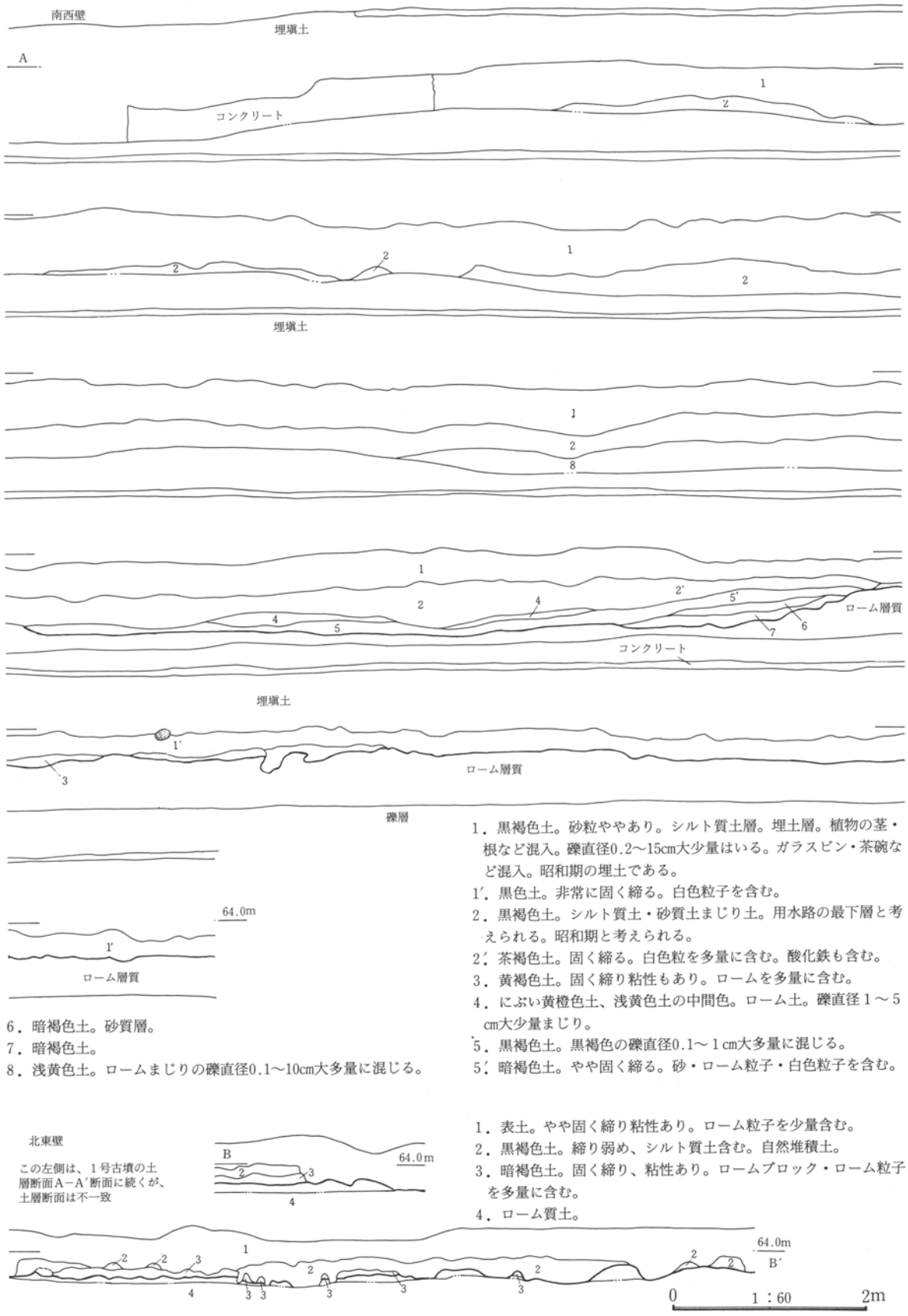
を含めた地域像の構築が期待される。」とあり、新鮮な調査後の所感を伝える。この中で蛇川の旧流路は「全区域の中央部で」と説明され、調査記録図中や遺物注記では旧河道と呼称されている。３調査区中の、Ａ１・２区の１号井戸から１号風倒木間に溝の立上が認められ、Ａ・Ｂ２区では、中央を長大に、Ｂ・Ｃ２・３区では、調査区長軸方向に２条の大溝があり、そのほか大半の溝跡が旧流路に関係しているらしいが、遺物注記は旧河道、○区ミゾとあり個名を指しての内容は薄かったので、以下の報告の中では詳しく扱ってはいない。古墳については、「古墳状隆起」と表現されているが、本書では、現場から一連の遺構名称をそのまま使用して



第81図　成塚永昌寺Ａ１・２区東区全図



第82図　成塚永昌寺A・B 2区、B・C 2・3区全図



1．黒褐色土。砂粒ややあり。シルト質土層。埋土層。植物の茎・根など混入。礫直径0.2～15cm大少量はいる。ガラスビン・茶碗など混入。昭和期の埋土である。
1′．黒色土。非常に固く締る。白色粒子を含む。
2．黒褐色土。シルト質土・砂質土まじり土。用水路の最下層と考えられる。昭和期と考えられる。
2′．茶褐色土。固く締る。白色粒を多量に含む。酸化鉄も含む。
3．黄褐色土。固く締り粘性もあり。ロームを多量に含む。
4．にぶい黄橙色土、浅黄色土の中間色。ローム土。礫直径1～5cm大少量まじり。
5．黒褐色土。黒褐色の礫直径0.1～1cm大多量に混じる。
5′．暗褐色土。やや固く締る。砂・ローム粒子・白色粒子を含む。
6．暗褐色土。砂質層。
7．暗褐色土。
8．浅黄色土。ロームまじりの礫直径0.1～10cm大多量に混じる。

1．表土。やや固く締り粘性あり。ローム粒子を少量含む。
2．黒褐色土。締り弱め、シルト質土含む。自然堆積土。
3．暗褐色土。固く締り、粘性あり。ロームブロック・ローム粒子を多量に含む。
4．ローム質土。

第83図　A1・2区の南西壁・北東壁土層断面図

いる。また、「古墳としてよいかどうかの認定」との整理に持ち越したい希望説明があるが、現場でできない遺構の性格認定は、遺物量が多大であったり科学分析結果を踏まえる場合などを除けば困難なため、本書の古墳個別説明中に「調査時には、古墳としての遺構番号が付されたが、性格は古墳状隆起と表現され、確実性を欠いていた」のような形で付記した。

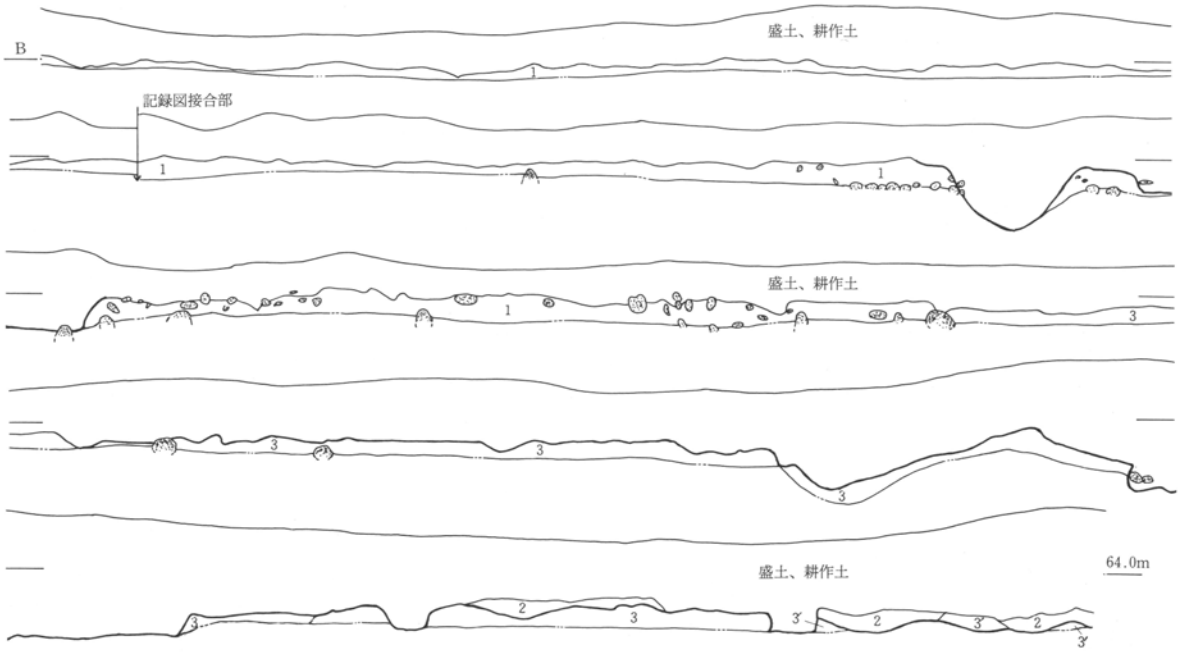
各調査区の補足点を以下に触れ、発見された遺構については次表に一表化した。

A 1・2 調査区は、拡幅用地全幅を含めて排土され、上方は重機排土である。発見され、番号が付された数量は、古墳 1、井戸 1、土坑 4、風倒木痕 1 である。そのうち 3 号土坑は、1 号風倒木に改称されている。遺構の発見面は、第83図に示したように、ローム質土直上の多くは水性堆積土で、その層境いが発見面である。ローム質土の約50㎝下方には礫層が存在しているが部分確認である。

A・B 2 調査区は、拡幅用地全幅を含めて排土され、上方は重機排土である。発見され、番号が付された数量は、溝 1、風倒木痕 4 である。遺構の発見面は第84・85図に示したようにローム質土直上の多くは、A 1・2 区同様水性堆積土で、その層境いが発見面である。

B・C 2・3 調査区は、拡幅用地全幅を含めて排土され、上方は重機排土である。番号が付された遺構数量は古墳 3、井戸 1、土坑 8、風倒木痕 1 である。遺構の発見面は、第86・87図に示した限りでは明確ではないが106頁の土層断面注記番号39にローム層があり、直上の水性堆積層との層境が発見面と理解される。

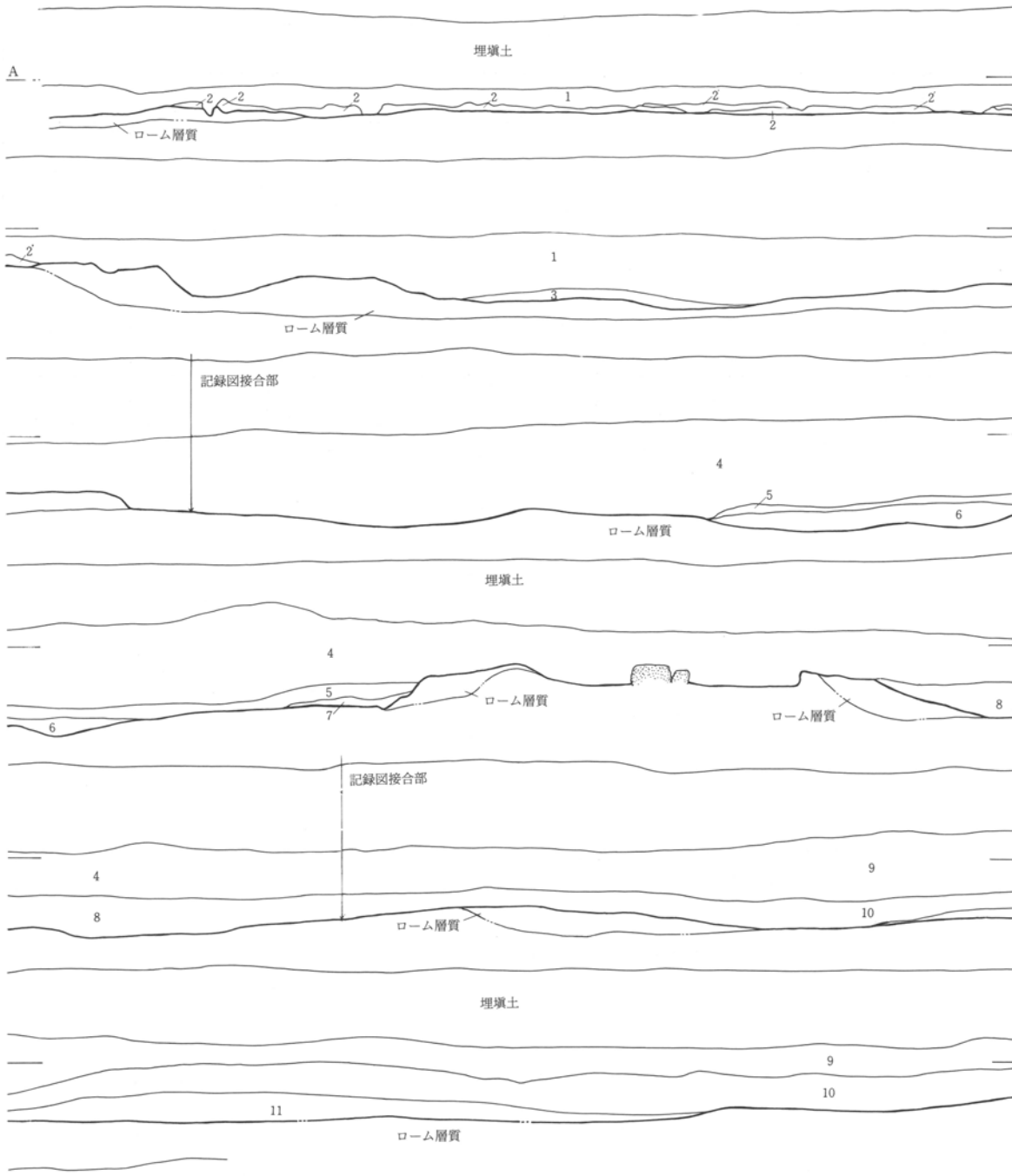
調査上の遺構名は、古墳は○号墳、井戸跡は○号井戸、穴後は○号土坑、風倒木と呼称された。調査区の設定は、成塚石橋遺跡がA・B・Cと数字で全区 5 m毎の座標方式であったのに対し、100 m毎の大区と、その中を 5 m毎に400等分した小間（齣）割り方式の改変が行なわれ、理由は、成塚石橋遺跡の座標軸が蛇川用水軸をとり、方位北を指していないことが理由らしい。このほか、図表現や用法は14・17・18頁で触れた。

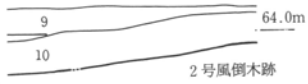


1．にぶい黄褐色土＋黄褐色土。ローム土・ローム粒混じり。一部、
　礫φ0.2～20㎝の混入多い。
2．にぶい黄褐色土。締まり悪い。シルト質土。
3．にぶい黄褐色土＋黄褐色土。ローム土まじりの土。
3′．にぶい黄褐色土＋黄褐色土。ローム堆積層。

0　1：60　2m

第84図　A・B 2 区の北東壁土層断面図





1．にぶい黄褐色土。榛名軽石粒。φ0.1～2㎝。極少量まじる。
2．にぶい黄褐色土。黄褐色土まじり多い。ローム漸移層に近い。
2′．にぶい黄褐色土。明黄褐土少量まじる。
3．黒褐色土。砂質土及び、礫まじり層。砂礫層。φ0.2～8㎝の礫まじり層。
4．にぶい黄褐色土。榛名軽石粒。φ0.1～2㎝。極少量含む。
5．黒褐色土。砂礫層土。
6．にぶい黄橙色土。砂礫層。φ0.2～5㎝の円礫多量にまじる。
7．にぶい黄褐色土。シルト質土。
8．暗褐色土。
9．にぶい黄褐色土。φ0.1～2㎝の榛名軽石粒極少量含む。
10．にぶい黄褐色土。黒褐色土。砂質土に近い層とシルト質土の互層。榛名軽石粒、φ0.1～2㎝。9層より多く含む。
11．にぶい黄褐色土。黒褐色土。砂質層とシルト層の互層及び、明黄褐ロームブロックがまじり、やや多めにまじる。　榛名軽石粒φ0.1～2㎝。10層と同じ程度の量含まれる。

0　1：60　2m

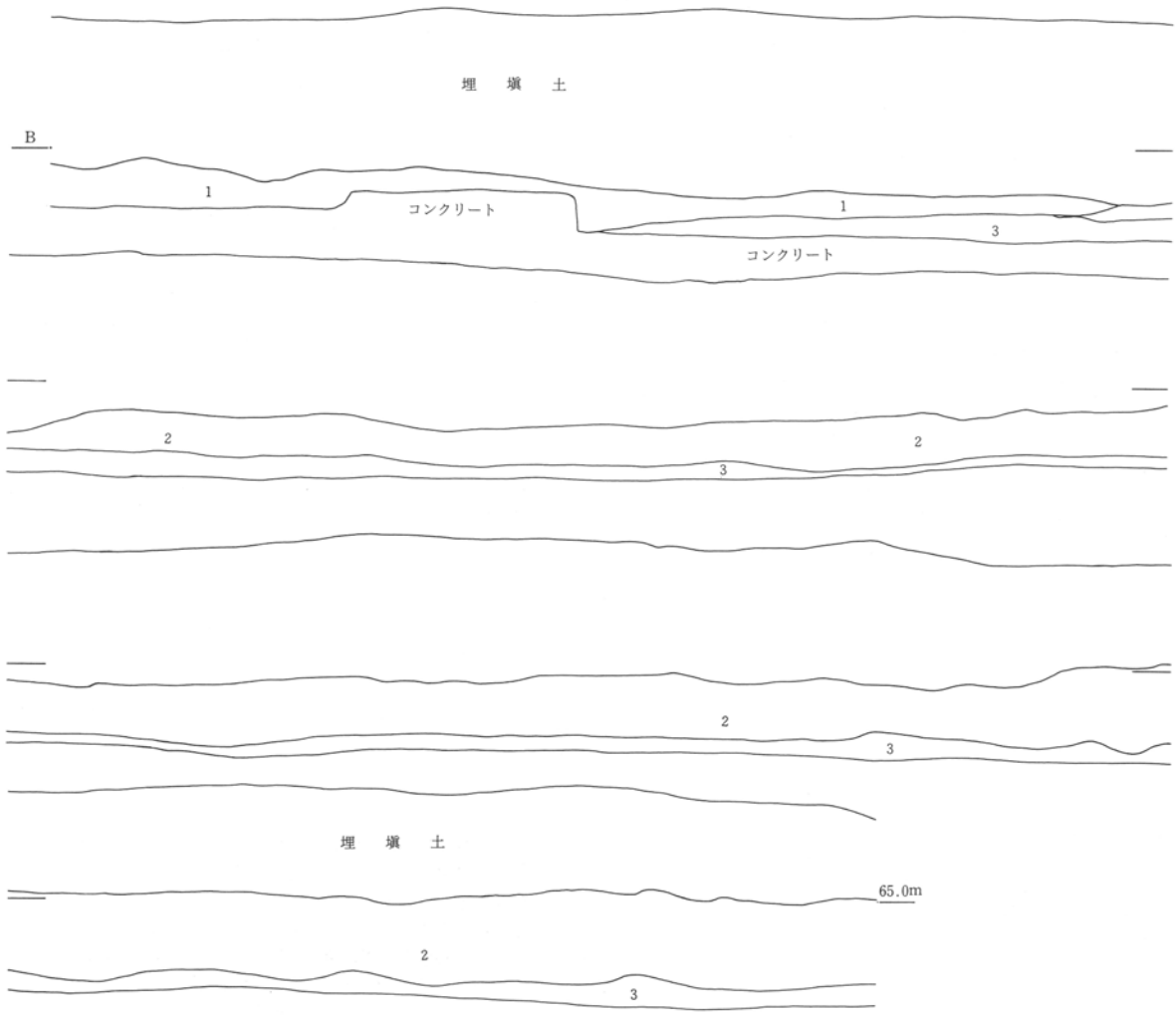
第85図　A・B2区の南西壁土層断面図

古墳　　（第81・82図）

名　称	位　置	形　状・規　模・備　考
1号墳	A 1・2区	墳形は、円形か。東半未調査地のため、不確定余地あり、発見面での推定直径約8.5m、周堀幅1.0～2.15m、深さ0.9mを測り、周堀を加えた推定直径8.5～10.0mを算出する。埴輪形象（人物）・朝顔形・円筒使用。
2号墳	B・C2・3区	墳形は、円形か、未調査地、流水のため不確定余地多大。発見面での推定直径約8.5m、周堀幅流水により不明、推定全直径5.2＋αm。出土遺物微弱。
3号墳	B・C2・3区	墳形は、不明。未調査地・流水のため不確定個所多大。発見面での推定直径約2.5＋αm。周堀幅1.35m前後。推定全長径3.85＋αm。出土遺物に後代の須恵器坏、8世紀頃の男瓦。
4号墳	B・C2・3区	北西から西にかけ未調査地・流水のため墳形は不明。発見面での長さ約2.5m。西壁下の3C343区凹みを周堀痕とすれば、幅4.5mとなり広過ぎるきらいあり。その場合は大形墳か。出土遺物は微弱。

井戸・溝・土坑・風倒木　　（第81・82図）

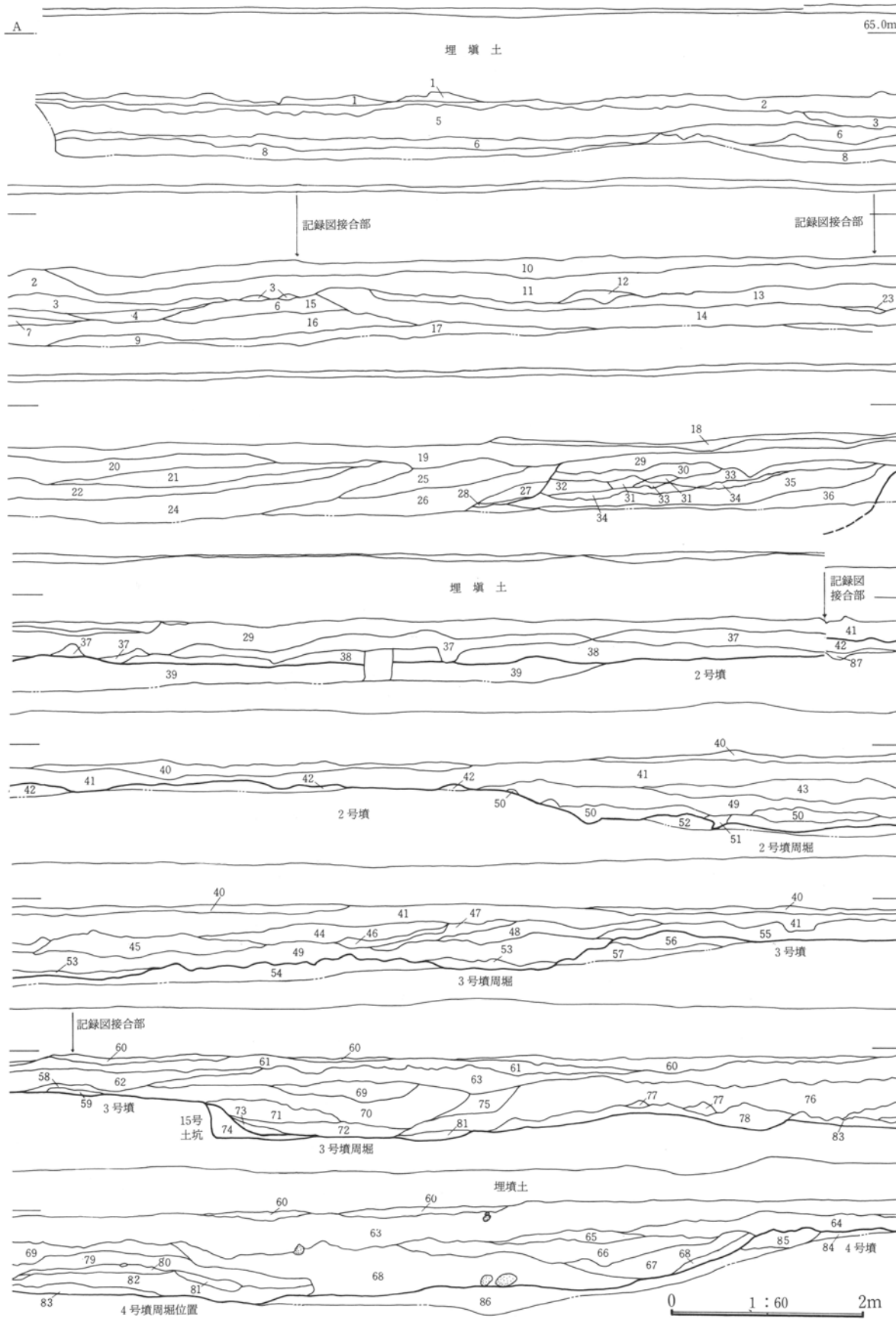
名　称	位　置	規　模（m）			備　考
		長さ（長辺）	幅	深さ	
1号井戸	A 1・2区	1.60	1.50	1.05	第95図。18世紀以降。陶器・軟質陶器。第97図。深さは未完掘のため不明。
2号井戸	B・C2・3区	0.97	0.80	0.82	第96図。近世以降か。深さは未完掘のため不明。
1号溝	A・B・2区	3.25＋α	0.45	0.14	第101図。



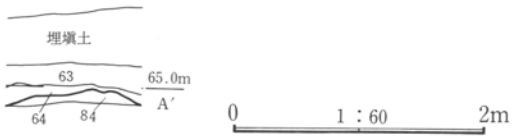
1．灰黄褐色土。砂質層。礫φ0.2～20cm、多量にまじる。
2．褐灰色土。シルト質で、砂質土層が多く互層をなす。茶色のビニール含む。極最近のもの。一部、礫φ0.2～20cm、少量まじる。
3．褐灰色土。砂礫層。礫φ0.2～5cm。ガラス製品多く出土。極最近のもの。

0　1：60　2m

第86図　B・C2・3区の北東壁土層断面図



第87図　B・C２・３区の南西壁土層断面図



1．褐灰色土。シルト質土。ロームブロックまじり。礫直径0.2～1cm大多くまじる。埋め土と考えられる。
2．褐灰色土。シルト質土。礫直径0.2～2cm大、ＦＰ粒直径0.1～0.3cm極少量まじる。
3．褐灰色土。細砂質土。ＦＰ粒直径0.1～0.3cm極少量まじる。
4．灰黄褐土。細砂質土。ＦＰ粒直径0.1～0.3cm極少量まじる。
5．暗褐色土。シルト質。ＦＰ粒直径0.1～0.3cm極少量まじる。
6．黒褐色土。細砂質土。ＦＰ粒直径0.1～0.3cm極少量まじる。
7．灰黄褐土。砂質土。ロームブロック少量まじる。ＦＰ粒直径0.1～0.3cm極少量まじる。
8．黒褐色土。砂質土。シルト質土のまじり土。ＦＰ粒ほとんど含まれず。
9．黒褐色土。砂質土。礫直径0.2～2cm大少しまじる。ＦＰ粒はほとんど含まれず。
10．褐灰色土。シルト質。礫直径0.1～1cm大まじり。ロームブロック少量まじる。埋め土。
11．褐灰色土。シルト質土。しまり良い。ＦＰ粒直径0.1～0.3cm極少量まじる。
12．褐灰色土。シルト質。ＦＰ粒直径0.1～0.3cm極少量まじる。
13．褐灰色土。シルト質。ＦＰ粒は直径0.1～0.3cm極少量まじる。
14．褐灰色土。砂礫層。礫直径0.2～5cm大の大きさ。ＦＰ粒直径0.1～0.3cm極少量まじる。
15．黒褐色土。シルト質。ＦＰ粒直径0.1～0.3cm極少量まじる。
16．灰黄褐色土。砂質土層。ＦＰ粒直径0.1～0.3cm極少量まじる。
17．黒褐色土。砂質土。礫直径0.2～2cm大少量まじる。
18．褐灰色土。礫まじり多く。直径0.1～3cm。シルト質。
19．褐灰色土。礫まじり多く。直径0.1～3cm。シルト質。
20．褐灰色土。礫まじり多く。直径0.1～3cm。シルト質。
21．褐灰色土。礫直径0.2～3cm大少量まじる。
22．褐灰色土。＋褐灰色土。シルト質。
23．黒褐色土。シルト質。
24．にぶい黄褐色土。＋褐灰色土。砂礫層。礫直径0.2～6cm大多量にまじる。
25．にぶい黄褐色土。シルト質。礫直径0.2～6cm大多量にまじる。
26．黒褐色土。シルト質。
27．褐色土＋にぶい黄褐色土。シルト質。
28．にぶい黄褐色土＋褐色土。シルト質。
29．未注記。
30．にぶい黄褐色土。シルト質。
31．黒褐色土＋褐色土。砂質土。
32．黒褐色土。砂質土。
33．黒褐色土＋にぶい黄褐色土。砂質土。
34．As－Ｂ層（浅間山Ｂ軽石層）。
35．黒褐色土。シルト質。ＦＰ粒直径0.2～3cm大極少量まじる。
36．黒褐色土。シルト質。
37．黒褐色土。シルト質。
38．にぶい黄色土。シルト質。やや色調強い。
39．明黄褐色土。ローム層。
40．褐灰色土。シルト質。ＦＰ粒直径0.1～1cm極少量まじる。
41．にぶい黄褐色土。シルト質。礫直径0.2～2cm少量まじる。ＦＰ粒直径0.1～1cm極少量まじる。
42．にぶい黄橙色土。ローム土。やや暗い色調。ＦＰ粒直径0.1～1cm極少量まじる。
43．にぶい黄橙色土。シルト質。ＦＰ粒直径0.1～1cm極少量まじる。
44．褐色土。シルト質。ＦＰ粒直径0.1～1cm極少量まじる。
45．黒褐色土。シルト質。ＦＰ粒直径0.1～1cm極少量まじる。
46．浅黄色土。ロームまじり中心。シルト質。ＦＰ粒直径0.1～1cm極少量まじる。
47．にぶい黄褐色＋浅黄色土。シルト質。ＦＰ粒直径0.1～1cm極少量まじる。
48．にぶい黄褐色土。シルト質。ＦＰ粒直径0.1～1cm極少量まじる。
49．黒褐色土＋暗褐色土。シルト質。一部砂質土含む。ＦＰ粒直径0.1～1cm極少量含む。
50．黒褐色土＋暗褐色土。シルト質。ＦＰ粒直径0.1～1cm極少量まじる。
51．黒褐色土。シルト質。ＦＰ粒直径0.1～1cm極少量まじる。
52．浅黄色土。ローム土。ＦＰ粒直径0.1～1cm極少量まじる。
53．黒褐色土＋にぶい黄褐色。砂質に近いシルト質土。一部砂質土含む。
54．浅黄色土。ローム土。ＦＰ粒直径0.1～1cm極少量まじる。
55．にぶい黄色褐色＋明黄褐色土。シルト質。ローム土まじる。ＦＰ粒直径0.1～1cm極少量まじる。
56．にぶい黄橙色土。やや暗い。シルト質土。
57．浅黄色土。ローム土。
58．にぶい黄褐色土。シルト質土。
59．にぶい黄褐色土＋明黄褐色土。ローム土まじる。
60．褐灰色土。シルト質。
61．にぶい黄褐色土。シルト質。
62．にぶい黄褐色土＋明黄褐色土。ローム土まじる。
63．にぶい黄褐色土＋灰黄褐色土。
64．褐色土。シルト質。ＦＰ粒直径0.1～0.5cm極少量まじる。
65．にぶい黄褐色土。ＦＰ粒直径0.1～0.5cm極少量まじる。
66．灰黄褐色土＋黒褐色土。ＦＰ粒直径0.1～0.5cm極少量まじる。
67．黒褐色土。ＦＰ粒直径0.1～0.5cm極少量まじる。
68．褐灰色土。ＦＰ粒直径0.2～15cm大多量まじる。ＦＰ粒直径0.1～1cm極少量まじる。
69．灰黄褐色土。シルト質＋砂質。ＦＰ粒直径0.1～1cm極少量まじる。
70．黒褐色土。ＦＰ粒直径0.1～1cm極少量まじる。
71．黒褐色土＋明黄褐色土。シルト質。ＦＰ粒直径0.1～1cm極少量まじる。
72．灰黄褐色土＋黒褐色土。砂質土まじる。
73．にぶい黄褐色土。シルト質。
74．明黄褐色土。ローム土多く。橙色土まじる。
75．明黄褐色土。シルト質。
76．灰黄褐色土＋黒褐色土。ＦＰ粒直径0.1～1cm極少量まじる。
77．灰黄褐色土＋浅黄色土。シルト質。ローム土まじり少ない。ＦＰ粒直径0.1～1cm極少量まじる。
78．にぶい黄褐色土。シルト質。ローム土まじる。ＦＰ粒直径0.1～1cm極少量まじる。
79．黒褐色土。シルト質土。ＦＰ粒直径0.1～1cm極少量まじる。
80．黒褐色土。シルト質土。礫直径0.2～3cm大極少量まじる。ＦＰ粒直径0.1～1cm極少量まじる。
81．灰黄褐色土。砂質土層。礫直径0.2～5cm大少量まじる。ＦＰ粒直径0.1～1cm極少量まじる。
82．灰黄褐色土。砂質土層。
83．にぶい黄褐色＋浅黄色土。ローム土まじり。シルト質。
84．明黄褐色土。ローム土。褐色土まじる。
85．浅黄色土。礫まじり直径0.2～1cm。特に下層に多い。
86．黄灰色土。非常にしまりの良い砂層。
87．浅黄色土。礫0.1～1cm礫多くまじる。特に下層に多い。

第88図　Ｂ・Ｃ２・３区の南西壁土層断面図

名　称	位　置	規　模（m）			備　考
		長　さ（長辺）	幅	深さ	
1号土坑	A 1・2区	1.40	1.20	0.20	第95図。近世以降～昭和初期か。
2号土坑	A 1・2区	1.00	0.66	0.18	第95図。近世以降～昭和初期か。
4号土坑	A 1・2区	1.36	1.18	0.09	第95図。近世以降～昭和初期か。
5号土坑	A 1・2区	0.80	0.70	0.20	第95図。近世以降～昭和初期か。
7号土坑	B・C2・3区	0.42	0.38	0.18	第96図。近世以降～昭和初期か。
8号土坑	B・C2・3区	0.38	0.30	0.18	第96図。近世以降～昭和初期か。
9号土坑	B・C2・3区	0.37	0.32	0.18	第96図。近世以降～昭和初期か。
10号土坑	B・C2・3区	0.36	0.34	0.40	第96図。近世以降～昭和初期か。
11号土坑	B・C2・3区	0.32	0.30	0.26	第96図。近世以降～昭和初期か。
12号土坑	B・C2・3区	2.14	1.02	0.20	第96図。焼土・木炭粒含む。
13号土坑	B・C2・3区	1.02	0.60	0.32	第96図。焼土・木炭粒含む。
14号土坑	B・C2・3区	0.44	0.36	0.38	第96図。近世以降～昭和初期か。
1号風倒木	A 1・2区	3.35	2.40	0.70	第95図。近世以降～昭和初期か。
2号風倒木	A・B 2区	2.95	1.70	0.75	第101図。幅1.70mは＋α余地大。
3号風倒木	A・B 2区	2.80	2.40	0.56	第101図。
4号風倒木	A・B 2区	3.40	1.55	0.68	第101図。
5号風倒木	B・C2・3区	2.46	1.76	0.65	第96図。
6号風倒木	A・B 2区	3.20	2.50	0.86	第101図。

第2章　発掘された遺構と遺物

前出の一覧表は、発掘調査時点で名称変更された旧名を除く、全遺構を扱った。このほか溝跡は数多くあるものの名称は特にあたえられなかった。その一方遺物中には、西区溝・旧河道・南溝など、西区と通称されたB・C 2・3区中での遺構名が注記されていたものの、記録保存図中にその名称はなかった。それらの遺物は、特に、永昌寺の什物を思わせる個性が含まれ、同寺の来歴ほかを示唆するものとして採録した。

1．古墳

2200㎡の調査地の中に、河川流出により古墳としての体裁を欠く例を含め、4基が発見されている。説明に当り、旧状を欠いていても西長関南遺物の古墳と同等の項目説明としたい。

1号墳　（第89図）

位置　A 1区31・32・50・51・52にあり、調査面上の標高は、およそ63.6mである。

重複　周堀の西端は、蛇川の旧河道により流出している。第89図土層断面では、現代の盛土と削平が行われている。

形状　北東側が過半以上、未調査地のため不確定の余地がある。調査された範囲での周堀は、円弧を成し円墳様に巡るらしき形となる。第89図土層断面10は締りあり、墳丘築土かもしれない。

規模　発見面での推定直径約8.5m、周堀幅1.0～2.15m、深さ0.9m、周堀を加えた推定直径9.5～10.0mを算出する。

周堀　墳丘側が、円弧を成すのに対し、対応する周堀の平面形が楕円状を呈するのは周堀西端が失なわれたためと考えられる。第89図の土層断面では、横断面は底の平らなU字状を呈する。底面は、ほぼ平らである。埋土は、土層断面注記中に、砂質・シルト質などの記述なく、古代以来の埋没状態か。

埋葬施設　発見されていない。

遺物　第90図に示したように少量の土師器片と、埴輪形象（人物）・朝顔形・円筒がある。埴輪片の出土量は、98片で多くなく、しかも細片である。接合不能な破片が多い。

2号墳　　（第91図）

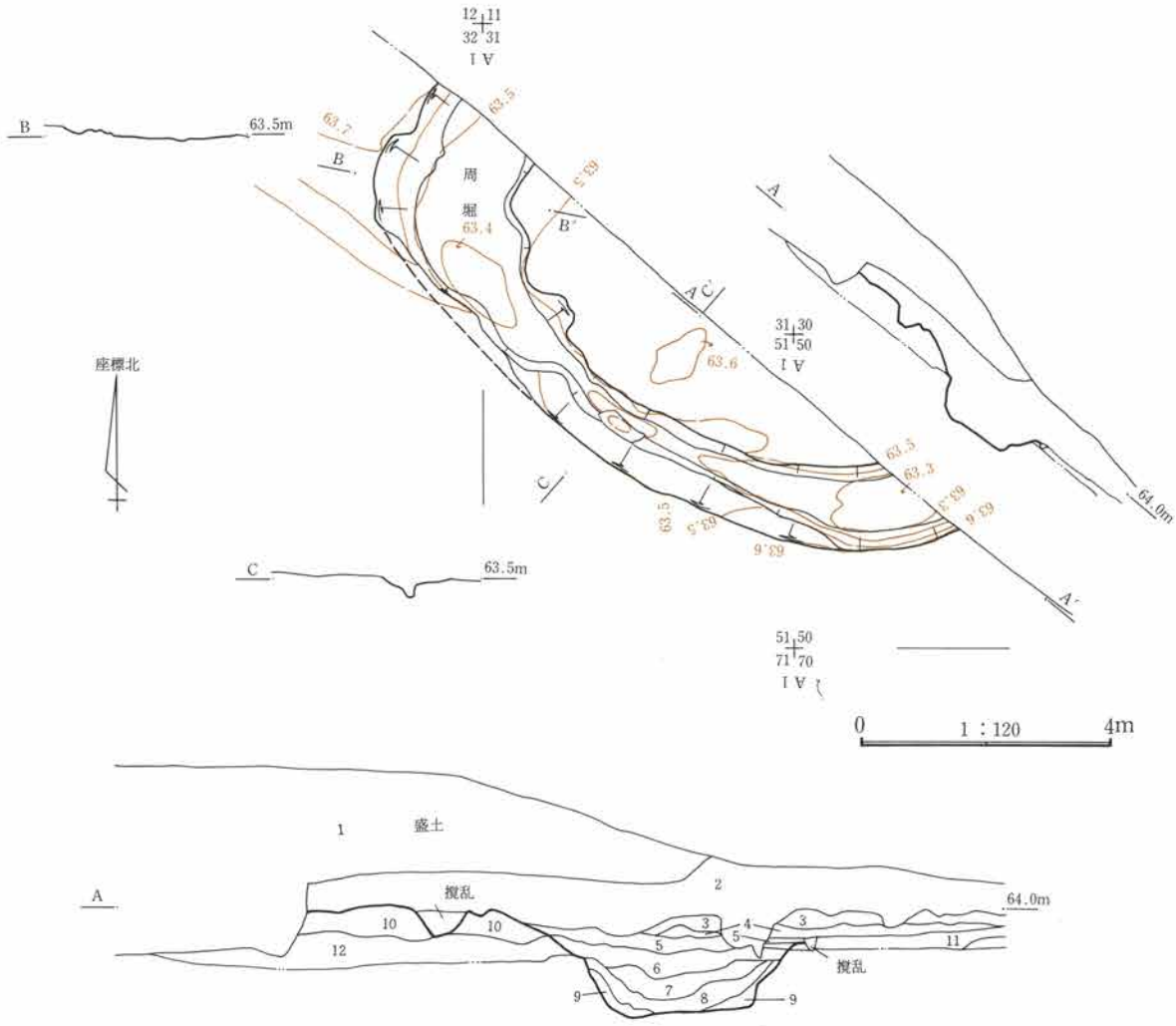
位置　B２区16～19・36～38・56・57、B３区397～399にあり、発見面標高は約64.5mである。

重複　周堀内に旧河道が流れ込んだらしく、旧態は、失われる。

形状　旧河道の蛇行状態が、周堀の残映とすれば、円弧をなす墳裾が推測され、円形か。

規模　第91図中の小高い個所は径7.8mあり、それを根拠とすれば周堀を含まない直径は8.5m内外。

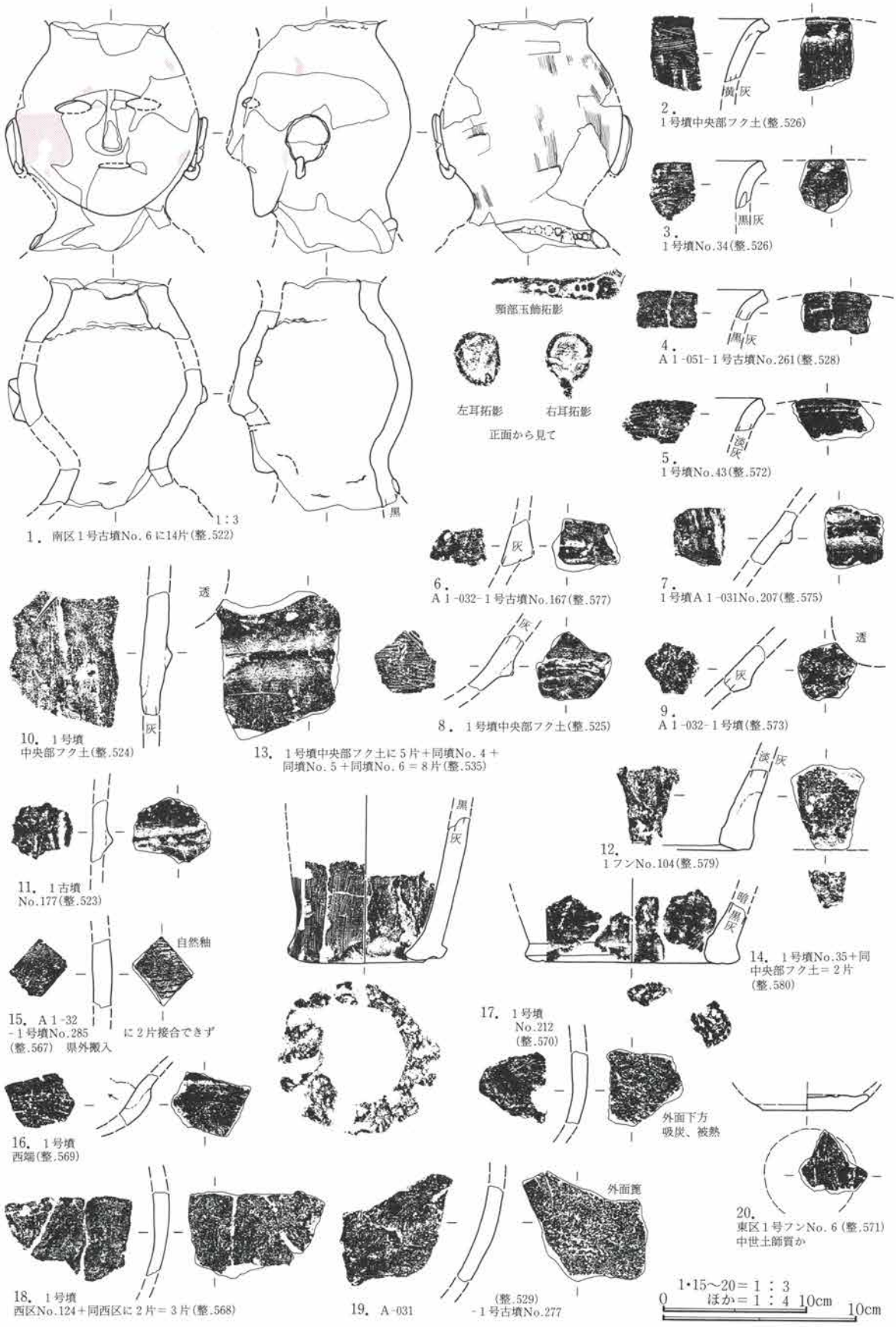
周堀　旧状を欠くため不明瞭。北東側に接する旧河道は孤成りを呈し、周堀の残映か。



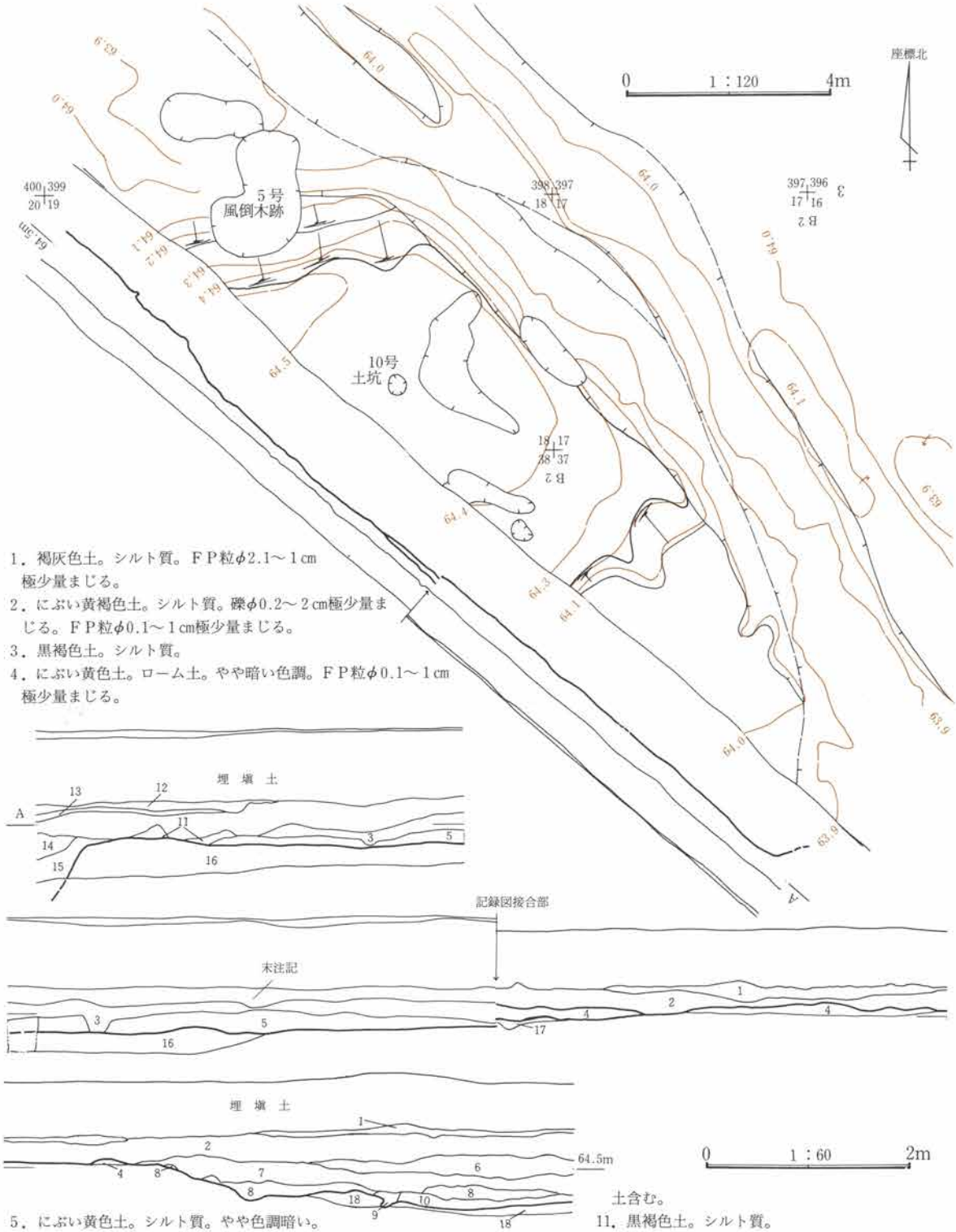
1．盛土。
2．表土。やや固くしまり活性あり。ローム粒子を少量含む。
3．黒褐色土。しまり弱め。シルト質土含む。自然堆積土。
4．にぶい黄褐色土。ローム土多く混じる。
5．黒褐色土。固くしまり、粘性あり。ローム粒子を含む。
6．黒褐色土。やや固くしまり、粘性あり。ローム粒を少量含む。5層よりやや黒い色調。
7．暗褐色土。やわらかくて粘性非常にあり。ロームブロック・ローム粒子を少量含む。
8．暗褐色土。やわらかくてしまり良い。粘性非常にあり。ロームブロック・ローム粒子を多量含む。
9．黄褐色土。やわらかくてしまり良い。粘性非常にあり。ロームを多量に含む。
10．茶褐色土。やわらかくてしまり良い。粘性非常にあり。ロームブロック・ローム粒子を多量に含む。
11．暗褐色土。固くしまり、粘性あり。ロームブロック・ローム粒子を含む。
12．ローム

0　1：60　2m

第89図　A１・２区１号古墳遺構図

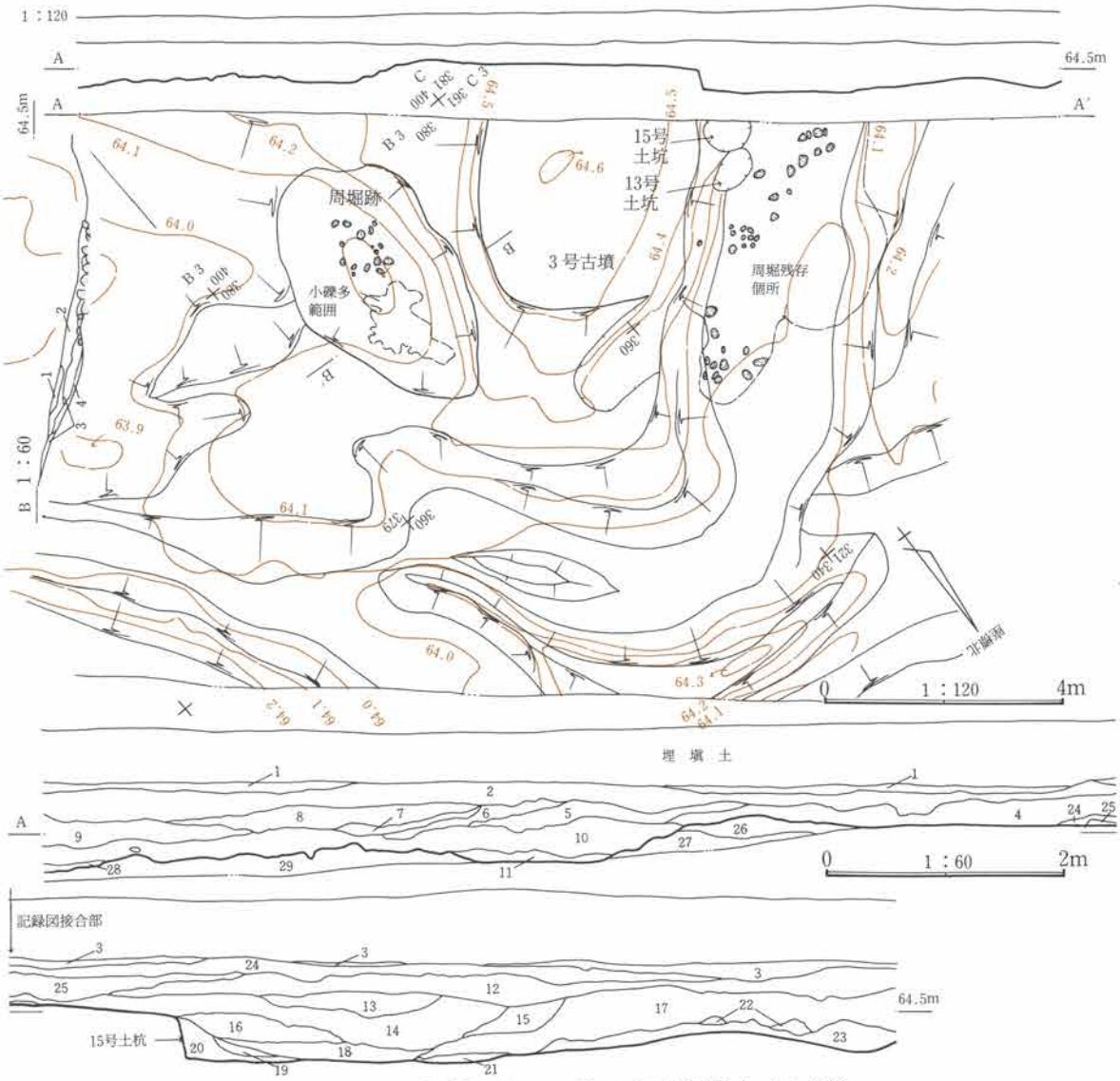


第90図　成塚永昌寺1号墳遺物図



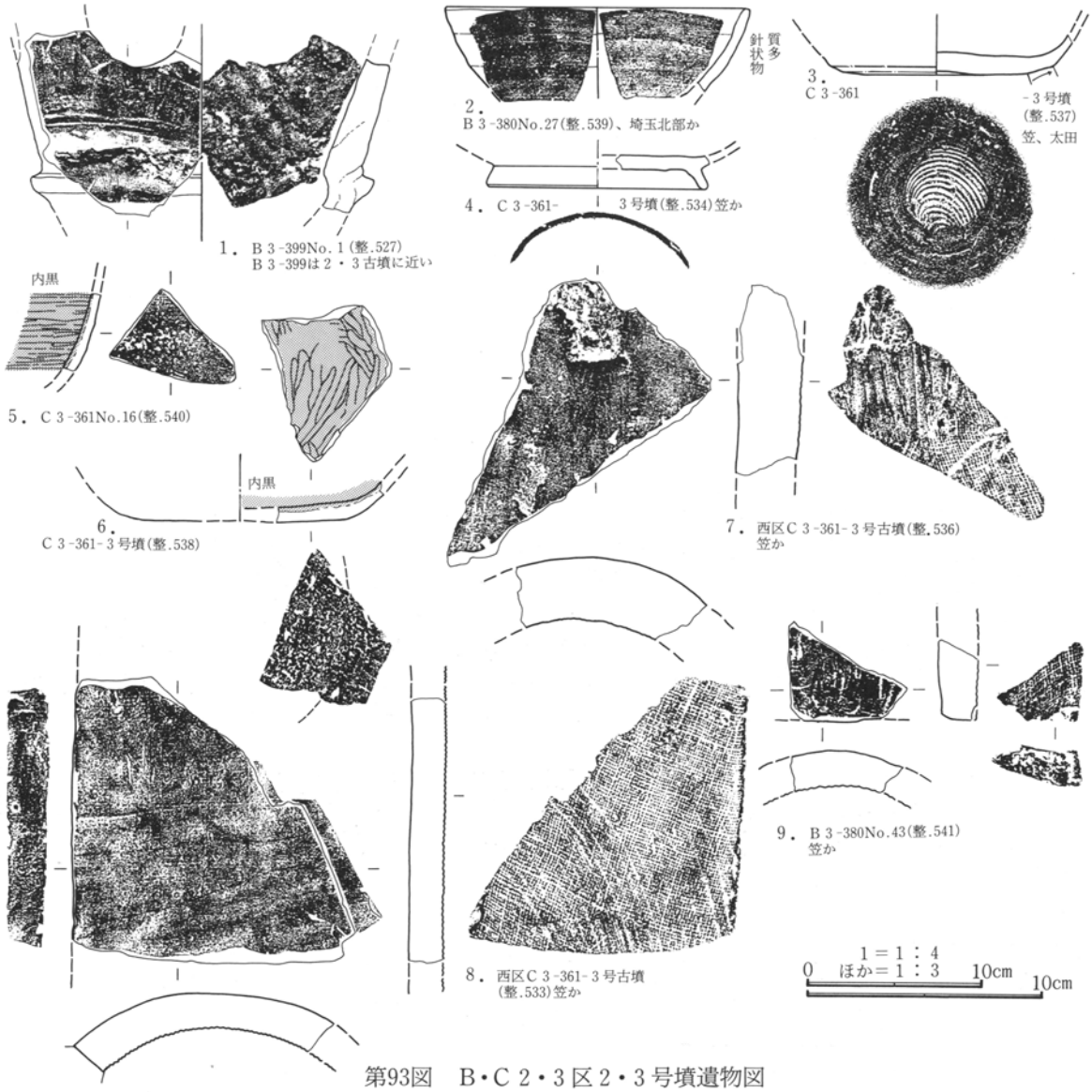
1．褐灰色土。シルト質。ＦＰ粒φ2.1～1cm極少量まじる。
2．にぶい黄褐色土。シルト質。礫φ0.2～2cm極少量まじる。ＦＰ粒φ0.1～1cm極少量まじる。
3．黒褐色土。シルト質。
4．にぶい黄色土。ローム土。やや暗い色調。ＦＰ粒φ0.1～1cm極少量まじる。
5．にぶい黄色土。シルト質。やや色調暗い。
6．にぶい黄褐色土。シルト質。ＦＰ粒φ0.1～1cm極少量まじる。
7．黒褐色土＋暗褐色土。シルト質。一部砂質土含む。ＦＰ粒φ0.1～1cm極少量まじる。
8．黒褐色土＋浅黄色土。シルト質。ＦＰ粒φ0.1～1cm極少量まじる。
9．黒褐色土。シルト質。ＦＰ粒φ0.1～1cm極少量まじる。
10．黒褐色土＋にぶい黄褐色土。砂質に近いシルト質土。一部砂質土含む。
11．黒褐色土。シルト質。
12．褐灰色土。礫まじり多く。φ0.1～3cm大。シルト質。
13．褐灰色土。礫まじり多く。φ0.1～3cm大。シルト質。
14．黒褐色土。シルト質。ＦＰ粒φ0.2～3cm極少量まじる。
15．黒褐色土。シルト質。
16．明黄褐色土。ローム層。
17．明黄褐色土。ローム土。
18．浅黄色土。ローム土。ＦＰ粒φ0.1～1cm極少量まじる。

第91図　Ｂ・Ｃ２・３区２号古墳遺構図



1．にぶい黄褐色土。シルト質。ＦＰ粒φ0.1～１cm粒少量まじる。
2．にぶい黄褐色土。シルト質。礫φ0.2～２cm極少まじる。ＦＰ粒φ0.1～１cm、少量まじる。
3．褐灰色土。シルト質。
4．にぶい黄褐色土＋明黄褐色土。シルト質。ローム土まじる。ＦＰ粒φ0.1～１cm極少量まじる。
5．にぶい黄褐土。シルト質。ＦＰ粒φ0.1～１cm極少量まじる。
6．にぶい黄褐色土＋浅黄色土。シルト質。ＦＰ粒φ0.1～１cm極少量まじる。
7．浅黄色土。ローム土まじり中心。シルト質。ＦＰφ0.1～１cm極少量まじる。
8．褐色土。シルト質。ＦＰ粒φ0.1～１cm極少量まじる。
9．黒褐色土。シルト質。ＦＰ粒φ0.1～１cm極少量まじる。
10．黒褐色土＋暗褐色質。シルト質。一部砂質土含む。ＦＰ粒φ0.1～１cm極少量まじる。
11．黒褐色土＋にぶい黄褐色土。砂質に近いシルト質土。一部砂質土含む。
12．にぶい黄褐色土＋灰黄褐色土。
13．灰黄褐色土。シルト質土＋砂質土。ＦＰ粒φ0.1～１cm極少量まじる。
14．黒褐色土。ＦＰ粒φ0.1～１cm極少量まじる。
15．にぶい黄色褐色土。シルト質。
16．黒褐色土＋明黄褐色土。シルト質。ＦＰ粒φ0.1～１cm極少量まじる。
17．灰褐色土＋黒褐色土。ＦＰ粒φ0.1～１cm極少量まじる。
18．灰黄褐色土＋黒褐色土。砂質土中心。
19．浅黄色土。ローム層。
20．明黄褐色土。ローム土多く。褐色土まじる。
21．灰黄褐色土。砂質。礫φ0.2～５cm大少量まじる。ＦＰ粒φ0.1～１cm極少量まじる。
22．にぶい黄褐色土＋浅黄色土。シルト質。ローム土まじる。ＦＰ粒φ0.1～１cm極少量まじる。
23．にぶい黄褐色土＋浅黄色土。シルト質。ローム土まじる。ＦＰ粒φ0.1～１cm極少量まじる。
24．にぶい黄褐色土。シルト質。
25．にぶい黄褐色土。明黄褐色土。ローム土まじる。
26．にぶい黄橙色土。やや暗い。シルト質。
27．浅黄色土。ローム土。
28．黒褐色土＋にぶい黄褐色土。砂質に近いシルト質土。一部砂質土含む。
29．浅黄色土。ローム土。ＦＰ粒φ0.1～１cm極少量含む。

第92図　Ｂ・Ｃ２・３区３号古墳遺構図



第93図　B・C２・３区２・３号墳遺物図

埋葬施設　発見されていない。

遺物　第93図に示したが微弱で、共存性を伺える遺物はない。

３号墳　（第92図）

位置　Ｂ３区360・379・380・400、Ｃ３区341・342・361・362に位置し、発見面標高は約64.6mである。

重複　水性堆積層は、残存の墳丘らしき上面におよび、周堀も流出。

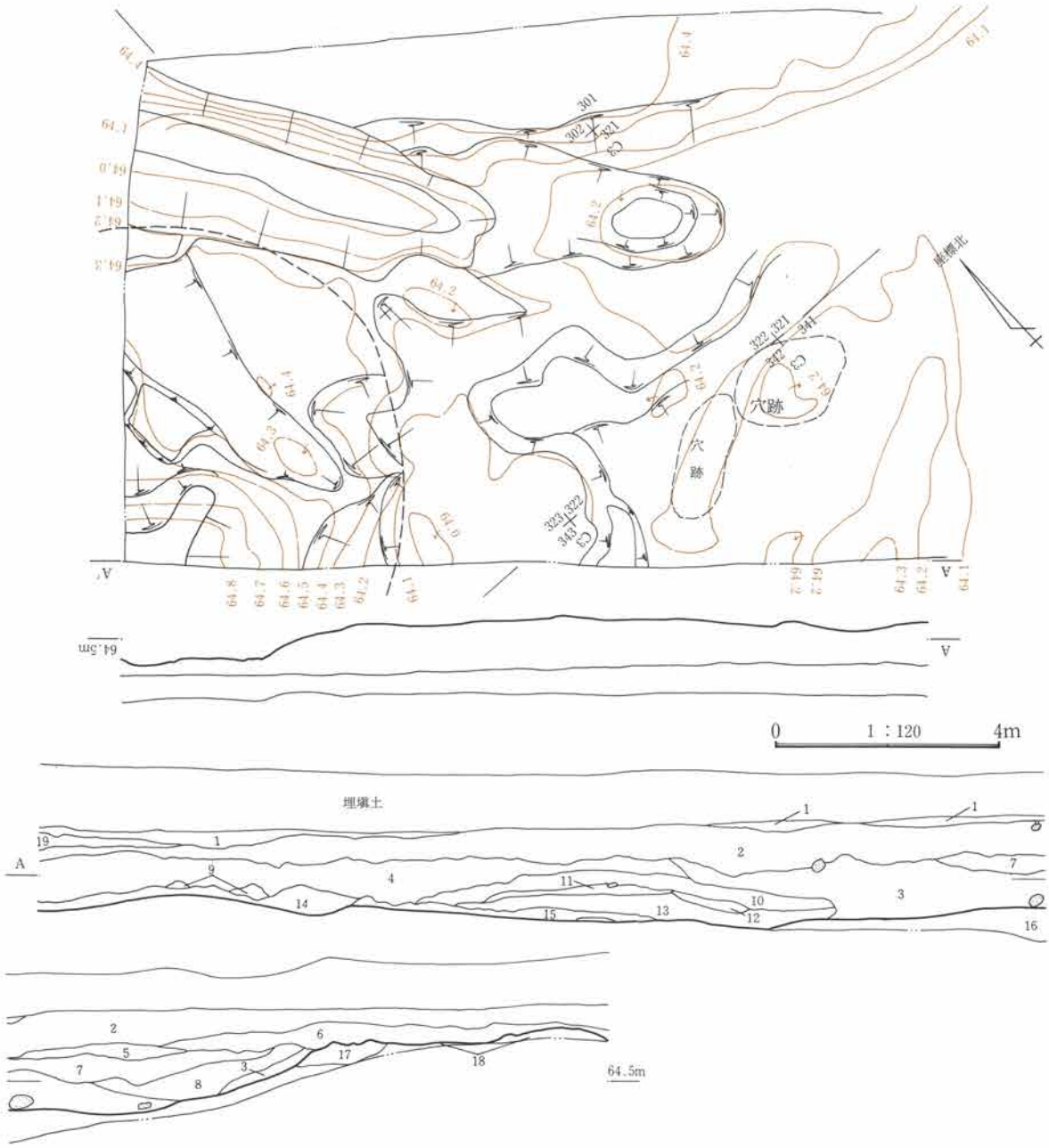
形状　遺在状態が悪く不明。

規模　残存状態から2.5＋αmを測る。

周堀　記録図中に、第92図Ｂ３区380の範囲が示され、さらに13・15号土坑西側の溝中にも、周溝跡らしき範囲の記入がある。後者の範囲は位置からして疑問である。前者の幅は約1.35mを測る。

埋葬施設　発見されていない。

遺物　第93図に示した。８・９世紀頃の須恵器・瓦片がある。共存性は薄い。



1．黒灰色土。シルト質。
2．にぶい黄褐色土＋灰黄褐色土。
3．褐灰色土。砂礫層。礫φ0.2～15cm多量まじる。ＦＰ粒φ0.1～1cm極少量まじる。
4．灰黄褐色土＋黒褐色土。ＦＰ粒φ0.1～1cm極少量まじる。
5．にぶい黄褐色土。ＦＰ粒φ0.1～0.5cm極少量まじる。
6．褐色土。シルト質。ＦＰ粒φ0.1～0.5cm極少量まじる。
7．灰黄色土＋黒褐色土。ＦＰ粒φ0.1～0.5cm極少量まじる。
8．黒褐色土。ＦＰ粒0.1～0.5cm極少量まじる。
9．灰黄褐色土＋浅黄色土。シルト質。ローム土まじり少ない。ＦＰ粒φ0.1～1cm極少量まじる。
10．にぶい黄褐色土。シルト質。ＦＰ粒φ0.1～1cm極少量まじる。
11．黒褐色土。シルト質。礫φ0.2～3cm極少量まじる。ＦＰ粒φ0.1～1cm極少量まじる。
12．灰黄褐色土。砂質。礫φ0.2～5cm少量まじる。ＦＰ粒φ0.1～1cm極少量まじる。
13．灰黄褐色土。砂質土層。
14．にぶい黄褐色土＋浅黄色土。シルト質。ローム土まじる。ＦＰ粒φ0.1～1cm極少量まじる。
15．にぶい黄褐色＋浅黄色土。ローム土まじり。シルト質。
16．黄灰色土。非常にしまりの良い砂層。
17．浅黄色土。φ0.2～1cm礫多くまじる。特に下層に多い。
18．明黄褐色土。ローム土。褐色土まじる。
19．にぶい黄褐色土。シルト質。

第94図　B・C２・３区４号古墳遺構図

4号墳　（第94図）

位置　C３区301～303・321～323・341～343にあり、発見面の最上面の標高は、約64.8mである。

重視　水性堆積層が、深くまでおよび、広くを覆う。

形状　遺存状態が悪く不明。

規模　残存状態から、2.3＋αmを測る。それは北西壁側の残存状況が、やや良いとした時である。

周堀　周堀内に、旧河道がおよんだらしく不明瞭。64.0mの等高線は同溝跡の余地あり。

埋葬施設　発見されていない。

遺物　共存性のある遺物は発見されていない。

２．井戸跡

1号井戸　（第95図）

直井筒の形で掘られ、平面は円形を呈す。埋土は第95図に土層断面を示したが、砂質の層が土層注記番号１・４にあり、蛇川によりおよんだ砂質土ではないだろうか。出土遺物は微弱である。底面は２号井戸と同様に未完堀であるが、湧水によるらしい。

2号井戸　（第96図）

直井筒の形で堀られ、平形は近円形を呈す。埋土はミルト質で、蛇川の土壌がおよんでいるようである。遺物は第97図に示した２軟質陶器焙烙底部が新しく、18世紀以降か。

３．溝跡

溝跡として遺構番号が付されたのは１号溝のみであった。このほか旧河道扱いで、B・C２・３区に西区溝。旧河道・南溝などが遺物注記中に存在した。

1号溝　（第101図）

中規模な溝跡で、幅0.8～1.3m、深0.16m、方向はN27°30′Wをとる。横断面は第101図のように浅いU字状を呈し、埋土中にAs－A（浅間山A軽石、天明３年）含むと注記にある。

４．穴跡

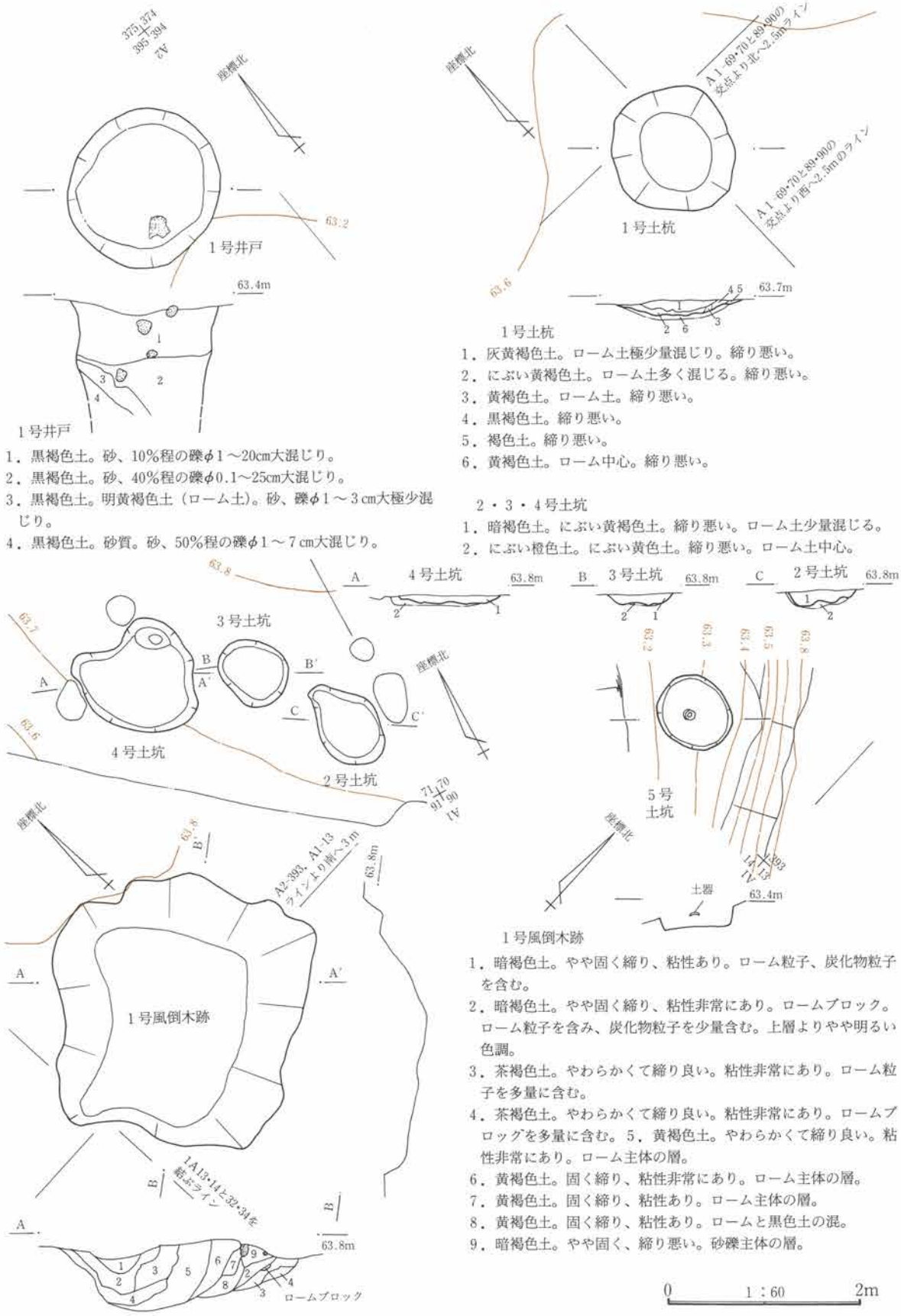
穴跡は、土坑として15基分の通番が付されたが、３・６・15号土坑が、風倒木に改称された。

1号土坑　（第95図）

平面は近円形、断面は浅い擂鉢状を呈する。砂質土の埋積少なく、締りが悪い点は、設けられた時期が後出することを示唆する。

2・3・4号土坑　（第95図）

３基は、A１区71にあり、相互は近接する。埋土は各々、締りが悪く、粗質のようで、設けられた時期が後出することを示唆する。



1号井戸

1．黒褐色土。砂、10%程の礫φ1～20cm大混じり。
2．黒褐色土。砂、40%程の礫φ0.1～25cm大混じり。
3．黒褐色土。明黄褐色土（ローム土）。砂、礫φ1～3cm大極少混じり。
4．黒褐色土。砂質。砂、50%程の礫φ1～7cm大混じり。

1号土杭

1．灰黄褐色土。ローム土極少量混じり。締り悪い。
2．にぶい黄褐色土。ローム土多く混じる。締り悪い。
3．黄褐色土。ローム土。締り悪い。
4．黒褐色土。締り悪い。
5．褐色土。締り悪い。
6．黄褐色土。ローム中心。締り悪い。

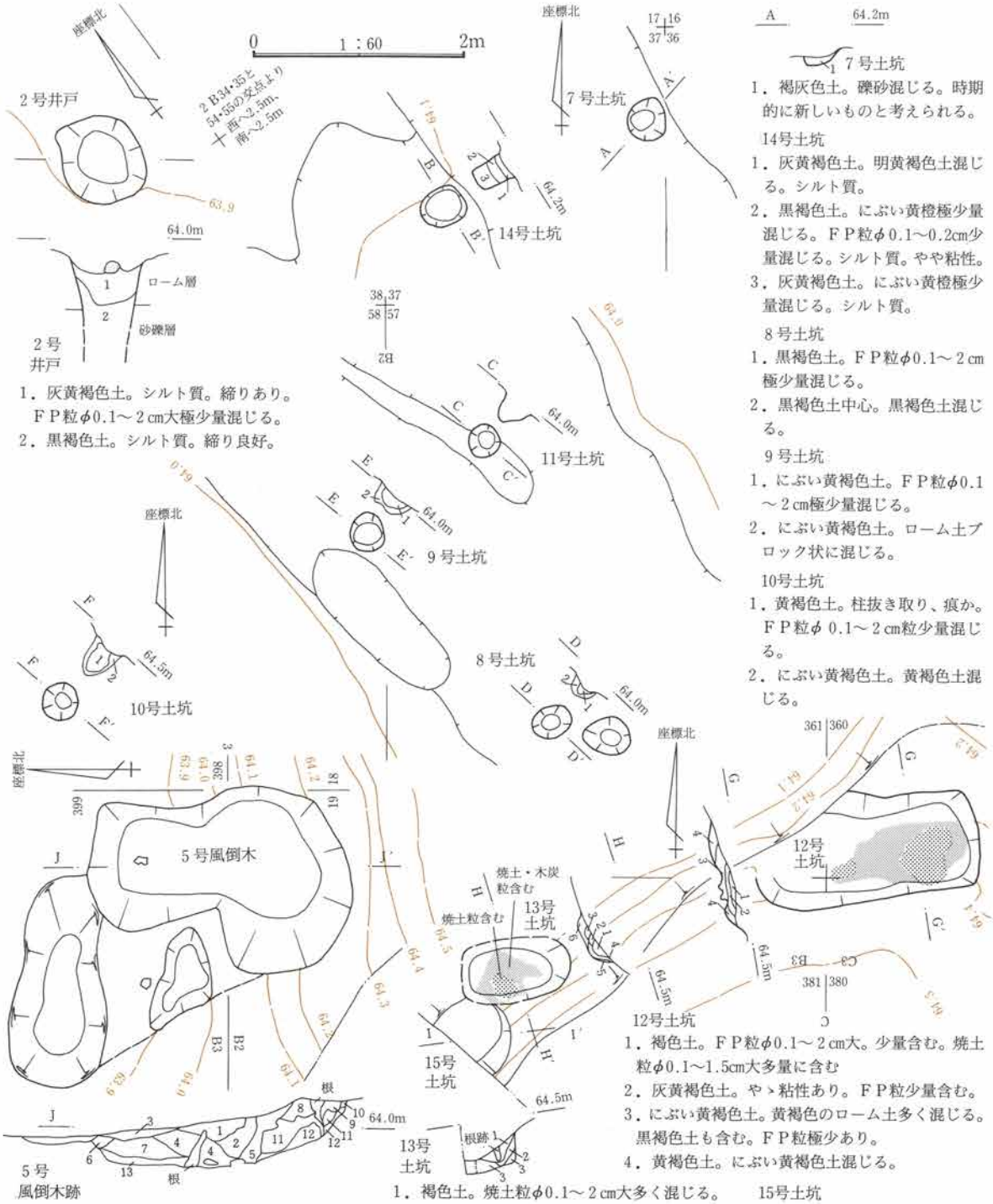
2・3・4号土坑

1．暗褐色土。にぶい黄褐色土。締り悪い。ローム土少量混じる。
2．にぶい橙色土。にぶい黄色土。締り悪い。ローム土中心。

1号風倒木跡

1．暗褐色土。やや固く締り、粘性あり。ローム粒子、炭化物粒子を含む。
2．暗褐色土。やや固く締り、粘性非常にあり。ロームブロック。ローム粒子を含み、炭化物粒子を少量含む。上層よりやや明るい色調。
3．茶褐色土。やわらかくて締り良い。粘性非常にあり。ローム粒子を多量に含む。
4．茶褐色土。やわらかくて締り良い。粘性非常にあり。ロームブロッグを多量に含む。5．黄褐色土。やわらかくて締り良い。粘性非常にあり。ローム主体の層。
6．黄褐色土。固く締り、粘性非常にあり。ローム主体の層。
7．黄褐色土。固く締り、粘性あり。ローム主体の層。
8．黄褐色土。固く締り、粘性あり。ロームと黒色土の混。
9．暗褐色土。やや固く、締り悪い。砂礫主体の層。

第95図　A1・2区井戸跡穴跡風倒木跡遺構図



1．灰黄褐色土。シルト質。締りあり。ＦＰ粒φ0.1～2cm大極少量混じる。
2．黒褐色土。シルト質。締り良好。

7号土坑
1．褐灰色土。礫砂混じる。時期的に新しいものと考えられる。

14号土坑
1．灰黄褐色土。明黄褐色土混じる。シルト質。
2．黒褐色土。にぶい黄橙極少量混じる。ＦＰ粒φ0.1～0.2cm少量混じる。シルト質。やや粘性。
3．灰黄褐色土。にぶい黄橙極少量混じる。シルト質。

8号土坑
1．黒褐色土。ＦＰ粒φ0.1～2cm極少量混じる。
2．黒褐色土中心。黒褐色土混じる。

9号土坑
1．にぶい黄褐色土。ＦＰ粒φ0.1～2cm極少量混じる。
2．にぶい黄褐色土。ローム土ブロック状に混じる。

10号土坑
1．黄褐色土。柱抜き取り、痕か。ＦＰ粒φ 0.1～2cm粒少量混じる。
2．にぶい黄褐色土。黄褐色土混じる。

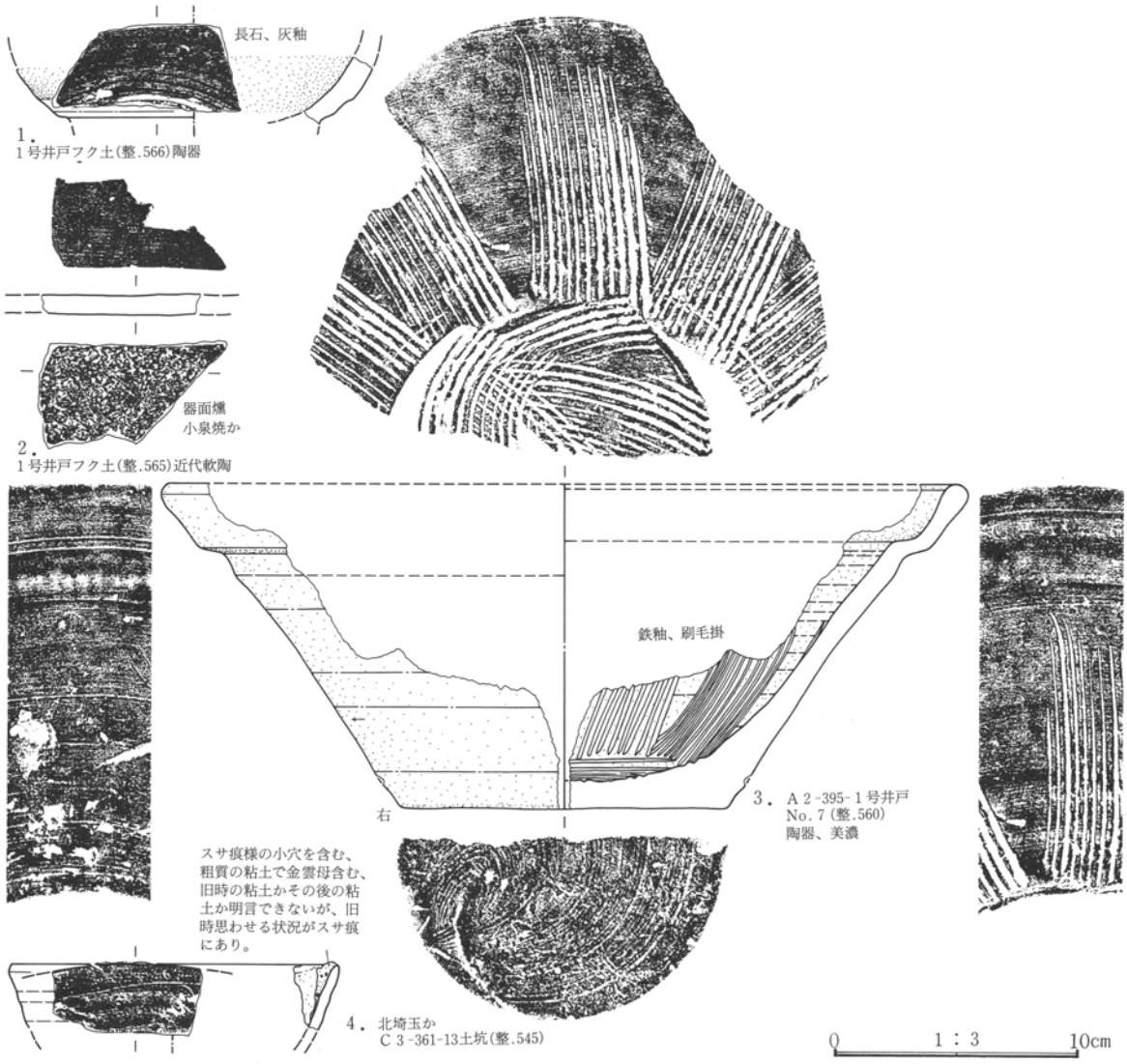
12号土坑
1．褐色土。ＦＰ粒φ0.1～2cm大。少量含む。焼土粒φ0.1～1.5cm大多量に含む
2．灰黄褐色土。やゝ粘性あり。ＦＰ粒少量含む。
3．にぶい黄褐色土。黄褐色のローム土多く混じる。黒褐色土も含む。ＦＰ粒極少あり。
4．黄褐色土。にぶい黄褐色土混じる。

5号風倒木跡
1．にぶい黄褐色土。ローム土主体でにぶい黄褐色土混じる。
2．灰黄褐色土。一部ローム土混じる。
3．にぶい黄褐色土。ロームブロック混じる。ＦＤ粒φ0.1～2cm大多く混じる。
4．にぶい黄褐色土。ローム中心でにぶい黄褐色土混じる。
5．にぶい黄褐色土。やや締り良い。シルト質。
6．にぶい黄褐色土。地山との混じり。
7．黒褐色土。やや粘性あり。
8．にぶい黄褐色土。ローム土主体でにぶい黄褐色土混じる。

13号土坑
1．褐色土。焼土粒φ0.1～2cm大多く混じる。
2．黒褐色土。焼土粒φ0.1～0.3cm混じる。
3．黒褐色土。焼土粒φ0.1～1cm少量混じる。
4．灰黄褐色土。
5．黄褐色土。にぶい黄褐色土混じる。
6．灰黄褐色土。黄褐色土ローム土混じる。
9．にぶい黄褐色土。ローム土。
10．黒褐色土。締りある。
11．黒褐色土。一部ローム土。にぶい黄褐色土混じる。シルト質。
12．にぶい黄褐色土。ローム主体。
13．にぶい黄褐色土。ローム中心で一部黒褐色土混じる。

15号土坑
1．にぶい黄褐色土。にぶい黄橙色土混じる。ローム土少量含む。
2．にぶい黄橙色土。にぶい黄褐色土混じる。ローム土少量含む。
3．にぶい黄褐色土。にぶい黄橙色土混じる。ローム含む。下面に焼土痕。

第96図　Ｂ・Ｃ２・３区井戸跡穴跡風倒木跡遺構図



第97図　井戸跡・穴跡遺物図

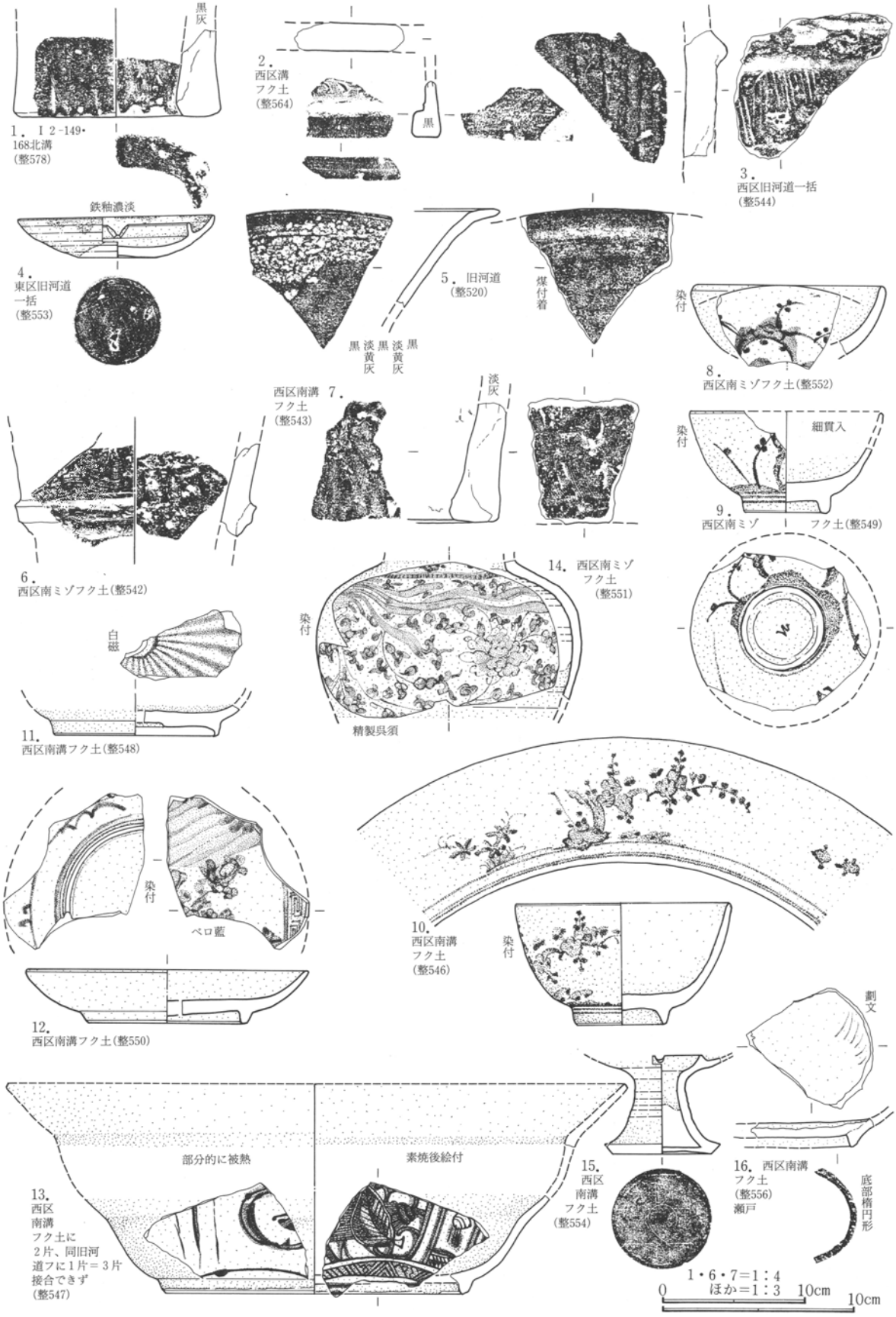
5号土坑　　(第95図)

平面ほぼ円形を、断面形は底広で平らな形を呈す。埋土中から土器片の出土がある。北西約9mの位置に1号井戸跡がある。

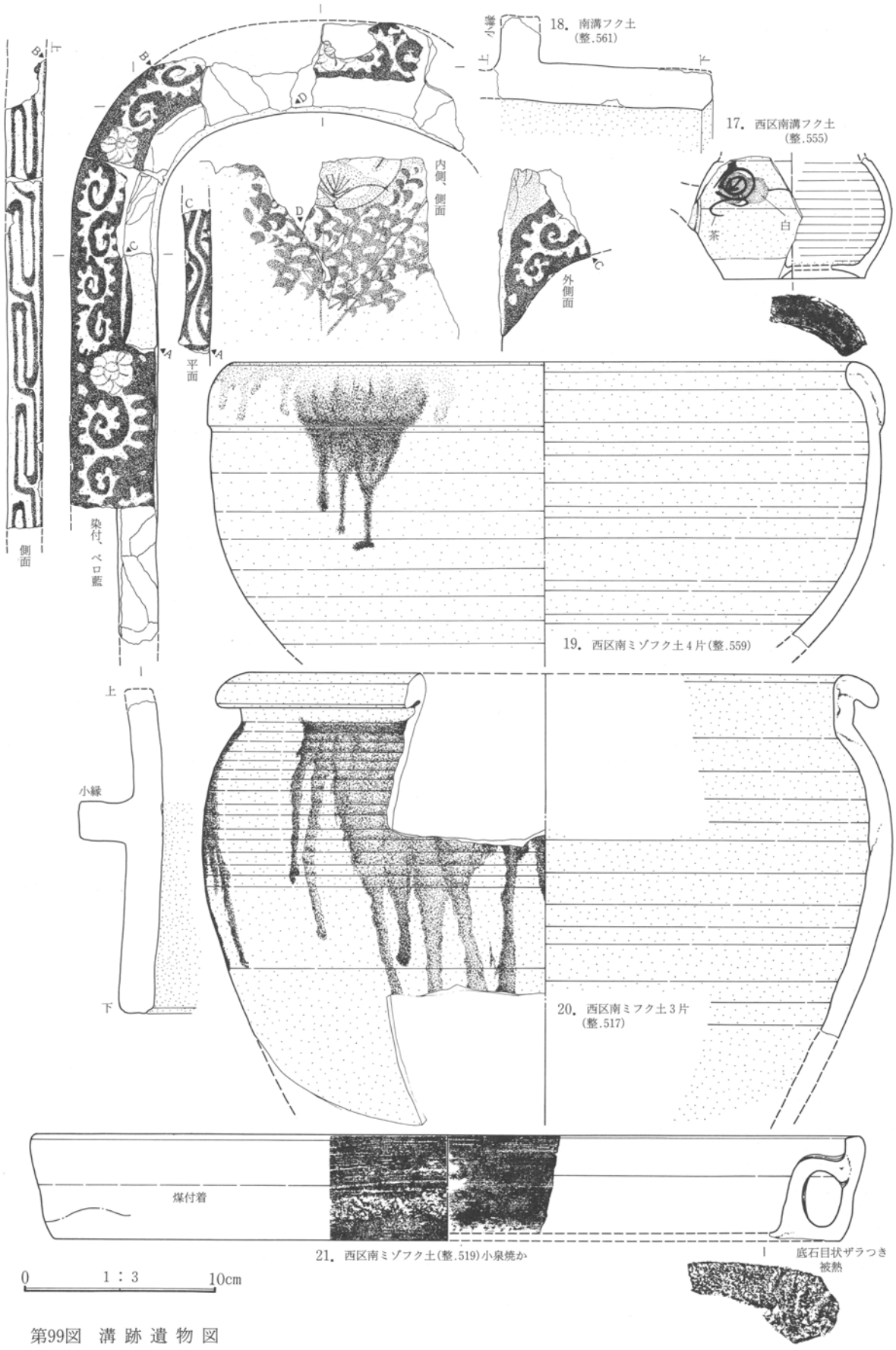
7・8・9・10・11・14号土坑　　(第96図)

第96図の平面の位置関係は正位置の関係で図示してある。各々は、近円形で小規模であるところに特徴がある。30cm前後の直径は、掘立柱が想起される。当地域にあっては、18世紀前半頃までは用いられ、その頃から以降、礎石使用建物へと推移してゆく。そのため10号土坑の土層注記中に「柱抜取り痕か」との表現も、至当と云える。図上においても柱間取りの関係も追ったが、はっきりしない。

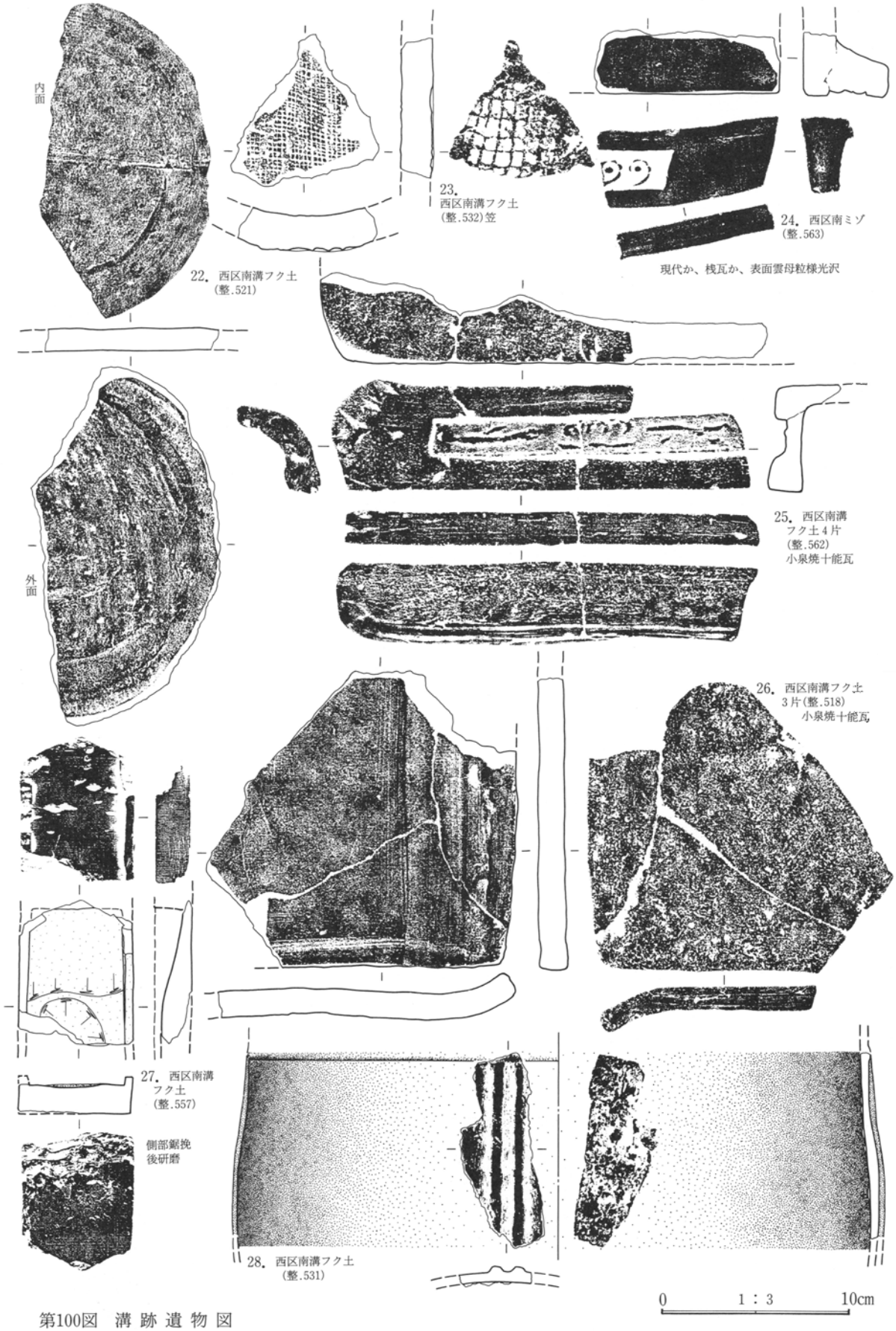
12・13・15号土坑　　(第96図)


黒灰
1. I 2-149・168北溝(整578)
2. 西区溝フク土(整564)
黒
3. 西区旧河道一括(整544)
鉄釉濃淡
4. 東区旧河道一括(整553)
5. 旧河道(整520)
黒 淡黄灰 黒 淡黄灰 黒
煤付着
染付
8. 西区南ミゾフク土(整552)
西区南溝フク土(整543) 7.
淡灰
6. 西区南ミゾフク土(整542)
染付
細貫入
9. 西区南ミゾ フク土(整549)
14. 西区南ミゾフク土(整551)
染付
白磁
精製呉須
11. 西区南溝フク土(整548)
染付
ベロ藍
12. 西区南溝フク土(整550)
10. 西区南溝フク土(整546)
染付
劃文
部分的に被熱
素焼後絵付
13. 西区南溝フク土に2片、同旧河道フに1片＝3片接合できず(整547)
15. 西区南溝フク土(整554)
16. 西区南溝フク土(整556)瀬戸
底部楕円形
1・6・7＝1：4
ほか＝1：3
0 10cm
10cm

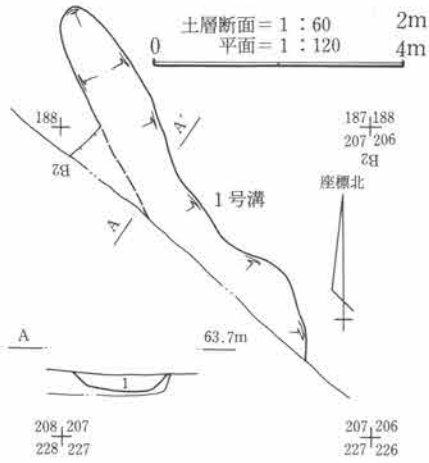
第98図　溝跡遺物図


18. 南溝フク土
(整.561)
17. 西区南溝フク土
(整.555)
内側、側面
外側面
平面
側面
染付、ベロ藍
茶
白
19. 西区南ミゾフク土4片(整.559)
上
小縁
下
20. 西区南ミフク土3片
(整.517)
煤付着
21. 西区南ミゾフク土(整.519)小泉焼か
底石目状ザラつき
被熱
0
1：3
10cm

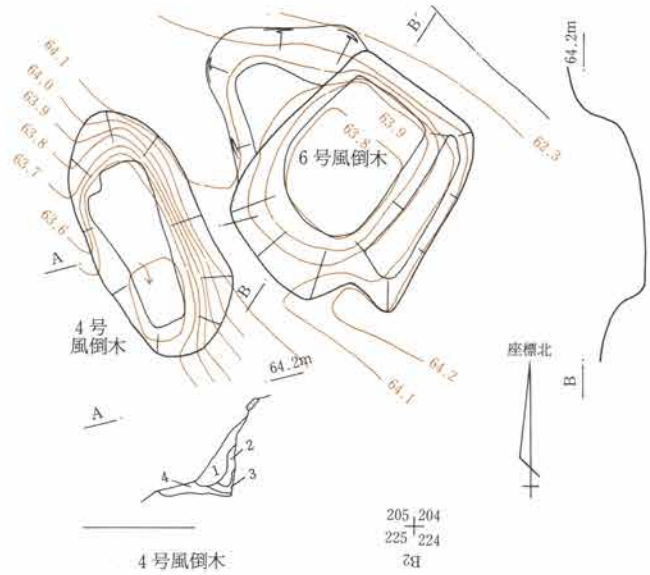
第99図　溝跡遺物図


内面
22. 西区南溝フク土
(整.521)
23.
西区南溝フク土
(整.532)笠
24. 西区南ミゾ
(整.563)
現代か、桟瓦か、表面雲母粒様光沢
外面
25. 西区南溝
フク土4片
(整.562)
小泉焼十能瓦
26. 西区南溝フク土
3片(整.518)
小泉焼十能瓦
27. 西区南溝
フク土
(整.557)
側部鋸挽
後研磨
28. 西区南溝フク土
(整.531)
0
1：3
10cm

第100図　溝跡遺物図



1．灰黄褐色土。シルト質。締りよい。浅間A軽石。



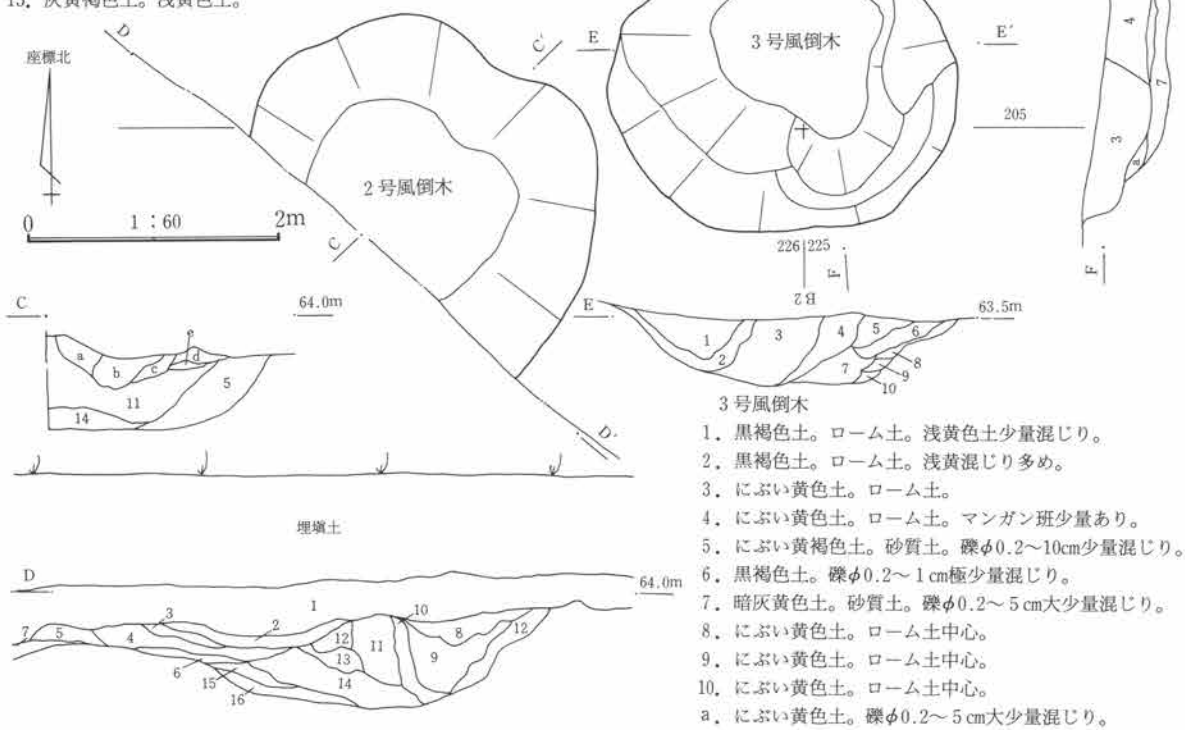
2号風倒木

1．にぶい黄褐色土。
2．にぶい黄褐色土。ローム土。明黄褐色ブロック混じり。
3．にぶい黄褐色土。砂質土混じり。
4．にぶい黄褐色土。
5．黒褐色土。砂質土混じり。
6．黒褐色土。砂質土中心。礫φ0.2～5cm大少量混じり。砂礫層。
7．黒褐色土。砂質土中心。ローム土ブロック混じり少。礫φ0.2～5cm大極少混じり。
8．灰黄褐色土。
9．黒褐色土。
10．にぶい黄色土。褐色土混じり。
11．明黄褐色土。ローム土。
12．にぶい黄色土。ローム土。非常に締りあり。
13．黄褐色土。橙色土混じり。締り強。
14．暗灰黄色土。礫φ2～5cm程混じり。円礫層。
15．灰黄褐色土。浅黄色土。

4号風倒木

1．灰黄褐色土。締り良い。シルト質。
2．にぶい黄褐色土。締り良い。ローム土多く混じる。シルト質。
3．黒褐色土。締り良い。シルト質。
4．灰黄褐色土。ローム土混じり。締り良い。シルト質。

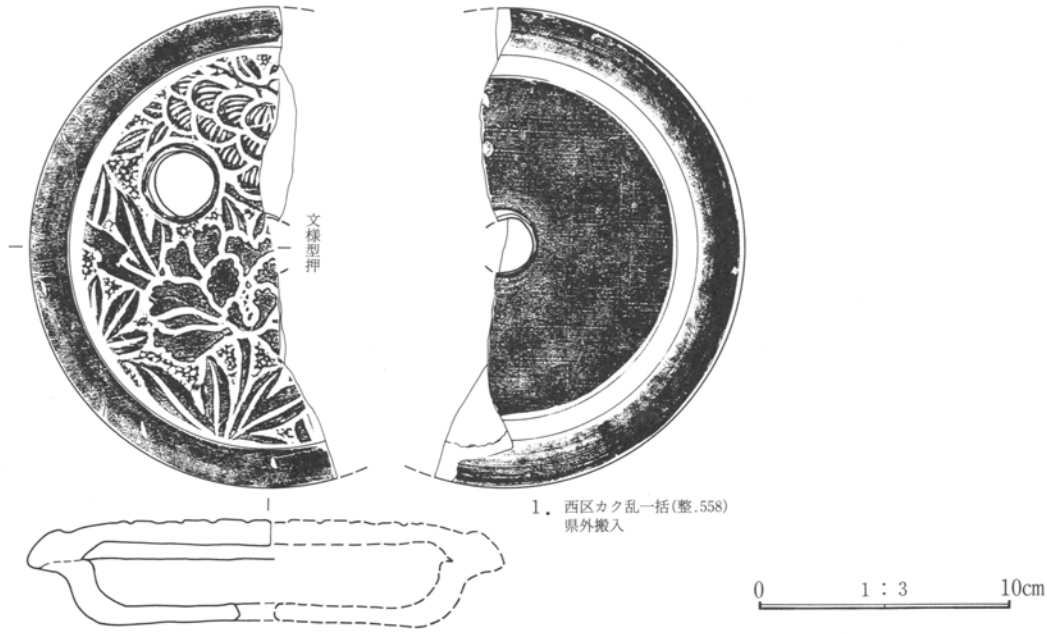
16．暗灰黄色土。
a．にぶい黄色土。ローム中心。一部黒褐色土混じり。
b．黄褐色土。褐色土中心のローム混じり。
c．にぶい黄色土。ローム中心。
d．明黄褐色土。ローム土。
e．にぶい黄色土。褐色土混じり少量。



3号風倒木

1．黒褐色土。ローム土。浅黄色土少量混じり。
2．黒褐色土。ローム土。浅黄混じり多め。
3．にぶい黄色土。ローム土。
4．にぶい黄色土。ローム土。マンガン班少量あり。
5．にぶい黄褐色土。砂質土。礫φ0.2～10cm少量混じり。
6．黒褐色土。礫φ0.2～1cm極少量混じり。
7．暗灰黄色土。砂質土。礫φ0.2～5cm大少量混じり。
8．にぶい黄色土。ローム土中心。
9．にぶい黄色土。ローム土中心。
10．にぶい黄色土。ローム土中心。
a．にぶい黄色土。礫φ0.2～5cm大少量混じり。

第101図　A・B2区溝跡：風倒木跡遺構図



第102図　補 足 遺 物 図

各々は接近した位置にあり、第96図の位置関係は正位置状態である。12号土坑は隅丸長方形で、13号土坑は、やや小判形に近く、15号土坑は近円形に見える。12・13号土坑は遺物量少なく、第97図４に須恵器坏中に焼けたとも焼けていないとも判別困難な、スサを含む粘土塊が13号土坑から出土し、両土坑とも、焼土・木炭粒を含み図中のトーンで示した状態が認められていて、共通の目的や機能があったのかもしれない。15号土坑・12号土坑との新・古は明瞭でない。

５．風倒木跡

１・２・３・４・５・６号風倒木　　（第95・96・101図）

風倒木跡は、当群馬県にあっては、調査担当の大方が認めるところである。成塚永昌寺遺跡では、６個所にそれを認めている。各々旧黒色土の横転再入の状態をもって倒木方向、風向きの示唆を得ている。現場時点で方向の記入がないので、土層断面図から想像すれば、１号風倒木は西～南の間に、２号風倒木も同様に、３号風倒木は北西から南の問に、４・６号風倒木は不明瞭。５号風倒木も不明瞭であり、各々の方位に向い倒木があったと考えたい。

６．旧河道関連の出土遺物　　（第98・99・100図）

ここで出土遺物を、特に近世以降の資料を多量に掲げたのは、永昌寺の来歴は、近世であっても、不明瞭であるという。そのため、同寺との関連を思わせる個体もしくは希少種個体、近世以降の群馬県地域と関係するかもしれない資料などを掲げた。

第98図８・９は、18世紀の磁器碗で、この頃から陶・磁器量が目立ちはじめ、同13は、17世紀から18世紀にかけて頃の精作の染付大形深皿、同14の18・19世紀初頭の花生、第99図18の明治・大正頃の陶器染付便器、同17の益子焼風の陶器、第100図27の硯、同28の鐘片など寺院至近ならではの遺物が見られる。特に第100図28は、寺の洪鐘とすべきか火(ひ)の見(み)の半鐘などであるか不明確さも気になるが、銅主材の錆色の中で被熱した色の変化が見られ、火災痕かもしれない。第98図13の磁器深皿片にも被熱痕あり。

第５篇　成塚石橋遺跡Ⅲ

第１章　発掘概要と例言・凡例

成塚石橋遺跡Ⅲは、実質的には、成塚石遺跡Ⅱの延長部分に相当しているが、工事予定個所が住宅団地関連促進事業分と小規模河川改修工事分にまたがるため、分離されることになった。成塚石橋遺跡Ⅲは河川改修分である。発掘場所は太田市大字成塚字上新田（南より）1059・1060-5・1060-1・1077-1にある。調査当初は、調査区を小規模河川改修分１区と呼称された。が、同一遺跡で１区が２つとなるため、本書では、以前との連続で６区とした。調査は平成２年４月４日～同年５月31日の間に行われ、発掘調査担当は下城正（専門員）・高井佳弘（調査研究員）。根岸仁（調査研究員）である。発掘面積は460㎡で道路および拡張用地を含めた全幅の調査がなされた。その結果、次表のように溝跡５条、穴跡11基、風倒木跡１が発見された。調査座標は、前年度に実施された成塚石橋遺跡の座標が使用され、座標北に対し45°53′15″傾き、座標名称とその用法例は第103図のとおりで、呼称点は＋例が北西隅、－側が南西隅交点を称する。

また本書中の図表現やその用法は14・17・18頁で触れたので略したい。

溝跡・穴跡・風倒木跡　　（第103図）

名　称	位　置	規　模（m）			備　考
		長さ（長辺）	幅	深さ	
１号溝	A－３～－７	1.29	1.25	0.12	第105図。
２号溝	A～C－２・３	4.40＋α	1.45	0.22	第105図。
２号南端溝	A－３	1.90＋α	1.50	0.33	第105図。
３号溝	A～C－１～１	9.65＋α	1.10	0.28	第105図。
４号溝	A～C＋１～－１	15.00＋α	1.25	0.18	第105図。７号土坑が古い。
１号土坑	C－５	1.72	0.68	0.39	第106図。
２号土坑	B－４	1.30	0.73	0.22	第106図。
４号土坑	B・C－１	1.74	0.96	0.20	第106図。長方形。
６号土坑	B１	1.22	1.06	0.32	第106図。方形。
７号土坑	B＋０	1.58	1.46	0.26	第106図。４号溝が新しい。円形。中世以降。
８号土坑	B１・２	1.96	1.82	0.18	第107図。円形。
９号土坑	A＋０	1.56	0.90	0.38	第106図。幅0.90m＋α。円形。
10号土坑	A＋０・１	0.84	0.62	0.14	第106図。
11号土坑	C－０	1.02	1.00	0.18	第107図。円形。中世以降。
３号風倒木	A・B－１・－２	3.15	2.18	0.44	第106図。

第２章　発掘された遺構と遺物

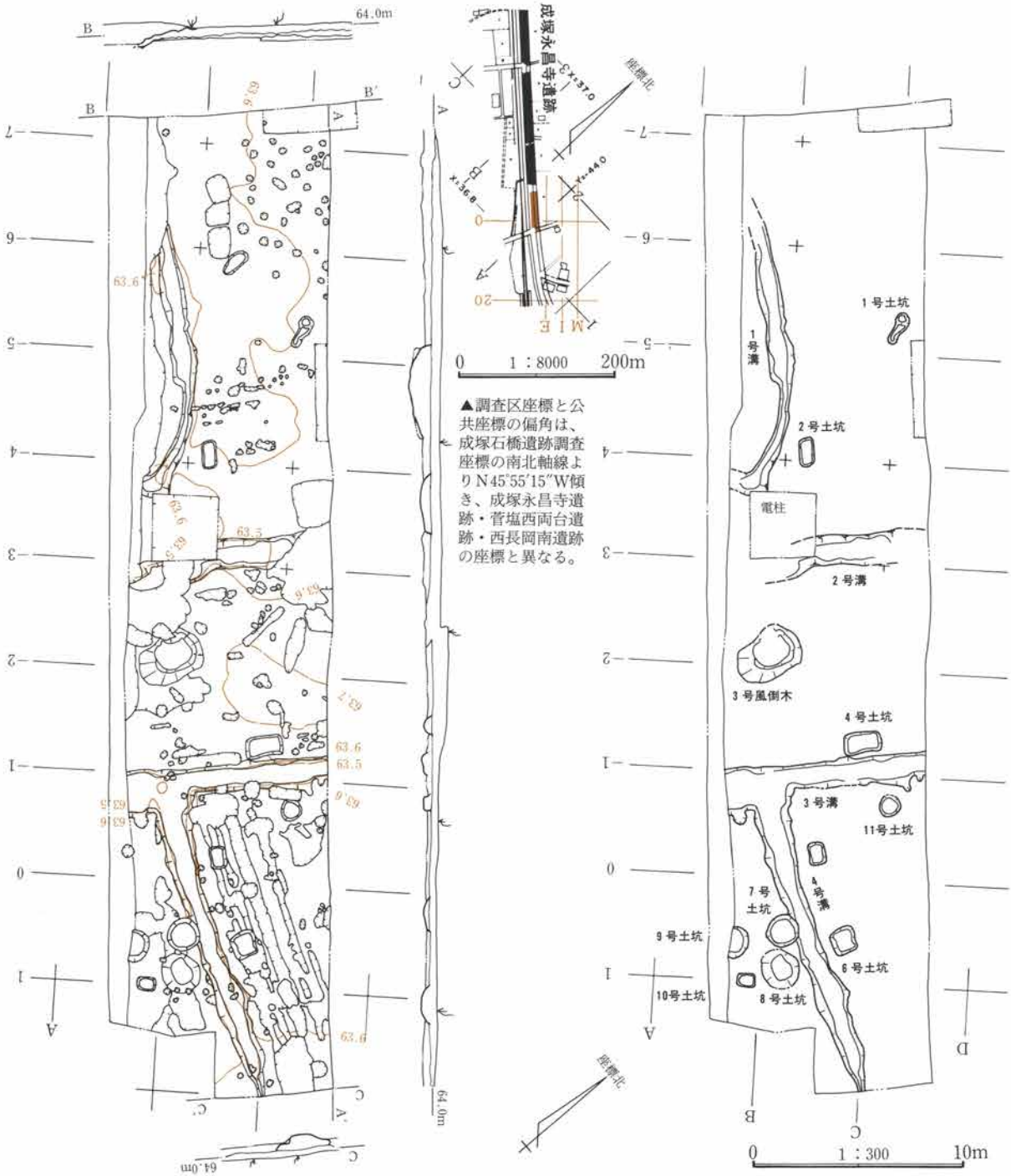
発掘調査上の遺構発見面は、第104図に示した北東壁・北面壁・南東壁で示したように、北東壁側は、耕作土直下およびその影響下の層を発見面としたようである。北西壁土層断面左側は、蛇川の旧河道であったようで、掘り下げが中断されている。およそ１号溝は、その関連を示すかのように西側を向き、埋土中に砂質土が入る点からも、流水がおよんだことが伺え、およそ１号溝の成りが、さらに北西側に存在すると見られる旧河道の方向性が示されると推測したい。基盤層は、北側は注記番号Dのとおり砂質のローム層が存在する。およその調査面は標高63.6～63.7mである。

１．溝跡

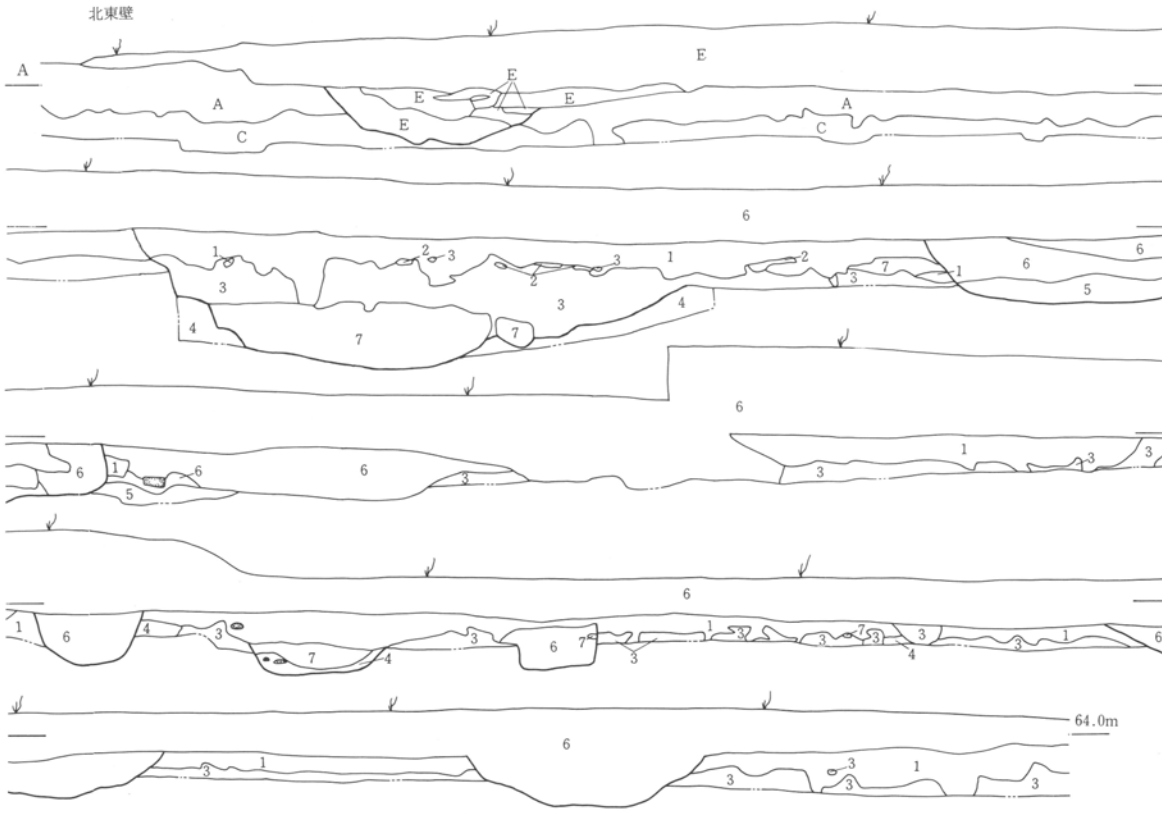
溝跡は、５条について遺構番号が付されてあり、各々遺物の出土量は少ない。溝走行の傾きは、２号溝が西側に傾き、４号溝が北西に向って下がり、地勢に則している。

1・2号溝・2号南端溝　　（第105図）

1号溝は、調査区の北西に位置し、横断面は浅く、凹凸の多い状態の土層断面図が残される。埋土は砂質であり、時代が下るとともに、旧蛇川の流水がおよんだとも考えられる。2号溝は、N36°Eを指向し、移動面形は浅いU字状を呈する。東側は不整形の布跡が切り、西側は2号南端溝が存在し走行を不明時にしているが、南側約10mに存在する3号溝と平行しており、共通の目的に沿う機能であったかもしれない。埋土中にAs－Bが入るため、中世以降であり、土層注記1が黒色である点から、そう新しい溝ではないらしい。

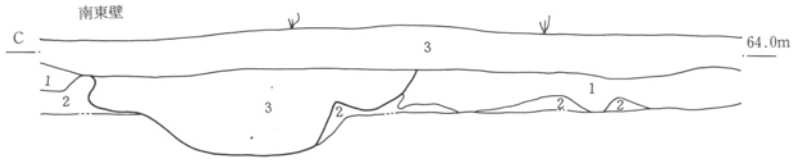


第103図　成塚石橋遺跡6区全図



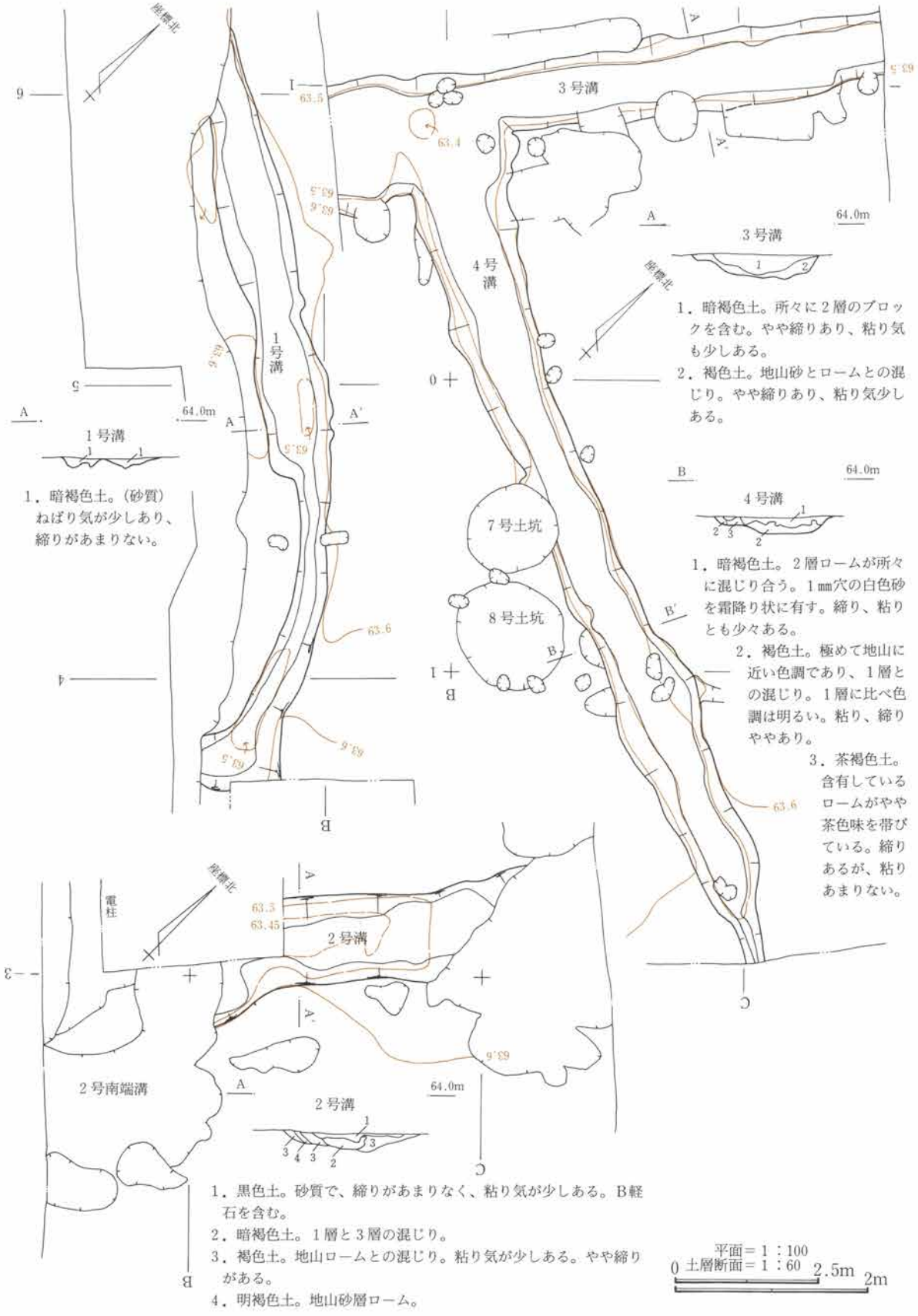
1．暗褐色物質土。表土。
2．黒色土。やや粘性あり。B軽石を含む。
3．灰褐色粘質土。
4．灰黄褐色土。砂質ローム。
5．礫層。
6．撹乱層。産廃物。
7．暗褐色土。やや粘性があり。締りも少しある。粒子が細かい。

A．暗褐色砂質土。表土。耕作土。
B．黒色土。やや粘性がある。
C．灰茶褐色粘質土。
D．灰黄褐色土。砂質ローム。
E．撹乱層。
F．褐色土。C層よりもやや赤味を帯びた砂質の層。1ヶ所のみ。

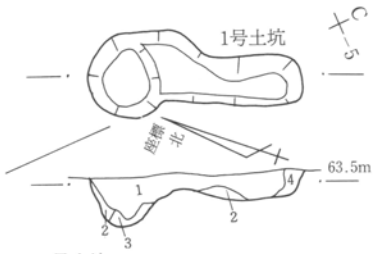


1．暗褐色砂質土。表土。
2．灰褐色粘質土。
3．撹乱層。

第104図　成塚石橋遺跡6区の北東壁・北西壁・南東壁土層断面図



第105図　成塚石橋遺跡6区溝跡、穴跡遺構図



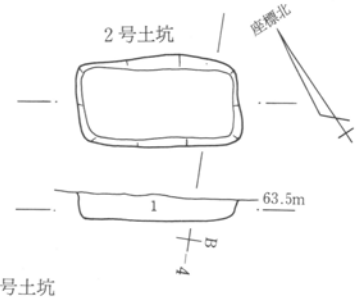
1号土坑

1．褐色土。茶味を帯びた土質。小礫を少量含む。粘り少しある。

2．灰褐色粘質土。汚れたロームまじり。粘りが少しある。

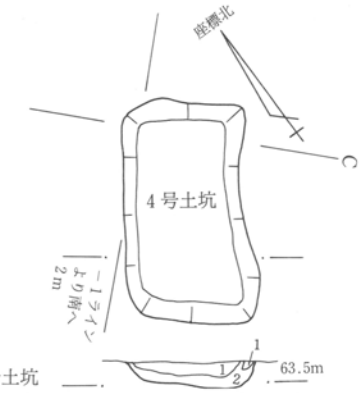
3．灰褐色土。小中礫を多量に含む。締りがなくもろい。

4．褐色土。1層に似ているが、色調が少し明るいのが違う点。



2号土坑

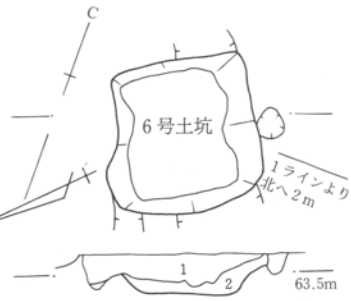
1．暗褐色土。砂質ロームを斑点状に細かく含む。締りややあり、粘性も少しある。



4号土坑

1．暗褐色土。締りが少しあり、粘性も少しある。

2．明褐色土。地山ロームとのまじり。粘性がややあり、しまりも少しある。

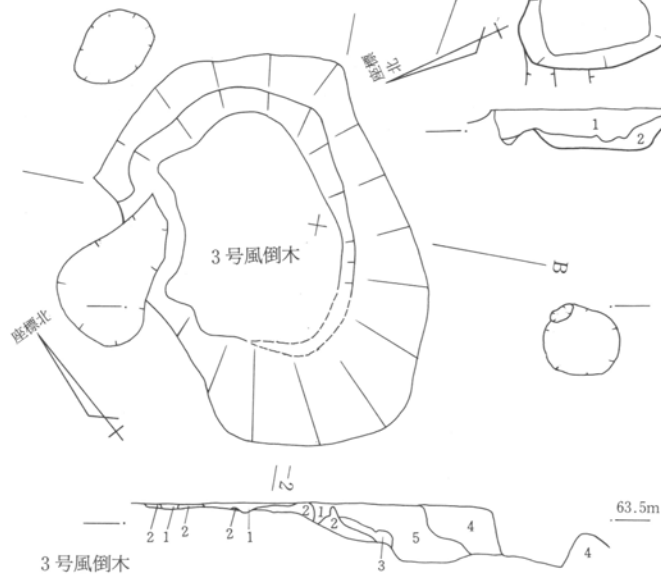


6号土坑

1．暗褐色土。3㎝～5㎝大の褐色土と灰白色のブロックをしもふり状に含有する。灰白色土は非常にかたい。他に地山にロームも多量にブロック状に含有している。

2．褐色土。1層と同じようなブロックを有するが、灰白色土のブロックが多く目立つ。他にロームを有するが、明らかに1層とは色調が異なり、明るい色となっている。

※灰白色土は、砂質ロームが乾燥してかたくなったものかもしれない。



3号風倒木

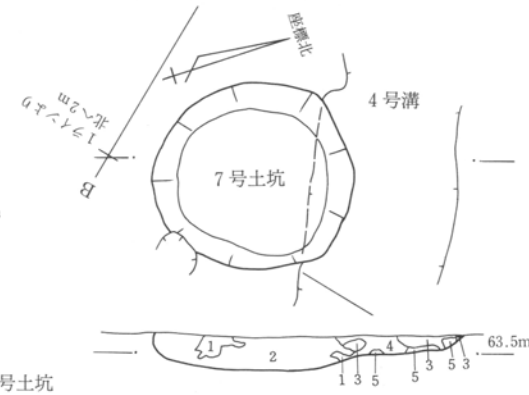
1．暗褐色土。砂質性で、粘性ややあり、締りも少しある。

2．褐色土。1層と地山ロームとのまじり。粘性。締りともに少しある。細い木根を多数含む。

3．褐色土。2層褐色土と土質は変わらないが、色調がやや明るい。細い木根を多数含む。

4．明褐色土。砂質ロームが多量に入り込んだ土質。やや締りがあり粘性もある。

5．礫層。中小の礫(円礫)を多量に含む。その所々に4層が入り込む。



7号土坑

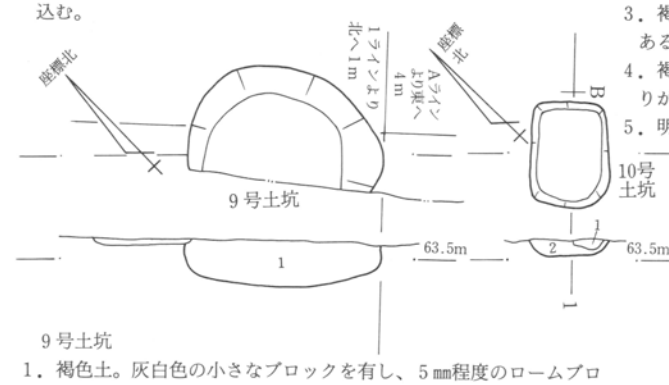
1．黒色砂質土。砂質でポロポロとれてしまう。締りはややある。(B軽石を含む)。

2．暗褐色土。ロームも所々に含有するが、その比率が黒色土に比べて小さい。締り、粘性ややあり。

3．褐色土。ロームを所々に斑点状に有す。ねばり、締り共にややある。色調は2層に比べ明るい。

4．褐色土。砂質で1㎜大の白い砂をしもふり状に有し、非常に締りが良い。

5．明褐色土。地山砂質ローム。



9号土坑

1．褐色土。灰白色の小さなブロックを有し、5㎜程度のロームブロックを有する。締り、粘り共にややあり。

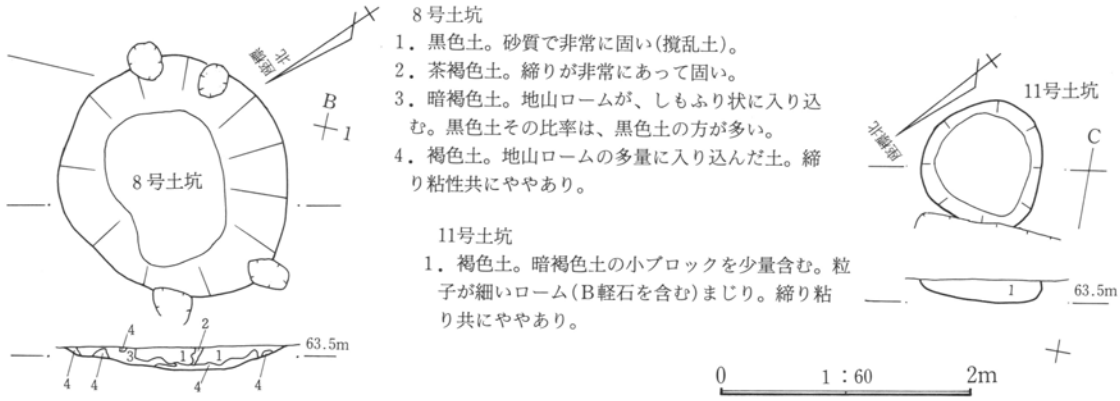
10号土坑

1．暗褐色土。2層ロームの小ブロックを斑点状に含む。締り、粘りややあり。B軽石まじり(遺物片数点含有)B軽石も含む。

2．褐色土、 地山砂質ロームまじり、締り、粘りややあり。

0　1：60　2m

第106図　成塚石橋遺跡6区穴跡・風倒木跡遺構図



第107図　成塚石橋6区穴跡遺構図

3・4号溝　　(第105図)

3号溝は、横断面は浅いU字状を呈し、N37°Eを指向する溝である。北西側約10mの位置にある2号溝と、近似の横断面と方向性をとり、近接期および共通の機能により設けられたと想起される。それと交叉する4号溝も並存したはずであり、N68°Wの方向性をとり、横断面形状も似る。2号溝の土層断面にはAs－Bの混入の指摘があるものの、3・4号溝には、その指摘はない。ローム層ブロックを含む個所は、3溝ともにある。またこの付近から以南約500mまでの間には古代東山道が存在しているものと推定され、中世以降の溝跡が並走する場合でも気にかかる。

2．穴跡

1号土坑　　(第106図)

2つの穴跡が接続したような不整形を呈する。土層断面の注記番号1は連続状態を示めす。この穴跡と2号土坑を除き南東側に番号付き土坑は群在する。

2・4・10号土坑　　(第106図)

長方形の土坑である。2号土坑はN56°Wを、4号土坑はN34°Eを、10号土杭はN48°Eを指向する。埋土は土層断面によれば少し締りがあるようである。

6・7・8・9・11号土坑　　(第106・107図)

円形から、近円形を呈する穴跡で、規模に差がある。4号溝と7号土坑は重複し、4号溝が新しい。7・11号土坑にはAs－Bが混じる指摘あり、11号土坑を除き、近接する点に共通の機能ありか。

3．風倒木跡

風倒木跡は、3号風倒木の1基のみである。3号とは3号土坑が名称変更をきたしたための名称のようである。

3号風倒木　　(第106図)

断面が薄く、倒木した方向性は不明瞭である。

4．遺構関連遺物とその他の遺物

遺構関連の出土遺物は、総て一見し、最も新しいと考えられる個体を中心に掲載した。遺物数量は多くなく、第108図10・11、19・20世紀頃の地方焼軟質陶器焙烙底部片のように製作年代の新しい資料であっても割れ口は新鮮でなく、大多数が消耗気味の個体で、その程度は拓影図から思料願いたい。さらに遺物から推測される遺構の築造の時期も割り引いて考える必要がある。

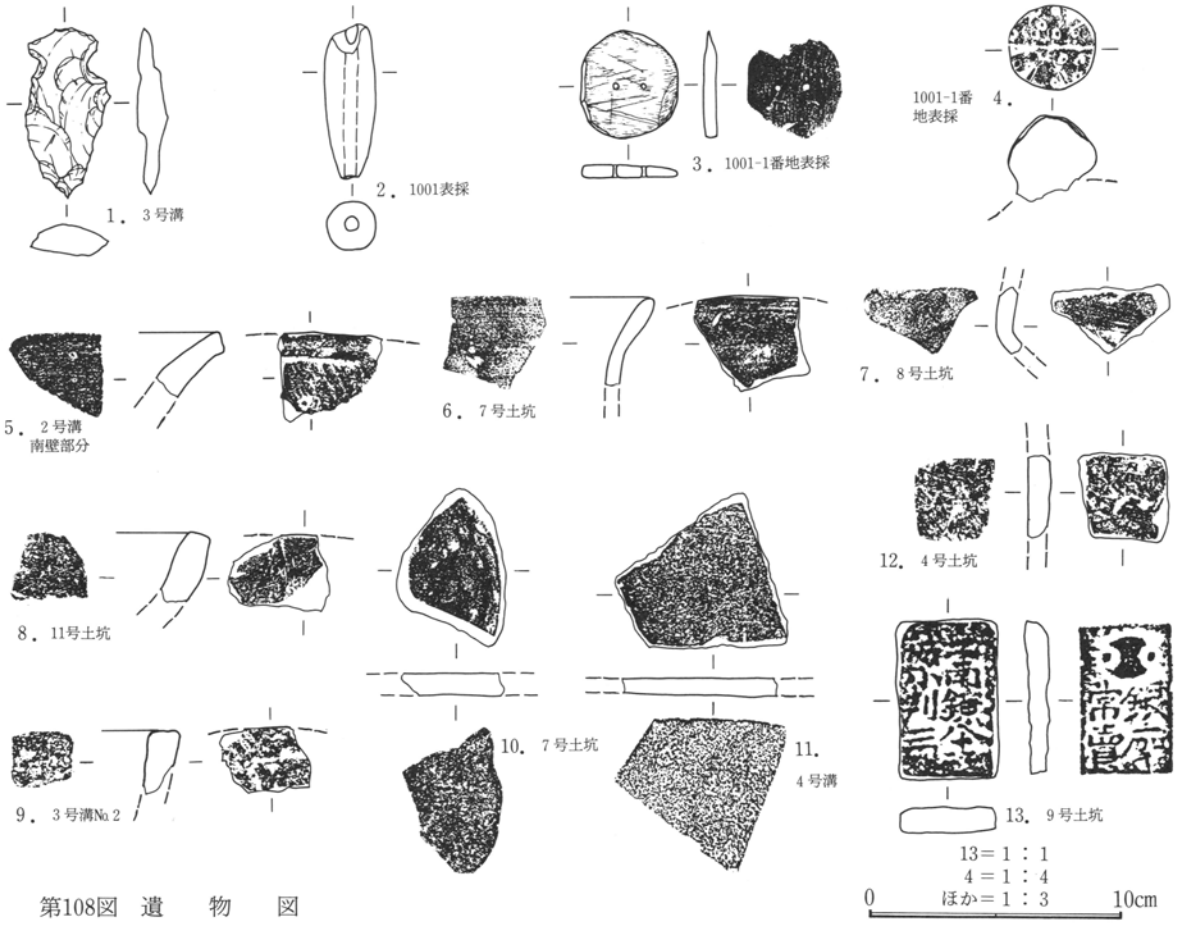
第108図２は、土垂で、県内出土の土垂は、土師器と比べた場合にやや重みのある土で製作されていることが多く、土師器製作の単位と異なることを思わせ、本例もその一つ。

第108図３は、石製模造品の有孔円盤で、製作整形に粗雑、簡略を感じさせる。

第108図４は、埴輪形象に加飾された鈴片と考えられ、中央に鍔口となる切れ込みを１条加え、さらに小珠点らしき文様を細い竹管状の工具で施文している。同図３・５などと伴い古墳時代遺物である。

第108図６・７は９世紀中頃の土師器片であるが、関連の７・８号土坑の径1.5～2.0弱の円形状は県内の同期では余り具体的でなく、中世遺構に、炭化物や底面をいく分締めた備蓄用穴と推測される例、近世では粘土裏込めの桶穴などが円形穴跡例にある。７号土坑は、土層注に締りと黒味の指摘があり、近前例か。

第108図８～13は、江戸時代以降の遺物類で、遺構時期をある程度示唆するであろう。13を除き各々は地方窯で量産された軟質陶器であり、近世以降の遺物種の中で耐用短期の種である。13は銀銭を模した個体で県内全体でも出土例はそう多くなく、都市江戸と上州との文化的距離を感じる。



第108図　遺　物　図

第６篇　遺物観察

遺物観察に当っての、凡例・例言を以下に示めす。

遺物の観察については、観察表の作成時ばかりでなく、遺物袋出しの段階から既にはじまっている。実測図の描写と観察表内容とは一致している。実測図は、土器類を１：３で、埴輪類を１：４を基本とした。例外は、その毎、縮尺位置に１：○と縮尺値を記入した。実測は三次元電子実測機（機械名称スリー・スペース）班と整理班による手実測との併用である。その区分は、土器・円筒埴輪の場合、正立もしくは倒立して正位に置きうる状態の個体について機械実測を行ない、他は手実測である。破片個体は、円弧の原則ほか土器の傾きを示す口縁、底面、頸部、轆轤目、横撫諸部など旧態の傾きを示す個所をことごとく利用して求めた。実測図は、スリースペース図を整理担当が鉛筆トレース図として起し、続いてインクトレース（浄書）の工程を踏んだ。トレースは業者委託による個体と班構成員によるものとがあり、業者委託を多用した。それは整理時間短縮と同一仕様の実現が可能なためである。

遺物実測図の表現法は、実測中軸は、土器の四分割実測法を行ない得る直実測の個体に、１点鎖線は土器残存量、不足から回転実測を行なった個体を示す。割れ口延長の破線は通常の場合、想定であるので破線２単位でそれを示し、特別に破線２単位では想定し難い場合は、一単位とした。復元補足して、全体を実線化して表現する俗に云う額縁実測は、行なっていないが、その場合は、おおむね破線としてある（四分割の分割とは別に残存個所がある場合からの補足を意味する）。外形線ほか形を決める線は、主体を実線で、補助を細線で表現してある。器壁断面中に粘土紐作痕と粘土走行を捉えた場合は、２種の表現を用いた。細線は明らかに粘土紐の単位や粘土板接合の単位がしっかり見える時、破線は推定される時、点描の時は、接合面と明確に認定できないながらも、最小限の粘土走行を捉えたつもりである。点描が密に近い打点の時は、粘土走行よりも、接合面の可能性の方が、より強い。多くの場合は、点描と細線とを併用した表現を用いた。その意味は、粘土紐の単位はある程度、観察し得たものの部分的には判然としない個所を含むことの意味である。特別の表現としては、瓦断面のケバは、面取りの篦削端位置を示めし、須恵器底際のケバは、水挽成形時の初段階の粘土挽出し位置を示めす。そのほか篦削に伴なう矢印を除く矢印には、その意味を記入してある。土器の整形痕は、横撫端位置は、端部に破線様の隙間を入れ、轆轤目も同様に、埴輪内面の指整形、撫整形の場合も、細線に隙間を入れた。回転篦削や篦削、埴輪内面の指による強い粘土のならし・掻き上げなどの所作を示めすとみられる整形痕には１点鎖線を用いた。１点鎖線の本来の意味は回転軸を示めす場合が正しい。篦削り中や撫方向を示めす矢印は、砂粒の移動した側の方向を示めす。整理作業中に砂粒には３様がある。１つは、旧来のまま移動した位置に砂粒が残る場合、移動しながら製作時に抜ける場合、発掘時の土器洗い、整理作業中に砂粒が抜けた場合など、以上を観察し、砂粒の大多数側を選択して記入した。なお方向決定は、全個体を整理担当が再確認している。図中の点描は、造形表現しなければならない個体、陶・磁器の施釉部を示し、光源は左上45°方向である。なお図版の版下は２倍図版のため１：３なら67％の縮図がトレース原図である。彩色表現は、必ずしも近似の色に仕上った訳ではないが、読者に対する視覚上の印象に便を計ったつもりで、赤色・白色の２色を用いた。トーンは、使用の意味を図傍に記した。拓本については、二つの意味あいから多様貼附した。一つは、文様技法痕や整形状態、自然の凍ハゼなどの特徴を捉える時、二つ目は器面全体の質感を表現するためである。拓影図中、剝落が多そうに見える状態は、やはり剝落が多いのである。

観察表は、挿入図版順であり、写真は、巻末にまとめた。ともに表中では一致している。種・器種欄は、焼物種を先に器形種を後に記入した。焼物種・器形種は、古語からくる貫用を主として用いたが、近代以降の名称も用いたが整然とした分離はできず混用も多い。出土位置は、挿入図中に発掘時の土器注記された文字をそのまま記入したかったのであるが、そのまま記入したら意味不明となると案ぜられる場合には改めたほか実態に近い。埴輪類には複雑な接合関係が得られ、その旨を図中に記入してある。量目欄は、古語でいうならば度目としなければならないのであろうが貫用に習い量目とした。胎土・焼成・色調と摘要欄は、胎土は、素材中の夾雑物量を捉えた。夾雑物は、鉱物や固結化の進んだ粘土大粒などがあり、シャモットに入れたものとしては炉壁や羽口が考えられるが、はっきりして見えるのは少ない。群馬県は、県の中央部に、荘大な扇状地形を有する第四紀以降の火山である赤城山・榛名山があり、陶土不毛の場合が多く存在し、それを除く地帯の中で10古窯跡群が展開している。その窯跡群の須恵器は採集し、胎土から見る製作地根拠とし、遺物観察中に加えてある。本書では、胎土に関し、陶土とするのは、第三紀以前の陶土素材を主に用いたであろう場合、粘土としたのは、第四紀以降の陶土素材を主に用いた場合を指し。焼成に関しては、表面と内部で色調の変化がある場合、土器断面図末端に細線を１㎜前後入れ、さらにおよその色調をとらえ、締は続締りを意味する。土師器、埴輪類の軟は、ブラシを用い流水で洗ったら、胎土が流出してしまう個体を指すことを、大むねの基準とした。色調は、『新版標準土色帖』（農林省農林水産技術会議事務局監修）1970を用い、マンセル表示と土色名とを併記した。なお整理番号を、図中に記入しておいた。

西長岡南遺跡

図番号 写真番号	種 器形	出土位置 主記内容	量目(cm) 残存状態	胎土・焼成・色調と摘要		備考
第11図 1 写真図版45	土師器 坏	古墳１堀5 (周堀埋土)	口径11.1、 高さ4.8＋α。	粘・陶・含・硬。 赤7.5Y4/6。	口縁部の内外面に横撫あり。外面の横撫端部以下に篦削あり。	赤色顔料付着。
同図 2 写－45	同 坏	古墳１、出土地不明。	口縁部片。	粘・微・硬。 明赤褐5YR5/6。	内・外に横撫あり。口縁の内面側は内斜気味となる。	
同図 3 写－45	同 坏	古墳１堀 (周堀埋土)	口縁部片。	粘・陶・微・硬。 赤褐2.5YR4/6。	口縁部の内外面に横撫あり。外面の横撫端部以下に篦削あり。	赤色顔料付着。
同図 4 写－45	同 坏	古墳1G18 (周堀)	口縁部片。	粘・微・並。 明赤褐2.5YR5/6。	口縁部の内外面に横撫あり。外面の横撫端部以下に篦削あり。	赤色顔料付着。
同図 5 写－45	同 坏か	古墳1堀4埋 (周堀埋土)	体部片。	粘・微・硬。 赤褐10R5/4。	体部片で、外面に篦削。内・外面に赤色顔料付着。	赤色顔料付着。
同図 6 写－45	同 坏	古墳1G4 (周堀埋土)	最大径(11)、 高さ1.9＋α。	粘・陶・硬。 明赤褐2.5YR5/6。	体部外面に篦削。内面に暗文状磨痕あり。	

図番号 写真番号	種 器形	出土位置 主記内容	量目(cm) 残存状態	胎土・焼成・色調と摘要		備考
第11図 7 写－45	埴輪形 象人物	古墳1堀1 (周堀埋土)	破片、腕部材。	粘・微・並～硬。 橙5YR6/6。	腕部片で出柄状接合とその補充粘土部を見る。器面やや消耗。	白色顔料付着。
同図 8 写－45	同 形象	古墳1石室跡 (石材集石中)	破片。	粘・陶・含・並。 にぶい橙5YR6/4。	器面は全体的に消耗。全体に平らで円弧を成さず。刷毛目荒い。	
同図 9 写－45	同 形象	古墳1石室跡 (石材集石中)	破片。	粘・微・軟。 橙7.5YR6/6。	円弧をなさず、形象片らしい。割れ口・器面は消耗。	
同図 10 写－45	同 形象	古墳1堀1埋 (周堀埋土)	破片、突出個所片。	粘・微・硬。 にぶい橙5YR7/4。	割れは消耗せず。撫整形あり。部材として円弧状態はない。	
同図 11 写－45	同 形象	古墳1G18 (周堀埋土)	破片、突帯部個所片。	粘・微・軟。 にぶい橙5YR7/4。	帯状の部材片で、消耗は少ない。割れ口に接合痕あり。	赤色顔料付着。
同図 12 写－45	同 形象	古墳1石室跡 (石材集中中)	破片、帯状貼付個所片。	粘・微・硬。 橙5YR7/6。	片側に荒い条痕、表側に細かな刷毛目と篦文様刻目あり。	
同図 13 写－45	同 形象	古墳1－1堀 (周堀埋土)	破片、部材接合個所片。	粘・微・軟。 にぶい橙5YR7/4。	横断面下方が本体部と推定。拓影左図中に文様割目あり。刷毛目細かい。	赤色顔料付着。
同図 14 写－45	同 形象	古墳1石室跡 (石材集石中)	破片、帯状貼付個所片。	粘・微・硬。 橙5YR6/6。	表・裏ともに撫痕あり。消耗は少ない。円弧を成す個所なし。	
同図 15 写－45	同 形象	古墳1石室跡 (石材集石中)	破片、板状部分。	粘・微・硬。 にぶい黄橙10YR7/4。	表面にやや太い刷毛目と篦刻文様あり。内面手掌指などの成形痕。	
同図 16 写－45	同 形象	古墳1石室跡 (石材集石中)	破片、板状部分。	粘・微・軟。 浅黄橙10YR8/3。	表面にやや太い刷毛目、内面に指などの成形痕。割れ口に紐作痕。	
同図 17 写－45	同 形象	古墳1石室跡 (石材集石中)	破片。突帯貼付個所あり。	粘・微・軟。 浅黄2.5Y7/3。	円弧は歪む。表面にやや太い刷毛目。内面に指などの成形痕。	
同図 18 写－45	同 形象	古墳1石室跡 (石材集石中)	破片。	粘・微・軟。 橙7.5YR7/6。	内・外無文。やや消耗。素材の成形が朝顔形とは異なる。	
同図 19 写－46	同形象 大刀か	古墳1G4・5 (周堀埋)	最大径(21.2)、 高さ15.0＋α、	粘・微・並。 にぶい橙5YR6/4。	刷毛目少し細かい。割れ口には紐作痕。筒部を除く上方に彩色。	白色顔料付着。
第12図 20 写－46	埴輪 朝顔	古墳1G16 (周堀埋)	口径(40.4)。 高さ7.4＋α。	粘・微・並。 にぶい橙7.5YR6/4。	口縁周辺刷毛目後、横撫。刷毛目細かい内面横～斜方向の刷毛目。	
同図 21 写－46	同 朝顔	古墳1G16・14 他(周堀埋)	最大径(45.0)、 高さ13.6＋α。	粘・含・並。 橙7.5YR6/6。	刷毛目細かい。内面やや荒い。割れ口紐作痕あり。	
同図 22 写－46	同 朝顔	古墳1G5・4・3 他(周堀)	最大径(32.2)、 高さ19.4＋α。	粘・含・並。 橙5YR6/6。	刷毛目細かい。内面部分的。内面手掌指成形痕。割れ口突帯部付近接合明瞭。	透は近円形。
同図 23 写－46	同 朝顔	古墳1G17・堀 2他(周堀)	最大径(25.0)、 高さ20.4＋α。	粘・多・並。 明赤褐2.5YR4/6。	刷毛目やや太い。内面は指などの整形痕。割れ口に接合痕。	透あり。
同図 24 写－47	同 朝顔	古墳1堀5 (周堀埋土)	最大径(25.8)、 高さ12.6＋α。	粘・含・軟。 にぶい黄橙10YR6/4。	刷毛目細かい。内面に手掌指などの成形痕。器面少し消耗。	
同図 25 写－47	同 朝顔	古墳1G25・27 ・26他(周堀)	最大径25.4、 高さ56.4＋α。	粘・微・軟。 橙7.5YR7/6。	外面上方は沫ハゼ剝落、少し太目の刷毛目。内面手掌成形痕あり。	透は近円形。 2段あり。
第12図 26 写－46	埴輪 朝顔	古墳1石室跡 (周堀埋土)	最大径(22.8)、 高さ17.6＋α。	粘・微・硬。 にぶい黄橙10YR7/4。	図は推定同一個体。全体に消耗気味。内面に手掌指などの成形痕あり。	透あり。
同図 27 写－47	同 朝顔	古墳1G15・16 ・9他(周堀)	最大径(24.8)、 高さ29.6＋α。	粘・多・硬。 橙2.5YR6/6。	刷毛目はやや太い。外面上方に凍ハゼ剝落。内面に手指成形痕。	透は近円形。
同図 28 写－52	同 朝顔	古墳1堀1埋 (周堀埋)	体部片。	粘・微・並。 明赤褐2.5YR5/6。	内・外面にやや太い刷毛目。特に素材の接合面のため篦刻目あり。	篦刻の接合痕。
同図 29 写－47	同 朝顔	古墳1堀2・G 11他(周堀他)	体部片。	粘・微・並。 にぶい橙5YR6/4。	内面やや消耗。外面少し太い刷毛目。突帯と体部の接合目不明瞭。ハゼ少。	
同図 30 写－52	同 朝顔か	古墳1石室跡 (石材集石中)	頚部片。	粘・陶・微・軟。 橙7.5YR6/6。	焼成は、割れ口に3層差あり。内・外面刷毛目。少し消耗気味。	
同図 31 写－47	同 朝顔	古墳1石室跡 (石材集石中)	体部片。	粘・微・軟。 橙5YR6/6。	全体に風化顕著。割れ口に素材の接合面明瞭。	
同図 32 写－47	同 朝顔	古墳1石室跡 (石材集石中)	頚部片。	粘・含・並。 明赤褐5YR5/6。	突帯の接合面が窺える。突帯の横撫痕明瞭。少し消耗。	
同図 33 写－47	同 朝顔	古墳1石室跡 (石材集石中)	頚部片。	粘・多・並。 橙5YR6/6。	内・外面に細かい刷毛目あり。器面は少し消耗。割れ口に突帯接合面あり。	
同図 34 写－47	同 朝顔	古墳1石室跡 (石材集石中)	体部片。	粘・含・並。 にぶい橙7.5YR7/4。	外面に細かい刷毛目あり。突帯剝落は旧時で、凍ハゼ嵩む。	
第14図 35 写－48	埴輪 円筒	古墳1G2・5・ 他(周堀埋)	口径30.4、 高さ69.0。	粘・陶・微・並。 橙2.5YR6/6。	横撫後、再刷毛目。内外にやや太い刷毛目、内面に工具・指の整形痕。	透1対、近円形。
同図 36 写－48	同 円筒	古墳1G5・堀 4他(周堀)	口径(26.6)、 高さ29.8＋α。	粘・微・軟。 赤10YR5/6。	内外にやや太い刷毛目。割れ口の色調3層。透あり。	透あり。

図番号 写真番号	種 器形	出土位置 主記内容	量目(cm) 残存状態	胎土・焼成・色調と摘要		備考
第14図 37 写－48	埴輪 円筒	古墳1G4・3 他(周堀埋)	口径(33.0)、 高さ21.4＋α。	粘・陶・微・硬。 橙2.5YR6/6。	内・外に刷毛目。刷毛目後、口縁部に撫。内面に指の圧痕。色調3層。	
同図 38 写－49	同 円筒	古墳1G5・堀 1他(周堀)	口径29.2、 高さ48.6。	粘・陶・含・並。 橙7.5YR6/6。	内・外面に刷毛目。内・外とも上方は凍ハゼ剝落。色調3層。	透近円形。
第15図 39 写－48	埴輪 円筒	古墳1G2・堀2 他(周堀)	口径(31.0)、 高さ24.0＋α。	粘・陶・微・並。 橙2.5YR6/8。	内・外面にやや太い刷毛目あり。色調3層。割れ口に紐作痕。	透あり。
同図 40 写－48	同 円筒	古墳1G1・堀 1他(周堀)	口径30.0、 高さ16.0＋α。	粘・陶・微・硬。 にぶい橙2.5YR6/4。	内・外面にやや太い刷毛目あり。色調3層。口縁横撫後、外面再刷毛整形。	最大径級の透。
同図 41 写－49	同 円筒	古墳1G25・26 他(周堀埋)	口径(31.0)、 高さ25.4＋α。	粘・陶・含・軟。 にぶい橙5YR6/4。	口縁内外横撫。内外やや太い刷毛。内面部分凍ハゼ、指整形圧痕。色調3層。	透あり。
同図 42 写－49	同 円筒	古墳1G21・22 他(周堀埋)	口径(31.0)、 高さ20.8＋α。	粘・陶・含・並。 橙5YR6/6。	口縁内外横撫。内外やや太い刷毛。内面に指による整形痕。色調は3層。	
同図 43 写－49	同 円筒	古墳1G25・26 他(周堀埋)	口径(28.0)、 高さ18.0＋α。	粘・微・硬。 明赤褐2.5YR5/6。	口縁内外横撫帯は狭まい。内外やや太い刷毛。色調は3層。	
同図 44 写－49	同 円筒	古墳1G2・1・ 3他(周堀埋)	口径(29.0)、 高さ14.0＋α。	粘・微・軟。 橙5YR7/6。	無文に近い整形具で表面ならす。内面に紐作痕。色調は単一。外下方ハゼ。	薄作。
第16図 45 写－50	埴輪 円筒	古墳1G9・8 他(周堀埋)	口径30.4、 高さ30.6＋α。	粘・陶・微・硬。 橙2.5YR6/6。	口縁内外横撫帯は狭まい。内外面にやや太い刷毛目。内面に指整形痕。	透1対、円形。
同図 46 写－50	同 円筒	古墳1G28・堀 4他(周堀)	口径28.6、 高さ36.6＋α。	粘・陶・微・硬。 橙2.5YR8/6。	内外面のやや太刷毛目浅い目。内外面に凍ハゼ剝落。色調3層。	透し歪む円形。
同図 47 写－50	同 円筒	古墳1G30・堀 4他(周堀)	口径(29.6)、 高さ6.4＋α。	粘・陶・含・硬。 にぶい橙5YR6/4。	口縁内外横撫。刷毛目浅い目。色調は3層。器肉の取り方薄い。	薄作。
同図 48 写－50	同 円筒	古墳1G23・堀 3他(周堀)	口径(30.6)、 高さ6.6＋α。	粘・微・軟。 明赤褐5YR5/6。	口縁内外横撫。内外にやや太目の刷毛目。器内の取り方薄い。色調3層。	薄作。
同図 49 写－50	同 円筒	古墳1G7・11 他(周堀)	口径(33.0)、 高さ19.0＋α。	粘・微・軟。 橙2.5YR6/6。	口縁内外横撫。内外に刷毛目。内面に指などによる整形痕。凍ハゼ顕著。	薄作。
同図 50 写－50	同 円筒	古墳1G31・堀 4他(周堀)	口径(28.4)、 高さ5.4＋α。	粘・含・軟。 明赤褐5YR5/6。	内外浅い刷毛後、撫。口縁端部工具による再整形。色調3層。	
同図 51 写－50	同 円筒	古墳1G16・17 堀4他(周堀)	口径(34.8)、 高さ9.6＋α。	粘・陶・微。 にぶい橙2.5YR6/4。	口縁部の内外面横撫、内外面やや太い刷毛目。口縁端部尖る。色調3層。	透1対、近円形。
第17図 52 写－51	埴輪 円筒	古墳1G28・堀 4他(周堀)	口径29.0、 高さ49.6。	粘・陶・含・並。 橙5YR6/6。	口縁部内外面横撫。内外面剝落顕著。刷毛目やや太い。	透近円形。
同図 53 写－51	同 円筒	古墳1G12・11 他(周堀埋)	口径(28.6)、 高さ23.7＋α。	粘・陶・微・軟。 明赤褐5YR5/6。	口縁部横撫帯狭まい。内外にやや太い刷毛目。内面指整形・擦痕。色調3層。	透1対、近円形。
同図 54 写－51	同 円筒	古墳1G16・17 他(周堀埋)	口径(29.0)、 高さ43.4＋α。	粘・陶・微・軟。 橙2.5YR7/6。	口縁部内外横撫。内外に浅い、やや太い刷毛目。内面指整形。色調3層。	透あり。
同図 55 写－51	同 円筒	古墳1堀4・G 31他(周堀)	口径30.0、 高さ30.6＋α。	粘・陶・含・硬。 橙2.5YR6/6。	口縁部内外横撫。内外にやや太い刷毛目。口縁端部再整形。色調3層。	透1対、近円形。
第18図 56 写－52	埴輪 円筒	古墳1G17・堀 2(周堀)	口径(30.4)、 高さ29.4＋α。	粘・陶・含・硬。 にぶい橙2.5YR5/6。	口縁部内外面に狭まい横撫帯。内外やや太い刷毛目。内面指整形。色調3層。	透あり。
同図 57 写－52	同 円筒	古墳1G28・堀 3他(周堀)	口径(28.6)、 高さ35.6＋α。	粘・陶・含・並。 明赤褐5YR5/6。	口縁残存少。内外面にやや太い刷毛目、内面に指整形痕、ハゼ。色調3層。	透あり。
同図 58 写－52	同 円筒	古墳1G21・22 他(周堀埋)	口径(30.6)、 高さ27.0＋α。	粘・含・並。 橙5YR6/6。	口縁残存少。内外面にやや太い刷毛目、色調3層。	
同図 59 写－52	同 円筒	古墳1堀4・G 30他(周堀)	口径(35.4)、 高さ10.8＋α。	粘・陶・含・硬。 赤10R5/6。	口縁部の横撫帯狭まい。内外面刷毛目。色調3層。	
同図 60 写－52	同 円筒	古墳1石室埋 (石材集石中)	口縁部片。	粘・陶・含・並。 橙2.5YR6/6。	口縁部内外面に横撫。内外面にやや太い刷毛目あり。口縁端部尖る。	薄作。細刷毛目。
同図 61 写－53	同 円筒	古墳1G17・18 他(周堀埋)	口縁部片。	粘・含・並。 橙5YR6/6。	口縁部内外面に横撫。内外面に細かい刷毛目あり。	細刷毛目。
同図 22 写－53	同 円筒	古墳1石室跡 (石材集石中)	口縁部片。	粘・微・並。 橙5YR6/8。	口縁部内外面に横撫。内外に細かい刷毛目あり。色調3層。	
第19図 63 写－53	埴輪 円筒	古墳1G27・28 他(周堀埋)	口縁部片。	粘・微・硬。 橙5YR6/6。	口縁部内外面に横撫。内外にやや太い刷毛目あり。	
同図 64 写－52	同 円筒	古墳1石室跡 (石材集石中)	口縁部片。	陶・含・硬。 明赤褐2.5YR5/6。	口縁部内外面に横撫。内外に刷毛目あり。色調3層。	
同図 65 写－53	同 円筒	古墳1G4・3 (周堀埋土)	口縁部片。	粘・含・硬。 明赤褐5YR5/6。	口縁部内外に横撫あり。内外面にやや太い刷毛目あり。色調3層。	細刷毛目。
同図 66 写－52	同 円筒	古墳1石室跡 (石材集石中)	口縁部片。	粘・微・軟。 にぶい黄橙5YR6/4	外面の横撫帯狭まい。内面整形の擦痕。外面細かい刷毛目。色調3層。	細刷毛目。

図番号 写真番号	種 器形	出土位置 主記内容	量目(cm) 残存状態	胎土・焼成・色調と摘要		備考
第19図 67 写－52	埴輪 円筒	古墳1石室跡 (石材集石中)	口縁部片。	粘・陶・含・硬。 にぶい橙5YR7/4。	内外面に細かい刷毛目。口縁部に工具のよる再整形痕。色調3層。	細刷毛目。
同図 68 写－53	同 円筒	古墳1堀3・4 (石材集石中)	口縁部片。	粘・微・軟。 にぶい赤褐2.5YR5/4。	内外面に刷毛目あり、その後撫整形。口縁部は工具による再整形。色調3層。	
同図 69 写－53	同 円筒	古墳1G4・5 (周堀埋土)	最大径23.6、 高さ27.0＋α。	粘・陶・微・硬。 にぶい赤褐5YR5/4。	内外面に刷毛目あり。内面は部分的に擦り整形。色調は3層。	透、円形。
同図 70 写－53	同 円筒	古墳1G28・堀 3他(周堀)	最大径26.2、 高さ30.0＋α。	粘・陶・微・軟。 橙5YR6/6。	内外面は凍ハゼ多し。内外面に刷毛目。内面に部分的に指などの整形痕あり。	透、近円形。
同図 71 写－53	同 円筒	古墳1G31・3 他(周堀埋土)	最大径(27.2)、 高さ7.6＋α。	粘・微・硬。 橙5YR6/6。	外面に剝落あり。内外面に刷毛目あり。色調3層。	透、円形
第20図 72 写－54	埴輪 円筒	古墳1G7・10 他(周堀埋土)	最大径(27.2)、 高さ14.8＋α。	粘・陶・含・並。 明赤褐2.5YR5/6。	内外面は荒れ、凍ハゼあり。突帯も消耗している。色調3層。	
同図 73 写－54	同 円筒	古墳1G6・堀4 他(周堀)	最大径(28.7)、 高さ27.2＋α。	粘・陶・微・並。 明赤褐2.5YR5/6。	内外面は少しハゼが剝落あり。外面刷毛目、内面指など整形痕。色調3層。	
同図 74 写－53	同 円筒	古墳1G7・堀 1他(周堀)	最大径(27.8)、 高さ16.0＋α。	粘・微・並。 赤橙10YR6/6。	全体的に荒れている。割口に接合面あり。外面刷毛目。色調3層。	透あり。
同図 75 写－54	同 円筒	古墳1G25・7 (周堀埋土)	最大径27.6、 高さ16.0＋α。	粘・陶・多・並。 橙7.5YR7/6。	全体的に荒れている。外面に刷毛目痕。内面に指などの整形痕。	透あり。
同図 76 写－54	同 円筒	古墳1堀5埋 (周堀埋土)	最大径(32.4)、 高さ24.0＋α。	粘・微・並。 明赤褐2.5YR5/6。	内外面に刷毛目あり。内・外面に補充粘土貼付。色調3層。	透、近円形。 補充粘土貼。
同図 77 写－55	同 円筒	古墳1堀3・G 22(周堀埋)	最大径(29.0)、 高さ16.0＋α。	粘・含・並。 明赤褐2.5YR5/6。	外面に刷毛目、内面に指などによる整形痕あり、色調3層。粘土紐作痕。	
同図 78 写－55	同 円筒	古墳1G30・堀 4他(周堀)	最大径(32.0)、 高さ18.4＋α。	粘・微・並。 明赤褐2.5YR5/6。	内外面に刷毛目。内面に指などによる整形時の擦痕あり。色調3層。	
第21図 79 写－54	埴輪 円筒	古墳1G31・堀 4(周堀埋)	最大径(28.0)、 高さ12.3＋α。	粘・微・並。 明赤褐2.5YR5/6。	内外面に刷毛目。内面は整形時の擦痕多し。色調3層。	
同図 80 写－55	同 円筒	古墳1堀1埋 (周堀埋土)	最大径(26.4)、 高さ14.4＋α。	粘・陶・含・硬。 にぶい褐7.5YR6/3。	外面に刷毛目。内面に指などによる整形痕あり。色調3層。	透あり。
同図 81 写－55	同 円筒	古墳1G30・31 他(周堀埋)	最大径(31.3)、 高さ19.7＋α。	粘・陶・微・硬。 橙2.5YR6/6。	外面に刷毛目。内面に指などの整形痕あり。色調3層。	透、近円形。
同図 82 写－54	同 円筒	古墳1G5・堀 他(周堀埋)	最大径(26.2)、 高さ11.0＋α。	粘・微・軟。 橙5YR7/6。	内外凍ハゼ剝落多し。内外面にわずか刷毛目あり、色調単調。	
同図 83 写－55	同 円筒	古墳1G25・堀 3他(周堀)	最大径(24.2)、 高さ5.6＋α。	粘・陶・微・硬。 明赤褐2.5YR5/6。	内外面に刷毛目あり、内面は部分的に剝落。色調単調。	
同図 84 写－55	同 円筒	古墳1G31・堀 1(周堀埋)	最大径(30.9)、 高さ19.0＋α。	粘・陶・微・硬。 橙5YR6/6。	内外面に刷毛目あり。内面はさらに整形時の擦痕。色調3層。	製作時のヒビ割れあり。
同図 85 写－55	同 円筒	古墳1G30・31 他(周堀埋)	体部片。	粘・微・並。 明赤褐2.5YR5/6。	器面少し荒れる。内外面刷毛目あり。色調3層。	
同図 86 写－54	同 円筒	古墳1G4・堀 4(周堀埋)	体部片。	粘・微・並。 橙2.5YR6/6。	内外面に細かい刷毛目あり。色調は全体に単調である。	細刷毛目。
同図 87 写－55	同 円筒	古墳1G1 (周堀埋土)	体部片。	粘・含・軟。 橙7.5YR6/6。	内外面に細かい刷毛目あり。全体、風化消耗。色調は単調3層。	細刷毛目。
同図 88 写－55	同 円筒	古墳1G5・他 (周堀埋土)	体部片。	粘・含・軟。 橙5YR6/6。	内外面に凍ハゼ多し。外面刷毛目。突帯も消耗あり。色調3層。	
第22図 89 写－56	埴輪 円筒	古墳1石室跡 (石材集石中)	体部片。	粘・陶・含・硬。 橙2.5YR6/8。	内外面に刷毛目あり。器面少し荒れる。割れ口に接合面。色調3層。	
同図 90 写－56	同 円筒	古墳1堀埋・堀 4(周堀)	体部片。	粘・微・軟。 にぶい橙7.5YR7/4。	内外面は風化消耗。内面に工具整形痕。色調は単調。	
同図 91 写－56	同 円筒	古墳1G28・27 他(周堀埋)	最大径(23.6)、 高さ23.4＋α。	粘・微・軟。 橙5YR6/6。	器面は風化気味。内外面に刷毛目。割れ口に接合面。色調は3層。	
同図 92 写－56	同 円筒	古墳1G5・2 他(周堀埋)	底径19.2、 高さ35.4＋α。	粘・微・並。 にぶい赤褐5YR5/4。	内外面は凍ハゼ剝落。内外面刷毛目。色調は3層。	透1対、円形。
同図 93 写－56	同 円筒	古墳1堀4・G 5他(周堀)	最大径(26.8)、 高さ13.2＋α。	粘・微・並。 橙7.5YR6/6。	内外面風化消耗。外面に刷毛目。基部に粘土帯接合面あり。	基部粘土帯接合。
同図 94 写－57	同 円筒	古墳1G21・堀 2他(周堀)	底径(16.0)、 高さ15.2＋α	粘・陶・微・並。 橙5YR6/6。	内外面は少し消耗している。内外面刷毛目、内面指など擦跡。色調3層。	
同図 95 写－57	同 円筒	古墳1石室埋 (石材集石中)	底径(16.6)、 高さ8.6＋α	粘・陶・微。 明赤褐2.5YR5/6	内外面は少し消耗。内外面刷毛目。色調は3層。	
第23図 96 写－56	埴輪 円筒	古墳1石室埋 (石材集石中)	基部片	陶・微・並。 橙5YR6/6	内外面に刷毛目、内面やや太い。割れ口に接合痕。色調3層。	

図番号 写真番号	種 器形	出土位置 主記内容	量目(cm) 残存状態	胎土・焼成・色調と摘要		備考
第23図 97 写－57	埴輪 円筒	古墳1G31 (周堀埋土)	体部片	粘・陶・含・並。 明赤褐2.5YR5/6。	内外面に細刷毛目。内面整形の擦痕。色調3層。	細刷毛目。 透あり。
同図 98 写－57	同 円筒	古墳1G28・堀2他(周堀)	体部片	粘・含・並。 明赤褐5YR5/6。	器面全体に凍ハゼ剝落あり。突帯も消耗。色調3層。	透あり。
同図 99 写－56	同 円筒	古墳1石室跡 (石材集石中)	体部片	陶・含・硬。 橙5YR6/6。	内面凍ハゼ気味。外面刷毛目。割れ口に突帯の接合面。色調3層。	透あり。
同図 100 写－56	同 円筒	古墳1G18 (周堀埋土)	体部片	粘・微・並。 橙7.5YR7/6。	外面やや消耗。内外面に刷毛目。内面に指などの擦跡。	透最小級、円歪む。
同図 101 写－56	同 円筒	古墳1石室跡 (石材集石中)	体部片	粘・陶・含・並。 にぶい橙5YR6/4。	内外面消耗。外面細刷毛目。内面整形時の指などの擦痕あり。	細刷毛目。 透あり。
同図 102 写－57	同 円筒	古墳1石室跡 (石材集石中)	体部片	陶・微・軟。 にぶい橙5YR7/4	内外面消耗。内外面刷毛目あり。突帯は消耗している。色調3層。	透上半隅丸。
同図 103 写－57	同 円筒	古墳1G31 (周堀埋土)	体部片	粘・含・並。 橙5YR6/6。	内外面に刷毛目。外面に篦書。色調は単調。	篦書。
同図 104 写－57	同 円筒	古墳1G31 (周堀埋土)	体部片	粘・微・硬。 橙5YR6/6。	内外面に細刷毛目。外面に篦書。外面の刷毛目は斜方向で趣き異なる。	篦書。細刷毛目。
同図 105 写－57	同 円筒	古墳1G27・26 (周堀埋土)	体部片	粘・微・軟。 明赤褐2.5YR5/6。	内外面に刷毛目。外面に篦書。色調は3層。	篦書。
同図 106 写－57	同 円筒	古墳1堀4 (周堀埋土)	体部片	粘・微・硬。 明赤褐5YR5/6。	内外面に刷毛目。内面横刷毛目気味。外面に篦書。色調は3層。	横刷毛気味。篦書。
第24図 107 写－57	瓦 男瓦	古墳1石室跡 (石材集石中)	破片	陶・含・硬。 にぶい黄2.5YR6/3。	内面に静止糸切痕。全体に消耗。側部面取2回削。色調3層。	中世瓦。 推定有段。
同図 108 写－未掲載	土師質 土器皿	古墳1不明 (排土採集)	底部片	粘・微・軟。 にぶい橙7.5YR7/4。	底面に糸切あり。全体に風化消耗している。	中世か。
同図 109 写－57	磁器猪口	古墳1石室跡 (石材集石中)	最大径(11.2)、 高さ6.6＋α。	磁・なし・白。	外面に綾杉状の染付施文あり。内面に染付圏線2条。	伊万里系。 18世紀。
同図 110 写－57	軟質陶器焙烙	古墳1石室跡 (石材集石中)	口径(38.4)、 高さ7.0。	粘・微・硬。 灰黄褐10YR6/2。	体部外面に特徴的な接合面あり。内面内耳欠損。底面被熱。	小泉焼か。 19・20世紀。
第29図 1 写真図版58	土師器 甕	古墳2Ⅰ10－355	頸部片。	粘・陶・微・硬。 にぶい橙7.5YR6/4。	内外面ともに風化消耗している。頭部の曲率は高く壺と考えられる。	
同図 2 写－58	埴輪 朝顔	古墳2堀1区 (周堀埋土)	最大径(27.0)、 高さ9.0＋α。	陶・粘・微・軟。 橙5YR6/6。	外面に刷毛目。内面に整形時の擦跡。割れ口に突帯の接合痕。色調単調。	
同図 3 写－58	同 朝顔	古墳2堀1区 他(周堀埋土)	最大径(16.4)、 高さ11.0＋α。	粘・含・並。 明赤褐2.5YR5/6。	外面に刷毛目。内面に荒い刷毛目。色調は単調。	
同図 4 写－58	同 内筒	古墳2堀1・2他 (周堀埋土)	最大径22.0、 高さ16.0。	粘・陶・微・硬。 明赤褐2.5YR5/6。	内外面に細刷毛目。作調は丁寧。色調は単調。上方の接合面は特徴的。	透あり。
同図 5 写－58	同 形象か	古墳2Ⅰ10－374他	底径(12.0)、 高さ6.0＋α。	粘・陶・微・並。 橙7.5YR6/6。	脚部片か。全体に消耗。割れ口の素材粘土の粒子走行特異。色調単調。	
同図 6 写－58	同 円筒	古墳2Ⅰ10－374他	最大径(18.0)、 高さ7.4＋α。	粘・陶・含・硬。 赤7.5YR4/6。	内外面に細刷毛目あり。外面の刷毛目丁寧。色調は単調。	細刷毛目。 透あり。
同図 7 写－58	同 円筒	古墳2堀1 (周堀埋土)	最大径(14.0)、 高さ10.6＋α。	粘・含・軟。 にぶい橙5YR7/4。	外面に細刷毛目。内面に擦跡。器面少し消耗。	細刷毛目。
同図 8 写－58	同 円筒	古墳2羨道他 (石室用材中)	底径(13.6)、 高さ11.6＋α。	陶・含・硬。 明赤褐5YR5/6。	外面丁寧な細刷毛目、内面もわずかにあり。突帯貼付明瞭。色調単調。	細刷毛目。
同図 9 写－58	同 円筒	古墳2石室埋 (石室用材中)	口縁部片。	粘・微・硬。 橙7.5YR7/6。	内外面に細刷毛目。横撫帯狭まい。色調単調。	細刷毛目。
同図 10 写－58	同 円筒	古墳2羨道 (石材用材中)	口縁部片。	粘・微・硬。 にぶい橙5YR6/4。	内外面に刷毛目。横撫帯狭まい。色調は半調。	
同図 11 写－58	同 円筒	古墳2羨道 (石材用材中)	口縁部片。	粘・微・軟。 明赤褐5YR5/6。	内外面に刷毛目。横撫帯狭まい。色調は単調。	
同図 12 写－58	同 円筒	古墳2堀1 (周堀埋土)	体部片。	粘・微・並。 橙7.5YR6/6。	外面に細刷毛目。内面に擦跡。色調は単調。透の直径は大きい。	細刷毛目。 透大きい。
同図 13 写－58	同 円筒	古墳石室埋 (石室用材中)	体部片。	粘・微・軟。 橙5YR6/6。	外面に細刷毛目。内面擦跡。色調は半調。透の直径は大きい。	細刷毛目。 透大きい。
同図 14 写－58	同 円筒	古墳2石室跡 (石室用材中)	体部片。	粘・微・硬。 橙5YR6/6。	内外面に細刷毛目。内面側に篦書あり。色調は単調。	
同図 15 写－58	同 円筒	古墳2石室跡 (石室用材中)	体部片。	粘・微・軟。 明赤褐5YR5/8。	外面に細刷毛目。割れ口に素地の合せ目らしき跡あり。	
同図 16 写－58	同 円筒	古墳2玄室内 (石室用材中)	体部片。	粘・陶・含・並。 橙5YR6/6。	外面に刷毛目あり。全体に消耗あり。色調は3層。	

図番号 写真番号	種 器形	出土位置 主記内容	量目(cm) 残存状態	胎土・焼成・色調と摘要		備考
第29図 17 写－58	同 円筒	古墳2Ⅰ10－ 355	底部片。	粘・陶・微・硬。 にぶい黄橙10YR7/3。	内面に工具痕。外面に糸切痕。同種皿としては薄作り。	
同図 18 写－58	土師質 土器皿	古墳2Ⅰ10－ 355	口径(12.0)、 高さ2.7＋α。	陶・多・硬。 橙5YR6/6	外面に轆轤目あり。少し消耗あり、同種皿としては厚作り。	中世か。
同図 19 写－58	陶器 碗	古墳2	体部片。	陶・微・締。 褐7.5YR4/3。	内外面に暗褐の鉄釉がかかり、外面下方の露胎に相当の個所に錆釉かかる。	17・18世紀か。
同図 20 写－58	軟質陶 器鉢	古墳2Ⅰ10－ 355	口縁部片。	粘・微・並。 灰白5YR7/2。	全体に消耗している。内面の磨耗痕も不明瞭。色調は単調。	14世紀。
同図 21 写真図版58	瓦 男瓦	古墳2玄室内 (石室用材中)	破片。	陶・含・並。 にぶい赤褐5YR5/4(外面)。	表面に寄木圧痕。外面と正格子目と糸切痕あり外面燻受け、割れ口酸化。	7世紀後半 ～8世紀前。
同図 22 写－58	石室石 材か	古墳2堀2 (周堀埋土)	破片。	流紋岩質凝灰岩。	石室材に用いたと思われる凝灰岩で、質は異質岩片を多く含む。	石室材か。
同図 23 写－58	石製 鏃	古墳2石室 (石室用材中)	長4.0、 幅3.0。	チャート	欠損部は旧時。肉置きは均等に近く、製作良好。	
同図 24 写－58	同 斧	古墳2石室跡 (石室用材中)	長10.0、 幅8.0。	安山岩。	旧損は調査時か。表裏面に使用時の磨耗あり。	
同図 25 写－58	同 斧	古墳2石室跡 (石室用材中)	長13.2、 幅7.4。	安山岩。	旧損は調査時か。表裏面に使用時の磨耗あり。	
第31図 1 写真図版59	土師質 土器皿	古墳4石室埋 (古墳2誤記)	口縁部片。	粘・微・並。 にぶい橙7.5YR7/4。	内外面に横撫あり。少し消耗している。色調淡く、酸化気味。	11～15世紀。
同図 2 写－59	同 皿	古墳4石室埋 (古墳2誤記)	体部片。	粘・微・硬。 にぶい橙7.5YR6/4。	内外面に轆轤による回転痕あり。割れ口消耗あり、口縁外反の器形。	14・15世紀。
同図 3 写－59	鉄滓 椀形か	古墳4石室埋 (古墳2誤記)	最長4.1、 最大厚0.8。		四周は旧状。底面に炉底とも見える痕跡あり。全体に小形である。	
第33図 1 写真図版59	土師器 坏	古墳3周堀 (埋土)	口縁部片。	粘・微・並。 明赤褐5YR5/6。	内外面に横撫痕徴。全体に消耗している。	
同図 2 写－59	土師質 土器皿	古墳3不明 (排土中)	体部片。	粘・微・軟。 にぶい黄橙10YR7/3。	全体に少し消耗し、器面も荒れている。体部は内湾傾向あり。	
同図 3 写－59	土師質 坏・皿	古墳3周堀 (埋土)	底径(9.0)、 高さ1.5＋α。	粘・微・並。 橙5YR6/6。	土師か土師質土器か不明。底面切離し不明。全体に消耗している。	
同図 4 写－59	埴輪 円筒	古墳3周堀 (埋土)	口縁部片。	粘・陶・含。 にぶい橙5YR7/4。	口縁端部に工具痕。外面に細刷毛目。色調3層。	薄作り。細刷毛目。
同図 5 写－59	同 朝顔	古墳3周堀 (埋土)	頸部片。	陶・含・軟。 明赤褐5YR5/6。	全体に消耗している。交帯部も旧状を失なう。色調は3層。	
同図 6 写－59	同 朝顔	古墳3不明 (排土中)	体部片。	粘・陶・微・並。 にぶい橙5YR7/4。	全体に消耗している。色調は3層。割れ口に紐作痕あり。	
同図 7 写－59	同 円筒	古墳3周堀 (埋土)	体部片。	粘・微・軟。 橙2.5YR6/6	全体に消耗している。突帯部も旧状を失なう。色調は3層。	
同図 8 写－59	同 円筒	古墳3周堀 (埋土)	体部片。	陶・微・硬。 明赤褐2.5YR5/6。	全体に消耗している。突帯部も旧状を失なう。色調は3層。	
同図 9 写－59	同 円筒	古墳3周堀 (埋土)	体部片。	陶・粘・含・硬。 にぶい橙7.5YR6/4。	全体に消耗している。突帯部の貼付状態が割れ口にあり。色調3層。	
同図 10 写－59	同 円筒	古墳3周堀 (埋土)	基部片。	粘・微・軟。 にぶい橙7.5YR7/4。	外面に刷毛目。全体に消耗している。色調は3層。	
同図 11 写－59	同 円筒	古墳3周堀 (埋土)	体部片。	粘・陶・含・並。 橙5YR6/8。	内外面に刷毛目わずかに残る。全体に消耗している。透あり。色調3層。	透あり。
同図 12 写－59	同 円筒	古墳3周堀 (埋土)	体部片。	陶・粘・含・並。 にぶい橙5YR7/4。	全体的に消耗している。透あり。色調は単調。	透あり。
同図 13 写－59	同 円筒	古墳3周堀 (埋土)	体部片。	粘・陶・微・並 橙5YR3/6。	内面整形の擦跡あり。全体に消耗している。色調は3層。透あり。	透あり。
同図 14 写－59	同 円筒	古墳3周堀 (埋土)	体部片。	粘・微・軟。 橙5YR6/8。	内面透明釉・外面鉄釉施釉される。胎土は淡灰色。	18世紀。
同図 15 写－59	陶器 碗	古墳3不明 (排土中)	底径(7.2)、 高さ2.6＋α。	硅化木。 にぶい赤褐5YR4/4。(釉)。	石室材の岩片か。硅化木様の年輪様が割れ口に見える。	
同図 16 写－59	岩片	古墳3周堀 (埋土)	小片。	硅化木 浅黄2.5Y7/3。	年輪らしき目が3本入る。凝灰岩の色調に似る。八王子丘陵産か。	
第36図 1 写真図版59	土師器 坏	古墳5G16・堀 4他(周堀埋)	口径(11.4)、 高さ(5.2)。	陶・微・硬。 橙5YR6/6。	口縁の内外面横撫。外面体部下半に箆削目あり。破片各々消耗気味。	
同図 2 写－59	同 坏	古墳5堀3・堀 4他(周堀埋)	口径(16.2)、 高さ(6.4)。	陶・粘・含・硬。 橙5YR6/6。	口縁の内外面横撫。外面体部下半に箆削目あり。各破片は消耗気味。	

図番号 写真番号	種 器形	出土位置 主記内容	量目(cm) 残存状態	胎土・焼成・色調と摘要		備考
第36図 3 写−59	土師器 高坏	古墳5堀4 (周堀埋土)	最大径3.6、 高さ2.0+α。	粘・微・並。 にぶい橙7.5YR6/4。	全体消耗気味。外面研磨あり。割れ口に接合面あり。	
同図 4 写−59	同 壺	古墳5堀3・堀4他(周堀埋)	最大径(25.4)、 高さ10.0+α。	陶・含・硬。 橙5YR6/6。	口縁部の内外横撫、内面撫。体部外面篦削。4−1〜3同一個体。割れ口新鮮。	内面袋部除赤色彩色。
同図 5 写−59	同 壺	古墳5堀5 (周堀埋土)	体部片。	粘・陶・多・硬。 にぶい橙5YR6/4。	破片の曲率から壺か甕の頸至近片。全体に消耗気味。器面壁形不明瞭。	太田古窯跡群製。
同図 6 写−59	須恵器 提瓶	古墳5堀5 (周堀埋土)	最大径19.0。	陶・微・締。 灰7.5Y4/1。	外面に細かいカキ目条痕あり。内面轆轤目。割れ口粘土板接合至近。	6世紀中頃。細カキ目。
同図 7 写−59	埴輪 大刀	古墳5堀6 (周堀埋土)	破片。	粘・陶・含・並。 明赤褐5YR5/6。	刷毛目あり。三輪玉剝落跡あり。大刀形の玉纏部の中央部付近か。色調3層。	
同図 8 写−59	同 形象	古墳5堀5 (周堀埋土)	破片。	粘・陶・含・軟。 浅黄橙10YR8/4。	全体消耗あり。内面擦跡。全体に曲率浅く扁平。色調3層。	
同図 9 写−59	同 形象	古墳5堀3 (周堀埋土)	破片。	陶・多・硬。 明赤褐2.5YR5/6。	割れ口はやや新鮮。貼付文あり。内面は擦跡あり。	
同図 10 写−59	同 形象	古墳5堀4他 (周堀埋土)	破片。	粘・陶・微・軟。 にぶい橙9.5YR7/4。	全体に消耗あり。拓図右に造形の端部あり。色調単調。	
同図 11 写−60	同 形象	古墳5不明 (排土中)	破片。	粘・多・並。 橙5YR6/6。	消耗あり。内面整形は捏跡あり。外面は無文風。	
同図 12 写−60	同 形象	古墳5G19 (周堀埋土)	破片。	粘・微・並。 橙7.5YR6/6。	外面は無文風。内面は擦跡。割れ口に粘土接合面あり。色調単調。	
同図 13 写−60	同 形象	古墳5堀5 (周堀埋土)	破片。	粘・陶・含・並。 橙5YR6/6。	円形貼付文の剝落部分。鈴などの加飾か。円形歪む。	
同図 14 写−60	同 形象	古墳5堀3 (周堀埋土)	破片。	粘・陶・並・微。 明赤褐5YR5/6。	片側に刷毛目あり。全体に消耗し、質感は古墳5埴輪類と異なる。	
同図 15 写−60	同 円筒か	古墳5耕	破片。	陶・含・並。 橙5YR6/6。	片側に刷毛目あり。全体に消耗し、質感は古墳5埴輪類と異なる。色調3層。	
同図 16 写−60	同 円筒か	古墳5堀3 (周堀埋土)	破片。	微・軽・粘。 にぶい褐7.5YR6/6。	片側に刷毛目あり。全体に消耗し、質感は古墳5埴輪類と異なる。	
同図 17 写−60	同 朝顔	古墳5堀3 (周堀埋土)	破片。	軽・微・粘・並。 橙2.5YR6/6。	片側に刷毛目あり。全体に消耗し、質感は古墳5埴輪類と異なる。	
同図 18 写−63	同 朝顔	古墳5堀3 (周堀埋土)	口縁部片。	粘・含・微。 にぶい橙7.5YR7/4。	口縁部内外面の横撫帯狭まい。内外面に細刷毛目入る。色調単調。	薄作、細刷毛目。
同図 19 写−60	同 朝顔	古墳5G17・堀3他(周堀埋)	口縁部片。	微・粘・並。 橙7.5YR7/6。	口縁部内外面の横撫帯狭まい。内外面に細刷毛目入る。色調単調。	薄作、細刷毛目。
同図 20 写−60	同 朝顔	古墳5堀1 (周堀埋土)	体部片。	粘・微・並。 にぶい橙7.5YR7/4。	内外面に細刷毛目あり。割れ口に紐作痕。色調単調。	薄作、細刷毛目。
第37図 21 写真図版60	埴輪 朝顔	古墳5G16・堀4他(周堀埋)	最大径(27.6)、 高さ27.0+α。	粘・微・並〜軟。 橙5YR7/6。	復元4部材に接点なし。内外面に細刷毛目が部分的にあり。色調単調。	透2段か。
同図 22 写−60	同 朝顔	古墳5堀3・4他 (周堀埋土)	最大径(18.0)、 高さ34.3+α。	粘・微・硬。 にぶい黄橙10YR7/4〜7/6。	外面に細刷毛目あり。器面風化。内面擦跡。指整形痕。色調単調。	
同図 23 写−60	同 朝顔	古墳5堀3・1 (周堀埋土)	口縁部〜体部。 高さ11.4+α。	粘・微・並。 にぶい橙7.5YR7/4。	細刷毛目入る。内面擦跡と紐作痕。色調は単調。	
同図 24 写−61	同 朝顔	古墳5G1・堀3他(周堀埋)	最大径(18.8)、 高さ11.0+α。	粘・微・軟〜並。 浅黄橙7.5YR8/4。	内外面に細刷毛目。割れ口に紐作痕あり。器面風化。色調は単調。	細刷毛目。
同図 25 写−66	同 朝顔	古墳5堀5他 (周堀埋土)	頸部片。	粘・陶・含・硬。 橙7.5YR7/6。	全体に消耗している。割れ口に接合痕明瞭。外面突帯の横撫。	
同図 26 写−61	同 円筒	古墳5G18他 (周堀埋土)	口径22.4、 高さ25.5+α。	粘・陶・微・硬。 橙5YR6/6。	横撫帯幅狭まい。表面撫整形。内面に指整形痕。外面に篦書。色調単調。	透円形。 篦書「×」。
同図 27 写−61	同 円筒	古墳5堀4他 (周堀埋土)	口径24.3、 高さ38.1+α。	粘・微・硬。 にぶい黄橙10YR7/4。	外面細刷毛目後の撫整形。内面撫などの擦痕。透あり。作調丁寧。色調単調。	透円形。細刷毛目。
同図 28 写−61	同 円筒	古墳5G19・堀5他(周堀埋)	口径20.7、 高さ38.4+α。	粘・微・硬。 橙7.5YR7/6。	外面工具らき撫整形。内面擦跡。透あり、作調丁寧。	透隅丸半円形。細刷毛。
同図 29 写−61	同 円筒	古墳5堀5・G22(周堀埋)	口径22.1、 高さ38.7+α。	粘・微・並。 橙7.5YR6/6。	外見細刷毛目。内面擦跡。透あり。色調は単調。作調丁寧。	透隅丸半円形。細刷毛。
同図 30 写−61	同 円筒	古墳5堀1・G5他(周堀埋)	口径21.2、 高さ21.6+α。	粘・微・硬。 浅黄橙7.5YR8/4。	口縁部外面に工具による浅い沈線あり。外面工具傷の条痕あり。色調単調。	篦書「×」。 透隅丸半円。
同図 31 写−61・66	同 円筒	古墳5堀3 (周堀埋)	口径(14.6)、 高さ9.4+α。	粘・微・並。 にぶい橙7.5YR7/4。	口縁部直口気味。外面無文工具傷の条痕あり。内面も工具痕あり。色調単調。	透あり。
第39図 32 写真図版61	埴輪 円筒	古墳5堀1・3他(周堀埋)	口径(25.0)、 高さ20.0+α。	粘・微・並。 にぶい橙7.5YR7/4。	内外面に細刷毛目あり。内面指などの擦跡。色調単調。作調丁寧。	細刷毛目。

図番号 写真番号	種 器形	出土位置 主記内容	量目(cm) 残存状態	胎土・焼成・色調と摘要		備考
第39図 33 写−62	埴輪 円筒	古墳5G17・堀 4他(周堀埋)	口径(25.0)、 高さ21.6+α。	微・粘・並。 にぶい黄橙5YR6/4。	内外面に細刷毛目あり。透あり。色調単調。作調丁寧。	透あり。 細刷毛目。
同図 34 写−62	同 円筒	古墳5G19・G 18(周堀埋)	口径21.2、 高さ12.4+α。	粘、陶・微・硬。 橙5YR6/6。	内外面に無文工具による擦跡。透あり。色調単調。作調丁寧。	透あり。 無文。
同図 35 写−61	同 円筒	古墳5堀3・G 14他(周堀埋)	口径(21.6)、 高さ6.6+α。	粘・微・硬。 にぶい橙7.5YR7/4。	口縁部工具による再整形。円外面無文工具による整形。色調単調。作調丁寧。	無文。
同図 36 写−62	同 円筒	古墳5G3・1 他(周堀埋土)	口径(24.8)、 高さ17.0+α。	粘・微・硬。 浅黄橙7.5YR8/3。	浅い刷毛目に見える。無文気味工具の内外整形。透あり。色調単調。丁寧。	透あり。 無文気味。
同図 37 写−62	同 円筒	古墳5G15・堀 3(周堀埋土)	口径(25.8)、 高さ10.6+α。	粘・微・並。 浅黄橙7.5YR8/4。	浅い刷毛目的な無文気味工具の内外整形。色調単調。作調丁寧。内面1条線。	無文気味。
同図 38 写−62	同 円筒	古墳5堀3・1 他(周堀埋土)	口径(23.0)、 高さ17.6+α。	粘・微・硬。 橙7.5YR7/6。	浅い刷毛目で内外整形。色調単調、作調丁寧。	透あり。 無文気味。
同図 39 写−62	同 円筒	古墳5G15 (周堀埋土)	口径(25.6)、 高さ11.0+α。	粘・陶・微・軟。 にぶい橙7.5YR7/4。	外面に無文に近い浅い刷毛目整形。色調単調。作調丁寧。	箆書あり。 無文気味。
同図 40 写−62	埴輪 円筒	古墳5G15 (周堀埋土)	口径(29.4)、 高さ10.2+α。	粘・微・硬。 にぶい橙7.5YR7/4。	横撫帯狭まい。内外に無文に使い浅い刷毛目整形。色調単調。作調丁寧。	無文気味。
第40図 41 写真図版62	埴輪 円筒	古墳5G2・堀 3他(周堀埋)	口径(23.0)、 高さ20.8+α。	粘・微・硬。 にぶい橙5YR7/3。	細刷毛目が内外にあり。内面に紐作痕、工具条痕1、箆書あり。色調単調。	透あり。箆書。細刷毛。
同図 42 写−62	同 円筒	古墳5堀1・G 8他(周堀埋)	口径(20.0)、 高さ16.0+α。	粘・微・硬。 橙7.5YR7/6。	細刷毛目内外にあり。内面に工具傷あり。透あり。色調単調。	透円形。 細刷毛目。
同図 43 写−62	同 円筒	古墳5堀3・G 1他(周堀埋)	口径(23.0)、 高さ18.8+α。	粘・微・硬。 浅黄橙7.5YR8/3。	内外に細刷毛目あり。内面に指整形跡。透あり。色調単調。	透円形。 細刷毛目。
同図 44 写−62	同 円筒	古墳5G10・堀 1他(周堀埋)	口径22.2、 高さ18.0+α。	粘・微・硬。 にぶい橙7.5YR7/4。	内外に細刷毛目あり。内面に指頭圧痕あり。透あり。色調単調。	透円形。 細刷毛目。
同図 45 写−62	同 円筒	古墳5G12・堀 3他(周堀埋)	口径(23.0)、 高さ13.4+α。	粘・微・硬。 にぶい橙7.5YR7/4。	内外に細刷毛目あり。内面に紐作痕あり。透あり。色調単調。	透近円形。 細刷毛目。
同図 46 写−62	同 円筒	古墳5堀1・G 8(周堀埋)	口径28.4、 高さ12.4+α。	粘・微・軟。 橙5YR7/6。	外面に細刷毛目明瞭に施される。内面に指など擦跡。色調単調。	細刷毛目。
同図 47 写−63	同 円筒	古墳5G19 (周堀埋土)	口縁部片。	粘・微・並。 にぶい橙7.5YR7/4。	内外撫により無文気味。直口気味の口縁部。色調単調。	無文。
同図 48 写−63	同 円筒	古墳5堀1 (周堀埋土)	口縁部片。	粘・微・並。 にぶい橙7.5YR6/4。	内外撫により無文気味。口縁部やや外反。色調単調。	無文。
同図 49 写−63	同 円筒か	古墳5堀3 (周堀埋土)	口縁部片。	陶・微・硬。 橙5YR6/6。	内外撫により無文気味。口縁部工具による再整形。色調単調。	無文。
同図 50 写−62	同 円筒か	古墳5G16 (周堀埋土)	口縁部片。	粘・微・軟。 にぶい黄橙10YR7/4。	内外撫により無文気味であるが下地に細刷毛目。色調単調。	無文。
同図 51 写−63	同 円筒	古墳5G16 (周堀埋土)	口縁部片。	粘・微・硬。 橙7.5YR7/6。	内外面に細刷毛目あり、後撫あり。横撫帯狭まい。色調単調。	細刷毛目。
第41図 52 写真図版63	埴輪 同筒	古墳5G16 (周堀埋土)	口縁部片。	陶・微・硬。 橙7.5YR6/6。	内外面に細刷毛目あり、後撫あり。口縁端部丸い。色調単調。	細刷毛目。
同図 53 写−63	同 円筒	古墳5堀4埋 (周堀埋土)	口縁部片。	粘・微・硬。 橙7.5YR7/6。	横撫帯であり、刷毛目見えず。口縁端部おさえる。色調単調。	
同図 54 写−63	同 円筒	古墳5不明 (排土中)	口縁部片。	粘・微・軟。 淡橙5YR8/4。	外面にやや大まかな刷毛目あり、撫もあり。色調単調。	
同図 55 写−63	同 円筒	古墳5不明 (排土中)	口縁部片。	粘・微・硬。 橙7.5YR6/6。	外面刷毛目が入るが、口縁端部少し尖がる。色調単調。	
同図 56 写−63	同 円筒	古墳5堀3埋 (周堀埋土)	口縁部片。	粘・微・硬。 にぶい橙7.5YR7/4。	外面荒い刷毛目入るが、横撫が先。口縁端部特徴的。色調単調。	
同図 57 写−63	同 円筒	古墳5堀4 (周堀埋土)	口縁部片。	粘・陶・多・硬。 橙5YR6/6。	内外面に刷毛目あり。口縁端部やや尖がる。色調単調。	細刷毛目。
同図 58 写−63	同 円筒	古墳5堀5 (周堀埋土)	口縁部片。	粘・陶・含・並。 明赤褐5YR5/8。	内外面に刷毛目あり。横撫が後行するが刷毛目も撫あり。色調単調。	細刷毛目。
同図 59 写−63	同 円筒	古墳5堀6埋 (周堀埋土)	口縁部片。	粘・陶・微・硬。 にぶい橙7.5YR7/4。	内外面に刷毛目あり。横撫が後行する。内面横刷毛シャープ。色調単調。	細刷毛目。 内面横刷毛。
同図 60 写−63	同 円筒	古墳5堀3・5 (周堀埋土)	口縁部片。	粘・微・硬。 にぶい橙7.5YR7/4。	内外面に刷毛目あり。横撫が先行する。割れ口に接合面。色調単調。	細刷毛目。
同図 61 写−63	同 円筒	古墳5G15・堀 5他(周堀埋)	底径12.0、 高さ14.0+α。	粘・微・硬。 橙7.5YR6/6。	内外撫による無文。透あり。色調単調。基部側の突帯は剝落している。	無文。 透あり。
同図 62 写−63	同 円筒	古墳5堀3・G 8他(周堀埋)	最大径(17.6)、 高さ16.7+α。	粘・微・軟。 にぶい橙5YR7/3。	内外撫による無文。撫に先行し、わずか刷毛目が下地にあり。色調単調。	無文。

図番号 写真番号	種 器形	出土位置 主記内容	量目(cm) 残存状態	胎土・焼成・色調と摘要		備考
第41図 63 写−64	埴輪 円筒	古墳5堀3・4 他(周堀埋)	底径11.6、 高さ19.3+α。	粘・微・軟・硬。 にぶい橙7.5YR7/4。	内外撫による無文。透あり、楕円気味。 内面に紐作痕あり。色調単調。	無文。 透あり。
同図 64 写−64	同 円筒	古墳5G21・堀 5(周堀埋)	底径12.0、 高さ26.8+α。	粘・微・硬。 にぶい橙7.5YR7/4。	内外面撫により無文。内面指擦後。透 あり、円形、色調単調。	無文。 透円形。
同図 65 写−63	同 円筒	古墳5堀4・5 (周堀埋土)	最大径(15.6)、 高さ16.0+α。	粘・微・含。 にぶい橙7.5YR6/4。	内外面撫により無文。内面に指による 擦後あり。色調単調。	無文。
第42図 66 写真図版64	同 円筒	古墳5堀5他 (周堀埋土)	底径12.2、 高さ18.5+α。	粘・陶・微・硬。 橙5YR6/6。	内外面撫により無文。内面紐作痕、指 による擦後。色調単調。	無文。
同図 67 写−64	同 円筒	古墳5G14・堀 3他(周堀埋)	底径10.0、 高さ14.1+α。	微・粘・並。 橙7.5YR7/6。	内外面撫により無文。内面に乾燥割れ、 指による擦後あり。	無文。
同図 68 写−64	同 円筒	古墳5G19・堀 4他(周堀埋)	底径11.0、 高さ9.3+α。	粘・陶・微・ 橙7.5YR7/6。	内外面撫により無文。内面に擦跡あり。 色調は単調。	無文。
同図 69 写−64	同 円筒	古墳5堀6 (周堀埋土)	底径(14.0)、 高さ9.2+α。	陶・微・硬。 にぶい橙5YR7/4。	内外面撫により無文。内面に擦跡あり。 基部粘土板接合面あり。色調単調。	無文。基部 粘土板接合。
同図 70 写−64	同 円筒	古墳5堀4他 (周堀埋土)	底径11.0、 高さ7.4+α。	粘・陶・微・軟。 橙7.5YR7/6。	外面浅い刷毛目。内面擦跡。色調は、内 部やや黄味がかるが基本的には酸化。	無文気味。
同図 71 写−64	同 円筒	古墳5堀4・堀 4(周堀埋)	底径11.8、 高さ18.2+α。	粘・含・軟。 橙2.5YR6/6。	内外面に撫整形と下地に細刷毛目入 る。透あり。色調は単調。	無文気味。
同図 72 写−64	同 円筒	古墳5G17・堀 4他(周堀埋)	底径11.5、 高さ21.5+α。	粘・微・硬。 橙5YR6/6。	内外面に撫と下地に浅い刷毛目入る。 内面紐作痕あり。色調は単調。	無文気味。
同図 73 写−64	同 円筒	古墳5堀4埋 (周堀埋土)	底径11.2、 高さ8.0+α。	粘・含・並。 橙7.5YR6/6。	外面細刷毛目あり。内面擦跡あり。色 調は単調。	細刷毛目。
同図 74 写−64	同 円筒	古墳5G13・堀 3(周堀埋土)	底径(13.4)、 高さ15.4+α。	粘・微・硬。 橙7.5YR7/6。	内外面に細刷毛目あり。内面に紐作痕 と擦跡あり。色調は単調。	細刷毛目。
同図 75 写−64	同 円筒	古墳5G16・堀 4他(周堀埋)	底径10.5、 高さ31.0+α。	粘・陶・微・硬。 にぶい橙5YR7/4。	内外面に細刷毛目あり。内面に紐作痕 と擦跡あり。透あり。色調は単調。	細刷毛目。 透円形。
第43図 76 写真図版64	同 円筒	古墳5G8・堀 1他(周堀埋)	底径(12.0)、 高さ17.0+α。	粘・陶・微・硬。 にぶい橙7.5YR7/4。	内外面に細刷毛目あり。内面に紐作痕 と擦跡あり。色調は単調。	細刷毛目。
同図 77 写−64	同 円筒	古墳5堀3・G 16他(周堀埋)	底径(20.0)、 高さ9.2+α。	粘・微・並。 浅黄橙7.5YR8/4。	内外面に撫整形あり。内面指などによ る擦跡。透は円形。色調は単調。	無文。 透円形。
同図 78 写−64	同 円筒	古墳5堀5・6他 (周堀埋土)	最大径(21.0)、 高さ7.0+α。	陶・微・硬。 橙7.5YR6/6。	外面に細刷毛目。内面横の擦跡。透下 半円形。色調は単調。	細刷毛目。 透あり。
同図 79 写−65	同 円筒	古墳5堀5・4他 (周堀埋土)	底径(16.2)、 高さ14.0+α。	粘・微・並。 橙7.5YR7/6	外面に浅く細刷毛目あり。内面擦跡。 透下半は円形。色調は単調。	無文気味。 透あり。
同図 80 写−65	同 円筒	古墳5ベルト他 (周堀埋土)	最大径(18.6)、 高さ9.0+α。	粘・微・硬。 にぶい橙5YR7/4。	外面に浅く細刷毛目あり。内面擦跡。 透は円形。色調単調。	浅細刷毛目。 透円形。
同図 81 写−65	同 円筒	古墳5堀4・G 23他(周堀埋)	最大径(20.7)、 高さ9.0+α。	陶・微・並。 にぶい橙5YR6/4。	内外面に浅く細刷毛目あり。内面さら に擦跡。透あり。色調単調。	無文気味。 透近円形。
同図 82 写−65	同 円筒	古墳5堀5埋 (周堀埋土)	最大径(17.0)、 高さ17.0+α。	粘・陶・微・並。 橙2.5YR6/6。	外面に細刷毛目あり。内面擦跡あり。 透あり。色調単調。	細刷毛目。 透あり。
同図 83 写−65	同 円筒	古墳5堀5埋他 (周堀埋土)	最大径(20.0)、 高さ8.8+α。	粘・陶・微・並。 明赤褐5YR5/6。	外面に細刷毛目あり。内面擦跡あり。 色調は単調。	細刷毛目。
同図 84 写−65	同 円筒	古墳5堀5埋他 (周堀埋土)	最大径(16.4)、 高さ10.4+α。	粘・陶・含・軟。 明赤褐2.5YR5/6。	外面に細刷毛目あり。内面擦跡あり。 内面に紐作痕。色調は単調。	細刷毛目。
同図 85 写−65	同 円筒	古墳5堀4埋他 (周堀埋土)	最大径(18.1)、 高さ12.2+α。	粘・含・軟。 橙2.5YR6/6。	外面に細刷毛目あり。内面擦跡あり。 透あり。色調単調。	細刷毛目。 透楕円気味。
同図 86 写−65	同 円筒	古墳5堀3・5 (周堀埋土)	最大径(17.2)、 高さ11.6+α。	粘・微・軟。 にぶい橙5YR6/4。	内外面に細刷毛目あり。内面加えて擦 跡あり。透あり。色調単調。	細刷毛目。 透あり。
同図 87 写−65	同 円筒	古墳5堀埋他 (周堀埋土)	体部片。	粘・微・軟。 橙5YR6/6。	内外面に細刷毛目あり。内面に擦跡あ り。色調は単調。	細刷毛目。
同図 88 写−65	同 円筒	古墳5堀4・1 (周堀埋土)	体部片。	粘・微・並。にぶい黄橙 10YR・表7/3・裏7/6。	内外面に細刷毛目あり。内面に擦跡、 紐作痕あり。色調単調。	細刷毛目。
第44図 89 写真図版65	同 円筒	古墳5G5 (周堀埋土)	体部片。	陶・微・軟。 にぶい橙7.5YR7/3。	内面に浅い細刷毛目あり。内面に紐作 痕あり。色調は単調。	浅細刷毛目。 無文気味。
同図 90 写−65	同 円筒	古墳5堀4 (周堀埋土)	体部片。	粘・軽・微。 にぶい橙5YR6/4。	外面は細刷毛目後、擦跡あり。内面は 擦跡。色調単調。	透円形気味。 無文。
同図 91 写−66	同 円筒	古墳5堀5 (周堀埋土)	体部片。	粘・微・硬。 にぶい橙5YR7/4。	内外面擦跡。割れ口に突帯接合痕。透 あり。色調は単調。	透円形気味。 無文。
同図 92 写−66	同 円筒	古墳5堀6埋 (周堀埋土)	体部片。	陶・微・硬。 橙7.5YR6/6。	内外面擦跡。内面に紐作痕。透あり。 色調は単調。	透隅丸半円。

図番号 写真番号	種 器形	出土位置 主記内容	量目(cm) 残存状態	胎土・焼成・色調と摘要		備考
第44図 93 写−66	埴輪 円筒	古墳5堀6埋 (周堀埋土)	体部片。	陶・微・硬。 にぶい橙5YR7/4。	外面無文、擦跡あり。紐作痕。透あり。 内面は浅い細刷毛目と工具傷。	無文。 透隅丸半円。
同図 94 写−66	同 円筒	古墳5堀5埋他 (周堀埋土)	体部片。	陶・粘・微・並。 にぶい橙5YR6/4。	内外面擦跡あり。突帯におさえ跡。透 あり。色調は単調。	無文。 透あり。
同図 95 写−66	同 円筒	古墳5G16 (周堀埋土)	体部片。	微・粘・硬。 にぶい橙7.5YR7/4。	内外面無文。擦跡あり。透は円形か。 色調は単調。	無文。 透円形か。
同図 96 写−66	同 円筒	古墳5不明 (周堀排土中)	体部片。	粘・微・並。 にぶい橙5YR7/4。	内外面無文。擦跡あり。透は円形か。 色調は単調。	無文。 透円形か。
同図 97 写−66	同 円筒	古墳5G15 (周堀埋土)	体部片。	粘・微・並。 にぶい橙7.5YR7/4。	内外面無文。擦跡あり。透は円形か。 色調は単調。	無文。 透円形か。
同図 98 写−66	同 円筒	古墳5堀3 (周堀埋土)	体部片。	粘・微・並。 にぶい橙7.5YR7/4。	内外面無文。擦跡あり。透あり。色調 は単調。	無文。 透円形か。
同図 99 写−65	同 円筒	古墳5不明 (周堀排土中)	体部片。	微・粘・軟。 淡橙5YR8/4。	内外面無文、擦跡あり。内面工具傷・ 透あり。色調は単調。	無文。 透あり。
同図 100 写−66	同 円筒	古墳5堀3埋 (周堀埋土)	体部片。	粘・微・並。 にぶい橙7.5YR7/4。	内外面無文、擦跡あり。透あり。色調 は単調。	無文。 透あり。
同図 101 写−65	同 円筒	古墳5不明 (周堀排土中)	体部片。	陶・粘・微。 にぶい橙7.5YR7/4。	内外面無文、擦跡あり。透あり。色調 は単調。	無文。 透あり。
同図 102 写−66	同 円筒	古墳5堀4埋 (周堀埋土)	体部片。	陶・含・硬。 にぶい橙5YR4/4。	内外面浅い刷毛目あり。内面擦跡あり。 透あり。色調は単調。	無文気味。 透隅丸半円。
同図 103 写−66	同 円筒	古墳5堀3 (周堀埋土)	体部片。	粘・微・軟。 にぶい橙5YR7/4。	内外面無文、擦跡あり。透あり。色調 は単調。	無文。 透あり。
同図 104 写−66	同 円筒	古墳5堀3 (周堀埋土)	体部片。	粘・微・並。 にぶい橙7.5YR7/4。	内外面無文、擦跡あり。透あり。色調 は単調。	無文。 透隅丸半円。
同図 105 写−66	同 円筒	古墳5G17 (周堀埋土)	体部片。	粘・微・硬。 にぶい橙7.5YR7/4。	外面に浅い細刷毛目あり。内面擦跡あ り。透あり。色調は単調。	無文気味。 透あり。
同図 106 写−66	同 円筒	古墳5ベルト (周堀埋土)	体部片。	粘・微・硬。 にぶい橙7.5YR7/4。	内外面に浅い細刷毛目あり。内面擦跡 もあり。色調は単調。	無文気味。 透あり。
同図 107 写−66	同 円筒	古墳5G8・堀 5(周堀埋)	体部片。	粘・微・並。 にぶい橙7.5YR7/4。	内外面に浅い細刷毛目あり。内面に擦 跡もあり。透あり、色調は単調。	無文気味。 透隅丸半円。
同図 108 写−66	同 円筒	古墳5不明 (周堀排土中)	体部片。	微・並・粘。 橙7.5YR7/6。	内外面刷毛目見えず。無文か。風化気 味。透あり。色調単調。	無文か。 透あり。
同図 109 写−63	同 円筒	古墳5堀3埋 (周堀埋土)	体部片。	粘・微・並。 にぶい橙7.5YR7/4。	少し消耗気味。外面下地に刷毛目あり。 内面擦跡あり。透あり。色調単調。	透あり。
同図 110 写−66	同 円筒	古墳5堀3 (周堀埋土)	体部片。	微・粘・並。 橙7.5YR6/4。	内外面細刷毛目あり。紐作痕あり。透 あり。色調単調。	細刷毛目。 透あり。
同図 111 写−66	同 円筒	古墳5堀5 (周堀埋土)	体部片。	陶・微・硬。 にぶい橙7.5YR6/4。	内外面細刷毛目あり。内面擦跡あり。 紐作痕あり。透あり。色調単調。	細刷毛目。 透あり。
同図 112 写−66	同 円筒	古墳5G12 (周堀低位)	体部片。	陶・微・硬。 にぶい橙7.5YR7/4。	内外面細刷毛目あり。内面工具傷あり。 透あり。色調単調。	細刷毛目。 透隅丸半円。
同図 113 写−66	同 円筒	古墳5G16 (周堀埋土)	体部片。	粘・含・並。 にぶい橙5YR6/4。	内外面細刷毛目あり。紐作痕あり。透 あり。色調単調。	細刷毛目。 透円形か。
第45図 114 写真図版65	埴輪 円筒	古墳5堀5埋 (周堀埋土)	体部片。	粘・微・並。胎土軽い。 にぶい橙7.5YR6/4。	内外面無文。内面擦跡と篦書。少し消 耗気味。色調単調。	無文。 篦書。
同図 115 写−66	同 円筒	古墳5G15・堀 3(周堀埋)	体部片。	粘・微・軟。 にぶい橙7.5YR7/4。	内外面無文。外面篦書。内面工具傷か。 色調単調。	無文。 篦書「×」。
同図 116 写−66	同 円筒	古墳5堀4 (周堀埋土)	体部片。	粘・微・並。 橙5YR6/6。	内外面無文。外面篦書か工具傷か不明。 色調は単調。	無文。 篦書不明。
同図 117 写−66	同 円筒	古墳5 (排土中)	体部片。	粘・陶・含・軟。 にぶい橙7.5YR7/4。	内外面無文に見えるが。外面下地に刷 毛目あり。内面に篦書あり。色調は単調。	無文気味。 篦書。
同図 118 写−67	同 円筒	古墳5G1 (周堀埋土)	口縁部片。	陶・粘・微・並。 にぶい橙7.5YR7/4。	内外面に浅い細い刷毛目あり。内面に 太い沈線一条。紐作。色調単調。	無文気味。 沈線一条。
同図 119 写−67	同 円筒	古墳5堀5 (周堀埋土)	体部片。	粘・微・硬。 にぶい橙7.5YR7/4。	外面に浅い細刷毛目あり。内面に擦跡 と篦書あり。色調単調。	無文気味。 篦書。
同図 120 写−67	同 円筒	古墳5G1・堀 3他(周堀埋)	口縁部片。	陶・微・並。 にぶい橙5YR6/4。	内外面に浅い細刷毛目あり。内面に篦 書沈線4条あり。紐作。色調単調。	無文気味。 篦書。
同図 121 写−67	同 円筒	古墳5堀5埋 (周堀埋土)	体部片。	粘・陶・微・並。 にぶい橙5YR6/4。	内外面に浅い細刷毛目あり。内面に篦 書あり。色調単調。	無文気味。 篦書。
同図 122 写−63	同 円筒	古墳5堀3埋 (周堀埋土)	口縁部片。	粘・微・並。 橙7.5YR7/6。	内外面に浅い細刷毛目あり。内面に篦 書あり。色調単調。	無文。 篦書。

図番号 写真番号	種 器形	出土位置 主記内容	量目(cm) 残存状態	胎土・焼成・色調と摘要		備考
第45図 123 写－67	埴輪 円筒	古墳5不明 (排土中)	口縁部片。	微・粘・軟。胎土軽い。 明赤褐2.5YR5/6。	外面下地に細刷毛目痕。内面に篦書あり。色調単調。	無文気味。 篦書。
同図 124 写－63	同 円筒	古墳5G20 (周堀埋土)	口縁部片。	粘・陶・微・硬。 浅黄橙7.5YR8/3。	内外面に細刷毛目あり、外面さらに擦跡が加わる。内面に篦書あり。色調単調。	細刷毛目。 篦書。
同図 125 写－63	同 円筒	古墳5堀4 (周堀埋土)	口縁部片。	粘・微・並。 にぶい黄橙10YR7/4。	内外面に細刷毛目あり、さらに擦跡が加わる。内面に篦書あり。色調単調。	細刷毛目。 篦書。
同図 126 写－66	同 円筒	古墳5堀3 (周堀埋土)	体部片。	粘・微・並。 橙7.5YR6/6。	内外面に太い刷毛目あり。外面に篦書あり。色調は単調。	篦書。
同図 127 写－63	同 円筒	古墳5堀4 (周堀埋土)	口縁部片。	粘・微・並。 にぶい橙7.5YR7/4。	内外面に細刷毛目あり。外面に擦跡が加わる。内面に篦書あり。色調単調。	細刷毛目。 篦書。
同図 128 写－66	同 円筒	古墳5堀6埋 (周堀埋土)	体部片。	粘・微・軟。胎土軽い。 橙7.5YR6/6。	内外面に細刷毛目あり。紐作痕あり。内面に篦書あり。色調単調。	細刷毛目。 篦書
同図 129 写－67	同 円筒	古墳5堀4他 (周堀埋土)	体部片。	陶・微・軟。 橙7.5YR7/6。	内外面に細刷毛目あり。内面擦跡あり。外面に篦書あり。色調単調。	細刷毛目。 篦書
同図 130 写－未掲載	同 円筒	古墳5堀4埋 (周堀埋土)	口径(9.5)、 高さ2.4＋α。	粘・微・硬。 にぶい橙7.5YR7/3。	消耗気味。内面被熱。口縁部に油煙痕付着。灯火皿の可能性強い。	11～20世紀か。灯火皿。
同図 131 写－66	軟質陶器不明	古墳5堀4埋 (周堀埋土)	体部片。	粘・微・硬。 にぶい橙5YR6/4。	消耗している。外面剝落あり。器肉からすれば内耳鍋などか。	中・近世。
同図 132 写－67	軟質陶器火鉢	古墳5堀5 (SD47遺物か)	体部片。	陶・微・並。 灰7.5Y5/1	内面整形良く残存。下方横位の撫。焼成は表面燻黒色化。色調3層。	近世～近代。
同図 133 写－67	鉄製 鍋片か	古墳5堀1 (道跡1遺物か)	体部片。	鋳鉄。錆色は暗褐色で、紫黒ではない。	薄作であり。鍋片か。割れ口は旧時欠損。曲率は低く、やや大形製品。	17世紀頃か。
同図 134 写－67	縄文 深鉢	古墳5G15 (周堀埋土)	最大径(38.6)、 高さ9.0＋α。	粘・微・硬。 にぶい橙10YR7/3。	外面に刺突施文。縄文あり。内面に研磨あり。繊維含む。色調は3層。	
同図 135 写－67	同 深鉢	古墳5堀4他 (周堀埋土)	口縁部～体部、 最大径(27.6)。	粘・微・硬。 にぶい橙7.5YR7/3。	外面に縄文。口縁周辺の内面に研磨痕。繊維多く含む。色調は3層。	
同図136 写－67	縄文 深鉢	古墳5堀3埋 (周堀埋土)	体部片。	粘・微・硬。 にぶい橙5YR6/4。	外面に縄文あり。内面平滑。割口に紐作痕あり。色調は3層。	
同図137 写－67	石製 斧	古墳5堀4埋 (周堀埋土)	長11.4、 幅5.5。	安山岩。	旧時の欠損か平面右上にあり、使用による磨耗は点描部分。	
第47図 1 写真図版67	土師器 坏	古墳6耕	口径(15.2)、 高さ3.2＋α。	粘・微・含・硬。 橙5YR6/8。	口縁部立ち上り長い。外面の稜は沈線気味。内外面横撫。色調単調。	
同図 2 写－67	埴輪 朝顔	古墳6耕	体部片。	粘・微・軟。 橙7.5YR7/6。	内外面に細刷毛目。内面部分的に刷毛入らず。色調単調。	細刷毛目。
同図 3 写－67	同 朝顔	古墳6耕	体部片。	粘・微・硬。 にぶい橙7.5YR7/4。	内外面に細刷毛目。内面擦跡あり。器面風化気味。色調単調。	細刷毛目。
同図 4 写－67	同 円筒	古墳6耕	口縁部片。	粘・陶・微・硬。 にぶい橙5YR6/4。	内外面に太く粗な刷毛目あり。横撫帯は端部のみ。色調単調。	粗な刷毛目。
同図 5 写－67	同 円筒	古墳6耕	体部片。	粘・微・軟。 橙5YR6/6。	内外面に細刷毛目、擦痕あり。色調は単調。	細刷毛目。
同図 6 写－67	同 円筒	古墳6耕	体部片。	粘・微・並。 にぶい橙7.5YR7/4。	外面に細刷毛目あり。内面に擦跡あり。透あり。色調単調。	細刷毛目。
同図 7 写－67	同 円筒	古墳6耕	体部片。	粘・陶・微・硬。 にぶい橙7.5YR7/4。	外面に細刷毛目あり。内面に擦跡あり。透あり。色調単調。	細刷毛目。 透隅丸半円。
同図 8 写－67	同 円筒	古墳6耕	体部片。	粘・陶・含・並。 にぶい橙7.5YR7/4。	外面に細刷毛目わずかに残る。内面擦跡あり。色調は単調。少し消耗気味。	無文気味。
同図 9 写－67	同 円筒	古墳6耕	基部片。	粘・微・軟。 橙2.5YR7/6。	全体に消耗多い。基部片であるが薄い。色調は単調。	
同図 10 写－67	同 円筒	古墳6耕	底径(11.0)、 高さ7.8＋α。	粘・陶・微・並。 にぶい橙5YR7/4。	外面に細刷毛目。内面に擦跡あり。割れ口に紐作痕あり。色調単調。	細刷毛目。
第49図 1 写－67	陶器 皿	古墳7耕	底径(7.0)、 高さ3.4＋α。	陶・微・締。 淡黄2.5YR8/3。	菊皿で、内、外面に黄瀬戸釉が掛り、緑釉が部分的に入る。	17世紀末。 瀬戸・美濃。
第50図 1 写真図版67	埴輪 円筒	古墳9堀埋 (周堀埋土)	体部片。	陶・粘・微。 明赤褐5YR5/6。	内外面に細刷毛目。内面に擦跡。器面少し消耗。色調3層。	
同図 2 写－67	土師質 土器皿	古墳9堀埋 (周堀埋土)	底径(5.0)、 高さ0.6＋α。	粘・微・軟。 にぶい橙5YR7/4。	全体は消耗顕著。底面に糸切痕、色調は単調である。	14・15世紀。
第56図 1 写－68	石製 斧	SD25埋	長10.0、 幅9.0。	安山岩。	使用時の欠損と、廃棄時前後の欠損とがある。磨耗部は裏面に少しあり。	
同図 2 写－69	鉄製 鍋	SD25埋	口径40.0、 高さ10.2＋α。	鋳鉄製の鍋片で、図で復元像を示した。吊手穴2個所あり。旧時の破損を銅（主体が）の板金で補修する。この個体欠損は旧時。		16・17世紀か。

図番号 写真番号	種 器形	出土位置 主記内容	量目(cm) 残存状態	胎土・焼成・色調と摘要		備考
第56図 3 写－68	軟質陶 器鉢	ＳＤ25 (埋土)	体部片。	粘・微・軟。 浅黄5YR7/3。	消耗している。内面磨耗あり。外面にハゼ少しあり。色調単調。	14・15世紀。
同図 4 写－69	瓦 男瓦	ＳＤ25 (埋土)	破片。	粘・陶・含・並。 褐灰10YR4/1。	布目不明瞭。外面被熱あり。全体に消耗。色調は外面酸化で芯黒色の３層。	有段男瓦。 中世瓦か。
同図 5 写－69	埴輪 形象	ＳＤ25埋 (埋土)	破片。	粘・陶・含・硬。 明赤褐2.5YR5/8。	全体に消耗。外面太い刷毛目。内面凹凸あり。色調３層。	
同図 6 写－69	同 形象	ＳＤ25埋 (埋土)	破片。	陶・微・硬。 橙7.5YR7/6。	全体に消耗。内外面に細刷毛目。割れ口に接合痕。色調３層。	細刷毛目。
同図 7 写－69	同 朝顔	ＳＤ25 (埋土)	体部片。	陶・粘・多。 にぶい橙5YR7/4。	外面に刷毛目。全体に消耗。突帯剝落。色調３層。	
同図 8 写－69	同 形象か	ＳＤ25埋 (埋土)	基部片。	陶・微・硬。 橙5YR6/6。	全体に消耗。内外面に細刷毛目あり。色調は３層。下端は基部端に見える。	細刷毛目。
同図 9 写－69	同 円筒	ＳＤ25 (埋土)	口縁部片。	陶・粘・微。 橙7.5YR6/6。	少し消耗。内外面に刷毛目。内面擦跡と工具傷。色調は３層。	
同図 10 写－69	同 円筒	ＳＤ25埋 (埋土)	口縁部片。	粘・微・並。胎土軽い。 橙5YR6/6。	内外面に細刷毛目。擦跡あり。口縁整う。色調は３層。	
同図 11 写－69	同 円筒	ＳＤ25埋 (埋土)	基部片。	陶・粘・含・並。 橙7.5YR7/6。	全体に消耗。基部片と考えられる。色調は３層。	
同図 12 写－69	同 形象	ＳＤ25埋 (埋土)	底径12.0、 高さ11.5＋α。	陶・微・硬。 橙7.5YR6/6。	内外に工具痕あり。形象の脚部か。色調は３層。作調丁寧。	無文。
同図13～ 15、写69	13朝顔、16形象か、14・15円筒。各ＳＤ25埋、各体部片。13・15は粘・陶質。他粘土質。15のみ硬。14軟。13・16並。各々細刷毛目入る。色調は13・14・16が３層。15が単調気味。					
第57図 1 写真図版68	軟質陶 器焙烙	ＳＤ１ (埋土)	口縁部片。	粘・微・硬。 灰7.5Y5/1。	内耳欠損。下端の割れ口は接合部。外面黒色燻かかる。	19・20世紀 内耳。
同図 2 写－68	陶器 瓶か	ＳＤ２ (埋土)	体部片。	陶・微・締。 にぶい黄橙10YR6/3。	瓶の底面で、無釉であるが、外面側は露胎部に相当か。	
同図 3 写－68	陶器 植木鉢	ＳＤ２埋 (埋土)	体部片。	陶・微・締。にぶい赤褐 2.5YR表4/3、裏5/4。	素焼上りで、酸化気味。外面に回転条痕が撫となって見られる。色調単調。	昭和か。
同図 4 写－68	須恵器 坏	ＳＤ３埋 (埋土)	底径6.0、 高さ1.4＋α。	陶・微・軟。 にぶい黄橙10YR6/3。	底面にわずか糸切痕あり。全体に消耗している。色調３層。	笠懸・太田窯跡群製。
同図 5 写－68	磁器 皿	ＳＤ４埋 (埋土)	口縁部片。	磁胎・なし・締。 明緑灰7.5Y8/4。	青白磁釉掛かるが、新様。施文含めて型押しか。	近代以降。
同図 6 写－68	軟質陶 器鍋か	ＳＤ５－２埋 (埋土)	口縁部。	粘・微・軟。 灰黄褐10YR5/2。	外面燻かかる。全体に消耗している。割れ口に接合面あり。	
同図 7 写－68	陶器 植木鉢	ＳＤ６埋 (埋土)	体部片。	粘・陶・微・硬。 明赤褐2.5YR5/6。	素焼上りで、無釉。内外面に回転条痕と撫あり。色調単調。	近代以降。
同図 8 写－68	磁器 碗	ＳＤ７埋 (埋土)	口縁部片。	磁胎・なし・締。 青灰5B6/1。	外面ルリ釉、小形の飯碗形。口縁部やや尖がる。	19世紀以降。
同図 9 写－68	石綿 ナマコ	ＳＤ８埋 (埋土)	破片。	石綿主材か。 灰白7.5YR8/1。	波状を呈する断面。表面劣化しているため経年ありか。	昭和。
同図 10 写－68	土師質 土器皿	ＳＤ８埋 (埋土)	底部片。	粘・微・並。 にぶい橙7.5YR7/4。	底面は轆轤左回転による糸切。割れ口やや消耗。色調単調。	14～19世紀。
同図 11 写－68	磁器 皿	ＳＤ９ (埋土)	口縁部片。	磁胎・なし・締。	内外面に染付施文あり。その他白磁釉である。	18世紀以降。
同図 12 写－68	陶器 大皿	ＳＤ12埋 (埋土)	体部片。	陶胎で臙脂色・締。 にぶい褐7.5YR5/3。	高台端部を除き飴釉～灰釉調の釉かかる。高台は削出し。	唐津系。 18世紀。
同図 13 写－68	同 徳利か	ＳＤ11埋 (埋土)	体部片。	陶胎・なし・締。 黄褐2.5YR5/4。	外面飴釉・内面透明釉施す。内面に轆轤目あり。	18世紀以降。
同図 14 写－68	埴輪 円筒	ＳＤ12埋 (埋土)	体部片。	粘・陶・微・並。 明赤褐2.5YR5/6。	内外面に刷毛目あり。刷毛目やや太く荒い。やや重い。	
同図 15 写－68	同 円筒	ＳＤ12埋 (埋土)	基部片。	粘・陶・微・並。 橙5YR6/6。	外面に刷毛目あり。内面は素文気味。やや重い。	
同図 16 写－68	同 円筒	ＳＤ13埋 (埋土)	体部片。	粘・微・軟。 橙5YR6/6。	内外面素文気味。全体に消耗気味。透あり。色調３層。	透あり。
同図 17 写－68	同 円筒	ＳＤ14埋 (埋土)	体部片。	陶・微・並。 橙7.5YR6/6。	内外面に細刷毛目あり。割れ口に紐作痕。外面少し消耗。	
同図 18 写－68	磁器 小碗	ＳＤ15埋 (埋土)	最大径(7.4)、 高さ2.4＋α。	磁器・なし・締。 明緑灰10GY8/1。	外面に染付施文あり。それを除き白磁釉かかる。胎土灰7.5Y8/2。	18世紀。
同図 19 写－68	軟質陶 器鍋か	ＳＤ17埋 (埋土)	体部片。	粘・微・軟。 灰7.5Y6/1。	内外面燻かかる。薄作り。内面少し風化気味。色調３層。	

図番号 写真番号	種 器形	出土位置 主記内容	量目(cm) 残存状態	胎土・焼成・色調と摘要		備考
第57図20 写－68	陶器 皿	ＳＤ18埋 (埋土)	底径20.0、 高さ2.0＋α。	陶胎・なし・締。 浅黄2.5YR7/3。	内面に黒褐釉あり。外面は露胎となる 底面に篦削目あり。	瀬戸・美濃。 18世紀。
同図21・ 22・23・25・ 27～29・33 写－68	埴輪 円筒・ 朝顔	21、ＳＤ19埋。朝顔片。粘・含・並。橙2.5YR6/6。風化。内外面消耗。色調３層。 22、ＳＤ20埋。円筒体部片。陶・微・並。橙7.5YR6/6。風化。内外消耗。重い。色調３層。 23、ＳＤ20埋。円筒口縁部片。粘・陶・含・並。にぶい橙5YR7/4。全体消耗気味。色調単調。 25、ＳＤ21埋。円筒体部片か。粘・含・並。橙5YR6/8。全体消耗。外面刷毛。色調３層。 27、ＳＤ23埋。円筒基部片。粘・陶・微・硬。橙7.5YR6/6。全体消耗。内外面刷毛目。色調単調。 28、ＳＤ23埋。円筒基部片か。粘・含・軟。橙2.5YR6/6。全体消耗。端部は透か不明。色調３層。 29、ＳＤ23埋。円筒口縁部片。粘・含・並。明赤褐2.5YR5/6。風化気味。内外刷毛目。色調３層。 33、ＳＤ38埋。円筒透部片。粘・陶・含・並。橙7.5YR7/6。風化顕著。透あり。色調単調。		
同図24・ 26・30～32 写－68	陶・磁 器類、 羽口か	24、ＳＤ21埋。軟質陶器焙烙底片。粘・微・並。にぶい黄橙10YR7/3。19・20世紀か。外面燻。 26、ＳＤ22埋。軟質陶器焙烙底片。粘・陶・微・硬。にぶい橙7.5YR7/4。19・20世紀か。 30、ＳＤ24埋。土師質土器皿。粘・微・並。橙7.5YR7/6。風化気味。器肉厚い。 31、ＳＤ31埋。青磁皿体部片。磁胎・なし。締。18世紀頃伊万里系か舶載か不明。釉明るく薄い。 32、ＳＤ33埋。羽口片か羽口に附着した硅化物。周辺から鉄滓出土なし。酸化気味色調。		小泉焼か。 小泉焼か。 中世前半か。 羽口か。
第58図34・ 35～39・42・ 49・50・52・ 53・58～60・ 62・63～67・ 70 写－68～70	陶・磁 器類、 軟質陶 器、土 師質土 器、縄 文土器	34、ＳＤ39埋。陶器耳壺。陶胎白色・なし・締。にぶい赤褐5YR4/3。釉は黄褐～鉄釉調。釉は内面下方を除き施釉。轆轤左回転。胎土はねっとりしており舶載か。 35、ＳＤ39埋。土師質土器皿。粘・陶・角閃石含む。並。橙7.5YR7/6。風化気味。器肉薄い。 36、ＳＤ39埋。軟質陶器の粘・軟。赤褐5YR7/6。内耳鍋か。燻あり。風化顕著。 37、ＳＤ39埋。陶器碗。陶・なし・締。灰白5GY8/1。美濃。透明釉内外にあり、外面圏線 刻む。 38、ＳＤ40埋。軟質陶器焙烙底部。粘・微・並。褐灰10YR5/1。風化気味。19・20世紀か。 39、ＳＤ40埋。陶器碗。陶胎・なし・締。灰白5GY8/1。内外に志野釉。美濃。16・17世紀か。 42、ＳＤ42埋。土師質土器皿。粘・微・軟。にぶい黄橙10YR7/4。 49、ＳＤ45埋。瓦片。粘・含・軟。にぶい黄橙10YR7/3。小口面片。小泉焼瓦か。 50、ＳＤ46埋。縄文土器深鉢。粘・含・硬。にぶい橙7.5YR6/4。全体に消耗気味。 52、ＳＤ47埋。縄文土器深鉢。粘・微・硬。にぶい黄橙10YR6/4。全体に消耗。外面縄文あり。 53、ＳＤ47埋。土師質土器皿。粘・微・軟。淡黄2.5YR8/3。全体に消耗。被熱あり。 58、ＳＤ50埋。土師質土器皿。粘・微・並。にぶい橙5YR6/4。全体に消耗。 59、ＳＤ51埋。土師質土器皿。粘・微・並。にぶい黄橙10YR7/3。全体に消耗。 60、ＳＤ52埋。陶器皿。陶胎・なし・締。暗赤褐5YR3/4。内面に鉄釉。底面篦削あり。 62、ＳＤ54埋。土師器か土師質土器。粘・微・軟。にぶい橙7.5YR7/4。風化顕著。 63、ＳＤ55埋。磁器小坏。磁胎・なし・締。灰白N8/。外面に染付施文。そのほか白磁。 64、ＳＤ55埋。土師器か。粘・多・軟。灰白7.5YR8/1。土師器にしても変んな土塊。全体風化。 65、ＳＤ55埋。土師器の甕か。粘・微・並。橙5YR6/6。全体風化。土師器であれば甕か。 66、ＳＤ56埋。軟質陶器鍋か。粘・微・並。灰黄2.5Y6/2。内耳鍋か。16～18世紀。 67、ＳＤ58埋。陶器皿。陶胎・なし・締。灰黄2.5Y7/2。内面蛇目掻落し。内外銅緑釉。露胎あり。 70、ＳＤ59埋。縄文土器深鉢。粘・微・硬。にぶい黄橙10YR6/3。外面無文。内面研磨。		15・16世紀。 舶載か。 13・14世紀。 18世紀。 小泉焼か。 美濃。 14・15世紀。 十能瓦か。 中世か。 中世か。 中世か。 18世紀以降。
同図41・ 43～48・50 ・54～56・61 写－69・70	埴輪 円筒・ 朝顔・ 形象	41、ＳＤ42埋。体部片。粘・微・並。橙7.5YR6/6。風化顕著。外面細刷毛目。 43、ＳＤ44埋。体部片。粘・陶・多・軟。橙5YR6/6。風化顕著。外面刷毛目。 44、ＳＤ45埋。底径（11.8)。陶・微・硬。明赤褐5YR5/6。外面刷毛目。割れ口に紐作痕。 45、ＳＤ45埋。基部片。粘・含・軟。にぶい黄橙10YR7/3。風化顕著。外面刷毛目。 46、ＳＤ45埋。基部片。陶・微・硬。にぶい橙7.5YR7/4。風化顕著。無文に近い。色調単調。 47、ＳＤ45埋。体部片。陶・含・並。橙5YR6/6。風化顕著。外面細刷毛目。色調単調。 48、ＳＤ45埋。体部片。粘・陶・含・並。にぶい橙5YR6/4。風化顕著。外面細刷毛目。透あり。 50、ＳＤ46埋。体部片。粘・含・硬。にぶい橙7.5YR6/4。風化顕著。内外無文気味。 51、ＳＤ47埋。口縁部片。粘・微・軟。橙7.5YR7/6。風化あり。無文気味。色調単調。 54、ＳＤ48埋。最大径（11.6)。陶・粘・微。にぶい橙7.5YR7/4。内外細刷毛目。色調単調。 55、ＳＤ48埋。基部片。陶・微・硬。明赤褐5YR5/6。風化顕著。内外無文気味。色調単調。 56、ＳＤ48埋。体部片。陶・含・並。橙5YR6/6。朝顔形か。風化顕著。色調３層。 61、ＳＤ53埋。体部片。粘・微・並。にぶい橙5YR7/4。外面刷毛目あり。		細刷毛目。 細刷毛目。 細刷毛目。 細刷毛目。 細刷毛目。
第59図68・ 69・72～76・ 80・81 写－70	陶・磁 器、軟 質陶器、 土師質 土器、 瓦	68、ＳＤ58埋。土師質土器皿。底径（7.0)。粘・微・並。にぶい黄橙10YR7/4。底面に糸切。 69、ＳＤ58埋。土師質土器皿。底径（6.2)。粘・微・硬。にぶい橙5YR7/4。底面切離し 不明。器肉厚く、体部の内外面に轆轤目あり。 72、ＳＤ61埋。軟質陶器底部。粘・微・並。灰黄2.5Y7/2。焙烙底面片。19・20世紀。 73、ＳＤ61埋。陶器碗。陶胎・なし・締。灰白10Y7/1。外面に染付施文あり。18世紀。 74、ＳＤ62埋。陶器蓋瓶か。陶胎・なし・締。浅黄5Y7/3。飴釉内外面。内面下方露胎。 75、ＳＤ62埋。瓦。粘・微・並。にぶい黄橙10YR6/3。被熱あり。20世紀。 76、ＳＤ63埋。軟質陶器焙烙底部。粘・微・硬。灰白2.5Y7/1。内耳形か。19・20世紀。 80、ＳＤ66埋。磁器碗。磁胎・なし・締。外面に草文の染付あり。そのほか白磁釉掛かる。 81、ＳＤ67埋。磁器碗。磁胎・なし・締。外面に染付施文あり。山呉須。そのほか白磁釉掛かる。		15世紀頃。 15世紀頃。 小泉焼か。 伊万里系。 小泉焼か。 小泉焼か。 18世紀後期。 18世紀。

図番号 写真番号	種 器形	出土位置 主記内容	量目(cm) 残存状態	胎土・焼成・色調と摘要		備考
第59図82 写－70	土師質 土器皿	ＳＤ67埋 (埋土)	底部片。	粘・微・硬。 橙5YR6/6。	底面に糸切痕あり。回転方向不明。内面に工具痕あり。	15・16世紀。
第62図1 ～15 写－70	陶・磁器・軟質陶器・土師質土器・埴輪・縄文土器・金属製品	1、ＳＫ1埋。陶器鉢。陶・微・締。にぶい赤褐色2.5YR5/4。内面印文白土象嵌。				17・18世紀。
		2、ＳＫ1埋。軟質陶器焙烙。粘・微・並。にぶい橙7.5YR7/4。19・20世紀。				小泉焼か。
		3、ＳＫ8付近。軟質陶器鉢か。粘・陶・微・軟。にぶい橙7.5YR7/4。色調3層。				
		4、ＳＫ9。埴輪円筒か。粘・含・軟。にぶい橙2.5YR6/4。外面刷毛目。内面擦跡。				
		5、ＳＫ10。埴輪円筒か。粘・微・並。橙7.5YR6/6。外面刷毛目。内面擦跡。全体消耗。				
		6、ＳＫ10。銅製角釘。使用釘であったらしく、全体に曲る。				
		7、ＳＫ10。土師器種不明。粘・微・硬。にぶい赤褐5YR5/4。器種不明。全体に消耗。				
		8、ＳＫ11。土師器の小形甕か。陶・粘・含・並。にぶい橙7.5YR7/4。全体に消耗。				
		9、ＳＫ12。軟質陶器不明。粘・微・軟。浅黄2.5Y7/3。器種不明。全体に消耗。				19・20世紀。
		10、ＳＫ13。土師質土器皿。粘・微・硬。にぶい橙7.5YR7/4。全体に消耗。				11世紀頃か。
		11、ＳＫ14。磁器碗。磁胎・なし・締。内外面に染付施文。そのほかは白磁釉掛かる。				19世紀前半。
		12、ＳＫ15。土師器坏か。粘・微・並。橙7.5YR7/6。全体に消耗している。				
		13、ＳＫ16。埴輪円筒。粘・陶・微・並。橙7.5YR6/6。全体に消耗・外面刷毛目。内面擦跡。				
		14、ＳＫ24。縄文深鉢。粘・微・硬。にぶい赤褐2.5YR5/4。縄文堀ノ内か弥生前期か。内面磨耗。				
		15、ＳＫ26。不明。粘・微・並。にぶい橙7.5YR6/4。全体に消耗顕著。				
第63図1～ 13 写－70	軟質陶器・土師質土器・埴輪	1、Ｉ９－374耕。土師質高坏脚部。粘・微・軟。明赤褐2.5YR5/6。消耗顕著。				
		2、Ｈ７－46耕。土師質土器皿。粘・含・硬。浅黄橙10YR8/4。内外面に回転条痕。				14～16世紀。
		3、Ｈ７－46耕。土師質土器皿。粘・微・硬。にぶい橙7.5YR7/4。内外面に回転条痕。				13～16世紀。
		4、Ｉ９－374耕。土師質土器皿。粘・微・並。にぶい橙7.5YR7/4。底面に糸切。消耗あり。				14世紀。
		5、Ｉ９－33。土師質土器皿。粘・含・硬。にぶい赤褐2.5YR5/4。底面に糸切。消耗あり。				14・15世紀。
		6、Ｈ７－29耕。須恵器か軟陶か不明。陶・微・軟。灰白7.5Y7/1。消耗顕著。				
		7、Ｈ７－46耕。軟質陶器焙烙。粘・微・軟。灰7.5Y7/1。内耳の耳部片。消耗あり。				19・20世紀。
		8、Ｉ９－374耕。埴輪円筒。粘・微・並。にぶい橙7.5YR7/4。消耗あり。外面に工具痕。				
		9、Ｈ７－86耕。軟質陶器壺。粘・微・並。暗灰N3/。内面回転痕。外面印文。火鉢かもしれない。				19・20世紀。
		10、Ｈ７－46耕。軟質陶器鍋。粘・微・硬。黒7.5Y2/1。内外面燻。色調3層。				
		11、Ｈ７・８耕。埴輪円筒。粘・陶・微・硬。橙2.5YR6/6。色調3層。内外黒色燻かかる。				18・19世紀。
		12、Ｈ７－86耕。埴輪円筒。粘・陶・微・硬。にぶい橙7.5YR7/4。全体に消耗顕著。外面刷毛目。				
		13、Ｈ７－86耕。埴輪円筒。陶・微・硬。にぶい橙7.5YR7/4。内外細刷毛目。色調3層。				細刷毛目。

菅塩西両台遺跡

図番号 写真番号	種 器形	出土位置 主記内容	量目(cm) 残存状態	胎土・焼成・色調と摘要	備考
第75図1～ 7 写－71	鉄製品・縄文・埴輪	1、ＳＫ26埋土。製鉄滑車か。戸などの滑車に見える。薄く表面剝落す。円形中央に小孔あり。			洋鉄か。
		2、Ｐ31埋土。縄文壺形か。粘・含・硬。にぶい橙7.5YR7/4。外面縄文施文。内面擦跡。			
		3、トレンチ、縄文深鉢。粘・微・繊維含・並。にぶい橙7.5YR6/4。内面に研磨あり。			
		4、Ｄ４－135表採。縄文深鉢。粘・微・繊維含・並。橙7.5YR6/6。外面に施文。色調3層。			
		5、Ｄ４－74耕作土。縄文深鉢。粘・微・並。黄橙10YR7/3。他に1片あり。外面縄文施文。			
		6、Ｄ４－173耕。埴輪円筒。粘・陶・微・並。にぶい橙5.0YR7/4。内・外素文。色調3層。			素文。
		7、Ｄ４－135表採。埴輪円筒。粘・微・軟。橙にぶい橙4/6。内外面素文。色調3層。			素文。
第76図8 ～19 写－71	羽口・鉄滓・土師質土器・土師器・青磁・白磁	8、試掘。羽口。粘・含・締・外面硅化あり。割れ口にスサ見える。縦断面は全体に酸化気味。			中世。
		9、試掘。羽口。粘・含・締・外面硅化あり。割れ口にスサ見える。縦断面は全体に酸化気味。			中世。
		10、ＳＫ70埋土。椀形鉄滓。二重鉄滓で接点は鎔着に見える。欠損部は旧か調査時が不明。			中世。
		11、Ｅ５区表採。再用加工円板。十能瓦片の再利用。粘・微・並。色調は外面燻。芯黄橙の3層。			20世紀か。
		12、土塁北。土師質土器皿。粘・微・硬。にぶい橙YR7/4。体部外面中位に轆轤目あり。			17～20世紀。
		13、土塁北埋土。土師質土器皿。粘・微・硬。にぶい黄橙10YR7/3。内・外面に回転条痕あり。			15・16世紀。
		14、土塁北埋土。青磁碗。釉調オリーブ色。外面に鎬手蓮弁の劃花文あり。釉調暗い。竜泉系。			13世紀。
		15、土塁北。土師器甑。粘・微・硬。橙2.5YR6/6。底面の小孔部で6・7世紀頃の製品か。			6・7世紀か。
		16、ＳＤ34埋。白磁小碗。磁胎・なし・締、染付は見えないが、近世磁器染付の小碗片か。			近世か。
		17、ＳＤ33トレンチ3、羽口。外面は硅化。割れ口にスサ見える。断面は全体に酸化気味。			中世。
		18、ＳＤ33$_{No}$33。羽口。外面は硅化。割れ口にスサ見える。断面は全体に酸化気味。			中世。
		19、ＳＤ33$_{No}$157。羽口。外面は硅化。割れ口にスサ見える。断面は全体に酸化気味。			中世。
第77図20 ～42 写－71	羽口・壁体・鉄滓	20、ＳＤ33トレ3。羽口。外面は硅化。割れ口にスサ見える。断面は全体に酸化気味。			中世。
		21、大溝フク土$_{No}$21。羽口。外面は硅化。割れ口にスサ見える。断面は全体に酸化気味。			中世。
		22、ＳＤ33他。羽口。外面は硅化。割れ口にスサ見える。断面は全体に酸化気味。			中世。
		23、ＳＤ33。壁体か。全体硅化。片側に茶褐色の未硅化部があり壁体部の旧部か。植物圧痕。			中世。
		24、ＳＤ33$_{No}$164。鉄滓。椀形の小塊に見え、重い。そのためか茶錆生じる。			中世。
		25、ＳＤ33トレ2。不整形重い鉄滓。炉底痕不明瞭である。			中世。
		26、ＳＤ33$_{No}$100。不整形重い鉄滓。裏面に炉底状痕跡あり。2重の鉄滓の破片か隙間あり。			中世。

図番号 写真番号	種 器形	出土位置 主記内容	量目(cm) 残存状態	胎土・焼成・色調と摘要	備考
第77図27～31 写－71	鉄滓	27、ＳＤ33No157？。重い鉄滓。酸化気味の赤褐錆が付着。炉底痕不明瞭で凹凸多い。			中世。
		28、Ｄ・Ｅ５区ＳＤ33。軽い鉄滓。表面に白色鉱物（石英）鎔着。裏面に炉底痕あり。			中世。
		29、ＳＤ33No164。不整形の鉄滓。炉底痕不明瞭。極めて軽く。硅化物を主とする。			中世。
		30、ＳＤ33。不整形の鉄滓。炉底痕不明瞭。軽く、硅化物多い。			中世。
		31、ＳＤ33No55。椀形二重の鉄滓。鎔結弱い(？)ためかもろく、欠損は調欠。重い鉄滓。			中世。
第78図32～42 写－71・72	鉄滓	32、ＳＤ33。椀形二重の鉄滓。やや重い鉄滓。炉底痕明瞭。２枚の鉄滓鎔着。重さ最大の例。			中世。
		33、ＳＤ33。椀形二重の鉄滓。やや重い鉄滓。炉底痕あり。２枚の鉄滓鎔着。完存。			中世。
		34、ＳＤ33No169。椀形二重の鉄滓。並の重さ。炉底痕あり。２枚の鉄滓鎔着。部分的調査欠損。			中世。
		35、ＳＤ33No189。椀形二重の鉄滓。硅化物を主とする中で最小の椀形。軽い。炉底痕あり。			中世。
		36、ＳＤ33。椀形二重の鉄滓。やや重い。鎔解触媒か石英（白色鉱物）鎔着。石英少し溶ける。			中世。
		37、ＳＤ33。椀形二重の鉄滓。やや重い。鉄滓の重なり目不明瞭。鎔着。炉底痕あり。			中世。
		38、ＳＤ33。椀形鉄滓。やや重い。炉底痕あり。			中世。
		39、ＳＤ33No175。椀形鉄滓。極めて軽い椀形滓の例。炉底痕あり。			中世。
		40、ＳＤ33。椀形鉄滓。やや重い。鎔解触媒か石英（白色鉱物）鎔着。石英少し溶ける。炉底痕。			中世。
		41、ＳＤ33。椀形鉄滓。やや重い。椀形中央凹みの例。炉底痕あり。			中世。
		42、ＳＤ33。椀形鉄滓。並の重さ。椀形中央凹みの例。炉底痕あり。			中世。
第79図43～79 写－72	鉄滓・小鍛冶関連遺物	43、ＳＤ33。椀形鉄滓。並の重さ。工具痕らしき跡。全体がそれにより、よじれている例。炉底痕。			中世。
		44、ＳＤ33。椀形鉄滓。並の重さ。中央凹み最小の例。炉底痕明瞭。			中世。
		45、ＳＤ33。椀形鉄滓。並の重さ。最大径の石英（白色鉱物）を含む例。石英少し溶ける。炉底痕。			中世。
		46、ＳＤ33。チップ黒紫。厚さ平均的に平ら。黒紫を呈す。現代刃物打のスケールより厚い。			中世。
		47、ＳＤ33。チップ黒紫。厚さ平均的に平ら。黒紫を呈す。現代刃物打のスケールより厚い。			中世。
		48、ＳＤ33。チップ黒紫。厚さ平均的に平ら。黒紫を呈す。現代刃物打のスケールより厚い。			中世。
		49、ＳＤ33。チップ茶褐。厚さ不揃い。色調茶味強い。第109図を見よ。			中世。
		50、ＳＤ33。チップ茶褐。厚さ不揃い。色調茶味強い。表面に微小穴あり。第109図を見よ。			中世。
		51、ＳＤ33。チップ茶褐。厚さ不揃い。色調茶味強い。第109図を見よ。			中世。
		52、ＳＤ33。黒紫硅化物玉状。玉状で、他の玉状物に黒紫は少ない。硅化分少ない感じ。			中世。
		53、ＳＤ33。淡灰白硅化物玉状。玉状歪み小穴あり。硅化分強い感じ。			中世。
		54、ＳＤ33。淡灰白硅化物玉状。玉状歪み小穴あり。硅化分強い感じ。			中世。
		55、ＳＤ33。紡錘状小形。形はさまざまであるが、この大きさ多く、重さも軽～重いまであり。			中世。
		56、ＳＤ33。花崗岩片。篩分け採集できた中の最大の例。表面河原石面。			中世。
		57、ＳＤ33。花崗岩片。硅化物鎔着。トーンがそれである。金床材か。			中世。
		58、ＳＤ33No11。鉄製鏃。茶褐錆。有柄尖根で、茎を欠く。鏃先は定角気味で、わずか鎬筋立つ。			中世。
		59、ＳＤ33No１。鉄製鏃。茶褐錆。上・下端を欠く。箆被長く大形鏃か。			中世。
		60、ＳＤ33No14。鉄製鏃。茶褐錆。50ｇ弱（土壌錆を含むが）を計り大形鏃か。錆割れ少ない。			中世。
		61、ＳＤ33No61。鉄製鏃か。茶褐錆。多少曲りがあり、使用済の鏃か。			中世。
		62、ＳＤ33。鉄製鏃か。紫茶錆。錆色良く。錆割れも少なく、精鍛を思わせる。			中世。
		63、ＳＤ33。鉄製鏃か。茶褐錆。茎を思わせるが種は不明瞭。少し曲り、使用済か。			中世。
		64、ＳＤ33No９。製鉄不明種。紫茶錆。錆色良く。良鉄を思わせる。先端部は旧状残る。			中世。
		65、ＳＤ33。鉄製不明種。茶褐錆。先端は旧状残る。下方は扁平な形となる。			中世。
		66、ＳＤ33－163。鉄製不明種。茶褐錆。旧状残るが製品種不明。釘のようでもない。少し曲る。			中世。
		67、ＳＤ33－59。鉄製不明種。茎部のようである。少し曲り使用済らしい。			中世。
		68、ＳＤ33No33。鉄製小刀か。上半を失ない。種は不明瞭であるが茎部である可能性大。茶褐錆。			中世。
		69、ＳＤ33No28。製鉄板状片。鍛造物の一部。茶褐錆。四周は旧状。			中世。
		70、ＳＤ33No127。鉄製小鉄片。茶褐錆。鍛造物の一部。少し錆ぶくれあり。			中世。
		71、ＳＤ33No２。鉄製小鉄片。小割れ入り、鋳鉄か。旧時欠損鉄片を再加工したらしい。			中世。
		72、ＳＤ33No28。鉄製小鉄片。錆ぶくれの様子から鍛鉄明瞭。本来の種不明。			中世。
		73、ＳＤ33。鉄製小鉄片。錆ぶくれの様子から鍛鉄明瞭。本来の種不明。			中世。
		74、ＳＤ33No52。鉄製小鉄片。錆化の様子から鍛鉄。本来の種不明。			中世。
		75、ＳＤ33No52。鉄製小鉄片。錆化の様子から鍛鉄。本来の種不明。			中世。
		76、ＳＤ33。小鉄塊。製品となったことがあるのか不明。			中世。
		77、ＳＤ33。鉄鍋。四周は旧時の欠損。やや黒味があり、一方で茶褐錆もまじえる。細かな深い錆割れが入り、鋳鉄。曲率と器の傾きから、25cm以上の直径の鍋片。			中世。 中世。
		78、ＳＤ33。土師質土器皿。粘・含・硬。にぶい黄橙10YR6/4。風化顕著。被熱あり。			11～16世紀。
		79、ＳＤ33No114。土師器か土師質土器、種不明。粘・含・並。風化顕著。			
第80図１～６ 写－72	縄文土器・陶器・土師質土器・軟質陶器	１、ＳＫ３埋。縄文深鉢、粘・微・硬。橙5YR6/6。外面縄文施文。内面磨あり。			
		２、ＳＫ４埋土。陶器碗・陶胎・微・締。にぶい橙5YR4/3。天目碗。内外鉄釉。美濃。			17・18世紀。
		３、ＳＫ４埋。土師質土器皿。粘・微・硬。橙7.5YR。口縁部肥厚す。消耗気味。			14～16世紀。
		４、ＳＫ４埋。土師質土器皿。粘・微・並。にぶい橙5YR6/4。消耗気味。大形カワラケか。			14・15世紀。
		５、Ｆ５－26。土師質土器皿。粘・含・硬。にぶい橙7.5YR7/4。消耗気味。近世以降。			17～20世紀。
		６、Ｆ５－26。軟質陶器内耳鍋か。粘・微・硬。褐灰7.5YR6/1。体部片。近世以降焙烙か。			19・20世紀。

▼ＳＤ33の埋土出土のチップスを水洗篩い抽出したところ、黒茶色のチップス378点－1.26g、茶褐色のチップスとその疑似718点－3.36gを得た。抽出土層は、第 72 図の注記番号４・５からである。下図は、そのうち各々、200点、合計400点を集積した結果である。目的は、先ず、黒紫色チップスは、四酸化鉄を、茶褐色は三酸化～二酸化鉄を意識し、前者は、鍛造過程での鋼材の使用もしくは、製品成形後期のチップスを考えるために、後者は、鍛造過程の製品成形前期のチップスもしくは、卸金過程を考えるうえで必要なため、分別した。前者は、チップスのみを抽出できたと考えているが、後者は、その疑似も多く含まれていると見られるが８・10×ルーペを使用しての判断である。集計は、図化の前段作業として、全体の200点を採集地点別袋単位から各々を任意抽出し、地点的な傾向が生ずることを防ぎ、平均化することに努めた。さらにマイクロメーター判定値を一表化し、それに基づいて集計図を作成した。集計図は、ミクロン単位を0.1㎜単位に改めて一目盛を刻んだ。つまり0.1㎜は0.1～0.19㎜を扱い。0.2㎜～0.29㎜までの範囲の個体である。

集計図作成の結果、黒紫チップス類は0.2～0.29㎜にピークがあり、後者より薄い。茶褐チップス類は、0.4～0.49㎜にピークがあり、前者より厚い傾向がある。両者を合せて考えれば、各々製作過程の差によって生じた推定される。

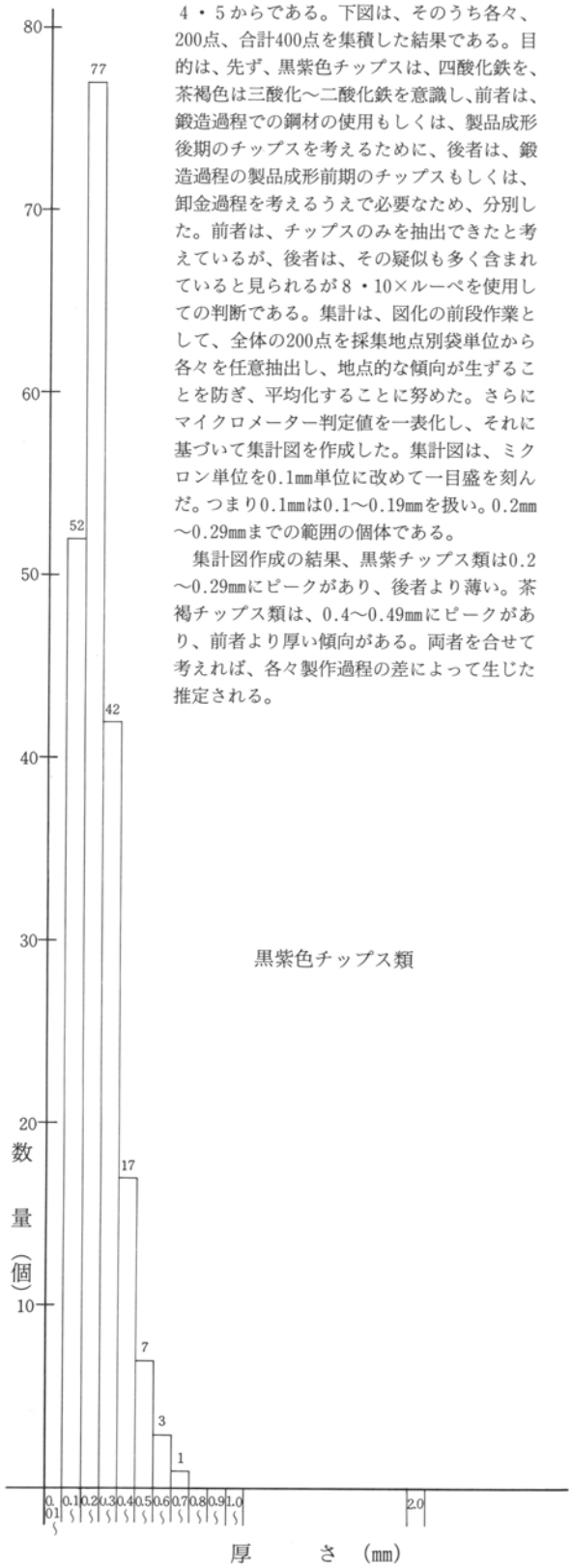
付図は、厚さの傾向を知るための集計図であるが、形状を肉眼で観察すれば、黒紫色チップス類の各々は、平均的に厚さが薄い、茶褐色チップス類は、厚さに不均等、不整な形状の個体が多く含まれており、むろん中間的な個体も存在している。

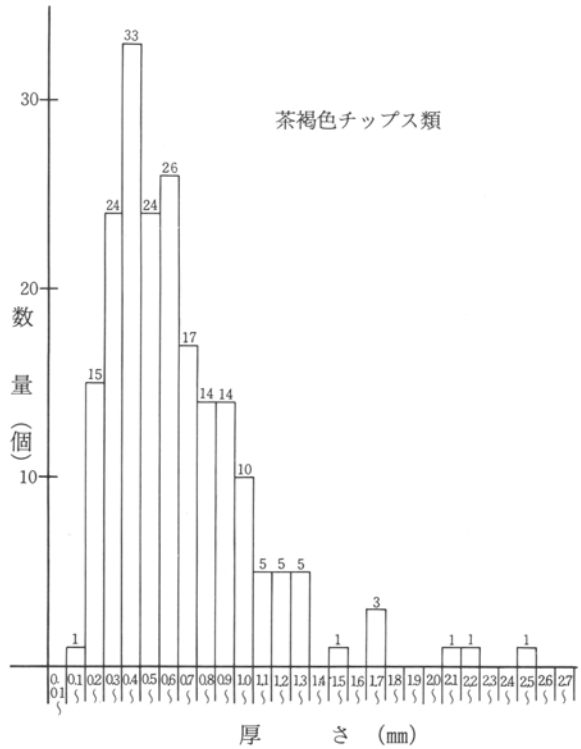
篩分け中、数量について見れば、200メッシュの篩いの目からこぼれたチップも多く存在していたと、篩い分けられ集積された200メッシュ以上の大きさの砂を含む粒子中にも、拾い出せなかった個体も相当存在していたと判断され、下図をもって総てではない。

篩分の結果、得られた個体はチップスの外に、湯玉様の球体があり、白灰色を呈する同図53・54、黒紫色を呈する52があり、前者が軽く、後者が重い。また花崗岩が製作台であったらしく、同図56・57などがあり、特に57には鉄滓と同質の硅化物が付着し、炉に近接した個所に花崗岩が存在したことが左証される。また鉄滓中に石英が溶けかかった状態で付着している部分もあり、それらについては、第78図36のように引出し線を設け白色鉱物と補注してある。

鉄製品製作に関連する遺物中の注意点は次のとおりである。羽口は、個体判別できず、任意抽出である。作図上は、割れ口などの程度、酸化・還元しているか知るためで、総じて酸化傾向多大であった。付着物質は、化学分析を参照されたい。送風孔の大きさに差異があり、再度確認済で実測の誤りではない。割れ口中にスサ入りの個体が大多数を占める。羽口の胎土は極めて軽い。

再生用原料に思える個体と鉄滓には思えない小鉄片を第79図58～77に掲げた。58・59・60・61は、鍛鉄であるが古代鉄を思わせる鍛えである。77鋳鉄で色は、茶味が強く、硬さも弱いと思われ、71も鋳鉄かもしれない。97は鍋片である。74・75は、再生用の原料鉄分・製錬工程で製作された鉄塊か、理解に苦しむ個体である。以上の原料に思える個体中、図化上の注意点は、欠損部についてである。調欠は調査時の欠損を、旧欠旧時の欠損を示す。欠損の表示中、鉄滓について、調欠とあるうちの多くは、地下水が起因してなのか、そうした性質を持つのか明確ではないが椀形鉄滓の周囲はそうした消耗の個体が多く、表・裏面のボロつきが目立つ。





第109図　Ｆ４・５区ＳＤ33出土のチップス厚さ集計図

成塚永昌寺遺跡

図番号 写真番号	種 器形	出土位置 主記内容	量　目(cm) 残存状態	胎土・焼成・色調と摘要		備考
第90図 1 写－73	埴輪 形象	1号墳NO 6 (周堀埋土)	頭部。 高さ10.8。	粘・微・並。 明赤褐2.5YR5/6。	後頭部に細刷毛目後擦られる。頸部玉飾。耳部耳飾。内部に接合痕。	細刷毛目。 赤色顔料。
同図 2 写－73	同 円筒	1号墳中央部	口縁部片。	粘・微・並。 明赤褐5YR5/8。	内面細刷毛目後擦跡。外面擦跡・無文。少し消耗。色調3層。	無文。 細刷毛目。
同図 3 写－73	同 円筒	1号墳NO34	口縁部片。	粘・微・軟。 明赤褐2.5YR5/6。	内面細刷毛目跡擦跡。外面擦跡・無文。少し消耗。色調3層。	無文。 細刷毛目。
同図 4 写－73	同 円筒	1号墳NO261	口縁部片。	粘・微・並。 橙2.5YR6/8。	内外ともに無文。少し消耗気味。色調は3層。	無文。
同図 5 写－73	同 円筒	1号墳NO43	口縁部片。	粘・含・並。 橙5YR6/8。	内面に細刷毛目、外面無文。少し消耗気味。色調は3層。	無文。
同図 6 写－73	同 朝顔	1号墳NO167	体部片。	粘・微・軟。 橙5YR6/8。	内外面無文、擦跡。突帯剝落あり。色調は3層。	無文。
同図 7 写－73	同 朝顔	1号墳NO207	体部片。	粘・含・並。 橙2.5YR6/8。	内外面細刷毛目。内面擦跡。割れ口に突帯接合痕。色調3層。	細刷毛目。
同図 8 写－73	同 朝顔	1号墳中央部 フク土	体部片。	粘・微・並。 橙2.5YR6/8。	内面細刷毛目。外面無文。全体に消耗。色調単調。	無文。 細刷毛目。
同図 9 写－73	同 朝顔	1号墳	体部片。	粘・微・軟。 橙5YR6/6。	内外無文。全体に消耗気味。色調は3層。透あり。	無文。 透あり。
同図 10 写－73	同 円筒	1号墳中央部 フク土	体部片。	粘・含・軟。 橙5YR6/6。	外面に細刷毛目あり。その後擦跡。内面擦跡。色調3層。透あり。	細刷毛目。 透あり。
同図 11 写－73	同 円筒	1号墳NO177	体部片。	粘・陶・微・硬。重い。 赤褐2.5YR4/8。	内外面無文。下地に細刷毛かかるらしい。消耗。	無文。 細刷毛目か。
同図 12 写－73	同 円筒	1号墳NO104	基部片。	粘・微・軟。 橙7.5YR6/6。	内外面消耗顕著。外面細刷毛目と擦跡。内面擦跡。色調3層。	細刷毛目。
同図 13 写－73	同 形象	1号墳中央部 十同NO 4他	基部片。	粘・陶・含・硬。重い。 赤褐10R5/4。	円筒にしては細く、形象か。外面細刷毛目。内面擦跡。色調3層。	細刷毛目。
同図 14 写－73	同 円筒	1号墳NO35他	基部片。	粘・陶・微・並。重い。 橙2.5YR6/6。	内外面無文。内外面擦跡。全体に消耗。色調3層。	無文。
	須恵器・土師器・土師質土器	15. 1号墳NO285。須恵器甕体部片・陶・含・締。黄灰YR5/1。平行叩。内面擦消。自然釉。 16. 1号墳西端。土師器杯。粘・含・並・橙7.5YR6/6。外面横撫が上半に。内面に削。 17. 1号墳NO212。土師器壺か、粘・陶・微・並。にぶい橙7.5YR6/4。外下方に黒色吸炭部。 18. 1号墳NO124。土師器壺か、粘・微・並・橙5YR6/6。全体に消耗。整形不明瞭。 19. 1号墳NO277。土師器壺か、粘・微・硬・橙5YR6/6。外面篦削。内面擦整形。 20. 1号墳NO 6。土師質土器皿。粘・微・硬・明黄褐10YR7/6。底面糸切。内面轆轤目。				太田窯跡か。 6世紀。 6世紀。 6世紀。 6世紀。 11～16世紀。
第93図 1 ～9 写－73	埴輪・須恵器・瓦	1. B3－399NO 1。埴輪円筒。粘・微・軟。にぶい橙7.5YR7/4。内面指圧痕。外面無文。透あり。 2. B3－380NO27。須恵器坏。陶・微・締。灰7.5YR6/1。針状物質多く入り。埼玉北部製か。 3. C3－361－3号墳。須恵器坏。陶・含・軟。灰白2.5Y7/1。糸切右回転。周辺回転篦。笠懸窯製。 4. C3－361－3号墳。須恵器埦。陶・含・軟。灰白2.5GY8/1。内面轆轤目。笠懸窯跡群製。 5. C3－361NO16。須恵器埦内黒。粘・微・軟。にぶい橙5YR7/4。外面消耗とハゼ。内面研磨。 6. C3－361－3号墳。須恵器埦内黒。粘・微・軟。にぶい橙7.5YR7/4。内面研磨と黒色処理。 7. C3－361－3号墳。男瓦。粘・陶・微・硬。灰白7.5Y7/1。内面縦撫あり。外面素文。笠懸窯か。 8. C3－361－3号墳。男瓦。陶・含・締。灰N4/。外面回転撫。内面糸切痕。側部面取1回。 9. B3－380－NO43。男瓦。陶・微・含・硬。灰白5Y7/2。外面細縄整形後擦か。笠懸窯製か。				無文。 9世紀前半。 8世紀後半。 8世紀終末。 8世紀。 8世紀。 8世紀。 7・8世紀。 8・9世紀。
第97図 写－73	陶器・軟質陶器・須恵器	1. 1号井戸。陶器片口か。陶・なし・締。灰白5YR7/1。外面下方篦削露胎部あり。胎土灰色。 2. 1号井戸。軟質陶器焙烙。粘・微・硬。にぶい黄橙10YR7/2。内耳焙烙底部片。19・20世紀。 3. 1号井戸。陶器擂鉢。陶・微・並・暗赤褐10R3/2。(釉)。右回転糸切。鉄釉施釉。卸目12本。 4. 13土坑。須恵器坏。陶・微・締。灰7.5Y6/1。内部にスサ入。金雲母含む粗質粘土入る。				18・19世紀。 小泉焼か。 美濃。 北埼玉か。
第98図 1 ～16 写－73	埴輪・陶器・軟質陶器・磁器	1. 中区北溝。埴輪円筒か。粘・微・軟。橙2.5YR7/6。全体に消耗。無文。色調3層。 2. 西区溝。瓦当部。粘・微・並。灰白5Y7/1。表面に型押文様あり。色調3層。小泉焼か。 3. 西区旧河道。埴輪円筒。粘・微・軟。橙7.5YR7/4。外面に粗な太い刷毛目あり。内面擦跡。 4. 東区旧河道。陶器・灯火皿。陶・なし・締。暗赤褐5YR3/4。濃淡は釉厚。鉄釉。 5. 旧河道。軟質陶器鍋。粘・微・硬。灰白5Y8/2。外面凍ハゼ。色調5層。内外回転痕。 6. 西区南溝。埴輪円筒。粘・微・硬。にぶい橙7.5YR。無文。外面工具擦跡。内面指圧痕。 7. 西区南溝。埴輪同筒。粘・陶・微・硬。にぶい橙7.5YR7/4。外面細刷毛目。消耗。色3層。 8. 西区南溝。磁器碗。磁胎・なし・締。外面染付草花文。そのほか白磁釉。山呉須。伊万里系。 9. 西区南溝。磁器碗。磁胎・なし・締。外面染付草花文。他白磁釉。内面細貫入。伊万里系。 10. 西区南溝。磁器碗。磁胎・なし・締。外面染付草花文。他白磁釉。呉須の色明るい。伊万里系。 11. 西区南溝。磁器皿。磁胎・なし・締。底面篠笥底の一部除き白磁釉。伊万里系。				無文。 十能瓦。 太刷毛目。 18・19世紀。 色調5層。 無文。 細刷毛目。 18世紀。 18世紀。 18世紀。 18世紀。

図番号 写真番号	種 器形	出土位置 主記内容	量目(cm) 残存状態	胎土・焼成・色調と摘要	備考
第98図1 ～16 写－74		12. 西区南溝。磁器皿。磁胎・なし・締。呉須はベロ藍・内外面施文。高台端部のみ無釉他自磁釉。 13. 西区南溝。磁器深皿。磁胎・なし・締。呉須精美。口縁部片もあり。白磁釉は青白。伊万里系。 14. 西区南溝。磁器花生瓶。磁胎・なし・締。呉須精美。淡青色。鳳凰。牡丹。瓔珞文。伊万里系。 15. 西区南溝。陶器燵燭。陶・なし・締。内外面透明釉。内面下方無釉。内外面轆轤目あり。 16. 西区南溝。陶器皿。陶・なし。締。内面透明～淡緑釉厚く施釉。内面劃文あり。瀬戸。			19世紀後半。 17世紀後半。 19世紀前半。 18・19世紀。 17～19世紀。
第99図17 ～21 写－74	陶器・ 軟質陶 器	17. 西区南溝。陶器瓶。陶胎・なし・締。外面透明地白。茶釉施文あり。内面1部除き無釉。 18. 南溝。陶器便器。陶胎・微・締。施釉下化粧土。施文ベロ藍。各面に施文あり。他片あり。 19. 西区南溝。陶器鉢。陶胎・微・締。胎土灰色。外面緑釉ほか長石釉調。釉調は点描濃部分。 20. 西区南溝。陶器鉢。陶胎・微・締。胎土灰色。鉄釉。柿釉。内・外面轆轤目多し。粘土合痕。 21. 西区南溝。軟質陶器。粘・微・硬。灰5Y4/1。体部外面下方篦疑似。内面内耳。小泉焼か。			19世紀。 20世紀前半。 19・20世紀 19・20世紀。 19世紀か。
第100図22 ～28 写－75	軟質陶 器・瓦 ・石硯 ・鐘	22. 西区南溝。軟質陶器焙烙。粘・含・硬。にぶい黄橙10YR7/4。内外面回転痕。小泉焼か。 23. 西区南溝。瓦、女瓦。陶・微・締。灰N3/。表寄木痕なし。裏格子目。笠懸窯跡群製。 24. 西区南溝。桟瓦軒か宇瓦か不明。陶・粘・微・硬。表面雲母粒あり銀燻瓦か。 25. 西区南溝。瓦当部。粘・微・並。変形唐草施文あり。小泉焼十能瓦。 26. 西区南溝。瓦。粘・含・軟。灰黄2.5Y7/2。表面撫整形。小口擦痕。小泉焼十能瓦。 27. 西区南溝。石製硯。粘板岩。黒色。側部鋸挽後研磨。表面にハゼ、使用磨耗あり。 28. 西区南溝。鐘。銅素材で半鐘か、隆帯横一条、縦二条。被熱あり。直径からすると半鐘か。			18～20世紀。 8世紀中頃。 19～20世紀。 20世紀。 20世紀。 19～20世紀。 17～20世紀。
第101図1	軟陶	1. 西区撹乱一括。軟質陶器不明。粘・なし・並。文様型押。胎土シルト質。県外搬入。			19・20世紀。

成塚石橋遺跡Ⅲ

図番号 写真番号	種 器形	出土位置 主記内容	量目(cm) 残存状態	胎土・色調・焼成と摘要		備考
第108図1 写真図版76	石製 石匙	3号溝	長6.8。	上方に摘部を作り出す。剝離は、図表面側の加工に大きな剝離が、裏面は丁寧である。		
図2 写－76	土師質 土垂	1001表採	長6.1＋α。 径2.0。	粘・陶、含、並。 にぶい黄橙3/4、10YR。	片端は旧時欠損。表面は少し風化による消耗あり。器面に成形時の凹凸あり。	
図3 写－76	石製有 孔円盤	1001－1番地表採	長径3.3。	紐穴2穴あり。図裏面側が穿孔穴大。2穴。側部の面削は荒く、研磨荒削り面の角ばりを残す。表・裏は荒研磨のままである。裏面の拓影中の下端は欠損でなく、荒い削面で凹む。		滑石。
同図4 写－76	埴輪形 象部分	1001－1番地表採	長径4.5。	粘、微、軟。軽い。 橙6/8、2.5YR。	埴輪形象の鈴部分か。中央に切り込みがあり、その周囲に竹管状の工具により円形の刺突文あり。断面図割れ口の上方寄りは接合面。全体的に消耗強い。	
同図5 写－76	須恵器 甕	2号溝南壁部分	口縁部片。	粘・陶、含、軟。 灰。	外面に平行叩撫での凹みがあり、さらにその後の撫が加わる。全体的に粗質な胎土で、雑に見えるが、作調は丁寧。	
同図6 写－76	土師器 甕	7号土坑	口縁部片。	粘・陶、含、硬。	内外面に横撫痕あり。割れ口は古様でない。器肉の形状は9世紀の甕の口縁部に見える。	
同図7 写－76	土師器 甕	8号土坑	口縁部片。	粘・陶、微、硬。 橙5YR6/6。	内外面に横撫あり。外面体部下半は篦削あり。割れ口少し消耗ある。古墳時代土師器か。	
同図8 写－76	軟陶 焙烙	11号土坑	口縁部片。	粘、微、並。 明赤褐5YR5/6。	内外割れ口とも消耗大。内外面に横撫痕あり。焼成は芯部に吸炭があり3層気味。胎土は地方窯で小泉焼か。	19・20世紀。 小泉焼か。
同図9 写－76	軟陶 焙烙	3号溝№2	口縁部片。	粘、微、軟。 灰白7.5Y7/1。	内外割れ口とも消耗顕著。口縁端部を平らに整える。胎土は地方窯で小泉焼か。	19・20世紀。 小泉焼か。
同図10 写－76	軟陶 焙烙か	7号坑	底部片。	粘・陶、多、硬。 灰白7.5YR7/1。	色調と内面轆轤目の状態は、須恵器の大形埦底部か。しかしその裏面は、焙烙底面の凹凸に似る。割れ口は消耗している。	
同図11 写－76	軟陶 焙烙	4号溝	底部片。	粘・陶、含、硬。 黒褐。	底裏面は、焙烙独特の石目状の凹凸あり。内面に回転条痕あり。割れ口の消耗は少ない。胎土は小泉焼に見える。	19・20世紀。 小泉焼。
同図12 写－76	軟陶 焙烙	4号土坑	体部・底部片。	粘、微、軟。 橙7/6YR。7.5	消耗が顕著で体部か底部か不明。しかし胎土は軟陶であり、この地方の製品。	19・20世紀。
同図13 写－76	土師質 銭形	9号土坑	長さ2.1。 短辺1.3。	粘、微、並。 橙7.5YR6/6。	型押しの製品で片側に「銀磨常売」他方に「南鐐八十小判一両」と読め、銀座が銀磨、南鐐十六とすべきところが八十とあり、南鐐銀を形どる。欠損なく、少し消耗の痕あり。	

第７章　科学分析

第１章　菅塩西両台遺跡出土鍛冶関連遺物

小沢　達樹・大江　正行

１．はじめに

Ｅ４・５区出土の鍛冶関連遺物について、鉄の鍛造についても詳しい県工業試験場材料課福田俊二氏（金属組織）に相談した結果、中世前半の鉄に関し、基礎的な化学資料が少ない現状から比較を行なうことは困難との指導を受け、分析の内容を第78図36椀形滓中に含まれた白色異物は何か、第76図19羽口に銅が付着していないかの２点に目的を絞り、分析を化学課の小沢達樹氏に依頼した。本稿は、１を大江が、以下を小沢が記述、大江が考古学的な内容での補足をお願いした。

２．分析方法

分析にはＸ線回折装置とケイ光Ｘ線回析装置を用いた。分析条件は附図１・２に示した。

３．結果

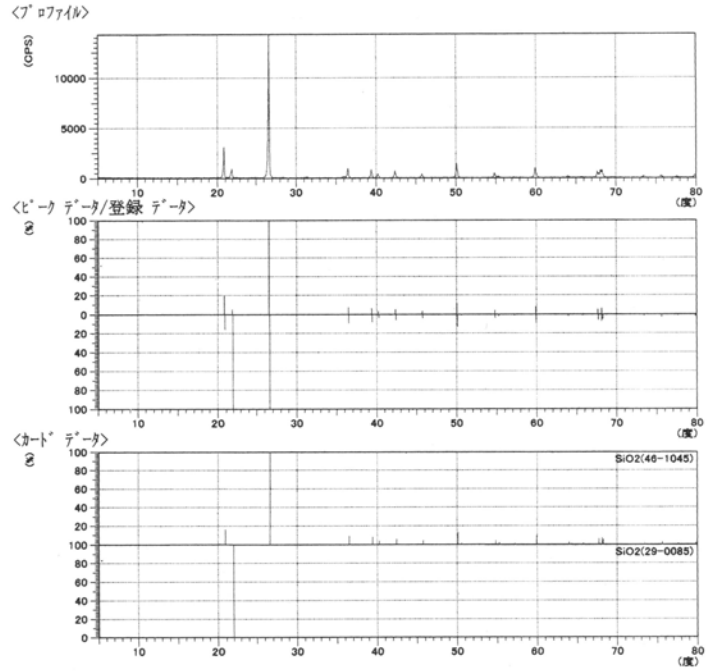
鉄椀形滓中の白色異物について、分析では石英と同定でき、主成分はSiO_2である。石英は精錬上にあってはガラス質となった不純物の溶解時に流動化など科学的反応をうながす素材となりうる可能性をもつものである。ただし白石（はくせき）の持つ宗教上の清浄、潔白などの意味あいからの行為については類例を持って考える必要性があろう。

羽口については、表面付近と羽口の胎土中との２ヵ所を比較するために定性分析した。その結果、両試料に銅は検出されなかった。 粘土中には、土器に含有されるSr, Rbなどが検出されている。 なお表面試料には鉄分が多かった。

附図１　鉄滓中の白色異物の分析（Ｘ線回折）

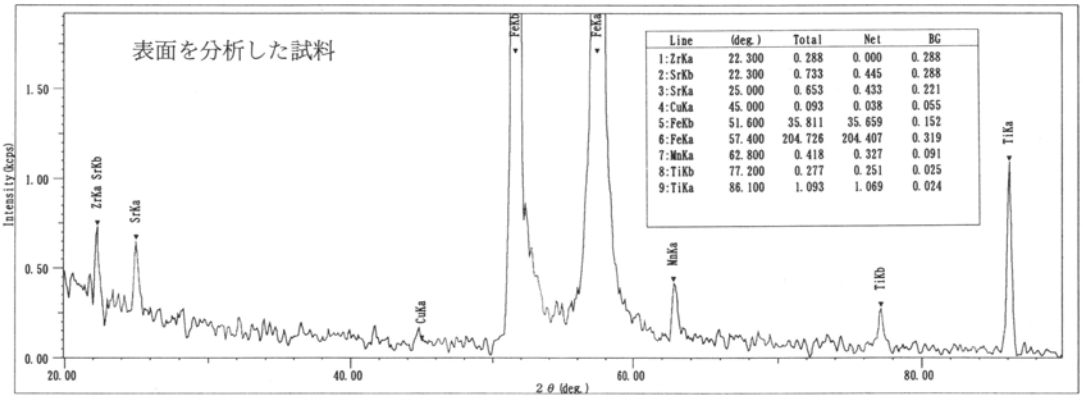
<未知データ>

ｸﾞﾙｰﾌﾟ　：irai
ﾃﾞｰﾀ　：bvunkazaiwhite
ﾌｧｲﾙ　：bvunkazaiwhite.PKR
ｻﾝﾌﾟﾙ　：
ｺﾒﾝﾄ　：
日付 & 時刻　：01-01-17 09:52:20



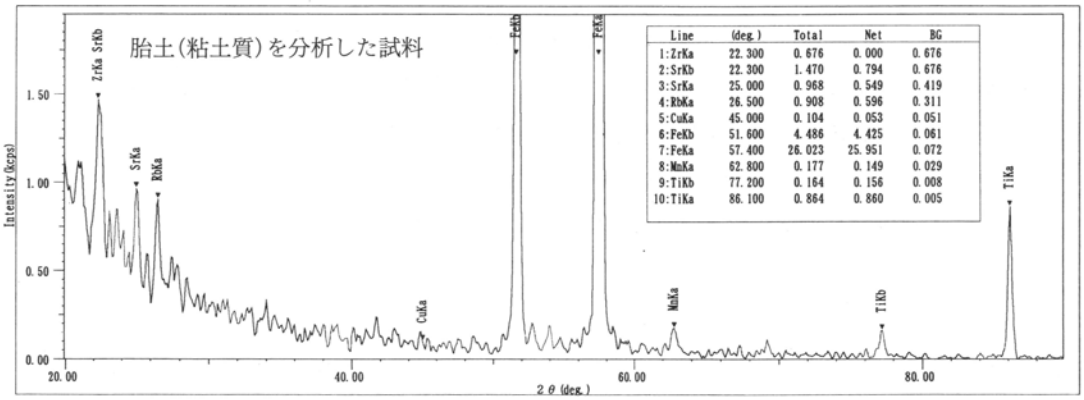
附図２　銅の分析（ケイ光Ｘ線分析）

試料名:bunkazai2　コメント:teiseiteiryou　測定日時:2001-01-17 13:56
分析グループ名:絞り10mm　絞り:10　スピン:する
チャネル:Ti-U　ターゲット:Rh(4.0kW) 40 kV,95 mA　フィルタ:なし　スリット:標準　アッテネータ:なし　分光結晶:LiF　検出器:SC　PHA:25-75
スキャン:連続　スキャン速度(deg./min.):100.0　ステップ角(deg.):0.100　フルスケール(kcps.): 1.919
スムージング方法:Savitzky&Golay 5x1　オートＢＧ:5x20　ピークキャッチ:5　6.000σ　表示範囲:(deg.)19.900-89.800



Line	(deg.)	Total	Net	BG
1:ZrKa	22.300	0.288	0.000	0.288
2:SrKb	22.300	0.733	0.445	0.288
3:SrKa	25.000	0.653	0.433	0.221
4:CuKa	45.000	0.093	0.038	0.055
5:FeKb	51.600	35.811	35.659	0.152
6:FeKa	57.400	204.726	204.407	0.319
7:MnKa	62.800	0.418	0.327	0.091
8:TiKb	77.200	0.277	0.251	0.025
9:TiKa	86.100	1.093	1.069	0.024

試料名:bunkazai2ura　コメント:teiseiteiryou　測定日時:2001-01-17 14:11
分析グループ名:絞り10mm　絞り:10　スピン:する
チャネル:Ti-U　ターゲット:Rh(4.0kW) 40 kV,95 mA　フィルタ:なし　スリット:標準　アッテネータ:なし　分光結晶:LiF　検出器:SC　PHA:25-75
スキャン:連続　スキャン速度(deg./min.):100.0　ステップ角(deg.):0.100　フルスケール(kcps.): 1.952
スムージング方法:Savitzky&Golay 5x1　オートＢＧ:5x20　ピークキャッチ:5　6.000σ　表示範囲:(deg.)19.900-89.800



Line	(deg.)	Total	Net	BG
1:ZrKa	22.300	0.676	0.000	0.676
2:SrKb	22.300	1.470	0.794	0.676
3:SrKa	25.000	0.968	0.549	0.419
4:RbKa	26.500	0.908	0.596	0.311
5:CuKa	45.000	0.104	0.053	0.051
6:FeKb	51.600	4.486	4.425	0.061
7:FeKa	57.400	26.023	25.951	0.072
8:MnKa	62.800	0.177	0.149	0.029
9:TiKb	77.200	0.164	0.156	0.008
10:TiKa	86.100	0.864	0.860	0.005

2．群馬県、成塚永昌寺遺跡の野外地質調査

古環境研究所

1．はじめに

大間々扇状地東部に位置する成塚永昌寺遺跡および菅塩東両台遺跡の合計５地点の地層について野外地質調査を行い、地層の堆積年代に関する資料を得ることを試みた。

2．地質層序

（１）　成塚永昌寺遺跡第１地点

調査事務所の裏に位置する本地点では、亜円礫からなる礫層の上位に黄灰色砂層（層厚24cm）の堆積が認められる（附図１）。礫層に含まれる礫の最大径は、165mmである。この砂層の上位には、氾濫原土と見られる黄灰色砂質土（層厚19cm）および灰褐色土（層厚19cm）、さらに暗褐色土（層厚21cm）が堆積している。

（２）　成塚永昌寺遺跡第２地点

中区に位置する本地点では、亜円礫からなる礫層の上位には、氾濫原土と考えられる黄灰色砂質土（層厚39cm）の堆積が認められる（附図２）、礫層に含まれる礫の最大径は、140mmである。この砂層の上位には、暗褐色土（層厚52cm）が堆積している。

（３）　成塚永昌寺遺跡第３地点

西区２号墳の周溝東断面では、周溝基底の上位に層厚25cmの黒褐色土を挟んで成層したテフラ層が認められる（附図３）。このテフラ層は、下部が層厚３cmの黄色粗粒火山灰層、上部が層厚２cmの桃色細粒火山灰層から構成されている。とくに下部には、最大径数mmの淡褐色軽石が多く含まれている。このテラフ層は、その特徴から1108（天仁元）年に浅間火山から噴出した浅間Ｂテフラ（Ａｓ－Ｂ、新井、1979）に同定されるものと考えられる。

（４）　成塚永昌寺遺跡第４地点

西区２号墳の周溝西断面では、周溝基底の上位に層厚６cmの黒褐色土を挟んで層厚６cmの暗褐色粗粒火山灰層の堆積が認められる（附図４）。この火山灰層には、最大径数mmの淡褐色軽石が多く含まれている。これらの軽石もその特徴からＡｓ－Ｂに由来すると考えられる。ただし第３地点で認められた様な一次堆積のＡｓ－Ｂの特徴を示す堆積構造は認められず、若干の撹乱を受けている可能性は否定できない。

（５）　菅塩東両台遺跡

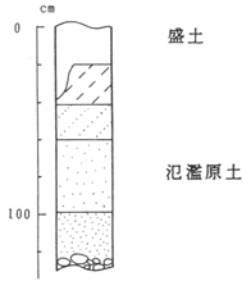
本遺跡では、亜円礫からなる礫層の上位に褐色砂質土（層厚13cm）の堆積が認められる（附図５）。礫層に含まれる礫の最大径は、113mmである。この砂質土の上位には、悪円礫を多く含む黒色腐植質粘質土（層厚33cm）が堆積している。この土層は層厚４cmの黄灰色粗粒火山灰層によって覆われている。このテフラには、最大径数mmの淡褐色軽石が含まれている。これらの特徴から、このテフラはＡｓ－Ｂに同定される。Ａｓ－Ｂの上位には、下位より黒色土（層厚35cm）、礫層（層厚13cm）、暗褐色砂質土（層厚74cm）が認められた。

3．まとめ

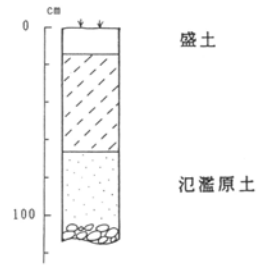
成塚永昌寺遺跡および菅塩東両台遺跡において野外地質調査を行った。その結果成塚永昌寺遺跡では、下位より亜円礫層、氾濫原土、砂質土、表土の連続が認められた。一方菅塩東両台遺跡では、下位より亜円礫層、

砂質土、腐植質粘質土、砂質土、表土の連続が認められた。また両遺跡において少なくとも礫層において少なくとも礫層の上位に、天仁元(1108)年に浅間火山から噴出した浅間Bテフラ(As－B)の降灰層準のあることが明らかになった。とくに成塚永昌寺西区2号墳周溝西断面の周溝覆土中には、As－Bの純層が認められた。

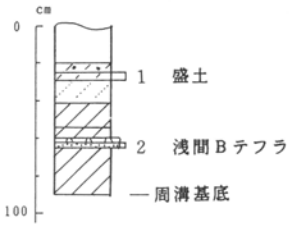
参考文献　新井房夫(1979)関東地方北西部の縄文時代以降の示標テフラ層．考古学ジャーナル，no.157，p.41-52.



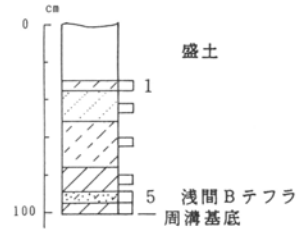
附図1　成塚永昌寺遺跡第1地点の土層柱状図



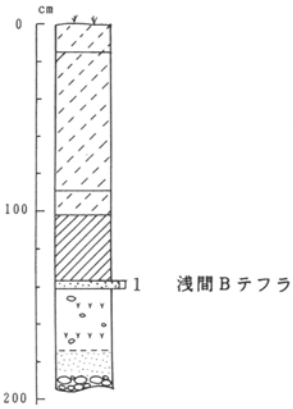
附図2　成塚永昌寺遺跡第2地点の土層柱状図



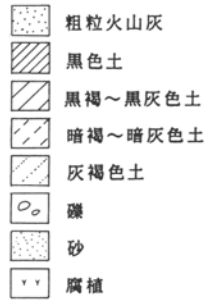
附図3　成塚永昌寺遺跡第3地点の土層柱状図



附図4　成塚永昌寺遺跡第4地点の土層柱状図



附図5　菅塩東両台遺跡の土層柱状図



数字は、テフラ検出分析の試料番号。

第8篇　まとめ

第1章　西長岡南遺跡の古墳について

調査では、部分的を含め9基を調査した。南接の菅塩西両台遺跡5・6区の北端と西長岡南遺跡境に地形の変換部があり、古墳群域の区界変換と推測され、以北に往時にあっては集密度の高い状態での古墳群が築造された。古墳の平夷化については生品飛行場建設や東武鉄道建設時など地元での情報を得てはいたものの一率短期に削土されたような確証を調査では得ることができず、17世紀前後の頃に古墳5・7と重複した溝ＳＤ47-2・48、古墳1・8と部分的に重なる18世紀頃の畑跡1の古い段階、古墳7と隣接の18世紀頃の畑跡2、古墳1面周堀中と古墳5の中央部を通過した18世紀中頃以前の道跡、各所から出土の中世遺物類など畑作などを含む土地利用を測推させる資料を得ている。そのための古墳の平夷化は古い時代から序々に進行していたのではないかと考えられる。

古墳の築造時期について、ここでは榛名山二ツ岳起源のHr-FPの降下時期を6世紀中頃、太田・金山窯跡群の須恵窯の量産初期をそれに続く前代と考えたい。まず古墳1のHr-FPの混入は周堀下部まで達し、第11図の赤彩（当地域の6世紀代住居跡出土の赤彩土師器の占める割り合は少ないので赤彩化は供献用の可能性がある）の坏の口縁部には形骸的な内斜口縁の存在などから6世紀中頃の築造を、古墳2は、周堀の下部までHr-FPとみられる軽石混入があるので降下以降の6世紀代、多量の石材は竪穴系の石室での使用であったと考えたい。古墳3は、Hr-FPの混入か周堀埋没上位であったので、降下に先行しての築造を、古墳4は、周堀の下層まで混入していたため、それ以降の築造を、古墳5は、周堀の最下部を除し上方に混入のため降下直前に近い頃の築造で、さらに第36図1～6の土師・須恵器のうち6は太田・金山窯跡群量産初期頃のシャープな掻目であり、土師器類はその頃に伴なっていてよい個体のため6世紀中頃の築造を推定しておきたい。主体部は、横穴式石室を想定した場合に石材が少な過ぎるため、竪穴系が推定されるが、その場合、県下でも遅い古墳例となろう。また埴輪類は色もどしの再焼がなされたと推定される酸化一還元・燻一酸化の橙一黒一橙色サンド互層の一群と異なり割れ口の芯まで単一気味に酸化した個体が主で　円筒の透しも隅丸半円形が占めること、突帯貼付に伴なう刷毛目の擦消幅が狭い点など出土埴輪例中では古様。古墳6は周堀を設けず、石室残骸も掘方埋土にHr-FPを混入するのか不明であったが第47図1土師器坏が直結したのであれば6世紀前半の築造となろう。古墳7・8・9は周堀下方までHr-FPの混入があり、降下後であるが6世代の築造と考えられる。

古墳被葬者の背景となる生産基盤については、遺跡の立地する藪塚台地と東方の八王子丘陵、太田金山丘陵の間に谷底平野と呼べそうな低地帯が笠懸町から太田市西～南西にかけ広がり、その谷奥と、丘陵中小支谷から相当な（同丘陵中の湧水量は、現在の県下で屈指）湧水量があり、急勾配の谷地田と異なり、少ない勾配は合理的な利水計画が可能であり、背景に大規模な水田経営を考えたい。さらに高密度の古墳群域、倒木痕の少なさ、群馬県の降雨量と樹木の関係から次のように考えている。高密度の古墳群は大規模な基域地を土地利用のうえから計画的に設置したためではないだろうか。計画性を持たざるを得なかった理由は周囲の台地上を畑作化をするためにである。証左は薄弱であるが1㎞の長きにわたり調査した結果、倒木痕が少な過ぎるのである。群馬県は年間降量、全国平均より約600ミリも少ない1200ミリの地帯で、さらに地表は火山灰土に覆われ、保水力は少なく、発達した樹木植性は、落葉広葉樹と浅根の樹木である。浅根は巨木になると倒木し易すいので倒木痕は示唆的であり、それを考慮し古墳群の周辺では畑作が相当行なわれていたの

ではないか、つまり水田・畑の両作で、その両者に意を注ぐことが、この地域の小首長の考え方ではなかったろうか。古墳群域を計画的に墓域地としても良い高密度の古墳分布は県下藤岡市白万地区、前橋市荒砥地区、勢多郡赤堀町などにあり、さらに小域での集中を榛名町奥原古墳群、利根郡沼田市奈良古墳群、吾妻郡四戸古墳群などに見えることができるが、農業生産は伝統性を継続させる特性を持っていて経営の方法は古代氏族、部族間に較差、質差があってよいはずであり、古代氏族の観点を子氏、名代などから捉えるようとする古代史側からの視点ばかりでなく、土地利用の形から考える視点も必要である。

第２章　菅塩西両台遺跡の大溝跡と鍛冶関連について

Ｅ４・５区で発見されたＳＤ33(大溝跡)・土器について10世紀末～11世紀前半頃の築造をAs-Bの埋没土位置から時期指定を行なった。この地帯では新田氏進出時点まで国司政治が展開していて末端においても郡単位で官衙機能の存続を表面上、考えなければならないのである。その一方地域氏族は武力増長していったと推測されるが、地域で具体的にはどのようであったのかは明瞭ではない。そうした氏族は、表面的には、公の組織に組み込まれていた時期でもあるので大溝の性格を官衙に結び付けて考えたのである。

ＳＤ33の埋土中位から、鍛冶関連遺物の出土があり、鍛冶場の使用物の廃棄を思わせる出土であった。時期に関し土塁北側から13・14世紀の中国磁器の出土、ＳＤ33の埋土下方に12世紀初期の降下と見られる浅間山As-Bの多量の混入を認めたため、鍛冶関連の遺物を、中世前半頃と特定した。その頃について江戸時代後期の冶金学者であった刀工水心子正秀は、江戸時代後期に、地金を製していた鉄山は全国に12・13個所、応永（15世紀初頭）以前には、３個所であったと言っている。正秀が鉄山と地金を製することに意欲を注いでいたのは古刀（古代刀を上古刀、鎌倉・南北朝を古刀、室町、戦国時代を末古刀）の地金を最良とし、江戸時代の武士層にあってもそのことが常識であったため、鎌倉時代の焼入れ反応にすぐれた（感度の良い鉄）鉄を得んがため、古刀復元を行なおうとしたのであった。しかし数十年をへて各地の刀工と自からの100人以上の弟子達によって築かれた復古刀の運動は、幕末の刀工達のスローガンともなり、数々の鉄の卸し方に工夫を生むがその実現には至らなかった。現在から、それらの刀工達が歩んだ結果を傍証点として捉らえれば、原料に使用の鉄は山砂鉄、川砂鉄、海砂鉄、餅鉄（鉱石原料）などがあり、いずれも良質の磁鉄鉱であった可能性がある。それは良刀を製作した鎌倉鍛冶の立地基盤の中世都市鎌倉は、周辺に第四紀以降の堆積土が至るところにあり、独特な砂鉄原料が得られたのではないかということを私的に考えている。しかし鎌倉時代には五ヶ伝の地と各地での製作刀は、現在でも良刀とされ、感度の良い鉄が使用され、地金の製作技法が末古刀以降の鉄と異なっていることが知られるので他方で製鉄方法そのものが問題となる。そのため本例は鎌倉・南北朝期の具体資料が少ない現状において貴重である。

今回の鍛冶資料について明らかな点は、精錬時の廃滓は金箸状の工具で引出し（第79図43)、固結していないもう一つの精錬炉の廃滓をのせ、椀形滓が二重となる。そのため操業は２つの炉の時もあったと推定したい。精錬時の鉄は、同じ炉で既に金箸状の工具で引出されていたと考えられるが鋳鉄状に鎔解が進んでおらず硬さのある銑状で精錬より卸し金工程に近いと考えたい。精錬時の原料は、主体は不明ながら鉄鏃・鍋片なども(第79図58～77) 加えていたかもしれない。また厚さ測定を行なったチップス（第109図）は、0.1以下が少なくなり以下抽出検出不能であったが鍛造時に出る金肌は粉々となり検出できなかった可能性が強く、茶褐色チップス類は鍛造当初に近い段階に生じていた可能性が、不整形を含む厚い点からも考えられそうである。

写　真　図　版

Ⅰ・Ｊ９・10・11区全景　　空中写真、右下端方向が北側

Ⅰ・Ｊ９・10・11区、古墳１周辺の状況　　空中写真、右下端方向が北側

Ⅰ・Ｊ９・10・11区、古墳２周辺の状況　　空中写真、右下端が北側

古墳 1 調査状況　　埴輪出土状況　　北西→

同　調査状況　　周堀状況　　北西→

古墳１埴輪出土状況　　北西→

同　埴輪出土状況　　北西→

古墳１と畑跡１の重複　　南東→

古墳１周堀土層断面Ｂ・Ｂ′　　南東→

古墳１主体部材集石　　近・現代の集石　　南西→

古墳 2 調査状況　　北西側の周堀状況　　北西→

同　調査状況　　南東側調査状況　　南東→

古墳 2 北西側周堀近景　　南西→

同　中央部の状況　　北東→

古墳 2 主体部材集石状況上面　　北東→

同　主体部材集石状況　　北東→

古墳 2 主体部材集石除去後の穴跡状況　　北東→

同　主体部材集石状況　　北西→

古墳 2 主体部材集石状況　　北西→

同　主体部材集石除去後の穴跡状況　　北西→

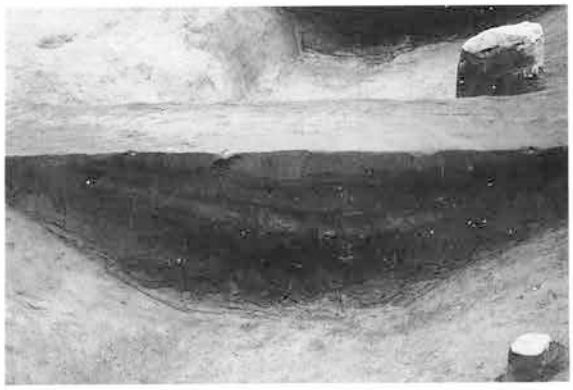
古墳 2 主体部材集石上面状況　　北東→

同　主体部材集石状況　　北西→

同　主体部材集石　　南西→

同　主体部材集石　　南東→

同　北西側周堀A・A′土層断面　　南西→



同　北西側周堀B・B′土層断面　　南西→

同　南東側周堀土層断面　　北東→

同　主体部材集石穴跡とＳＤ44　　南北→

古墳 3 周堀状況　　南西→

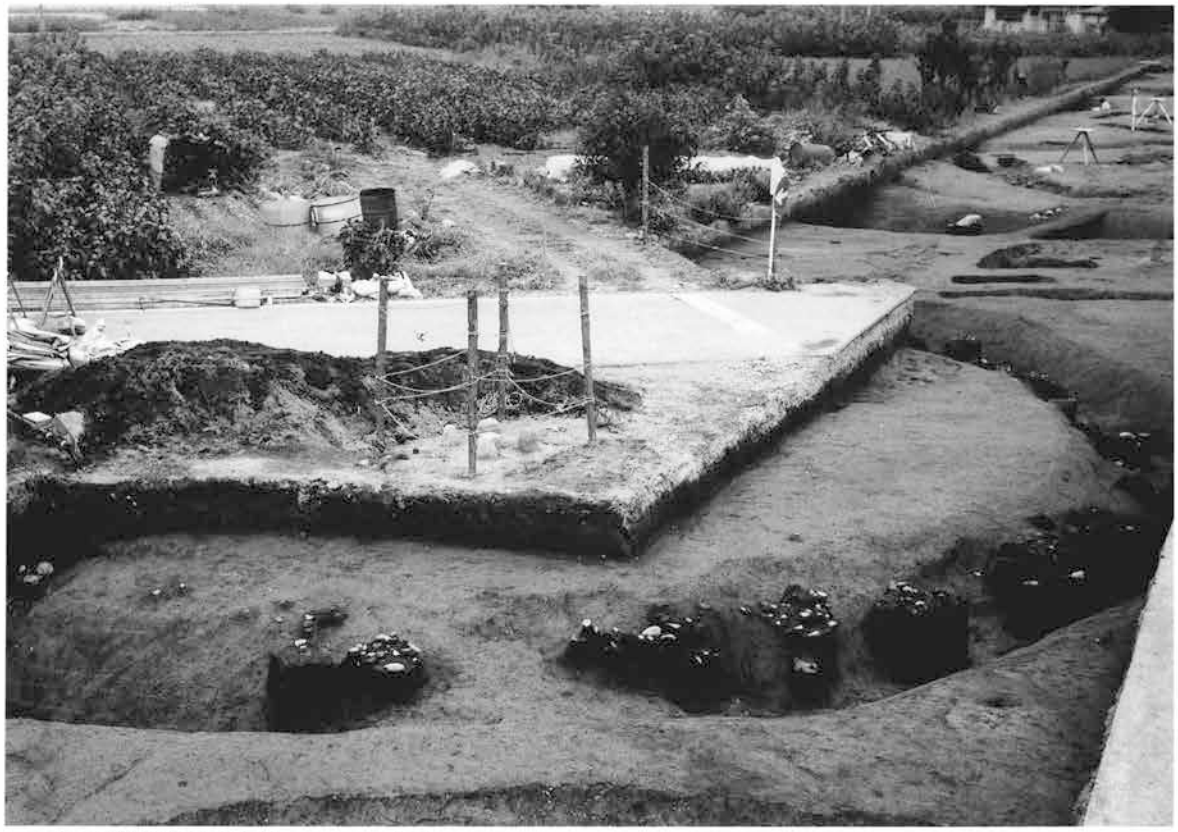
同　周堀状況　　南西→

古墳 4 周堀状況　　北東→

古墳 5 周堀埴輪出土状況　　北西→

古墳５周堀埴輪出土状況　　南→

同　周堀状況　　南→



古墳５周堀埴輪出土状況　　北西→

同　周堀埴輪出土状況　　北西→

古墳５埴輪出土状況近景　　南→

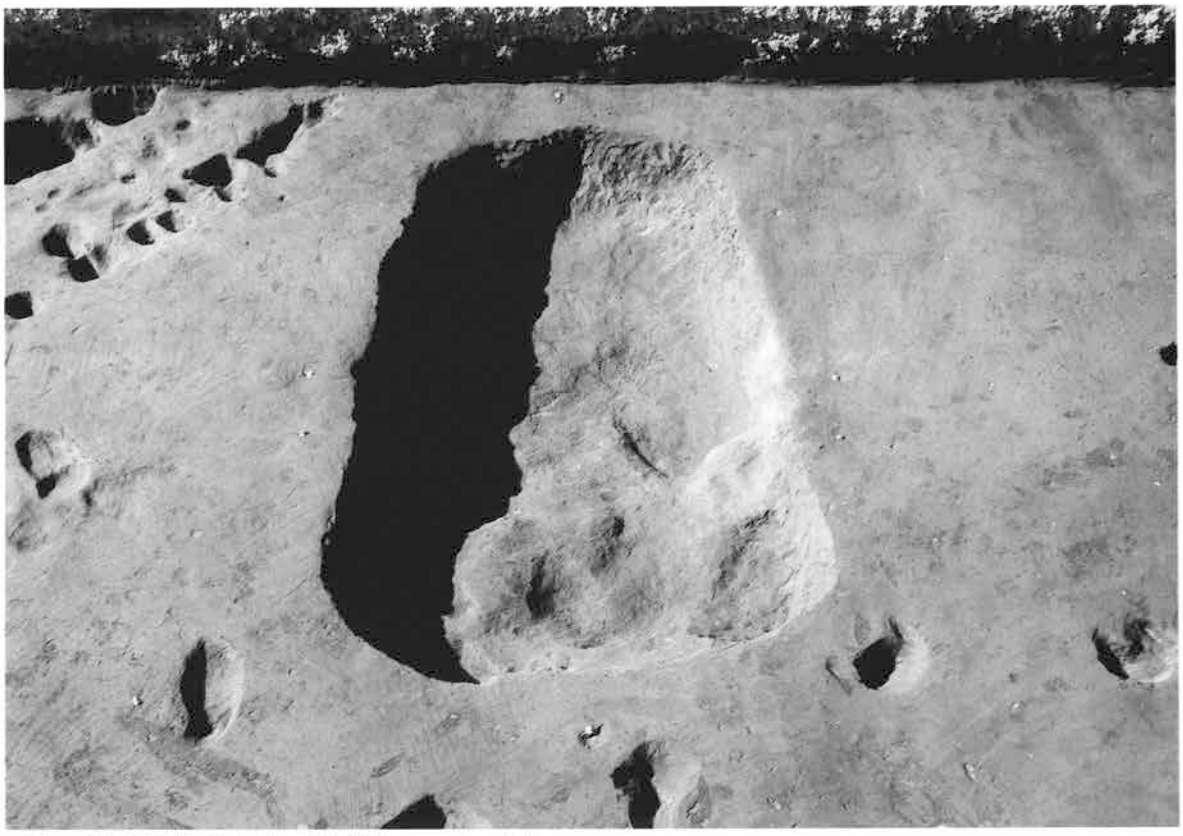
古墳５周堀土層断面　　北→

古墳６主体部材集石上面状況　　南東→

同　主体部材集石中位状況　　南東→

同　下位状況　　南東→

古墳６主体部材下位状況　　南東→

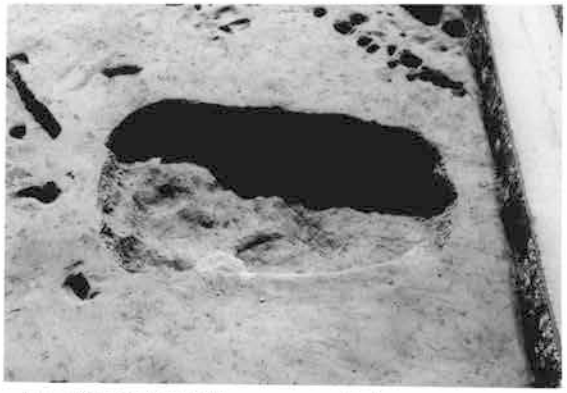


同　主体部材集石除去後の穴跡掘方　　南東→

古墳 6 主体部材集石中位状況　　北東→

同　上位状況　　北東→

同　中位状況　　北西→



同　集石の穴跡掘方　　北西→

古墳 7 調査状況　　北西→

古墳７周堀Ｂ・Ｂ′土層断面　　北西→

同　周堀の形状　　北西→

古墳８調査状況　　南東→

古墳９側から古墳８を見る　　北東→

古墳８周堀Ａ・Ａ′土層断面　　南東→

H７・８区全景　　北西→

H７・８区の調査状況　　北西→

古墳 8 周堀B・B′土層断面　　南東→

古墳 9 調査状況　　南西→

古墳 9 調査区中央部とA・A′土層断面　　手前は現代穴跡　　南西→

古墳 9 周堀B・B′土層断面　　南→

発掘風景　　古墳 1　　北西→

Ｆ５・６区全景　　北西→

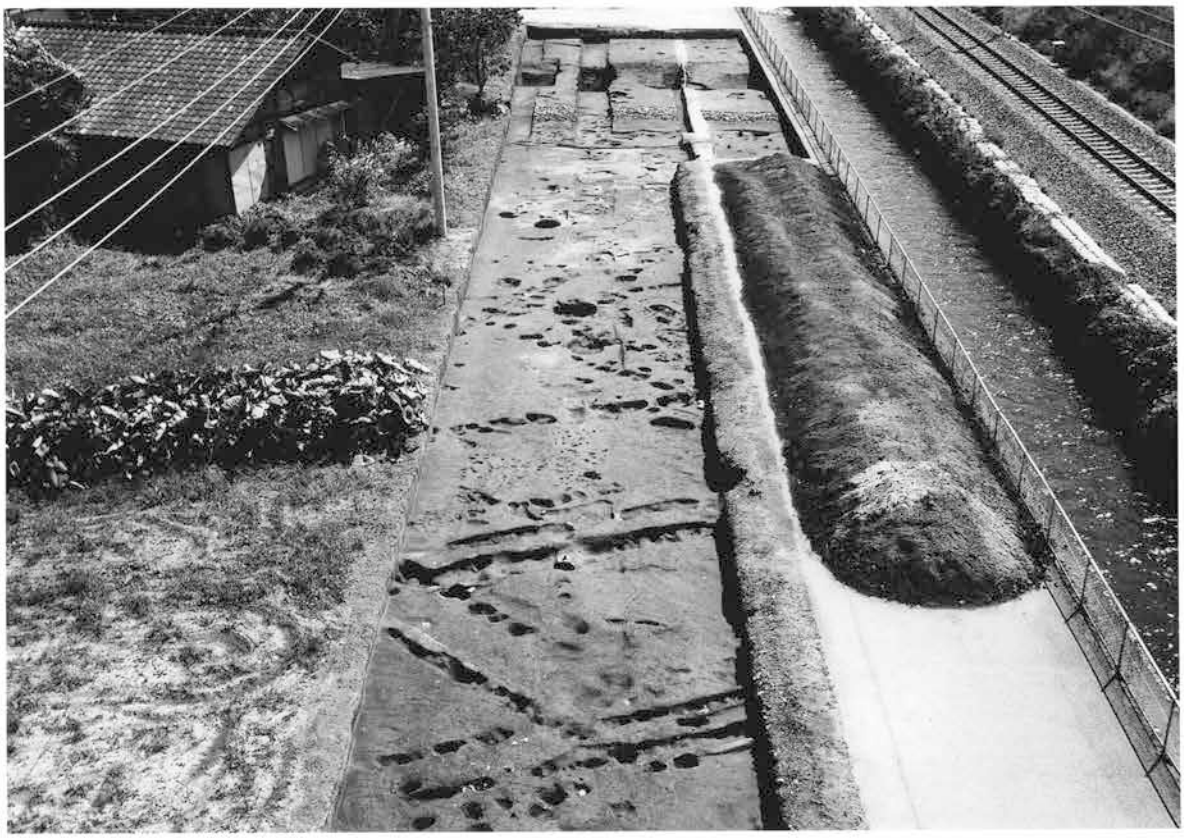
同区　ＳＤ４・５近景　　北→

同区　ＳＤ６　　南西→

同区　ＳＫ４　　北→

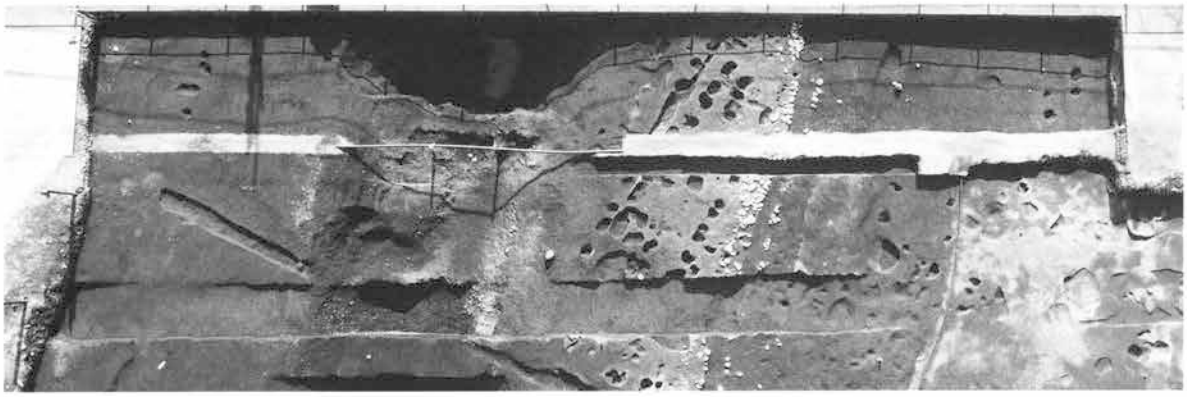
同区　ＳＫ10　　北→

Ｄ４・５区(上)とＤ４区(手前)調査状況　　南東→



Ｄ４・５区(手前)とＤ４区(上)調査状況　　北西→

Ｅ４・５区ＳＤ33付近　　上空より　右下端が北側



Ｅ４・５区ＳＤ33とその周辺　　上空より　右下端が北側

上空よりＥ４・５区、Ｆ５・６区以東を見る　右側が北

ＳＤ33の東方延長　　工事場所にＳＤ33の延長見える（右下）

Ｄ４・５区中景　　北西→

Ｄ４・５区ＳＤ33以北の状況　　北西→

ＳＤ33北接の集石状況　　北西→

ＳＤ33北接の集石近景　　北西→

ＳＤ33北接の集石以北の状況　　北→

ＳＤ33北接の石組状況　　北西→

ＳＤ33以北の状況を南東から望む　　南東→

ＳＤ33と北接の石組を南東から望む　　南東→

ＳＤ33埋没中位の道跡　　北→

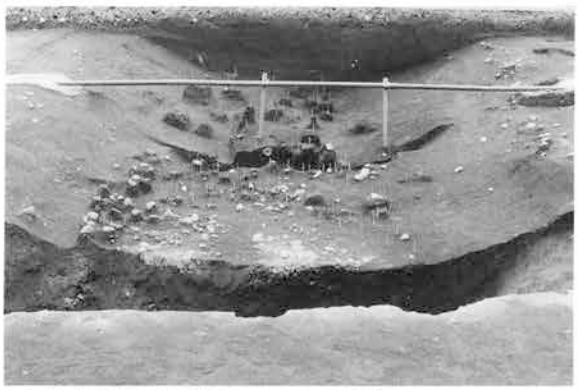
同　道跡の南からの近接　　南→

同　道跡直上の土層断面　　南西→

同　道跡はＳＤ33の埋没肩部に達する　　南→

同左の土層断面との関係　　南→

ＳＤ33の中世面全景　　西→



同左を南西から見る　　南西→

土塁１上面と石組１　　北東→

石組１直上の集石状況　　北東→

石組１直上の集石全景　　北東→

石組１全景　　北東→

石組１を南から望む　　南→

石組１を南西から望む　　南西→

石組１西半の状況　　南西→

石組１上方の集石状況　　北西→

石組１中央の状況　　南西→

石組１上方の集石状況　　北西→

ＳＤ33の最下面の状況　　南西→

土塁１基面の状況　　北東→

ＳＤ33最下面の状況　　北→

ＳＤ33最下面と土塁１基面状況　　北東→

ＳＤ33と道跡の土層関係　　南西→

ＳＤ33とＳＥ１の土層状況　　南西→

ＳＤ33最下面状況　　南西→

ＳＤ33最下面状況　　南西→

ＳＤ33最下面の礫　　南→

ＳＤ33最下面の礫　　南西→

ＳＤ33土層断面　　南西→

ＳＤ33土層断面と道跡　白線が道　　南西→

ＳＤ33土層断面　　南西→

Ｄ４区全景　　北西→

Ｄ４区とＥ４・５区(上)　　南東→

Ｄ４区全景　　南東→

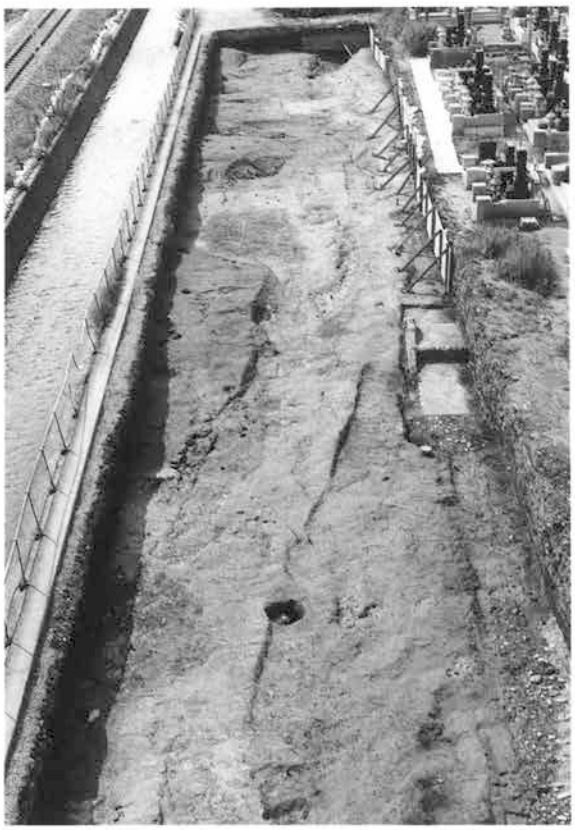
Ｄ４区全景　　南東→

東・中・西区全景　　南東→

東・中・西区全景　　南東→

東・中区全景　　北西→

東・中区全景　　北西→



西区調査状況　　南東→

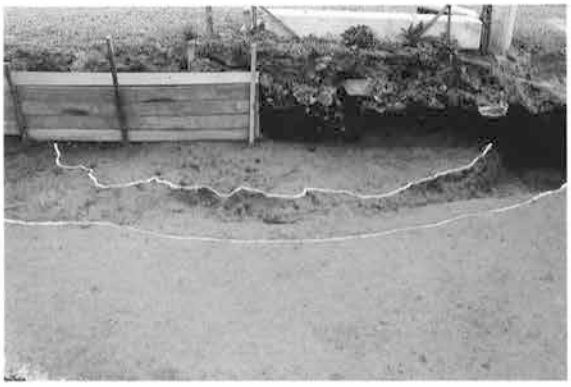
西区北半状況　　北西→

西区北半状況近景　　北西→

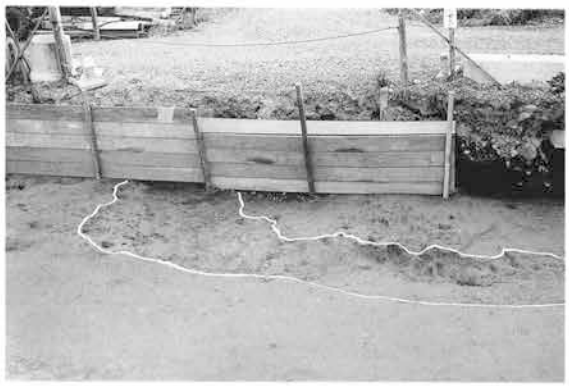
西区北西壁土層断面　　南東→

中区中央土層断面　　南西→

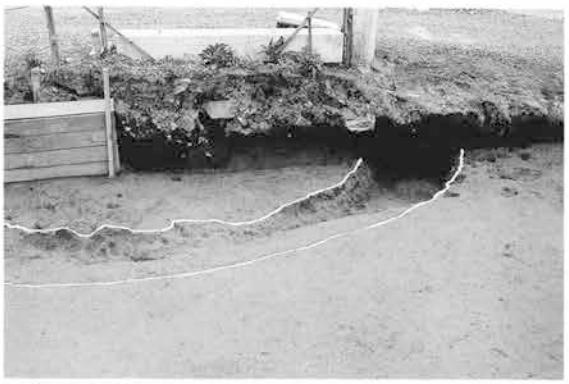
1号古墳(東区)の状況　　南西→



1号古墳(東区)の状況　　南西→



1号古墳(東区)近景　　南西→



1号古墳(東区)近景　　南西→

1号古墳(東区)埴輪出土状況　　南西→

1号古墳(東区)埴輪出土状況　　南→

1号古墳(東区)周堀西半埴輪出土状況　　南西→

同　周堀東側土層断面　　南西→

同　周堀東側土層断面　　南西→

同　周堀東側土層断面近景　　南西→

3号古墳(西区)東側溝状遺構　西→

同　土層断面　南→

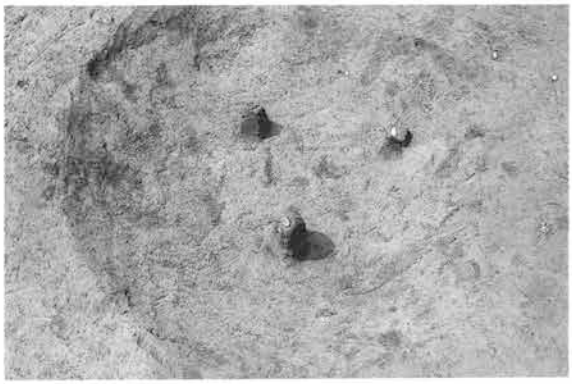
4号古墳(西区)状況　東→

同　周堀　南東→

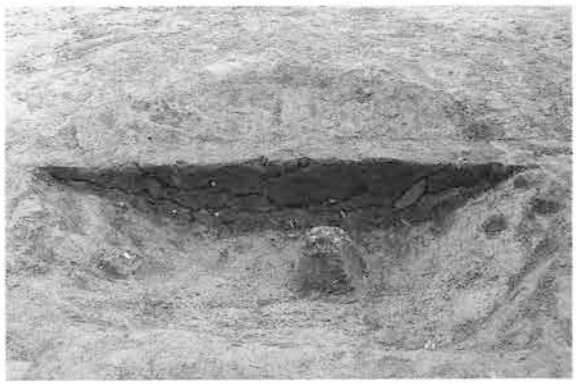
同　周堀南西壁の状況　北東→

1号溝土層断面　南→

1号溝近景　南→

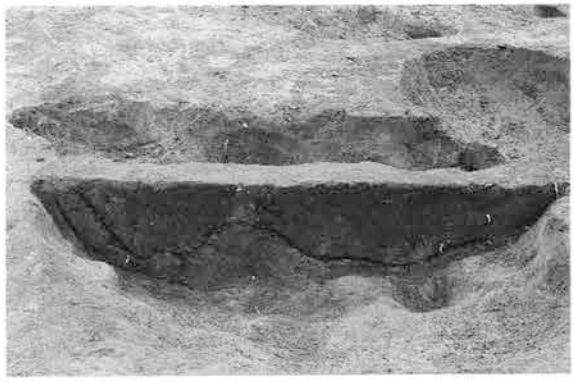


1号土壙(東区)　北→



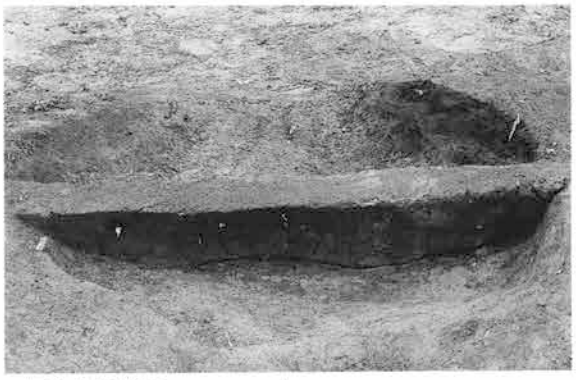
同左土層断面　南→

2号土壙(東区)　北→



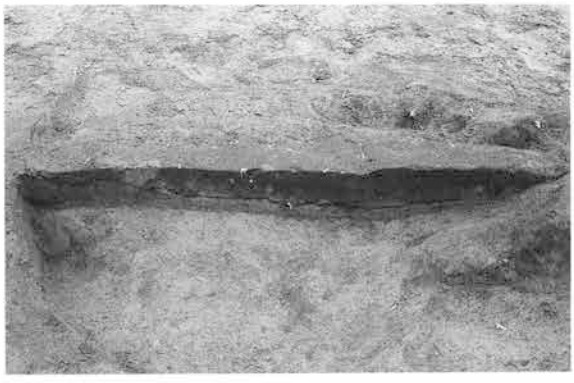
同左土層断面　南→

3号土壙(東区)　南→

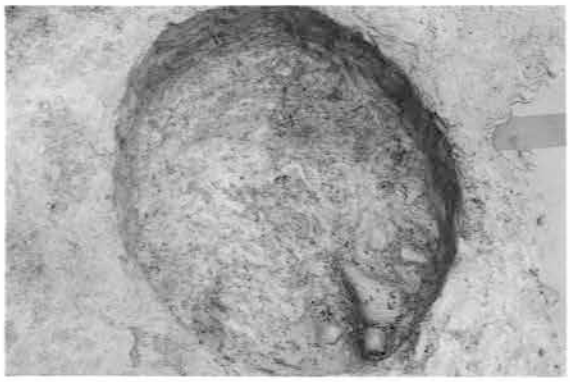


同左土層断面　南→

4号土壙(東区)　北→



同左土層断面　南→



5号土壙　　南→

同左遺物出土状況　　南→

同上土層断面　　南→

同遺物出土状況　　南→

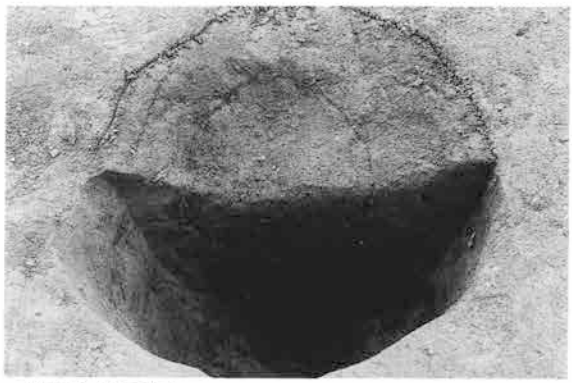
6号土壙(中区)　　北→

7号土壙　　西→

8号土壙(西区)　　南西→

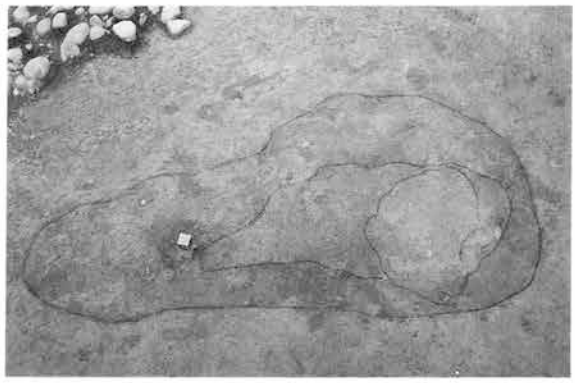
同土層断面　　南西→

9号土壙(西区)　南→



10号土壙(西区)　南→

11号土壙(西区)　南→



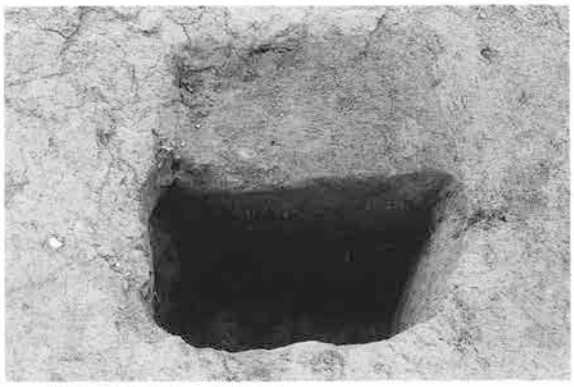
12号土壙(西区)　南→

13号土壙(西区)　北東→

12号土壙(西区)土層断面　南→

13号土壙(西区)上面　南→

14号土壙(西区)　南→



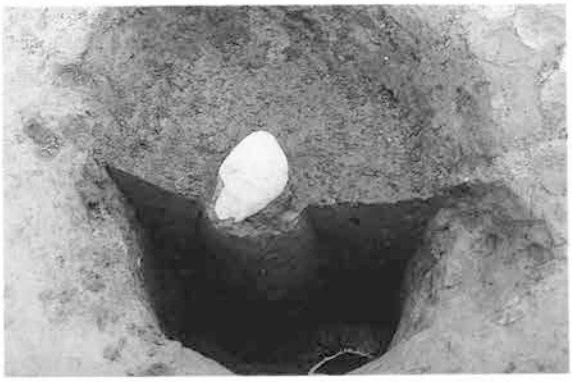
14号土壙(西区)土層断面　南→

15号土壙(西区)　西→

1号井戸跡(東区)　南→

同左土層断面　南→

2号井戸跡(西区)　南→

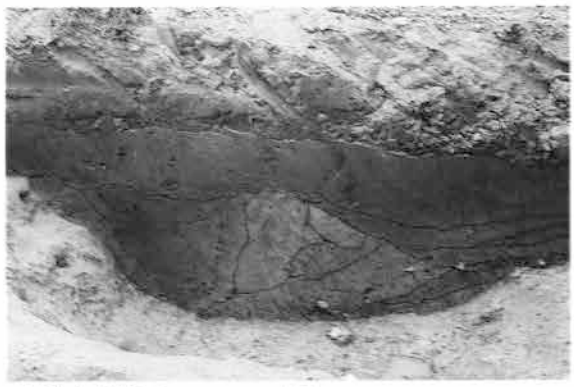


同左土層断面　南→

1号風倒木跡(東区)土層断面　南→

同左土層断面除去後　南→

2号風倒木跡(中区)　南西→



同左土層断面　南西→

3号風倒木跡(中区)　南→

同左　東→

4号風倒木跡(中区)　南東→

5号風倒木跡(西区)　北→

同上土層断面　東→

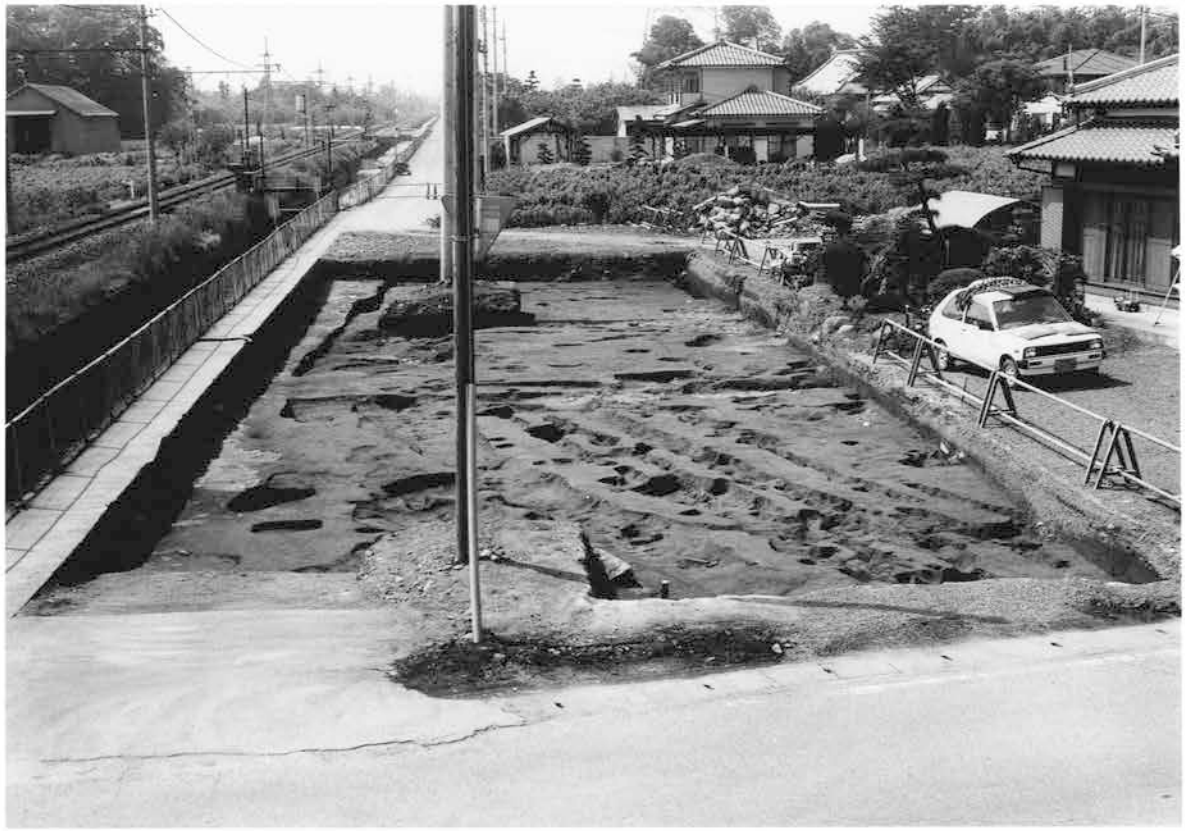
2号古墳(西区)周堀南側　　北東→

2号古墳(西区)周堀北側　　北東→

2号古墳(西区)全景　　北東→

3号古墳(西区)全景　　北東→

3号古墳(西区)集石状況　　南東→



6区南半調査区全景　　南東→

同　　北西→

6区北半調査区全景　　南東→

1号溝　　南→

1号溝　　南→

2号溝　　南西→

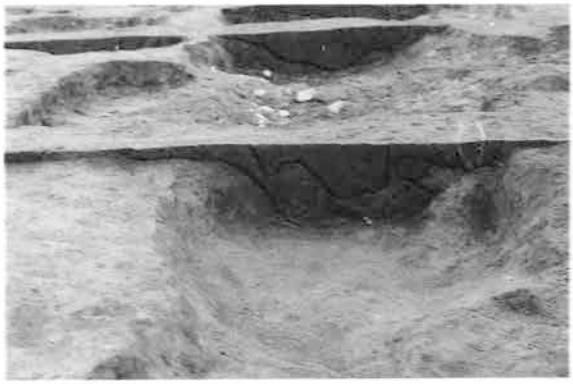
2号溝　　南西→

同　土層断面　　北→

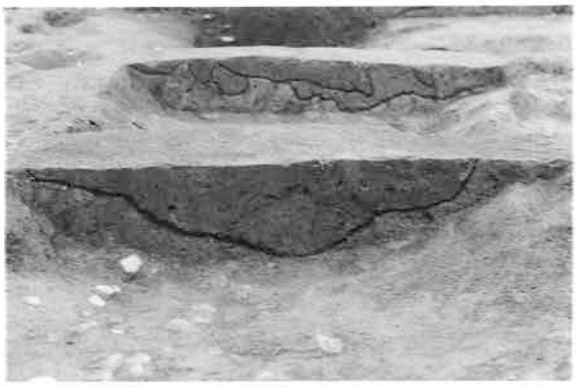
3号溝　　南西→

3号溝　　東→

3号溝　　北→

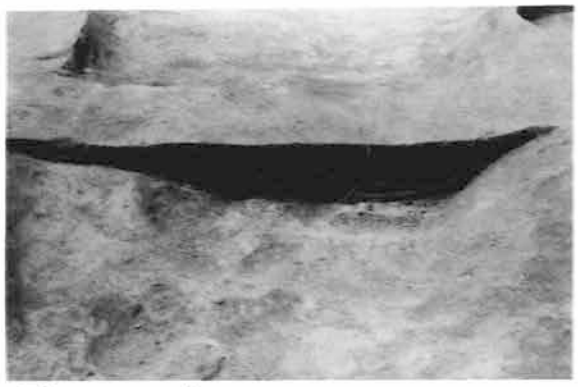


同土層断面　　南西→



同土層断面　　南西→

4号溝　　南西→

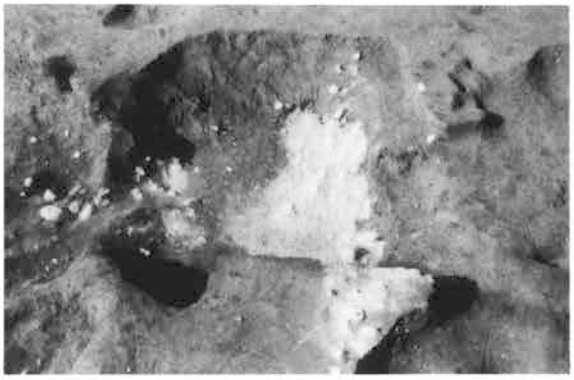


同左　　東→

1号土坑　　北→

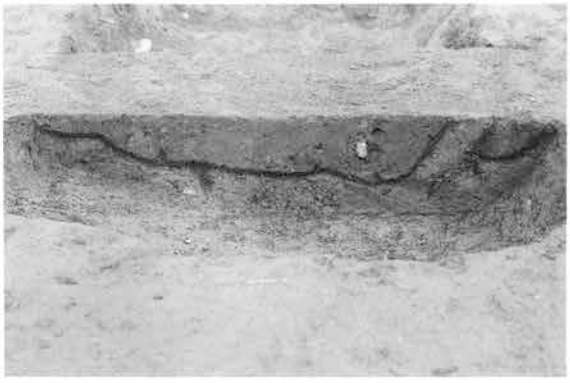
同左土層断面　　南西→

2号土坑　　南→



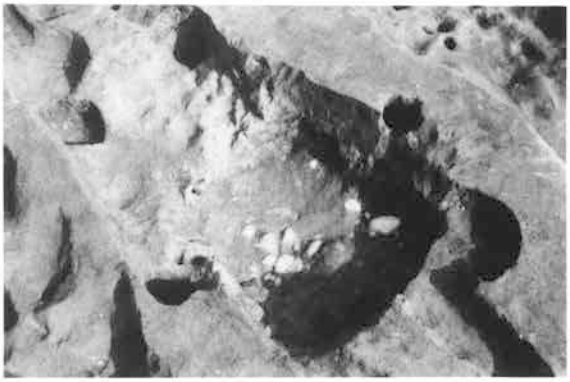
3号土坑　　南→

4号土坑　　南→



4号土坑土層断面　　南→

5号土坑　　南→



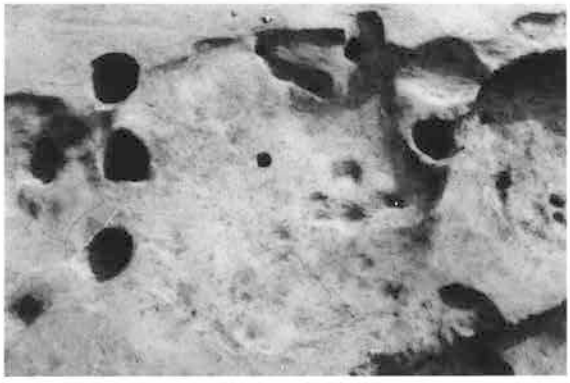
6号土坑　　北→

7・8・9・10土坑　　南→

6号土坑　　西→

7号土坑　　北→

7号土坑　　西→



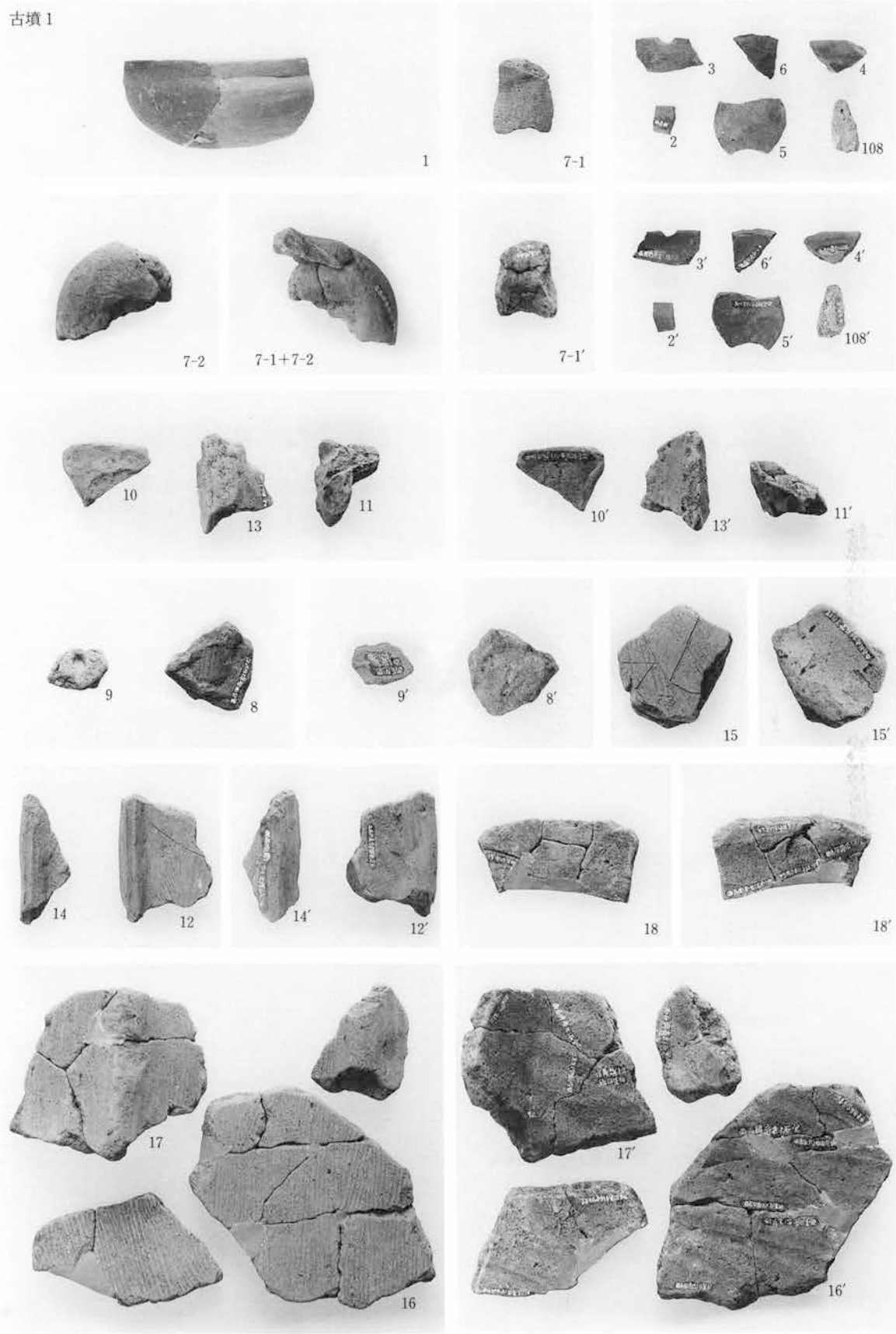
8号土坑　　北→

8号土坑　　西→

10号土坑　　南→

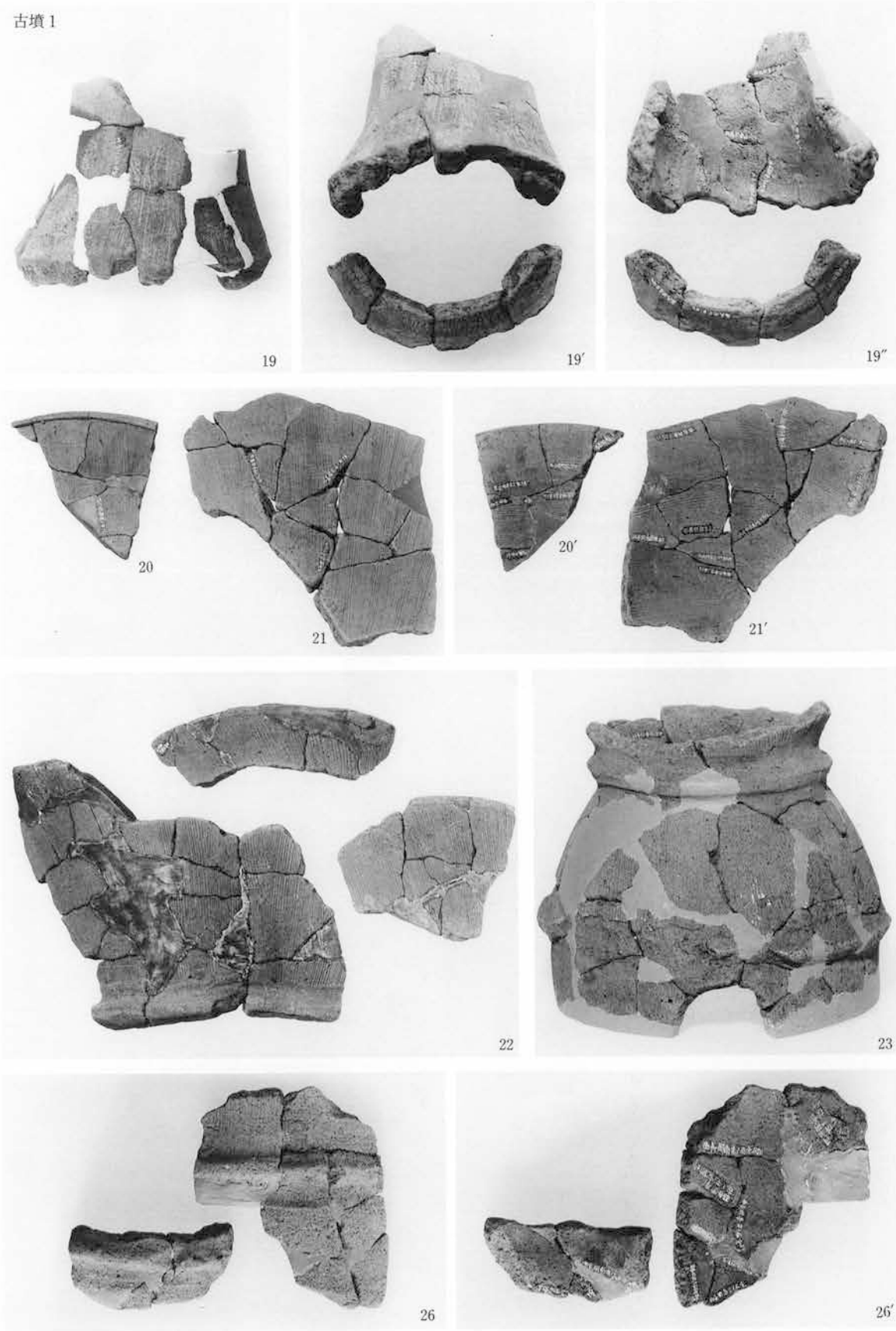
11号土坑　　東→

古墳1



古墳1遺物　　およそ埴輪1：4、ほか1：3

古墳1



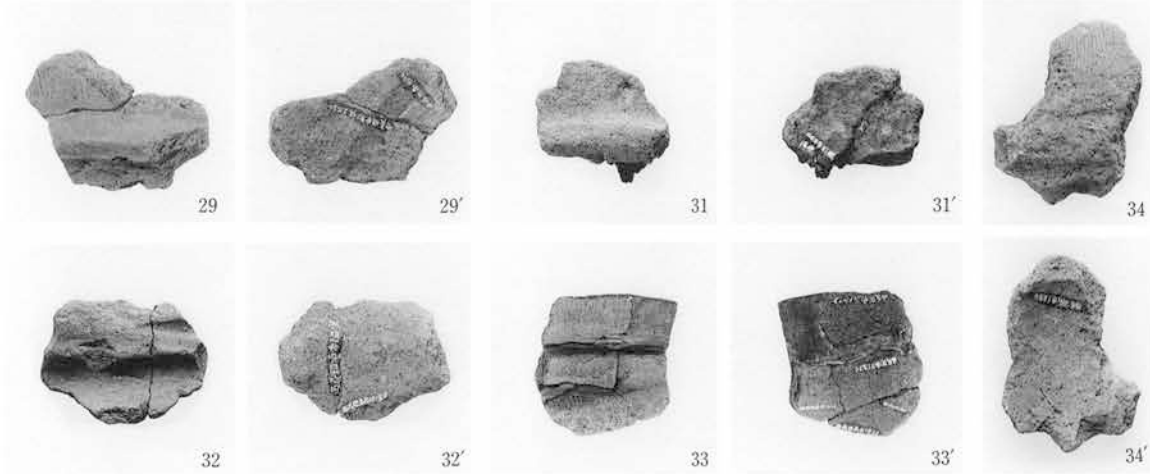
古墳1遺物　　およそ1：4

古墳１

24

27

25



古墳１遺物　　およそ１：４

古墳1

35

37

39

36

40

古墳1遺物　　およそ1：4

古墳1

38

42

43

43′

41

44

古墳1遺物　　およそ1：4

古墳1

45

46

48

47

47′

48′

50

50′

49

51

古墳1遺物　　およそ1：4

古墳1

52

53

55

54

古墳1遺物　　およそ1：4

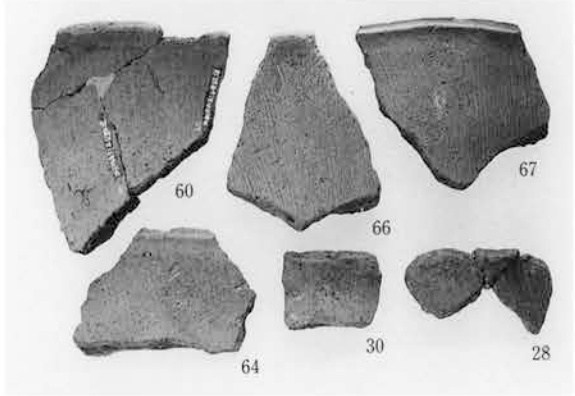
古墳１　56

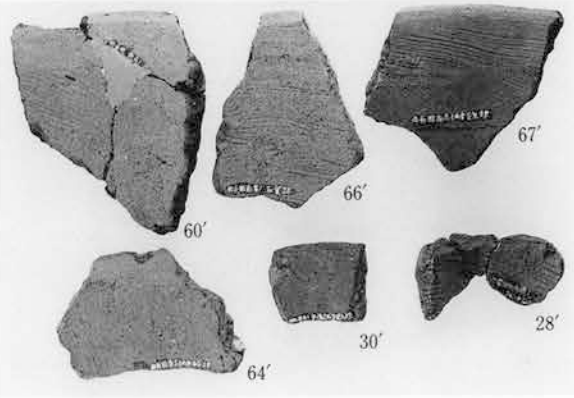
58

57

59

57





古墳１遺物　　およそ１：４

古墳1

61

61′

63

63′

68

62

62′

65

65′

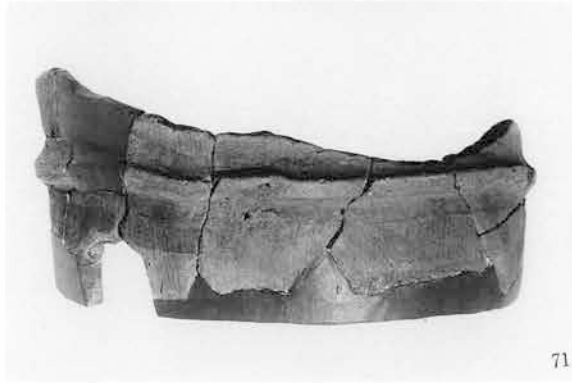
68′

69

70

70′

74


71

古墳1遺物　　およそ1：4

古墳1

72

76

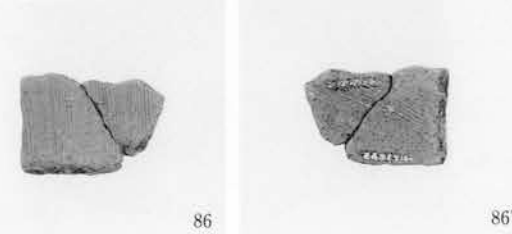
73

73′

75

79

82


86

86′

古墳1遺物　　およそ1：4

古墳1

77

77′

78

80

80′

81

83

85

85′

87

87′

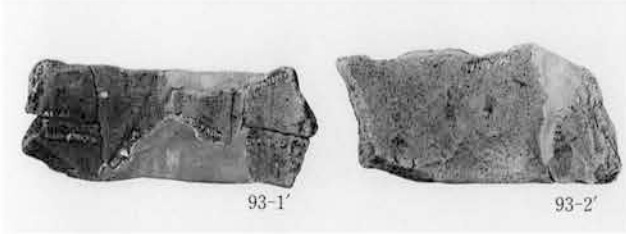
84

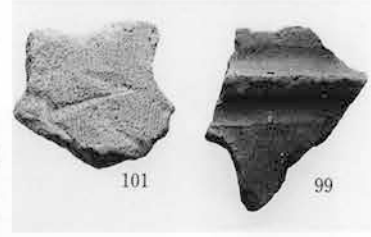
88

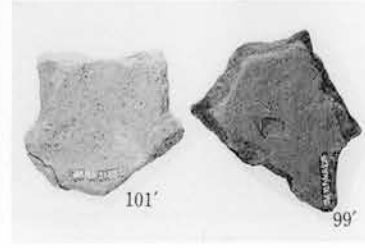
88′

古墳1遺物　　およそ1：4

古墳１







古墳１遺物　　およそ１：４

古墳1

94

95

95′

97

97′

98

98′

104

104′

103

103′

102

102′

100

105

105′

106

106′

107

107′

109

110

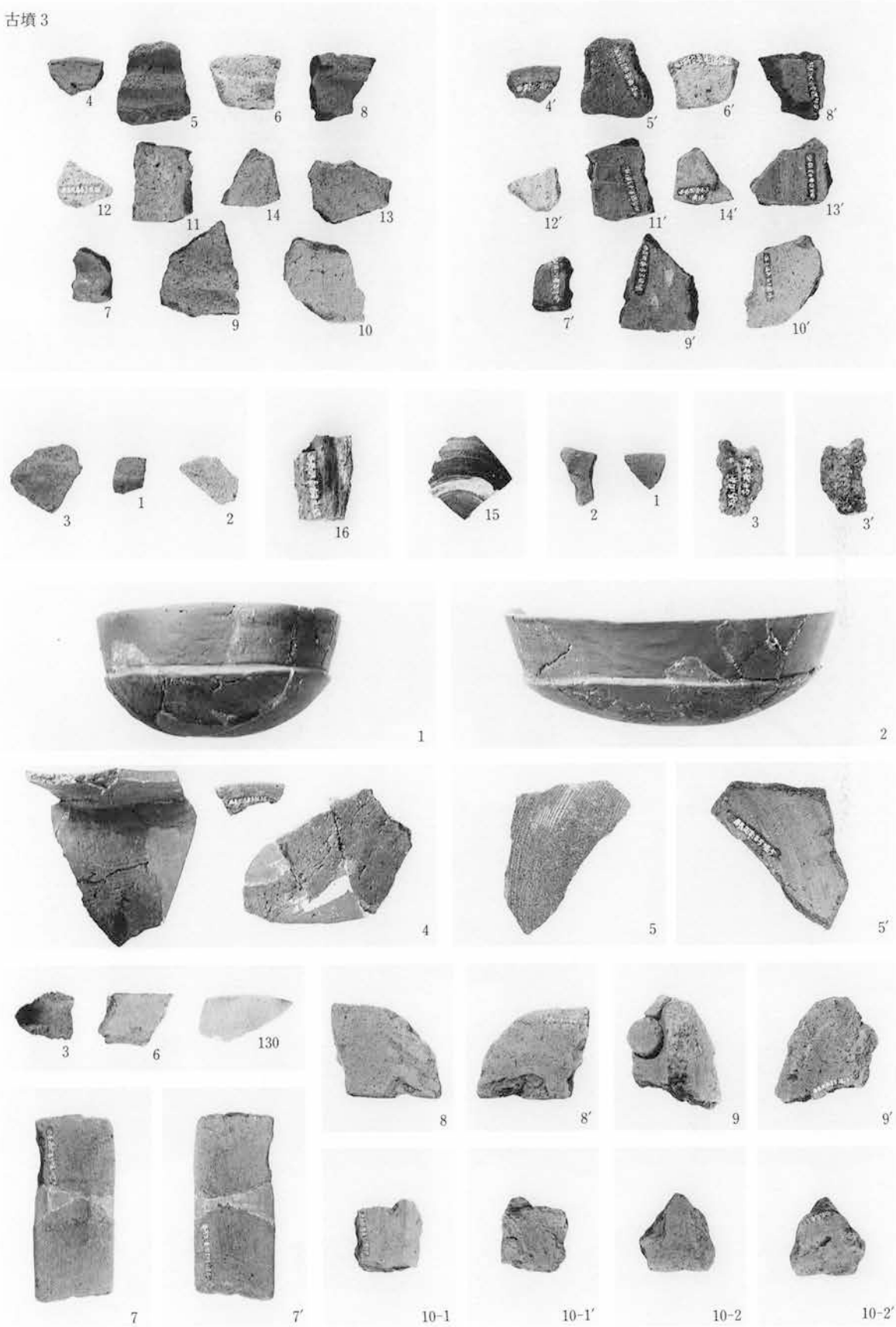
110′

古墳1遺物　　およそ1：4

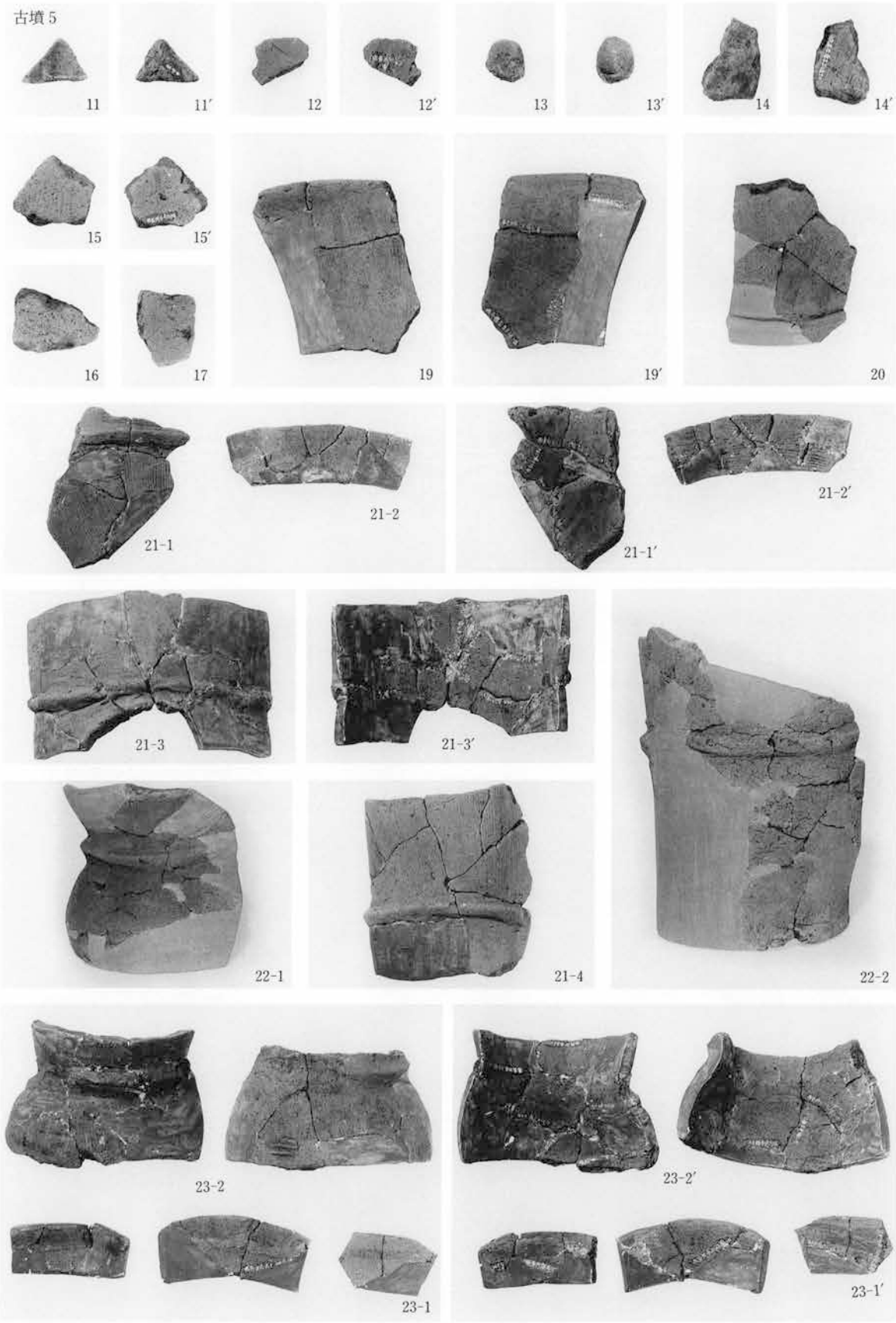
古墳2

古墳2遺物　　およそ1：4、ほか1：3

古墳3



古墳3・4・5遺物　　およそ埴輪1：4、ほか1：3



古墳5遺物　　およそ1：4・ほか1：3

古墳5

24-1

24-1′

24-2

27

28

26

29

30

31-1

35

32

古墳5遺物　　およそ1：4

古墳5

33

36

39

37

39′

34

38

40

41

43

46

50

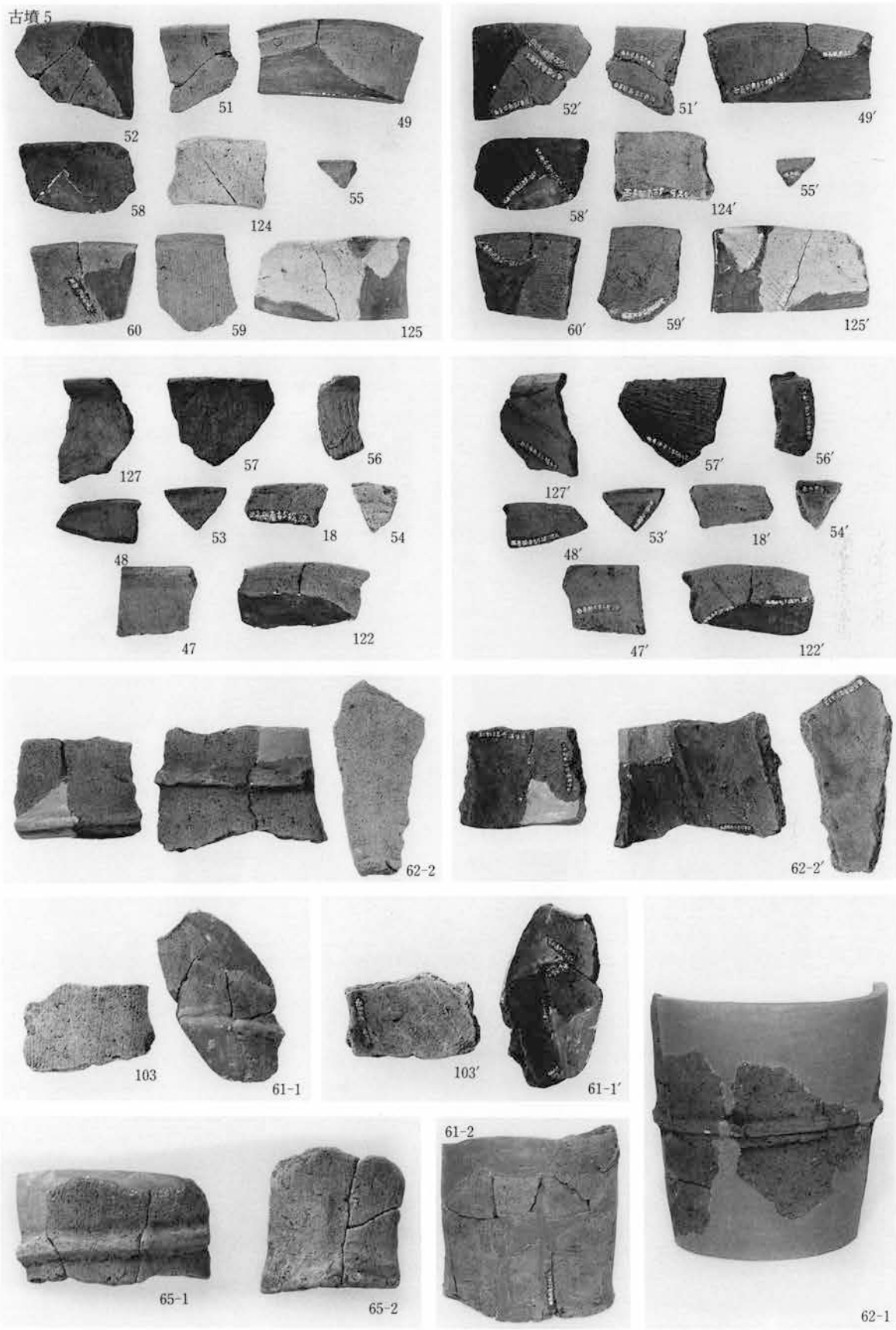
50′

44

45

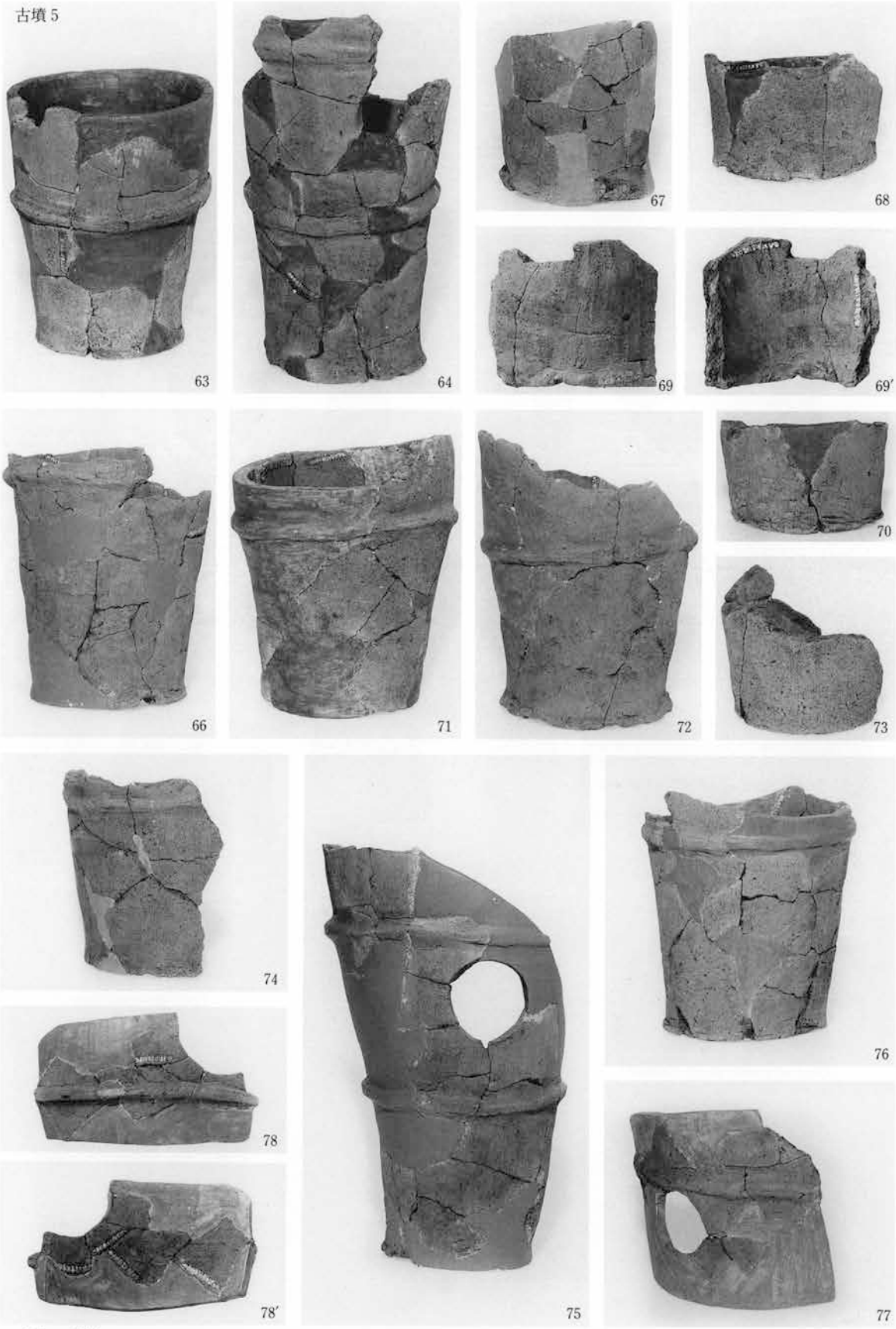
42

古墳5遺物　　およそ1：4


古墳5
52
51
49
58
124
55
60
59
125
52′
51′
49′
58′
124′
55′
60′
59′
125′
127
57
56
48
53
18
54
47
122
127′
57′
56′
48′
53′
18′
54′
47′
122′
62-2
62-2′
103
61-1
103′
61-1′
65-1
65-2
61-2
62-1

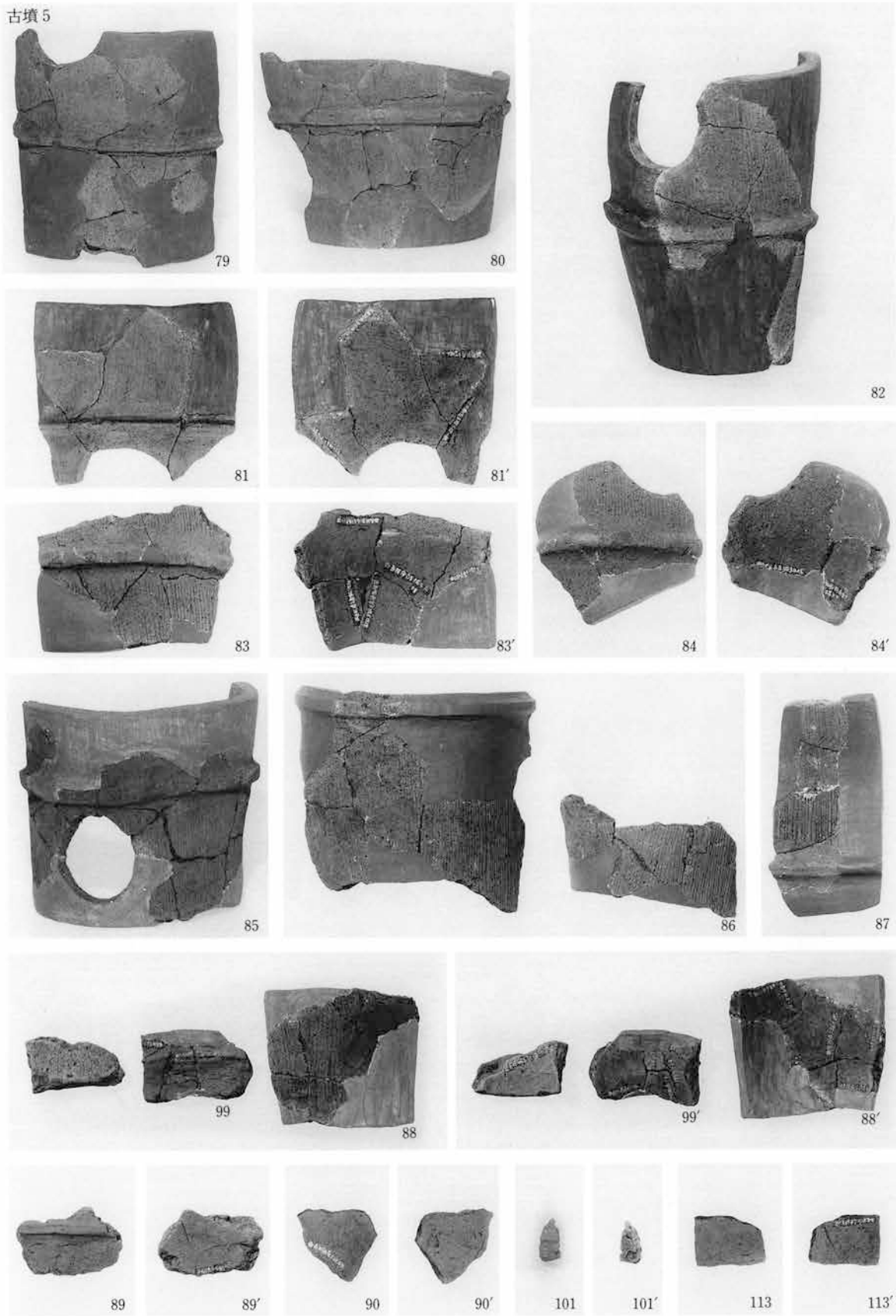
古墳5遺物　　およそ1：4

古墳5

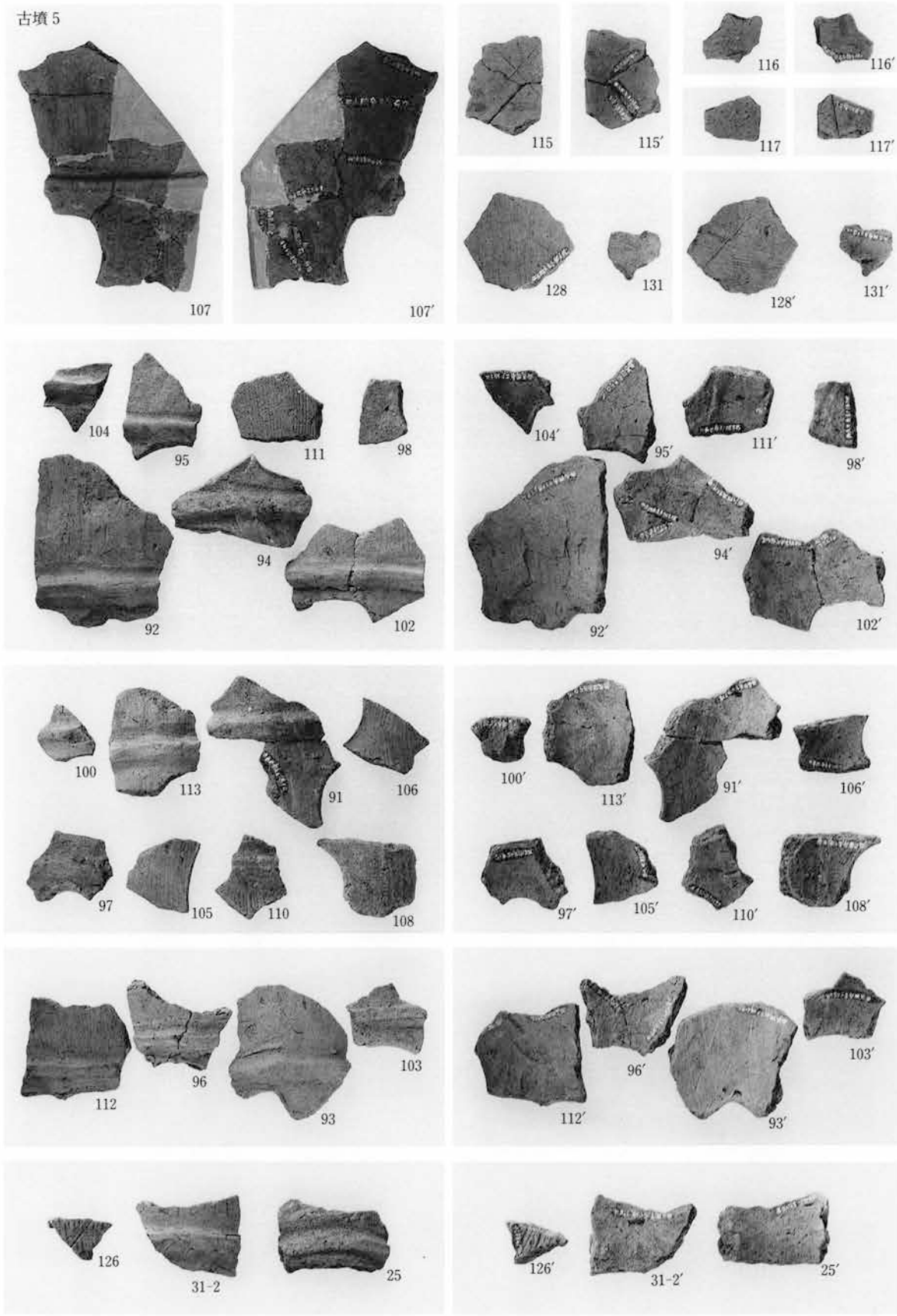


古墳5遺物　　およそ1：4

古墳5

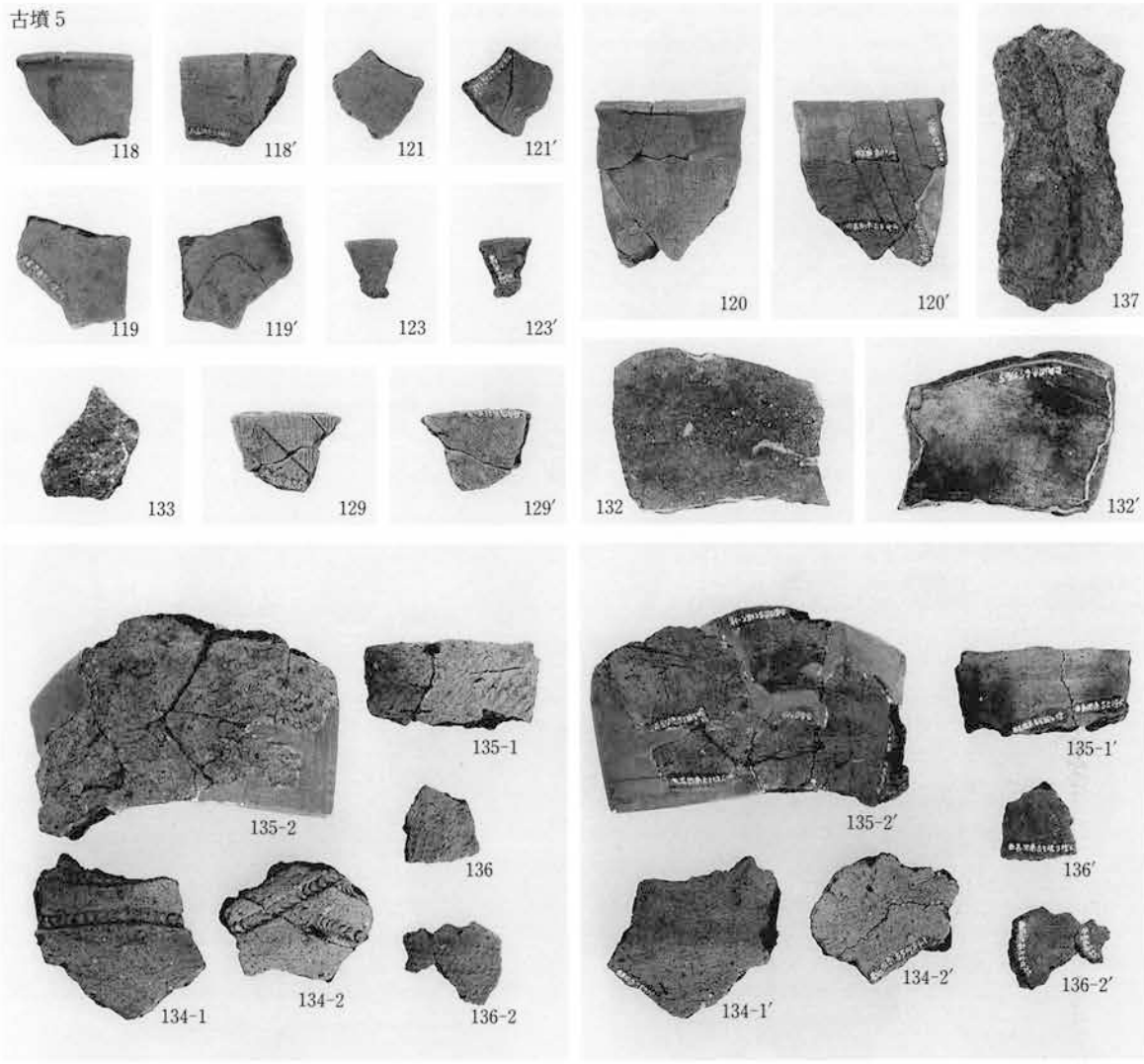


古墳5遺物　　およそ1：4

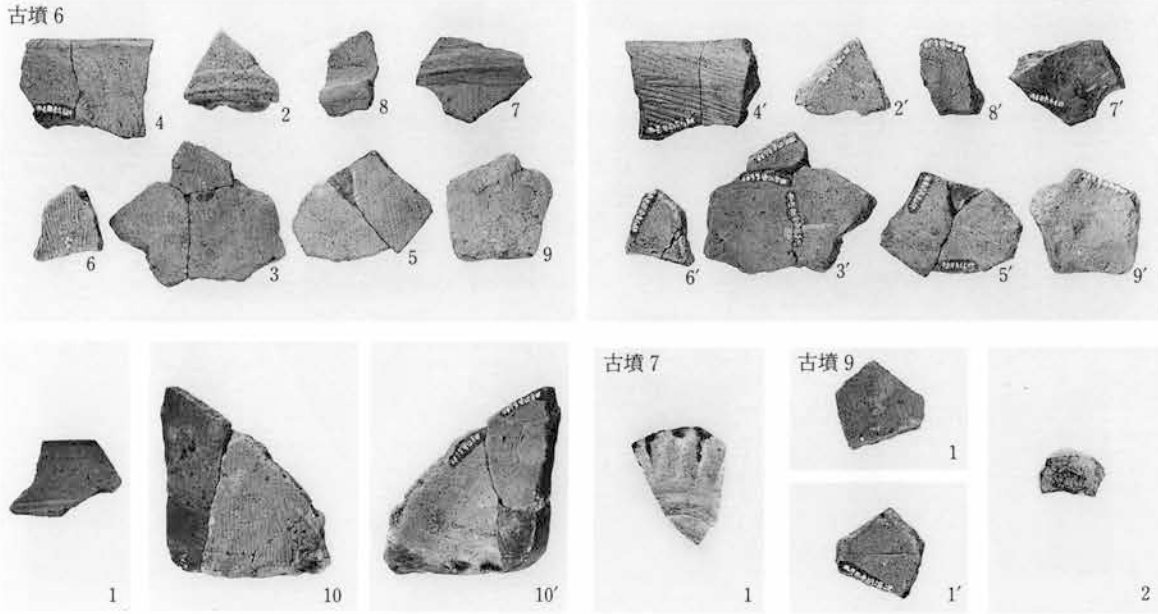

古墳5
107
107′
115
115′
116
116′
117
117′
128
131
128′
131′
104
95
111
98
92
94
102
104′
95′
111′
98′
94′
92′
102′
100
113
91
106
97
105
110
108
100′
113′
91′
106′
97′
105′
110′
108′
112
96
103
93
96′
103′
112′
93′
126
31-2
25
126′
31-2′
25′

古墳5遺物　　およそ1：4

古墳5

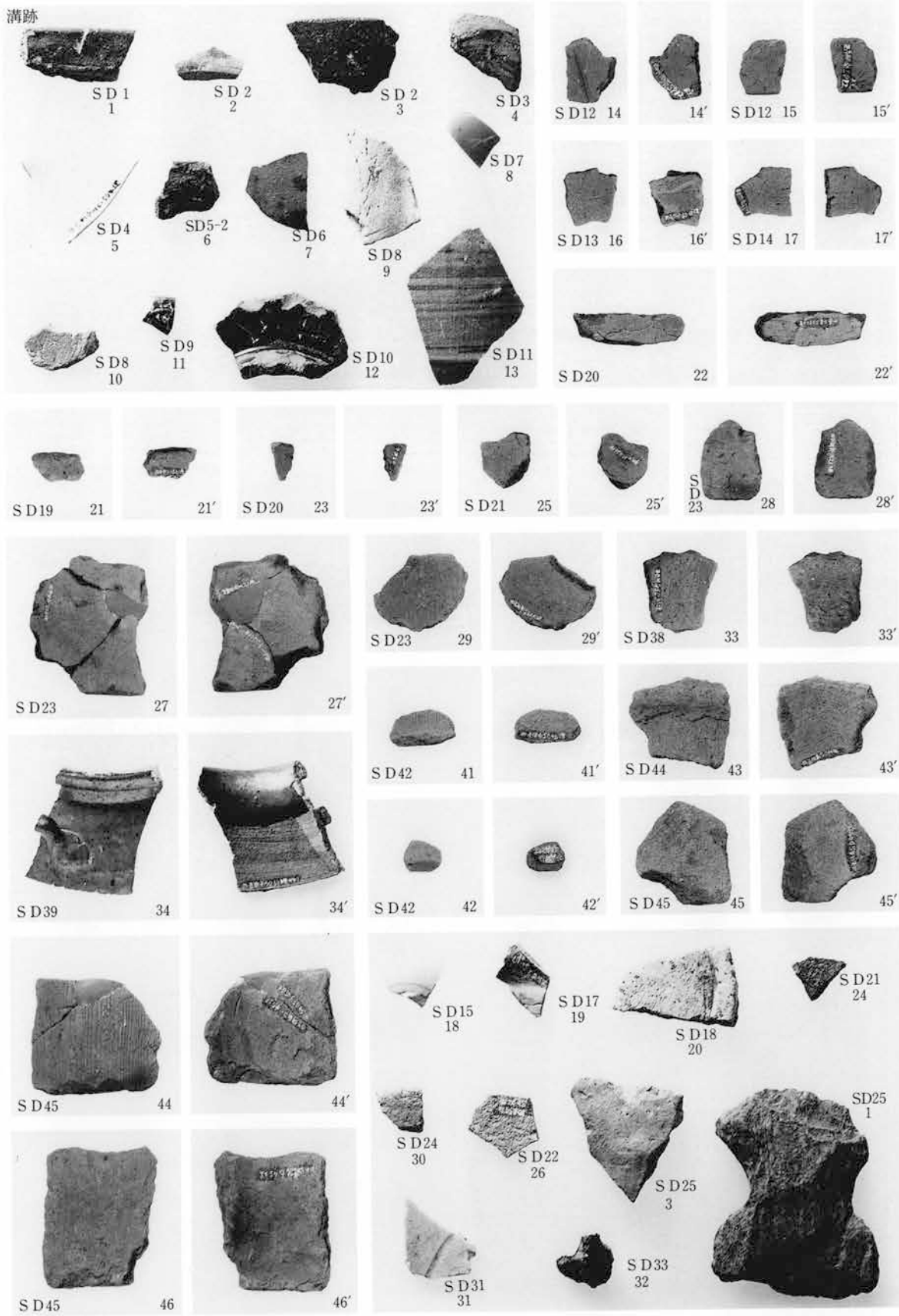


古墳6

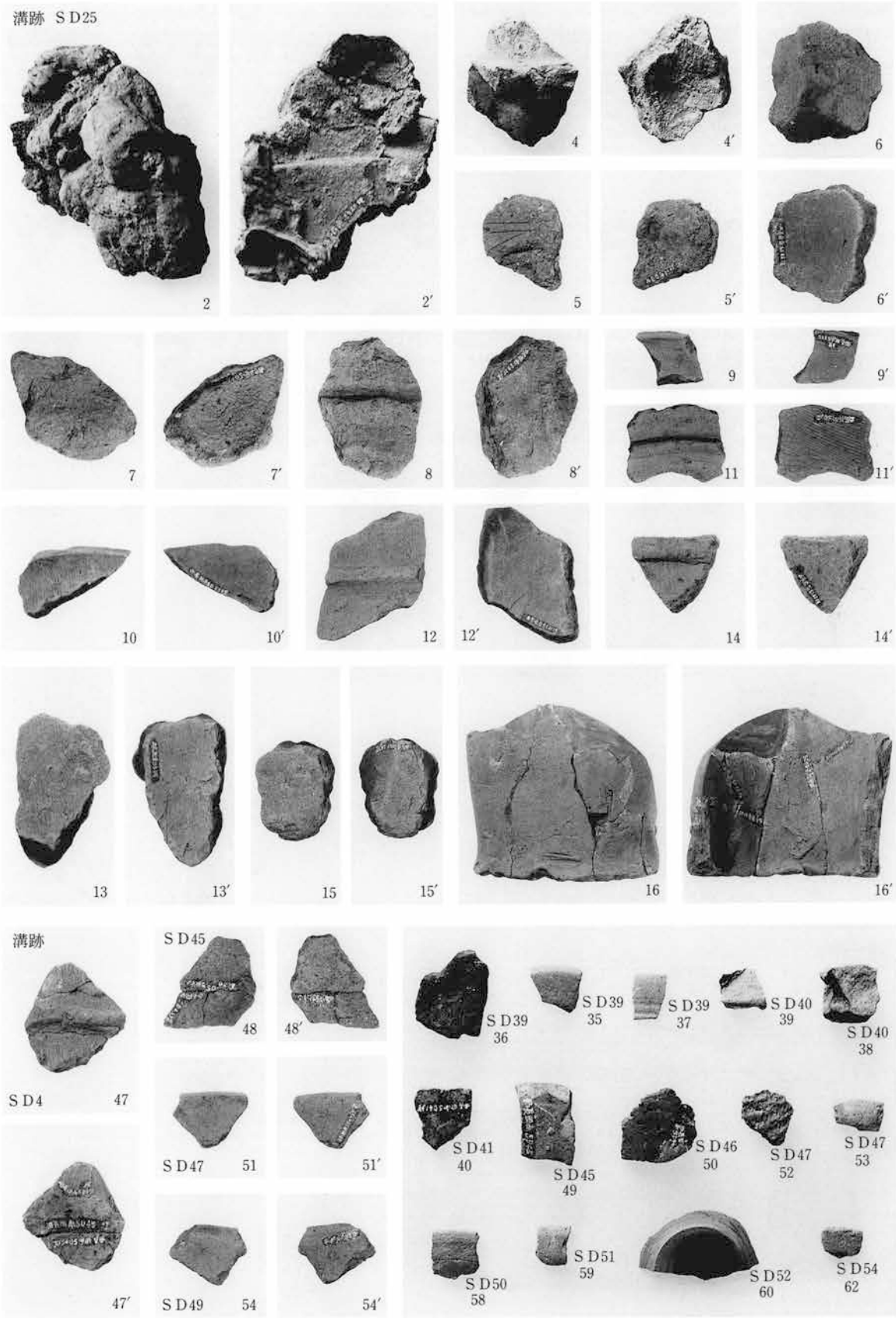


古墳5・6・7・9遺物　　およそ埴輪1：4、ほか1：3

溝跡



溝跡遺物　　およそ埴輪1：4、ほか1：3



溝跡遺物　　およそ埴輪1：4、ほか1：3

溝跡

55　55′　56　56′　57　57′

61　61′　77

73　73′　77′

78　78′　79　79′

SD55 65　SD55 64　SD55 63　SD56 66　SD58 67　SD58 69

SD58 70　SD59 68　SD61 74　SD61 75　SD62 71

SD62 72　SD63 76　SD66 80　SD67 81　SD67 82

穴跡

SK1 1　SK1 2　SK8 3　SK10 6　SK10 7

SK11 8　SK12 9　SK13 10　SK14 11　SK15 12

SK9 4　同10 5　SK26 15

SK16 13　13′

SK24 14　14′

補足遺物

2　10　7　3

8　11

8′　11′

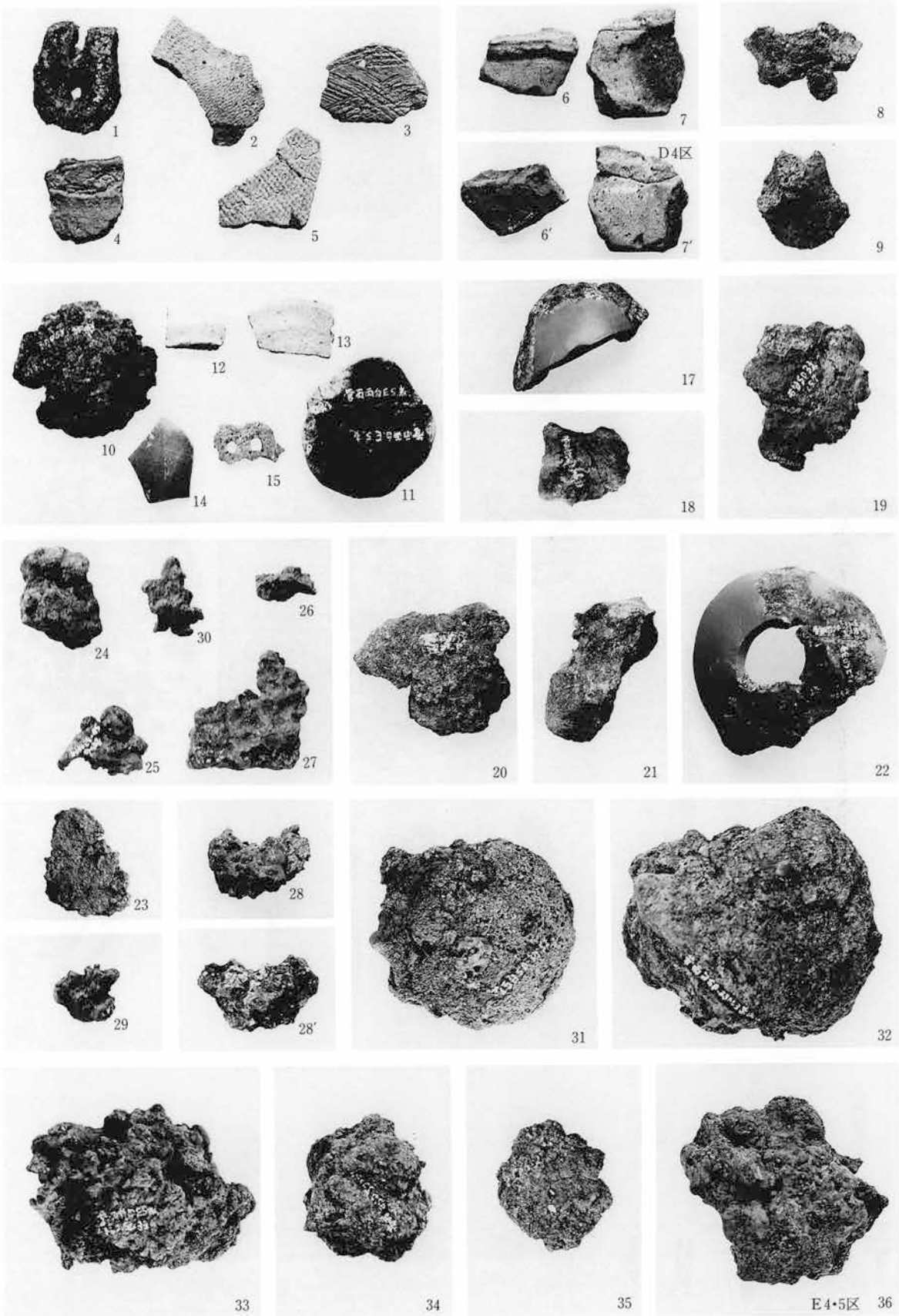
12

6　4

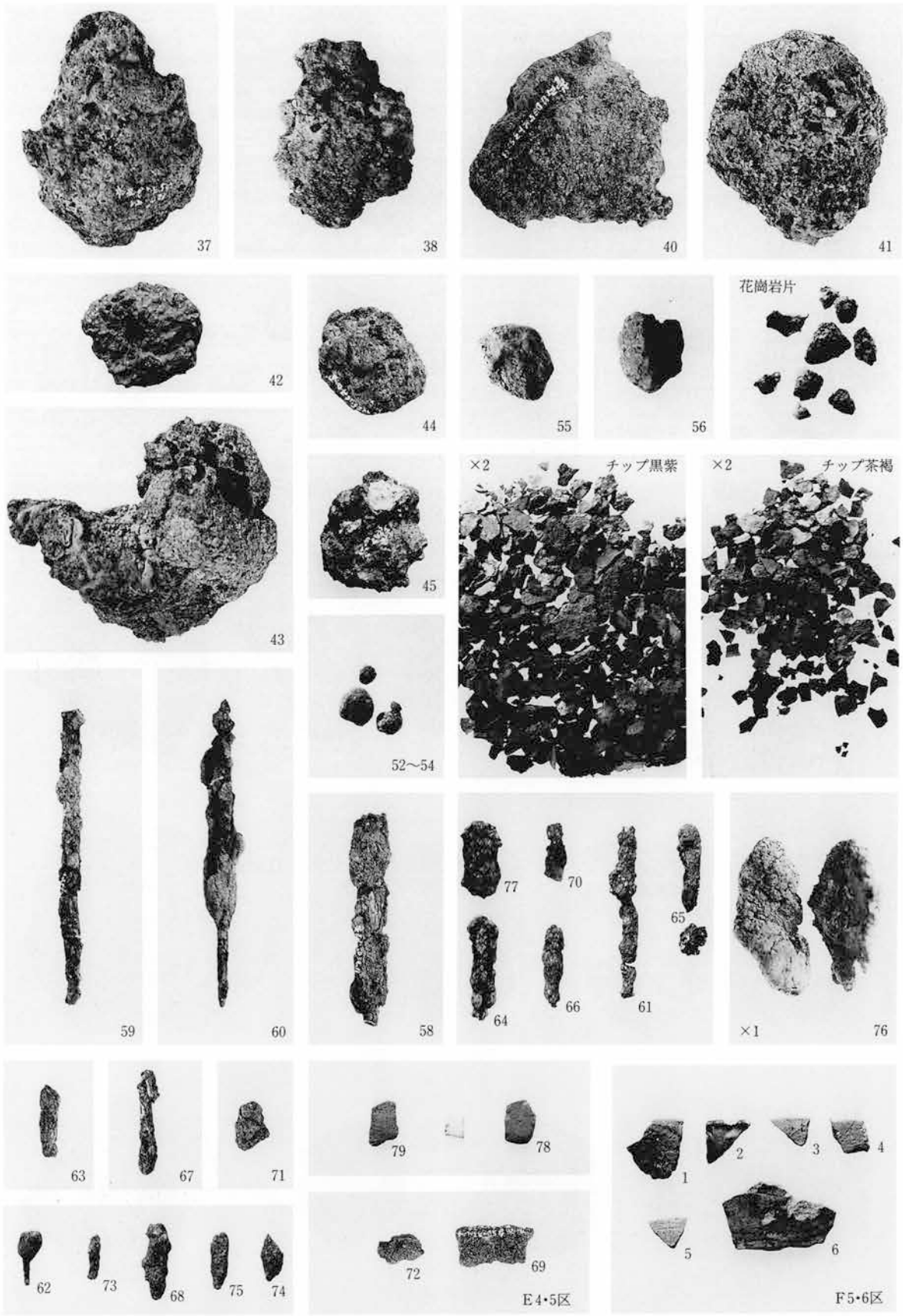
9　1　5

13　13′　12′

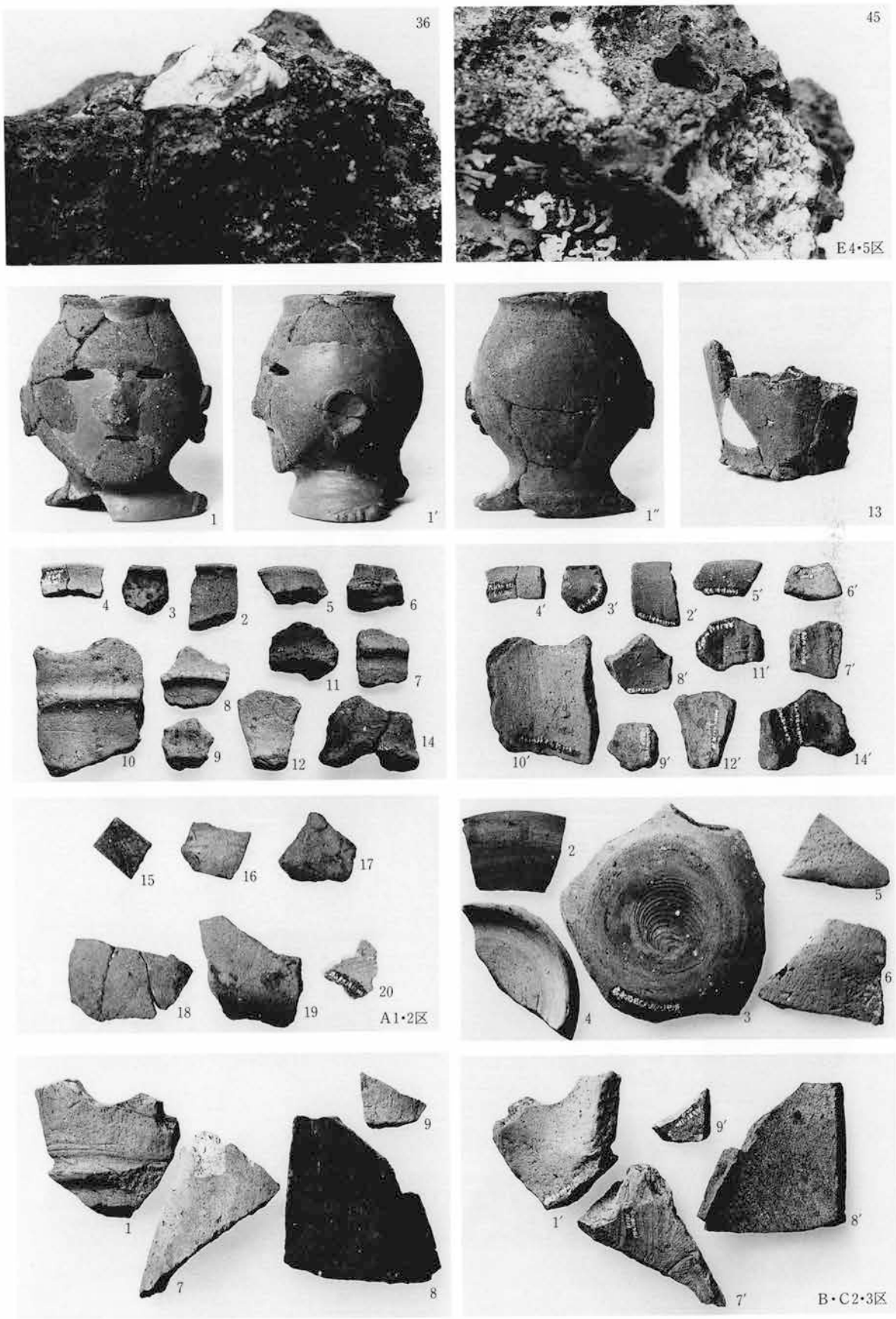
溝跡・穴跡・補足遺物　　およそ埴輪1：4、ほか1：3



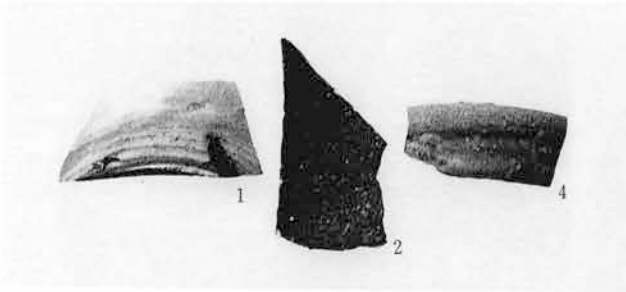
D４区、E４・５区遺物　　およそ1：3

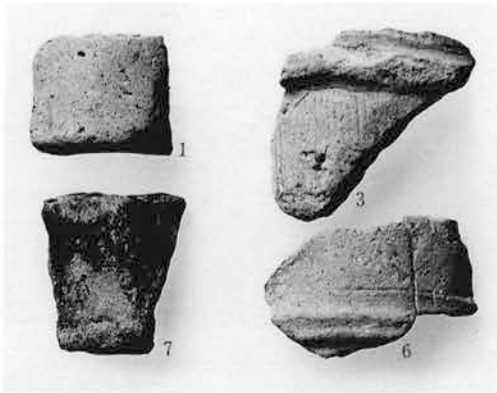


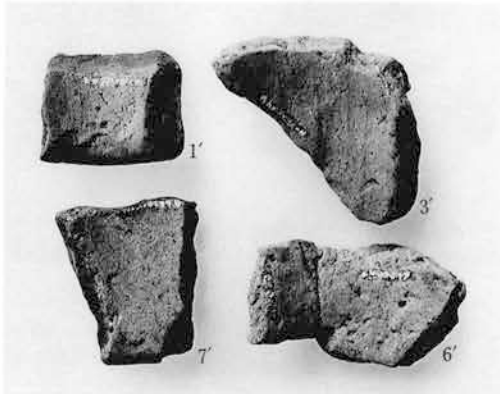
E４・５区、F５・６区遺物　　およそ1：1、1：3

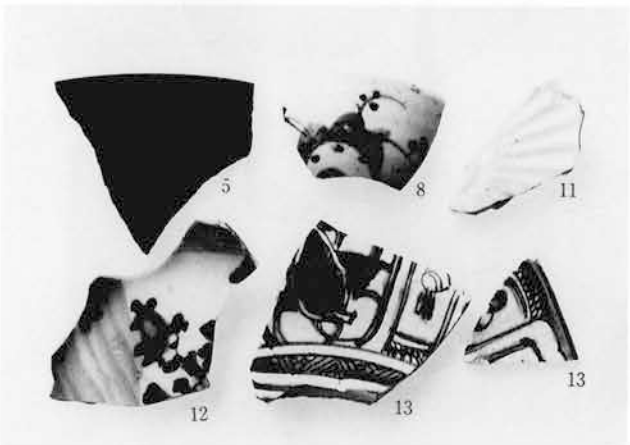


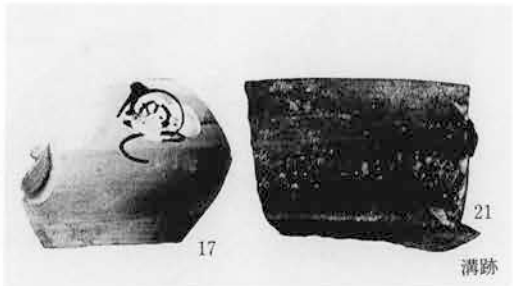
菅塩西両台遺跡４・５区、成塚永昌寺遺跡Ａ１・２区、Ｂ２・３区遺物　　およそ1：2、1：3、1：5











井戸跡・穴跡・溝跡　　およそ1：3、1：4

18′

18

22

22′

23

23′

27

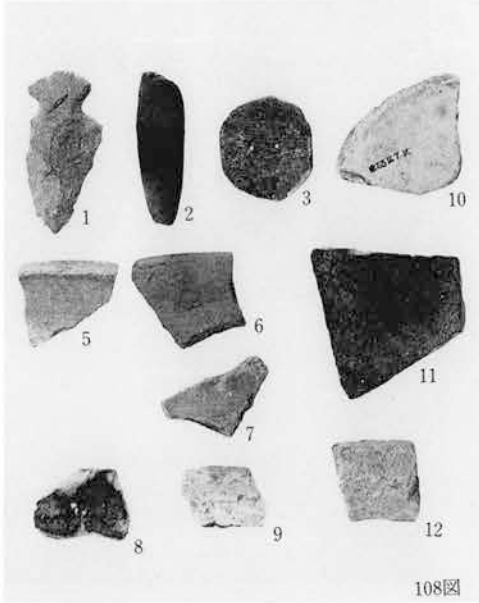
27′

25

28

28′

溝跡遺物　　およそ1：3、1：4



成塚永昌寺溝跡・補足遺物、成塚石橋III表土・溝・土坑　およそ1：1、1：3

西長岡南遺跡
菅塩西両台遺跡
成塚永昌寺遺跡
成塚石橋遺跡Ⅲ

一級河川蛇川小規模河川改修工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書第3集

平成8年3月18日　印刷
平成8年3月25日　発行

編集／(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
勢多郡北橘村大字下箱田784番地の2
電話（0279）52－2511(代表)

発行／群馬県考古資料普及会
勢多郡北橘村大字下箱田784番地の2
電話（0279）52－2511(代表)

印刷／上毎印刷工業株式会社